

# 京都府遺跡調査概報

## 第110冊

1. 今井古墳
2. 府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡
  - (1)池上遺跡第15・16次
  - (2)野条遺跡第9次
3. 野条遺跡第7次
4. 芝山遺跡
5. 薪遺跡第4次
6. 棕ノ木遺跡第6次

2004



(1)今井古墳全景(南東から)



(2)今井古墳特殊扁壺



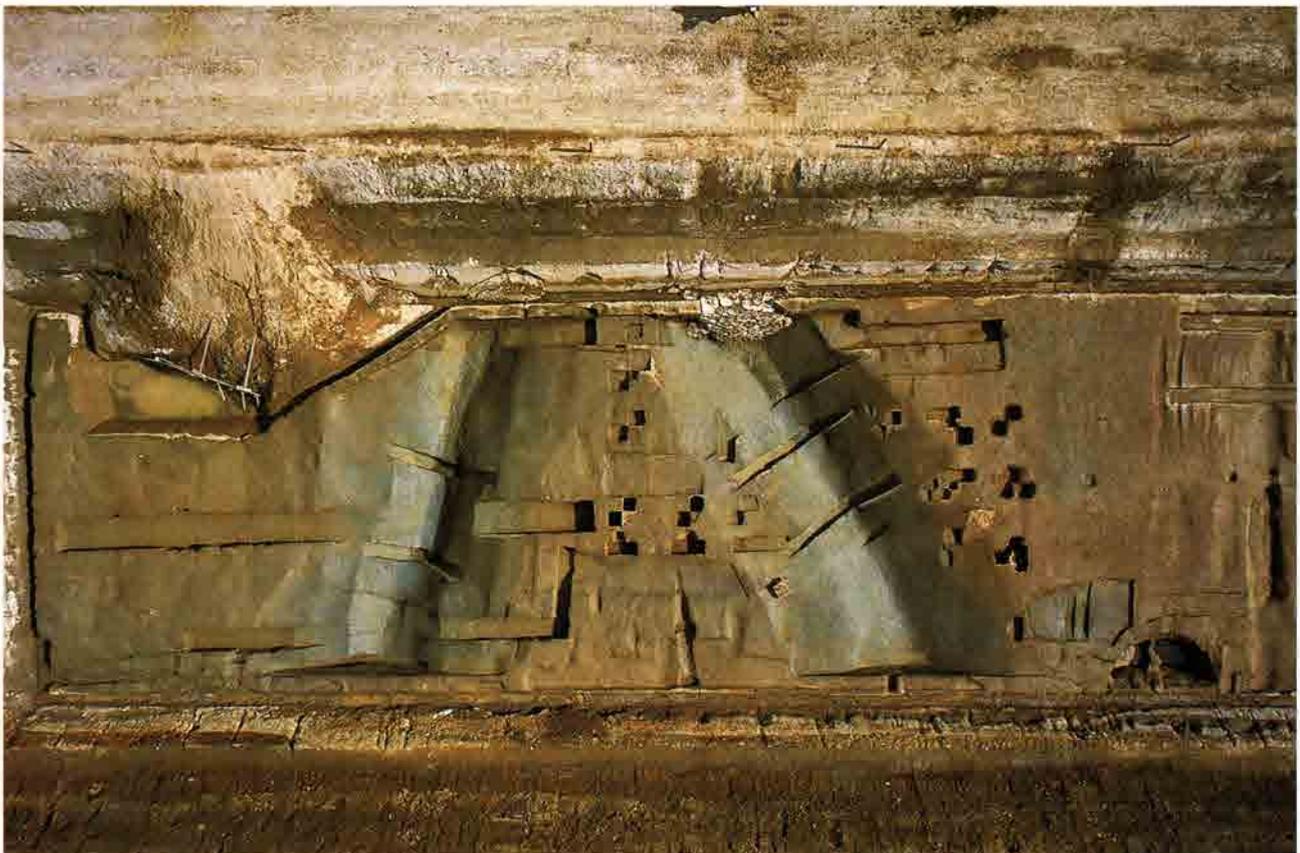
(1) A 地区全景(南から)



(2) A 地区全景(左が北)



(1) 調査地全景、手前は木津川堤防(東から)



(2) S D1001・1002全景(上が東)



(1) S D1001・S D1002出土弥生土器



(2) 古墳関連遺物

# 序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行してまいりました。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しています。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成14・15年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府農林水産部の依頼を受けて行った今井古墳、府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡、野条遺跡第7次、芝山遺跡、薪遺跡第4次、椋ノ木遺跡第6次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、峰山町教育委員会、八木町教育委員会、城陽市教育委員会、京田辺市教育委員会、精華町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 上田正昭

# 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 今井古墳
2. 府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡
3. 野条遺跡第7次
4. 芝山遺跡
5. 薪遺跡第4次
6. 棕ノ木遺跡第6次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 今井古墳	中郡峰山町赤坂小字今井	平15. 7. 29～10. 16	京都府土木建築部	岡崎研一
2. 府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡			京都府南丹土地改良事務所	
池上遺跡第15・16次	船井郡八木町池上	平14. 11. 5～平15. 2. 26 平15. 5. 26～7. 30		中川和哉 中村周平
野条遺跡第9次		平15. 5. 26～7. 30		中川和哉
3. 野条遺跡第7次	船井郡八木町野条小字大入道	平15. 5. 12～9. 10	京都府園部土木事務所	田代 弘
4. 芝山遺跡	城陽市富野上ノ芝	平14. 7. 8～平15. 2. 27 平15. 4. 16～8. 13	京都府土木建築部	岡崎研一 柴 暁彦
5. 薪遺跡第4次	京田辺市新小字石ノ前・狭道	平14. 11. 25～平15. 2. 27	京都府土木建築部	竹井治雄
6. 棕ノ木遺跡第6次	相楽郡精華町下狛小字神ノ木	平14. 6. 5～平15. 2. 10	京都府土木建築部	森島康雄 石崎善久

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。

また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

# 本文目次

1. 今井古墳発掘調査概要	1
2. 府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡発掘調査概要	17
(1)池上遺跡第15・16次	18
(2)野条遺跡第9次	43
3. 野条遺跡第7次発掘調査概要	47
4. 芝山遺跡発掘調査概要	71
5. 薪遺跡第4次発掘調査概要	139
6. 棕ノ木遺跡第6次発掘調査概要	147

# 付表目次

1. 今井古墳	
付表1 今井古墳出土地点別遺物一覧表	8
付表2 京都府内の竪穴系横口の横穴式石室規模一覧表	15
3. 野条遺跡第7次	
付表3 A地区出土遺物観察表	69
付表4 竪穴式住居跡SH0301出土土器観察表	70
4. 芝山遺跡	
付表5 芝山遺跡主要発掘調査一覧	72
付表6 掘立柱建物跡一覧表	79
付表7 掘立柱建物跡規模一覧	136
6. 棕ノ木遺跡第6次	
付表8 放射性炭素年代測定および樹種同定結果	155
付表9 弥生土器観察表	196
付表10 弥生土器の胎土の全鉛物および重鉛物分析表	200

# 挿 図 目 次

## 1. 今井古墳

第1図	調査地および主要遺跡分布図	1
第2図	調査前地形測量図	3
第3図	今井下層古墳地形測量図	4
第4図	今井下層古墳主体部実測図	4
第5図	今井古墳地形測量図	5
第6図	今井古墳石室実測図	6
第7図	今井古墳閉塞石実測図	7
第8図	今井古墳出土遺物および棺痕跡実測図	8
第9図	今井古墳墳丘断面図	9
第10図	S X 01実測図	9
第11図	出土遺物実測図(1)	11
第12図	出土遺物実測図(2)	12
第13図	出土遺物実測図(3)	13
第14図	出土遺物実測図(4)	13

## 2. 府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡

第15図	調査地位置図	17
第16図	調査トレンチ配置図	19
第17図	池上遺跡第15次調査第1・2トレンチ遺構実測図	20
第18図	池上遺跡第15次調査第1トレンチ出土遺物	21
第19図	池上遺跡第15次調査第3～5トレンチ遺構実測図	22
第20図	池上遺跡第15次調査第3トレンチ出土遺物	23
第21図	池上遺跡第15次調査第5トレンチ遺構実測図	25
第22図	池上遺跡第15次調査第5トレンチ出土遺物(1)	26
第23図	池上遺跡第15次調査第5トレンチ出土遺物(2)	27
第24図	池上遺跡第15次調査第6トレンチ遺構実測図	29
第25図	池上遺跡第15次調査第6トレンチ出土遺物	30
第26図	池上遺跡第15次調査第7トレンチ遺構実測図	32
第27図	池上遺跡第15次調査第7トレンチ出土遺物	33
第28図	池上遺跡第15次調査第8トレンチ遺構実測図	34
第29図	池上遺跡第15次調査第8トレンチ出土遺物	35

第30図	池上遺跡第15次調査第8・9トレンチ遺構実測図	36
第31図	池上遺跡第15次調査第9トレンチ出土遺物	37
第32図	池上遺跡第16次調査第1トレンチ遺構実測図	39
第33図	池上遺跡第16次調査第2・4トレンチ遺構実測図	40
第34図	池上遺跡第16次調査第3トレンチ・野条遺跡第9次調査遺構実測図	42
第35図	池上遺跡第16次調査・野条遺跡第9次調査出土遺物	43
第36図	池上遺跡・野条遺跡出土石器	44
第37図	池上遺跡出土石器・鉄器	45

### 3. 野条遺跡第7次

第38図	調査地と周辺の遺跡	48
第39図	調査地区配置図	49
第40図	土層堆積模式図	50
第41図	各地区遺構検出状況図	51
第42図	A地区竪穴式住居跡SH0307実測図	52
第43図	A地区検出遺構実測図	53
第44図	A地区掘立柱建物跡SB0306実測図	54
第45図	A地区掘立柱建物跡SB0349実測図	55
第46図	土坑実測図	56
第47図	A地区溝SD0335実測図	56
第48図	A地区検出土坑実測図	57
第49図	B地区竪穴式住居跡SH0301炭化物検出状況	58
第50図	B地区竪穴式住居跡SH0301実測図	58
第51図	B地区竪穴式住居跡SH0301炉跡実測図	59
第52図	地区竪穴式住居跡SH0301埋土の堆積状況	59
第53図	B地区竪穴式住居跡SH01遺物出土状況	60
第54図	B地区掘立柱建物跡SB0344実測図	61
第55図	A地区竪穴式住居跡SH0345実測図	61
第56図	B地区検出土坑実測図	62
第57図	A地区各遺構出土遺物実測図	63
第58図	A地区竪穴式住居跡SH0307出土遺物実測図	63
第59図	B地区包含層出土遺物	63
第60図	B地区竪穴式住居跡SH01出土遺物実測図(1)	65
第61図	B地区竪穴式住居跡SH01出土遺物実測図(2)	66
第62図	B地区竪穴式住居跡SH01出土遺物実測図(3)	67

#### 4. 芝山遺跡

第63図	調査地位置図	71
第64図	調査地配置図	73
第65図	A地区土層断面図	74
第66図	A地区遺構配置図	75
第67図	芝山I-11号墳SD120平面および断面図	76
第68図	土坑SK05実測図	77
第69図	竪穴式住居跡SH36・73実測図	78
第70図	土坑SK82実測図	79
第71図	掘立柱建物跡SB31実測図	80
第72図	掘立柱建物跡SB32実測図	81
第73図	掘立柱建物跡SB100実測図	82
第74図	掘立柱建物跡SB99・101実測図	83
第75図	掘立柱建物跡SB102・103実測図	84
第76図	掘立柱建物跡SB105実測図	85
第77図	掘立柱建物跡SB104実測図	86
第78図	掘立柱建物跡SB108実測図	87
第79図	掘立柱建物跡SB33・34・03	88
第80図	B地区遺構配置図	90
第81図	柵SA01～03実測図	91
第82図	B地区掘立柱建物跡SB05実測図	92
第83図	C地区遺構遺構配置図	92
第84図	C地区掘立柱建物跡SB01実測図	93
第85図	C地区不明土坑SX02実測図	93
第86図	D地区遺構配置図	94
第87図	D地区掘立柱建物跡SH01、SB04実測図	95
第88図	D地区掘立柱建物跡SB02・03、柵SA05実測図	96
第89図	D地区掘立柱建物跡SB03実測図	97
第90図	D地区掘立柱建物跡SB02実測図	98
第91図	D地区溝SD35・36土層断面図	99
第92図	D地区柵SA05・溝SD36・ピットP309実測図	99
第93図	E地区遺構配置図	101
第94図	土坑SK62・221実測図	102
第95図	竪穴式住居跡SH141実測図	102
第96図	掘立柱建物跡SB92～94実測図	103

第97図	溝 S D35・36・50・108断面実測図	104
第98図	F地区遺構実測図	105
第99図	周濠断面実測図	106
第100図	周濠内遺物出土状況図	107
第101図	G地区遺構配置図	107
第102図	H地区遺構配置図	108
第103図	竪穴式住居跡 S H22実測図	109
第104図	掘立柱建物跡 S B94実測図	110
第105図	掘立柱建物跡 S B95・96・145実測図	111
第106図	A地区出土遺物実測図(1)	114
第107図	A地区出土遺物実測図(2)	115
第108図	A地区出土遺物実測図(3)	116
第109図	A地区出土遺物実測図(4)	117
第110図	B地区出土遺物実測図	118
第111図	C地区出土遺物実測図	118
第112図	D地区出土遺物実測図(1)	119
第113図	D地区出土遺物実測図(2)	120
第114図	E地区出土遺物実測図(1)	120
第115図	E地区出土遺物実測図(2)	121
第116図	E地区出土遺物実測図(3)	122
第117図	F地区出土遺物実測図(1)	123
第118図	F地区出土遺物実測図(2)	124
第119図	F地区出土遺物実測図(3)	125
第120図	F地区出土埴輪実測図	126
第121図	F地区出土形象埴輪実測図(1)	127
第122図	F地区出土形象埴輪実測図(2)	128
第123図	F地区出土石製品・鉄製品実測図	129
第124図	H地区出土遺物実測図	130
第125図	掘立柱建物変遷図(試案)	131
第126図	A地区周辺遺構配置図	132
第127図	官衙遺構の類例	133
第128図	芝山遺跡検出倉庫規模	135
<b>5. 薪遺跡第4次</b>		
第129図	調査地位置図	140
第130図	トレンチ配置図	141

第131図	遺構実測図(1)	-----	142
第132図	遺構実測図(2)	-----	143
第133図	出土遺物実測図	-----	145
<b>6. 棕ノ木遺跡第6次</b>			
第134図	調査地周辺遺跡分布図	-----	148
第135図	調査区位置図	-----	149
第136図	縄文～古墳時代遺構平面略図	-----	150
第137図	平安～室町時代遺構平面略図	-----	151
第138図	調査区中央部西壁土層断面図	-----	152
第139図	溝S D1001～1003平面図	-----	153
第140図	溝S D1001・1002断面図	-----	154
第141図	溝S D1001遺物出土状況実測図1(西)	-----	155
第142図	溝S D1001遺物出土状況実測図2(中央)	-----	156
第143図	溝S D1001遺物出土状況実測図1(東)	-----	157
第144図	溝S D1002遺物出土状況実測図2(西)	-----	158
第145図	溝S D1002遺物出土状況実測図2(中央)	-----	159
第146図	溝S D1002遺物出土状況実測図3(東)	-----	160
第147図	溝S D1001須恵器甕出土状況図	-----	161
第148図	溝S D1002埴輪(111)出土状況図	-----	161
第149図	溝S D189(古墳)実測図	-----	162
第150図	S X494遺物出土状況図	-----	162
第151図	掘立柱建物跡S B 1・2実測図	-----	163
第152図	S P326遺物出土状況図	-----	164
第153図	掘立柱建物跡S B 3・4、柵S A 1～3実測図	-----	165
第154図	掘立柱建物跡S B 5～7、柵S A 4・5実測図	-----	166
第155図	柵S A 6実測図	-----	167
第156図	井戸S E356実測図	-----	168
第157図	坪境溝群実測図	-----	169
第158図	土坑S K508実測図	-----	170
第159図	出土遺物実測図(1)	-----	173
第160図	出土遺物実測図(2)	-----	174
第161図	出土遺物実測図(3)	-----	175
第162図	出土遺物実測図(4)	-----	176
第163図	出土遺物実測図(5)	-----	177
第164図	出土遺物実測図(6)	-----	178

第165図	出土遺物実測図(7)	179
第166図	出土遺物実測図(8)	180
第167図	出土遺物実測図(9)	180
第168図	出土遺物実測図(10)	181
第169図	出土遺物実測図(11)	182
第170図	出土遺物実測図(12)	183
第171図	出土遺物実測図(13)	184
第172図	出土遺物実測図(14)	185
第173図	出土遺物実測図(15)	186
第174図	出土遺物実測図(16)	187
第175図	出土遺物実測図(17)	188
第176図	出土遺物実測図(18)	189
第177図	出土遺物実測図(19)	189
第178図	出土遺物実測図(20)	190
第179図	出土銭貨拓影	191
第180図	弥生土器の胎土分析ダイヤグラム	194

## 図 版 目 次

### 1. 今井古墳

図版第 1	(1)調査地遠景(北から)	(2)調査前近景(北東から)
	(3)今井古墳・今井下層古墳近景(南東から)	
図版第 2	(1)今井下層古墳主体部検出状況(南から)	
	(2)今井下層古墳主体部検出状況(南東から)	
	(3)今井下層古墳主体部内堆積状況(南から)	
図版第 3	(1)今井下層古墳主体部完掘状況(北西から)	
	(2)古墳近景(南東から)	
図版第 4	(1)奥壁近景(南東から)	(2)左側壁近景(南から)
	(3)右側壁近景(南から)	
図版第 5	(1)前壁近景(北西から)	(2)玄室内堆積状況(南東から)
	(3)玄室内堆積状況(南東から)	
図版第 6	(1)掘形検出状況(北西から)	

- (2)掘形内堆積状況(南東から) (3)近景(南東から)
- 図版第7 (1)玄室内遺物出土状況(南東から) (2)玄室内遺物出土状況(南西から)  
(3)玄室内遺物出土状況(北西から)
- 図版第8 (1)玄室内遺物出土状況(北から) (2)玄室内遺物出土状況(北東から)  
(3)羨道内遺物出土状況(南から)
- 図版第9 (1)棺痕跡近景(南東から) (2)S X01近景(北西から)  
(3)S X01完掘状況(北西から)
- 図版第10 出土遺物(1)
- 図版第11 (1)出土遺物(2) (2)出土遺物(3)
- 図版第12 出土遺物(4)

## 2. 府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡

- 図版第13 (1)池上遺跡第15次調査南地区(南から)  
(2)池上遺跡第15次調査南地区(上が南)  
(3)池上遺跡第15次調査第1トレンチ(上が北)
- 図版第14 (1)池上遺跡第15次調査第1トレンチ(西から)  
(2)池上遺跡第15次調査第1トレンチS K113(北から)  
(3)池上遺跡第15次調査第2トレンチ(上が北)
- 図版第15 (1)池上遺跡第15次調査第2トレンチS H203(西から)  
(2)池上遺跡第15次調査第3・4トレンチ(上が南)  
(3)池上遺跡第15次調査第3トレンチS H301(北西から)
- 図版第16 (1)池上遺跡第15次調査第5トレンチ(上が東)  
(2)池上遺跡第15次調査第5トレンチ北部(上が北)  
(3)池上遺跡第15次調査第5トレンチS D(北東から)
- 図版第17 (1)池上遺跡第15次調査第5トレンチS D552(北から)  
(2)池上遺跡第15次調査北地区(南から)  
(3)池上遺跡第15次調査北地区(上が東)
- 図版第18 (1)池上遺跡第15次調査第7トレンチS D739(南から)  
(2)池上遺跡第15次調査第8トレンチS D820(東から)  
(3)池上遺跡第15次調査第8トレンチS H899(北から)
- 図版第19 (1)池上遺跡第15次調査第8・9トレンチ(西から)  
(2)池上遺跡第15次調査S D884(西から)  
(3)池上遺跡第15次調査第8トレンチS H854(西から)
- 図版第20 (1)池上遺跡第15次調査第8トレンチS H803・804(南から)  
(2)池上遺跡第15次調査第8トレンチS E810(南から)  
(3)池上遺跡第15次調査第8トレンチS E810(東から)

- 図版第21 (1)池上遺跡第15次調査第8トレンチS X898(南から)  
 (2)池上遺跡第15次調査第9トレンチ(上が西)  
 (3)池上遺跡第15次調査第8トレンチS K905・906(西から)
- 図版第22 (1)池上遺跡第15次調査第9トレンチS H901・902(西から)  
 (2)池上遺跡第15次調査第9トレンチS H904竈(東から)  
 (3)池上遺跡第16次・野条遺跡 第9次調査地全景(西から)
- 図版第23 (1)池上遺跡第16次調査第1トレンチ(上が西)  
 (2)池上遺跡第16次調査第1トレンチ調査風景(北から)  
 (3)池上遺跡第16次調査第1トレンチS K116(北西から)
- 図版第24 (1)池上遺跡第16次調査第1トレンチS H103(北西から)  
 (2)池上遺跡第16次調査第2トレンチ(上が東)  
 (3)池上遺跡第16次調査第2トレンチ(南から)
- 図版第25 (1)池上遺跡第16次調査第2トレンチ(北から)  
 (2)池上遺跡第16次調査第3・4トレンチ(上が北)  
 (3)池上遺跡第16次調査第3トレンチS D301(北から)
- 図版第26 (1)池上遺跡第16次調査第4トレンチ(南から)  
 (2)池上遺跡第16次調査第4トレンチ(北から)  
 (3)野条遺跡第9次調査第1・2トレンチ(上が南)
- 図版第27 (1)野条遺跡第9次調査第1トレンチ調査風景(北から)  
 (2)野条遺跡第9次調査第1トレンチS D101(南から)  
 (3)野条遺跡第9次調査第1トレンチS D102(東から)
- 図版第28 池上遺跡出土遺物(1)
- 図版第29 池上遺跡出土遺物(2)
- 図版第30 (1)池上遺跡・野条遺跡出土石器・鉄器  
 (2)池上遺跡出土石器

### 3. 野条遺跡第7次

- 図版第31 (1)調査地全景(北から) (2)調査地全景(東から)
- 図版第32 (1)A地区全景(右が北) (2)B地区全景(右が北)
- 図版第33 (1)A地区全景(南から) (2)B地区全景(南から)  
 (3)B地区重機掘削状況(北から)
- 図版第34 (1)A地区竪穴式住居跡S H0307全景(右が北)  
 (2)A地区竪穴式住居跡S H0307全景(南から)  
 (3)A地区竪穴式住居跡S H0307土坑検出状況(東から)
- 図版第35 (1)A地区溝検出状況(右が北)  
 (2)A地区掘立柱建物跡S B0306・0349検出状況(上が東)

- (3) B地区掘立柱建物跡 S B0344検出状況(上が北)
- 図版第36 (1) A地区掘立柱建物跡 S B0349全景(南から)  
(2) A地区掘立柱建物跡 S B0306全景(南から)  
(3) A地区掘立柱建物跡 S B0306検出状況(南から)
- 図版第37 (1) A地区掘立柱建物跡 S B0349出土瓦質土器(南から)  
(2) A地区掘立柱建物跡 S B0306柱穴根石検出状況(南から)  
(3) A地区掘立柱建物跡 S B0349柱穴根石検出状況(南から)
- 図版第38 (1) A地区土坑 S K0301全景(北西から)  
(2) A地区土坑 S K0334全景(南から)  
(3) A地区土坑 S K0305全景(南から)
- 図版第39 (1) A地区土坑検出状況(南から)  
(2) A地区土坑 S K0351埋土の状況(東から)  
(3) A地区土坑 S K0303(西から)
- 図版第40 (1) B地区竪穴式住居跡 S H0301検出状況(北西から)  
(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301遺物出土状況(北から)  
(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301完掘状況(北から)
- 図版第41 (1) B地区竪穴式住居跡 S H0301炉跡検出状況(北から)  
(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301炉跡検出状況(南から)  
(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301炉跡検出状況(南東から)
- 図版第42 (1) B地区竪穴式住居跡 S H0301炭化物出土状況(北から)  
(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301炭化物出土状況(北から)  
(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301炭化物出土状況(西から)
- 図版第43 (1) B地区竪穴式住居跡 S H0301手焙形土器出土状況(上が南西)  
(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301甕出土状況(東から)  
(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301壺出土状況(東から)
- 図版第44 (1) B地区竪穴式住居跡 S H0301高杯出土状況(南から)  
(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301器台ほか出土状況(北から)  
(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301甕出土状況(上が北)
- 図版第45 (1) B地区竪穴式住居跡 S H0301石鏝出土状況(西から)  
(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301鉄鏝検出状況(北から)  
(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301砥石検出状況(南西から)
- 図版第46 (1) B地区土坑 S K0346検出状況(北西から)  
(2) B地区土坑 S K0338検出状況(北から)  
(3) B地区土坑 S K0431検出状況(南から)
- 図版第47 (1) 実測作業風景(南東から)

- (2) A地区竪穴式住居跡 S H0307掘削風景(北西から)
- (3) B地区土坑 S K0341掘削風景(南東から)
- 図版第48 B地区竪穴式住居跡 S H0301出土遺物(1)
- 図版第49 B地区竪穴式住居跡 S H0301出土遺物(2)
- 図版第50 B地区竪穴式住居跡 S H0301出土遺物(3)
4. 芝山遺跡
- 図版第51 (1) A地区調査前の状況(南東から)
- (2) A地区竪穴式住居跡 S H36完掘状況(南西から)
- (3) A地区竪穴式住居跡 S H42完掘状況(南西から)
- 図版第52 (1) A地区 S H73完掘状況(南東から)
- (2) A地区 S K05遺物出土状況(北西から)
- (3) A地区 S K05完掘状況(南西から)
- 図版第53 (1) A地区 S K82土器棺検出状況(南西から)
- (2) A地区畦および上層土器取り上げ後(西から)
- (3) A地区 S K82完掘状況(南西から)
- 図版第54 (1) A地区 I-11号墳完掘状況(南西から)
- (2) A地区 S D120遺物出土状況(西から)
- (3) A地区 S D120遺物出土状況(南西から)
- 図版第55 (1) A地区建物群全景(南東から)
- (2) A地区全景(北西から)
- 図版第56 (1) A地区 S B100完掘状況(上が北) (2) A地区 S B31完掘状況(西から)
- (3) A地区 S B32完掘状況(北から)
- 図版第57 (1) A地区 S B103完掘状況(東から) (2) A地区 S B105完掘状況(南から)
- (3) A地区 S B104完掘状況(南東から)
- 図版第58 (1) A地区 S B100 P15断面(北から) (2) A地区 S B100 P19断面(北から)
- (3) A地区 S B103 P11断面(南から)
- 図版第59 (1) A地区 S B103 P5断面(南から) (2) A地区 S B104 P3断面(南西から)
- (3) A地区 S B104 P5断面(北東から)
- 図版第60 (1) A地区 S B102 P5遺物出土状況(南から)
- (2) A地区 S B108 P5遺物出土状況(南から)
- (3) A地区 S K06遺物出土状況(東から)
- 図版第61 (1) B地区近景(北東から) (2) B地区 S A01・02近景(北西から)
- (3) B地区 S A03近景(北西から)
- 図版第62 (1) B地区 S A03・P63近景(南東から)
- (2) B地区 S A03・P63遺物出土状況(南東から)

- (3) B地区 S B05近景(南東から)
- 図版第63 (1) C地区 S B01近景(南東から) (2) C地区 S X02近景(北から)  
(3) C地区 S X02・S R03近景(北西から)
- 図版第64 (1) D地区全景(北西上空から) (2) D地区 S B02・03全景(北東上空から)
- 図版第65 (1) D地区 S H01・S B04近景(北東から)  
(2) D地区 S B02検出状況(東から) (3) D地区 S B02近景(東から)
- 図版第66 (1) D地区 S B02・03近景(北から) (2) D地区 S B02近景(東から)  
(3) D地区 S B02近景(北から)
- 図版第67 (1) D地区 S B03近景(東から) (2) D地区 P 309近景(北東から)  
(3) D地区 S B03柱穴近景(南から)
- 図版第68 (1) D地区 S A05近景(北から) (2) D地区 S D35・36近景(北から)  
(3) D地区 S D35近景(南東から)
- 図版第69 (1) D地区 S D35堆積状況(南東から) (2) D地区 S D36近景(南東から)  
(3) D地区 S D36遺物出土状況(北西から)
- 図版第70 (1) E地区全景(南東から)  
(2) E地区 S K221遺物出土状況(北西から)  
(3) E地区 S K221完掘状況(北から)
- 図版第71 (1) E地区 S K62土器棺出土状況(南東から)  
(2) E地区 S K62完掘状況(南東から)  
(3) E地区 S H141完掘状況(北西から)
- 図版第72 (1) E地区 S B94完掘状況(東から)  
(2) E地区 S B92(手前)・93完掘状況(北東から)  
(3) E地区 S B227完掘状況(南東から)
- 図版第73 (1) E地区 S D50断面(南東から) (2) E地区 S D35断面(南東から)  
(3) E地区 S D36断面(南東から)
- 図版第74 (1) E地区 S K150遺物出土状況(南東から)  
(2) E地区 S K150完掘状況(東から)  
(3) E地区 S D36遺物出土状況(南東から)
- 図版第75 (1) F地区調査前の状況(東から)  
(2) F地区Ⅲ-1号墳完掘状況(南西から)  
(3) F地区周濠埋土堆積状況(北東から)
- 図版第76 (1) F地区遺物出土状況(北から)  
(2) F地区周濠北東側遺物出土状況(南西から)  
(3) F地区周濠北西側遺物出土状況(東から)
- 図版第77 (1) H地区調査前の状況(北東から) (2) H地区全景(南から)

- (3) H地区 S H22完掘状況(南東から)
- 図版第78 (1) H地区 S B95完掘状況(北から) (2) H地区 S B96完掘状況(東から)  
(3) H地区 S B145完掘状況(南西から)
- 図版第79 出土遺物(1)
- 図版第80 出土遺物(2)
- 図版第81 出土遺物(3)
- 図版第82 出土遺物(4)
- 図版第83 出土遺物(5)
- 図版第84 出土遺物(6)
- 図版第85 出土遺物(7)
- 図版第86 出土遺物(8)
- 図版第87 出土遺物(9)
- 図版第88 出土遺物(10)

#### 5. 薪遺跡第4次

- 図版第89 (1) 第1トレンチ全景(北から) (2) 第3トレンチ全景(北から)  
(3) 第4トレンチ全景(北から)
- 図版第90 (1) 第5トレンチ全景(北から) (2) 土坑 S K11(西から)  
(3) 第6トレンチ全景(北から)

#### 6. 椋ノ木遺跡第6次

- 図版第91 (1) 第1遺構面全景(南から) (2) 第1遺構面全景(北から)
- 図版第92 (1) 調査前風景(北から) (2) 溝 S D1001断面(北西から)
- 図版第93 (1) 溝 S D1002断面(北東から) (2) 溝 S D1001西部遺物出土状況(北から)
- 図版第94 (1) 溝 S D1001中央部遺物出土状況(1)(北東から)  
(2) 溝 S D1001中央部遺物出土状況(2)(北西から)
- 図版第95 (1) 溝 S D1001東部遺物出土状況(1)(北東から)  
(2) 溝 S D1001東部遺物出土状況(2)(南西から)
- 図版第96 (1) 溝 S D1001最上層遺物出土状況(1)(南から)  
(2) 溝 S D1001最上層遺物出土状況(2)(南から)
- 図版第97 (1) 溝 S D100中央部遺物出土状況(東から)  
(2) 溝 S D1002最上層遺物出土状況(南東から)
- 図版第98 (1) 溝 S D189(古墳)全景(東から)  
(2) 溝 S D189断面(南東から)
- 図版第99 (1) 土坑 S K495遺物出土状況(1)(北から)  
(2) 土坑 S K495遺物出土状況(2)(北から)
- 図版第100 (1) 掘立柱建物跡 S B1全景(西から)

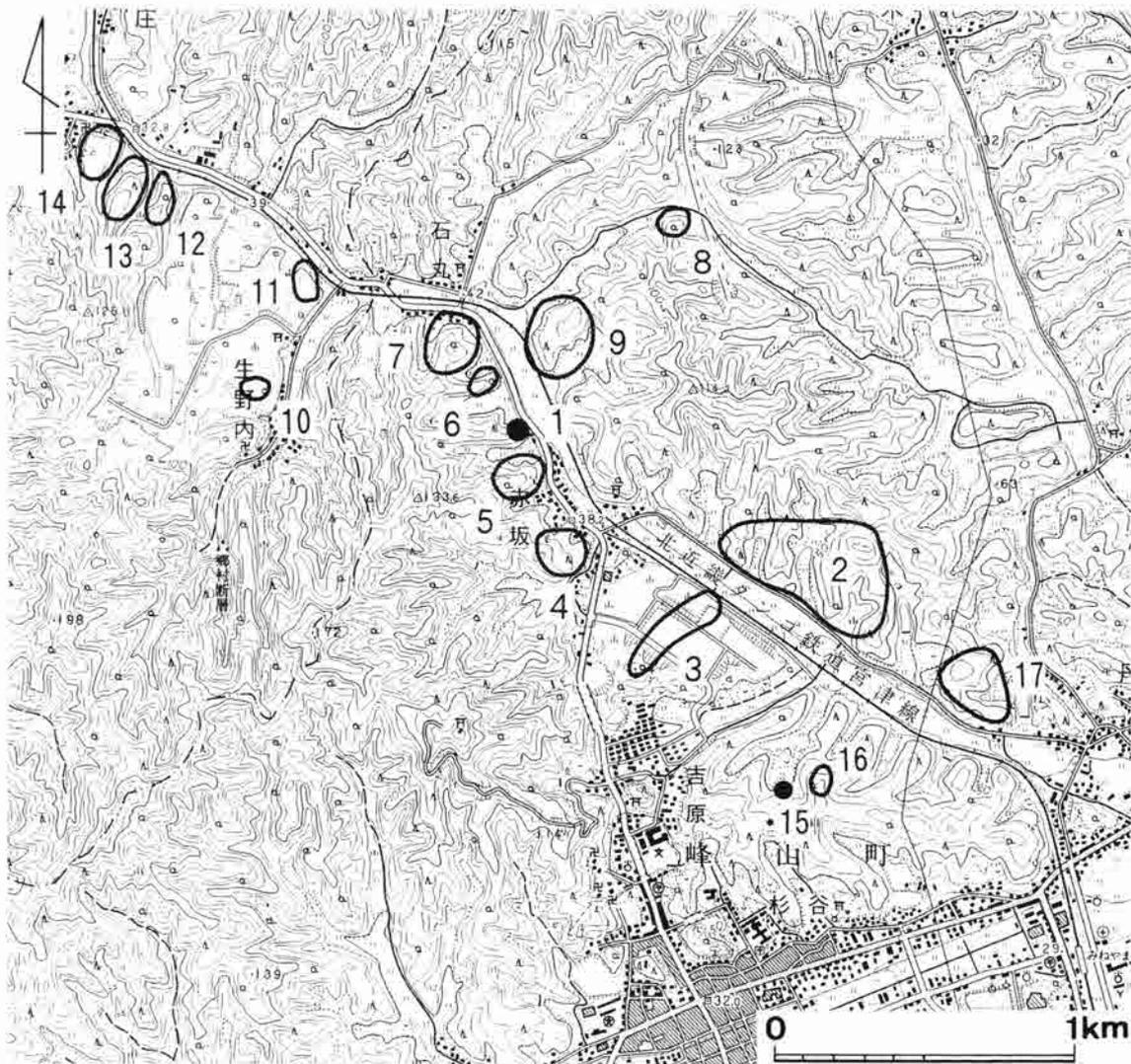
- (2)掘立柱建物跡S B 1 西辺棟柱断ち割り断面(南東から)
- 図版第101 (1)掘立柱建物跡S B 1 土器埋納状況(1)(上が北)  
(2)掘立柱建物跡S B 1 土器埋納状況(2)(上が東)
- 図版第102 (1)掘立柱建物跡S B 1 土器埋納状況(3)(上が北)  
(2)掘立柱建物跡S B 2 全景(西から)
- 図版第103 (1)掘立柱建物跡S B 3・4、柵S A 1～3 全景(東から)  
(2)柵S A 4、掘立柱建物跡S B 5 付近近景(西から)
- 図版第104 (1)掘立柱建物跡S B 5～7、柵S A 5 近景(西から)  
(2)柵S A 6 全景(西から)
- 図版第105 (1)井戸S E 356 全景(南東から) (2)井戸S E 356 断面(東から)
- 図版第106 (1)井戸S E 356 石組み検出状況(南から)  
(2)井戸S E 356 井筒検出状況(西から)
- 図版第107 (1)井戸S E 458 全景(東から) (2)土坑S X 508 全景(東から)
- 図版第108 (1)土坑S X 508 近景(西から) (2)坪境溝群全景(東から)
- 図版第109 (1)坪境溝S D 215 断面(西から) (2)溝S D 531 遺物出土状況(南から)
- 図版第110 (1)調査区南部耕作溝群近景(1)(東から)  
(2)調査区南部耕作溝群近景(2)(東から)
- 図版第111 溝S D 1001 出土遺物(1) 弥生土器
- 図版第112 溝S D 1001 出土遺物(2) 弥生土器
- 図版第113 溝S D 1001 出土遺物(3) 弥生土器
- 図版第114 溝S D 1001 出土遺物(4) 弥生土器
- 図版第115 溝S D 1002 出土遺物 弥生土器
- 図版第116 土坑S K 495 出土遺物 須恵器
- 図版第117 (1)S E 356 出土遺物(1) (2)S E 356 出土遺物(2)
- 図版第118 (1)S D 215 出土遺物(1) (1)S D 215 出土遺物(2)
- 図版第119 出土遺物 須恵器・埴輪・木製品
- 図版第120 出土遺物 石鏃・錢貨・縄文土器

# 1. <sup>いまい</sup>今井古墳発掘調査概要

## 1. はじめに

この調査は、主要地方道網野峰山線緊急地方道路整備事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。

今井古墳は、京都府中郡峰山町赤坂字今井に所在する。平成10年度に試掘調査が行われており、6世紀後半の古墳と想定されている<sup>(注1)</sup>。調査は、平成15年7月29日に開始し、10月16日に終了した。調査面積は、約250m<sup>2</sup>である。また、平成15年10月16日に約50名の見学者のもと、現地説明会を



第1図 調査地および主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000峰山)

- |                 |              |              |             |           |
|-----------------|--------------|--------------|-------------|-----------|
| 1. 今井古墳(調査地)    | 2. 麦ヶ谷古墳群    | 3. 大耳尾古墳群    | 4. 後谷古墳群    | 5. 松ヶ谷古墳群 |
| 6. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡 | 7. 千束古墳群     | 8・9. ホエヶ谷古墳群 |             |           |
| 10. 生野内大谷南古墳群   | 11. 生野内大谷古墳群 | 12. スガ町C古墳群  | 13. スガ町B古墳群 |           |
| 14. スガ町古墳群      | 15. 大谷古墳     | 16. 大谷山古墳群   | 17. 丹波丸山古墳群 |           |

行った。調査に係る経費は、京都府土木建築部が全額負担した。

現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長奥村清一郎、専門調査員岡崎研一が担当した。本概要の執筆・編集は、岡崎が担当した。調査期間中は、京都府教育委員会・峰山町教育委員会、京都府立丹後郷土資料館・地元自治会などの関係諸機関の指導・助言・協力をいただいた。また、地元の方々には、作業員・調査補助員・整理員として従事していただいた<sup>(注2)</sup>。ここに記して、感謝の意を表したい。

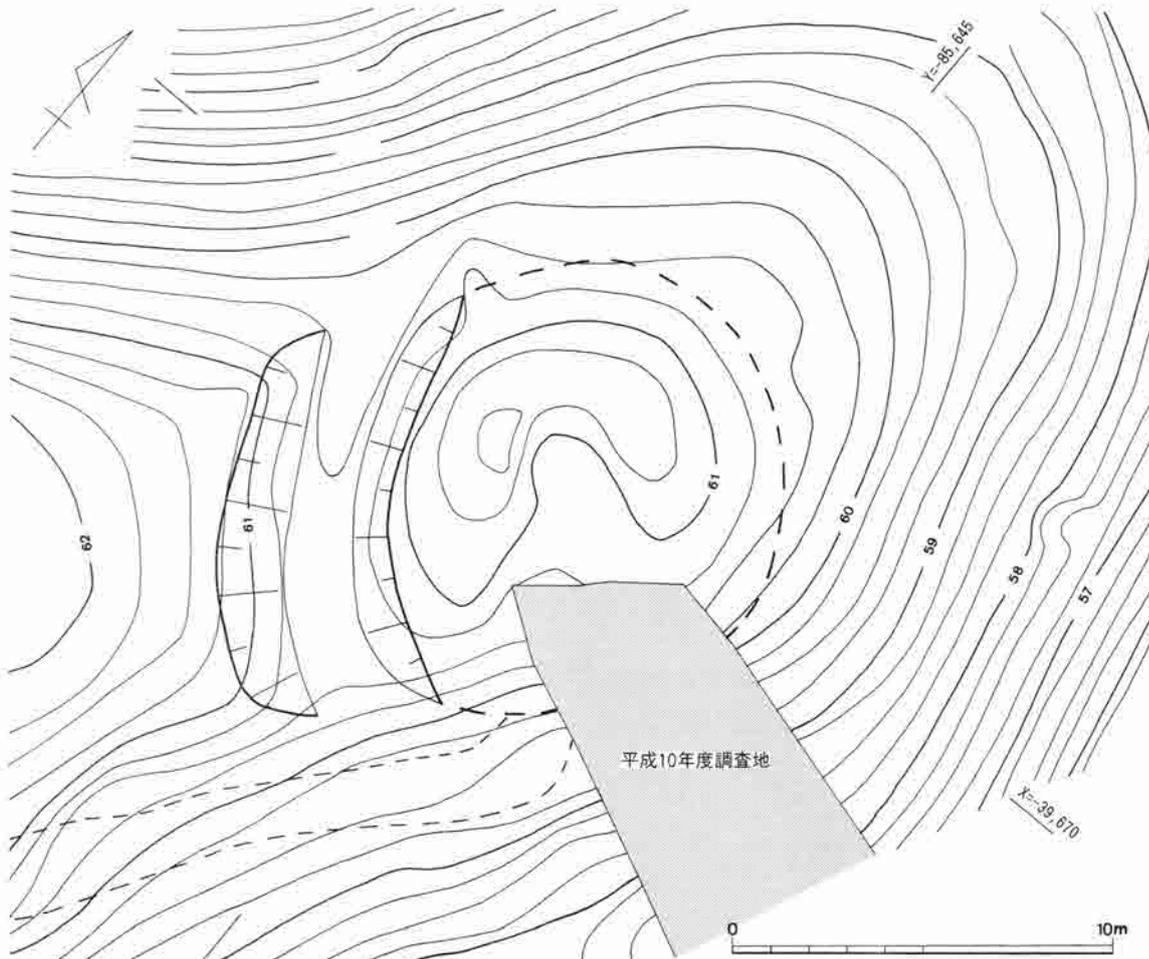
## 2. 位置と環境(第1図)

峰山町は、丹後半島を縦断する竹野川中流域に所在する。今回の調査地である赤坂は、峰山町の市街地から網野町に通じる府道網野峰山線の途中にある。峰山町と久美浜町境の久次岳(541.4m)から北東方向に、舌状にのびる丘陵先端部にあたる。この丘陵先端部には、弥生時代後期の墳墓である赤坂今井墳丘墓や古墳が点在する。発掘調査を実施した古墳としては、調査地の南東約1.6kmに所在する大耳尾古墳群がある。平成2年度の調査で、古墳時代後期の古墳群であることが判明した。大耳尾古墳群北東の丘陵部には、円墳6基と方墳17基からなる麦ヶ谷古墳群が所在する。調査地の北約600mの丘陵上には、ホエケ谷古墳群が所在する。平成10年に2基の調査を行い、古墳時代中期と後期の古墳であることが確認されている。調査地南隣の丘陵部には松ヶ谷古墳群が所在する。また、調査地の北方約800mの石丸の丘陵上には、円墳4基、方墳2基からなる千束古墳群がある。さらに西方の生野内から郷にかけて、生野内大谷古墳群・生野内大谷南古墳群・スガ町古墳群が所在する。生野内大谷古墳群は、平成3年度の調査で、木棺直葬墳4基が検出され、鉄剣・鉄鏃・須恵器・土師器などが出土している。スガ町古墳群は、尾根筋ごとに古墳群が造られ、3支群からなる。西側から、スガ町古墳群・スガ町B古墳群・スガ町C古墳群と称され、前～中期にかけての古墳が集中する。大谷古墳は、横穴式石室を内部主体とする単独墳である。また、後谷古墳群においても奥壁が一部露出している。石材が散乱する古墳が、そのほかに存在することから、未調査の横穴式石室が数多く存在するようである。大谷山古墳群からは、埴輪・土師器が出土している。丹波丸山古墳群からは、須恵器・土師器・金環が出土したとされる。

## 3. 調査概要(第2図、図版第1)

今回の調査で、この丘陵先端部には古墳2基が存在することが分かった。木棺直葬墳の今井下層古墳と横穴式石室を主体とする今井古墳である。このうち、今井下層古墳は、今回の調査で新たに確認された古墳で、名称については、峰山町教育委員会の指導を得て決定した。

古墳の西側には、古墳と古墳西側の丘陵とを画する溝が掘りめぐらされている。溝の規模は、幅約4.3m、深さ約0.7m、長さ約11mを測る。この付近は、調査対象地外となる。墳丘は、この区画溝の東側に径約12m、高さ約1mで確認できた。墳丘中央部から南側にかけて大きな落ち込みが見られた。落ち込みの範囲は4×5mで、深さ約0.6mであった。これは、後世の石材の抜



第2図 調査前地形測量図

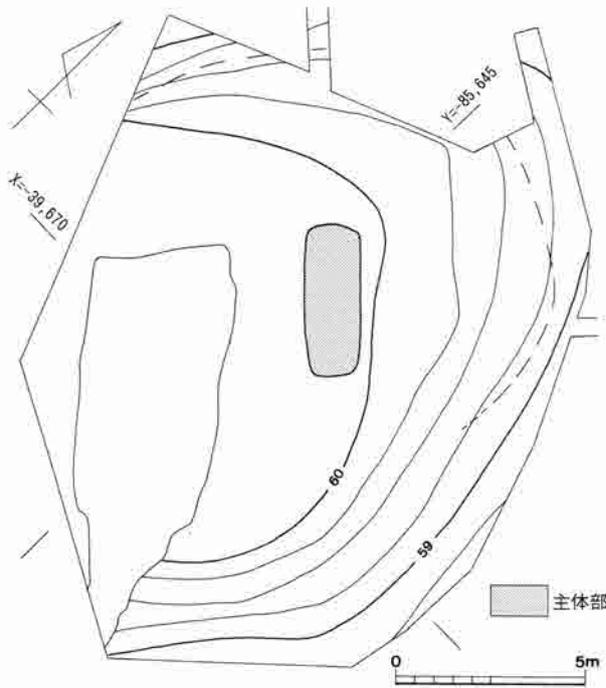
き取り穴と思われた。この落ち込み南東部を平成10年度に約45m<sup>2</sup>の試掘調査を実施した。その結果、表土直下から須恵器杯身と腿の破片が出土した。周辺部に石材が少量散乱していたことから、6世紀後半の横穴式石室が存在すると想定された。

今回の調査に伴い、現地視察したおり、墳丘裾部は試掘調査の範囲上部でめぐると思われたが、明確に現れていなかった。また、周囲の状況から、横穴式石室は非常に残りが悪いと思われ、墳頂部の大きな落ち込みが、盗掘坑の可能性も考えられたことから、副葬品の遺存状況もかなり悪いと推測された。

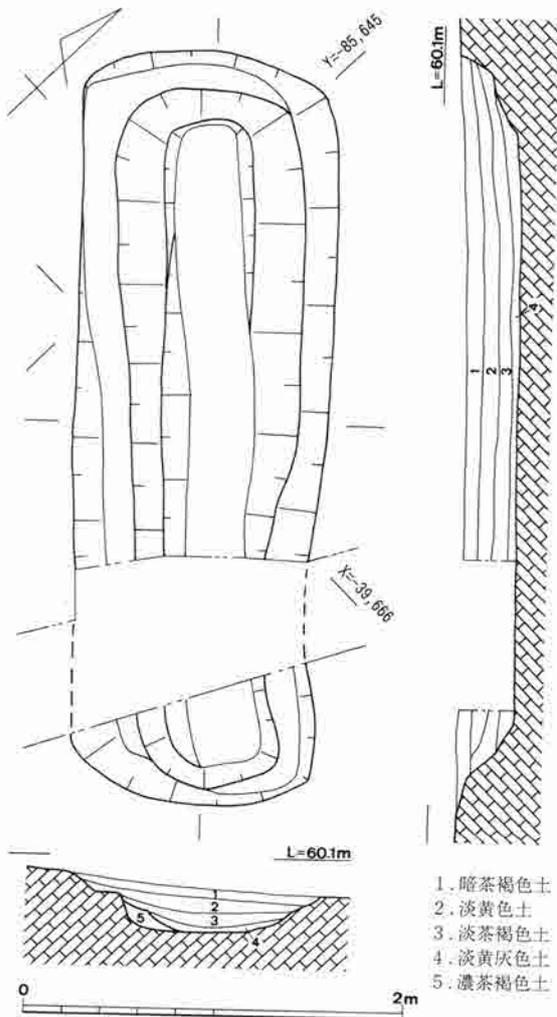
作業としては、平成10年度の試掘地中央の畦を延長し、また墳丘中央部で直行するように畦を設け、畦に沿って断ち割りを行った。また、墳丘部の表土も平行して掘削を行った。その結果、約0.8mの盛土と部分的に石材が認められた。また、墳丘盛土の下層において、幅約1.3m、深さ約0.3mの規模で「U」字状を呈する地山の落ち込みが認められた。土坑あるいは主体部と思われたが、落ち込みは、今井古墳墳丘下にあり、この遺構は今井古墳築造以前の遺構と考えられた。調査終了時には、これが今井下層古墳の主体部であることが判明した。

#### (1) 今井下層古墳(第3・4図、図版第2・3)

**墳丘** 墳形は、今井古墳築造時に大きく削平されており不明である。今井古墳の盛土を除去し、



第3図 今井下層古墳地形測量図



第4図 今井下層古墳主体部実測図

地山面を精査した際に、主体部1基を検出したことから、今井古墳以前の古墳がもう1基存在したことが判明した。

周辺の地山のわずかな傾斜変換点から、直径または一辺が12m前後の古墳と思われた。

**埋葬施設** 中央部から幅約1.4m、長さ約3.9m、深さ約0.3mを測る墓壙を検出した。墓壙底から側面にかけて、ゆるやかな丸みを確認したことから、舟底形木棺が使用されたと思われる。棺底部は、南側がわずかに低く、被葬者の頭位は北側と考えられる。墓壙の主軸方位は、N45°Wである。

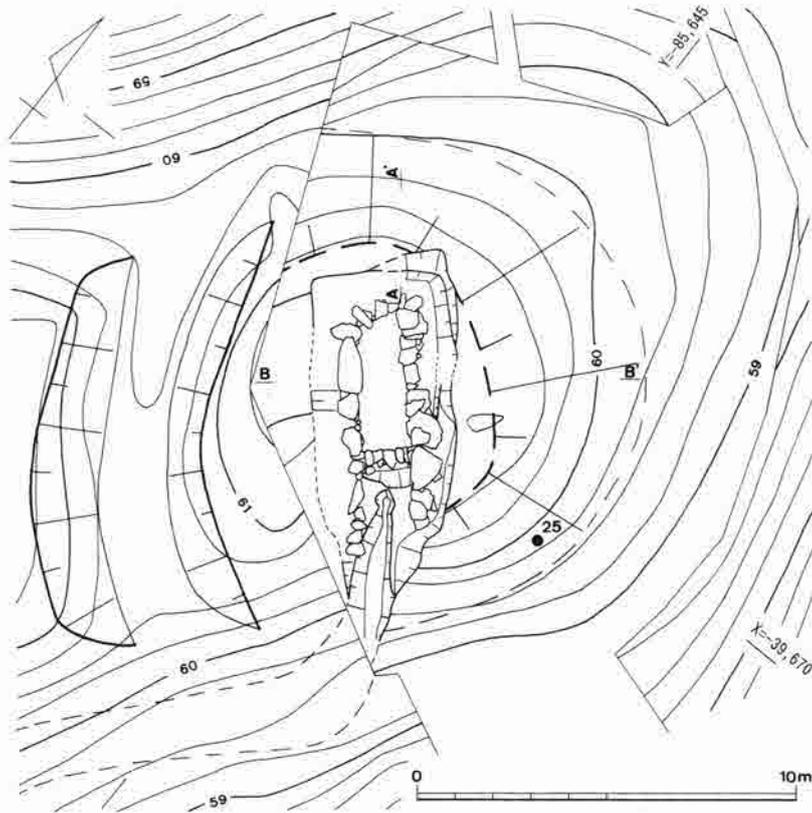
この木棺直葬墳は、今井古墳が築造された6世紀後半より以前に築かれた古墳であることが、検出状況から判明した。主体部内からの出土遺物が無く、詳しい時期については不明である。

(2)今井古墳(第5～9図、図版第3～9)

**墳丘** 調査前は、墳頂部が大きく窪んでおり、後世に石材が抜かれたと思われる。古墳西側には、背後の丘陵と画する人工的な溝が設けられていた。これは、古墳の西限を示す。この部分については、調査対象地外となるため、未調査である。調査前の古墳の規模は、直径約12m、高さ約1mを測る円墳と予想された。調査の結果、同規模の円墳であることが判明した。

**埋葬施設** 無袖の横穴式石室を基本形とする。主軸方位は、N40°Wである。石室の中心部である玄室は、奥壁・側壁と石室中央付近に面を成して3石ほど積

み上げた前壁から構成され、竪穴系横口式石室の要素を取り入れた石室であることが判明した。羨道部を平面的に見ると、竪穴系横口式石室の横口部と言うよりも横穴式石室の羨道部に近い規模である。しかし、その構築方法は、羨道部築造時床面が、玄室部にかけてスロープ状に地山を掘り下げ、前壁2石を築きながら数回にわたって土を入れ作業面とする。2石目上面でもって埋葬時床面とし、羨道部の側壁と前壁3石目はその後に積み上げてい

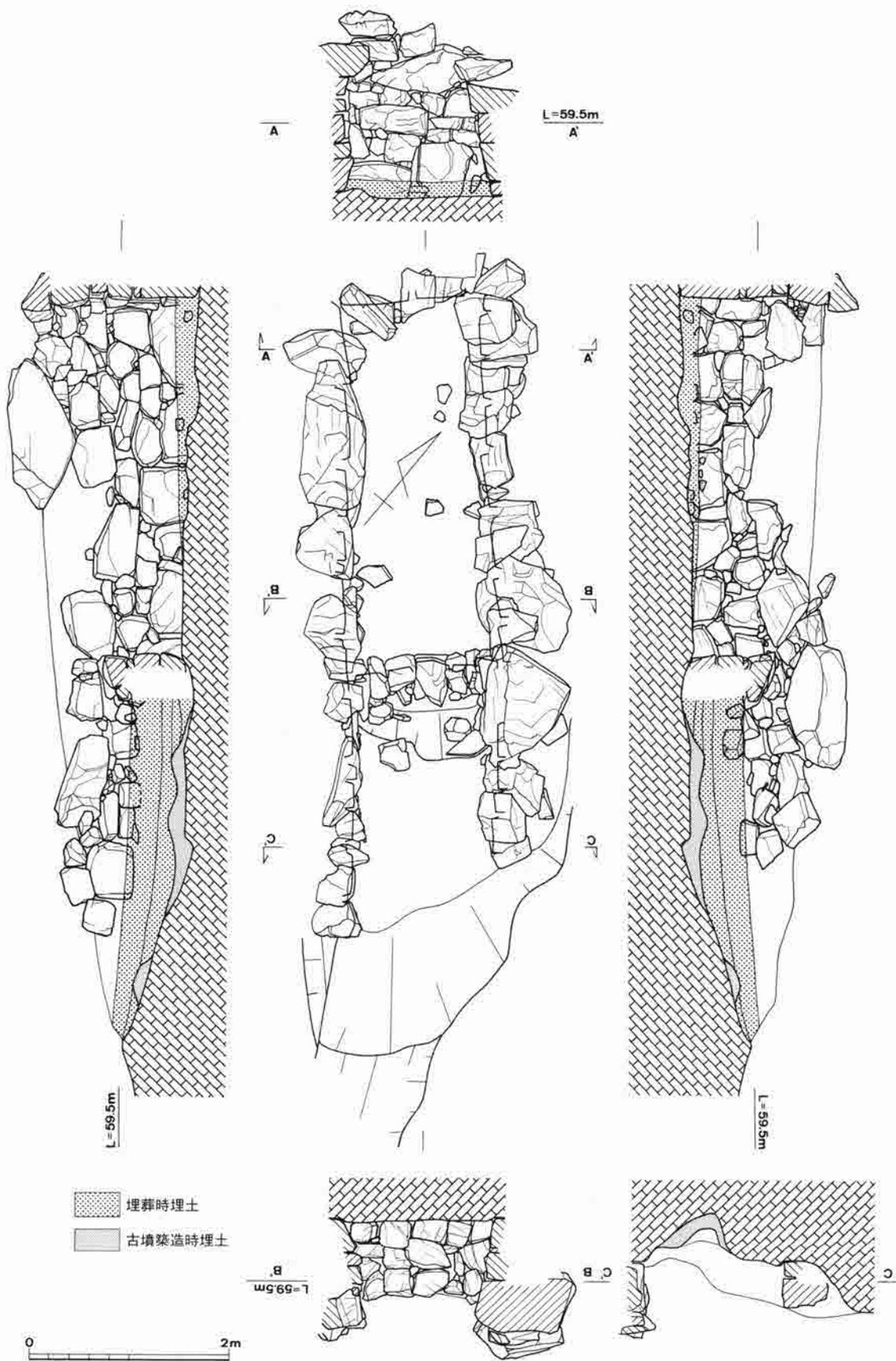


第5図 今井古墳地形測量図

た。このように前壁から羨道部にかけての構築は、竪穴系横口式石室に類似する。羨門付近の埋葬時床面上から、 $0.3 \times 0.4$ mほどの石の集積が認められ、閉塞石と考える(第7図)。

石室の規模は、奥壁から羨門付近までが約7.5m、幅約1.4m、奥壁から前壁までが約3.6mを測る。最も残りの良い奥壁は、7石積まれており、高さ約1.9mを測る。奥壁4石目から $0.2 \times 0.4$ mの石材でもって隅切りを行っていた。前壁は、基本的に3石積み上げており、その高さは約0.8mを測る。玄室と羨道の床面の高低差は、約0.5mを測る。天井石は、後世に抜き取られ残存していなかった。しかし、奥壁や側壁の遺存状況の良好なところでは、5石目から持ち送りが認められたことから、天井石は2m弱の所に存在していたと考える。左側壁の一部が玄室内に崩落しており、直刀などの副葬品が直撃された形で散乱していた。石室が調査地西端付近に位置していたことから、掘形については、奥壁から左側壁についてのみの調査となった。右側壁については、トレンチ調査となった。その結果、玄室部での横断面は「U」字形で、幅約3.5m、長さ約5.5m、深さ約1.2mの掘形と、これに付属するスロープ状の掘形を、幅約3m、長さ約5m確認した。ほぼ真っ直ぐに落ち込む掘形と石材の間、いわゆる裏込めの間隔は、広いところで0.8m、基底石にいたっては約0.4mと非常に狭い。

石室に使用された石材は花崗岩で、さほど加工しておらず、自然な平坦面を利用して築いていた。石の組み方は、概ね基底石が縦置きで、2石目からは横置きしている。石と石の隙間には、安定させるために拳大から人頭大の石を埋め込んでおり、大きな石を積み上げておらず、整然さに欠ける。

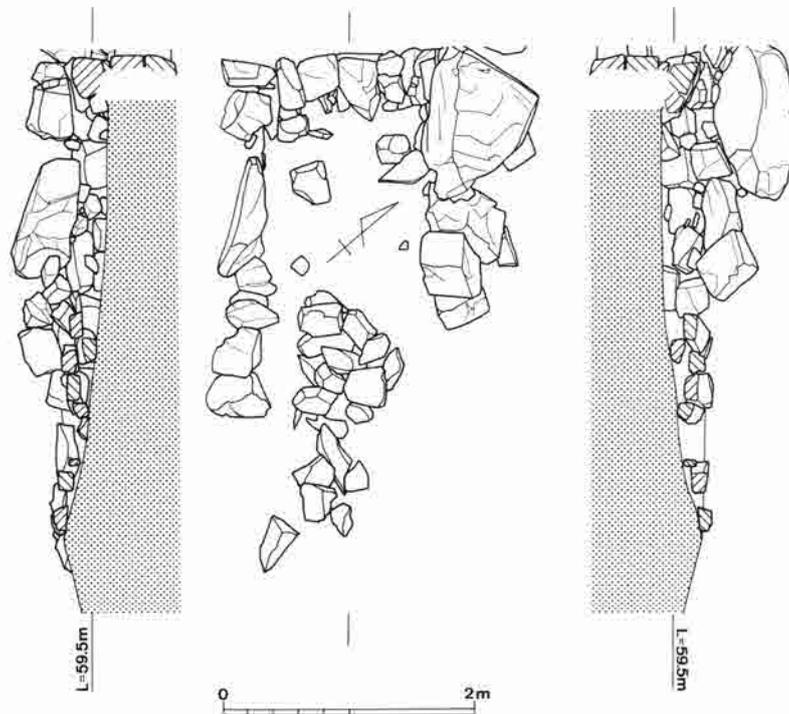


第6図 今井古墳石室実測図

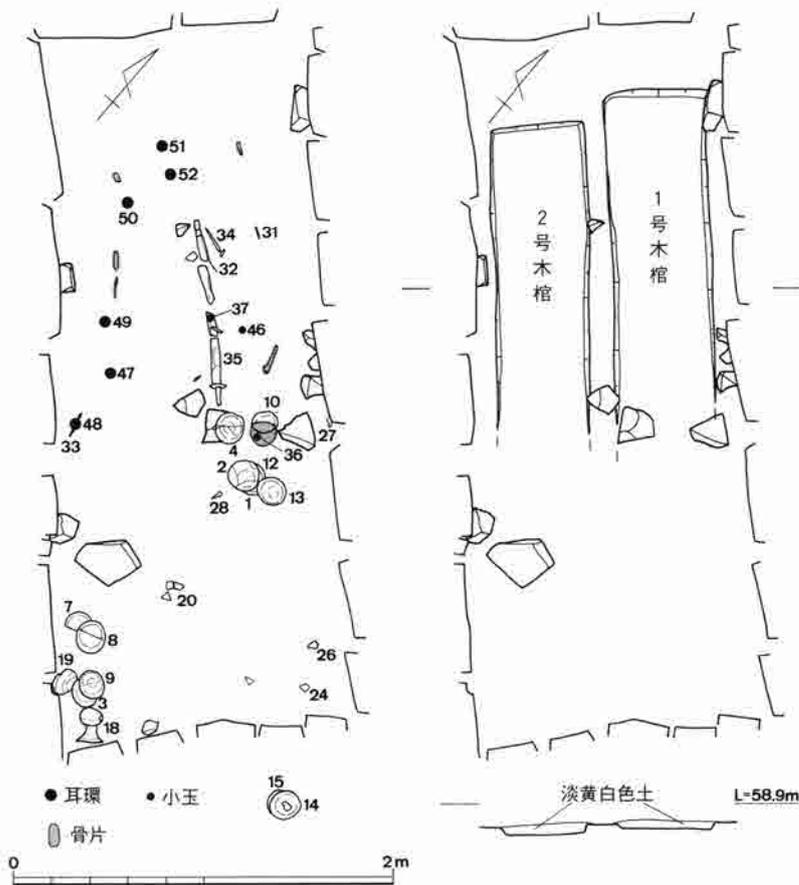
**出土遺物と棺痕跡** 出土遺物の大半が石室内出土である。土器類は、概ね右側壁寄りと前壁付近に集中する。鉄器は、直刀が石室ほぼ中央から出土し、刀子や鉄鏃などはその周辺に散乱していた。装飾品は、耳環が左側壁側に散乱し、小玉などは中軸ラインより東側から出土した。これらの遺物を取り上げた後に精査すると、土色の変化が長方形に2か所平行して認められた。その規模は、東側が0.5×1.6m、西側が0.5×1.5m、深さ3～5cmほどであった。これは、被葬者を埋葬した棺痕跡と考えられ、東側を1号木棺、西側を2号木棺とした。また、玄室内前壁付近に集められた土器群も見られる。これは、1・2号木棺以前に埋葬された際の副葬品が集積されたと考え、3号木棺の副葬品とした。そのほか調査中に墳丘斜面と墳丘裾部からも土器片が出土しており、それぞれに伴う遺物を列記したものが付表1である。

1号木棺に伴う遺物は、杯身・杯蓋が3セットで、内1セットが転用枕であった。転用枕の位置から被葬者の頭位は南向きであったと推定される。そのほか鉄鏃や刀子・刀・小玉が出土している。小玉・土玉については、その大半が1号木棺痕跡内の土を洗浄した際に発見したものである。土器以外に人骨の細片も部分的に認められた。転用枕に付着した状況であり、頭蓋骨の細片と思われる。そのほか上腕部、大腿部、足の指先付近と思われる骨の細片も確認している。2号木棺からは、土器類の出土が見られず、鉄鏃1点と金環4点を含む耳環のみであった。耳環は計6点出土しており、棺内に散らばっていた。2号木棺南側に扁平な石が1つ床面に固定されていた。この石材は、枕であった可能性が高く、1号木棺と平行することを考えると、被葬者の頭位は南向きであったと思われる。また、人骨の細片がわずかに認められ、下肢の一部と考える。3号木棺については、どの付近に埋葬されたか不明である。これに伴う遺物としては、杯身・杯蓋・甕・短頸壺などと鉄鏃1点である。杯身・杯蓋については、杯身3点と杯蓋1点でありセット関係にない。

以上のことから、この古墳の被葬者は3遺体であって、遺物の出土状況や人骨片の確認などから、3号木棺(初葬)→1・2号木棺(追葬)の順に埋葬されたと考える。追葬の回数については、1号木棺と2号木棺が平行に石室の主軸に沿って並べられていることから、同時期の埋葬と考え2回とする。また、左右側壁基底石と1・2号木棺間に拳大の石材が、それぞれ2



第7図 今井古墳閉塞石実測図



第8図 今井古墳出土遺物および棺痕跡実測図

付表1 今井古墳出土地点別遺物一覧表

		土器	鉄器	装飾品
玄室部	1号木棺	1・2・4・10・12・13	27~32・34・35	36~52
	2号木棺		33	47~52
	3号木棺	3・7~9・18~20・24	26	
羨道部		6・14~17・21・23		
墳丘斜面		5・11・22		
墳丘裾部		25		

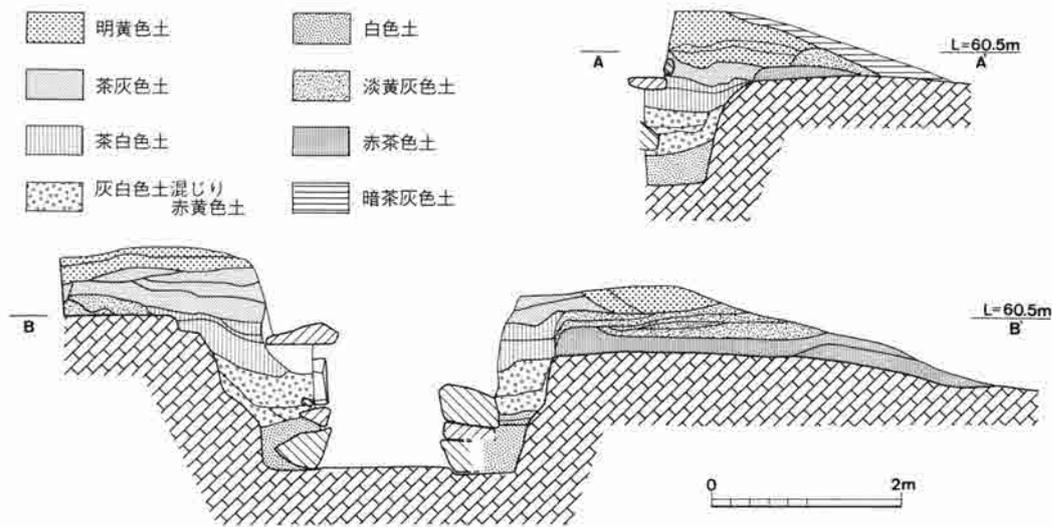
備考：数字は図番号と同じ

前壁裏側の床面上から、有蓋高杯2点が出土した。高杯は、脚部を意図的に欠いており、杯部の口縁部(15)の上に口縁部(14)を合わせて、前壁裏側の石材と左側壁の間に埋納されていた。石室内から脚部の出土は見られなかった。初葬時か追葬時に伴うものか不明であるが、祭祀的意味合いを持つものと考えられる。そのほか、墳丘からも土器片が出土している。中でも墳丘南東側の裾部から出土した特殊扁壺は、割れた状態で限られた範囲から出土したことから、祭祀後、意図的に割った可能性が高い。表土直下から出土した。

古墳築造について 古墳は、北東方向に舌状に張り出した低丘陵上に築かれていた。調査の結果、古墳の築造に先立ち、丘陵南側斜面の標高60m付近に、幅約1.5mの墓道を造っている。墓

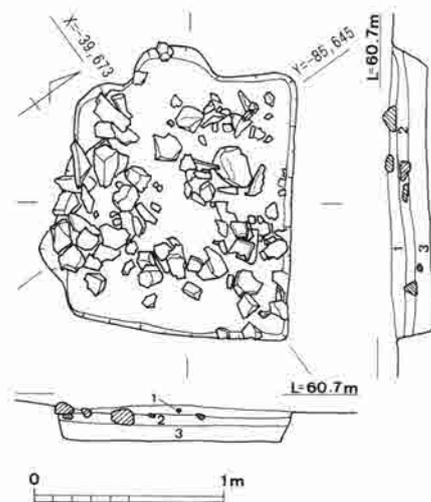
石つつ存在した。これは棺の側板を支えるためと思われる。さらに棺内から釘が出土しないことから、木棺自体はこのような石でもって支えたか、あるいはほぞ穴による組合式木棺であった可能性が高い。玄室内出土遺物については以上の通りであるが、そのほかの遺物については以下に記す。

地山をスロープ状に掘り下げた後に、作業面として数回にわたって土を入れている。この埋土内から、土器片がわずかに出土したが、時期が分かるものではなかった。前壁2石目上面まで土を入れ、床面としているが、前壁裏側の床面上か



第9図 今井古墳墳丘断面図

道については、調査対象地外であったが、わずかに平坦面が続く様が現在も確認できる。谷奥から丘陵先端付近まで続き、先端部で大きく北西方向に屈曲させ、スロープ状に幅3m、長さ約5m掘り込み羨道部としている。その先に幅約3.5m、長さ約5.5m、深さ約1.2mの掘形を設ける。玄室部での掘形の深さがかなり深いことや、羨道部から玄室部にかけての地山掘削面が凹凸を成すことから、玄室部の基底石から3石目までは室内から積み上げたと思われる。裏込めの幅がかなり狭いことや、3石目までが今井古墳では比較的小さな石材を使用していることから、その可能性が高いと考える。3石目までの裏込めには、掘削した地山を細粒化し突き固めていた。玄室4石目ないし5石目には、かなり大きな石材を使用している。この付近が掘形の上面付近にあたり、石材の片側は、側壁・奥壁の石材に架かり、裏側は掘形肩部、あるいは中位に設けられた掘形突起部に架かるように組まれていた。このように掘形上面付近に、大きな石材を壁材と地山に架かるようにすることによって、4～5石目までをより強固にしたと思われる。奥壁5石目から持ち送りが見られ、側壁においては全体に地震などによって前面に迫り出しているが、一部で奥壁と同様の状況が見られる。これは5石目付近から隅切りや持ち送りが行われ、天井石に続いていたと考える。これら5石目以上は盛土しながら築いている。羨道部は、前壁を築き羨門付近から、ほぼ水平になるまで土を入れ床面を築いた後に石材を置いている。石材は、床面付近の地山を「L」字状に掘削し、その平坦面に小さな石材を積み上げていた。本来の堅穴系横口式石室の横口部には天井石が架けられないとされるが、今井古墳においては、側壁の端付近から閉塞石が見られ、前壁から閉塞石まで約1.5mを測ることを考えると、羨道部にも天井石が存在したと思われる。



第10図 S X 01実測図

そのほかの遺構(第10図、図版第9)

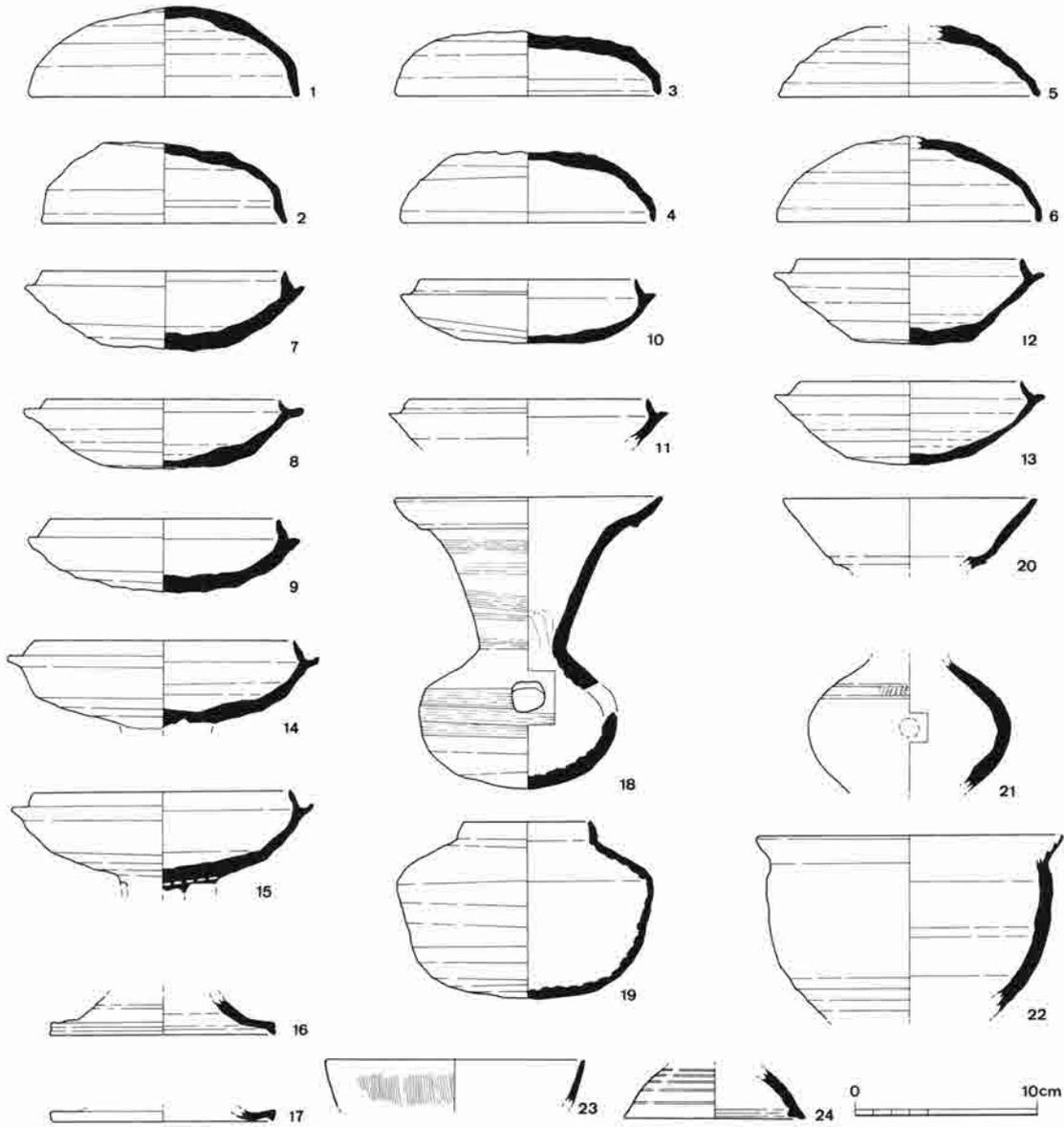
S X 01 古墳墳頂部南側で約1.4×1.5m、深さ約0.25mの不定形な掘形から、平坦なものや人頭大の石が集積した状況で検出された。掘形内からの出土遺物が無く、その性格や時代については不明である。

4. 出土遺物(第11～14図、図版第10～12)

出土遺物は、すべて今井古墳の横穴式石室内あるいは墳丘から出土したものである。出土地点については、付表1に記した。遺物としては、玄室内から、須恵器杯身・杯蓋・短頸壺・甗、鉄刀・刀子・鉄鏃、金環、小玉、土玉などが出土した。羨道部からは、須恵器杯蓋・有蓋高杯・甗が出土した。墳丘斜面からは、須恵器杯身・杯蓋・甗が出土し、墳丘裾部では、須恵器の特殊扁壺が出土した。出土土器の焼成は、堅緻なものから軟質のものまでである。

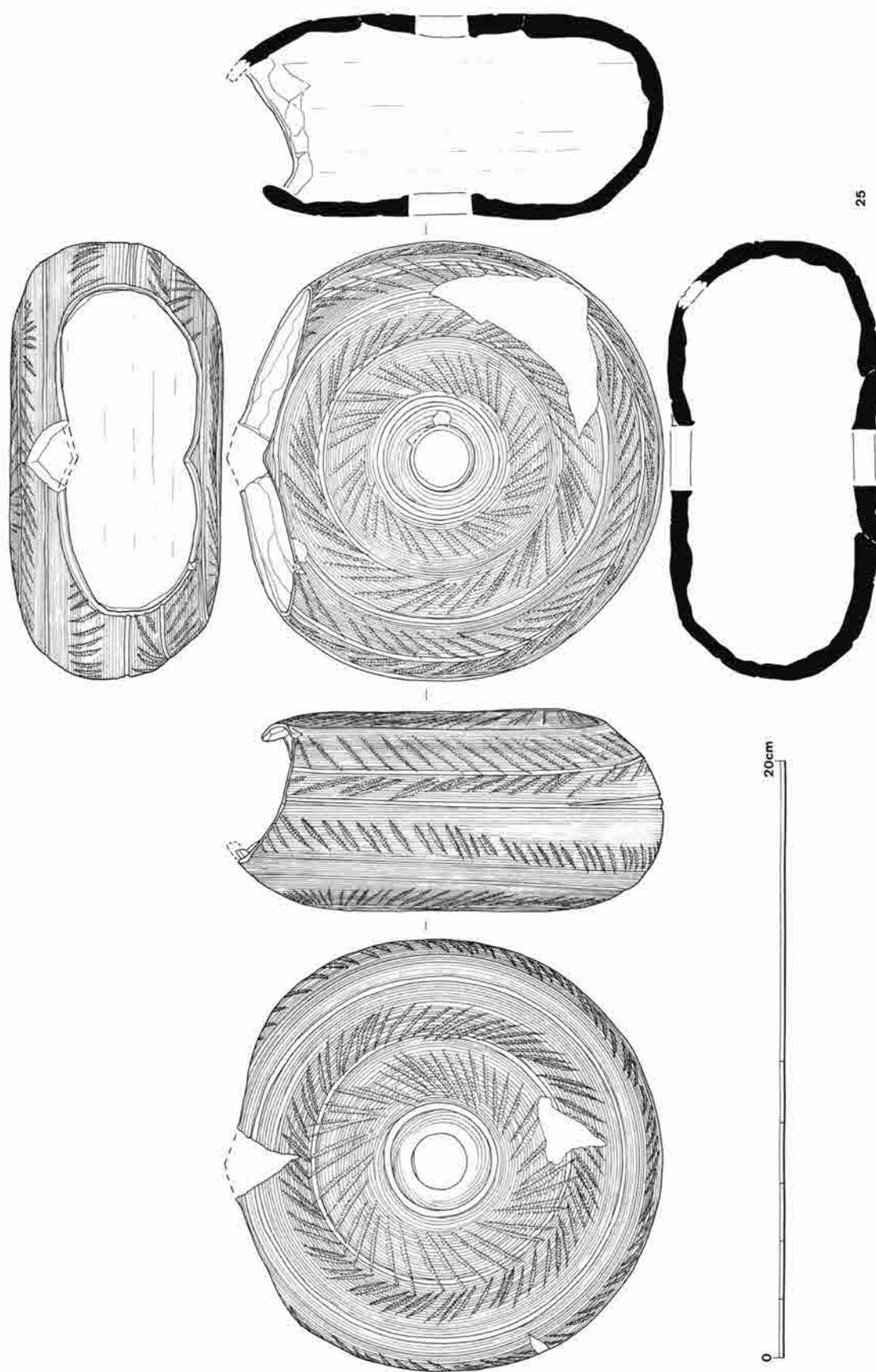
(1)土器

1・2は、須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部から口縁部に至る。口縁部で屈曲して下方を向き、端部は外下方に尖る。天井部外面上半部をヘラケズリしている。3・4は、平坦な天井部と下方に短くのびる口縁部からなる。器高の低い杯蓋である。天井部外面上半部をヘラケズリしている。5・6は、わずかに平坦な天井部から丸みを帯びて口縁部に至る杯蓋である。端部は丸く、下方を向く。天井部外面上半部をヘラケズリし、内面および口縁部はロクロナデする。時期は、陶邑編年のTK43からTK217型式併行期と考える。7は、丸みを帯びた底部から外上方に立ち上がり、口縁端部は上方に尖る、須恵器杯身である。8～10は、平坦な底部から内湾しながら短く立ち上がる。口縁端部は、内上方を向く。底部外面下半をヘラケズリする。11は、墳丘斜面から出土した破片である。10と同様の形態を成すと考える。12・13は、平坦な底部から外上方に真っ直ぐ立ち上がる。口縁部は内上方に尖る。底部外面下半をヘラケズリする。時期は、TK43からTK217型式併行期と考える。14・15は、須恵器有蓋高杯である。脚部は意図的に割っており、古墳から有蓋高杯の脚部は出土しなかった。杯部は、平坦な底部から短く上方に立ち上がる。口縁端部は、内上方に尖る。外面下半をヘラケズリしている。15の脚部には、長方形の透かしが2か所あったことが、わずかな脚部から見られた。時期は、TK43型式併行期と考える。16・17は、高杯の脚部である。羨道部から出土したが、これに伴う杯部は出土していない。18は、軟質の甗である。やや横長の球体に逆「ハ」字状に大きく開く。球体中央に直径約1.6cmの孔が下方を向くようにある。口縁部で「S」字状に屈曲し、端部は丸く、外上方を向く。時期は、TK43型式併行期と考える。球体下半はヘラケズリを行い、その上部と頸部外面はカキメ後ナデ消している。20・21が同じ個体であるかについては不明である。20は、玄室内の前壁寄りから出土したが、21は羨道部と墳丘裾部から出土したものが接合したものである。仮に同一個体とすると、3号木棺に伴う遺物を片付けた際に、玄室から墳丘斜面にかけて散ったことになる。22は、須恵器の甗である。丸みを帯びた体部から「く」字状に屈曲し、外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。口縁部内面は剝離していた。体部下半はヘラケズリし、そのほかはロクロナデしている。

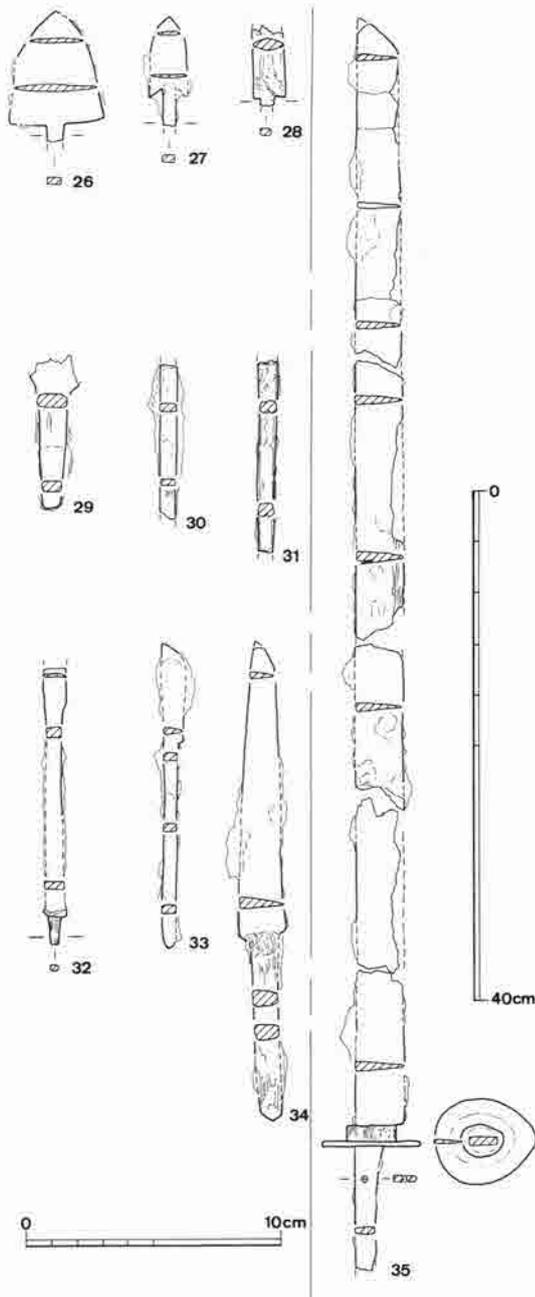


第11図 出土遺物実測図(1)

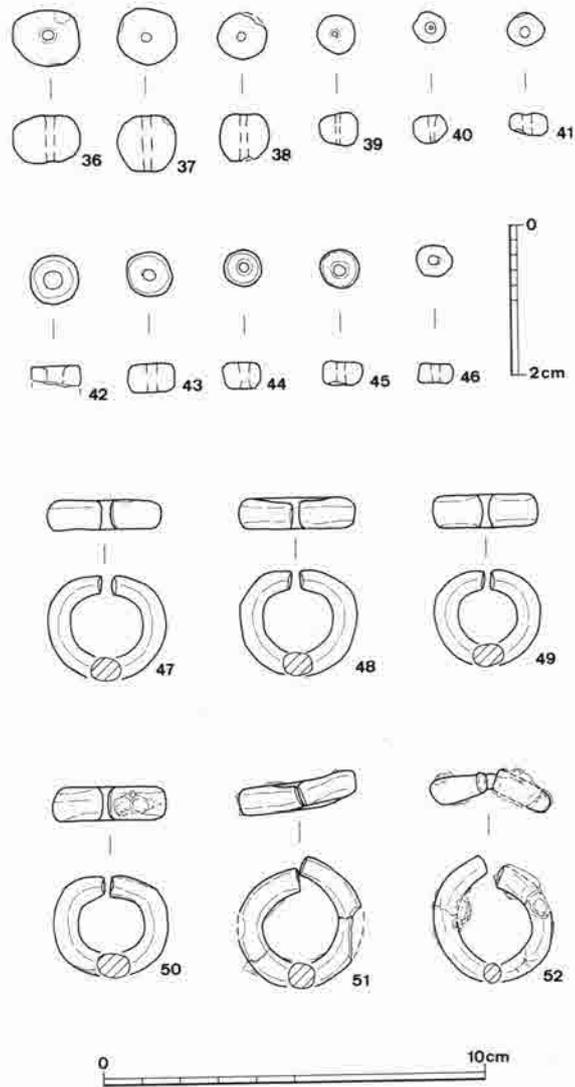
23は口縁部の破片であり、外面に縦方向のハケメを施す。24は脚部の破片である。端部は平坦である。25は、特殊扁壺である。焼成は堅緻で調整も非常に良好に残っていた。<sup>(注3)</sup>表面はやや丸みを持つのに対し、裏面は平坦であった。調整は、ヘラ描き沈線とカキメと列点文からなる。土器全面にカキメした後、1.5~2.0cm間隔でヘラ描き沈線を1条ずつ表面から側面・裏面にかけて8条施す。沈線間に同一方向の列点文を刻み、沈線ごとにその方向を違え、その様は綾杉状に列点文を施したように見える。カキメの線の間隔からおよそ3種類の工具でもって施し、また、列点文もその幅、深さから3種類の工具を使用する。このことからカキメと列点文は、同じ工具でもって施し、体部中心部のカキメに使用した工具で側面の列点文を施すなど、場所を違えていたと考える。この器形の用途については不明であるが、京都府内では、隼上り1号墳、醍醐1号墳、高山12号墳に次いで4例目となる。醍醐1号墳出土のものは柄の付くもので、そのほかは同形態のものである。直径14.6cm、幅6.6cm、表面の孔の径が1.8cm、裏面の孔の径が2.1cmを測る。口縁



第12図 出土遺物実測図(2)



第13図 出土遺物実測図(3)



第14図 出土遺物実測図(4)

部は、体部の調整後に「8」字状に切り取り、端部はヘラ状工具で面取りして調整している。

(2) 鉄器

26は平根鎌で、鎌身は三角形で、腸袂を持たない。27・28・32・33は、長頸鎌である。27・28・32は柳葉式で、33は片刃箭式である。27・28は鎌身部に関を有す。28・32は、鎌身先端を欠く。30・31は、鉄鎌茎部の一部である。29は、茎部で木質が残る。断面は長方形を呈し、刀子の茎部と思われる。34は、刀子である。刃に対し直角に付く両関で、茎部には木質が残る。刀身断面は、二等辺三角形を呈す。35は、茎部を一部欠損する直刀である。刀部に部分的に木質が残っており、鞘に入った状況にあったと考える。残存長97cm、刀身幅4cm、厚さ0.7cmを測る。刀身断面は、二等辺三角形をなし、関は直角に刃側のみに付く。鐔は、長径8cm、短径7cm、厚さ

0.5cmを測る。目釘孔が1か所認められる。

### (3)装身具

36～46は、小玉である。全て1号木棺内から出土した。小玉は、土製と滑石製に分けられる。

土製は38～40で、滑石製は36・37・41～46である。大きいものは、径約9mm、高さ約6mm、孔径約1mmを測り、小さなものは、径約4mm、高さ約3mm、孔径約1mmを測る。大きなものは丸玉に近い。47～52は耳環である。47～50は銅地金貼りである。直径7～8mmの銅地金を「C」字形に円形に曲げ、金の薄板を貼り付けている。51・52は、銅地金を「C」字形に曲げただけのもので、その形状は大きく歪む。

## 5.まとめ

今回の調査で2基の古墳が丘陵先端に存在していたことが判明した。当初、築かれた今井下層古墳は、後の今井古墳築造時に大きく削平されており、主体部のみの検出となった。今井古墳については、竪穴系横口式石室の要素を取り入れた、無袖の横穴式石室であることが判明した。本来の竪穴系横口式石室の範疇に該当する石室<sup>(注4)</sup>ではない。TK43からTK209型式にかけての土器が出土したことから、6世紀後半に築造された古墳であると考えられる。

このような古墳は、京都府内で10数例を数える。その代表的なものとしては、夜久野町流尾古墳<sup>(注5)</sup>、網野町離山古墳<sup>(注6)</sup>、福知山市池の奥4号墳<sup>(注7)</sup>、加悦町入谷西A1号墳、宮津市霧ヶ鼻10・11号墳、弥栄町遠所1・2・27・31号墳<sup>(注8)</sup>・新ヶ尾東10号墳<sup>(注9)</sup>、舞鶴市浦入西2号墳<sup>(注10)</sup>などである。基本的には、両袖・片袖・無袖の横穴式石室に、竪穴系横口式石室の形態を取り入れており、現在のところ無袖の石室に取り入れた例が多い。石室の形状から幾つかのグループに分けられる。長方形の玄室にわずかな横口が付くもの(Aタイプ)と、玄室に、横口と言うよりも羨道が付くもの(Bタイプ)に分けられる。両タイプとも、玄門付近で大きく段をなし、横口壁面にも石材が積まれる。また、石材の積み方で3種に分けられる。竪穴系の流れをくみ取ることのできる板状の石材を横積みするもの(a種)や、石塊でもって基底石を築き、その上に板状あるいは比較的小さな石材を積み上げるもの(b種)がある。このような竪穴系の積み方でなく、通常の横穴式石室と同様の積み方をするもの(c種)がある。b種には、石室の玄門に盾石を置く例が見られる。上記古墳をタイプ別に分けると、A-aには流尾古墳、A-bには離山古墳・池の奥4号墳・入谷西A1号墳・霧ヶ鼻10号墳・浦入西2号墳で、離山古墳以外は盾石を有する。A-cには、遠所1・2号墳・新ヶ尾東10号墳が該当する。B-a・bは無く、B-cに遠所27・31号墳と、今回調査を行った今井古墳がある。これらの竪穴系横口式石室の要素を取り込んだ横穴式石室の中でも、今回調査した今井古墳は、最も横穴式石室の形態を示すと言える。付表2は、京都府内の竪穴系横口の要素を取り込んだ横穴式石室の規模一覧表である。玄室長/玄室幅の数字が大きくなるほど、玄室の平面プランが長方形を成す。また、羨道長/玄室長については、数字が小さくなるほど、横口的に短い羨道が付く。

上記、竪穴系横口の要素を取り込んだ横穴式石室は、丹後地域においては、臨海部およびその

付表2 京都府内の竪穴系横口の横穴式石室規模一覧表

単位m

古墳名	玄室幅	玄室長	前壁高	羨道(横口)幅	羨道(横口)長
霧ヶ鼻10号墳	1.4	2.88	0.2	0.7	1.24
霧ヶ鼻11号墳	1.16	3.48	0.3	1.1~1.2	1.12
流尾古墳	1.1~1.38	5.13	0.4	1.0	1.5
池の奥4号墳	1.2	3.7	0.3	0.7	1.6
離山古墳	1.0~0.69	2.77	0.28	0.58	東壁1.0、西壁0.7
入谷西A1号墳	2.26	3.89	0.3	0.86~1.6	2.11
浦入西2号墳	1.55~1.65	2.45	不明	0.8~0.55	1.8
新ヶ尾10号墳	1.54	3.4	0.4	1.32	1.5
遠所1号墳	1.3	2.7	0.3	1.2	1.5
遠所2号墳	1.5	2.8	不明	1.3	2.0
遠所27号墳	1.25	3.9	0.35	1.2~0.8	0.4
遠所31号墳	1.0	3.6	不明	0.9	1.1
今井古墳	1.4	3.6	0.8	1.4	3.9
古墳名	玄室長/玄室幅	羨道長/玄室長	墓道	時期	石室・石積み
霧ヶ鼻10号墳	2.06	0.43		6世紀前半	A-b
霧ヶ鼻11号墳	3.0	0.32		6世紀前半	A-b
流尾古墳	3.72	0.29		6世紀中頃	A-a
池の奥4号墳	3.08	0.43		6世紀中頃	A-b
離山古墳	2.77	0.36	長1.2	6世紀中頃	A-b
入谷西A1号墳	1.72	0.54		6世紀中葉	A-b
浦入西2号墳	1.48	0.73		6世紀前半	A-b
新ヶ尾10号墳	2.21	0.44		6世紀後半	A-c
遠所1号墳	2.08	0.56		6世紀中頃	A-c
遠所2号墳	1.87	0.71		6世紀中頃	A-c
遠所27号墳	3.12	0.1	長1.2	6世紀中頃	B-c
遠所31号墳	3.6	0.31		6世紀中頃	B-c
今井古墳	2.57	1.08	長3.0	6世紀後半	B-c

近辺と内陸部に展開する様が、最近の調査例で確認されてきている。横穴式石室とともにこのような形態の石室が普及したことについては、最近の研究で言われているところである。しかし、丹後地域での調査例はわずかであり、今後の調査例を待たねばならず、また、近隣地域、たとえば但馬地域の様相なども考慮に入れた上で検討しなければならないと考える。

また、今回の調査で出土した特殊扁壺については、府内4例目である。赤坂付近からは、角杯など特殊須恵器が出土しており、近辺での調査に期待される。

注1 黒坪一樹「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

注2 調査参加者 植垣祥子・小笠原順子・岸田進・小北さか江・里中俊二・清水友佳子・田中幸雄・寺尾貴美子・藤村文美・堀弘樹・松村沙織・山本多美子

注3 山田邦和「須恵器特殊扁壺に関する覚書」(『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会) 1992、柴垣勇夫「特殊須恵器の器種と分布」(『愛知県陶磁資料

- 館研究紀要』6) 1987
- 注4 蒲原宏行「竪穴系横口式石室考」(『古墳文化の新視角』 雄山閣) 1984
- 注5 夜久野町教育委員会『夜久野の古墳―流尾古墳・長尾古墳発掘調査記録―』 1969
- 注6 三浦到ほか「離山古墳・離湖古墳発掘調査概要」(『京都府網野町文化財調査報告』第7集 網野町教育委員会) 1993
- 注7 福知山市教育委員会「池の奥古墳群」(『福知山市文化財調査報告書』第7集) 1985
- 注8 増田孝彦ほか「丹後国営農地関係遺跡(東部地区)昭和62・63、平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注9 小山雅人ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡 昭和61・62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注10 増田孝彦・筒井崇史「浦入遺跡群 平成8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第80冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

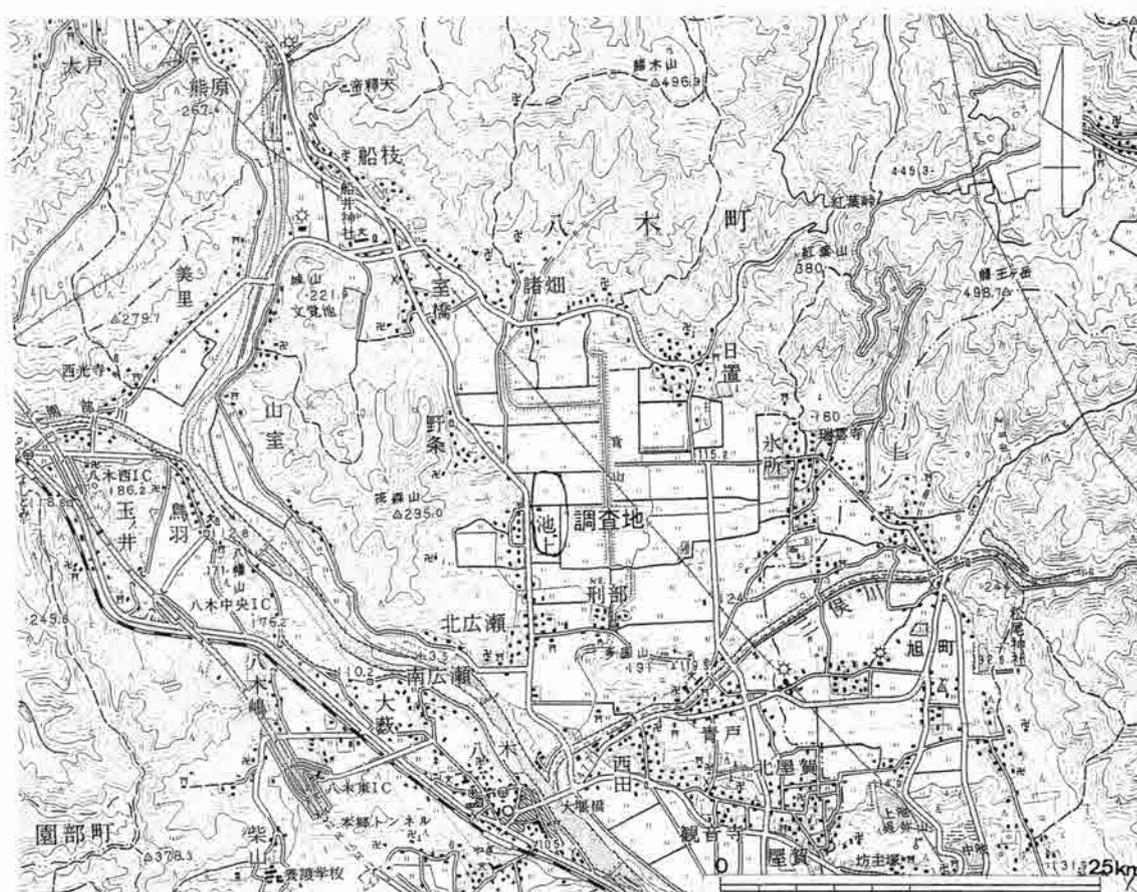
## 2. 府営ほ場整備事業(川東地区)関係遺跡 平成14・15年度発掘調査概要

### はじめに

今回の発掘調査は、平成14・15年度の府営ほ場整備事業(川東地区)に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

池上遺跡および野条遺跡は、平成8年度の八木町教育委員会の実施した遺跡分布調査によって発見された遺跡である。池上遺跡ではこれまでに合計17回、野条遺跡では合計9回の発掘調査が行われてきた。その結果、池上遺跡は、旧石器時代～中世、野条遺跡は、弥生時代～中世の遺跡であることが分かった。池上遺跡と野条遺跡は第15図で見られるように、丹波山塊の盆地の一つである亀岡盆地の入口に位置する遺跡である。周辺地域には、古墳時代後期の古墳群が点在している。池上遺跡と野条遺跡は隣接する遺跡で、字境で接する。今回報告する野条遺跡の調査区は、遺跡の南辺にあり、池上遺跡へと遺構がのびていく。

発掘調査は水路によって遺構面まで掘削が及ぶ地域と切土による造成が及ぶ部分についてこれ



第15図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西北部)

までの周辺の調査結果と八木町教育委員会の試掘調査結果を受けて、八木町教育委員会・京都府教育委員会の指導のもとに調査区を設定した。

池上遺跡第15次調査の現地調査は、平成14年11月5日～平成15年2月26日まで実施した。調査面積は約650㎡である。現地での発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、調査員中川和哉・中村周平が担当した。

池上遺跡第16次調査・野条遺跡第9次調査の現地調査は、平成15年5月26日～7月30日まで実施した。調査面積は約450㎡である。現地での発掘調査は、調査第2課調査第2係長伊野近富、主任調査員中川和哉が担当した。

今回は、平成14年度分調査の概要と合わせて報告する。本概報の作成は中川が担当し、14年度調査分の一部は、中村が執筆した。なお調査に係る経費については、全額、京都府南丹土地改良事務所が負担した。調査期間中は、京都府教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・八木町教育委員会・南丹土地改良事務所・地元各自治会・池上地区および野条地区の方々に多くの御配慮をいただいた。記してお礼申し上げたい。(中川和哉)

## (1) <sup>いけがみ</sup>池上遺跡第15・16次

### 1. 池上遺跡第15次

発掘調査の概要は、年度・遺跡ごとに記載する。第15次調査は、第1～9トレンチまでの9か所の調査区を設けた。調査地は、第1～5トレンチが遺跡の南側にまとまっている。第6～9トレンチが現在の府道沿いおよびその隣接地に設定されたため、大きく2地域に分け、前者を南地区、後者を北地区と呼ぶ。工事工程の都合により南地区を先行し調査を行った。

#### ①第1トレンチ(第17図)

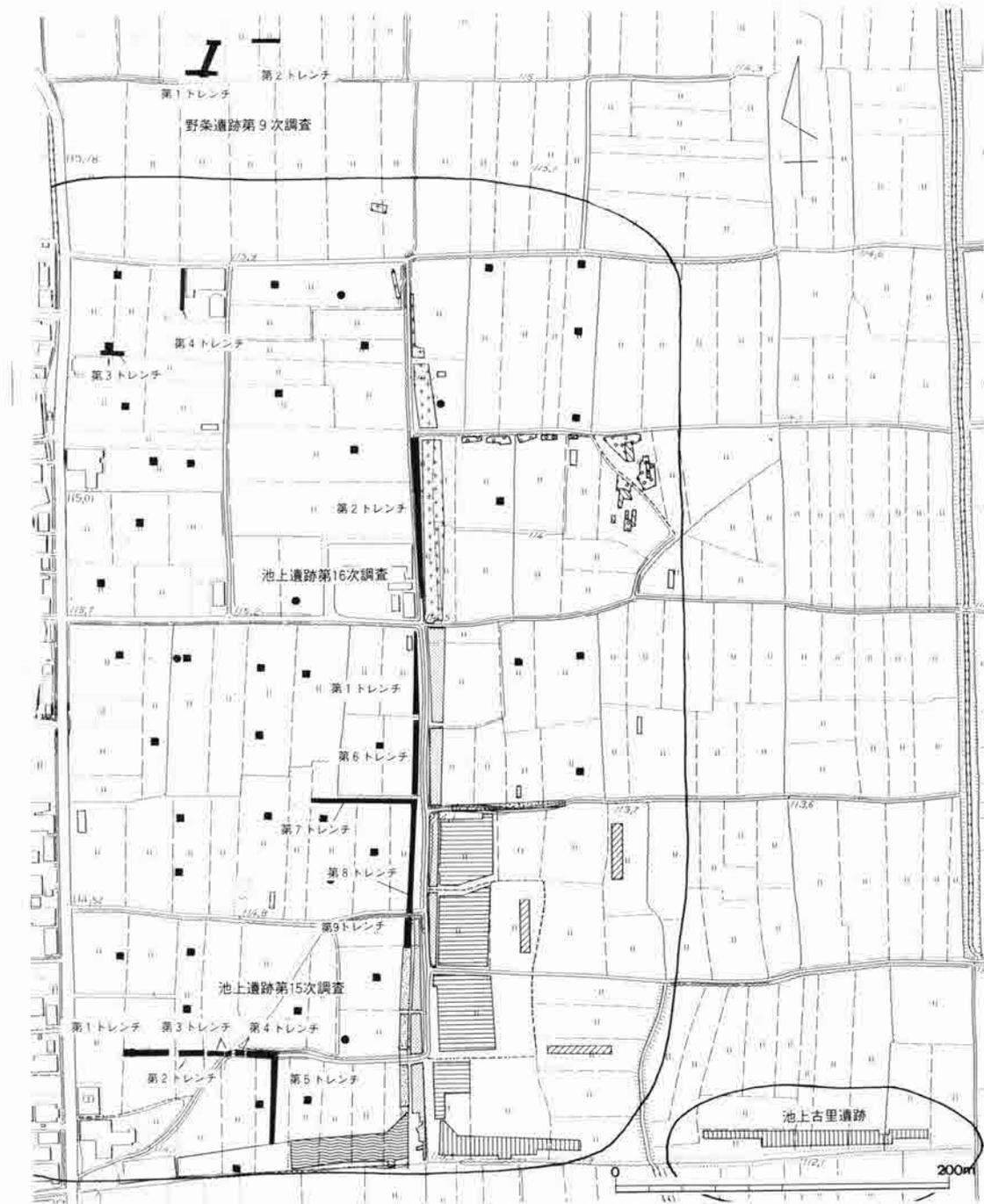
このトレンチからは、弥生時代後期と古墳時代後期の遺構がおもに検出できた。主要な遺構について時期ごとに概略を記載する。

#### 弥生時代後期

土坑S K 113 トレンチ中央部で検出した土坑である。検出部の平面は一辺約1.0mの逆台形を呈し、北辺をS K 112・S P 135に切られ、南辺はトレンチ外にのびている。土坑内からは弥生時代後期の土器(第18図1～8)がまとまって出土した。

#### 古墳時代

竪穴式住居跡S H 106 トレンチ東半で検出した竪穴式住居跡である。S H 127同様、南端の一部を検出した。検出部から、掘形は一辺約4.5m以上の方形と想定され、主軸はN13°Wである。南東部分ではS K 104を切っている。深さは約4cmと残りは悪く、暗灰褐色砂質土の埋土をもつ。トレンチ北壁にかかる中央部からは、半円形の焼土痕跡を検出しており、この住居跡に伴う可能性が考えられる。埋土中からは古墳時代の土師器、須恵器片が出土している。

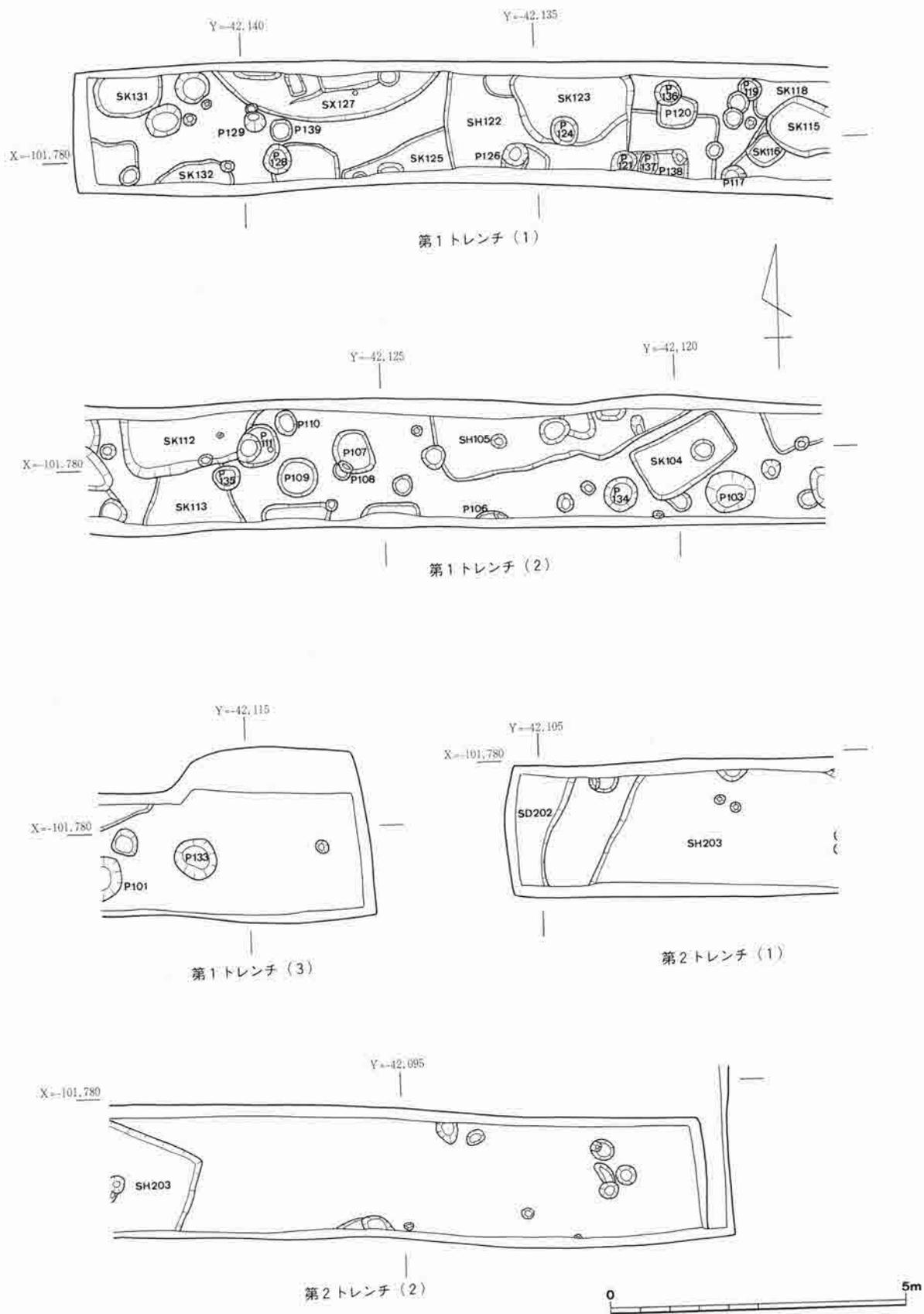


第16図 調査トレンチ配置図

**竪穴式住居跡 S H122** トレンチ西半で検出した竪穴式住居跡である。検出部から一辺約3mの方形を呈すると想定される。残りは悪く、東半の肩部は後世の削平により消失してしまっている。また、東半をS K123およびS P124・126に切られる。断面形は、先行・後出遺構の重複により判然としないが、中央部で深さ約0.2mを測り、床面はほぼ水平に成形されている。暗褐色粘砂質土・黒褐色粘質土で埋まっていた。埋土中から土器(第18図10~14)が出土した。

**土坑 S K112** S K113を切る土坑である。出土遺物の大半は、S K113の混入遺物と古墳時代のものであるが、奈良時代の須恵器杯B(第18図19)が出土している。

**柵列 P101・103・133・134** トレンチ東端で検出した柵列である。各柱穴の掘形は直径約0.5



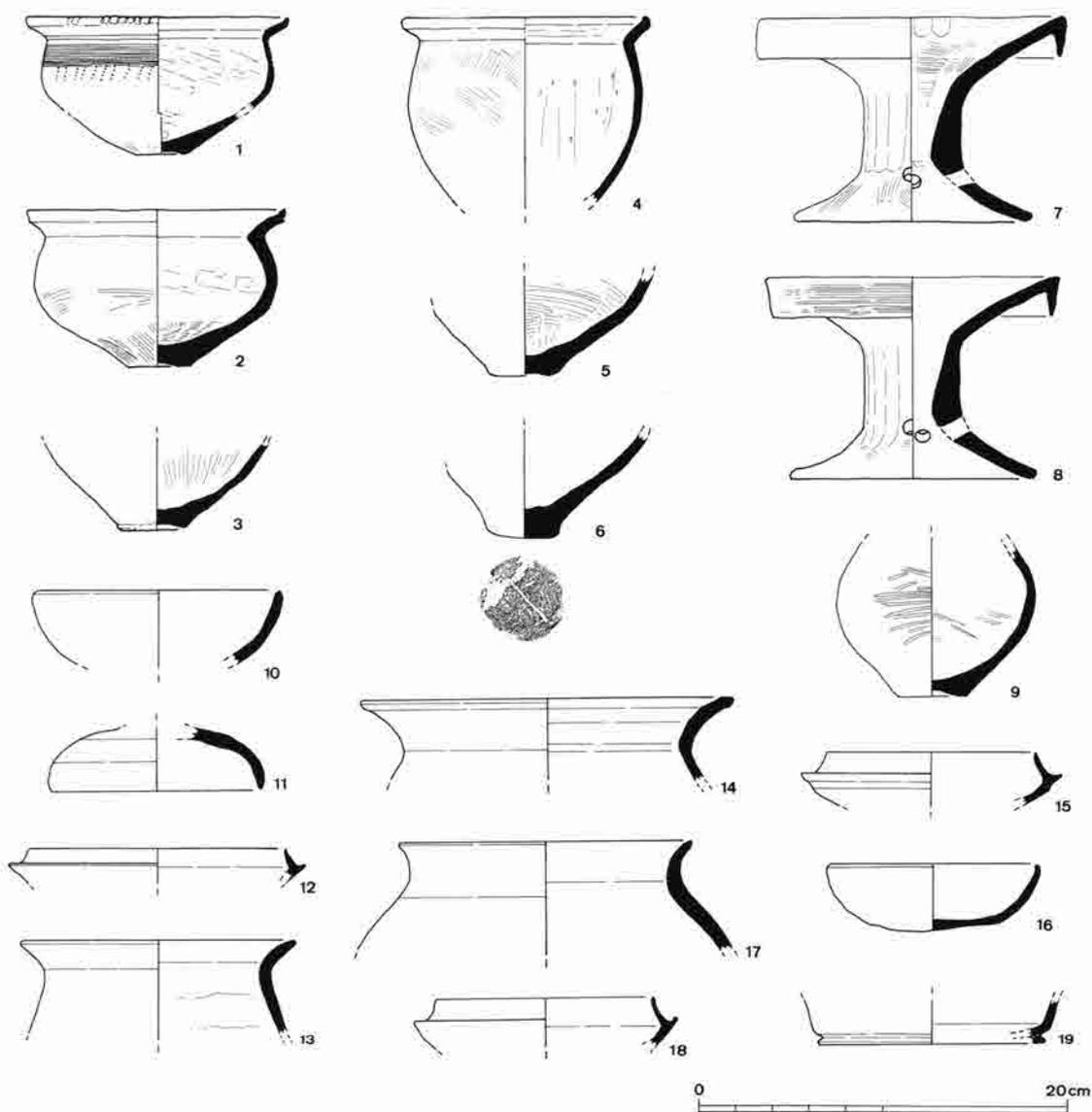
第17図 池上遺跡第15次調査第1・2トレンチ遺構実測図

～1.0mの円形を呈し、柱当たりは、直径で約0.2mを測る。柱心々は、東よりそれぞれ約2.0・1.75・1.75mを測る。掘形内埋土は、いずれも同様な礫混じりの粘質土で構成されている。検出したのは4柱穴のみであるが、周辺の調査成果からもこの柵列については、掘立柱建物跡の一部である可能性が考えられる。

不明遺構 S X127 トレンチ西端で検出した円弧を描く遺構である。南端の一部を検出したが、大部分はトレンチ以北にあるため未調査である。検出部から掘形は直径約5mの円形と想定される。北壁で見る断面形は、浅いすり鉢状を呈し、深さは最深部で約0.3mを測る。灰褐色粘砂・暗黄茶褐色粘砂・暗黄灰褐色粘砂で埋まっていた。埋土中から、古墳時代の土師器・須恵器片が出土している。

②第2トレンチ(第17図)

包含層がなく、耕作土直下が遺構検出面であり遺構の残りがさわめて悪かった。

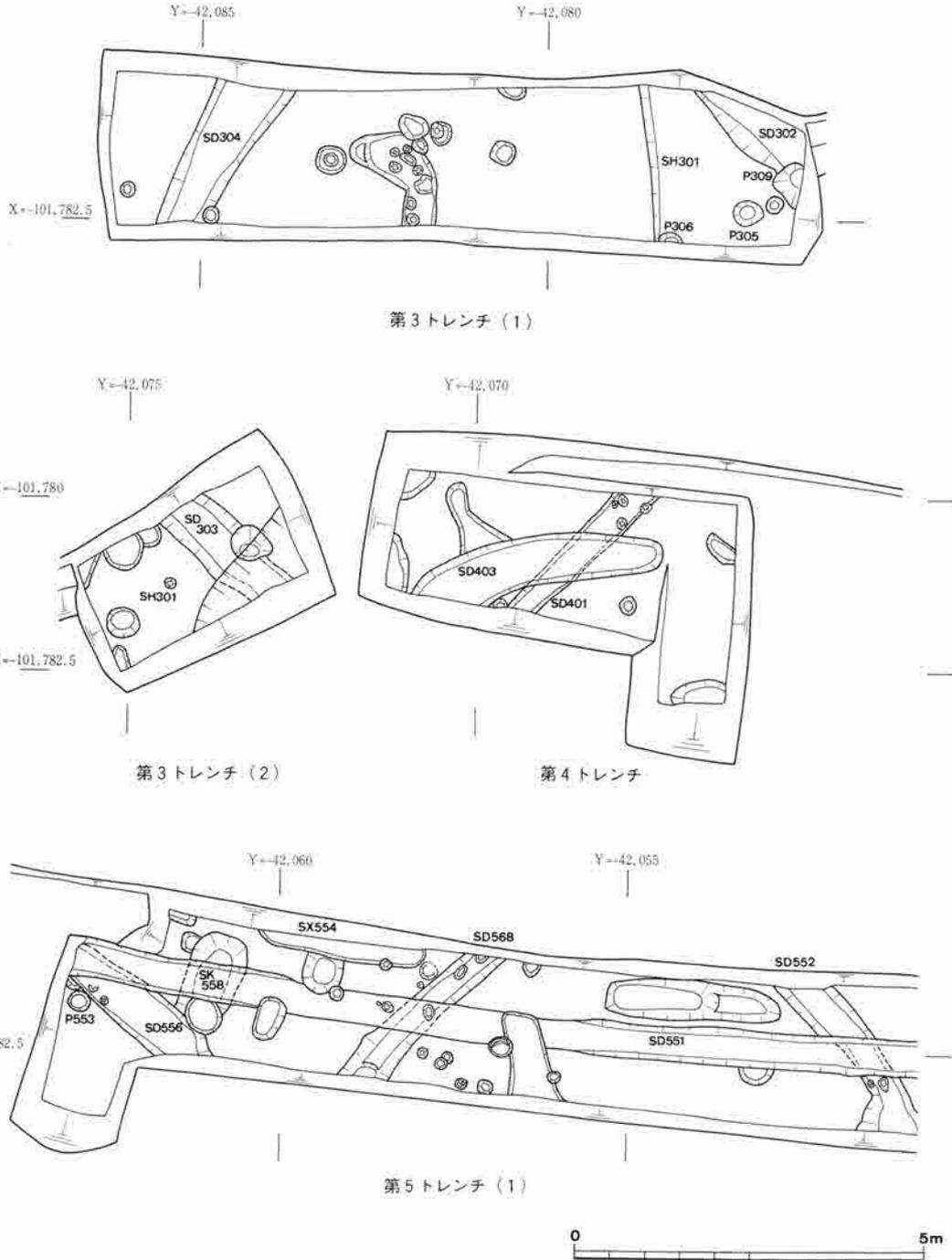


第18図 池上遺跡第15次調査第1トレンチ出土遺物

1～8. S K113 9. P135 10～14. S H122 15. S K103 19. S K112 16～18. 包含層

**竪穴式住居跡 S H 203** トレンチ東半で検出した古墳時代の竪穴式住居跡である。北西辺部および南半部はトレンチ外である。検出部分から、平面形は一辺約5mの方形と想定され、主軸はN30°Eである。残りはきわめて悪く、床面の大部分は後世の削平によって消失する。住居跡の北半部中央で直径約0.5mの円形の焼土痕を検出しており、この住居跡に伴う可能性が考えられる。埋土中からは、図化できるような遺物は出土しなかったが、碎片から古墳時代とした。

**溝 S D 202** トレンチ東端で検出した溝である。南北に弧状にめぐるので、東肩部はトレンチ外のため未検出である。検出部の断面形は、浅い皿状を呈し、深さは最深部で約0.1mを測る。



第19図 池上遺跡第15次調査第3～5トレンチ遺構実測図

周辺の遺構のあり方から、方形周溝墓の周溝の一部の可能性が指摘できる。

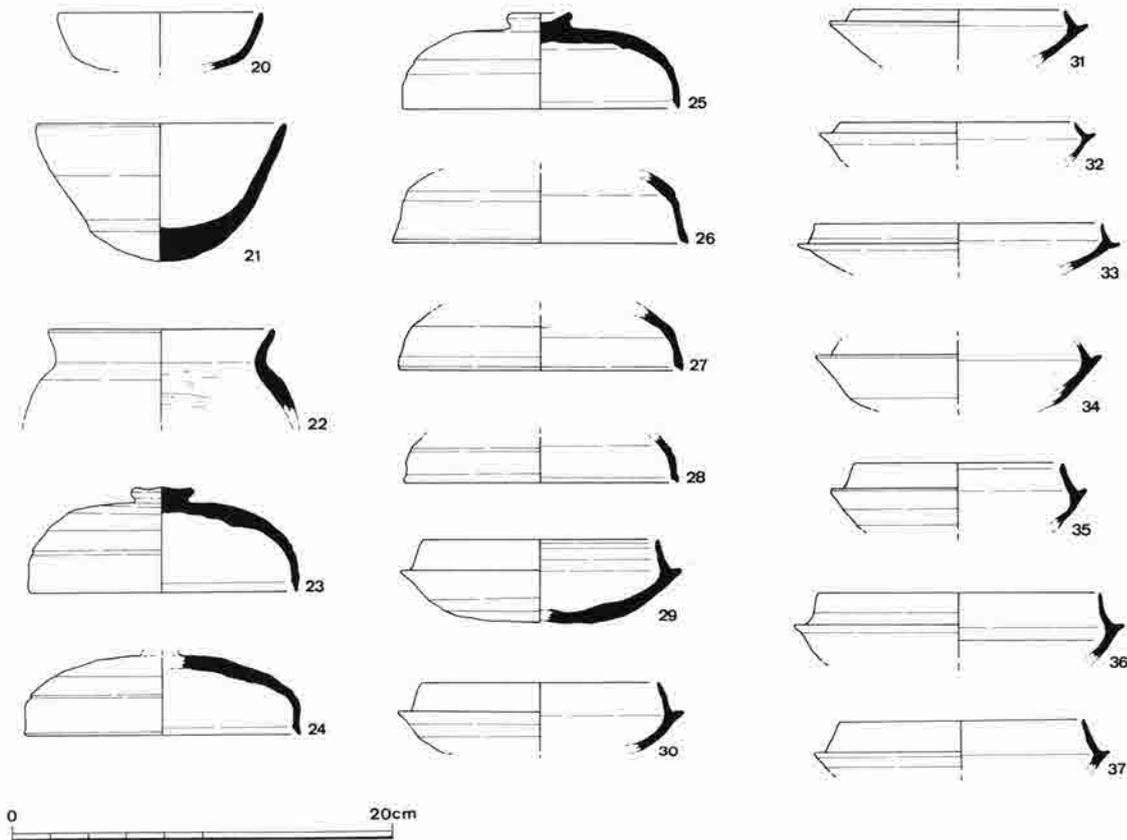
③第3トレンチ(第19図)

現在の農道の部分にトレンチが設定されたため、分厚い盛土層が確認できた。トレンチは西と南の2つの部分に分かれている。

**竪穴式住居跡 S H 301** トレンチ東半で検出した竪穴式住居跡である。西肩の一部を検出したのみで、ほかの部分はトレンチ外のため未調査である。規模は不明であるが、この肩部が直進することから方形の平面形を呈すると考えられる。東半部では、円形を呈する焼土痕を2か所検出し、それらの周辺から土器がまとまって出土した。西半部では、この住居跡は掘形が二段掘りとなり、二段目は直角のコーナー部を南西部にもった掘り込みである。外側の外形をもつ住居跡を完掘すると、内側の住居痕跡はなくなった。出土遺物(第20図20・21・23・25~37)の須恵器を見ると2群に分かれる可能性があり、時期差が認められる。

**溝 S D 302** S H 301の西部分の床面で検出した溝である。溝は、北西~南東方向に斜行し、東肩部分はトレンチ外のため未検出である。検出長は肩部で約2m、深さは最深部で約0.3mを測る。暗茶褐色粘砂で埋もれている。埋土からは土師質の土器片が出土した。

**溝 S D 303** S H 301の東部分の床面で検出した溝である。北西~南東方向に斜行し、検出長約2m、幅約1.1m、深さは最深部で約0.4mを測る。北端と南端はトレンチ外にのびる。南東部は中世の遺構により削平を受けているが底部は遺存する。断面形は逆台形を呈し、黒褐色粘砂質



第20図 池上遺跡第15次調査第3トレンチ出土遺物  
22・24, P 309 (そのほかは、S H 301出土)

土・暗灰褐色粘砂質土で埋もれている。埋土内からは、時期の分かる遺物の出土はなかった。

溝 S D 304 トレンチ西端で検出した溝である。北東～南西方向に斜行し、検出長約 2 m、幅 0.8m、深さ 0.2m を測る。断面は「U」字形を呈し、暗褐色粘砂質土で埋もれている。埋土内からは、時期の分かる遺物の出土はなかった。

#### ④第 4 トレンチ(第 19 図)

溝 S D 401 トレンチ中央で検出した溝である。北東～南西方向に斜行し、北端・南端はそれぞれトレンチ外にのびる。S D 403 に切られる。検出長約 2.5m、幅 0.5m、深さ約 0.1m を測る。断面は浅い皿状を呈し、黒褐色粘質土を埋土とする。出土遺物がないため正確な時期は不明であるが、溝の方向や埋土の特徴から、弥生時代の方形周溝墓の周溝であると推測される。

溝 S D 403 トレンチ中央で検出した溝である。東端は攪乱により失われている。溝はトレンチ西半で南よりに弧を描いて屈曲し、トレンチ外に延伸する。途中先行する溝 S D 401 を切る。幅約 0.7m、深さ約 0.06m、検出長は約 3.5m を測る。断面は浅い皿状を呈し、礫混じりの茶灰色砂で埋まる。溝は埋土や位置関係から、隣接する第 5 トレンチの溝 S D 551 の一部である可能性が考えられる。埋土からは遺物は出土しなかった。

#### ⑤第 5 トレンチ(第 19・21 図)

第 5 トレンチは、「L」字状を呈した調査区である。南端は方形周溝墓が多く検出できた第 13 次調査区と近接する。現有の農道部分を除くと、床土直下で遺構が検出できた。

##### 弥生時代

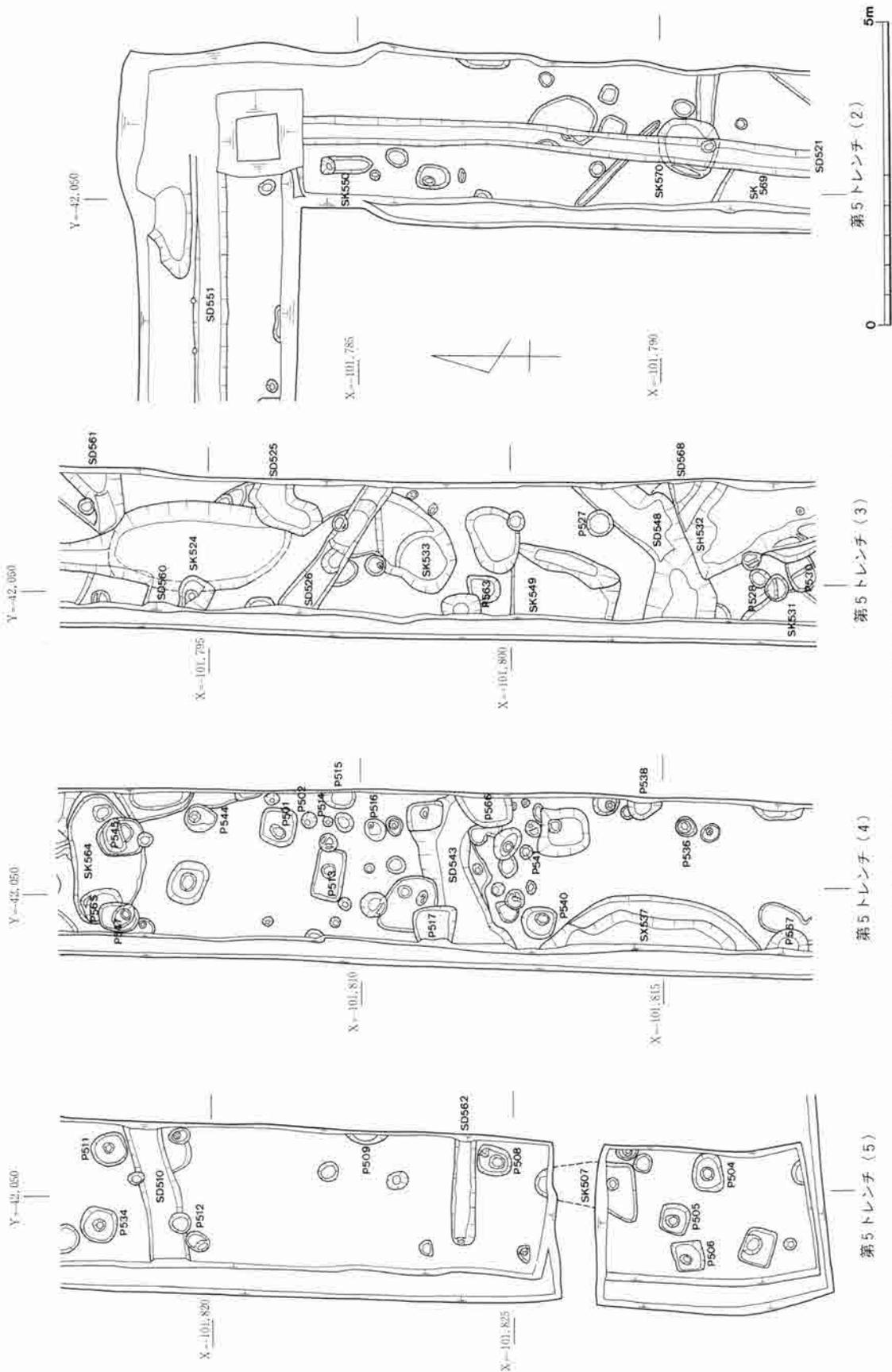
溝 S D 552 第 5 トレンチ東半で検出した溝である。北西～南東方向に斜行し、南壁付近で南西方向に屈曲する。北端と南端はトレンチ外に延伸する。中央部は S D 551 に切られる。検出長約 2.7m、幅 0.15～0.25m、深さ 0.25m を測る。断面形は逆台形で、暗褐色粘砂質土・黒褐色粘質土で埋まる。溝内からは、第 22 図 41～43 が出土した。

溝 S D 556 第 5 トレンチ西端で検出した溝である。北西～南東方向に斜行し、北端と南端はトレンチ外にのびる。北端は S D 551 に切られる。方形周溝墓の周溝と考えられる。検出長約 2 m、幅 0.7m、深さ 0.3m を測る。断面はコーナーが丸みをおびた逆台形を呈し、暗褐色粘砂・暗茶褐色粘砂・黒褐色粘砂質土を埋土とする。

溝 S D 568 第 5 トレンチ西半で検出した溝である。北東～南西方向に斜行し、北端と南端はトレンチ外に延伸する。中央部は S D 551 に切られる。検出長約 2.5m、幅 0.5m、深さ約 0.3m を測る。埋土は黒褐色粘砂質土・緑灰色砂質土である。

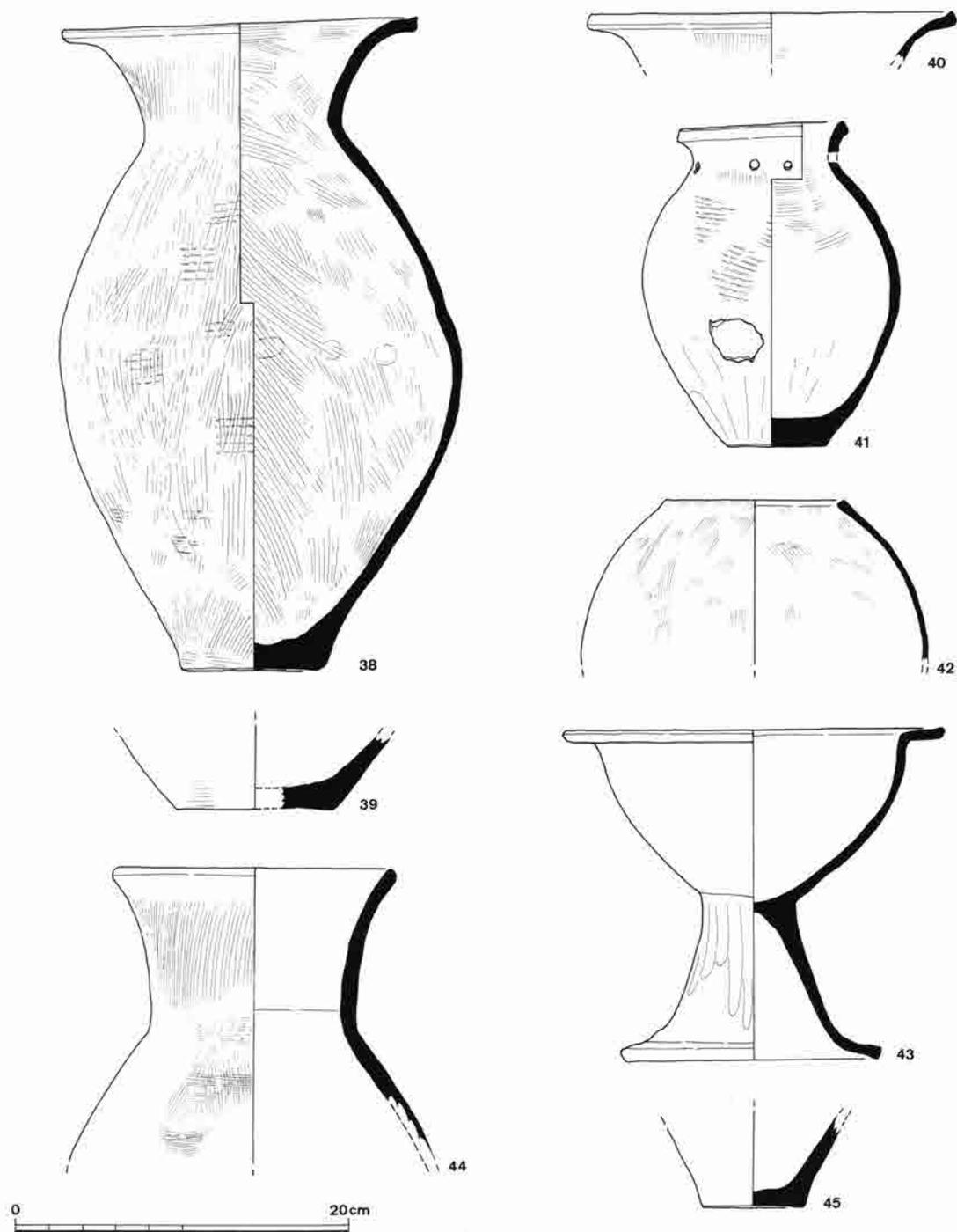
以上の各トレンチで検出した溝の内、S D 303 と S D 401、S D 401 と S D 556、S D 556 と S D 568 は、主軸で見て互いに直交関係にあり、S D 522 と S D 568 は平行関係にある。また、各断面形も、概ね逆台形の形状をなしている。さらに埋土も、各溝底部付近では同様な黒褐色の粘質土・砂質土で構成されており、掘削の時期差はあるものの、互いに接続し合った一連の溝と考えられる。

これらの溝については、想定される形状や周辺の調査成果から、方形周溝墓を構成する周溝の



一部である可能性を考えておきたい。なお、これら周溝墓の墳丘部からは、いずれも主体部は検出できなかった。

溝S D510 南北トレンチで検出した溝である。東北東～西南西方向に斜行し、東端と西端はトレンチ外にのびる。検出長約2.3m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。断面はコーナーが丸みをおびた逆台形だが、底～北肩部の立ち上がりはややゆるやかとなる。暗褐色・暗灰褐色粘砂で埋まる。溝内からは第22図38・39が出土した。



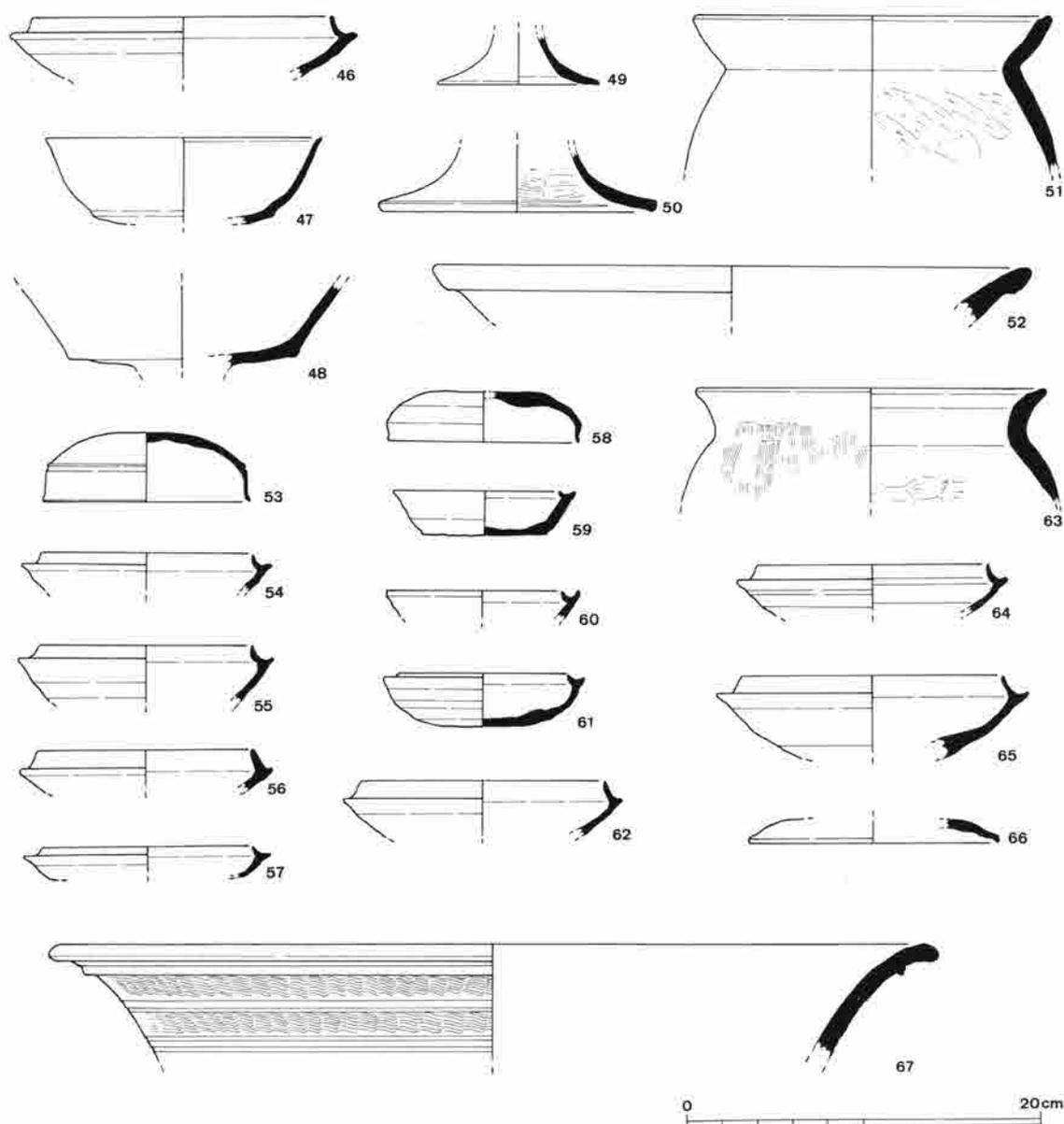
第22図 池上遺跡第15次調査第5トレンチ出土遺物(1)

38・39, S D510 40, S D543 41~43, S D552 44・45, 包含層

溝S D526 第5トレンチ北半で検出した溝である。西北西～東南東に斜行し、東端・西端はトレンチ外にのびる。検出長約2.5m、幅0.5m、深さ0.16mを測る。断面は概ねゆるやかな「U」字形だが、底～北肩部ではラインは途中で外反し、立ち上がりはさらにゆるやかとなる。暗灰～暗黄褐色の粘砂・粘砂質土で埋まる。

溝S D543 第5トレンチ南半で検出した溝である。東北東～西南西方向に斜行し、東端と西端はトレンチ外にのびる。検出長約2.5m、幅0.8～1.2m、深さ0.4mを測る。断面は概ね「U」字形だが、底～北肩部のラインの立ち上がりはゆるやかである。暗褐色粘砂・黒褐色粘質土で埋まる。溝内からは、第22図40、第23図66が出土した。第36図171の粘板岩製石器も出土している。

溝S D548 南北トレンチ中央で検出した溝である。北東～南西方向に蛇行し、東端と西端は



第23図 池上遺跡第15次調査第5トレンチ出土遺物(2)

- |                  |            |            |               |           |
|------------------|------------|------------|---------------|-----------|
| 46～52. S H532    | 53. S D521 | 55. S D548 | 56. S D549    | 57. P 517 |
| 58～61・63. S K537 | 62. P 563  | 66. S D543 | 64・65・67. 包含層 |           |

トレンチ外にのびる。東壁付近ではS D568を切る。検出長約2.5m、幅0.5～0.9m、深さ0.2mを測る。断面はコーナーが丸みをおびた逆台形を呈し、暗灰褐色粘砂質土で埋まる。溝内からは第23図55が出土した。

**溝S D568** 第5トレンチ南北方向の中央で検出した溝である。北西～南東方向に斜行し、北端はS D548に切られ、南端はS H532に切られる。溝はS D548を越えて北西方向には延伸しない。検出長約2.1m、幅1.2m、深さはS H532との重複部で0.25mを測る。断面はゆるやかな「U」字形を呈し、黒褐色粘砂・黒茶褐色粘質土で埋まる。

以上、第5トレンチ南北方向地区の溝の内、S D526とS D548、S D548とS D568、S D568とS D543は主軸で見ても互いに直交関係にあり、S D510とS D543は平行関係にある。溝内の埋土は、S D526とS D548で暗灰褐色系の粘砂・粘砂質土、S D568とS D543(下層)で黒褐色系の粘砂・粘質土、S D543(上層)とS D510で暗(灰)褐色の粘砂であり、溝の各組は、ほぼ同様の埋土に対応する。上記の第3～5東西トレンチの溝で見ると同様に、これらの溝についても方形周溝墓の周溝の一部である可能性が考えられる。その場合、S D526とS D548で1基、S D543とS D568で1基、S D510とS D543で1基の、計3基の墓の存在が想定される。なお、主体部については各墳丘部内は土坑・ピットが密に切り合い、多くがトレンチ外にかかるため、いずれが該当するかは判然としない。

#### 古墳時代

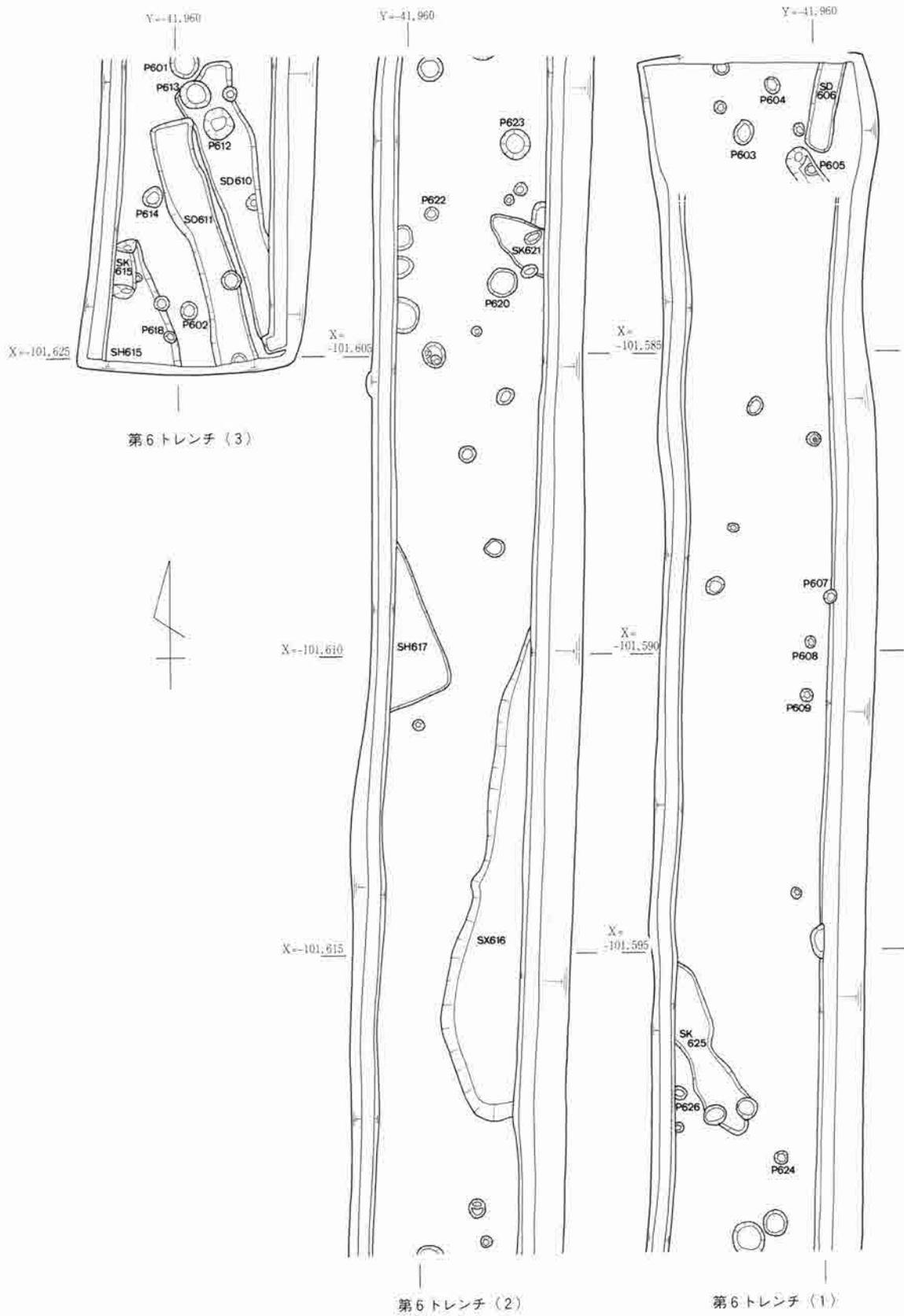
**竪穴式住居跡S H532** 南北トレンチ中央で検出した竪穴式住居跡である。北半部はS D568を切る。北西のコーナー周辺部を検出したのみで、大部分はトレンチ東壁にかかるため未調査である。検出部から一辺約3.5m以上の方形を呈し、主軸はN25°Wである。壁高は約0.2mを測る。暗褐色粘砂質土で埋まる。埋土からは土器(第23図46～52)が出土した。

**土坑S K537** 南北トレンチ南半で検出した土坑である。東端の一部を検出したのみで、大部分はトレンチ外にあるため未調査である。検出部から直径約4mの円形を呈すると想定される。西壁で見る断面形は、概ね浅い皿状を呈するが、掘形の外形ラインは途中、傾斜変換して落ち込み、水平な底部に連なる。おもに暗茶褐色粘砂・暗褐色粘砂で埋まる。土坑内からは、第23図58～61・63が出土した。

#### 平安時代以降

**溝S D521** 南北方向の部分で検出した南北方向にのびる溝である。北端は測量杭の設置場所にあたるため未調査である。また、南端は土坑S K524に重複し、この土坑以南には延伸しない。幅約0.5m、深さ0.2m、検出長9mを測り、礫混じりの淡灰褐色砂質土で埋まる。溝内からは第23図53とともに磨滅した瓦器や奈良～平安時代の須恵器片などが出土している。

**溝S D551** 東西方向の部分で検出した東西方向にのびる溝である。幅約0.5m、深さ0.2m、検出長16mを測り、暗灰褐色粘砂質土で埋まる。溝内からは磨滅した瓦器や奈良～平安時代の須恵器片などが出土している。現農道の下には、平安時代以降の時期に区画された溝が、現在の畦畔の方向と同方向に穿たれていたことが分かった。



第24図 池上遺跡第15次調査第6トレンチ遺構実測図

⑥第6トレンチ(第24図)

弥生時代

溝S D606 調査区北端で検出した斜行する溝である。埋土は黒褐色の粘質土である。用水路を挟んで近接する第5次調査第1トレンチの溝S D01の続きになるものと想定される。第5次調査では、弥生時代中期の遺物が出土している。

柱穴P 605 弥生時代の柱穴と考えられる遺構で、弥生時代中期の壺口縁部(第25図68)が出土している。

柱穴P 608 弥生時代の柱穴と考えられる遺構で、弥生時代中期の甕口縁部(第25図69)が出土している。

古墳時代

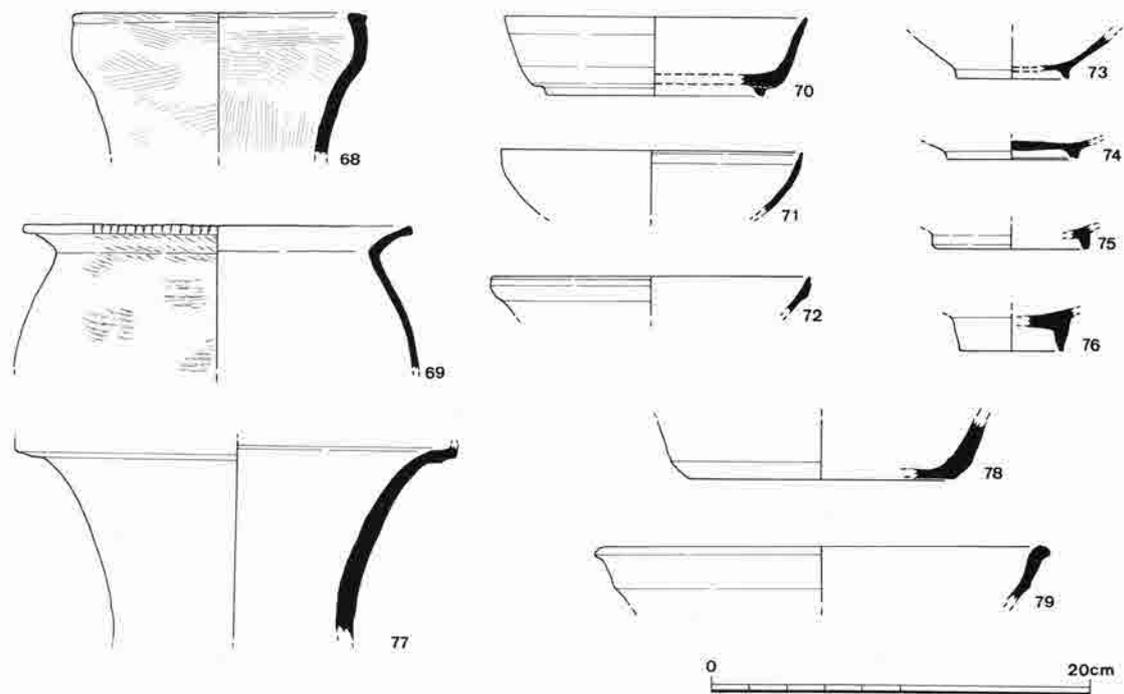
竪穴式住居跡S H617 トレンチ西辺で、南東隅部だけが検出された遺構である。平面が方形を呈する竪穴式住居跡と考えられる。出土遺物は、ごくわずかであるが土師器の小片がある。周囲の状況から考えると古墳時代後期の住居跡と想定できる。

奈良時代以降

落ち込み状遺構S X616 不定形の落ち込み状遺構である。深さは0.1mで、礫混じりの埋土であった。出土遺物は、瓦器椀(第25図71・73・74)、白磁椀(第25図72・76)、須恵器(第25図78・79)、灰釉陶器(第25図75)、刀子(第37図177)がある。

溝S D610 トレンチ南端で検出した溝である。これに平行して溝S D611が存在する。深さは深い所で0.1m程度である。出土遺物には、第25図70の奈良時代の須恵器杯Bがある。

⑦第7トレンチ(第26図)



第25図 池上遺跡第15次調査第6トレンチ出土遺物

68. P605 69. P608 70. S D610 71~79. S X616

東西方向に長いトレンチで、西端は京都府教育委員会が実施した第14次調査区と接する。

#### 弥生時代

**溝 S D 739** トレンチ西端部で検出した南北方向の溝である。S X 742の掘削の後、検出した遺構で、検出面からの深さは約0.25mである。埋土は黒褐色粘質土である。この溝からは多くの遺物が出土した。第27図80は完形の状態で出土した壺である。第37図173は石斧の破損品の下端部に研磨痕をもつ。第27図81・82・84は、S X 742の掘削中に出土した遺物であるが、本来はこの遺構に属していたものと想定される。

**土坑 S K 711** 複雑に切り合う土坑の一つである。埋土内からは弥生時代の甕と底部(第27図91・93)が出土している。

**土坑 S K 714** 遺構の南部のみが検出できた土坑である。検出面からの深さは約0.2mである。埋土内からは、弥生土器(第27図83・85・86・89・90)、粘板岩製石斧(第36図170)が出土している。

**柱穴 P 731** 平面形が円形を呈する柱穴である。壺の口縁部(第27図92)が出土している。

**柱穴 P 749** 古墳時代の住居跡床面で検出した柱穴である。出土遺物には第27図88がある。底部には木葉圧痕が認められる。時期は確定できないが木葉圧痕の存在から弥生時代とした。

このほか、P 753からは第36図162の粘板岩製の石器が出土している。P 754からは第37図175が出土している。包含層出土遺物には、第27図87・97、第36図159(サヌカイト)・161、第37図174がある。

#### 古墳時代

**竪穴式住居跡 S H 715** トレンチ内で南部のみが検出された竪穴式住居跡である。南辺の長さ約3.8m、深さ約0.1mである。出土遺物には須恵器の甕体部片がある。チャート製石鏃第36図158が出土している。

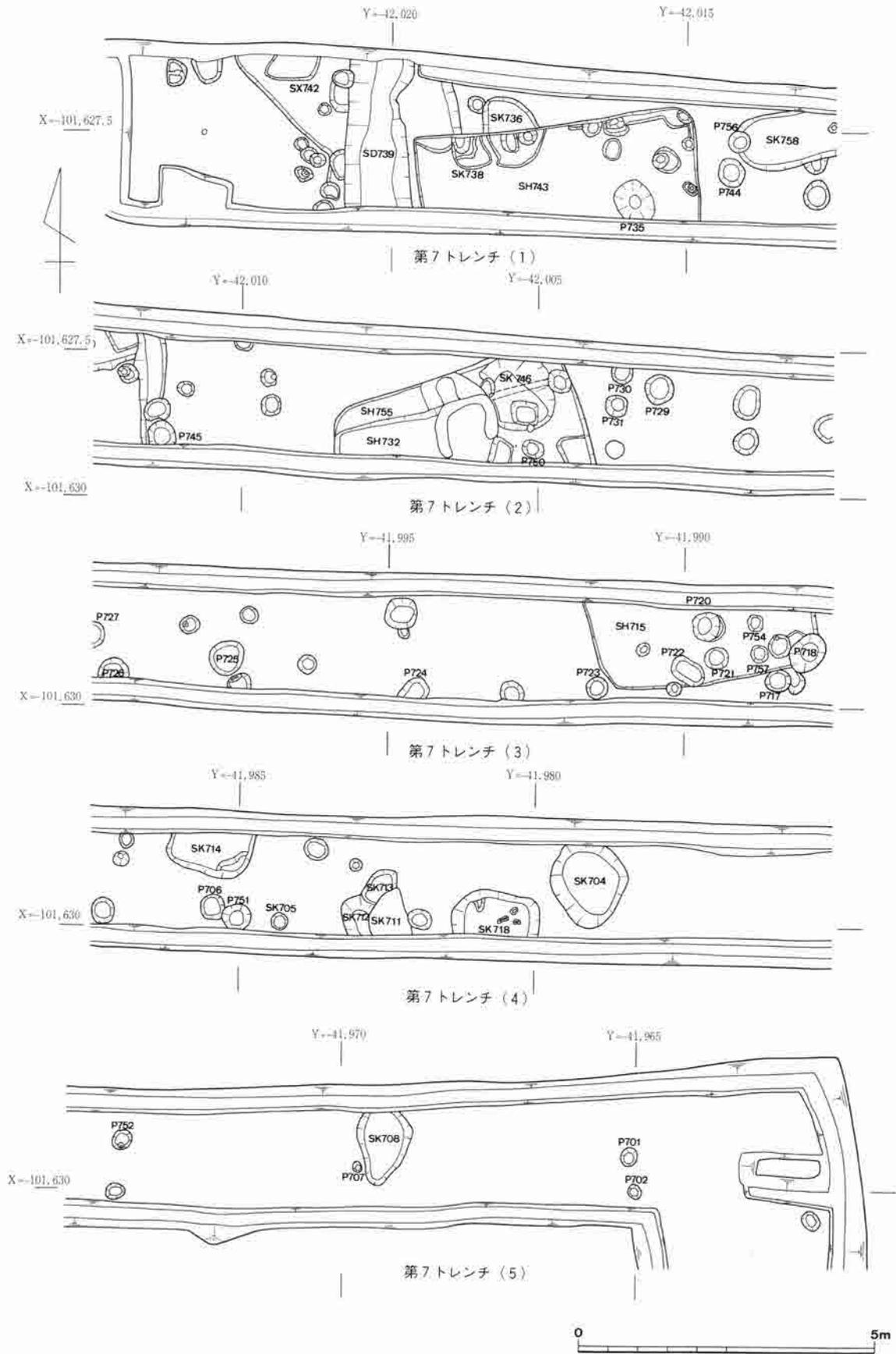
**竪穴式住居跡 S H 732** S H 755を切る竪穴式住居跡の北辺部で、北辺中央には大形の竈が検出されている。竈は馬蹄形に内側に開く平面を検出したが、削平のため構造は明かにできなかった。北辺は長さ4m、検出面からの深さは0.2mである。埋土中からは土師器の甕(第27図96)のほか、竈から6世紀前半の杯蓋片が出土している。

**竪穴式住居跡 S H 755** S H 732に先行する竪穴式住居跡である。北辺中央には竈が検出されている。竈は馬蹄形に内側に開く平面を検出したが削平のため構造は明かにできなかった。北辺は長さ4m、検出面からの深さは0.2mである。第27図94が出土している。

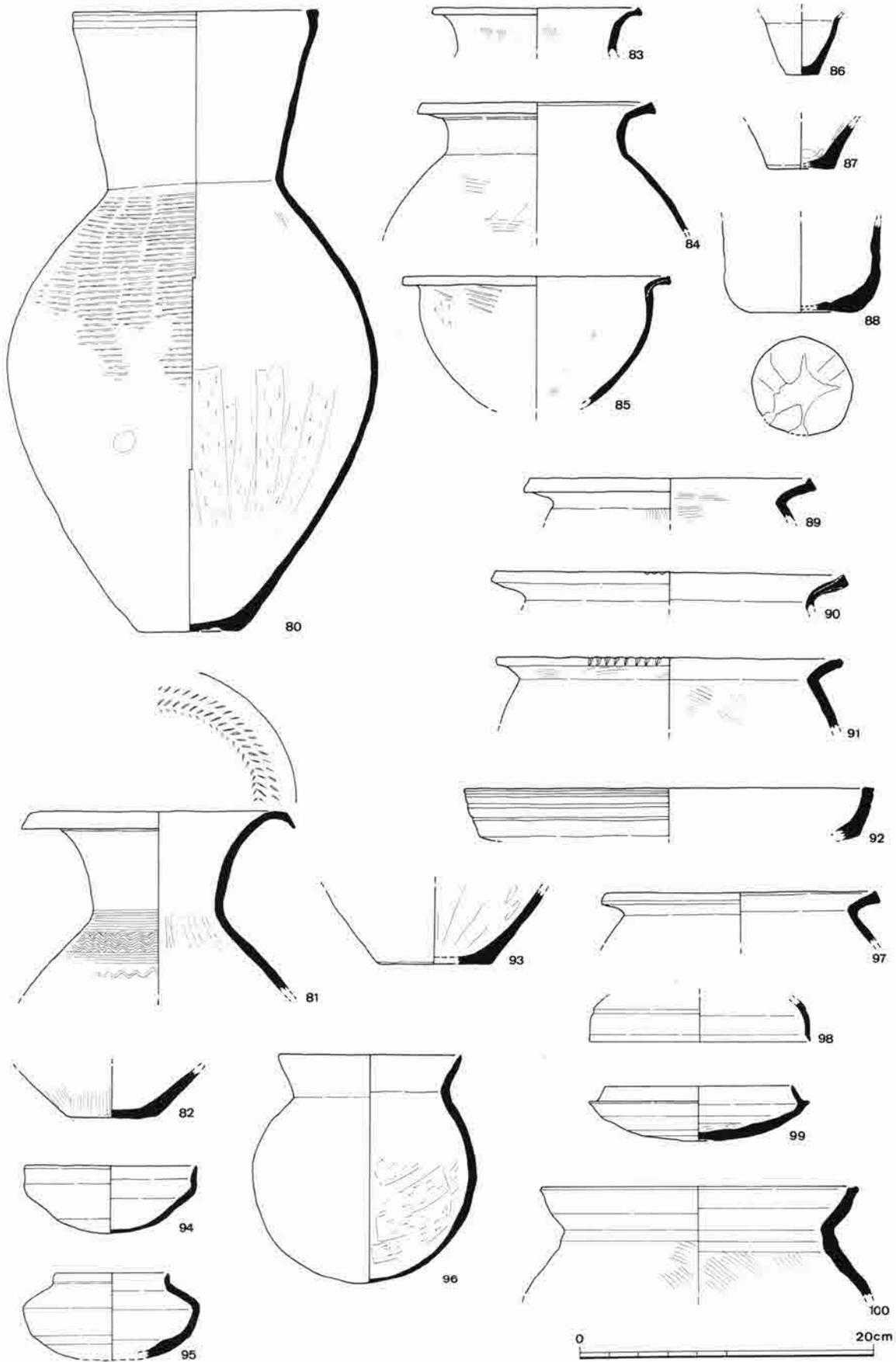
**竪穴式住居跡 S H 743** トレンチ西部で検出した方形の竪穴式住居跡である。北辺部のみの検出で、部分的に周壁溝が確認できた。北辺は約4.8mで、深さは約0.1mである。出土遺物は周壁溝部分から須恵器片が出土している。

**不明遺構 S X 742** 当初、住居跡と認識していたが、平面形が不整形であるため土坑状の不明遺構とした。床面は平らである。出土遺物には、下層の弥生時代の遺構からと考えられる弥生土器が含まれるが、第27図100の古墳時代後期の土師器甕があることから、古墳時代の遺構とした。

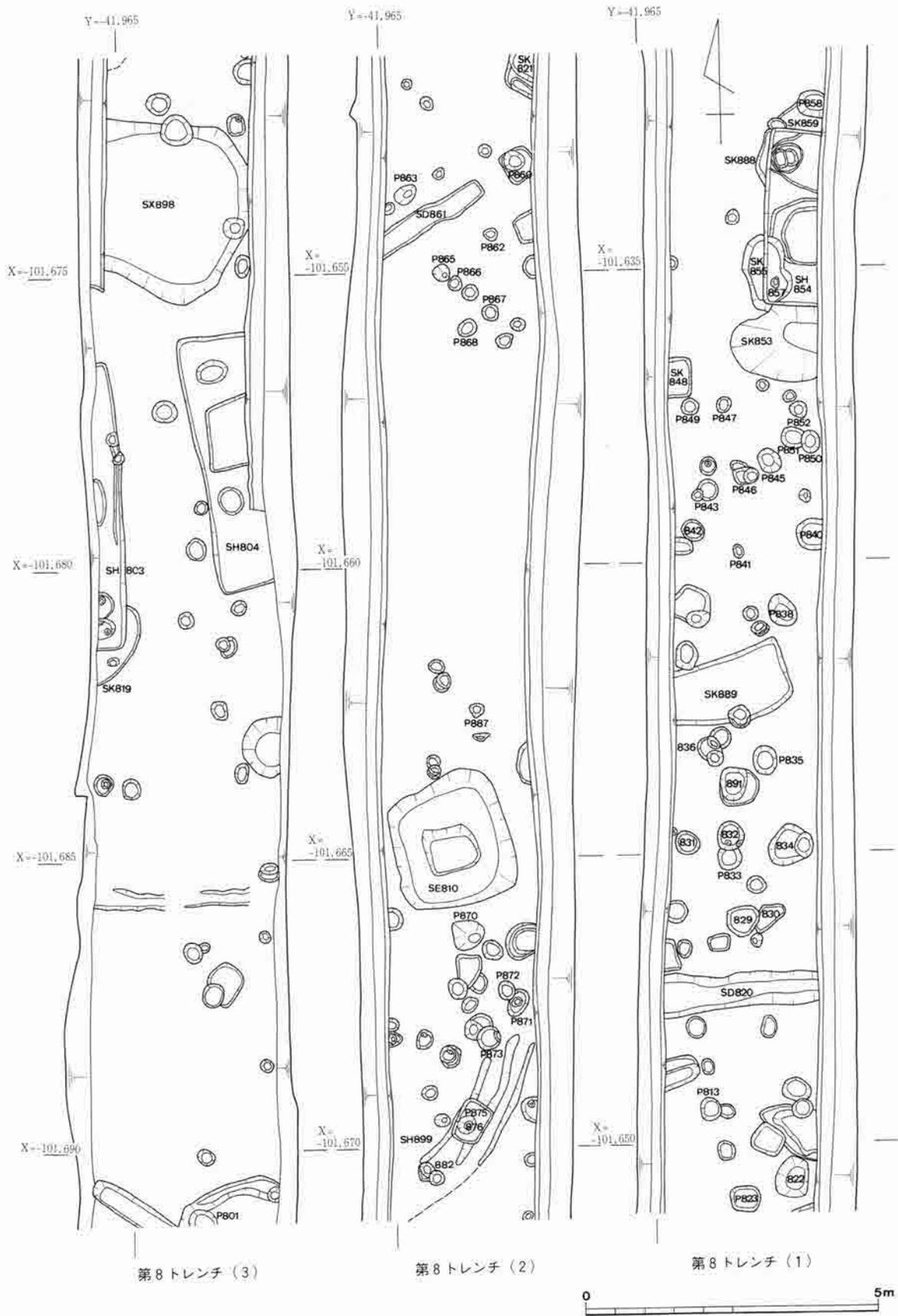
**土坑 S K 748** S H 755の床面で検出できた土坑である。住居跡に関連した遺構の可能性が指摘



第26図 池上遺跡第15次調査第7トレンチ遺構実測図



第27図 池上遺跡第15次調査第7トレンチ出土遺物



第28図 池上遺跡第15次調査第8トレンチ遺構実測図

できる。古墳時代後期の須恵器杯蓋(第27図98)が出土している。

第27図95・99は、古墳時代後期の須恵器であるが、いずれも包含層からの出土である。

⑧第8トレンチ(第28図)

弥生時代

竪穴式住居跡 S H 899 調査トレンチ中央部で南側の周壁溝のみが検出できた竪穴式住居跡である。平行して3条の溝が確認できた。建て替えによるものと考えられる。床面と考えられる部分や精査時に、弥生時代中期後葉の土器が出土した。

溝 S D 820 東西方向にのびる溝である。検出面からの深さ約0.6mで、埋土は黒褐色粘質土である。第29図101~103が出土している。

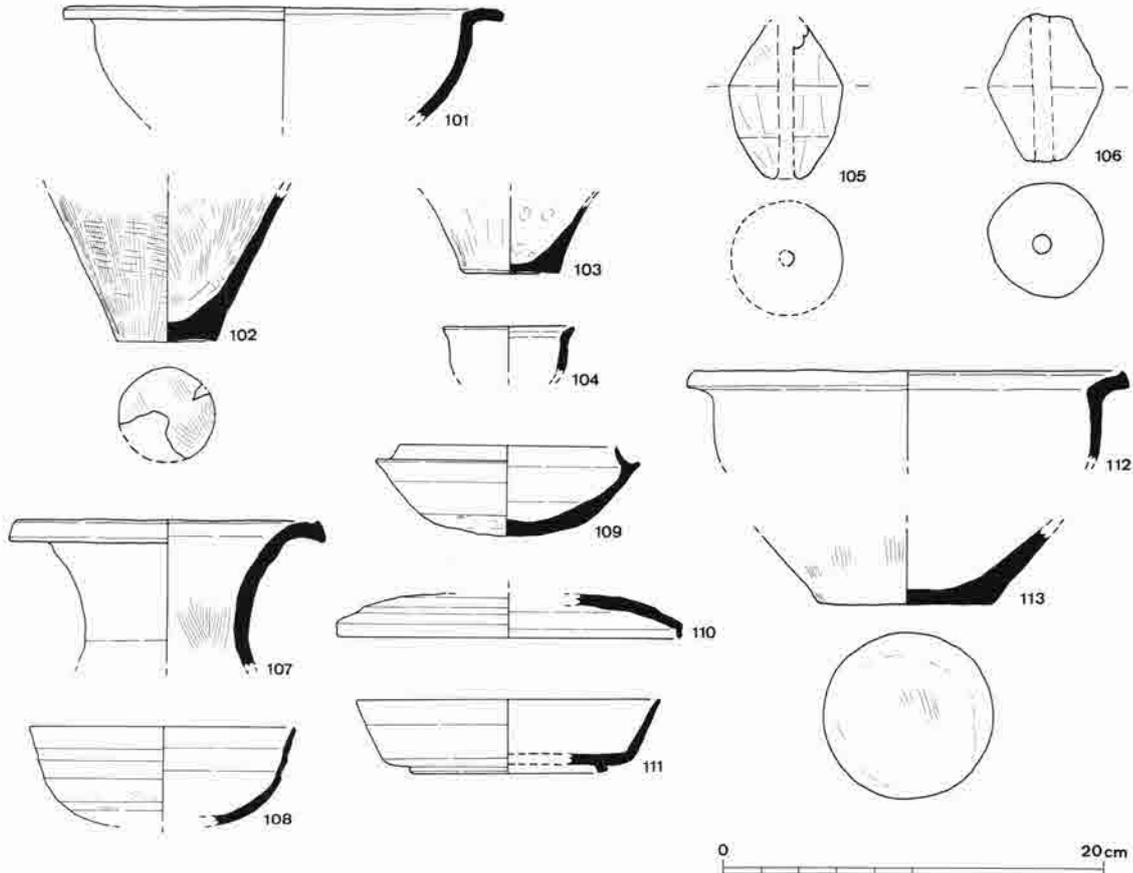
溝 S D 884 東西方向にのびる溝である。検出面からの深さ約0.2mで、埋土は黒褐色粘質土である。上面には、平安時代以降の溝 S D 885がのる。第29図107が出土している。

柱穴 P 850 調査区南辺で検出した柱穴である。第29図104や第36図167が出土している。

古墳時代

竪穴式住居跡 S H 803 東辺部のみが検出できた竪穴式住居跡である。東辺の長さ約4.8m、深さ約0.2mである。

竪穴式住居跡 S H 804 西辺部のみが検出できた竪穴式住居跡である。西辺の長さ約4.5m、深



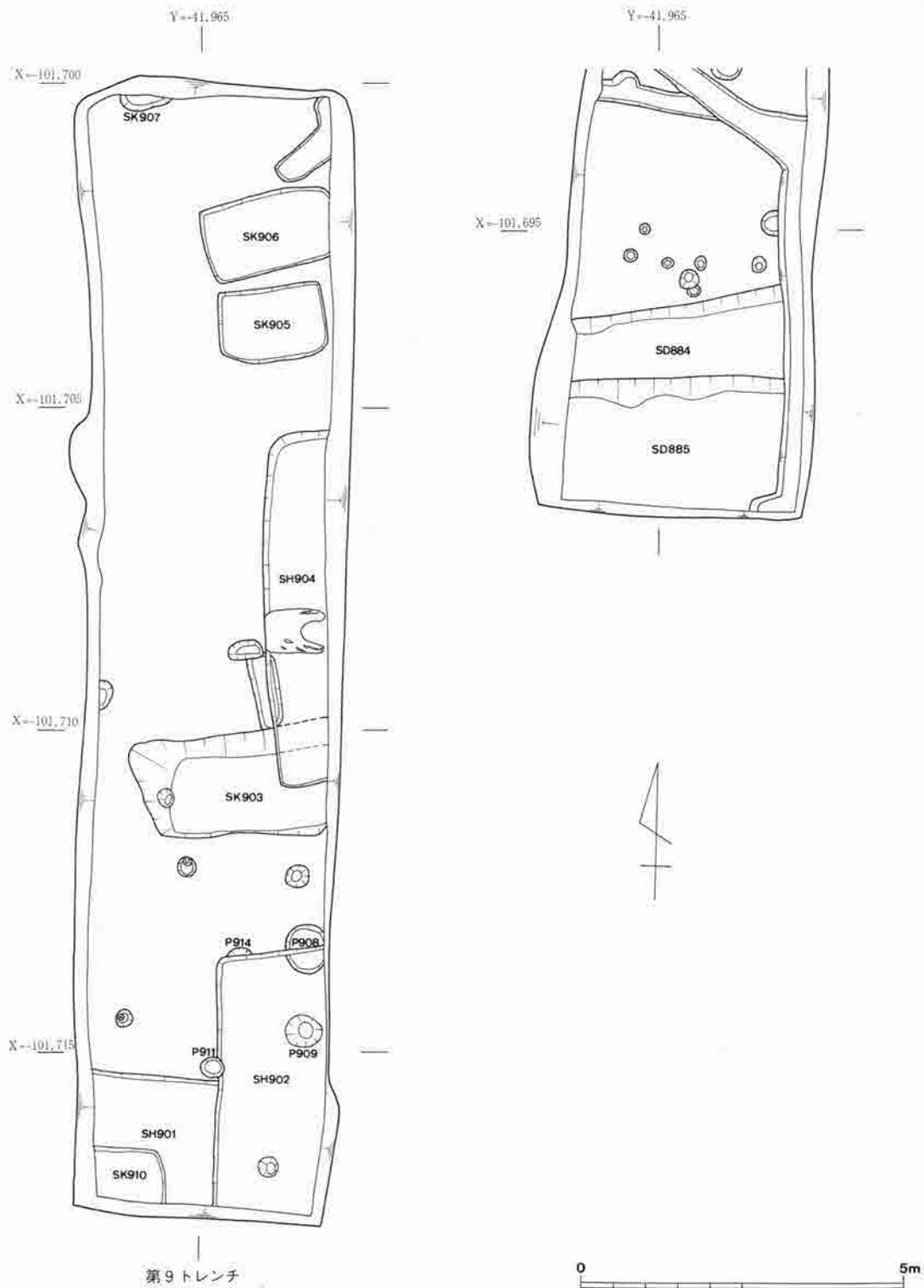
第29図 池上遺跡第15次調査第8トレンチ出土遺物

- 101~103. S D 820    104. P 850    105. S D 885    107. S D 884    109. S H 854  
 110・111. S D 810    112・113. P 850

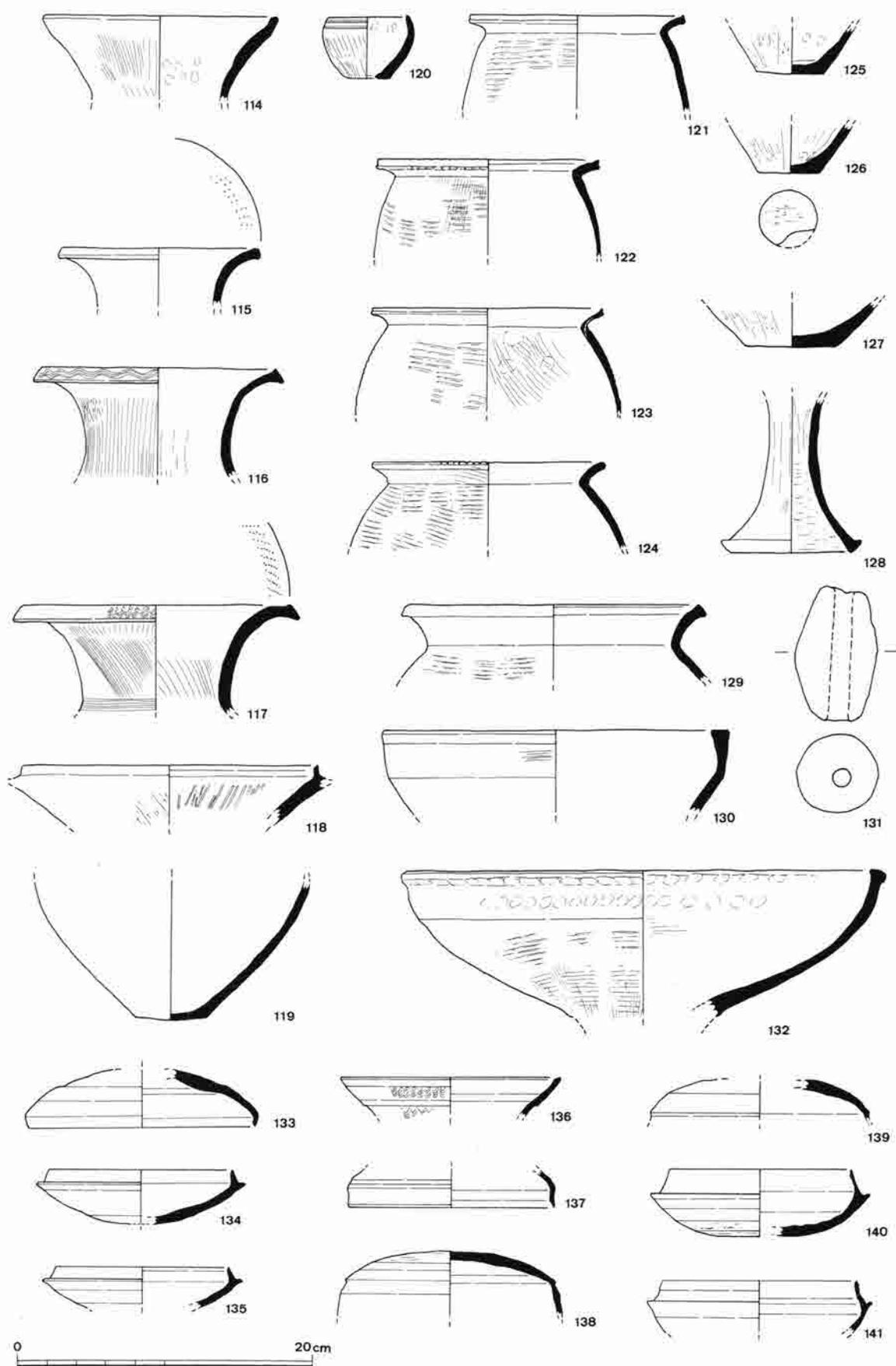
さ約0.2mである。埋土から粘板岩製の石鏃(第36図163)が出土している。

**竪穴式住居跡 S H 854** トレンチ北部で検出した竪穴式住居跡である。西側部のみが検出されている。西辺の長さ約3 m、深さ約0.15mである。サヌカイト製の石錐(第36図160)が出土している。

奈良時代以降



第30図 池上遺跡第15次調査第8・9トレンチ遺構実測図



第31図 池上遺跡第15次調査第9トレンチ出土遺物

井戸 S E 810 トレンチ中央部で検出された奈良時代の井戸である。掘形の形状は方形を呈し、その方向は真北に対して西に10°の角度をなす。井戸本体のあった部分は一辺0.9mの正形状の平面形を呈していた。検出面からの深さが約2.2mと深く、最終的には重機によって底まで掘削したが、井戸枠などは検出できなかった。第29図110・111が出土している。

溝 S D 885 S D 884上面で検出した東西方向の溝である。現在の農道直下にあり、平安時代以降のものと考えられる。幅約2m、検出面からの深さ約0.25mである。

#### 時期不明の遺構

不明遺構 S X 898 不整形の土坑状の遺構である。検出面では遺構の輪郭に沿って黒色土がまわり、掘削するにつれて中心方向に入り込む。人工的な土坑ではなく、風倒木の跡と考えられる。このような形跡は池上遺跡や野条遺跡でも確認できる。出土遺物は1点もなかった。

S K 801でサヌカイト製削器(第36図165)、P 846でサヌカイト製削器(第36図166)、P 886で粘板岩製石庖丁(第36図168)、S K 855で粘板岩製石剣(第36図164)が出土している。

#### ⑨第9 トレンチ(第30図)

##### 弥生時代

土坑 S K 903 S K 905・906と軸を同じくする土坑状の遺構である。第8 トレンチの S D 884と平行することから、方形周溝墓の溝である可能性も指摘できる。そうすれば S K 905・906は方形周溝墓の主体部の可能性が指摘できる。S K 903の断面形は「U」字状で、幅約1.6m、深さ約0.6mである。弥生土器(第31図114～132)、石斧(第37図172)が出土している。

土壙 S K 905 長方形の平面形をもつ土壙である。長さ約1.6m、幅1m、深さ0.1mである。

土壙 S K 906 長方形の平面形をもつ土壙である。長さ約2.2m、幅1m、深さ0.1mである。

##### 古墳時代

竪穴式住居跡 S H 901 トレンチ南西部で検出した床面が平らな遺構で、竪穴式住居跡と考えられる。S H 902によって壊されているため調査区内での規模の確定はできないが、第11次調査 A-3 トレンチの S H 07と同一と考えられることから、南北方向の規模は約4mである。検出面からの深さ0.08mである。

竪穴式住居跡 S H 902 トレンチ内で北西隅部が検出された竪穴式住居跡である。規模は確定できない。検出面からの深さ0.1mである。第31図133～136が出土している。

竪穴式住居跡 S H 904 トレンチ内で西辺のみを検出した竪穴式住居跡である。西辺中央部に竈があり、竈の骨材として粘板岩が「U」字状に立てられていた。粘板岩には赤色に変化したものも見られた。隣接する第5次調査の S H 263と同じであると考えられる。西辺の長さ約5.4m、検出面からの深さ0.25mである。須恵器(第31図137～141)、鉄鎌(第37図176)が出土している。

(中川和哉・中村周平)

## 2. 池上遺跡第16次

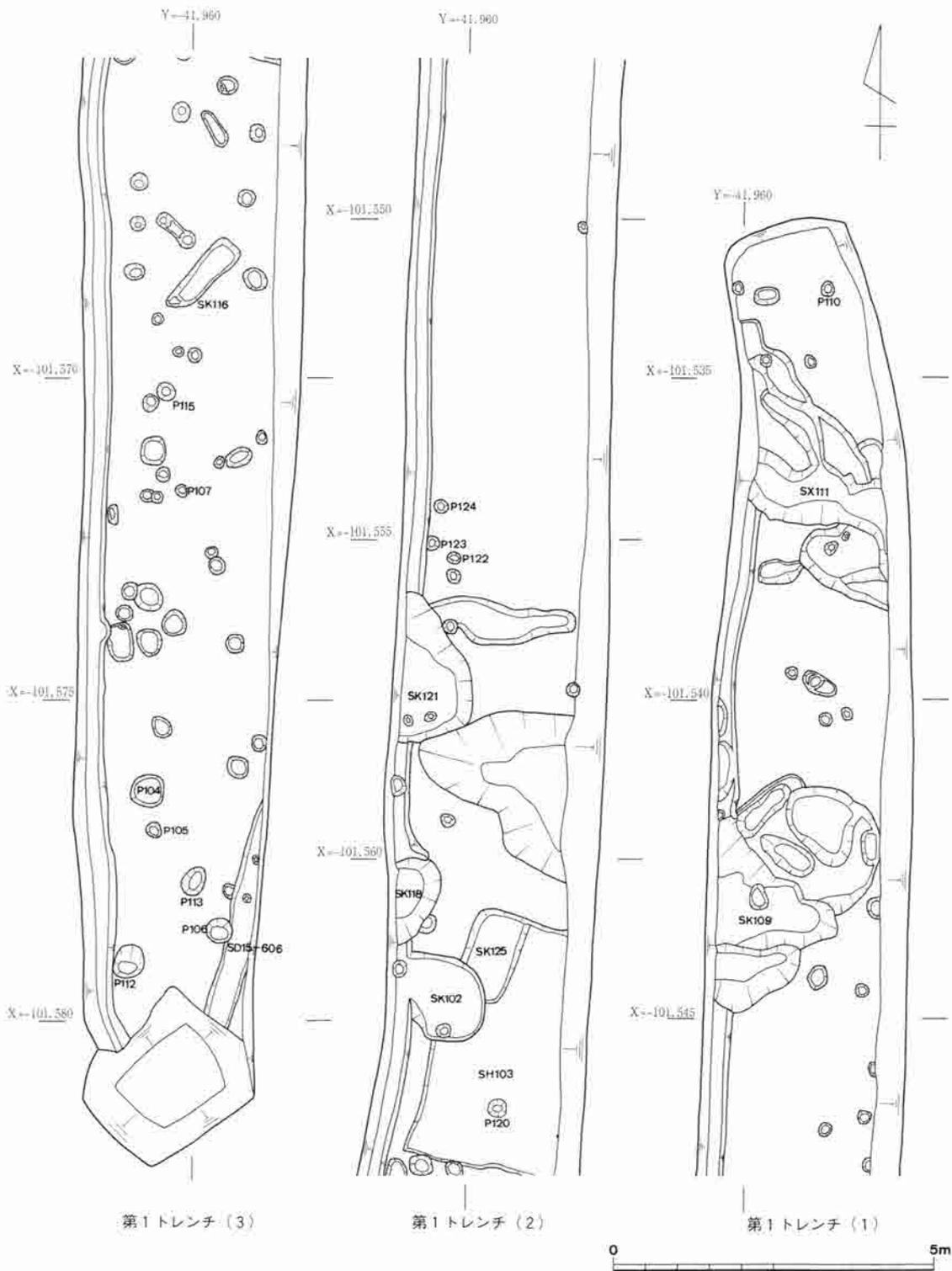
第16次調査は、第15次調査第9 トレンチ延長上の位置に設定された第1・2 トレンチと、その

北西方向に設けられた第4・5トレンチの2群に分かれる。

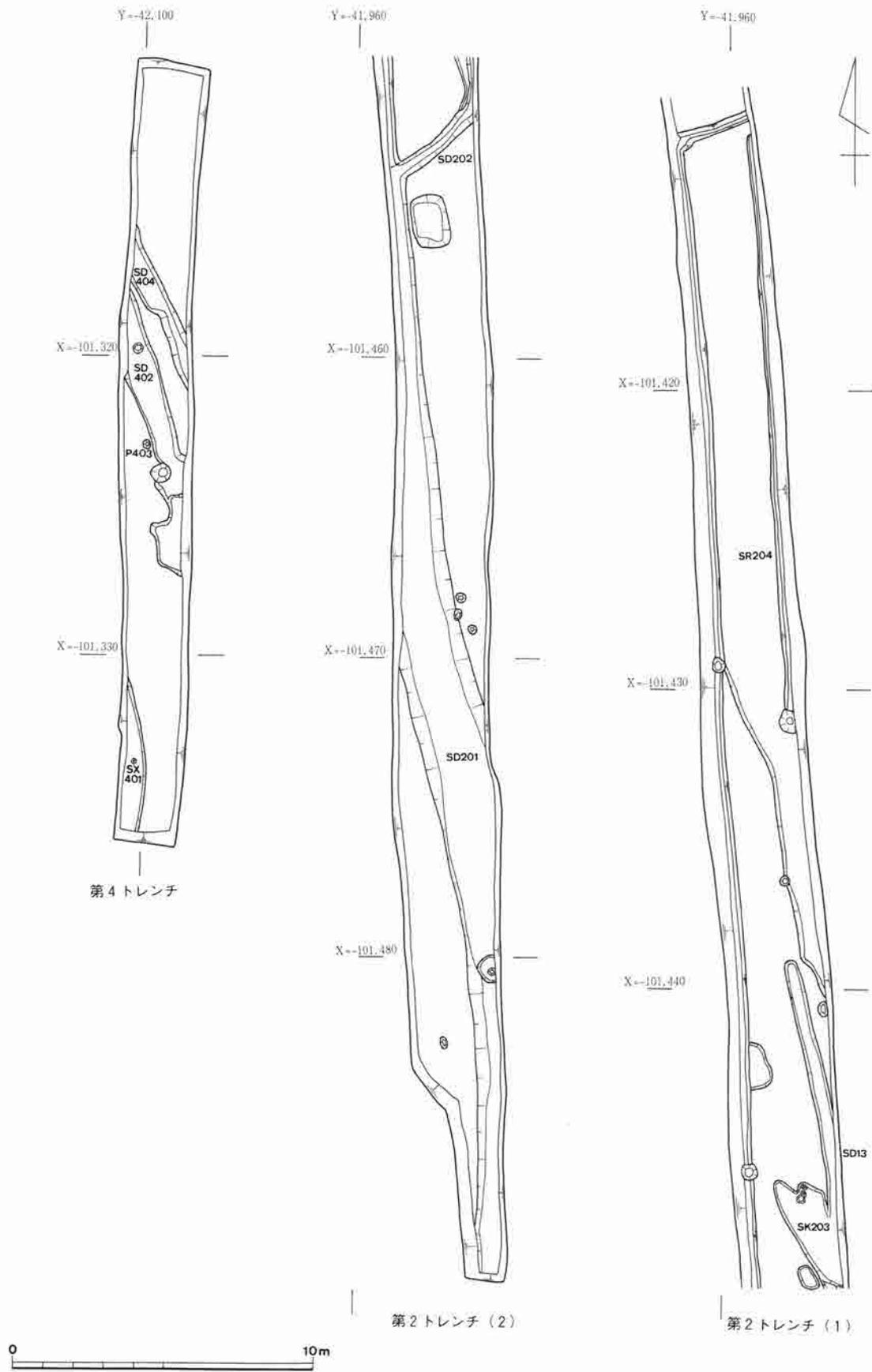
①第1トレンチ(第32図)

竪穴式住居跡SH103 西側が検出できた竪穴式住居跡である。竈などは検出できていない。西辺の長さ約4m、深さ約0.1mである。

土坑SK101 平面形が不整形な土坑である。最も深い部分での深さは約0.6mである。



第32図 池上遺跡第16次調査第1トレンチ遺構実測図



第33図 池上遺跡第16次調査第2・4トレンチ遺構実測図

土坑 S K 102 S H 103を切る土坑である。最も深い部分での深さは約0.15mである。第35図144が出土している。

土坑 S K 109 S X 111と同様に底が複雑な形状を示すが、遺構の一端が確認できるため土坑とした。最も深い部分での深さは約0.4mである。

土坑 S K 116 小形の長方形土坑である。内部からは、弥生土器(第35図142・143)が出土している。

土坑 S K 121 S K 101に壊されている土坑である。最も深い部分での深さは約0.4mである。

不明遺構 S X 111 検出面では調査区を斜め方向に横切る溝状を呈するが、底が複雑な形状を示すため性格不明の遺構とした。最も深い部分での深さは約0.4mである。

## ②第2トレンチ

第8次調査区と近接するトレンチである。

土坑 S K 203 砂礫混じりの埋土をもつ不定型の土坑である。深さは約5cmと浅い。出土遺物が碎片であるため時期は特定できない。

溝 S D 201 調査区内で斜め方向にのびる溝である。底部は平らで、一定の深さと形状をもつことから人為的な溝と考えられる。幅約2.4m、深さ約0.25mである。出土遺物には、奈良～平安時代の須恵器片、瓦器片があるがいずれも磨滅が著しい。

溝 S D 202 S D 201と西側で接する溝である。S D 201・S K 203に先行する。深さは約0.1mである。

溝 S D 210 第9次調査のS D 13と同じものと考えられる溝である。S K 203に先行する。北端は浅くなり遺構が確認できなくなる。深さは約0.1mである。

流路 S R 204 第9次調査区の流路と同じものである。弥生～奈良時代までの遺物が混ざるが、トレンチが狭小で、湧水があるため底の確認はできなかった。第35図145が出土している。

## ③第3トレンチ

東西方向に長い調査区で、八木町教育委員会の試掘によってS D 301が確認されたため拡張しトレンチを設定したがそれ以外の遺構は検出できなかった。

溝 S D 301 調査区を南北に横切る溝である。埋土は弥生時代の遺構のものに似るが、出土遺物は認められなかった。深さ約0.25mである。

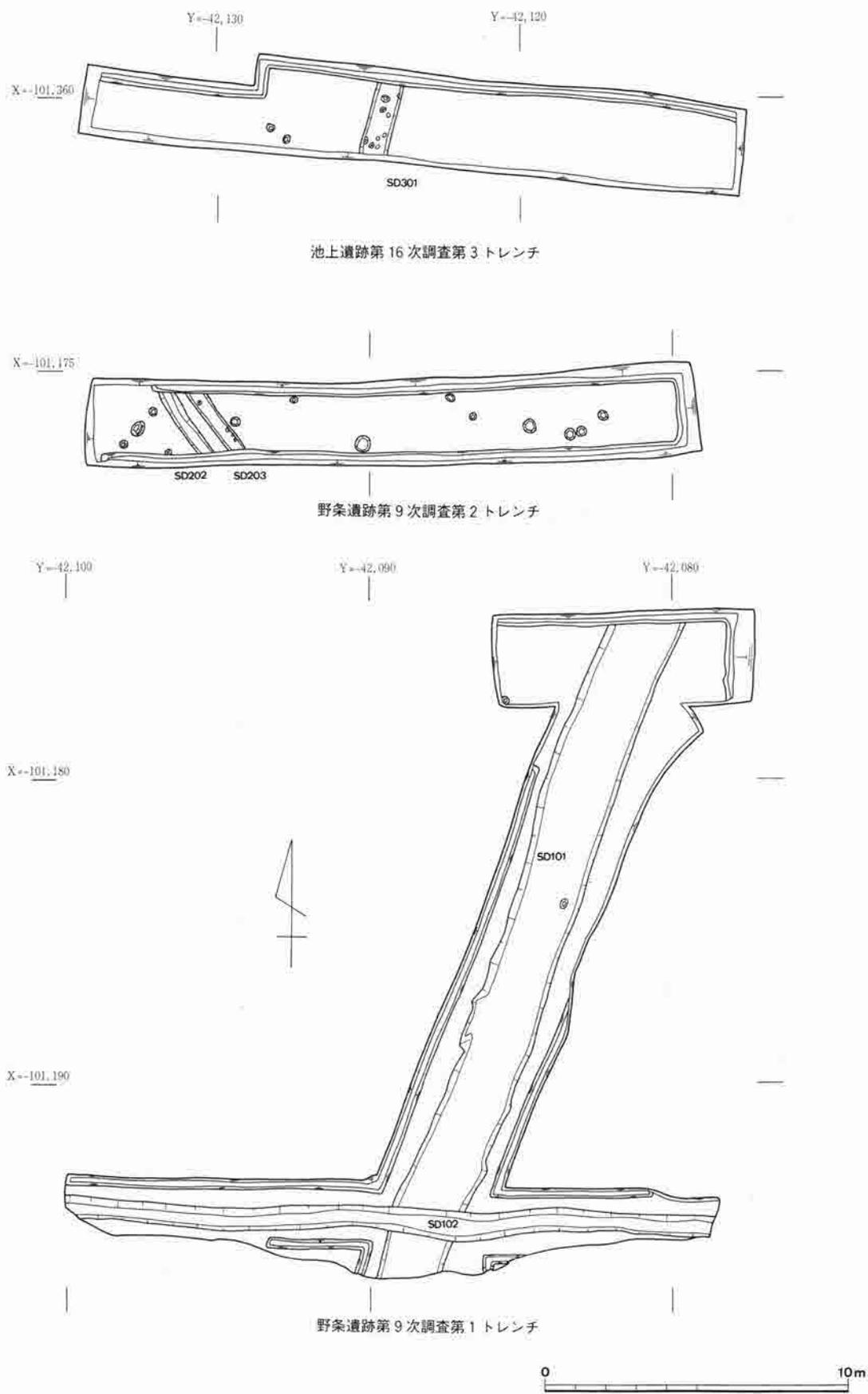
## ④第4トレンチ

第3トレンチ近くに設けた南北方向のトレンチである。遺構検出面は多くの礫が混ざる。

溝 S D 402 S D 404に平行する浅い溝である。深さ約0.1mである。時期を特定できる遺物の出土は認められなかった。

溝 S D 404 深さ約0.1mの浅い溝である。時期を特定できる遺物の出土は認められなかった。

落ち込み状遺構 S X 401 調査区南部で検出できた落ち込み状の遺構である。深さは約0.1mである。

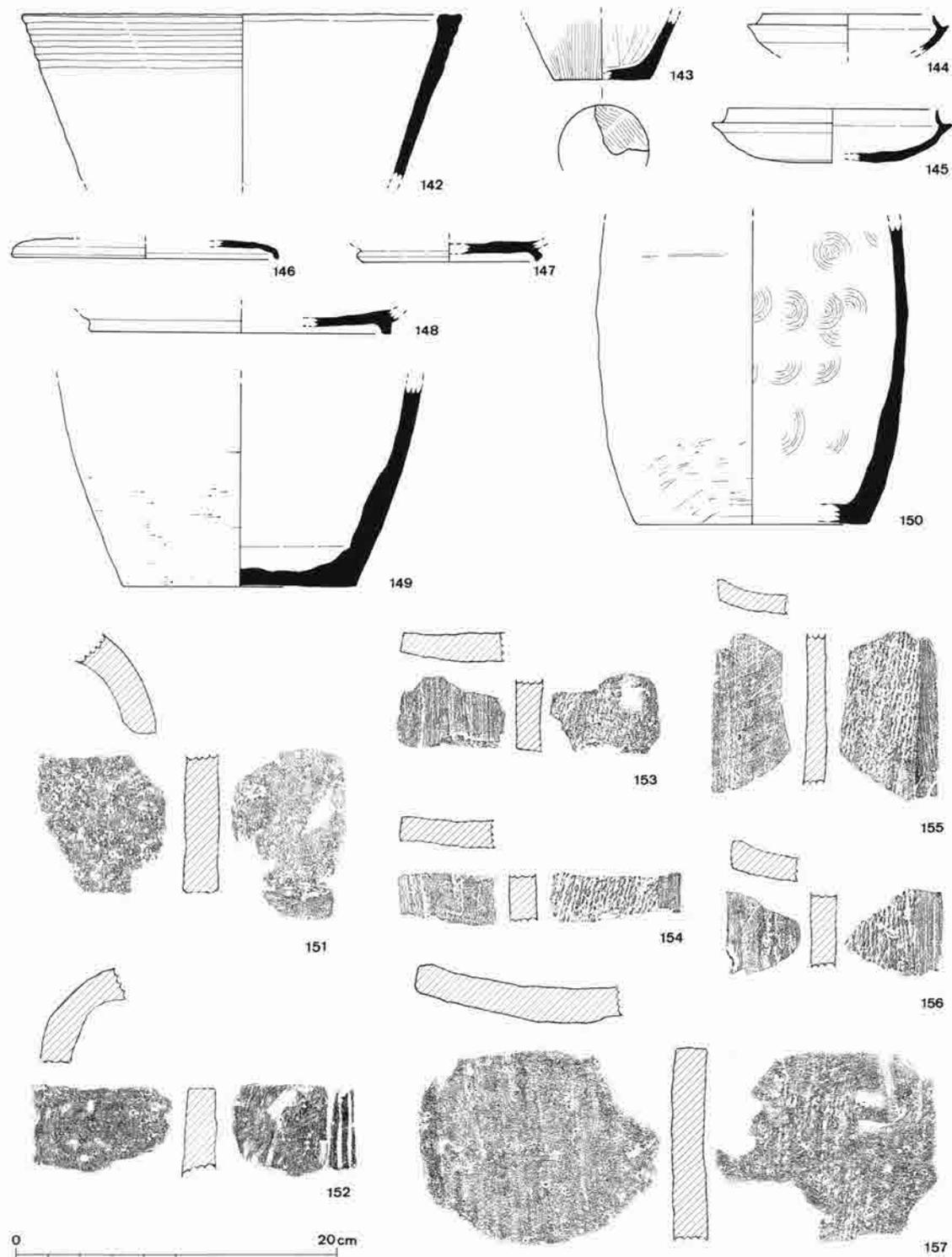


第34図 池上遺跡第16次調査第3トレンチ・野条遺跡第9次調査遺構実測図

(2)野条<sup>のじょう</sup>遺跡第9次

①第1トレンチ(第33図)

第2トレンチの西側延長上に当初設けたが、周辺部分が切土されることがわかり、調査区を拡張したため変則的な形状を示すトレンチとなった。



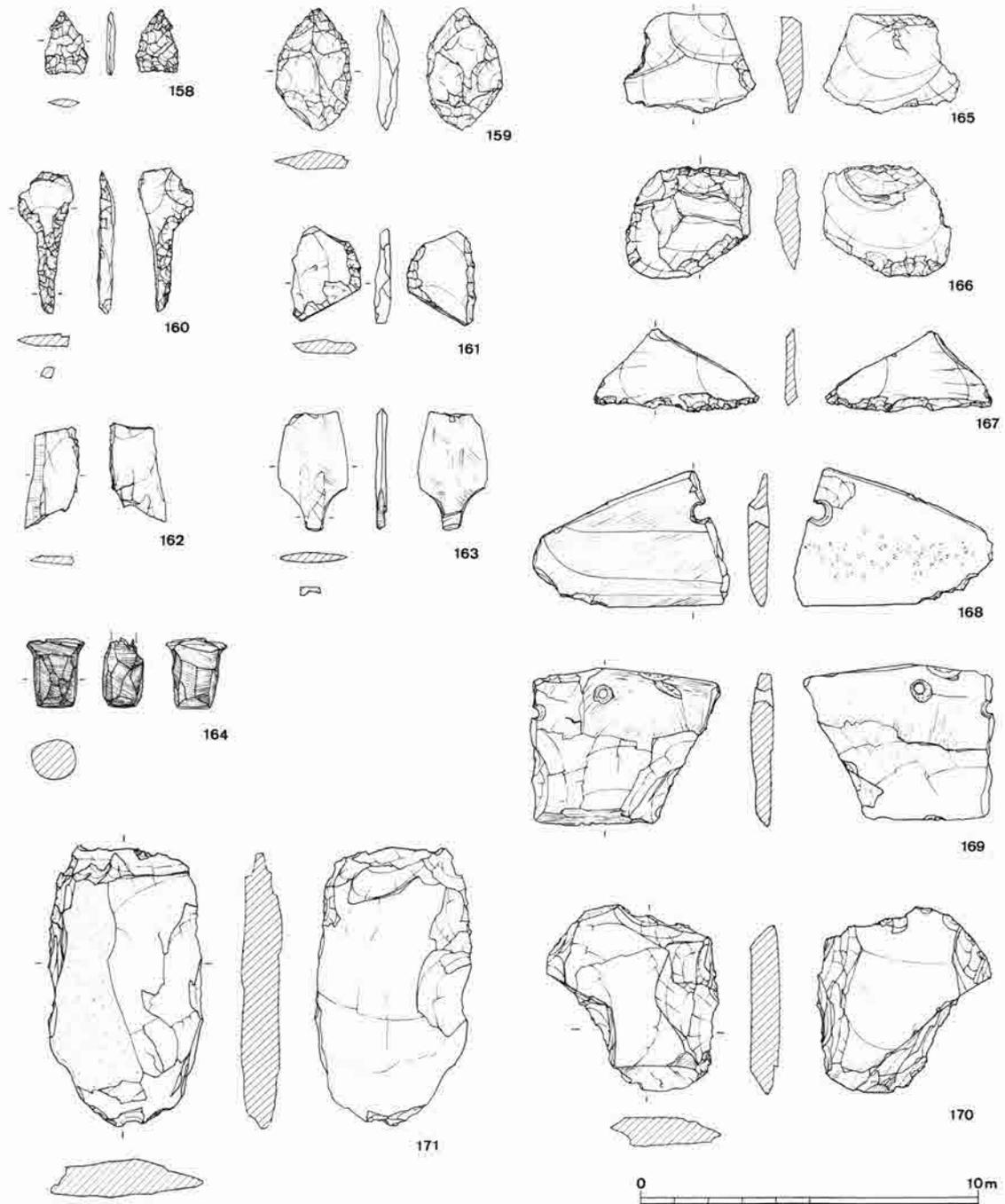
第35図 池上遺跡第16次調査・野条遺跡第9次調査出土遺物

溝SD101 幅5mで底が平らな人為的な溝である。深さは約0.25mである。溝は検出した部分では直線状を呈し、現在のほぼ真北を向いた地割とは角度が異なっている。出土遺物には須恵器・瓦(第35図146~157)があり平安時代のもと考えられるが、瓦はいずれも磨滅が著しい。

溝SD202 SD101に後発する溝で、東西方向にのびる。現在の池上・野条地区を分ける水路に平行して近接する。このことから「字」を分ける溝と考えられるが、遺物には瓦器片があるのみである。

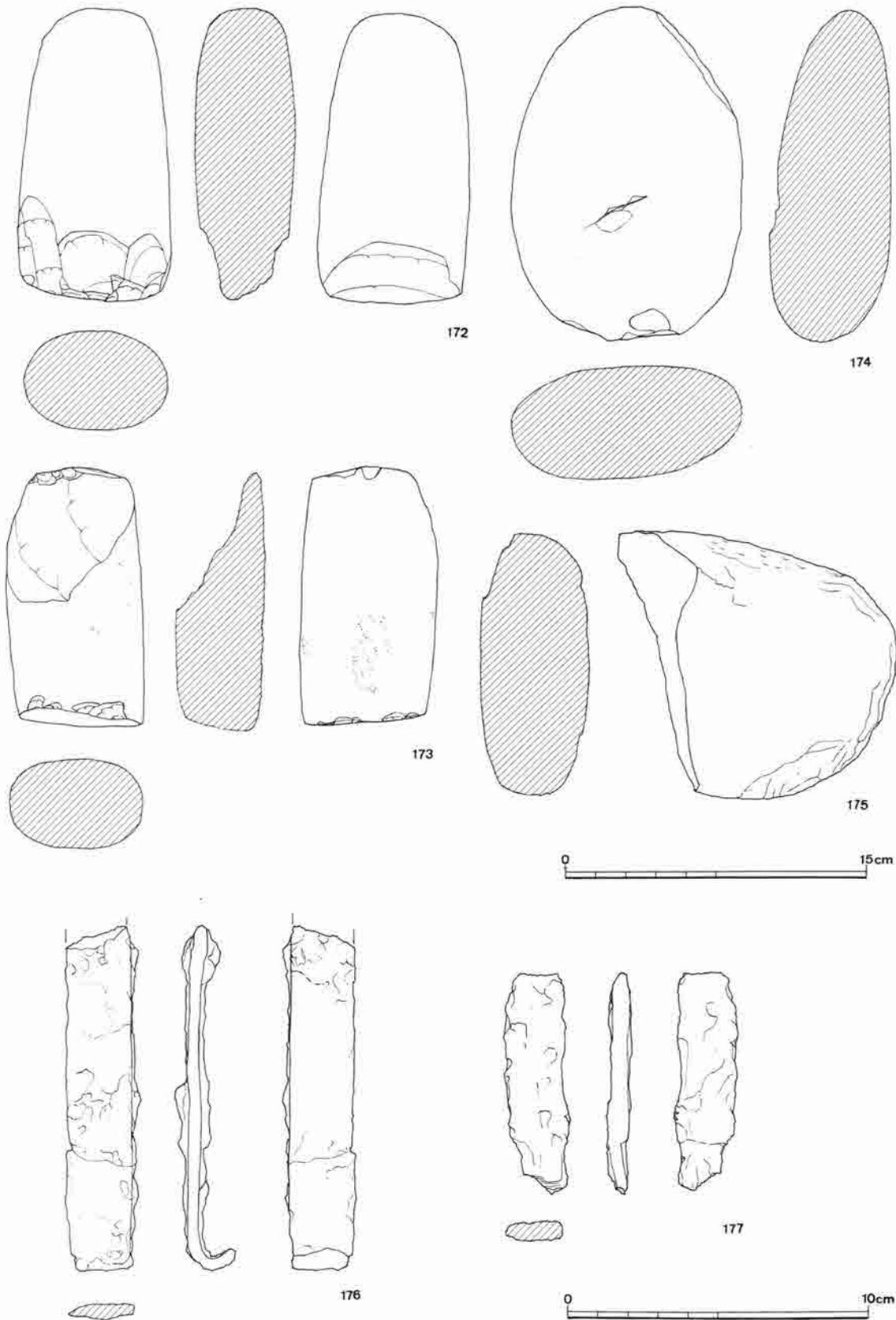
②第2トレンチ(第33図)

溝SD201・202 両溝は平行した近接する溝で、深さも約5cmと同じである。遺物の検出はな



第36図 池上遺跡・野条遺跡出土石器

かったが、中世以前のものと考えられる。



第37図 池上遺跡出土石器・鉄器

172. S K903 173. S D739 174. 第7トレンチ 175. P754 176. S H904 177. S X616

## ま と め

今回の発掘調査により、推定されている池上遺跡の範囲は、第16次調査第2トレンチ以北では、遺構の密度が低くなり、奈良時代以降の遺構が主体となる。また、第15次調査第7トレンチおよび京都府教育委員会が実施した池上遺跡第14次調査の結果から、これらの調査区から第12・13次調査区までの間には、非常に高い密度で、弥生～古墳時代以降の遺構が展開していたものと考えられる。なお、池上遺跡第16次調査の第1トレンチ内で、古墳時代の竪穴式住居跡が発見されており、池上遺跡では最も北の位置での検出例となる。

弥生時代の遺構では、第15次調査の南部地区では、方形周溝墓の周溝と考えられる溝が検出されていることから、第3～5・12・13次調査地から連続して周溝墓が存在したことが分かった。

また、最も西側のトレンチである第15次調査第1トレンチでは、弥生時代後期の遺構が検出されており、池上遺跡の西部に弥生時代後期の遺構群が存在する可能性が指摘できる。

古墳時代は、前述したように、竪穴式住居跡が第16次調査第1トレンチ以南で検出することができた。池上遺跡で検出される竪穴式住居跡は、須恵器出現直前から7世紀初頭までの時期に限定でき、古墳時代前期のものは発見されていない。

奈良時代以降では、野条遺跡第9次調査第1トレンチでまとまって布目瓦が出土した。これらの布目瓦がどのような性格であったかは確定できないが、近接地に瓦葺の建物があったことが考えられる。これまで、布目瓦は池上遺跡第12・13次調査などで、若干量検出されている。また、奈良時代の井戸が、池上遺跡第15次調査第8トレンチで検出された。奈良時代の遺構は、池上遺跡第13次調査地でも発見されていることから、広範囲に奈良時代の人の生活跡があったものと考えられる。

(中川和哉)

## 参考文献

岸岡貴英「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成13年度調査概要〔1〕池上遺跡第10次」(『埋蔵文化財発掘調査概報2002』 京都府教育委員会) 2002

田代弘「池上遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第104冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

田代弘・岡崎研一・野島永「南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡 池上遺跡第8次・池上古里遺跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

谷口梯『京都府船井郡八木町文化財調査報告書第3集 八木町遺跡地図 [町内遺跡詳細分布調査報告書]』八木町教育委員会 1997

中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

奈良康正「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成11年度調査概要〔1〕池上遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報2000』 京都府教育委員会) 2000

村田和弘「池上遺跡第7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第98冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

### 3. 野条<sup>のじょう</sup>遺跡第7次発掘調査概要

#### 1. はじめに

野条遺跡は、八木町教育委員会・京都府教育委員会による分布・試掘調査で存在が明らかにされ、周知された遺跡である。この遺跡内において亀岡園部線改良工事が計画されたことから、事前に工事対象地区について発掘調査を実施する運びとなった。

平成14年度に遺構の有無や分布状況などを確かめることを目的として試掘調査を実施したところ、工事対象地区内に、弥生時代後期・中世の遺構が分布することが明らかとなった<sup>(註1)</sup>。

今回の調査は、この試掘調査の成果を受けて、工事対象地区について面的な調査を実施したものである。

調査は、約1,200㎡を対象とし、平成15年5月12日に着手し、同年9月10日に終了した。調査担当者は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、主任調査員田代弘である。

調査にあたっては、京都府教育委員会・八木町教育委員会など関係諸機関・地元自治会にご協力を得た。また、作業員として参加いただいた地元の方々、補助員には野外で日々の作業に従事していただいた。記して謝意を表します<sup>(註2)</sup>。

なお、調査経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

#### 2. 遺跡の位置と歴史的環境

野条遺跡は、八木町大字野条にある。八木町は、亀岡盆地北端に位置し、丹波高地を經由して日本海へと通ずる交通の要衝に位置する。町の西側を流れる大堰川は、南に下って桂川となり淀川と合流した後、大阪湾へと注ぎ込む。日本海へ流入する由良川とともに丹波を代表する大河川である。大堰川は、園部町を南流した後、八木町に至って流域面積を拡大して、沖積地を発達させながら亀岡盆地へと向かっていく。

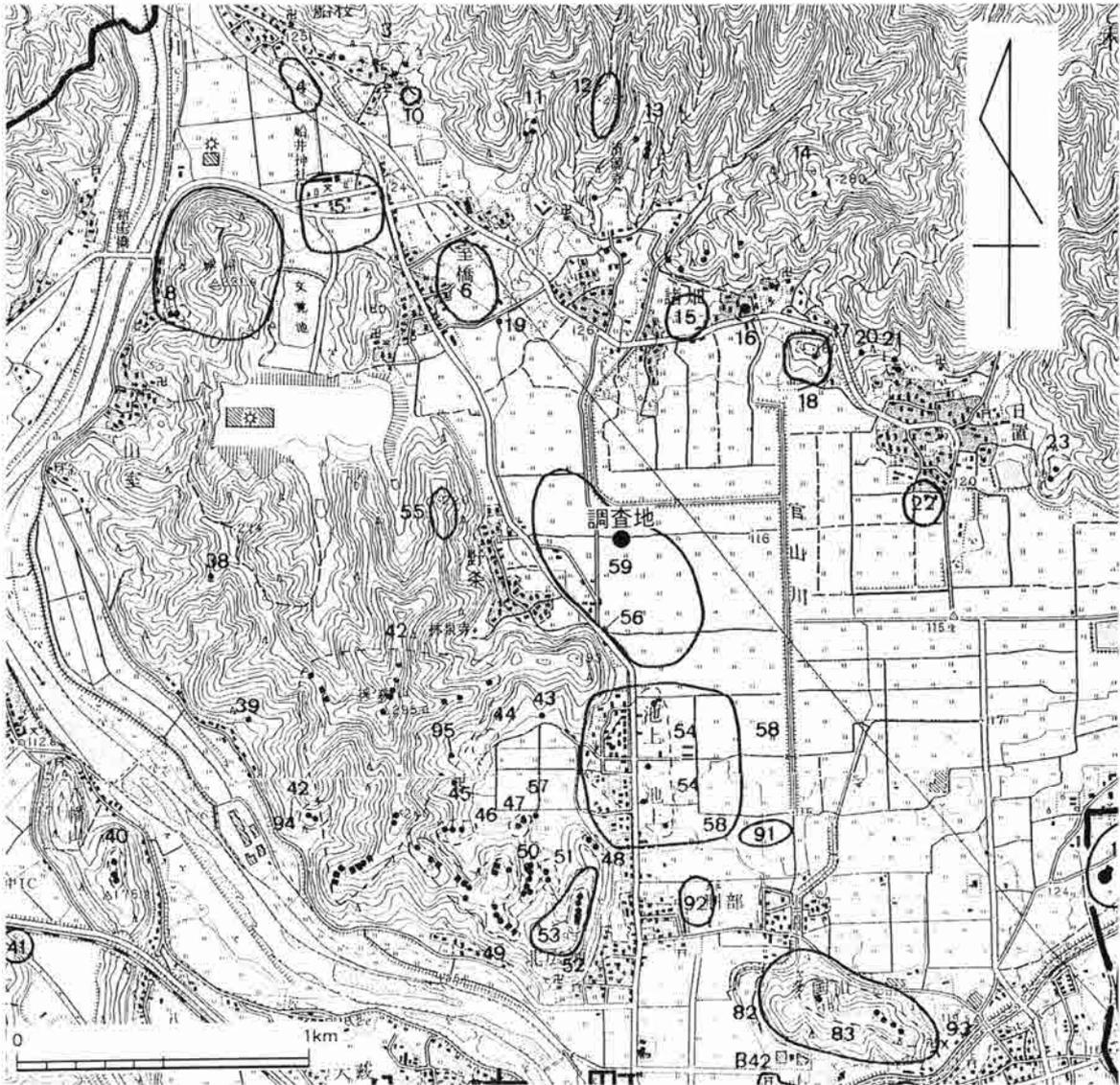
野条地区は、八木町中心部からの北郊にある筏森山の東麓に位置している。大堰川東岸を通過して園部へと通ずる主要街道に面する地域である。

野条遺跡は、筏森山の東麓に広がる平地に営まれた集落遺跡である。集落は、弥生時代に成立して以降、中世にかけて断続的に営まれたものと推測されている。当該遺跡の周辺には、第38図に示したように、多数の遺跡が分布している<sup>(註3)</sup>。

南に位置する池上遺跡では、町内最古の遺物である後期旧石器時代のナイフ形石器が出土している。池上遺跡は、度重なる調査がなされ、弥生時代～中世にかけての遺構群が多数発見された。亀岡盆地北半の中核的集落遺跡であったことが、次第に明らかになってきた。調査では、各時代についての多数の成果があるが、弥生・古墳・奈良時代に特筆すべきものがある。弥生時代のも

のとしては、弥生時代中期に営まれた集落と方形周溝墓からなる墓域の姿が明らかとなり、それぞれの遺構からこの地域の標識としうる土器資料が良好な状態で出土している。整然と配置された古墳時代後期の竪穴式住居跡群は、計画村落としての様相をみせている。奈良時代においては、官衙とみられる掘立柱建物跡群などが確認されており、律令期の地域的社會状況を知る手がかりになるものと期待される<sup>(注4)</sup>。

北側の山裾でも、古代に遡るとみられる集落遺跡が多数確認されている。船枝遺跡・新庄遺跡・室橋遺跡・諸畑遺跡・八木田遺跡・日置遺跡などである。分布調査や試掘調査が行われてお



第38図 調査地と周辺の遺跡(『京都府遺跡地図』[第3版]第2分冊転載)

- |            |           |             |            |            |
|------------|-----------|-------------|------------|------------|
| 3. 清谷古墳群   | 4. 船枝遺跡   | 5. 新庄遺跡     | 6. 室橋遺跡    | 7. 新庄城跡    |
| 8. 山室古墳群   | 10. 舟枝館跡  | 11. 美津谷古墳群  | 12. 畑中城跡   | 13. 大谷口古墳群 |
| 14. 松本古墳群  | 15. 諸畑遺跡  | 16. 福本古墳群   | 18. 八木田遺跡  | 21. 西上里古墳群 |
| 22. 日置遺跡   | 23. 東山古墳群 | 40. 八幡山古墳群  | 41. 沢ノ谷遺跡  | 42. 筏森山古墳群 |
| 46. 寺内西古墳群 | 47. 寺内古墳群 | 48. 寺内東古墳群  | 49. 南尾西古墳群 | 50. 南尾古墳群  |
| 51. 南尾東古墳群 | 52. 北広瀬城跡 | 53. 北広瀬城古墳群 | 54. 狐塚古墳群  | 55. 野条城跡   |
| 58. 池上遺跡   | 59. 野条遺跡  | 82. 刑部城跡    | 83. 多国山古墳群 | 91. 池上古里遺跡 |
| 92. 西里遺跡   |           |             |            |            |

り、少しずつ集落遺跡の姿が明らかになってきた。

丘陵尾根上や山裾で数多くの古墳が確認されている。野条遺跡の南側の地域の主な古墳群としては、筏森山上の筏森山古墳群・北広瀬古墳群・寺内古墳群、多国山尾根上の多国山古墳群などがある。北方の山裾では、松本古墳群・福本古墳群・美津谷古墳群・大谷口古墳群などがある。これらは横穴式石室を有するものが多い。古墳については、発掘調査事例がないので、この地域での古墳群の成立と推移、集落との関連などについては、いまのところ明らかでない。

この周辺は、山城跡が多く分布する地域としても知られ、畑中城跡・北広瀬城跡・野条城跡・刑部城跡などが確認されている。

### 3. 調査の経過と概要

#### (1) 調査経過

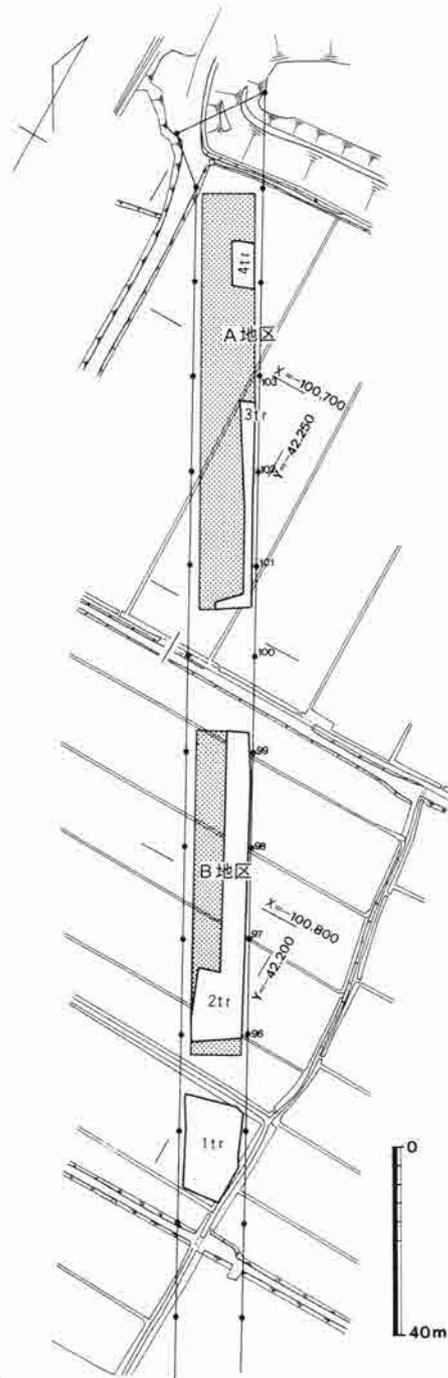
**地区の設定** 調査着手にあたって、調査トレンチの設定を行った。2か所のトレンチを設定し、北側をA地区、南側をB地区と呼称した(第39図)。

**掘削方法** バックホーを用いて、一部を深掘りした。掘削断面を観察し、土層堆積状況を検討した。その結果、最上層に耕作土層であるグライ土壌と床土に当たる黄褐色の2層があり、次に遺物を含む茶褐色土、黒色土、そして礫を含む黄色粘土層という順に土層が堆積していることがわかった(第40図)。遺構は、黒色土層上にある茶褐色土、あるいは黒色土中から掘削されたと判断することができた。迅速に遺構を検出するために、黄色粘土層まで土層を水平に除去することが妥当と判断した。

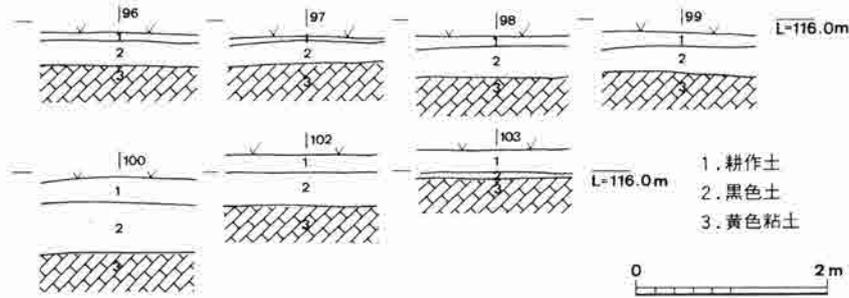
以上の観察を踏まえ、調査対象地全体について、黒色土層と黄色粘土層の漸移層までバックホーを用いて土層を除去した。

**人力による精査** 土層除去後、人力を投入し、精査を行った。まず、遺構を検出しやすくするために、機械掘削後の残土や掘り残しなどを取り除き、調査地を平滑に保つ作業を行った。あわせて、雨や周囲の水田から浸入する水に対処するための排水路を設けた。各地区において以上の作業を行った後、遺構の精査に取りかかった。

精査は、地山である黄色粘土層上面において遺構の検出を目指し、繰り返し地面を平滑に削り



第39図 調査地区配置図



第40図 土層堆積模式図

整える作業である。精査を繰り返した結果、竪穴式住居跡をはじめ、溝・土坑・多数のピット群・畝状遺構など各種遺構群を検出することができた。

**記録作業** 精査により検出した遺構を掘削するにあたり、まず、遺構配置状況を略測し、図面(スケール=1/100)を作成した。各遺構に種別・検出順に名称を付し、順次、個別の遺構を掘削した。出土遺物を取り上げながら、進捗状況と必要に応じて各遺構の実測図・土層断面図など(スケール=1/20)を作成した。遺構検出状況・遺物出土状況・完掘後の遺構の状況など、作業の進捗状況に応じて写真撮影を行った。

出土遺物は遺構ごとに取り上げた。現地より回収して、発掘現場事務所にて洗浄、ネーミング、接合作業など基礎的な整理作業を行った。遺物の検討を行い、遺構の形成時期解明の決め手になる遺物を中心に、実測記録作業を行った。この後、遺構・遺物実測図の製図に着手し、概要報告作成を行った。

**測量の基準点** 測量作業は、園部土木事務所が三和技術コンサルタントに業務委託して作成した4級基準点を基準点として用いた。利用した基準点は、UT1～3の3点である。それぞれの座標値は次のとおりである。UT1(X=-100928.959m、Y=-42183.444m)、UT2(X=-100763.850m、Y=-42191.389m)、UT3(X=-100664.872m、Y=-42302.157m)。

また、水準は、仮BM5と仮BM6の水準を基準とした。水準はそれぞれ次のとおりである。仮BM5(H=115.772m)、仮BM6(H=117.441m)。

## (2) 検出遺構

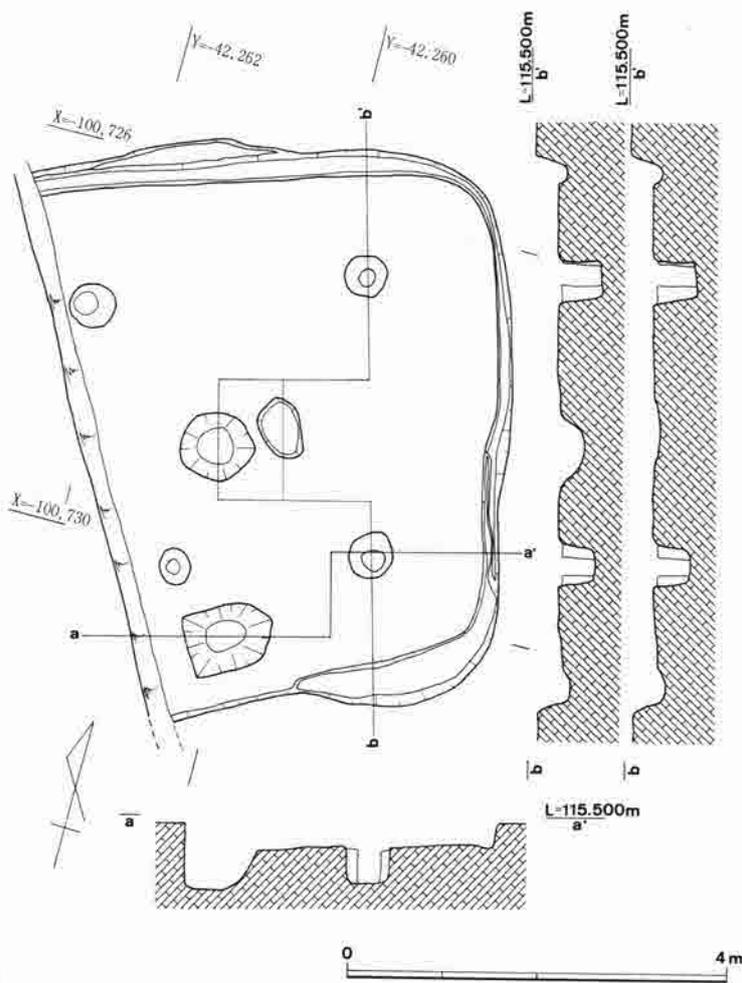
以上のような経過で発掘調査を行った結果、A・B両地区で各種の遺構を多数検出した。検出遺構の分布状況は、第41図に示すとおりである。以下、個々の遺構について概要を記すことにしたい。

①A地区 この地区では、弥生時代後期の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、土坑群、ピットなどを検出した。ピットは調査地区全面で多数検出しているが、掘形が明確でなく、不定型なものが大半を占めている。

**竪穴式住居跡 S H0307(第42図)** 隅丸方形の竪穴式住居跡である。東側を部分的に検出した。西側が調査対象地外へのびているので、西端は検出できていない。遺物は少なく、床面で少量の



第41図 各地区遺構検出状況図



第42図 A地区竪穴式住居跡SH0307実測図

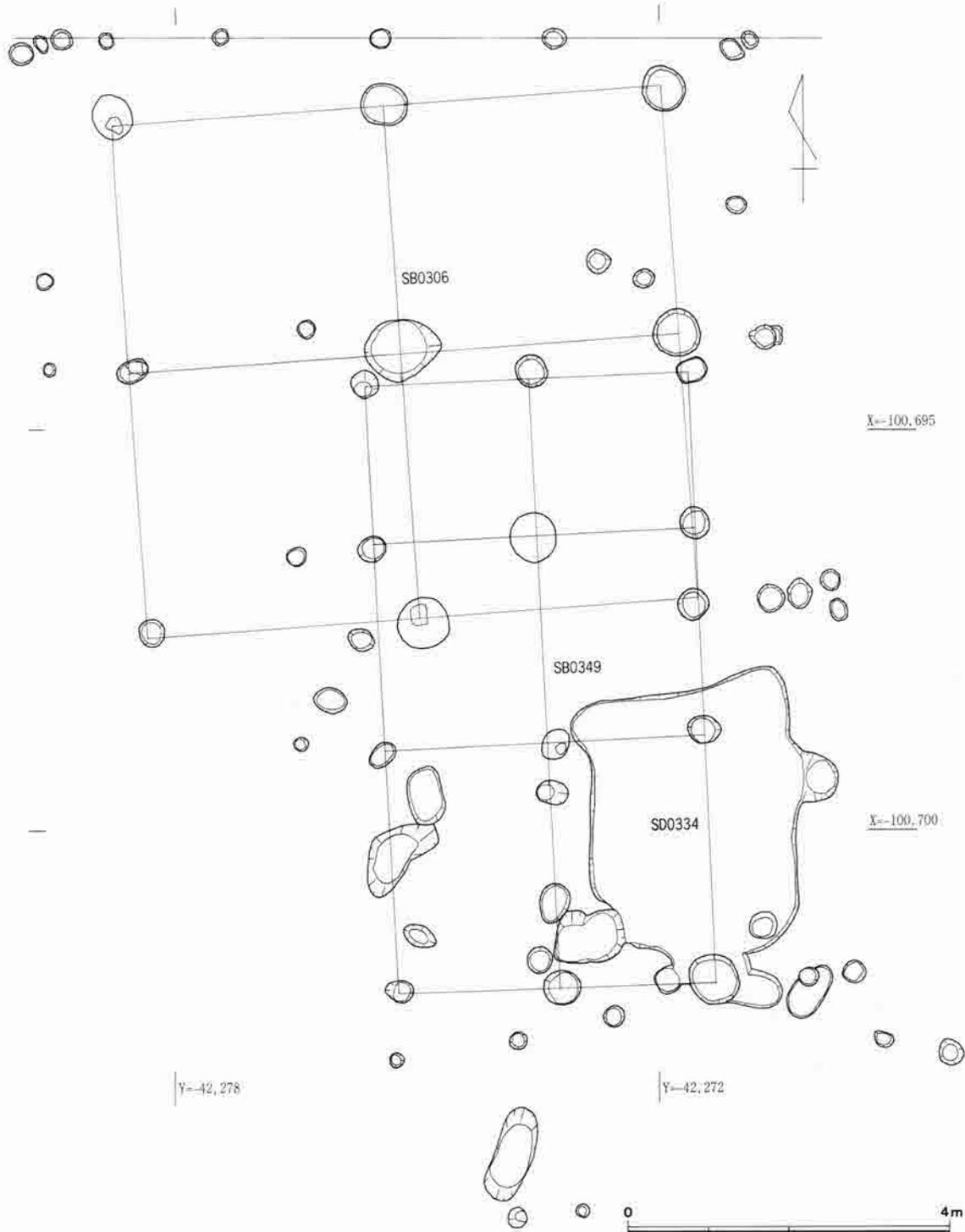
土器片とガラス玉を1点検出したのみである。土器は、弥生時代後期後半期に属するものである。B地区で検出した竪穴式住居跡SH0301に近い時期を示しており、同一集落を構成する建物跡とみられる。この住居跡の規模は、完全に検出することができた東側の辺を参考にすると、一辺が約5m前後と推測される。床面までの検出高は約20cmである。床面には、周壁溝、土坑、主柱穴などの施設がある。

周壁溝は、幅約10～50cm、床面からの深さ約6cmであり、南東隅で広く、南辺中央で途切れている。土坑は3基認められた。中央部に、炉跡とみられる円形の土坑がある。直径約80cm、深さ約10cmである。一部に、被熱によるとみられる赤変が認められる。この土坑の東側に楕円形の浅い土坑

がある。長軸長約60cm、深さ約5cmである。炉跡の南側、南壁に接して、不定型な土坑がある。五角形に深く掘られた土坑である。東西に長く、長軸長約90cm、短軸長約70cmを測る。深さは、約60cmである。貯蔵穴であろうか。主柱穴は3個検出した。柱掘形はそれぞれ、直径約40cm、深さ約50cmであり、掘形中央で柱の腐植痕跡とみられる直径20cm前後の土色の変化を認めた。柱間の距離は、芯々間で約3mを測る。

**掘立柱建物跡SB0306(第44図)** 2間×2間の掘立柱建物跡である。柱間は、芯々間で、南北が約3.0m、東西が約2.4mを測る。柱穴掘形は、直径40～80cm前後である。中央の柱穴は、径が最も大きく、東西に長い。柱が抜き取られた跡とみられる。柱の腐植痕跡を確認できたのは4か所である。腐植痕の径は20～30cm前後である。根石を有するものが3個ある。根石は、チャートの自然礫である。

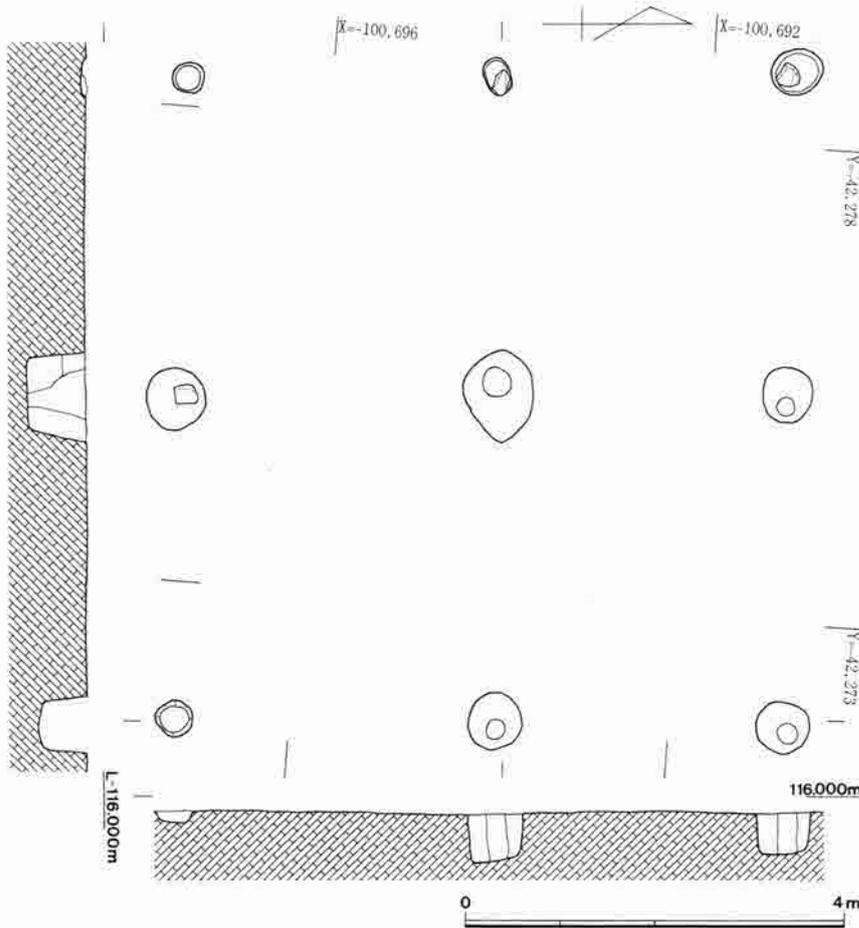
**掘立柱建物跡SB0349(第45図)** 桁行2間×梁間3間の掘立柱建物跡である。桁間は、芯々間



第43図 A地区検出遺構実測図

で約2mを測る。梁間は、南に向かうに従って長くなる。北から、それぞれ約1.8m・約2.5m・約3.2mを測る。根石は2か所で認められた。北東隅の掘形には、須恵質の陶器体部破片が根石として用いられていた。

溝S D0335(第47図) 東西にのびる溝の一部である。土師器皿、瓦器碗の細片、輸入陶磁器など、中世遺物が少量出土している。輸入陶磁器は青磁碗であり、元代のものである。14世紀代の



第44図 A地区掘立柱建物跡S B0306実測図

ものと考えられ、この溝の継続年代の一点を知る手がかりとなる。この溝は、やや蛇行するものの、座標の東西方向にほぼ合致する主軸を有する。西側が最も広く、幅約2m、深さ約30cmを測る。土坑状の掘り込みが認められる。中央で幅約1m、深さ約20cmを測る。東端で細い2本の溝に分岐している。

地区北端で検出した畑作に係わると推測される溝群(畝状遺構)は、主軸を座標南北に有しており、この溝方位とは直角の位置関係

になる。両者が関連するものであるとすると、この溝は、用水路あるいは耕作地の地割りに関する溝など、計画水路と考えることができよう。この付近は筏森山東斜面の傾斜地であり、水流は西から東へと向かうと推測される。

**畝状遺構(第41図)** 調査地北端で検出した小規模な溝群である。幅1m前後、深さ20~30cmの断続的な溝群である。溝は、深浅があり、土坑状をなすものがみられる。しかし、これらは断続的な溝の深部が、上面の削平により遺存したとみられるものであり、独立した土坑とみられるものは、第46図に示した事例など、わずかである。これらの溝は、一般に中世の溝々と呼称されるもので、畑作などの耕作に係わる遺構と推測されるものである。畝を形成するために繰り返し掘削した溝の痕跡が、このような形で遺存したものであろう。畝に伴う溝と考え、溝群を畝状遺構としておく。

遺構埋土には、土師器皿・瓦器椀などの中世遺物が含まれていた。遺物は、細変化して磨滅したものが多。概ね、鎌倉時代後半期~室町時代にかけての時期を示している。

A地区の土坑は、耕作に伴うと考えられる溝々の一部をなすとみられるもの(S K0305・0315)、矩形を呈する中世の大形の土坑(S K0301・0334)、時期が明らかでない楕円形の大形土坑(S K0302・0303・0350~0352)などがある。

土坑 S K 0305(第46図1) 溝状の土坑である。土坑底面の主軸上で、土師器皿2点を検出した。土師器皿は底面が土坑底面に密着した状態で出土している。供献など、人為的に配置されたものである可能性がある。長軸長約1.9m、短軸長約0.45m、深さは約10cmである。埋土は、暗茶褐色土である。

土坑 S K 0315(第46図2) 断面「U」字形の長楕円形の土坑である。長軸長約1.9m、短軸長約95cm、深さ約60cmである。埋土は、暗茶褐色土である。瓦器碗・土師器皿が出土した。

土坑 S K 0334(第48図1) 隅丸方形の土坑である。埋土は、暗茶褐色土であり、礫を多量に含む。土師器皿、瓦器碗の細片などが出土している。長軸長約3.8m、短軸長約2.5m、深さは約20cmである。

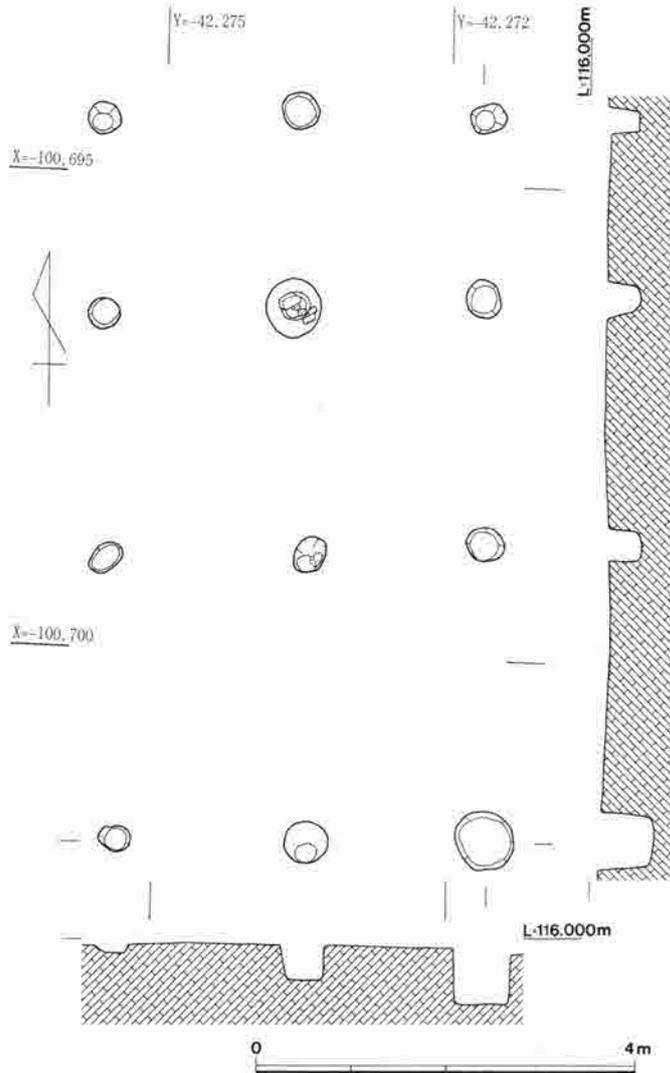
土坑 S K 0301(第48図2) 不定型な多角形土坑である。埋土は、暗茶褐色土で、土師器・瓦器碗の細片が含まれていた。長軸長約3.8m、短軸長約3.6m、深さは約20cmである。

土坑 S K 0350(第48図3) 楕円形の土坑である。長軸長約2.5m、短軸長約1.9m、深さは約40cmである。埋土は、1：黒色粘質土、2：黄色粘質土(礫混じり)、3：茶褐色土(礫を多量に含む)、4：茶褐色土(礫を少量含む)、5：黄色粘質土である。埋土に遺物を含まない。

土坑 S K 0351(第48図4) 楕円形の土坑である。長軸長約3.4m、短軸長約2.8m、深さは約80cmである。埋土は、1：黒色粘質土、2：黄色粘質土(黒色粘質土と礫混じり)、3：黄色粘質土(礫混じり)、4：黄色粘質土である。埋土に遺物を含まない。

土坑 S K 0352(第48図5) 楕円形の土坑である。長軸長約3.2m、短軸長約2.6m、深さは約40cmである。埋土は、1：黒色粘質土、2：黄色粘質土(黒色粘質土と礫混じり)、3：黄色粘質土(礫混じり)、4：黄色粘質土である。遺物を含まない。

土坑 S K 0302(第48図6) 楕円形の土坑である。長軸長約4m、短軸長約3.4m、深さは60cmである。埋土は、1：黒色粘質土、2：黄色粘質土、3：黄色粘質土(礫混じり)、4：黒色粘質



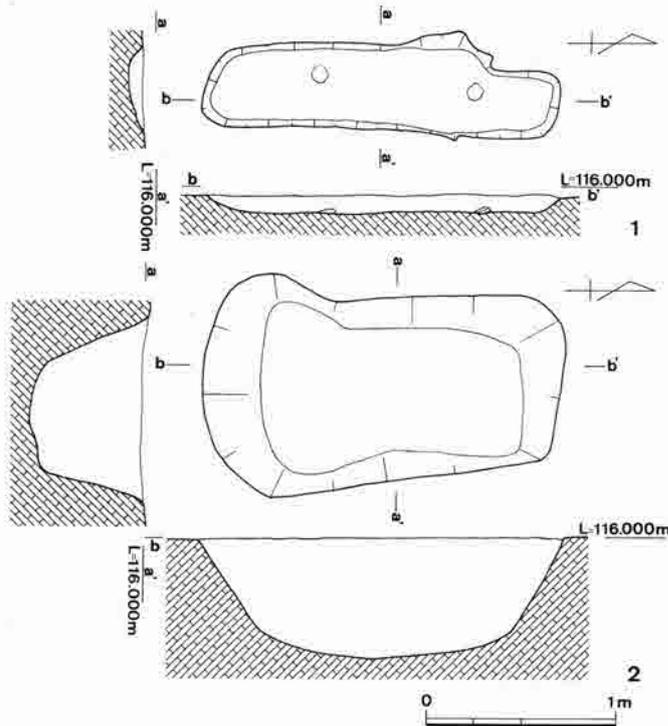
第45図 A地区掘立柱建物跡S B0349実測図

土(礫混じり)、5：黒色粘質土(黄色粘土混じり)である。埋土に遺物を含まない。

土坑 S K 0303(第48図7) 楕円形の土坑である。長軸長約3.2m、短軸長約3 m、深さは60cmである。埋土は、1：黒色粘質土、2：黄色粘質土(礫混じり)、3：黒色粘質土(黄色粘土と礫混じり)、4：黄色粘質土である。埋土に遺物を含まない。弥生時代後期の竪穴式住居跡 S H 0307と重複する。なお、S H 0307に切られていることから、弥生時代後期以前のものであることがわかる。

②B地区 この地区では、弥生時代後期の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、土坑群、ピットなどを検出した。A地区と一連の遺構群とみられるものである。

竪穴式住居跡 S H 0301(第50図) 方形の竪穴式住居跡である。一辺の長さは、それぞれ、東辺約4.9m、西辺約4.8m、南辺約5 m、北辺約4.8mである。遺存状況の良好な遺構であるので、

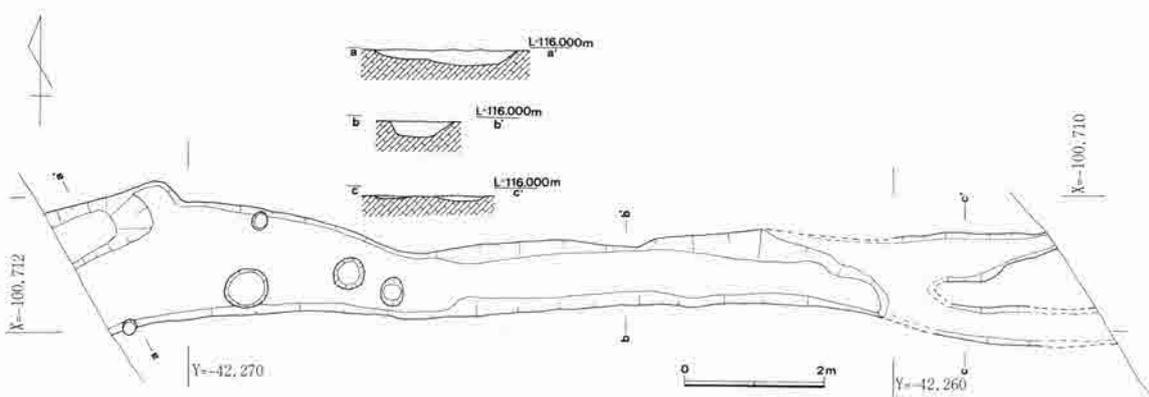


第46図 土坑実測図

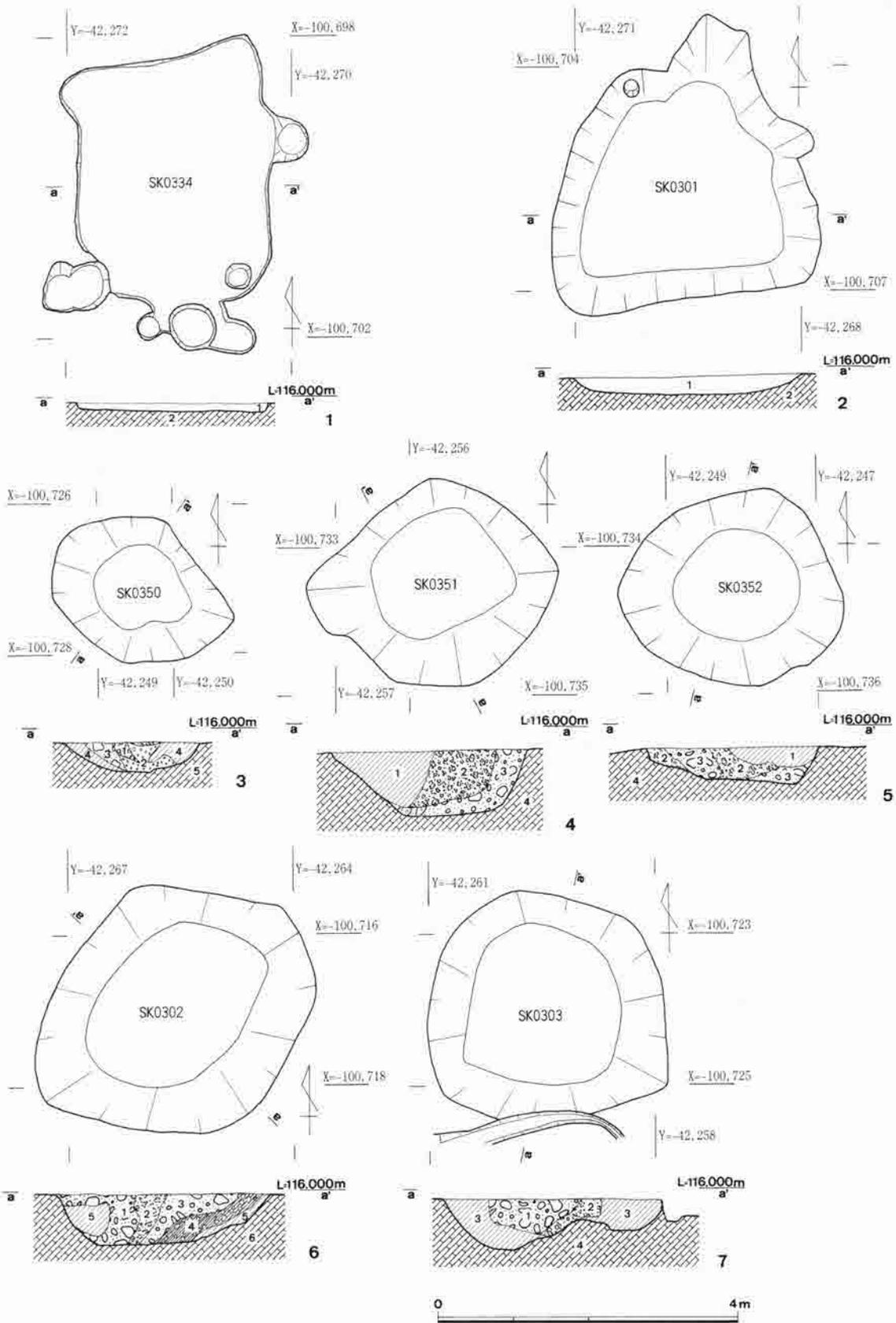
1. S K 0305                      2. S K 0315

重要な項目について、やや詳しく記しておきたい。

埋土の状況 遺構埋土に、多量の焼土と炭化物が包含されており、火災による焼失家屋と考えられる。第49図に示すように、焼土は全面に認められ、特に、壁面付近で厚く、10cm以上の堆積がみられるところもあった。床面は灰に覆われていて、熱による変色はそれほど認められない。焼土は屋根材として用いられた粘土が、下方からの熱に焼かれて赤変し、これが落下して堆積したものと推測される。弥生時代の火災焼失住居の事例には、屋根を粘土で強化する竪穴式住居跡が数多くみられ、本例もこうした事例の一つである



第47図 A地区溝 S D 0335実測図

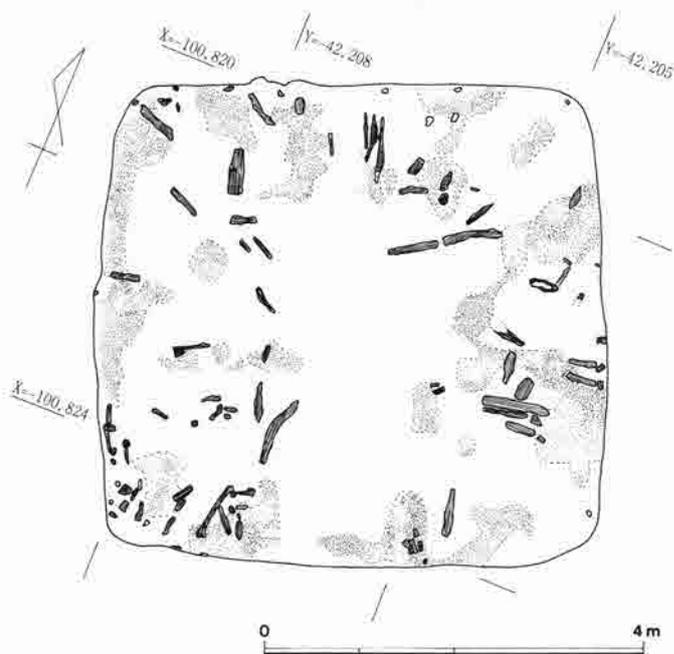


第48図 A地区検出土坑実測図

可能性がある。

炭・灰は、床面全面に認められた。炭化物は、焼土の下敷きになった状態で検出されたものが多い。炭化材の中で主要なものを図示したが、中には幅が20~30cm、長さが1mを超えるものもある。これらの位置をみると、住居の辺から中央に向かう傾向がみられる。屋根材である垂木が焼け落ちて炭化したものと推測される。埋土の断面は第52図に示した。

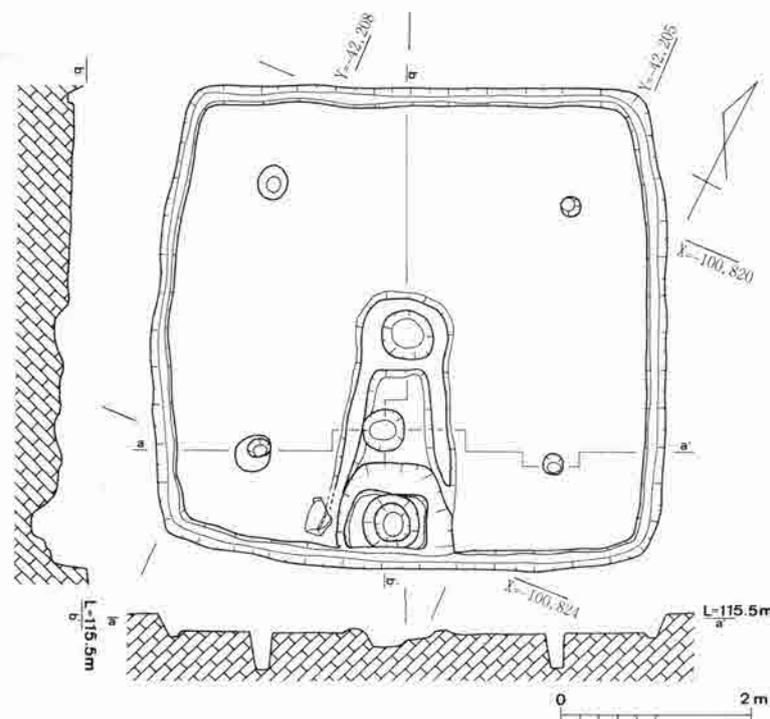
床面の施設 壁は高さ約30cmが遺存しており、壁面に沿った床面には、幅約20cm、深さ約10cm



第49図 B地区竪穴式住居跡S H0301炭化物検出状況

の周壁溝がめぐらされていた。床面には、支柱穴とみられるピットや炉およびこれに付属する施設が認められた。

ピットは、住居平面プランの対角線上に整然と配置されており、天井を支持する主柱を埋めたピットと考えられる。ピットの平面形は円形で4個検出した。径は上面で約20~30cm、深さ約40cm前後である。埋土において、平面が円形の腐植痕跡を検出した。腐植痕の径は、ピット底径とほぼ同じ約20cmであり、主柱として、径20cm前後の丸太材が用いられたことが推測される。



第50図 B地区竪穴式住居跡S H0301実測図

床面中央部と住居南壁中央に接する位置には、土坑が設けられていた。SK1は、径60cm、深さ15cm、断面形が浅い皿状の円形土坑である。SK2は、径約50cm、深さ約20cm、断面形が「U」字形の楕円形土坑である。これらの土坑は高さ約5cm、幅約20cmの土手状の遺構で囲まれ、全体として第51図のような特殊な形状をなしている。SK1とSK2との間には、浅く小さな土坑(SK3)がある。S

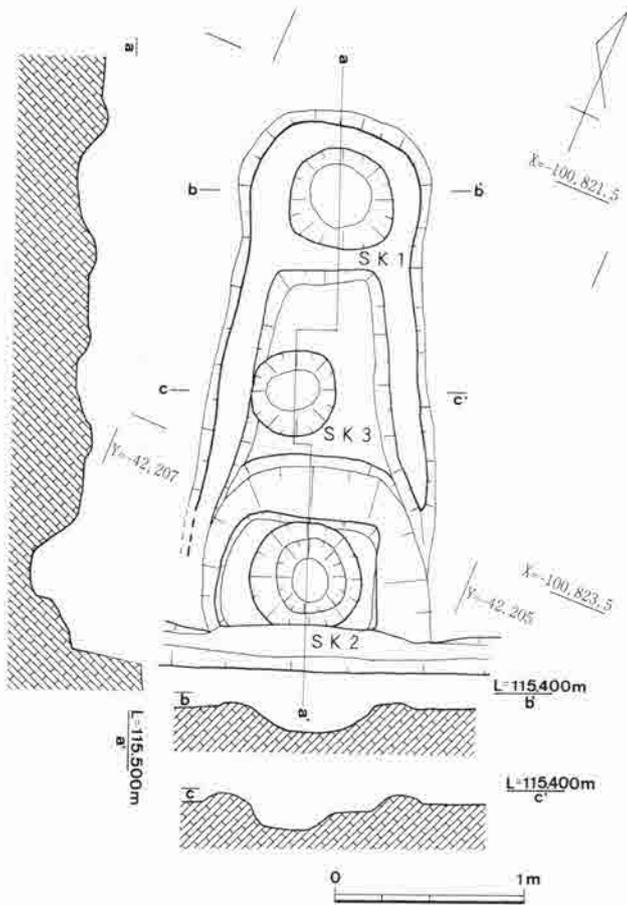
K1・3の底面には、焼成に伴うとみられる赤変が認められるが、SK2は、特にこうした変化は認められない。SK1は炉跡と考えられる。SK2を炭や灰などを貯蔵した土坑と考え、SK1とともに、炉として機能したと推測すると、土手に囲まれた遺構全体を連結炉として評価することも可能である。しかし、SK2からは、炭・灰の出土は顕著ではなく、貯蔵穴などの多目的土坑と考えておきたい。

**遺物の出土状況** 焼土・炭・灰に埋没した状態で、土器類を主体とする数多くの遺物が出土した。遺物の多くは二次的被熱により変色したもの、破片化したものが多いが、取り上げ後の復原作業の結果、完存するものが多いことがわかった。

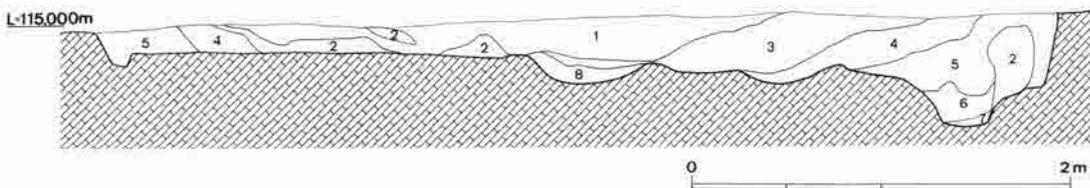
第53図は、住居床面における遺物の出土状況を示したものである。大半の土器は南壁側に集まり、残りの遺物も周壁に沿って点在することがわかる。上面が磨耗した台石状の石材が置かれていた。これらの遺物出土状況から見て、南壁側の空間は、おもに調理スペースとして利用されたと推測することができる。炉跡を囲む中央付近は、遺物が希薄であり、居所としておもに利用されたと推測することができる。

**竪穴式住居跡SH0345(第55図)** 調査地南東端で検出した「L」字状の溝である。溝は、幅約10~20cm、深さ約5cmである。竪穴式住居跡の周壁溝の一部だけがこのような溝として遺存したものと推測される。遺物の出土がなく時期は明らかでない。遺構の位置関係から時期を推測すると、SH0301と同一の主軸方位を有するので、これと同時期の竪穴式住居跡と考えられる。

**掘立柱建物跡SB0344(第54図)** 梁間3間、桁行2間の掘立柱建物跡である。主軸

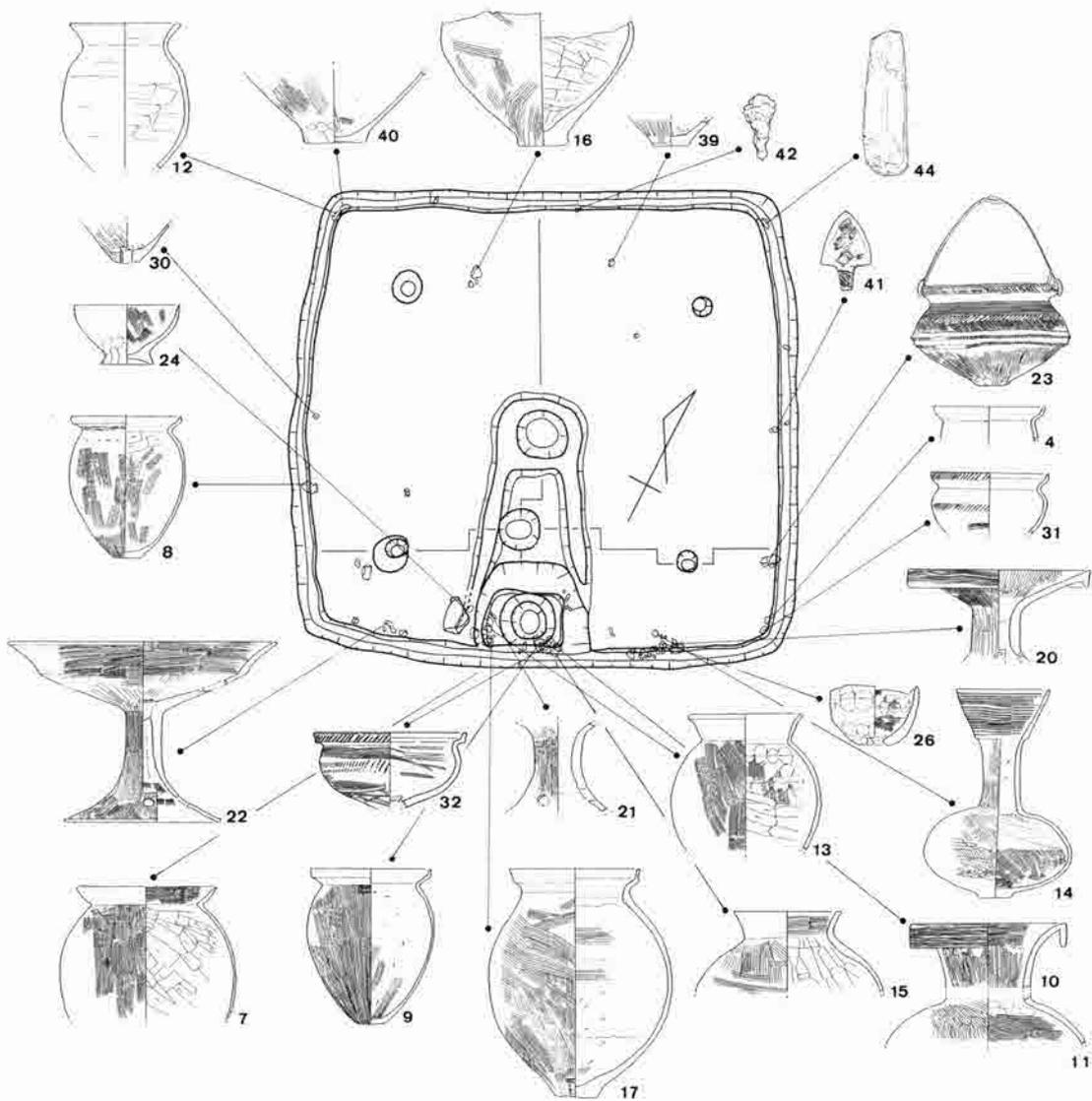


第51図 B地区竪穴式住居跡SH0301炉跡実測図



第52図 B地区竪穴式住居跡SH0301埋土の堆積状況

- |          |          |          |         |          |
|----------|----------|----------|---------|----------|
| 1. 黒色土   | 2. 赤褐色土  | 3. 黒色粘砂土 | 4. 黒灰色土 | 5. 黒色粘質土 |
| 6. 暗茶褐色土 | 7. 明茶褐色土 | 8. 茶褐色土  |         |          |



第53図 B地区竪穴式住居跡S H01遺物出土状況

は南北で、座標北にはほぼ等しい。梁間約2.2m、桁行約2.2mを測る。柱穴掘形は径20cm前後である。根石とみられる円礫が据えられた柱穴が2つある。遺物が出土しておらず、建設時期は明らかでない。A地区で検出した中世の掘立柱建物跡が座標北の主軸を有しており、同様の時期のものである可能性もある。

土坑S K 0339(第56図1) 長楕円形の土坑である。断面は逆台形である。長軸長約2.8m、短軸長約1.4m、深さは約0.6mである。埋土は、1：黒色粘質土である。2は地山である黄色粘質土である。埋土に遺物を含まない。

土坑S K 0342(第56図2) 不定型な土坑である。断面形は浅い皿状である。部分的に検出した。長軸長は不明である。短軸長約2.1m、深さは約0.5mである。埋土に遺物を含まない。

土坑S K 0338(第56図3) 不整形の土坑である。断面形は浅い皿状である。長軸長2.4m、短軸長2.3m、深さは約60cmである。埋土は、1：黒色粘質土、2：黒色粘質土(黄色粘土混じり)、3：黒色粘質土(礫混じり)、4は地山である黄色粘質土である。埋土に遺物を含まない。

土坑S K 0340(第56図4) 長楕円形の土坑である。埋土は、1：黒色粘質土、2：黄色粘質土(礫混じり)、3は地山である黄色粘質土である。長軸長3m、短軸長2.2m、深さは約50cmである。埋土に遺物を含まない。

土坑S K 0343(第56図5) 不整円形の土坑である。埋土は、1：黒色粘質土、2：黄褐色粘質土、3：黄色粘質土(礫混じり)、4は地山である黄色粘質土である。長軸長2.6m、短軸長2.2m、深さは約50cmである。埋土に遺物を含まない。

土坑S K 0341(第56図6) 不整円形の土坑である。長軸長3.2m、短軸長2.8m、深さは約60cmである。埋土は、1：黒色粘質土、2：黒色粘質土(黄色粘土混じり)、3：黄色粘質土(礫混じり)、4は地山である黄色粘質土である。埋土に遺物を含まない。

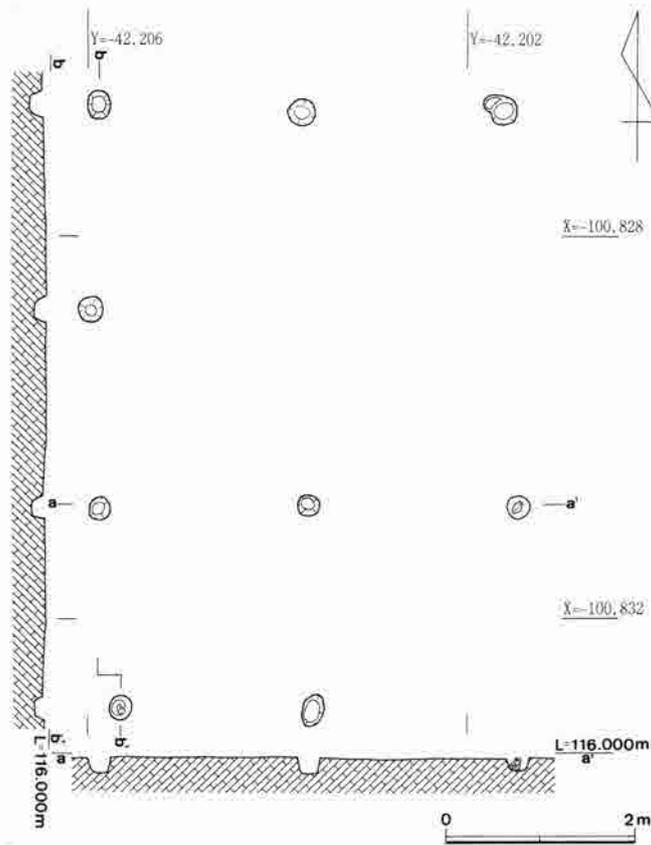
土坑S K 0337(第56図7) 不整円形の土坑である。長軸長4.2m、短軸長3.8m、深さは約1mである。埋土は、1：黒色粘質土、2：暗褐色砂礫、3は地山である黄色粘質土である。黒色粘質土の上から、砂礫が陥没したような堆積状況を示す。埋土に遺物を含まない。

土坑S K 0346(図版第46-(1)) 弥生時代後期の竪穴式住居跡と重複して検出した土坑である。黒色粘質土と黄色粘土を埋土とする土坑で、S K 0338に類似するものである。S H 0301に切られており、これ以前に形成された遺構であることがわかる。

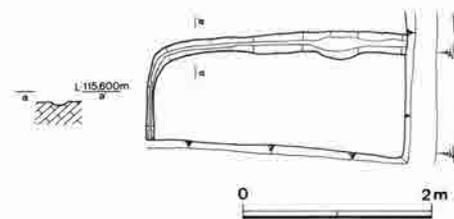
### (3) 出土遺物

#### ① A地区各遺構出土遺物

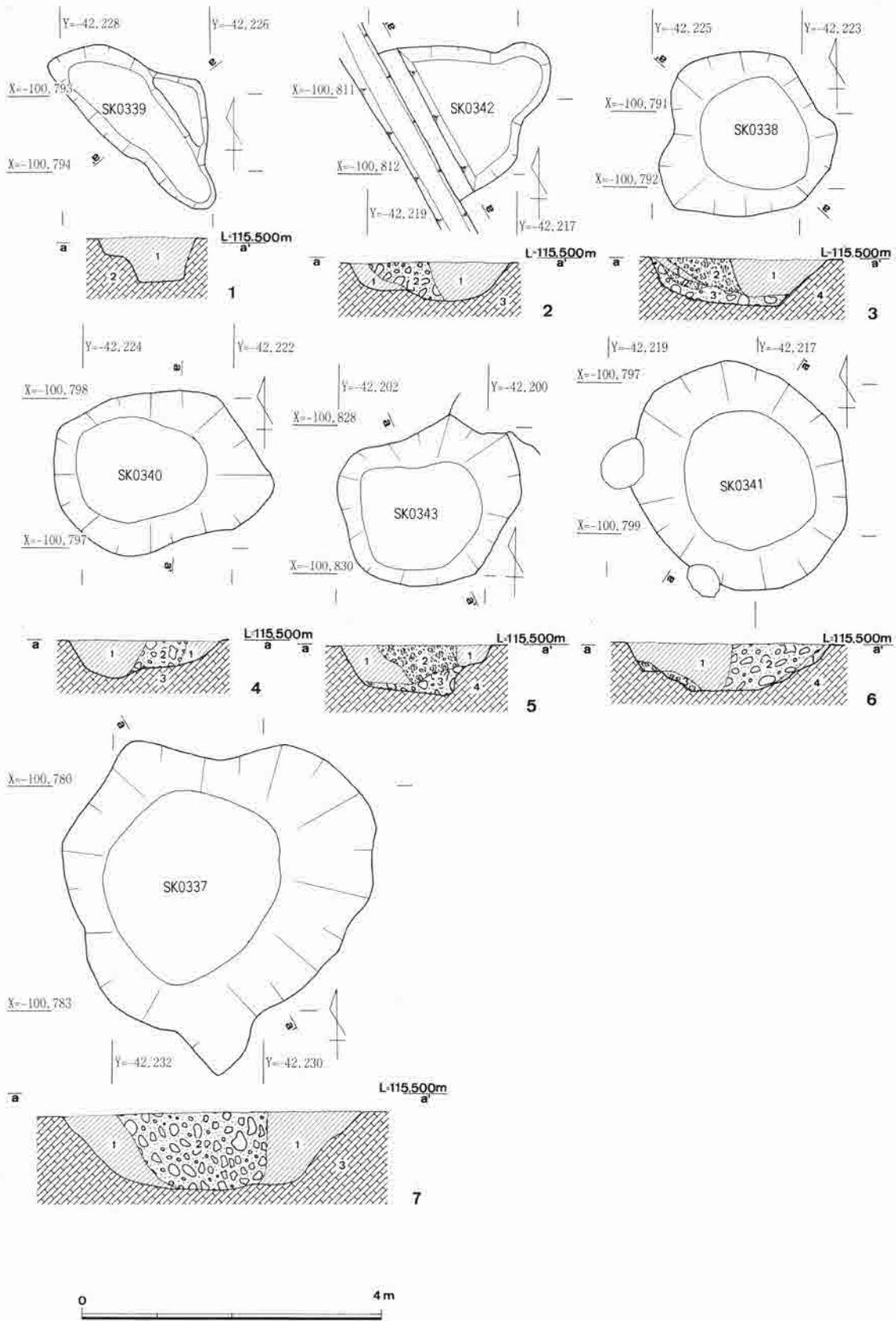
竪穴式住居跡S H 0307出土遺物(第58図) 竪穴式住居跡の埋土で検出した遺物である。細片化しており、全形が残るものはない。1は、広口壺の口縁である。口縁端部を拡張し、垂下する面を作る。2は、鉢である。椀形の体部と直立する口縁部を持つ。3は、高杯の脚部であろう。柱状の脚部を有するものである。4は、甕である。小形品である。頸部が「く」の字形に屈曲する。口縁端部をわずかに上に拡張し、狭い面を作る。5は、短く直立気味に立ち上がる口縁を持つ土器である。壺であろうか。6は、脚部を有するミニチュア土器の脚部だけが遺存したものである。



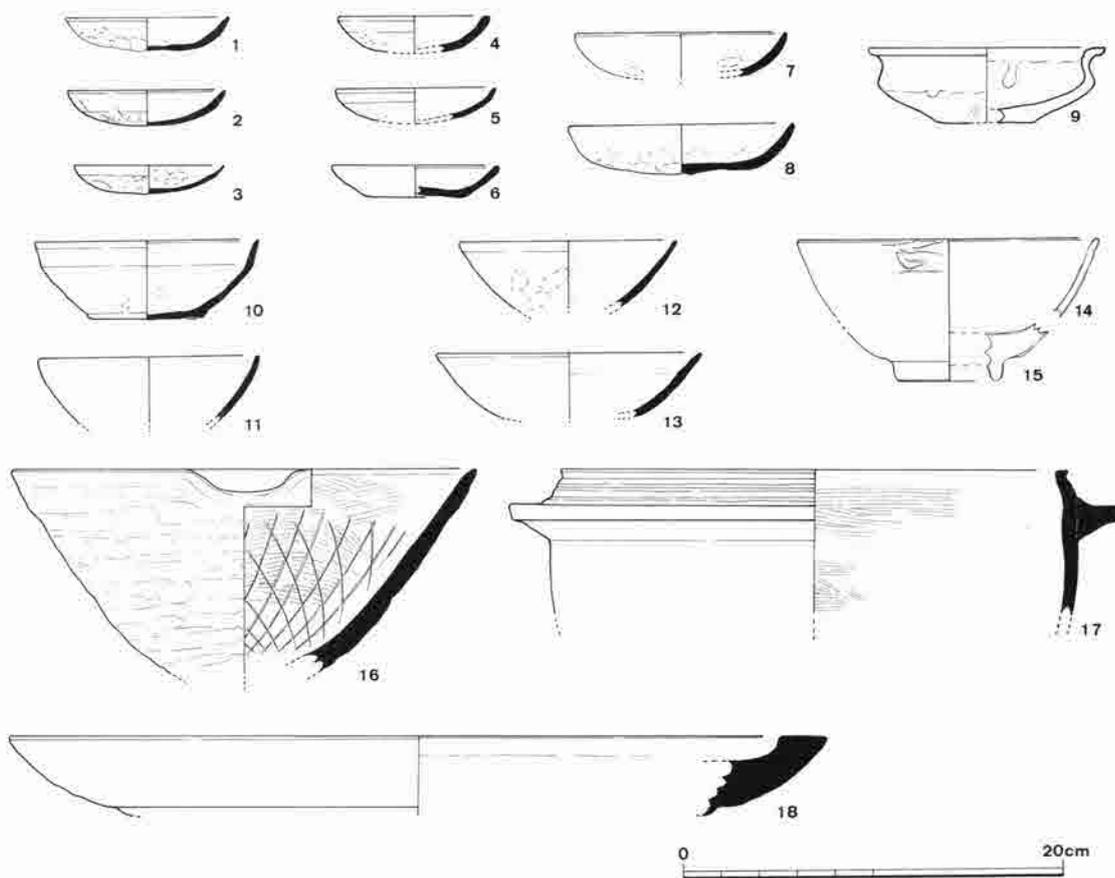
第54図 B地区掘立柱建物跡S B 0344実測図



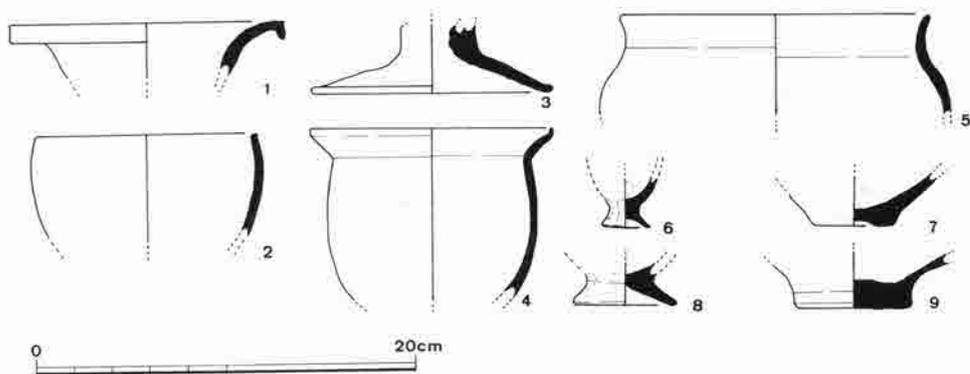
第55図 A地区竪穴式住居跡  
S H 0345実測図



第56图 B地区検出土坑実測図



第57図 A地区各遺構出土遺物実測図



第58図 A地区竪穴式住居跡S H0307出土遺物実測図

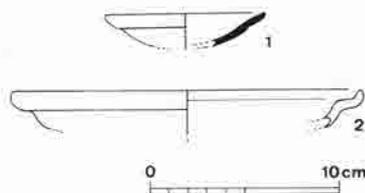
8は、台付き甕の脚台部と推測される。7は甕の底部である。  
9は壺の底部であろう。

床面においてガラス玉を1点検出した。水色の小玉である。

各遺構および包含層出土遺物(第57図)

1～5は、直径8～9cmの土師器皿である。底部外面に指頭  
圧痕が顕著に残る。口縁部に強い横ナデがみられる。6は、平  
底である。7・8は、直径が11～12cmの土師器皿である。口縁部を横ナデする。

9は、灰釉陶器である。暗青灰色の須恵質の器体に、暗緑黄色の釉薬がかけられている。釉薬



第59図 B地区包含層出土遺物

は、口縁部から体部にかけて限定的に施されている。底部は糸を用いた切り離し痕跡が未調整のまま残る。底部には、粘土を丸めてこしらえた簡略な脚台が3か所にある。2か所ははがれ落ちて、痕跡をとどめるのみである。古瀬戸の香炉であろう。

10～13は、瓦器碗である。10は、強いナデにより口縁部を屈曲させるものである。

14・17は、瓦質土器である。16は、片口の捏ね鉢である。内面に沈線による斜格子が施されている。外面にはヘラケズリと粗いナデ調整がみられる。接合痕が顕著にみられる。17は、羽釜である。口縁は内傾しつつ立ち上がる。口縁端部に水平な狭い面をつくる。口縁外面には、強いナデによる3条の凹線が認められる。鏝が水平にのびる。内面には粗いハケ調整がみられる。

14・15は、青磁碗である。出土場所は異なるが、同一個体とみられるものである。いずれも、ややくすんだ緑青色の厚い釉薬で覆われている。14は、碗の口縁部である。外面には、施釉前に施された沈線による雲雷文が認められる。15は、底部である。削り出しによる高台である。

18は、鏝状の石製品である。皿あるいは臼状の石製品であろう。内面は、研磨により平滑に仕上げられている。外面には、敲打による細かな加工痕跡がみられる。

## ②B地区各遺構出土遺物

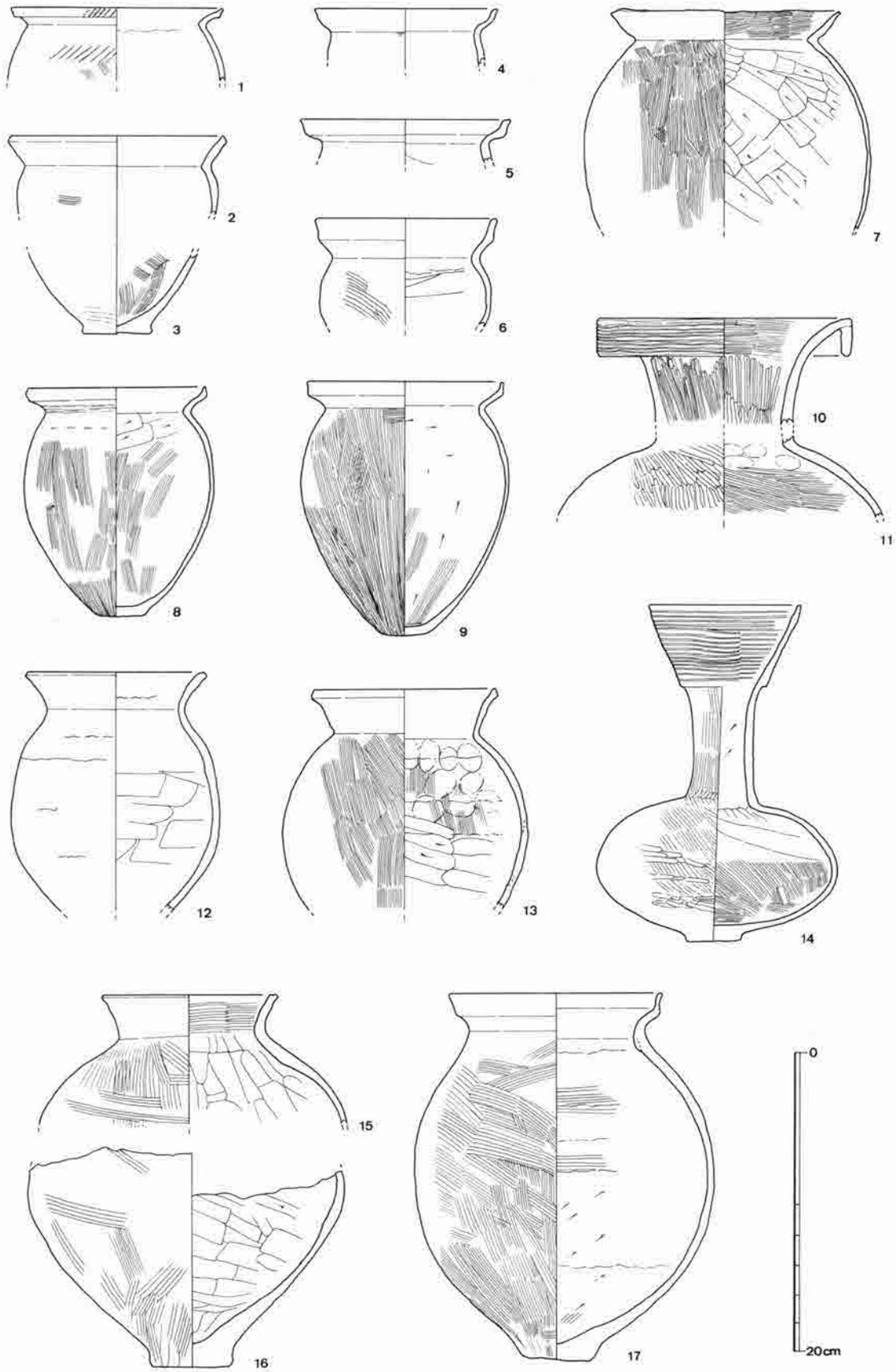
### 竪穴式住居跡S H0301出土遺物(第60～62図)

この住居跡からは、多数の遺物が出土した。出土遺物には、土器・石器・鉄器類がある。遺物は、床面直上あるいはこれを覆う炭灰層から出土しており、火災後に供献や投棄された状況を示すものはない。火災直前の生活遺物の配置状況が保存された好例といえる。遺物の出土状況は第53図に示すとおりである。個々の法量など詳細については付表4を参照されたい。

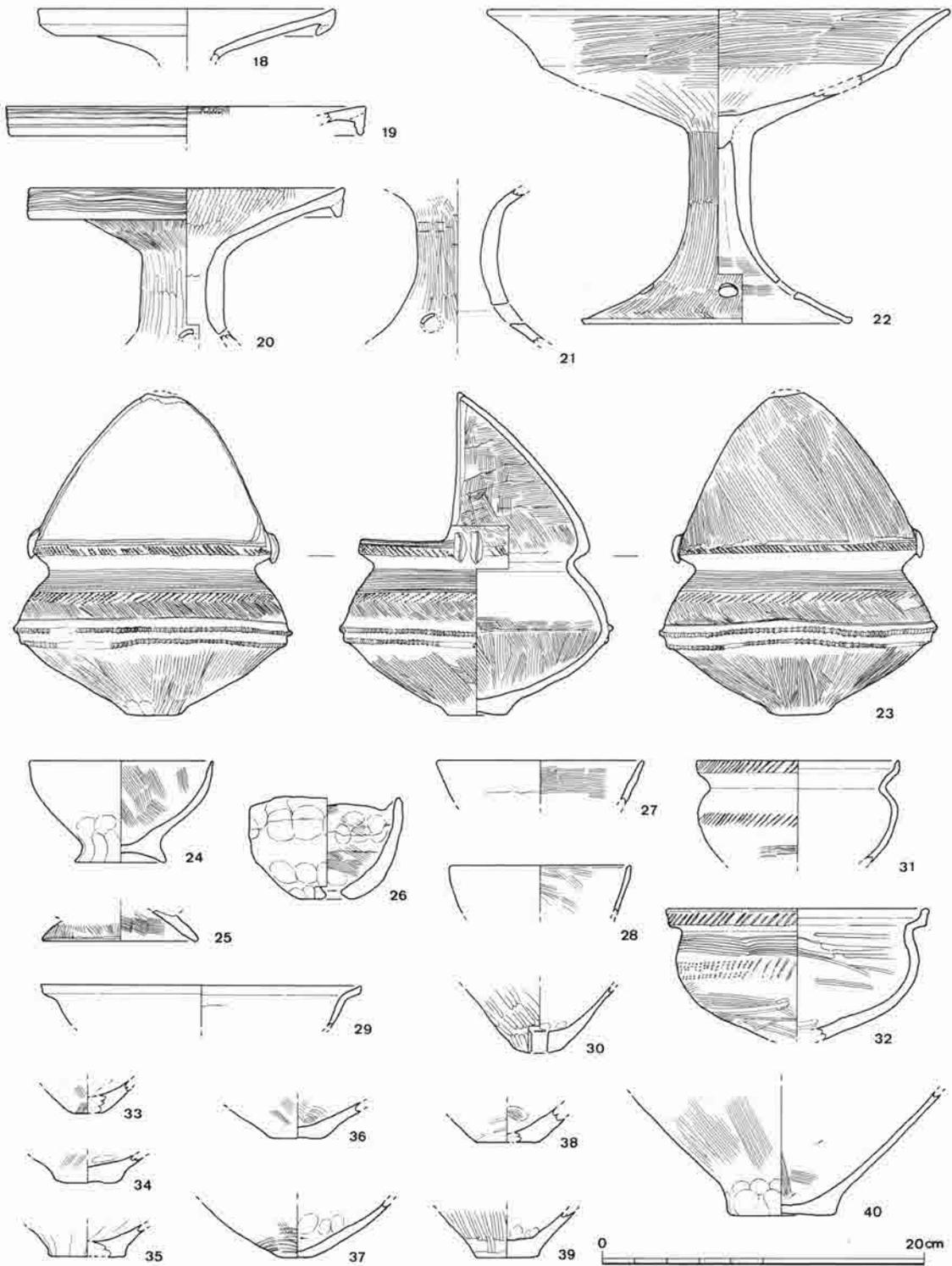
土器類(第60・61図1～40) 1～9・17は、甕である。1・2・7は、口縁部の断面形が「く」の字形で、端部に狭い面をもつものである。1は、口縁端部と体部に列点文が施されている。4～6・17は、二重口縁の甕である。17は器体が大きく、厚手である。5は、受け口状を呈する。9は二重口縁であるが、端面が狭く、8に近い。8は、口縁端部が短く内傾する。体部外面に刺突文がめぐる。8・9は、体部内面にヘラケズリの痕が残る。3・33・34・36・37・39は、甕の底部である。3の外面にはタタキメがある。3・34・36の底面はドーナツ状を呈する。

10～16は、壺である。10は、広口壺である。頸部は、直立した後にラッパ状に大きく開く。口縁部は、帯状の粘土を付加して垂下させ、広い端面を作る。この面に9～10条の擬凹線文を施す。器体内外面ともていねいにヘラ磨きを施す。11は壺の体部である。10と同一個体であろう。12・13・15は、直線的に立ち上がる短い口縁部をもつ壺である。16は15と同一個体であろう。14は、細頸壺である。精良な粘土を用いて作られた精製土器である。口縁部を拡張して広い端面を作り、多数の擬凹線文を施している。擬凹線文は15～16条認められる。櫛条の工具で、5～6条を一括して施文したとみられる。この土器は、北陸地方にみられる形式であり、この方面から搬入されたものであろう。35・40は壺の底部である。

18～21は器台である。18は斜め下方に垂下する口縁部を持つ。焼成があまく、器表面の風化が著しい。19・20は、口縁端部を拡張し直立する端面を作る。端面には、それぞれ4条の擬凹線文



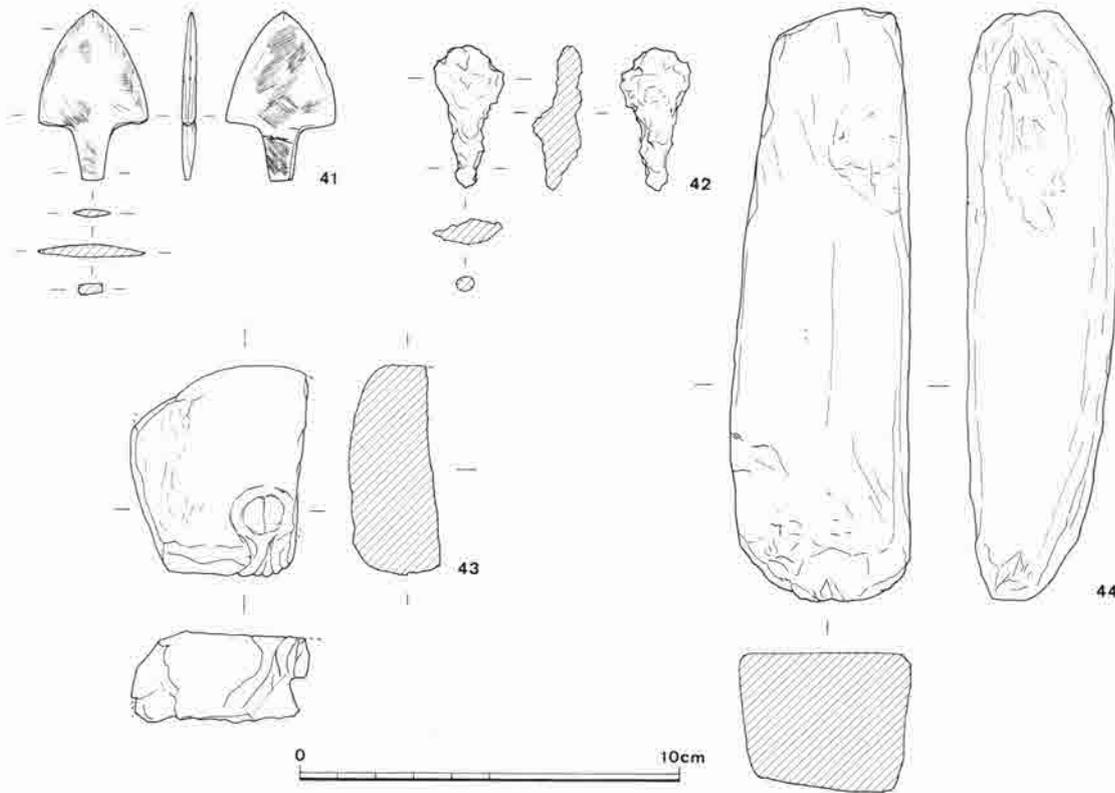
第60図 B地区竪穴式住居跡SH01出土遺物実測図(1)



第61図 B地区竪穴式住居跡SH01出土遺物実測図(2)

が施されている。21は、器台の脚部である。22は高杯である。ほぼ完存する。屈曲して大きく外反する口縁部を有する。

23～32は鉢である。23は、いわゆる手焙形土器である。受け口状の口縁部を有する鉢に、フード状の天井部が取り付けられた土器である。口縁部の2か所に2個一対の棒状浮文、口縁端部に



第62図 B地区竪穴式住居跡S H01出土遺物実測図(3)

列点文、肩部に櫛描き直線文と列点文、最大腹径部に刻み目を施した突帯文などの加飾が施されている。精良な粘土で作られた精製品である。手焙形土器としては加飾が少なく、古相である。24は、台付鉢である。25は、脚部の一部が遺存したものである。台付甕の脚部の可能性もある。26は、粗製の有孔鉢である。接合痕と指頭圧痕が顕著である。29は、口縁が外反し、端部に面をもつ皿状の鉢である。27・28は、口縁が直線的に開く薄手の鉢である。30は、有孔鉢である。外方向へ直線的に立ち上がる口縁部を有するものであろう。31・32は、受口状口縁を有する鉢である。口縁部と肩部に列点文がめぐる。32は、肩部の列点文の上に櫛描直線文が施されている。

そのほかの遺物(第62図41~44) 41は、有茎の磨製石鏃である。東壁の周壁溝の中央付近で検出した。黒色の粘板岩製である。ていねいに仕上げられた優美な製品である。42は、鉄鏃である。北壁の周壁溝埋土より出土した。有茎である。錆が進んで変形しているため、形態についての詳細は明らかでない。43は、住居跡埋土(炭・灰層)から出土したものである。砂岩製の石製品である。各面に、研磨による平滑な面が認められる。砥石の再生品であろう。上面と側面の一部に、線刻による文様が刻まれている。44は、砥石である。北東隅の周壁溝内で検出した。

#### 4. まとめ

今回の調査では、以上で報告したような遺構・遺物を検出した。今回の調査成果と今後の課題について列記し、あわせて気づいた事柄を記してまとめとしたい。

##### (1) 遺跡の形成時期と期間

野条遺跡は、京都府教育委員会・八木町教育委員会の実施した分布・試掘調査により、古代の集落遺跡であることが明らかにされた。詳細については明らかでなかったが、今回の調査では、集落の一部が確認されるとともに、時期を特定しうる良好な遺物なども出土したことにより、遺跡の成立時期と継続時期を具体的に知ることができた。

野条遺跡に人々が定住し、集落を形成し始めた時期は、弥生時代後期後半期と推測される。弥生時代中期の磨製石鏃などが出土しているのも、これ以前にも生業の場としてこの地が利用された可能性はある。居住域として集落が成立したのは、弥生時代後期のことである。古墳・奈良・平安時代の遺物や遺構が検出されていないので、これらの時代についての様子は分からない。鎌倉時代頃には、畑作の畝とみられる溝々が形成された。付近に同時代の集落が存在すると予想される。室町時代には、輸入陶磁器や古瀬戸香炉などを有する、地元有力者の居宅とみられる掘立柱建物が建てられた。これらのことから、野条遺跡は、弥生時代後期に成立して以降、室町時代にかけて、一部断続はあるものの継続して営まれた集落遺跡とみることができる。

## (2)各遺構について

①土坑群 不定形の大型土坑を多数検出したが、中世に掘削された2例を除くと、いずれも遺物を含まず、時期を特定することができなかった。時期は特定できないものの、弥生時代後期の竪穴式住居跡に壊されているものが2例あることから、弥生時代後期以前に形成された可能性がある。

大型土坑の大半は、類似する平面・断面形態のほか、黒色土と地山あるいはその下層に位置する砂礫層を埋土とするという共通点を持つ。遺構の性格や形成要因については明らかでないが、以下のような推測を案として提示しておく。

1)遺構形成が人為的なものであるとすると、用土を採取した跡(粘土採掘坑)などを考えることができる。しかし、砂礫が多いこの場所に、特に優れた粘土が採取されるわけではなく、疑問が残る。

2)人為的遺構ではなく、風倒木など自然的産物である可能性も否定できない。台風などで一斉に風倒木が発生し、その根に土砂が引き上げられて土坑状の窪地が形成された。そして、木材の腐植に伴って根と周辺土砂が埋土となったものと考えれば、相互の類似性の説明がしやすい。

②火災焼失住居 SH0301は、焼土・炭化材・炭・灰などが多量に出土したことから、火災による焼失住居跡と考えられるものである。屋内には、土器が良好な状態で残されていた。土器は、屋根材などの炭化物・灰に覆われた状態で検出されており、出火後、土器類を片付ける間もなく屋根が崩落したことが推測される。

焼失住居は、その原因として、①物送り儀礼としての意図的な放火、②戦乱による焼き討ち、③住居廃絶に伴う廃屋の焼却(鎮火祭祀など)、の3つに大きく分類されるという<sup>(註5)</sup>。①③は儀礼的要素をうかがわせる特殊な土器や配置を伴う。②は、政治的統合が激化した弥生時代後期～古墳時代にかけての西日本に多く、集団間の緊張を背景とした戦闘行為によりもたらされたと推測されている。

これ以外にも、不慮の出火や天災といった事故による発生原因が考えられる。事故による火災はしばしば発生しうるものであり、考古学的状況としては、不慮の出火のため屋内の遺物は片付ける間もなく放棄され、②に近い状況を示すと思われる。本例は、不慮の出火という点で②の類型に該当するといえるが、戦火によるかどうかは判断できない。野条遺跡では、八木町教育委員会調査地区<sup>(注6)</sup>でも、焼失住居とみられる同時期の竪穴式住居跡が報告されているので、こうした事例が増加すれば、火災原因の中に社会的背景を読み取ることができるようになるかもしれない。

(田代 弘)

- 注1 田代弘「野条遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注2 作業員 今福富佐子・木村まさ江・滝口来吉・竹井笑子・中山田健一・均山本千代子・西垣久江・橋本宇平三賢・羽野博文・松倉和美・松本安治・松本敏子  
調査補助員 天池佐枝子・奥浩和・田村和成  
整理員 稲垣あや子・小寺明美・中川香代子・中島恵美子
- 注3 京都府教育委員会『京都府遺跡地図[第3版] 第2分冊』2002
- 注4 谷口悌「池上遺跡発掘調査概要[第2次調査]」(『八木町文化財調査報告書』第4集 八木町教育委員会 1998ほか)
- 注5 高田和徳「焼失住居跡の分布とその意味」(『考古学ジャーナル 11月号』No.509 (株)ニュー・サイエンス社) 2003
- 注6 谷口悌「町内遺跡発掘調査概要 野条遺跡(第6次調査)」(『八木町文化財調査報告書』第10集 八木町教育委員会) 2003

付表3 A地区出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土地点	法量(cm)			備考
				口径	器高	底径	
1	土師器	皿	SK0305 P-1	8.4	1.6	—	
2	土師器	皿	SK0335 P-2	8.0	2.0	—	
3	土師器	皿	pit15	7.8	1.6	—	
4	土師器	皿	pit0317	8.0	2.0	—	
5	土師器	皿	SK0334	8.8	2.0	—	
6	土師器	皿	包含層	8.8	1.6	4.8	
7	土師器	皿	SD0335	11.2	2.4	—	
8	土師器	皿	SD0349	2.4	2.4	—	
9	灰釉陶器	香炉	pit6	3.4	4.0	4.8	古瀬戸
10	瓦器	椀	SK0315	11.4	4.0	5.6	口縁部を強く横ナデ。丹波型
11	瓦器	椀	SK0313	11.6	—	—	器表面磨滅
12	瓦器	椀	SH0307	—	—	—	器表面磨滅
13	瓦器	椀	pit13	13.6	—	—	器表面磨滅
14	青磁	椀	SD0335	15.6	—	—	口縁部外面に雲雷文
15	青磁	椀	包含層	—	—	5.2	15と同一個体とみられる
16	瓦質土器	こね鉢	SD0304	24.4	—	—	内面：斜格子の刻線、外面：粗いナデ
17	瓦質土器	羽釜	SB0349	26.1	—	—	口縁部外面に凹線状の調整痕
18	石製品	臼か	SD0335	42.8	—	—	石皿状の形態

付表4 竪穴式住居跡SH0301出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)			手法上の特徴
		口径(残)	器高(残)	底径(残)	
1	甕	11.6	7.6	—	口縁端部と体部外面に列点文、内外面ナデ
2	甕	14.4	7.2	—	体部外面ハケ後ナデ、内面ナデ
3	甕	—	6.0	4.8	外面タタキ、内面ハケ
4	甕	12.0	4.0	—	体部内外面ナデ
5	甕	15.0	2.8	—	体部内外面ナデ
6	甕	8.0	7.2	—	外面ハケ
7	甕	15.2	14.8	—	体部外面、口縁内面ハケ、体部内面ヘラ削り
8	甕	11.6	15.6	—	肩部に列点文、体部外面ハケ、内面削りのちハケ
9	甕	12.8	16.8	2.8	体部外面ハケ、体部内面ヘラ削り後、一部ハケ
10	広口壺	16.8	13.3	—	口縁部に擬凹線文、内外面ヘラ磨き
11	壺	12.0	15.0	3.2	10と同一個体か 外面ヘラ磨き、内面ハケ
12	壺	12.0	14.4	—	内外面ナデ
13	壺	12.0	22.4	—	外面ハケ、内面上半をハケ、下半部をヘラ削り
14	長頸壺	12.0	22.4	3.2	口縁部に擬凹線文、外面ヘラ磨き、内面下半をハケ
15	壺	11.6	8.8	—	体部外面・口縁部内面ハケ、内面過半ナデ
16	壺	—	14.8	5.6	15と同一個体か
17	壺	14.0	24.8	4.4	体部外面ハケ、体部内面上半ハケ、下半ヘラ削り
18	器台	18.4	4.0	—	内外面ナデか
19	器台	22.4	2.0	—	口縁部に擬凹線文
20	器台	19.8	9.6	—	口縁部に擬凹線文、内外面ヘラ磨き
21	器台	—	10.0	—	外面ヘラ磨き
22	高坏	28.8	19.6	16.8	坏部内外面ヘラ磨き、脚部内面ハケ
23	鉢	15.2	20.4	3.2	手焙り形土器、外面ハケ、内面上半ナデ、下半ハケ
24	鉢	7.4	6.4	3.6	小形の台付鉢
25	甕か	—	2.0	9.6	台付甕の脚部か
26	有孔鉢	9.6	6.4	3.2	粗製
27	鉢	12.8	2.8	—	外面ナデ、内面ハケ
28	鉢	11.6	2.8	—	外面ナデ、内面ハケ
29	鉢	20.0	2.8	—	内外面ナデ
30	有孔鉢	—	4.4	2.4	外面タタキ
31	鉢	12.8	6.4	—	口縁部と体部に烈点文、下半にタタキ
32	鉢	16.4	8.0	—	口縁部と体部に烈点文、ハケ
33	底部	—	—	2.4	甕、外面ハケ
34	底部	—	—	3.6	甕、外面ハケ
35	底部	—	—	4.8	壺か
36	底部	—	—	2.8	甕、外面ハケ
37	底部	—	—	1.6	甕、外面タタキ
38	底部	—	—	3.6	甕
39	底部	—	—	3.6	壺か 外面ハケ
40	底部	—	—	6.4	壺か

## 4. 芝山遺跡<sup>しばやま</sup>平成14・15年度発掘調査概要

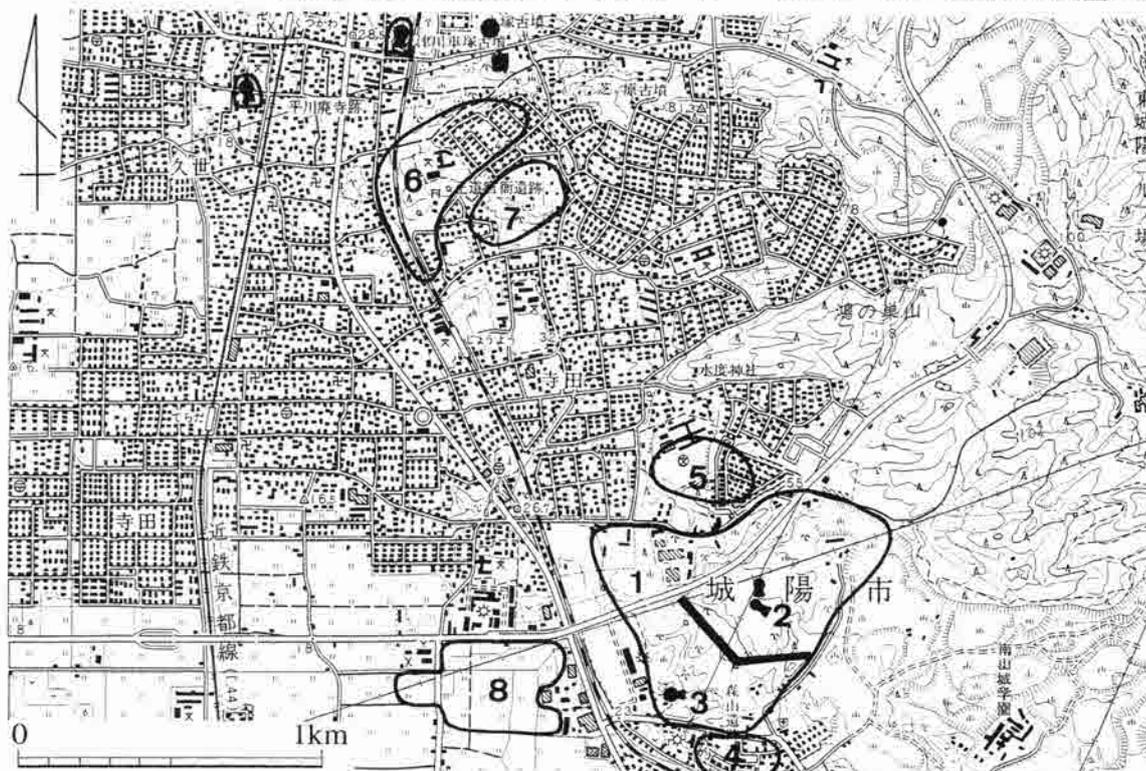
### 1. はじめに

今回の調査は、府道上狛城陽線緊急地方道路整備B事業に伴うものである。芝山遺跡は、城陽市南東部の標高約40m前後の丘陵上に所在し、遺跡の範囲は東西約950m、南北約840mに及ぶ。

芝山遺跡の調査は、当調査研究センターおよび城陽市教育委員会などにより、昭和52年度以降、10数次の調査が実施されてきた(付表5)。遺跡は丘陵全体に広がっており、城陽市内では芝ヶ原遺跡・正道遺跡とならんで遺構・遺物の分布状況は広範である。

調査は、平成13年度に遺構の範囲を確認するため道路計画路線帯の全域について、おもに東側で試掘調査(第1～11トレンチ)を行い、北側の第1トレンチでは、古墳時代の竪穴式住居跡などを確認し、南側の第6トレンチでは奈良～平安時代の遺物を包含する溝状遺構が検出された。さらに路線が「く」の字状に東へ屈曲する部分に入れた第7トレンチでは、古墳の周濠と考えられる溝状遺構をみつけている。

以上のような試掘結果を受けて、平成14年度は比較的遺構密度の高かった第1・5～7トレンチを拡張するかたちで面的調査を実施した(それぞれA・D～F地区)。また、これらの調査のほ



第63図 調査地位置図(国土地理院1/25,000宇治)

- |          |            |          |         |           |
|----------|------------|----------|---------|-----------|
| 1. 芝山遺跡  | 2. 梅の子塚古墳群 | 3. 長池古墳  | 4. 森山遺跡 | 5. 宮ノ平古墳群 |
| 6. 芝ヶ原遺跡 | 7. 正道遺跡    | 8. 小樋尻遺跡 |         |           |

付表5 芝山遺跡主要発掘調査一覧

調査主体	担当者	調査期間	調査面積 (㎡)	主要遺構	主要年代
城陽市教育委員会	近藤義行 ほか	S52.4.1～ 5.2	約560	方形周溝墓・竪穴式住居跡・ 掘立柱建物跡	5C後半～ 8C代
当調査研究センター	小池寛	S60.5.21～ S61.3.25	約3,760	古墳	5C末～ 6C末
当調査研究センター	小池寛	S61.5.6～ 9.2	約1,400	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡	6C後半～ 9C代
城陽市教育委員会	小泉裕司	H6.2.1～ 3.26	約300	掘立柱建物跡・柵列・土坑	7C中頃～ 8C中頃
城陽市教育委員会	小泉裕司	H6.8.1～ H7.1.31	約753	古墳・埋葬施設・溝・土坑	5C中頃
当調査研究センター	古瀬誠三	H8.12.17～ H9.1.27	約180	旧河道	不明
城陽市教育委員会	小泉裕司	H10.5.12～ 10.31	約1,089	溝・土坑・柵列・柱穴群・道 路状遺構？	8C代
当調査研究センター	増田孝彦	H10.12.9～ H11.2.18	約680	古墓	8C後半～ 9C初頭
城陽市教育委員会	小泉裕司	H14.5.9～ 5.31	約240		
当調査研究センター	柴暁彦 伊賀高弘	H13.12.17～ H14.2.27	約1,600	古墳・溝・柱穴群・竪穴式住 居跡・掘立柱建物跡	5C後半～ 9C前半
当調査研究センター	増田孝彦 岡崎研一 柴暁彦	H14.7.8～ H15.2.27	約4,500	古墳・溝・柱穴群・竪穴式住 居跡・掘立柱建物跡	5C後半～ 9C前半
当調査研究センター	柴暁彦 竹井治雄 野島永	H15.4.16～ 8.13	約1,800	竪穴式住居跡・掘立柱建物 跡・溝	8C前半～ 9C代

かにB・C・G地区の試掘調査を行った。

調査期間は、平成14年7月8日～平成15年2月27日までで、調査面積は約4,500㎡である。

平成15年度は、路線帯の北側のA地区の拡張およびH地区の調査を行った。A地区については、官衙風建物配置の建物群の範囲確認を目的とし、H地区では追加の試掘調査を行った。

調査期間は、平成15年4月16日～8月13日までで、調査面積は約1,800㎡である。

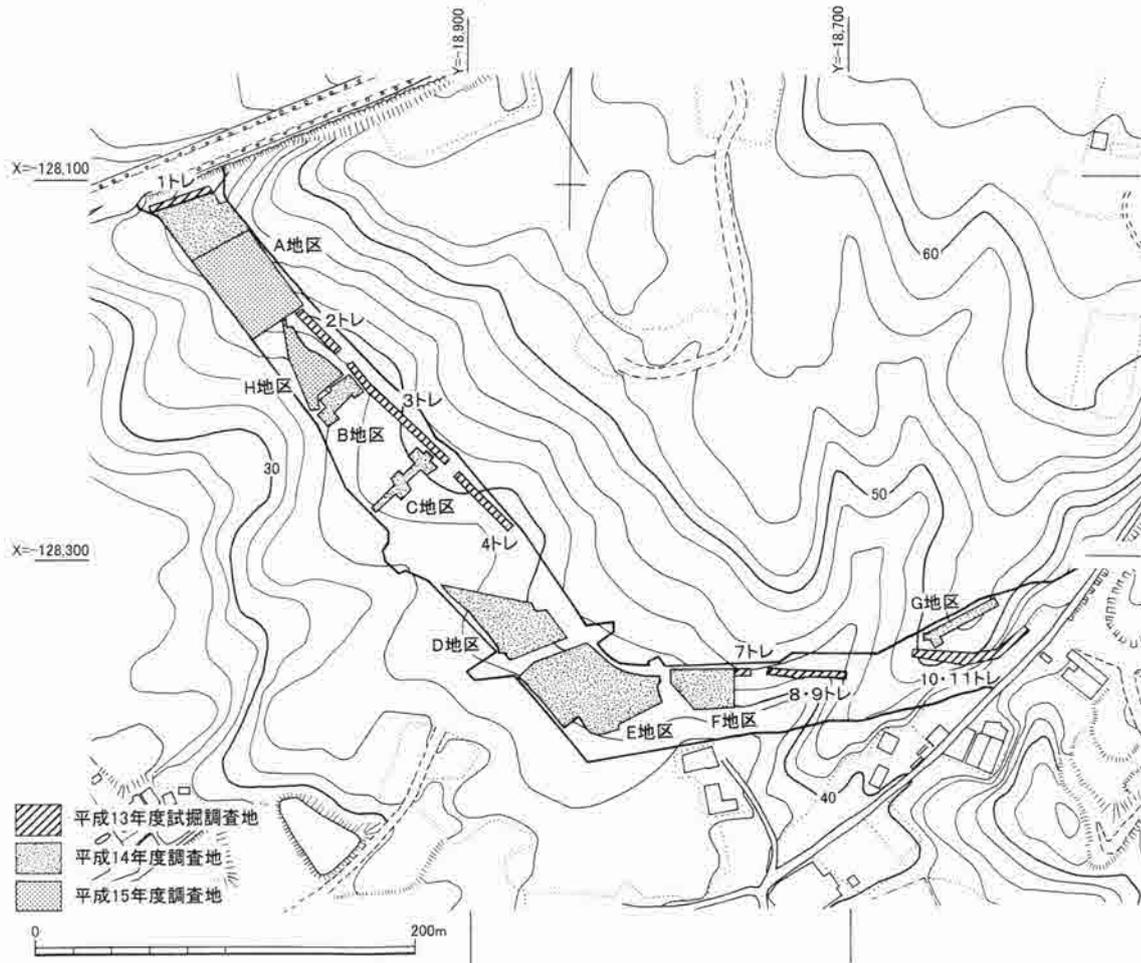
調査期間中、京都府宇治土木事務所をはじめ、京都府教育委員会、城陽市教育委員会、城陽市都市整備部都市整備課・同土木課、地元有志の方々、調査補助員ならびに整理員(注1)の協力を得た。記して感謝したい。

なお、調査に関する費用は、京都府土木建築部が全額負担した。

また、平成14・15年度のA・FおよびG地区で検出された古墳については、関係機関と名称について協議した結果、F地区の古墳は、芝山古墳群第Ⅲ支群第1号墳(以下、芝山Ⅲ-1号墳とする)、G地区のものは、同支群第2号墳(以下、芝山Ⅲ-2号墳とする)、A地区の円墳については、芝山古墳群第Ⅰ支群第11号墳(以下、芝山Ⅰ-11号墳とする)と呼称することになった。

## 2. 周辺の環境

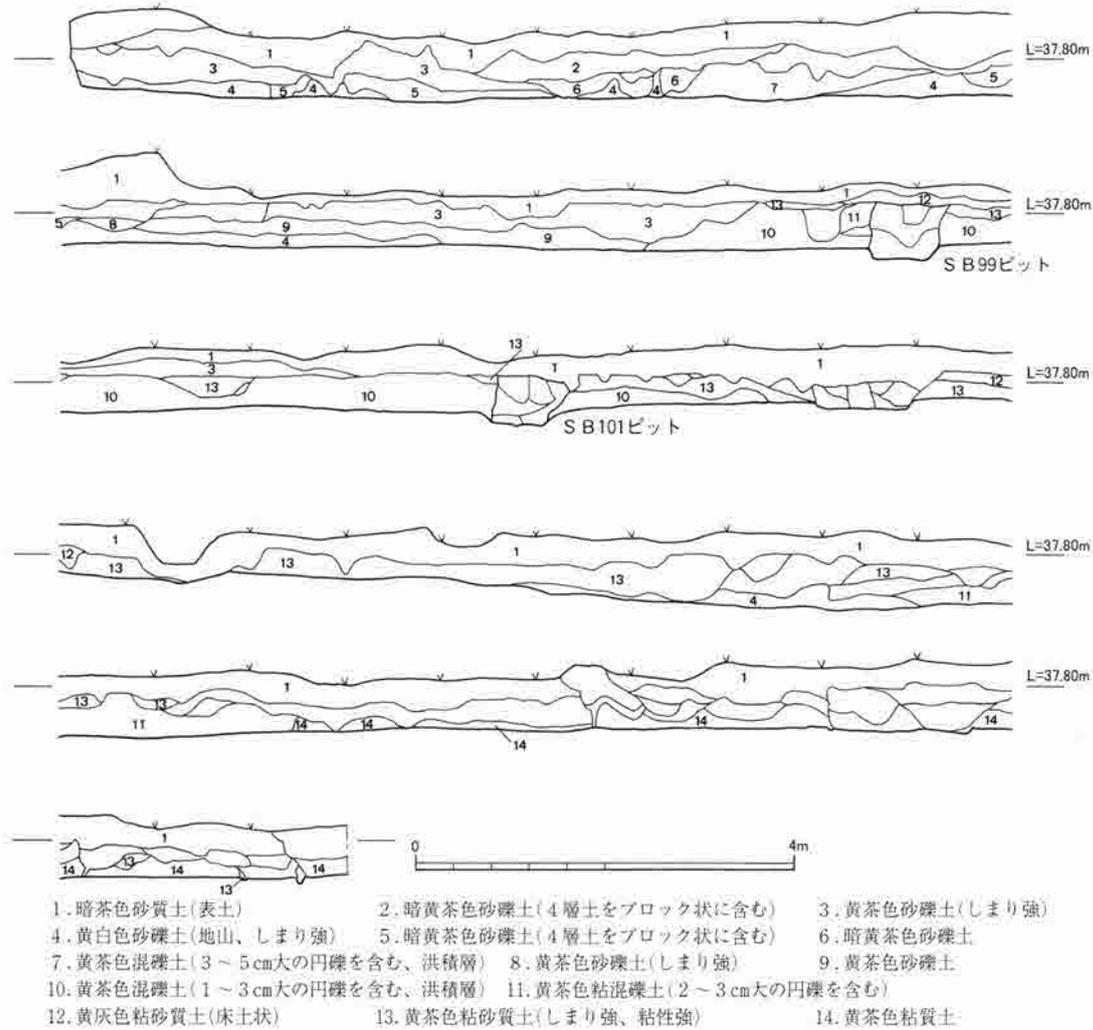
醍醐山地と低地との間に大阪層群からなる起伏地(宇治丘陵)が存在する。この宇治丘陵の原型は、轡池付近から広がる扇状地である。この扇状地の端部をJ R奈良線が扇形に通じる。芝山遺跡は、J R奈良線長池駅北方約500mの宇治丘陵西端に広がる。今回の調査で検出した遺構の年



第64図 調査地配置図

代は、おもに古墳～平安時代であり、この時期の主要遺跡を取り上げて概観する。

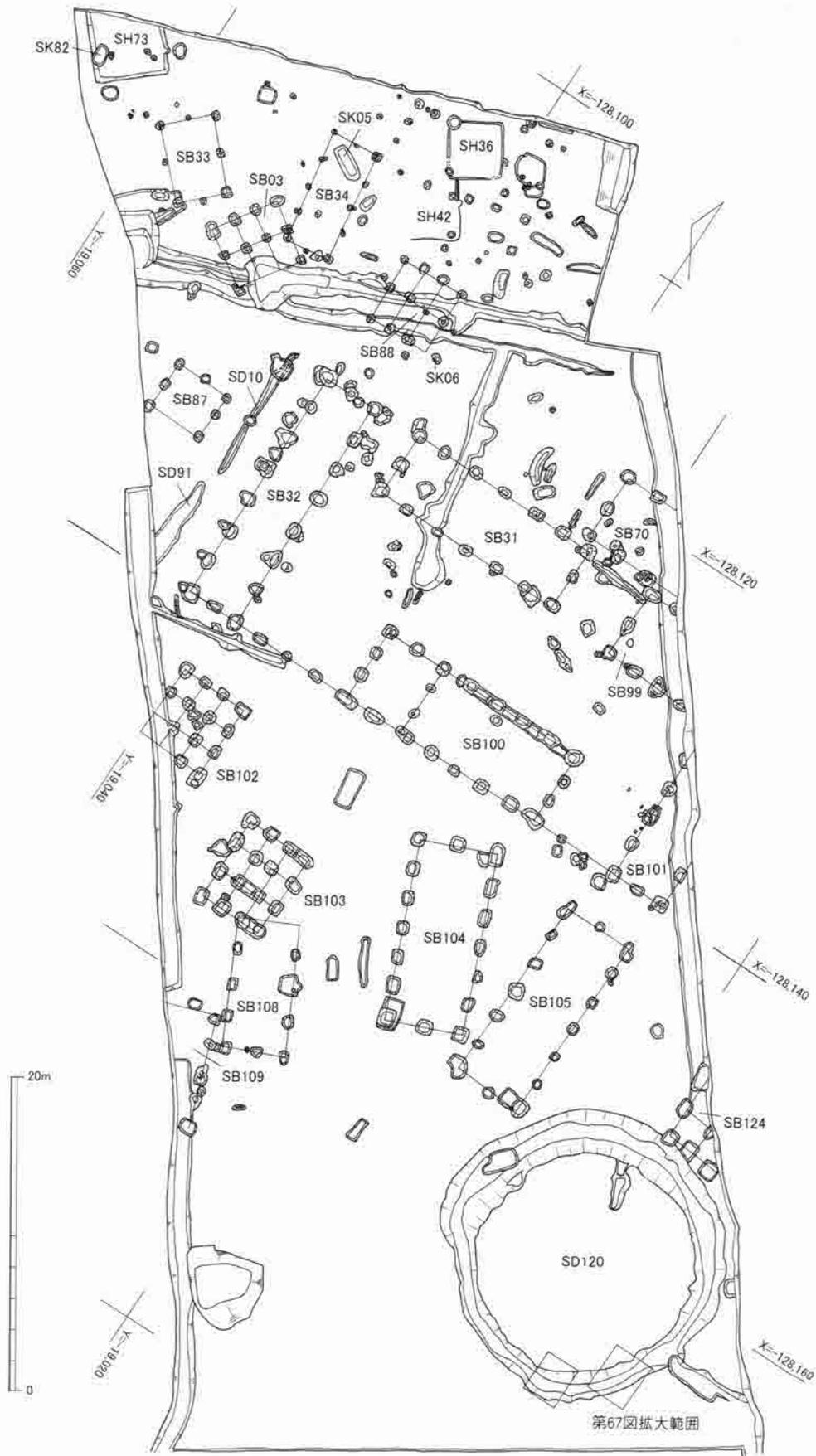
4世紀前半には、芝山遺跡北西端で竪穴式住居跡1基を確認している<sup>(注2)</sup>。同一丘陵上に所在する梅の子塚古墳群の集落基盤を考えると貴重な資料とされる。4世紀中頃～後半には、当遺跡南側に隣接する森山遺跡においても、方形周溝状遺構と竪穴式住居跡からなる集落が存在する<sup>(注3)</sup>。方形周溝状遺構については豪族居館とする見方が強い。その周囲を2～3基の竪穴式住居跡が移動しながら存在したとする。4世紀後半には、2基の前方後円墳からなる梅の子塚古墳群が、芝山遺跡のほぼ中央部に所在する。5世紀に久津川地域に出現する大首長墳の前段階で、ヤマト王権と関連のある在地勢力の首長墳と考えられている。5世紀前半には、久津川古墳群において中核をなす山城最大の前方後円墳である久津川車塚古墳が築造される。また、全長80mの帆立貝式の古墳である丸塚古墳も、この時期に築造された古墳であり、久津川車塚古墳に先行して築かれた首長墓と考えられている。5世紀中頃には、久津川車塚古墳の北側に築造された梶塚古墳がある。竪穴式石室を主体とする古墳で、須恵質焼成に近い埴輪の出土は、須恵器生産技術の導入と関連するとされている<sup>(注4)</sup>。また、芝山古墳群も、この時期から築造された古墳群である。小型方形墳の築造に始まり高塚古墳へ移行し、小型低墳丘化の後、さらに小型化する。6世紀末には土壙墓の築造を最後に造墓活動は停止する<sup>(注5)</sup>。5世紀後半には、宮ノ平古墳群や、今回発見された芝山古墳<sup>(注6)</sup>



第65図 A地区土層断面図

群第Ⅲ支群1・2号墳が築造される。宮ノ平古墳群は、方墳の変遷を知る上で貴重な資料とされる。芝山遺跡南西隅には、6世紀中頃に築造された長池古墳<sup>(注7)</sup>がある。この古墳は木棺直葬墳で、群集墳出現の直前の古い形態の葬法を踏襲した古墳とされる。また、芝山古墳群と同じ丘陵上にあり、旧勢力(在地勢力)の再編成の結果、出現したとされている。6世紀後半になると、墓域として利用されていた芝ヶ原丘陵上に集落が営まれ、6世紀末まで続く。このように丘陵上に集落が営まれる様は、芝山遺跡や森山遺跡でもみられる。芝ヶ原遺跡では、7世紀初頭から掘立柱建物跡へと移行する。

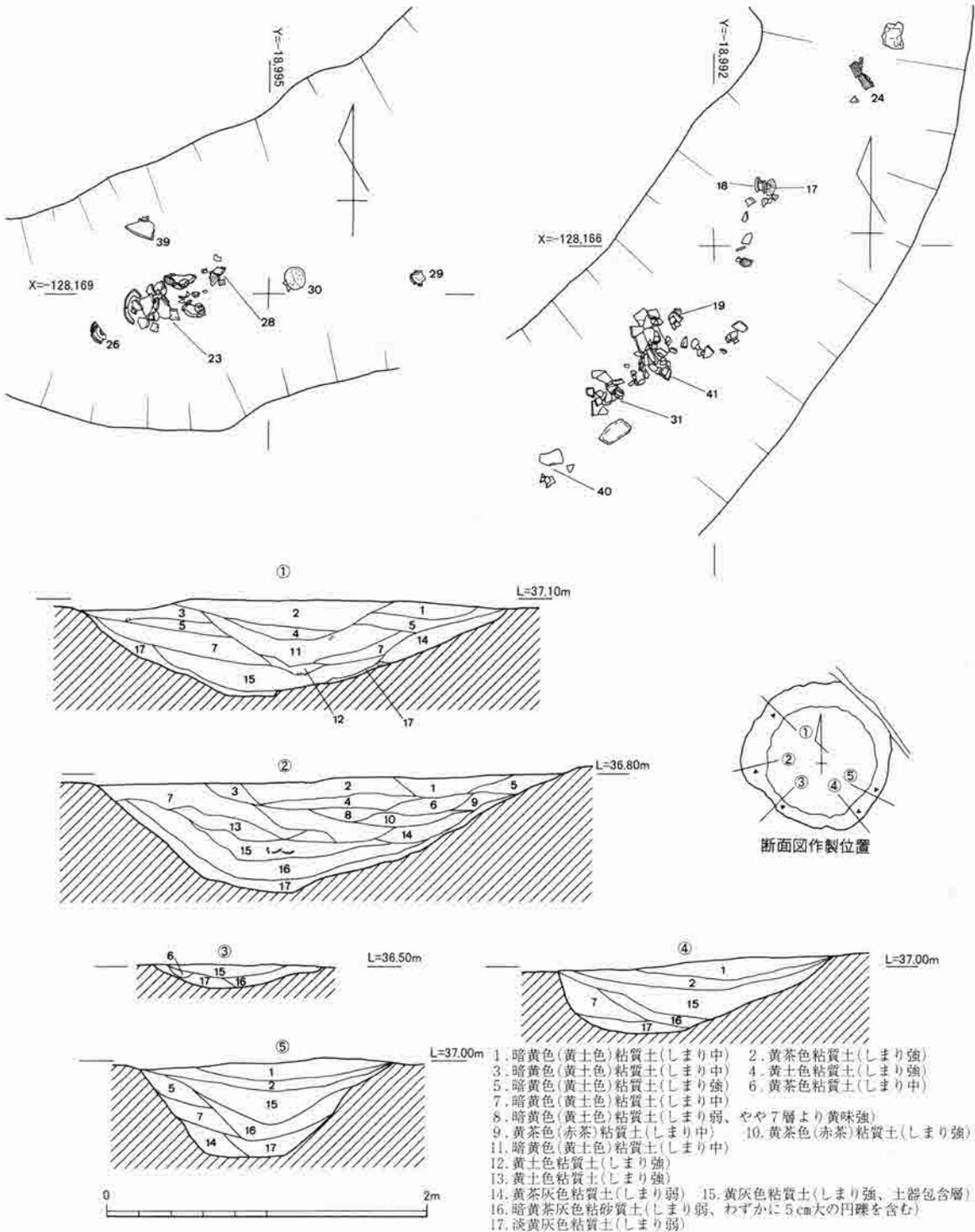
7世紀中頃~9世紀初頭は、芝ヶ原古墳群が位置する丘陵裾部に、正道遺跡が展開する。規格性を持つ大規模な建物群は、評衛的な施設から郡衛的な施設へと移行したとされる。建物の時期から官衛Ⅰ~Ⅲ期が想定され、山中敏史氏は、2間×7間以上の長舎的建物からなる官衛Ⅱ期の遺構を「口」字省略変形型とし、官衛Ⅲ期の遺構を「品」字省略変形型と称している<sup>(注8)</sup>。また、正道遺跡西側には、8世紀後半に創建されたとされる平川廃寺や、8世紀前半に創建され、法起寺式の建物配置をとる久世廃寺がある。平川廃寺は、恭仁宮造営や国分寺修理事業とのかかわりの中で建立されたとされる。久世廃寺は、平城宮や恭仁宮、奈良薬師寺と同じ瓦が供給されており、



第66図 A地区遺構配置図

中央政府の寺院と深く結びついていたとされる。久世廃寺は、8世紀中頃に整備され、9世紀初頭には廃絶したと考えられている。このほか、ほぼ同時期の寺院跡としては、宇治市の広野廃寺がある。広野廃寺は、JR奈良線新田駅東側に所在する。<sup>(注10)</sup>

これらの飛鳥・白鳳時代の寺院を結ぶかたちで、北陸・東山併用道が想定されている。しかし『延喜式』に駅の記載が無く、どのあたりを通過していたかについては不明である。高橋美久二氏は、芝山遺跡を縦断するように北陸・東山併用道を想定されている。昭和60・61年には、芝山遺



第67図 芝山 I-11号墳 S D 120平面および断面図(遺物番号は実測図に対応)

跡から平行する2条の溝を検出している。この溝の間隔が12mを測ることや、同氏が想定されている推定路線付近から検出したことから、<sup>(注1)</sup>両側溝の可能性が高いとされている。

(岡崎研一)

### 3. 調査の概要

#### (1) A地区(第66図、図版第51～61)

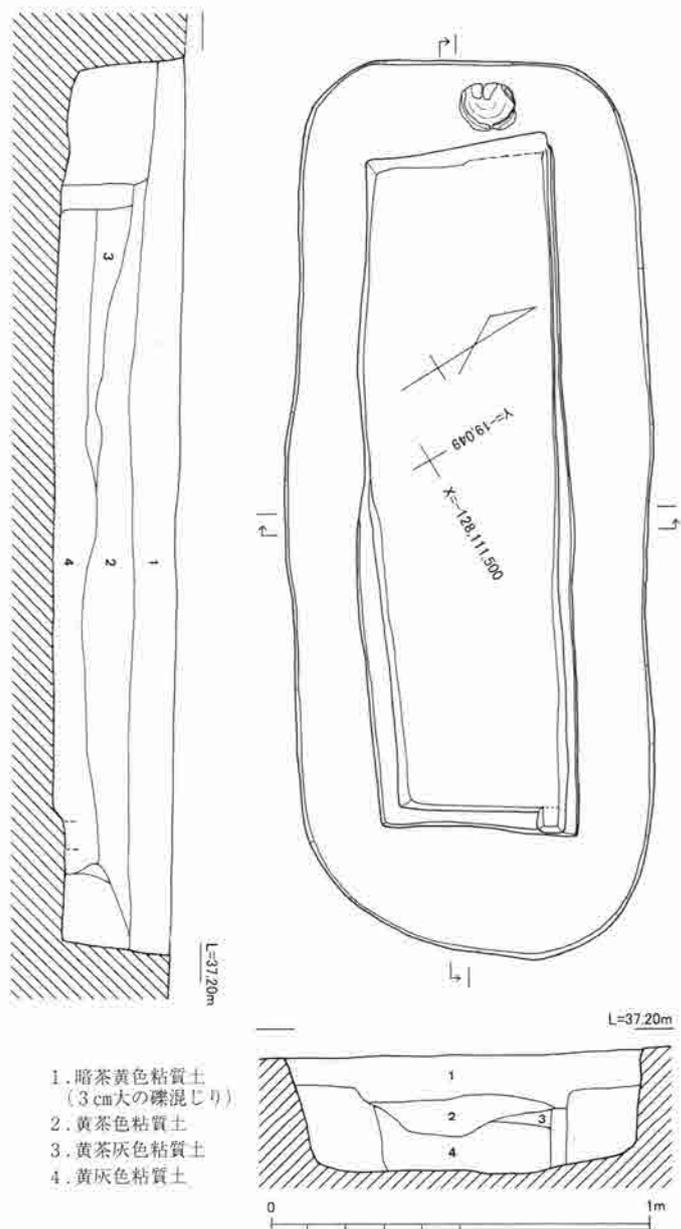
1)層序(第65図) 調査地の現況は、自然に繁茂したと考えられる竹林となっていた。基本的に竹林の表土直下GL-0.4m(標高約37.8m)が遺構検出面となる。遺構検出面は黄褐色の粘質土ないしは洪積世の礫層である。これらの地層は木津川の段丘層にあたり、大きな意味では大阪層群に属している。全体的に黄褐色粘質土層と礫層が互層となっており、場所によっては礫層が隆起している部分もある。土層堆積状況は水平堆積というよりは複雑に波打っている。攪乱は表土から切り込んでいる場所もあり、遺構検出面以下に攪乱が及ぶところもみられた。基本的に調査地内で遺物包含層はみられない。

今回の遺構の中心となる古墳時代と飛鳥～奈良時代の遺構面は同一面である。真北から約12°西に振る南北方向の近世以降の耕作溝群も多数みられた。中世の遺構・遺物はみられず、奈良時代以降に大規模な削平(整地)がなされたことが予想される。

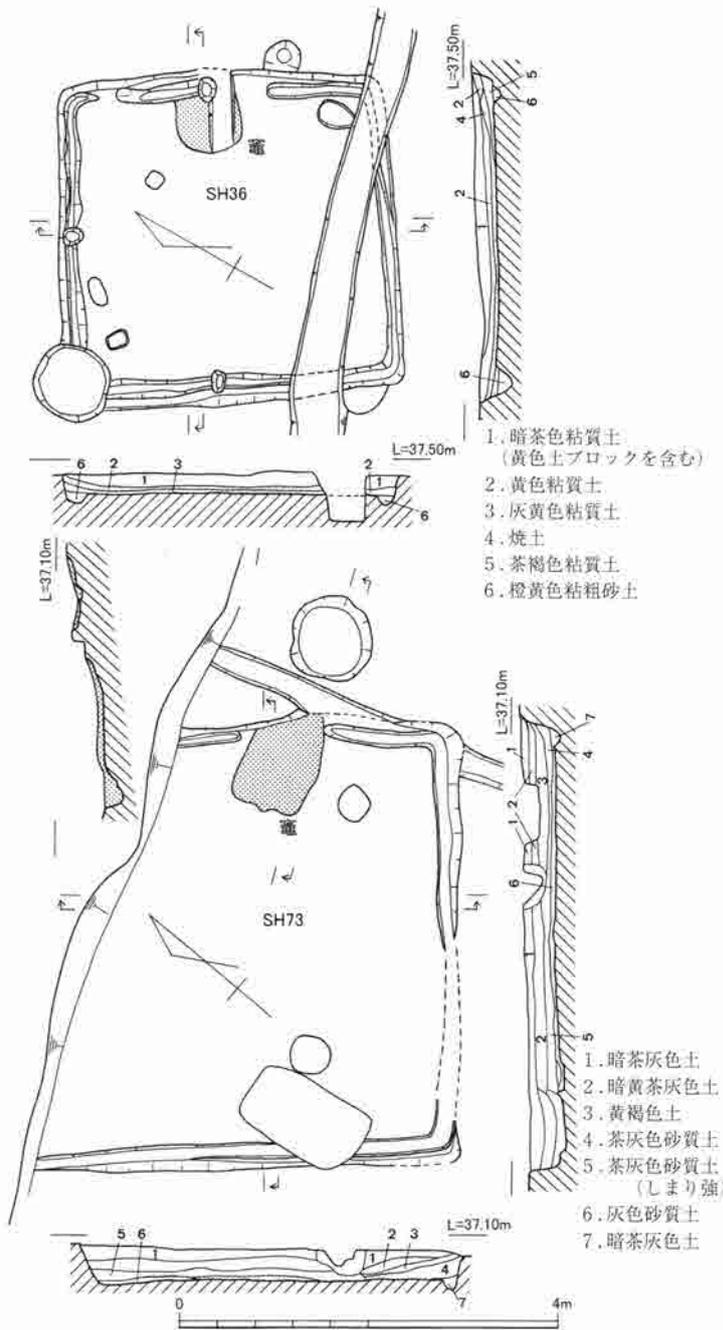
2)遺構の概要 平成14・15年度の調査成果を合わせて記述する。

A地区は計画路線の一番北側に位置する。調査地付近の標高は約37mを測る。地形は北東側から南西側にゆるやかに傾斜する台地上であり、そのなかでも比較的平坦面に立地している。

調査は平成13年度に府道(山城運動公園線)に並行して北東-南西方向に幅4m、長さ31mにわたって試掘調査を行い、竪穴式住居跡2基・ピット群を検出した(第1トレンチ)。



第68図 土坑S K05実測図



第69図 竪穴式住居跡 S H36・73実測図

0.5mを測る。一方、西側は溝幅2.7~2.8m、深さ0.6~0.7mを測る。古墳の形状は高塚古墳と思われ、周溝内に石材がみられなかったことから、木棺直葬墳と考えられる。出土遺物は周溝の全域でみられたが、中層および下層に集中し、特に南側では下層にまとまって遺物が出土した(第67図)。

埋土の堆積状況は、下層に墳丘からの流入土が堆積し(16・17層)、その上に遺物を包含する層がみられる(15層)。上層は、墳丘の削平土と考えられる土で整地され埋没している。出土遺物は、須恵器・土師器・紡錘車などである(第108図)。遺物は、古墳の築造時期を示すものと、周溝の埋没過程で混入したもの、後に述べる建物群の築造段階で周溝の整地に伴い混入したものがある。

平成14年度は、平成13年度に検出した遺構の範囲を確認する目的で、試掘トレンチを含め南側に約800㎡を拡張し調査を行った。遺構は北側を中心に比較的密にみられ、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などを検出した。この調査地の南側では、主軸を真南北に向けた掘立柱建物跡を2棟検出した。

平成15年度は、昨年度の掘立柱建物跡の規模と範囲確認でさらに南側を拡張した。調査面積は、全体で約1,800㎡となり、最終的に建物跡総数18棟、円墳1基が見つかった。

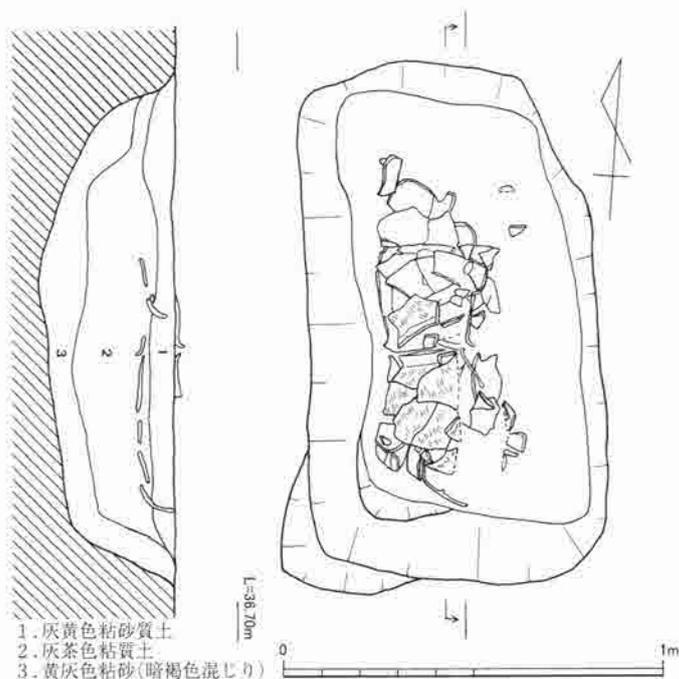
### 3) 検出遺構

①古墳時代 円墳・竪穴式住居跡・土壙墓・木棺墓・土器棺墓などがある。

芝山I-11号墳 S D120 直径約16mを測る円墳である。調査では、周溝のみが見つかった。周溝の深さは一定せず、周溝の北東側および南西側は浅くなっていた。そのほかの部分は比較的良好に残っていた。周溝の規模は南側の溝は溝幅1.5~1.7m、深さ0.45~

また周溝内から、主体部に副葬されていたと思われる紡錘車が出土しており、主体部はすでに削平を受けたものと考えられる。しかし、紡錘車以外の副葬品は出土しなかった。周溝の南東側では、溝の底面が被熱により赤変している箇所が認められたが、周溝の掘削に伴うものかどうかは判断できなかった。

また、周溝内の北西側で、溝内埋葬と思われる土坑状の遺構を検出したが、出土遺物はみられなかった。古墳の所属時期は、出土した遺物から6世紀前半と考えられる。



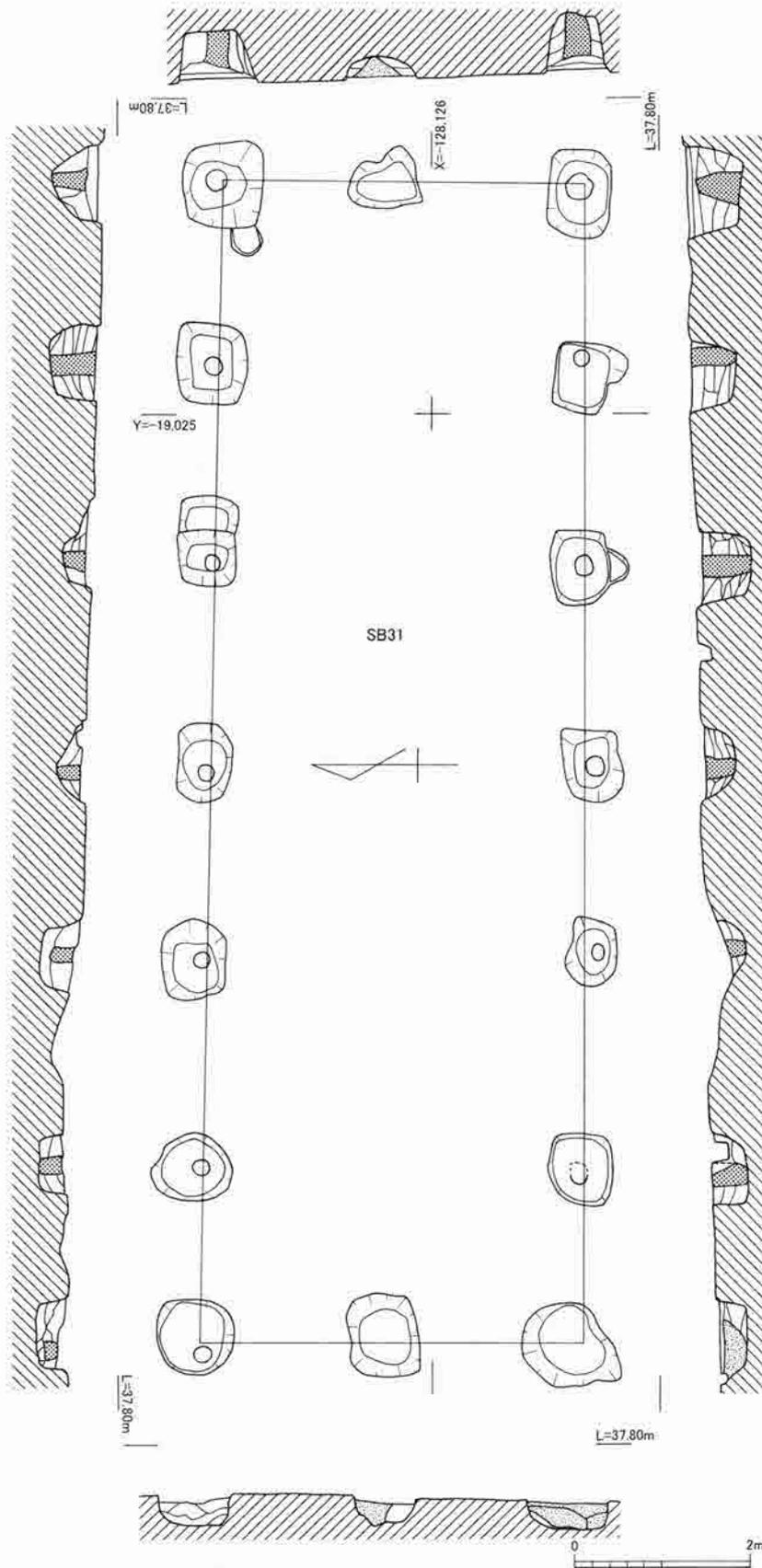
第70図 土坑S K 82実測図

#### 竪穴式住居跡S H 36(第69図) 調査

地の北側で検出した。規模は3.5×3.6m、検出面からの深さ0.25mを測る。東側壁の中央部分に竈が取り付く。竈は造り付けの竈というより、床面が焼けた状態で焼土のみが認められた。住居跡の壁際の周囲には周壁溝がめぐる。床面は、精査を行ったが主柱穴はみつからなかった。埋土中から土師器杯(第106図3)が出土しているが混入遺物と考えられ、時期の詳細については不明である。

付表6 掘立柱建物跡一覧表

建物番号	分類	方位	棟方向	建物規模	掘形規模
SB31	A 1 群	真北	東西	桁行 6 間(12.6m)×梁間 2 間(4.2m)	0.6~0.9m
SB32	A 1 群	真北	南北	桁行 7 間(15.6m)×梁間 2 間(3.5m)	0.7~0.9m
SB70	A 2 群	真北	東西	桁行 3 間(6.3m)以上×梁間 2 間(4.2m)	0.8m
SB87	A 1 群	真北	南北	桁行 4 間(6.5m)以上×梁間 2 間(3.6m)	0.5m
SB99	A 1 群	真北	南北	桁行 3 間(5.4m)以上×梁間 2 間(4.2m)	0.6~1.0m
SB100	A 1 群	真北	東西	桁行 7 間(14.4m)×梁間 3 間(4.8m)	0.6m
SB101	A 1 群	真北	南北	桁行 3 間(4.2m)以上×梁間 2 間(3.6m)	0.6~0.9m
SB102	A 2 群	真北	南北	東西 3 間(4.2m)×南北 3 間(5.0m)	0.7~1.0m
SB103	A 2 群	真北	南北	東西 3 間(4.4m)×南北 3 間(5.4m)	0.7~1.0m
SB105	A 2 群	真北	南北	桁行 6 間(12.6m)×梁間 2 間(4.8m)	0.5~0.9m
SB124	A 1 群	真北		2 間(3.6m)以上×2 間(3.6m)以上	1.0m
SB104	B 群	N23° W	南北	桁行 6 間(11.6m)×梁間 2 間(5.0m)	0.8~1.0m
SB108	B 群	N26° W	南北	桁行 4 間(8.4m)×梁間 2 間(3.6m)	0.5m
SB109	B 群	N19° W	南北	桁行 4 間(7.2m)×梁間 1 間(1.8m)以上	0.6m
SB03	そのほか	N35° W	東西	3 間(4.4m)×2 間(4.0m)	0.6m
SB33	そのほか	N45° W	南北	桁行 2 間(5.0m)×梁間 2 間(3.6m)	0.5~0.7m
SB34	そのほか	N10° W	南北	桁行 4 間(7.4m)×梁間 2 間(3.0m)	0.3~0.5m
SB88	そのほか	N5° W		東西 3 間(4.4m)×南北 2 間(4.2m)	0.5~0.6m



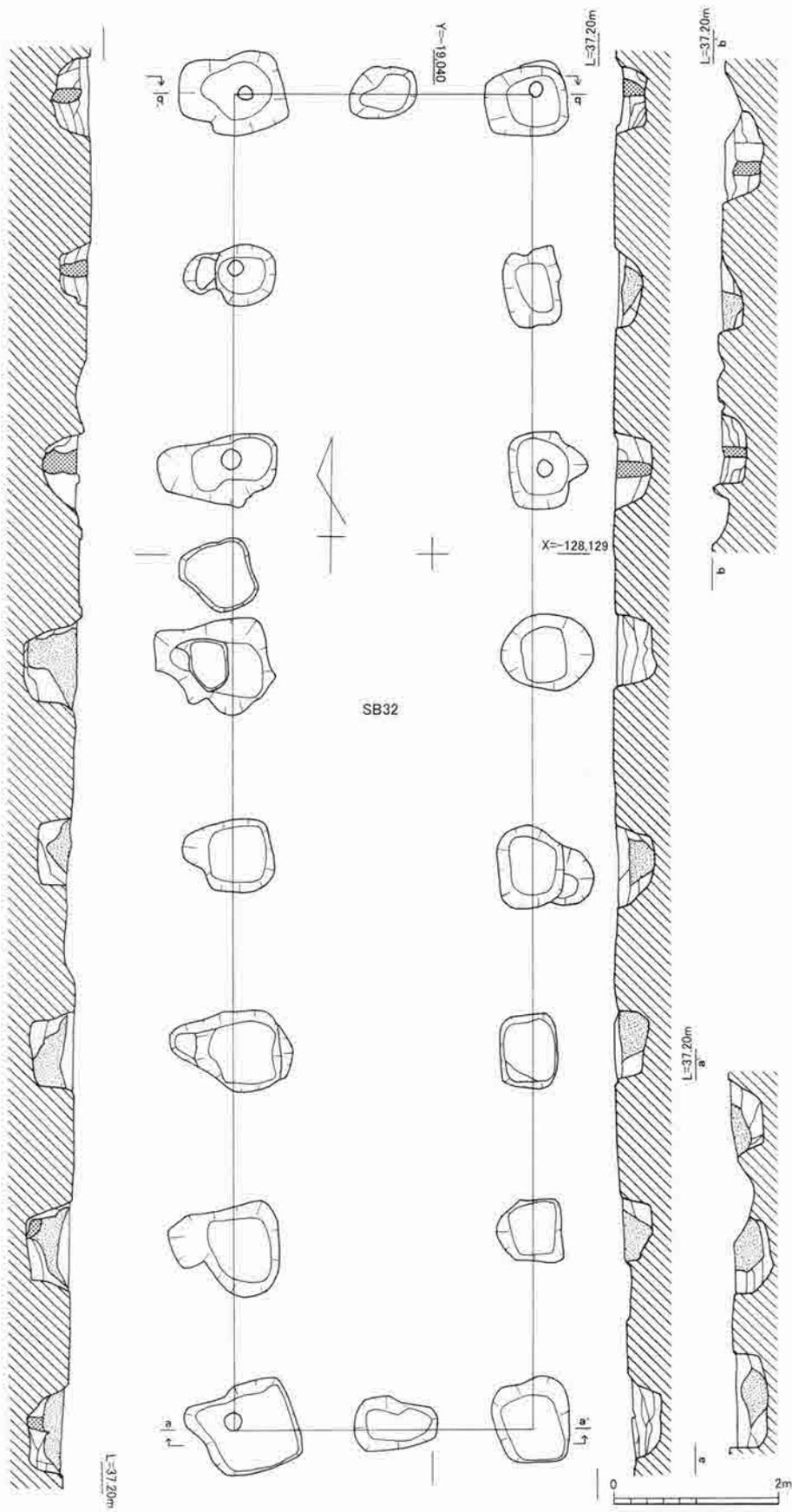
第71図 掘立柱建物跡S B31実測図

### 竪穴式住居跡 S H42

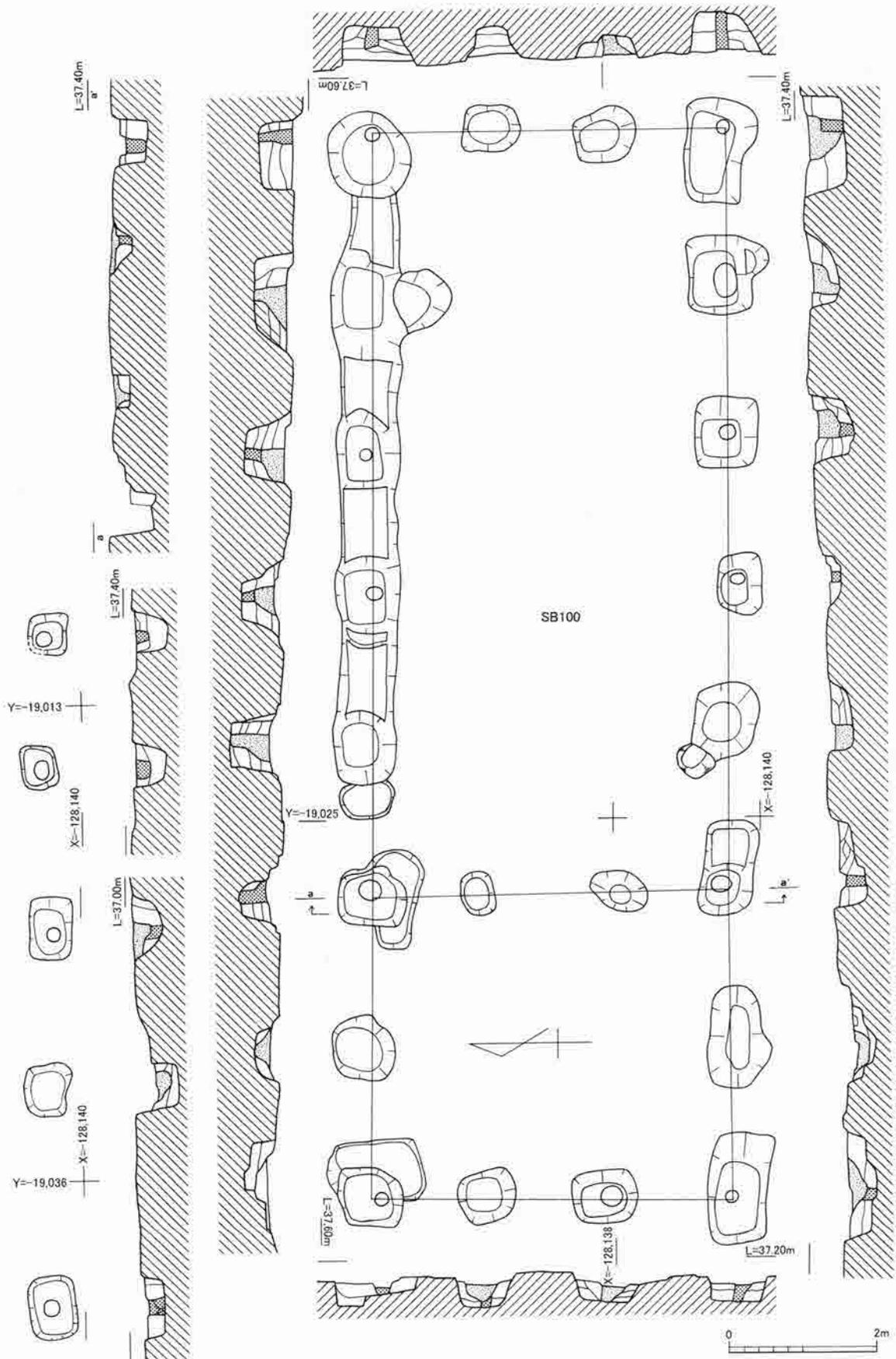
S H36に北側部分を切られており、規模は不明である。住居の残存度は低く、かろうじて床面が残存し、周壁溝も東側に一部みられるといった状況であり、住居の北側および西側は削平されていた。東側中央付近に焼土を伴う竈の痕跡がみられた。顕著な出土遺物はみられなかった。

### 竪穴式住居跡 S H73

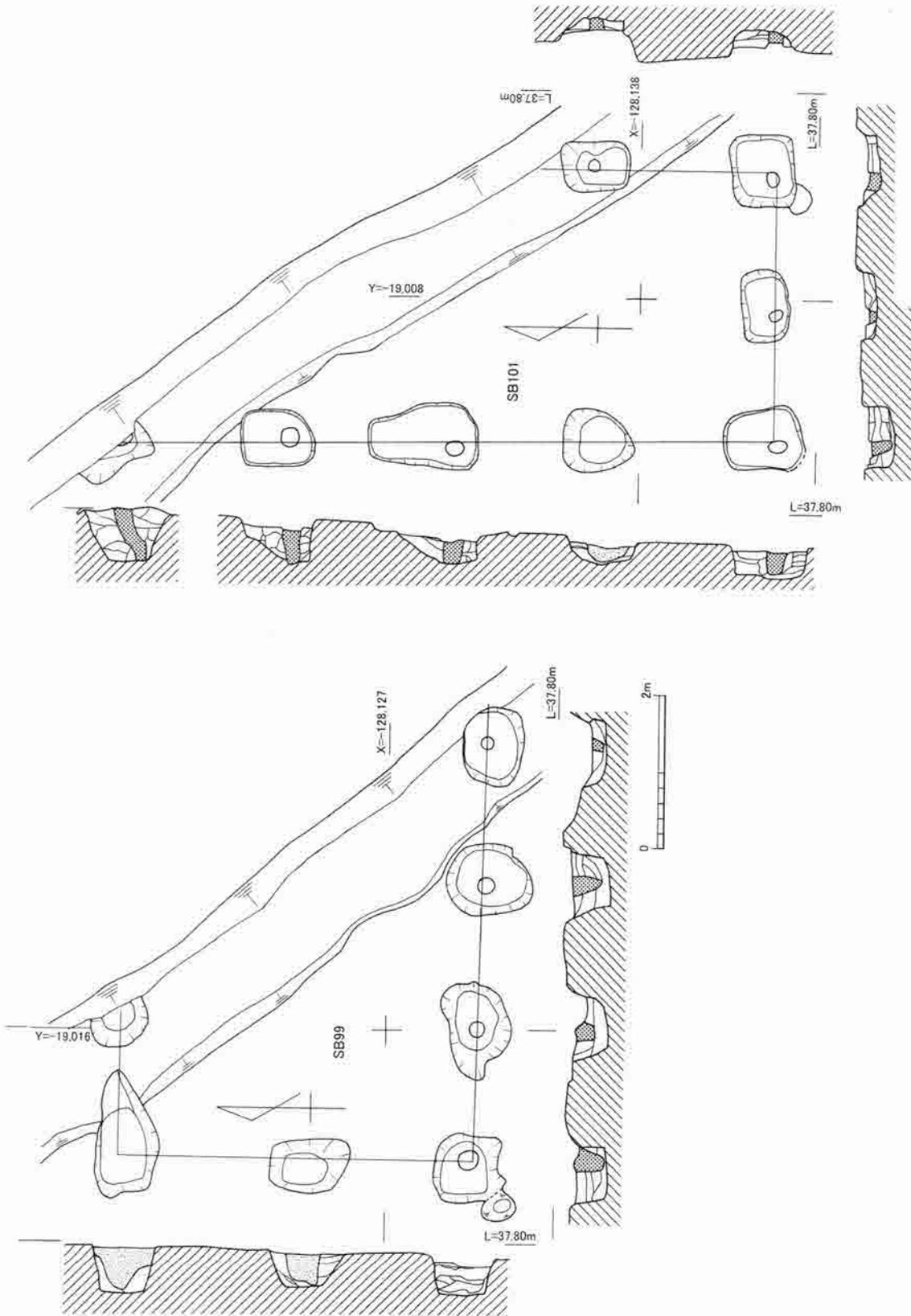
調査地北西隅で検出した。規模は4.6×4.2m以上、検出面からの深さ約0.3mを測る。東壁中央部分に竈が付く。竈は焼土のみが認められた。壁際に周壁溝がめぐる。出土遺物には須恵器杯G蓋片、土師器の甑と思われる把手部分の破片、鏝付きの鍋2点がある(第106図4~9)。これらの土器は、住居で使用していた煮炊具のセットとして捉えられる。出土遺物から6世紀末~7世紀初頭の時期と思われる。竈部分の東側に、土坑底面が赤変し焼土が堆積した焼土坑状の遺構がみられたが、住居との関連は不明



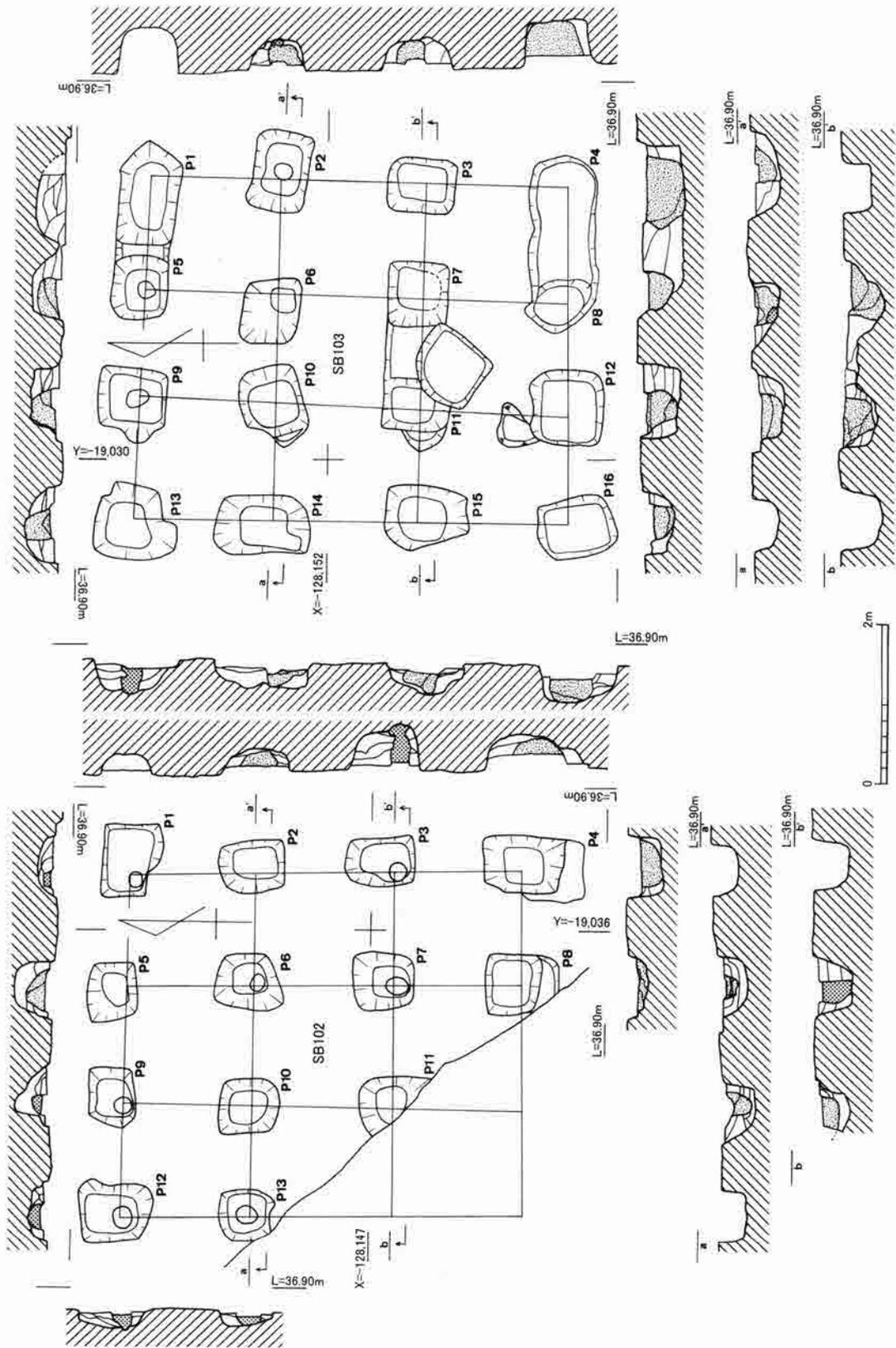
第72図 掘立柱建物跡S B32実測図



第73図 掘立柱建物跡S B100実測図



第74図 掘立柱建物跡 S B 99・101実測図



第75図 掘立柱建物跡 S B 102・103実測図

である。

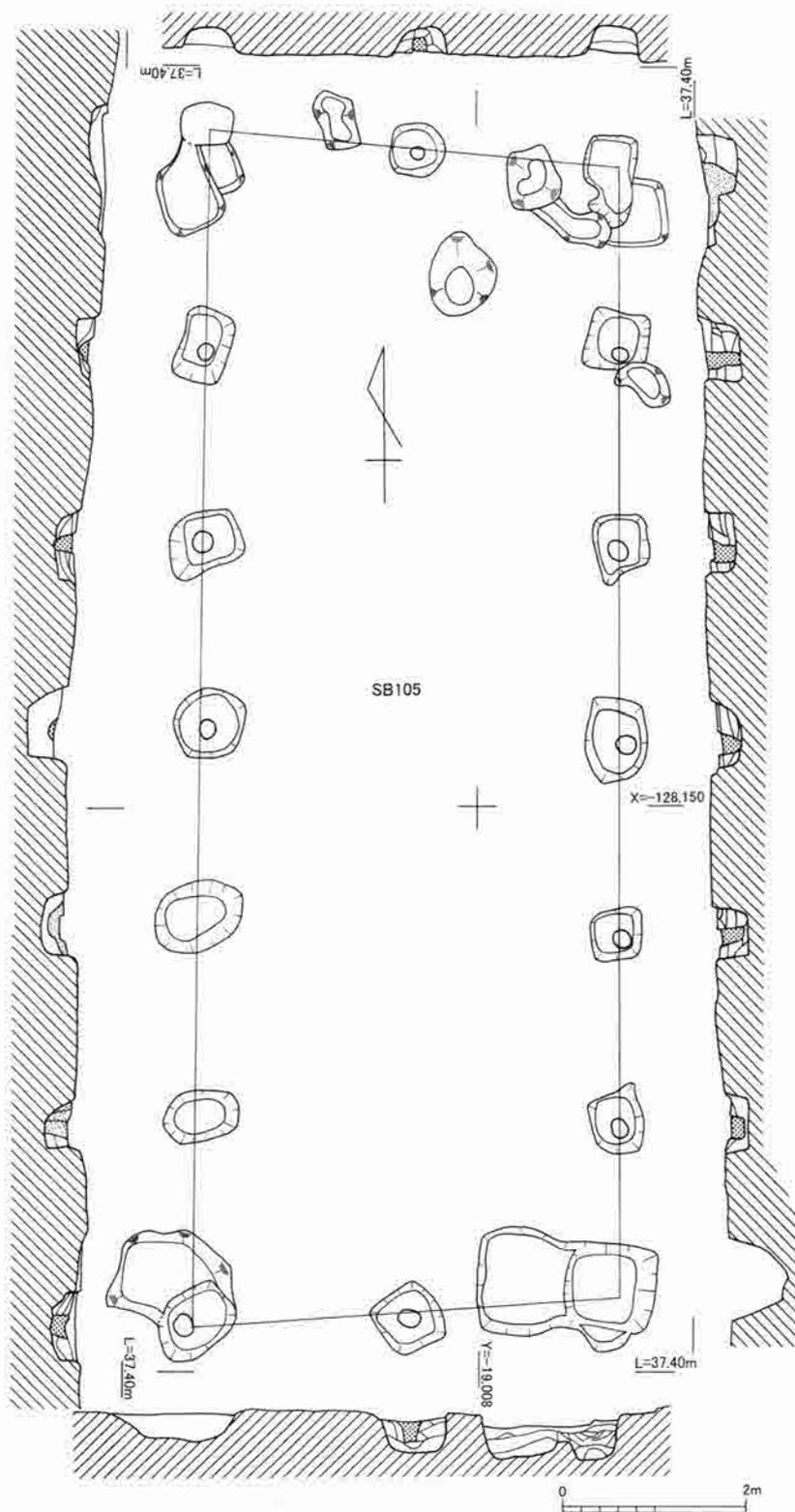
竪穴式住居跡 S H94

床面および周壁溝から竪穴式住居跡と判断した。大半が調査地外へのびる。規模は3.2×2 m以上を測る。深さは約0.18mである。顕著な出土遺物はみられなかった。

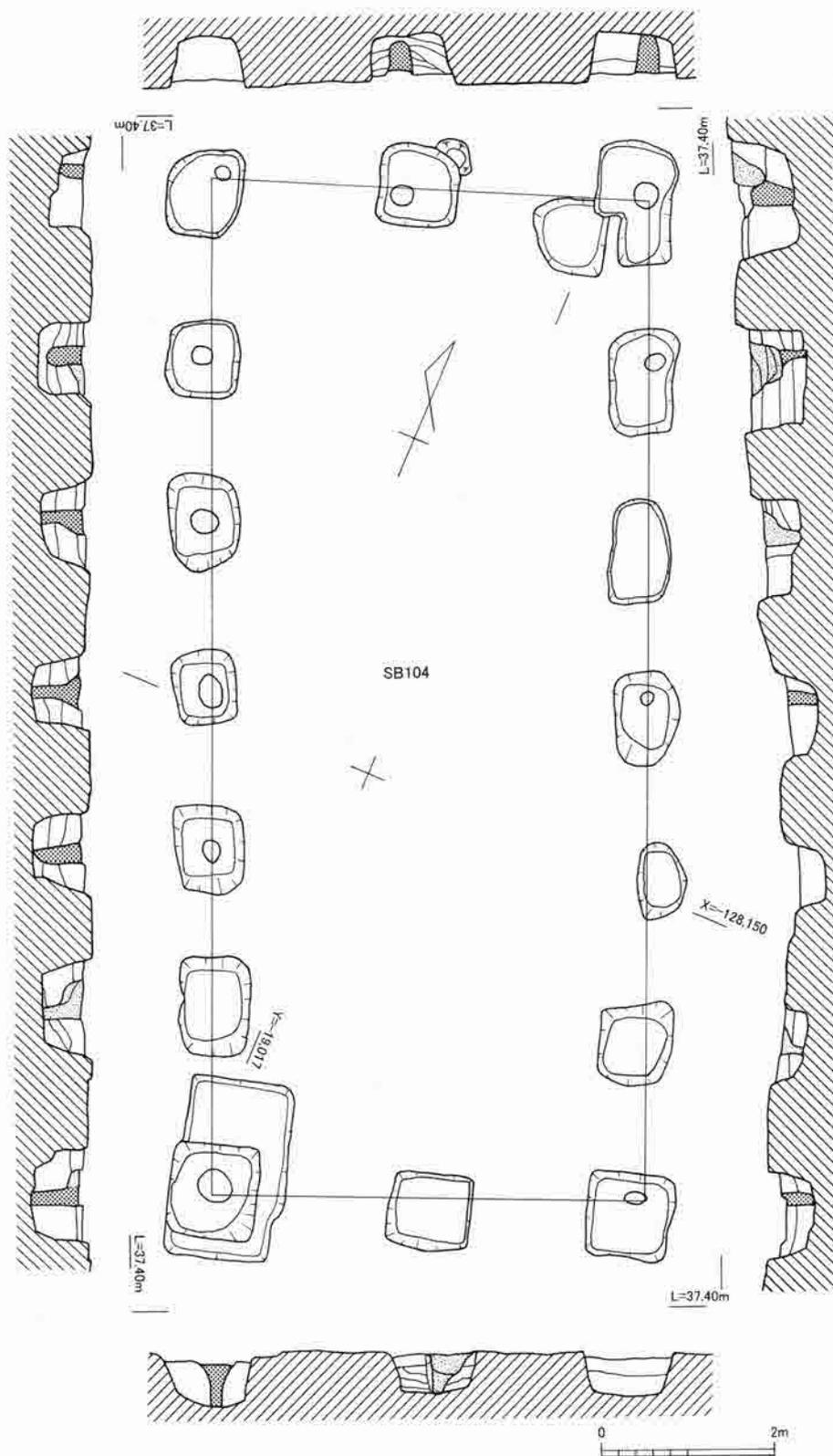
土坑 S K 04 規模は長軸0.7m、短軸0.4m、検出面からの深さ0.4mを測り、掘形の平面は隅丸長方形をなす土壇墓状遺構である。出土遺物はみられなかった。S K 05の南東側に近接する。

土坑 S K 05 (第68図) 長軸2.4m、短軸0.9m、深さ0.3 mを測る木棺墓である。埋土を一段下げた状況で、掘形の内側に短辺0.5m、長辺1.75mを測る木棺痕跡を確認した。一部では棺材が腐朽したと考えられる厚さ約3～4 cmの黄灰色の土色変化がみられた。出土遺物は、北側棺小口の棺外で須恵器杯身1点(第106図1)が、正位置を保った状態で出土したが、蓋は存在しなかった。また、棺内からは、滑石製紡錘車1点(第106図2)が出土した。

土坑 S K 82 S H73の廃絶後に作られた合わせ口甕棺墓である。遺構の規模は長軸1.35m、短軸



第76図 掘立柱建物跡 S B 105実測図



第77図 掘立柱建物跡S B104実測図

0.75m、深さ0.7mを測る。土師器の長胴甕2個体が口縁端部を合わせるように埋納されていた。甕棺の出土状況は掘形内の埋土の圧力により、土器が押し潰されたかたちであった(第70図、図版第53)。甕は、同形同大のものを利用して(第106図12・13)。甕の底部付近はいずれも焼成

後に穿孔されていた。

②飛鳥・奈良時代 掘立柱建物跡・溝跡などがある。各建物の規模については、付表6を参照されたい。

#### 掘立柱建物跡 S B 31 (第71図)

桁行6間(12.6m)×梁間2間(4.2m)の東西棟建物である。深さは0.4~0.6mを測る。ほぼ国土座標の方位と一致する。柱穴内に平面精査で柱痕を確認できたものもあるが、断面により確認したものもある。確認した柱痕の直径は約0.2~0.3m程度である。柱穴からは須恵器・土師器の細片が出土したが、建物の時期を決定できる遺物は出土しなかった。

#### 掘立柱建物跡 S B 32 (第72図)

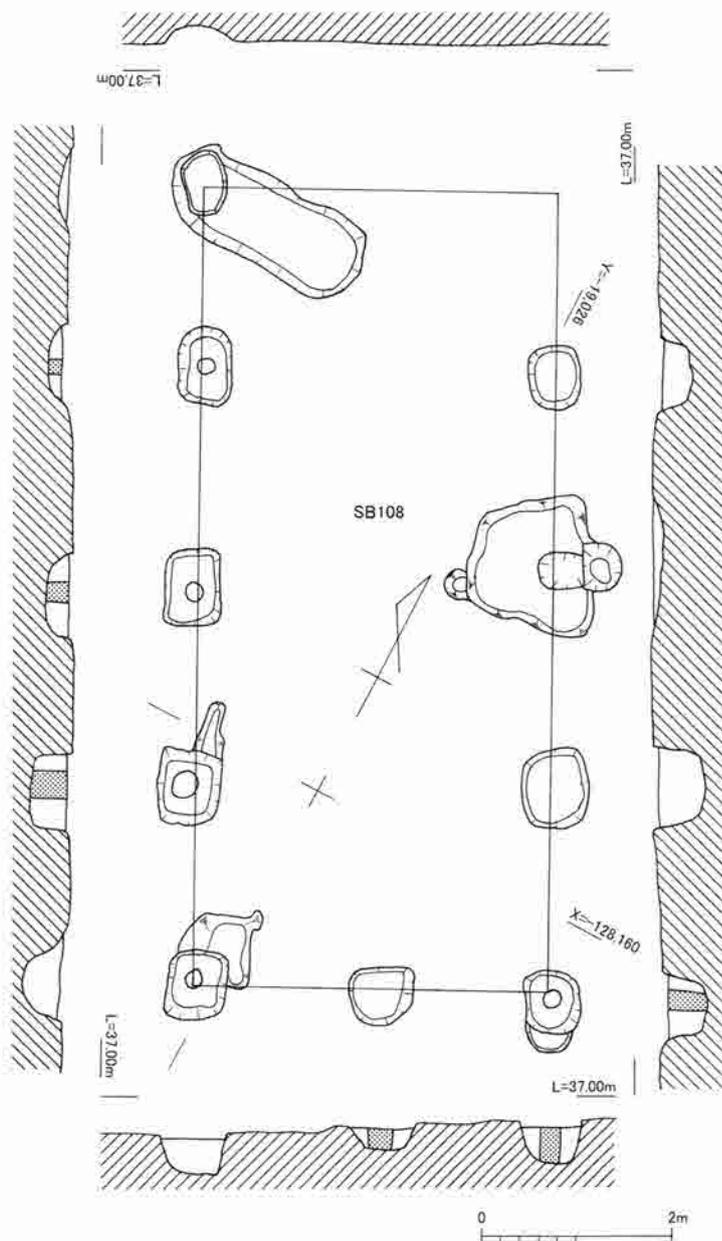
調査地中央の西側に位置する。桁行7間(15.6m)×梁間2間(3.5m)の長舎風の南北棟建物である。柱穴の深さは0.4~0.5mを測る。柱は大半が抜き取られていた。断面で確認できた柱痕の直径は0.2~0.3m程度である。南西隅P16

の抜き取り痕から須恵器杯Bが出土した(第109図44)。時期は、8世紀前半と考える。

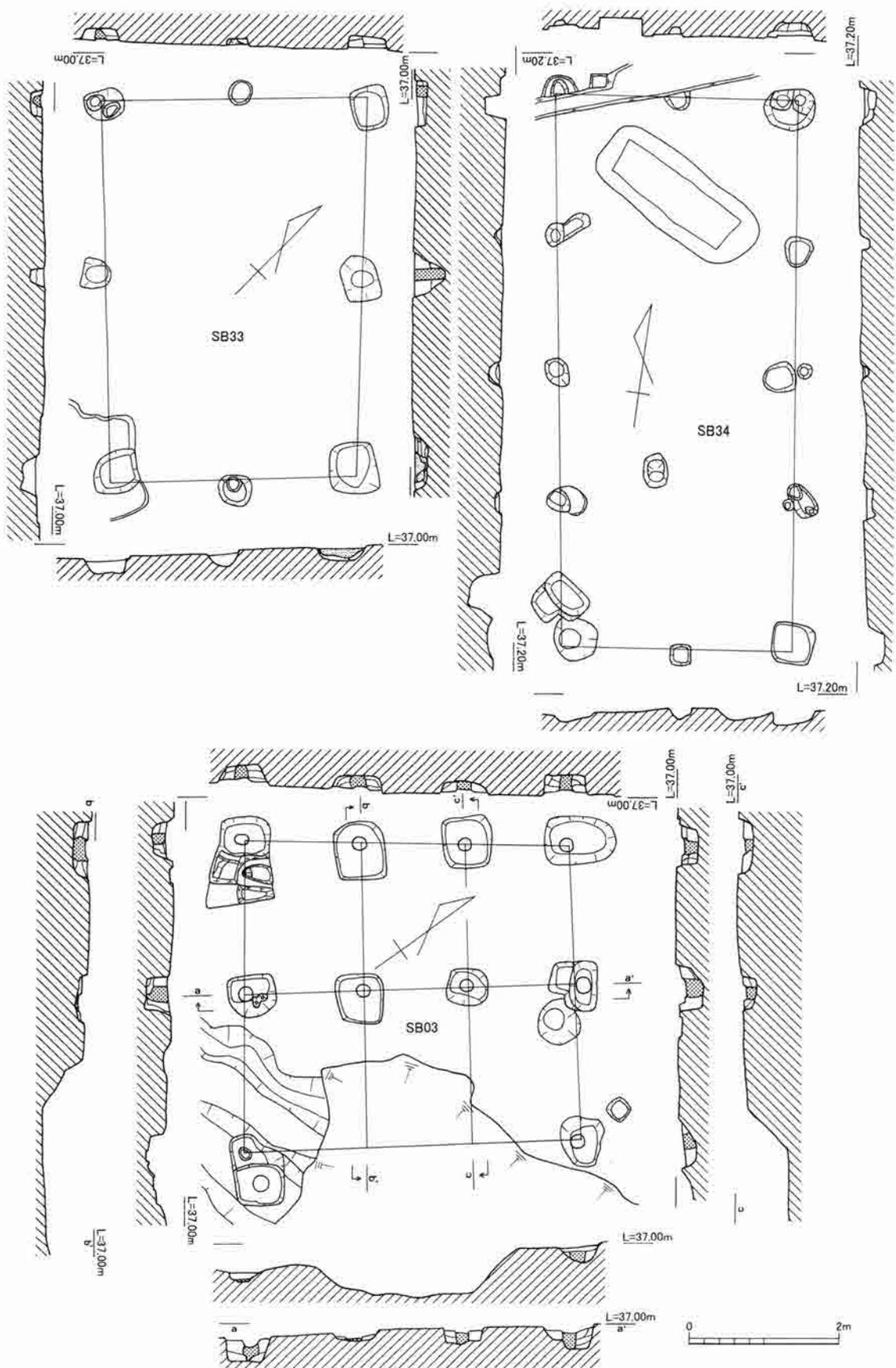
掘立柱建物跡 S B 70 S B 31の北東隅ピットに近接する。桁行3間(6.3m)以上、梁間2間(4.2m)を測る。柱穴の深さは0.4~0.5mを測る。東側は調査地外へのびる。S B 31およびS B 99に近接し、同時併存は考えにくく、時期差が考えられる。

掘立柱建物跡 S B 99 (第74図) 桁行3間(5.4m)以上×梁間2間(4.5m)の東西棟建物である。一部が調査地外へのびる。柱穴の深さは0.4~0.5mを測る。柱痕は径0.2~0.3mである。S B 31と同規模の桁行6間の建物跡になるのかは不明である。

掘立柱建物跡 S B 100 (第73図) 調査地中央付近で検出した。桁行7間(14.4m)×梁間3間(4.8m)の東西棟建物である。柱掘形は一辺約0.6~1.0m、深さは0.6m前後を測る。桁行柱の柱間寸法は2.1m等間、梁間は1.6m等間である。柱痕の径は0.2~0.3mである。全体の構造として



第78図 掘立柱建物跡 S B 108 実測図



第79図 掘立柱建物跡 S B 33・34・03

西側の梁間から東へ2間のところに間仕切りを設けている。間仕切りの柱は、径0.6m程度の円形掘形である。間仕切り中央の柱間寸法は2.1mを測り、両端は1.4mを測る。間仕切りの中心の柱間寸法がやや広くなっており、ここに扉が付属していた可能性がある。また、この間仕切りから東側の北の桁行柱は布掘りを施していた。布掘りは溝状に約5cm程度掘削したのち、個々の柱穴を掘削していた。調査では明らかにならなかったが、布掘りの上部構造として塀・地覆・壁立ちなどが考えられる。南側の桁行柱は、概して東西方向に長い長方形の掘形となっている。また建物に付属する施設として、南側の桁行柱列に東に2間分、西に3間分の柱穴が伴う。東側はS B101の梁間列に、西側はS B32の梁間列に接続する。柱穴の規模は一辺0.5mと桁行柱のピットより小振りであり建物に付属する板塀状の施設と思われ、南側を遮蔽した構造が考えられる。ほかの建物が梁間2間であるのに対し、3間であるのは正殿などの中心建物であるためと考えられる。

**掘立柱建物跡 S B101(第74図)** 桁行4間(4.2m)以上×梁間2間(3.6m)を測る。掘形の規模は一辺0.6~0.9m、深さ0.4~0.6m程度である。梁間の柱間寸法は1.8m等間(6尺)である。桁行の柱間寸法は2.1m(7尺)を測る。建物の北側は調査地外へのびる。この建物の南側から2列目の桁行柱の位置は西側のS B32のそれと一致するが、S B99と近接することから、建物の全体規模は不明である。

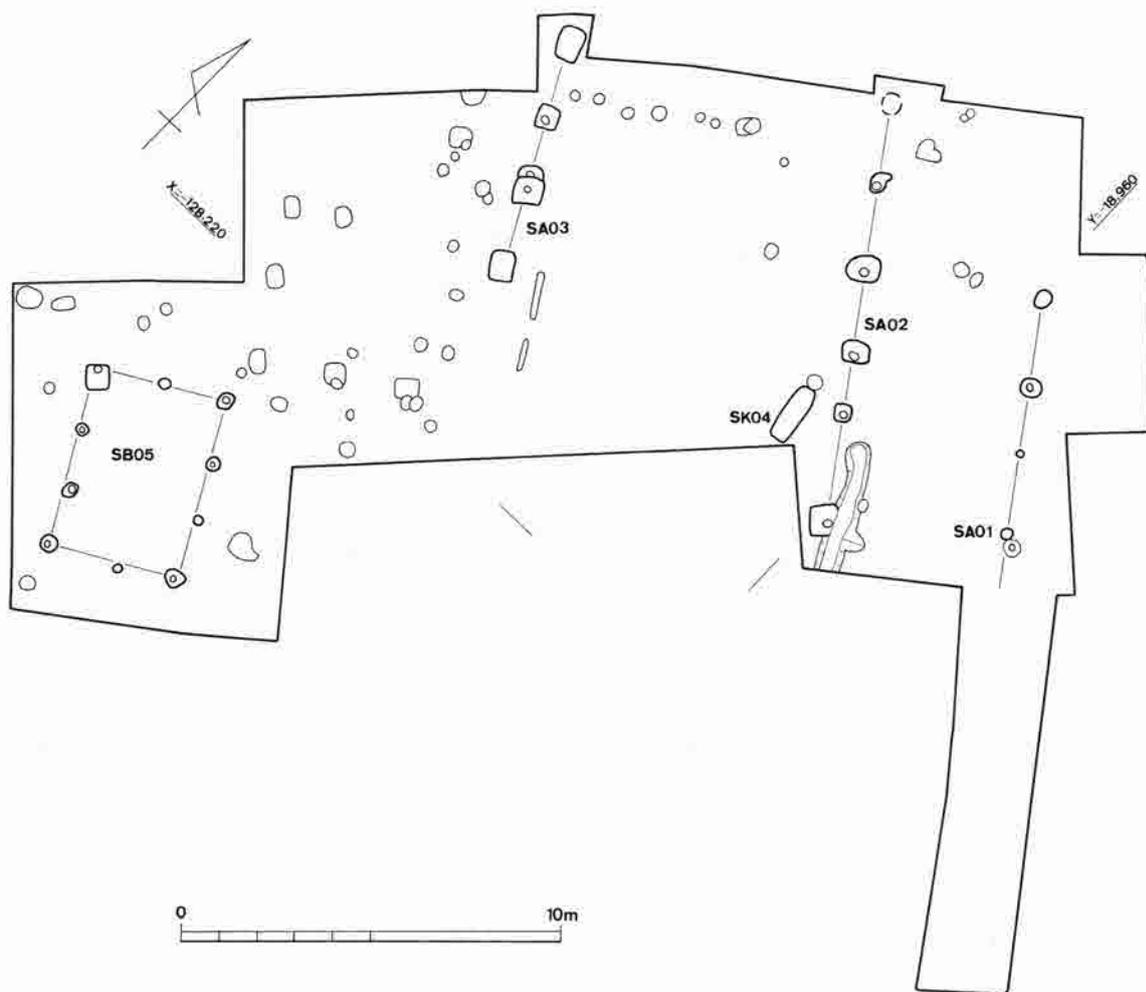
**掘立柱建物跡 S B102(第75図)** 東西3間(4.2m)×南北3間(5.0m)の総柱建物である。掘形の規模は一辺0.7m、深さ0.4~0.5m程度を測る。東西の柱間寸法は1.4m、南北は1.8mである。

**掘立柱建物跡 S B103(第75図)** 東西3間(4.4m)×南北3間(5.4m)の総柱建物である。柱穴の深さは約0.4mを測る。大半の柱は抜き取られていた。東西の柱間寸法は1.5m、南北は1.8mである。北から1列目のP1およびP5、北3列P7およびP11、北4列P4およびP8が布掘りとなっている。北1列は約5cm程度掘り下げ、個々の柱穴を掘削し、柱穴間は掘り残し部分が見られる。北3列も同様の掘削方法である。北4列については、一旦全体を、柱を据え付ける深さ(0.6m)まで掘り下げ、その後、布掘り部分全体を埋め戻し、新たに柱穴を壺掘りし柱を据え付け、周囲に土を充填している。布掘りP5の柱抜き取り痕から須恵器杯Aの破片が出土した(第109図45、図版第59-(1))。

**掘立柱建物跡 S B105(第76図)** 桁行6間(12.6m)×梁間2間(4.4m)の南北棟建物である。柱穴の深さは0.3~0.4mを測る。東桁行柱の並びは、S B101のそれとほぼ一致する。柱穴の平面形は隅丸方形および円形で統一性がみられない。主軸方向は一致するが、S B101は梁間寸法が1.8m(6尺)に対し2.1m(7尺)等間で1尺分広い。

**掘立柱建物跡 S B124** 東西2間(3.6m)以上、南北2間(3.6m)以上を測る。円墳の溝S D120の周溝の一部を切って柱穴を掘り込んでいる。掘形は一辺約1mで、深さ約0.8~0.9mを測り、そのほかの真北に向く建物の掘形よりも大きい。建物の大半は調査地外へのびる。西側柱と南側柱に囲まれた柱は、楕円形の小振りなもので東柱となる可能性があり、大型の総柱建物と考えられる。

**掘立柱建物跡 S B34(第79図)** 桁行4間(7.3m)×梁間2間(3.0m)の南北棟建物である。柱穴



第80図 B地区遺構配置図

の深さは0.1~0.2mを測る。北東隅のピットから須恵器杯B蓋が出土した(第109図57)。時期は、8世紀後半と考えられる。

**掘立柱建物跡SB104(第77図)** 桁行6間(11.6m)×梁間2間(5.0m)を測る。柱掘形は長辺0.8~1.2m、短辺が0.6~0.8mの隅丸長方形をなす。桁行柱は、概ね桁行に長辺を合わせている。柱穴の深さは約0.6mを測る。柱痕の径は0.2~0.3mを測る。この建物の柱穴からは築造時期の分かる遺物は出土していない。

**掘立柱建物跡SB108(第78図)** 桁行4間(8.4m)×梁間2間(3.6m)を測る。北西隅の柱穴はSB103の布掘りの一部を再掘削している。北東隅の柱穴はみつからなかった。P5およびP6から土師器甕(56)が出土した。P6から須恵器杯B蓋(55)が出土した。総柱建物跡SB103の柱穴と切り合い関係があり、切り勝っており、出土遺物から8世紀後半の築造と考えられる。

**掘立柱建物跡SB109** 桁行4間(7.2m)以上、梁間1間(1.8m)以上を測る。梁間の柱は、桁行柱と直角に交わず棟持柱状に北側に突出する。西側の桁行柱列は、調査地外になるため建物規模は不明である。

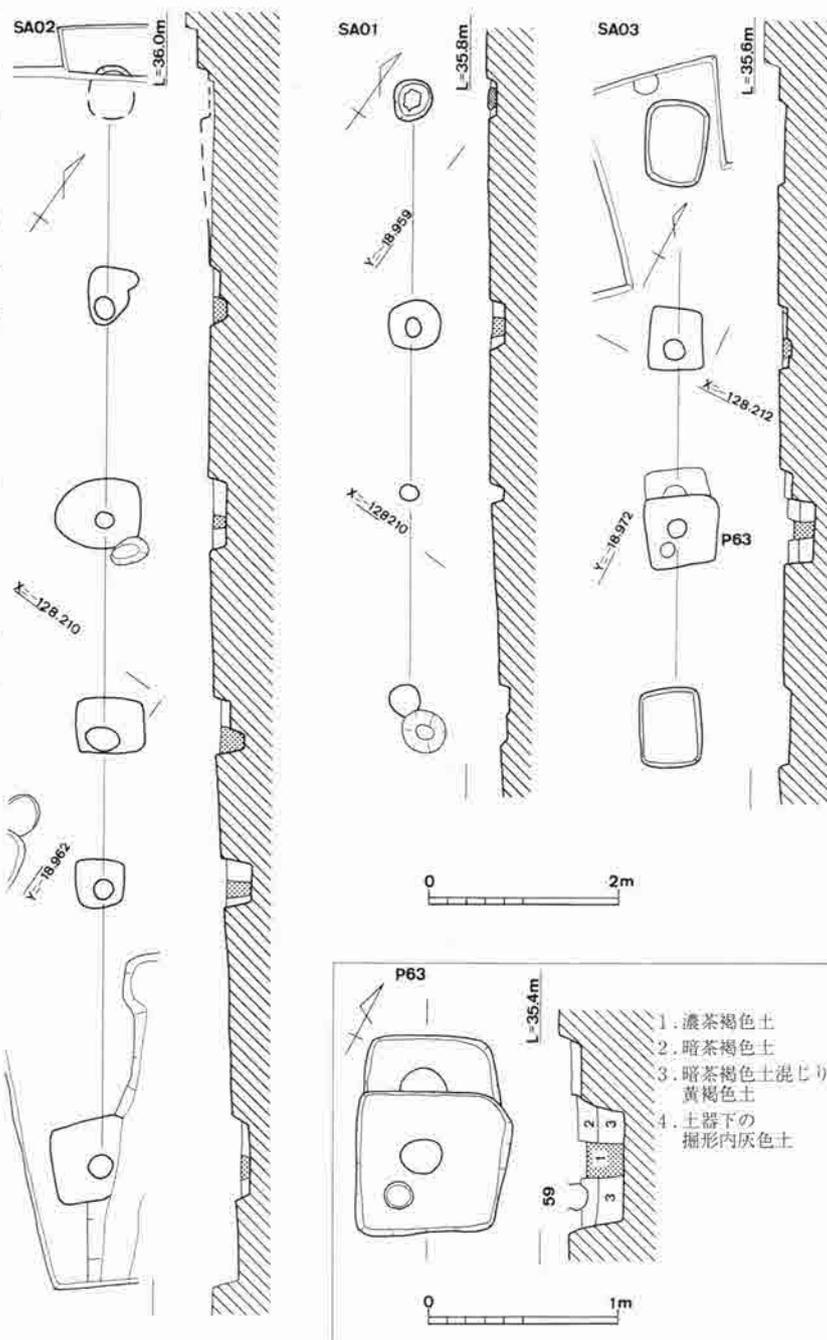
**溝SD91** SB32の西側の桁行柱から心々距離で約3m西側に位置する浅い落ち込み状の溝で

ある。幅1.2m、長さ6.1m、深さ0.05mを測る。断面は浅い皿状をなす。S B 32とほぼ並行することから、建物跡との関連が考えられる。埋土中から、須恵器の杯蓋・杯(第109図46～51)が出土した。

土坑S K 06 S B 88の南東側で検出した、長軸0.64m、短軸0.5m、深さ0.35mを測る土坑である。中から須恵器杯Bと口縁部を下に向けた状態の平瓶の口縁部片が出土した(第109図52・53、図版第60-(3))。

### ③時期不明の建物跡

掘立柱建物跡S B 03(第79図) 東西3間(4.4m)×南北2間(4.0m)の総柱建物跡である。建物の主軸は北から35°東に振れている。南東側のピット2基は、現代の攪乱により消滅している。柱掘形の寸法は、一辺0.5～



第81図 柵S A 01～03実測図

0.6mを測り、深さは0.3mを測る。柱痕の径は0.2mを測る。柱穴から出土遺物はみられなかったが、柱穴から8世紀後半の須恵器杯蓋Bを出土したS B 34に切られていることから、それ以前の建物である。

掘立柱建物跡S B 33(第79図) 2間(3.6m)×2間(4.8m)で、桁行が北から西側に43°振る建物である。柱掘形は一辺0.5～0.7mを測る。柱穴の深さは0.2～0.4mを測る。

掘立柱建物跡S B 87 桁行2間(4.2m)×梁間2間(3.6m)の南北棟建物である。径0.3～0.4mの円形掘形で、深さは0.3～0.4mを測る。

掘立柱建物跡S B 88 東西3間(4.4m)×南北2間(4.2m)の総柱建物跡である。柱掘形は、円

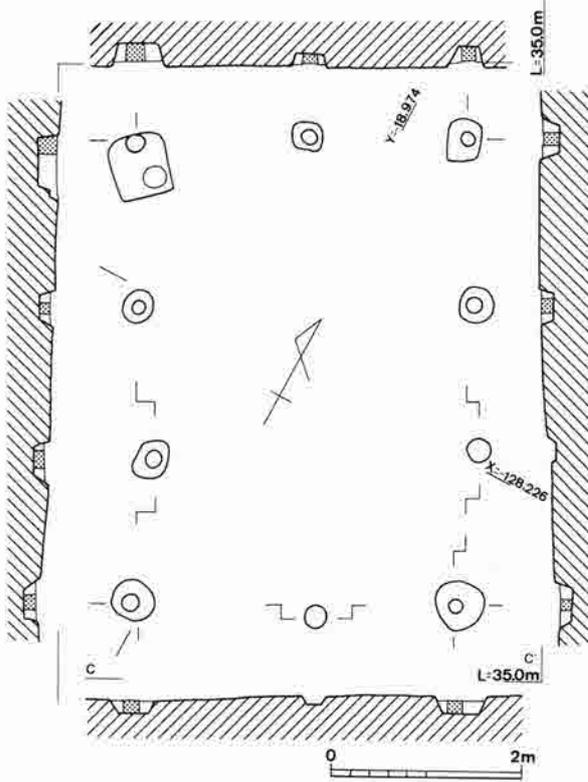
形ないし隅丸方形である。礫層の場所を掘削しており、柱穴の大きさ、深さとも一定しない。

(柴 暁彦)

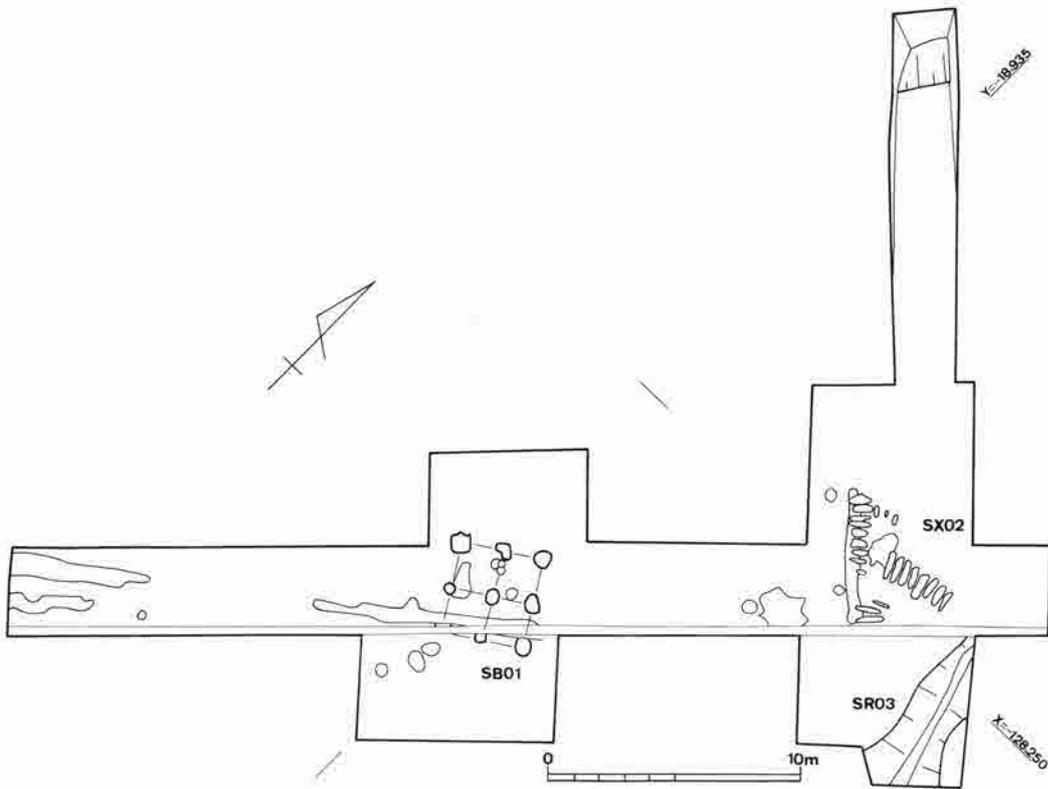
(2) B地区(第80図、図版第61・62)

B地区は、A地区からゆるやかに傾斜するところで、南東のC地区とはわずかな谷地形で区切られる。平成13年度には、B地区の東端で北西から南東方向に試掘調査をしている。柱穴をわずかに検出したことから、遺構の広がりを知るために試掘地に直行する形で30×5mの東西に長い調査地を設定した。

調査の結果、掘立柱建物跡の一面や柵列などの遺構が予想されたため、部分的な拡張を行い、遺構の種類と規模を確認した。また、C地区に向けて地形の変化を確認するため、トレンチ東端から南東方向にも掘削した。その結果、A地区からB地区の南方までゆるやかに傾斜して



第82図 B地区掘立柱建物跡S B05実測図



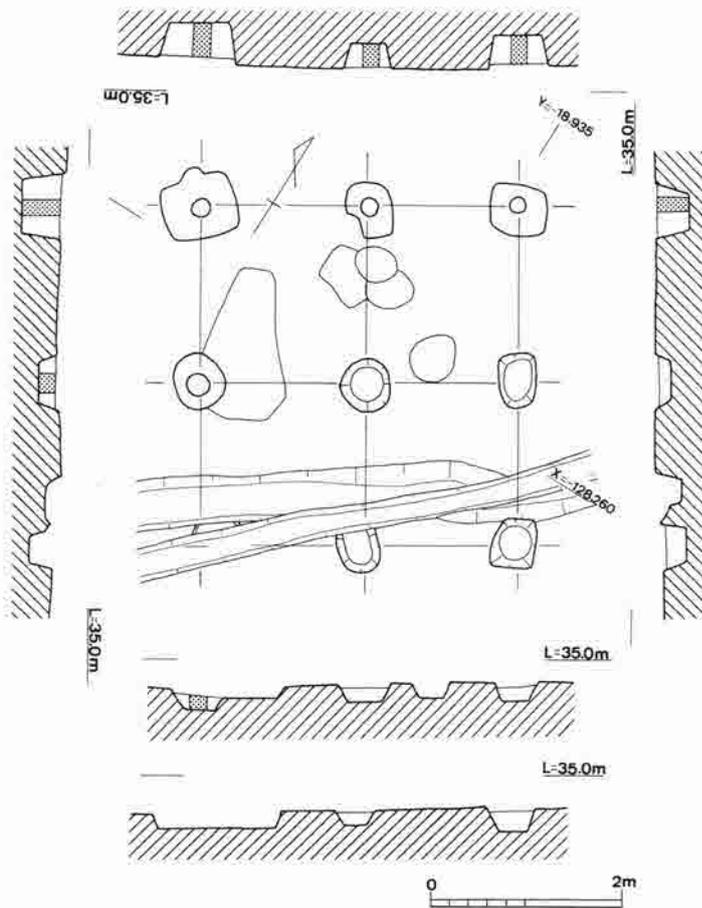
第83図 C地区遺構配置図

おり、遺構は緩傾斜地に展開した。各遺構を掘削したところ、非常に浅く、B地区全域が後世にかなり大規模に削平されていたことが分かった。検出遺構としては、柵列3条と掘立柱建物跡1棟である。

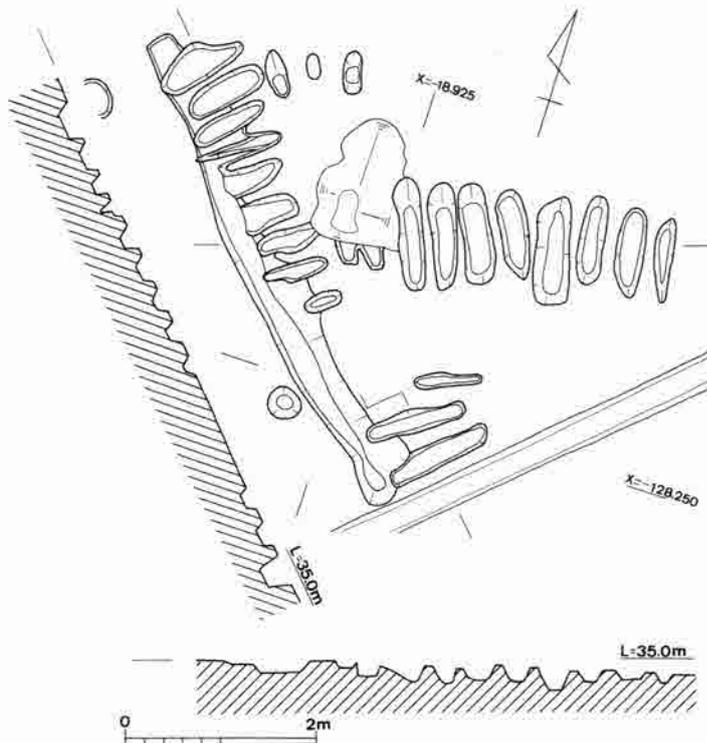
柵 S A 01・02(第80・81図、図版第61) 調査地北東部で検出した2条の柵列である。検出時は、2条の柵列が平行関係にあり、同じような間隔で柱穴が存在することから、掘立柱建物跡の可能性も考えられた。しかし、柱間距離が1.7~2.3mと一様でなく、柱穴の規模もばらつきがみられた。2条の柵列が平行関係にあることは、同時期に築かれたものとする。両柵列間の距離は、4.7mである。

S A 01の規模は、確認長が3間(6.3m)、柱掘形は径約0.3~0.4m、柱痕は径約0.2mであった。南半分の柱痕は、掘形が削平された状況である。主軸方位はN35°Wである。S A 02の規模は、確認長が5間(11.3m)、柱掘形は、径および一辺が0.4~0.8m、柱穴は径約0.2~0.3mであった。主軸方位は、N33°Wである。柱穴底に、根石が認められるものもあった。

柵 S A 03(第81図、図版第61・62) S B 05とほぼ平行する柵列で、調査地中央で検出した。柱掘形の規模は、一辺約0.6~0.8m、深さ0.1~0.3mと、平面的には大きい、残りの悪いものであった。



第84図 C地区掘立柱建物跡 S B 01実測図



第85図 C地区不明土坑 S X 02実測図



第86図 D地区遺構配置図

確認長は3間(6.0m)で、主軸方位は、 $N25^{\circ}W$ である。柱掘形のほぼ中央から、径0.2mの柱痕を確認している。P63の柱掘形内の柱痕横から、8世紀末の土師器甕(59)が、ほぼ完全な形で、かつ正位置に埋納されていた(第81図、図版第62-(1)(2))。これは、柵列を築いた際の祭祀的な様相の濃い土器と考えられる。また、このように土器を埋納する検出例が非常に少なく、主軸方位からみた当遺跡の遺構の年代を考える上で、貴重な資料になるものと考えられる。

土坑S K04(第80図) 調査地中央付近で検出した土坑である。規模は、短辺約0.5m、長辺約

3.2m、深さ約0.1mを測る。出土遺物がなく、時期や性格については不明である。

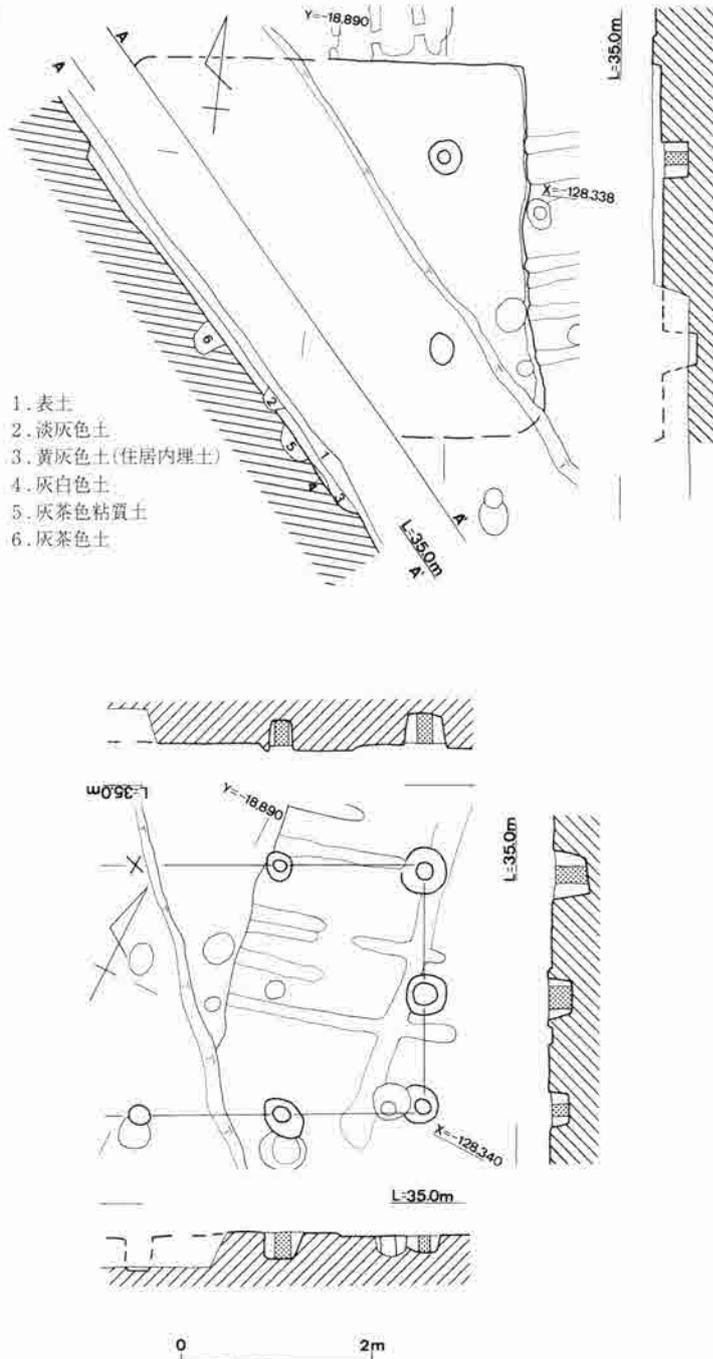
掘立柱建物跡S B05(第82図、図版第62) 調査地南西端で検出した2間(3.5m)×3間(4.9m)の掘立柱建物跡である。S A03と平行関係にある。南ほど遺構検出面が下がっており、柱穴の遺存状況も非常に悪い。柱掘形の規模は、径約0.4m、深さ約0.2mで、掘形中央に径約0.15mの柱痕を持つ。主軸方位は、N29°Wである。出土遺物がなく、時期については不明である。また、S B05東側約1.4mからも不定形な土坑を検出した。炭や焼土片に混じって、須恵器杯(第106図1)が出土したが、S B05に伴うものかについては不明である。

### (3) C地区(第83図、図版第63)

B地区から南東方向約40mの平坦部をC地区とした。調査地北東の隣接地を、平成13年度に試掘調査しており、古墳時代後期後半～奈良時代の土器が混入する溝や柱穴を確認した。これらに関連する遺構が、平坦部に存在するものと考え、緩傾斜地に42×3.5mの北東から南西方向の調査地を設定した。

調査の結果、総柱の掘立柱建物跡1棟・不明遺構1基・自然流路・耕作溝を検出した。B・C地区間の旧地形を調べるため、調査地北東隅から北西方向に試掘した。その結果、試掘地はゆるやかに傾斜しており、不明遺構から北西約20mのところ、大きく地形が下がることが分かった。また、調査地北東隅から南方にのびる自然流路(S R03)を確認した。

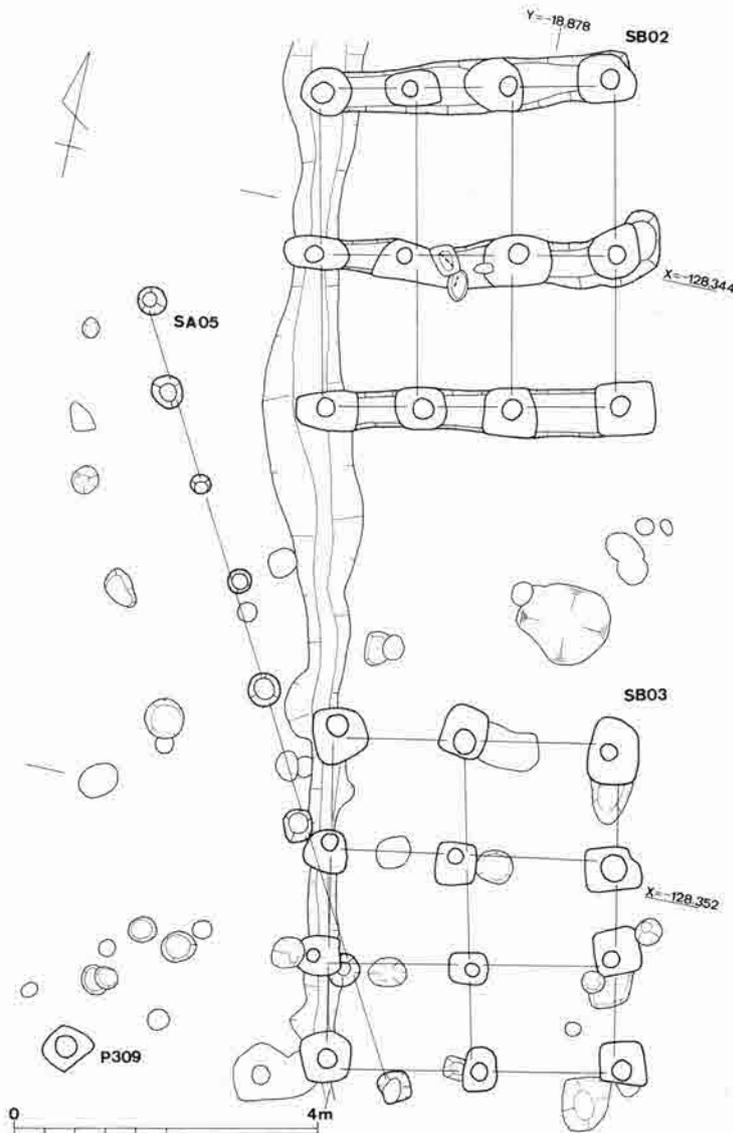
掘立柱建物跡S B01(第84図、図版第63) 2間(3.3m)×2間(3.6m)の総柱の掘立柱建物跡である。柱掘形の規模は、径約0.6m、深さ約0.3mを測る。一部の柱掘形中央に径約0.2mの柱痕



第87図 D地区掘立柱建物跡S H01、S B04実測図

が確認できた。主軸方位は、N29°Wである。出土遺物がなく、時期については不明である。SB01南側約4mから赤色の焼土を3か所で検出した。礫混じりの黄褐色土が約0.2mの範囲で焼けており、焼土の厚さも2cm程度と非常に残りの悪いものであった。焼土検出面より上層から、8世紀中頃の須恵器蓋(60)が出土した。この土器は、わずかに残る包含層下層から出土したともみられたため、この蓋の出土をもって焼土の時期にすることは控えておく。また、これら赤色焼土とSB01との関係についても不明である。

**不明遺構 SX02(第85図、図版第63)** 調査地北東部で検出した不明遺構である。短辺約0.3m、長辺約1.0m、深さ約0.15mの平面形が隅丸長方形を呈した土坑が、横方向に連続する形で検出された。東西方向に並ぶ列と、北西から南東方向に並ぶ2方向の土坑列を確認した。後者の土坑列は、1条の浅い溝に直行する形で存在する。類似遺構としては、大阪府長原遺跡などに認められ、湿地帯に古道を通す際に設けた下部構造とされる。この一つ一つの土坑に、丸太などを埋め込んだと考えられている。今回検出した遺構周辺部は、礫の混じる地山で非常に堅く安定していた。



第88図 D地区掘立柱建物跡SB02・03、柵SA05実測図

た。このようなことから、古道に関連した遺構とは考えられない。また、土坑内から土師器皿の破片が出土したことから、中世の性格不明の遺構と考える。

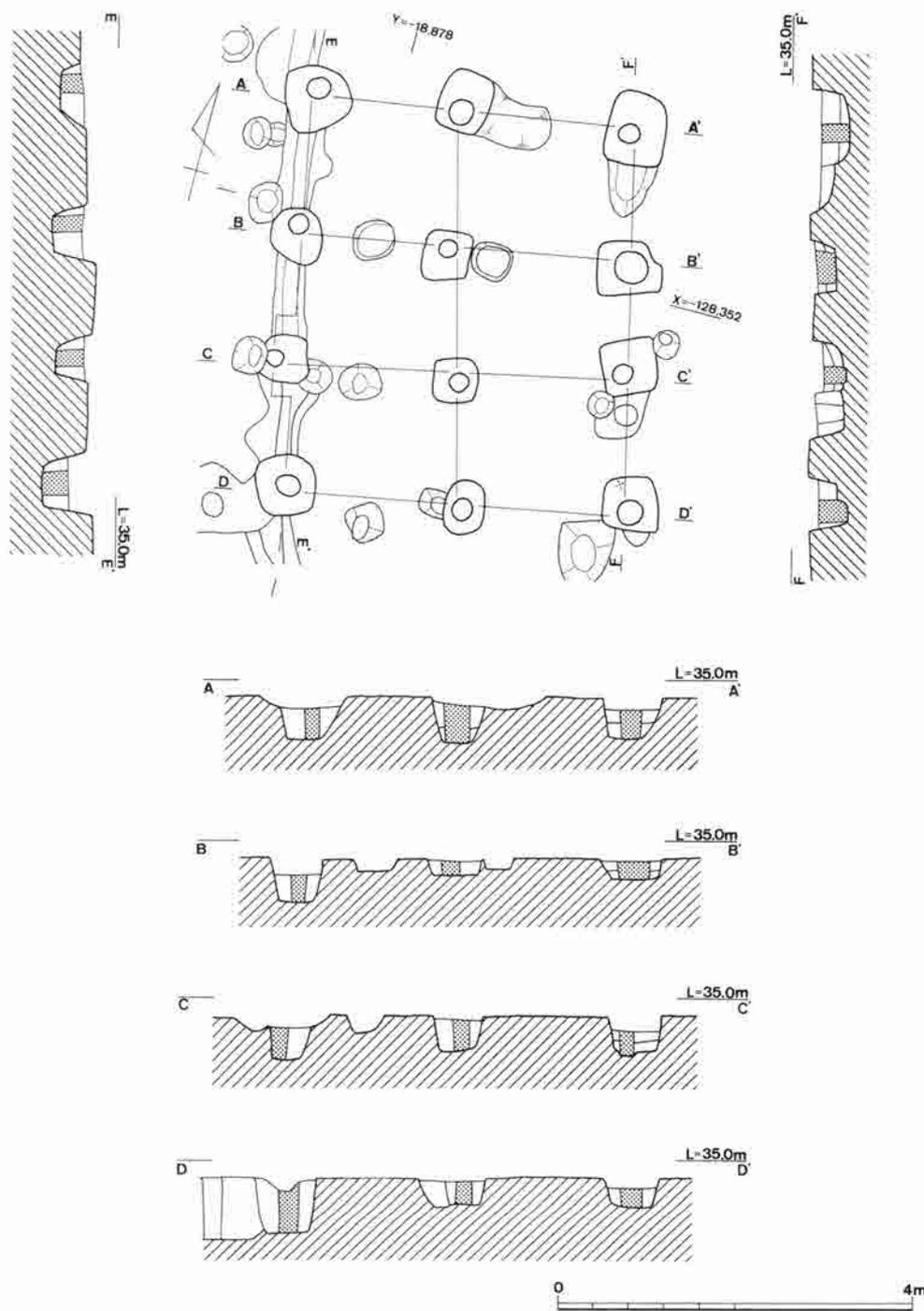
**流路SR03(第83図、図版第63)** SX02付近から南方にのびる「V」字状の自然流路を検出した。谷地形的であるが、土器の包含が認められたことから、自然流路とした。流路底は、南方ほど下がっており、C・D地区間の自然流路に続くと思われる。埋土は、礫混じりの暗灰色土である。流路西側の斜面寄りから8世紀後半～9世紀前半にかけての須恵器片と土師皿(第111図60～66)が出土した。これらの土器は、SB01が位置する平坦部からの流れ込みであり、ほかに遺構が存在した可能性を示すと考える。

そのほかの遺構

S B01以西から東西方向の耕作溝を検出した。幅約0.6m、深さ約0.2mを測り、近世陶磁器などの出土から、この頃の溝と考える。S X02の北西約20mで確認した谷地形については、その北東側で試掘調査した際にも検出しており、南西方向に真っ直ぐのびると思われた。谷部からは、遺物は出土していない。

(4) D地区(第86図、図版第64～69)

D地区は、C地区の南西側に隣接する。調査地西側を平成13年度に試掘調査しており、竪穴式住居跡や2間×2間以上の掘立柱建物跡S B02や柱穴・溝などを確認している。この成果から、

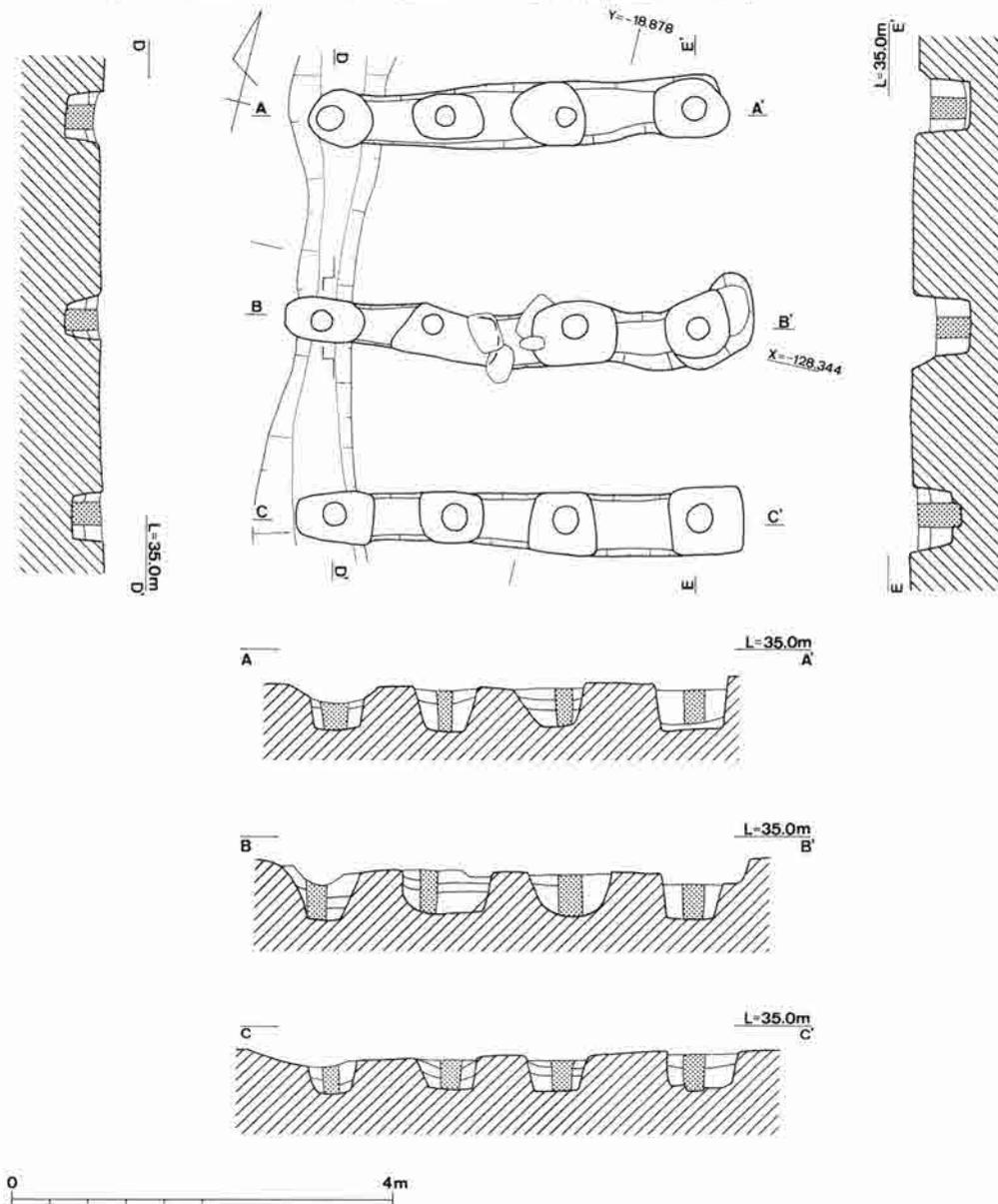


第89図 D地区掘立柱建物跡S B03実測図

周辺部に建物跡などが展開するものと考え、面的な調査を実施した。調査の結果、調査地南西側から竪穴式住居跡1基と掘立柱建物跡3棟・柵列2条を、北東側から溝2条を検出した。試掘調査時に検出した竪穴式住居跡については、面的な調査の結果、住居跡ではないことが分かった。

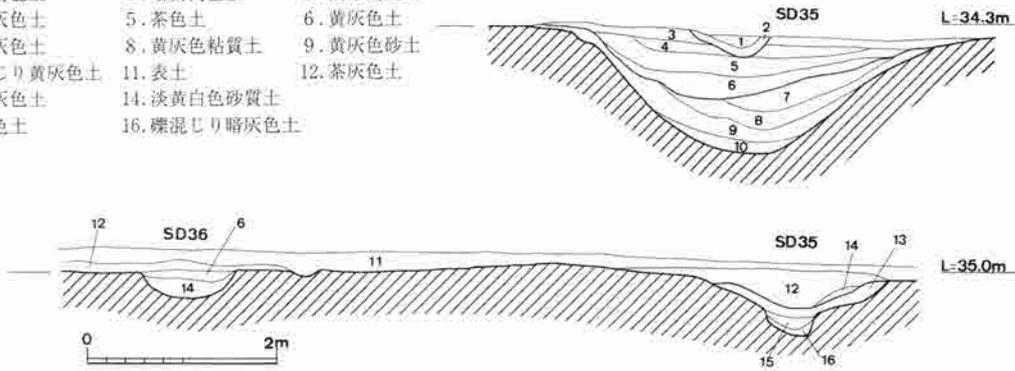
竪穴式住居跡 S H01(第87図、図版第65) 調査地中央部西端から検出した。竪穴式住居跡の半分は、調査地外となる。調査地西端に設けた排水路西壁に住居跡の断面が認められ、その状況から考えると東西方向に長い住居跡であったと思われる。規模は、東辺が約3.4m、深さ約0.1m、東西方向は推定4mを測る。周壁溝や焼土は認められなかった。時期の判別できる土器片が出土せず、住居の時期については不明である。E地区においても、6世紀末～7世紀初頭に属する竪穴式住居跡を1基検出しており、同時期の可能性がある。

掘立柱建物跡 S B02(第88・90図、図版第65・66) この建物跡は、試掘調査時に東半分が確認されており、今回の調査でその全容が把握できた。試掘調査では、第5トレンチ S B01としてい



第90図 D地区掘立柱建物跡 S B02実測図

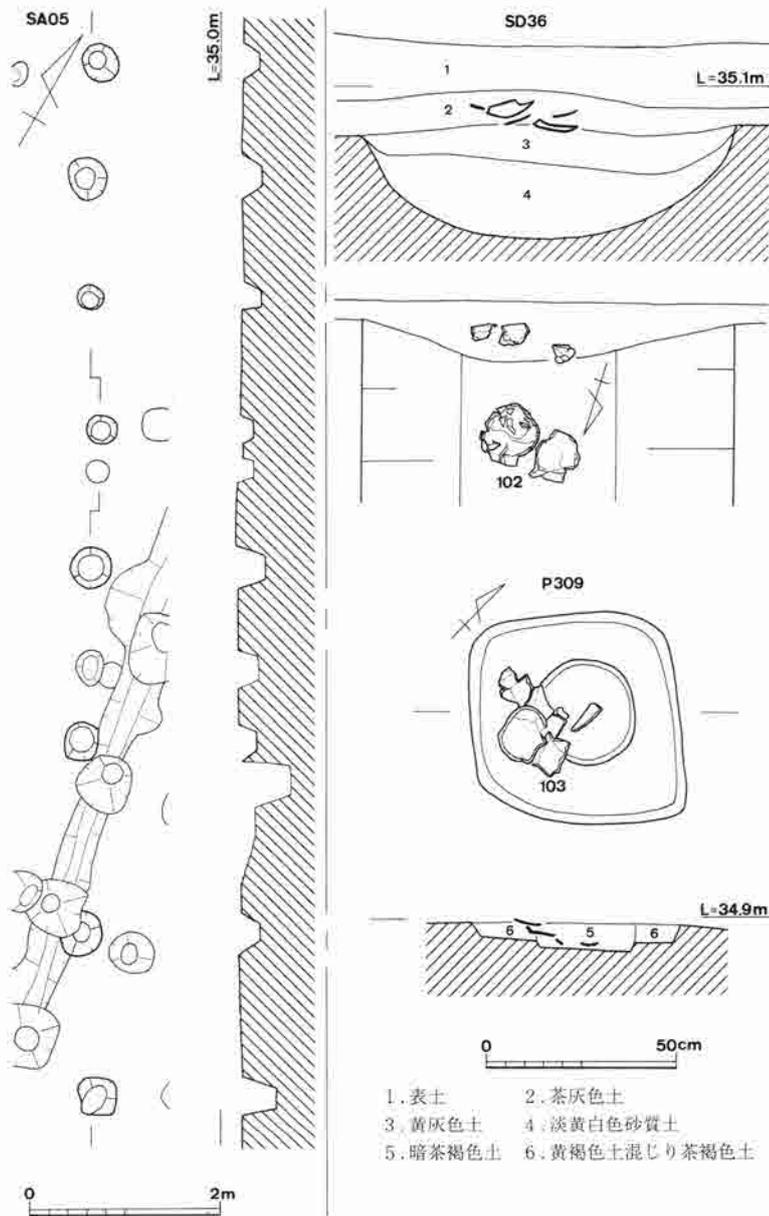
- |              |              |          |
|--------------|--------------|----------|
| 1. 暗茶褐色土     | 2. 暗黄褐色土     | 3. 淡茶褐色土 |
| 4. 淡黄灰色土     | 5. 茶色土       | 6. 黄灰色土  |
| 7. 明黄灰色土     | 8. 黄灰色粘質土    | 9. 黄灰色砂土 |
| 10. 礫混じり黄灰色土 | 11. 表土       | 12. 茶灰色土 |
| 13. 暗茶灰色土    | 14. 淡黄白色砂質土  |          |
| 15. 暗灰色土     | 16. 礫混じり暗灰色土 |          |



第91図 D地区溝SD35・36土層断面図

た。この建物跡は、2間(4.2m)×3間(3.8m)の総柱の掘立柱建物跡である。柱掘形の規模は、一辺約0.4~0.8m、深さ0.4~0.6mである。掘形中央から径0.2~0.3mの柱痕を確認した。主軸方位は、N14°Wである。この建物の下部構造に布掘りを設けていた。布掘りは非常に残りが悪く、幅0.5~0.6m、深さ約0.1mであった。掘形内から8世紀中頃の須恵器杯の破片1点が出土した。ほかに時期の分かる土器が出土しておらず、混入遺物の可能性もあるため、土器片1点では、建物の時期を決定することはできない。

掘立柱建物跡SB03(第89図、図版第67)SB02に直行する形で検出した2間(3.8m)×3間(4.4m)の総柱の掘立柱建物跡である。柱掘形の規模は、一辺0.5×0.6m、深さ0.2~0.5mを測る。掘形の



第92図 D地区柵SA05・溝SD36・ピットP309実測図

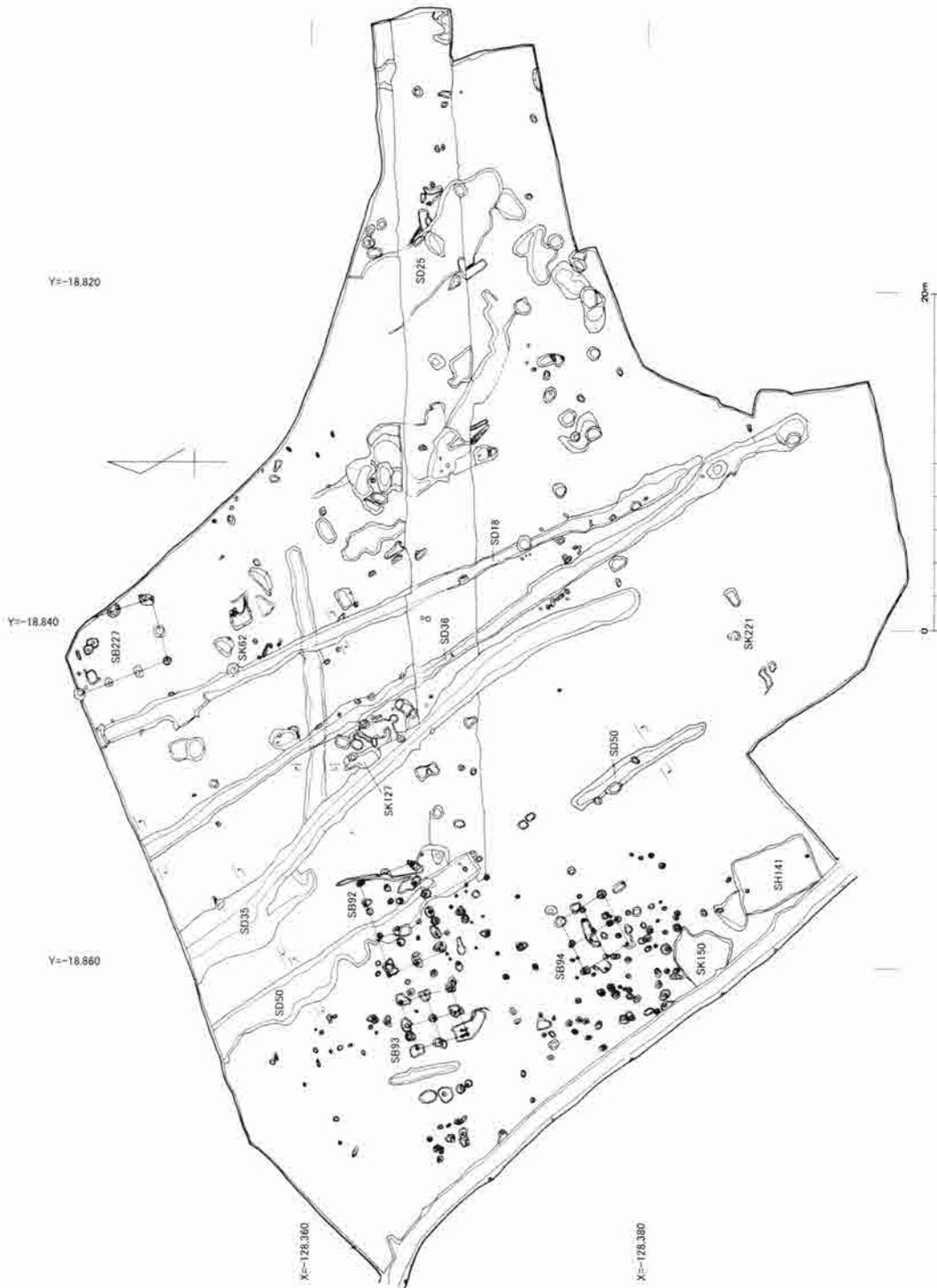
ほぼ中央から、径約0.3mの柱痕を確認した。主軸方位は、N13°Wである。この建物の掘形はS B02のものとはほぼ同規模であり、S B02の布掘りが非常に残りの悪いことを考えると、S B03も布掘りであった可能性もある。主軸方位からS B02と同時期と考えられるが、時期の分かる遺物が出土せず、時期不明である。また、S B04と平行関係にあるS A05と、この建物跡の柱穴に、一部切り合いが認められた。その状況から、S A05・S B04以降の建物跡と想定される。

**掘立柱建物跡 S B04**(第87図、図版第65) S H01を切る形で検出した、2間(2.6m)×2間(3.0m)以上からなる東西方向の掘立柱建物跡である。建物跡の西半分は調査地外になるため、全容については不明である。柱掘形は径0.3~0.4m、深さ0.2~0.38mを測り、掘形ほぼ中央に径0.2mの柱痕が存在した。主軸方位はN27°Wである。S A05と概ね平行関係にある。柱穴内出土遺物はなく、時期については不明である。

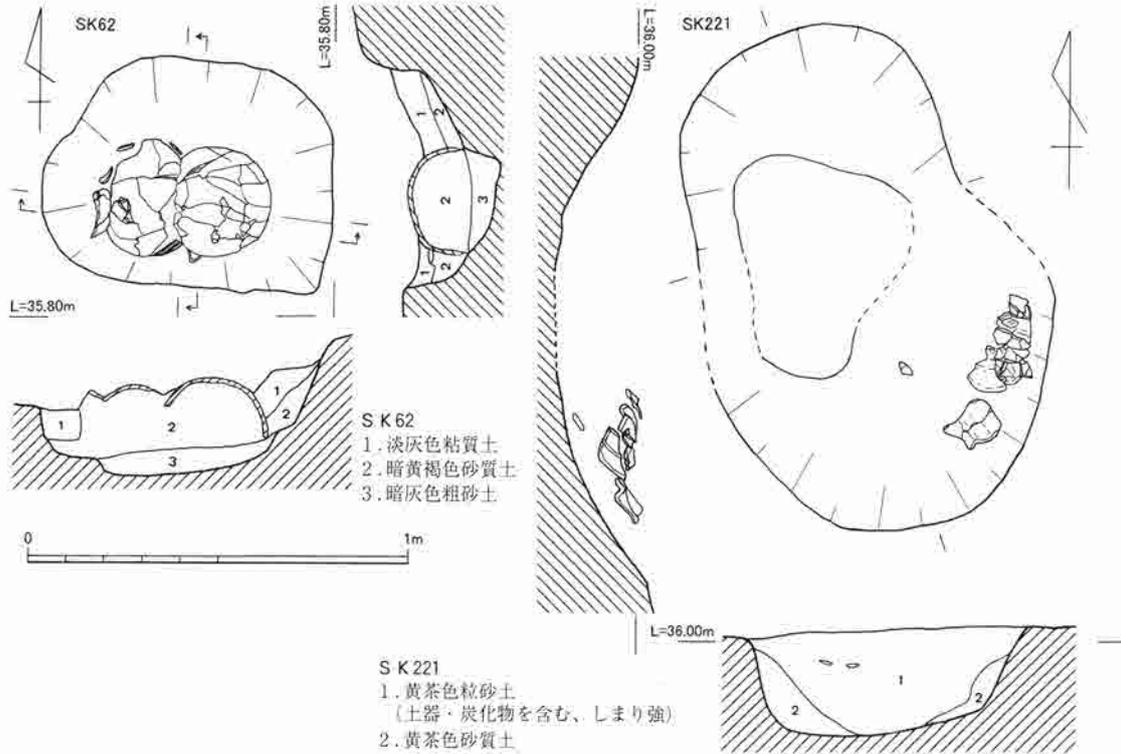
**柵 S A05**(第88・92図、図版第68) 南北方向の柵列で、S A05は7間(11.0m)である。S B04とはほぼ平行関係にあることから、同時期と考える。また、S A05はS B03と重複する形で確認された。一部切り合いが認められ、S B02・03とS B04・S A05とに時期差があることが分かった。出土遺物もないことから、時期については不明である。

**溝 S D35**(第86・91図、図版第68・69) 調査地中央を北流する溝である。E地区から続く。上流にあたるE地区ではわずかに蛇行していたが、D地区ではN34°Wの傾きをもって、ほぼ真っ直ぐに流れる。溝の規模は、D地区南端部で幅2.2m、深さ約0.5mを、D地区北端付近で幅約4.0m、深さ約1.2mを測る。溝は、「V」字に近い「U」字形を呈し、東斜面より西斜面の方が若干急である。形状から人為的に設けられた溝と考える。溝底は、北へゆるやかに傾斜する。溝埋土の中層に黄灰色土が認められ、この層を境に出土遺物に時期差が認められた。黄灰色土までの上層には8世紀末~9世紀前半の土器片に混じって、近世の陶磁器や土師器皿などの混入も認められ、近世頃も浅い溝として残っていたと思われる。黄灰色土下の下層からは8世紀中頃~8世紀末の土器片が出土した。そのうち、8世紀末~9世紀初頭にかけての土器片が大半を占めた。最下層の礫混じりの黄灰色土からは、甕の体部片を少量出土したのみである。このような状況から、8世紀末~9世紀初頭に築かれた溝と考える。溝から西方15mの範囲には、柱穴などの遺構は存在しなかった。これは、後世の削平の規模を示すのか、あるいは意図的に施設を設けなかったのか、不明である。D地区の北側約10mに東西方向の谷地形が現在も残る。一部掘削を行ったところ、S D35と同時期の遺物が混入する自然流路が認められ、S R07とした。S D35は、D地区北端部付近でS R07に合流すると思われる。この溝や自然流路に囲まれた範囲にS B02~04などの掘立柱建物跡が散見できることから、建物跡群を囲む溝であったと考える。したがって、溝と建物跡は同一時期と考える。掘立柱建物跡は、調査地西方にさらに展開するものと思われた。

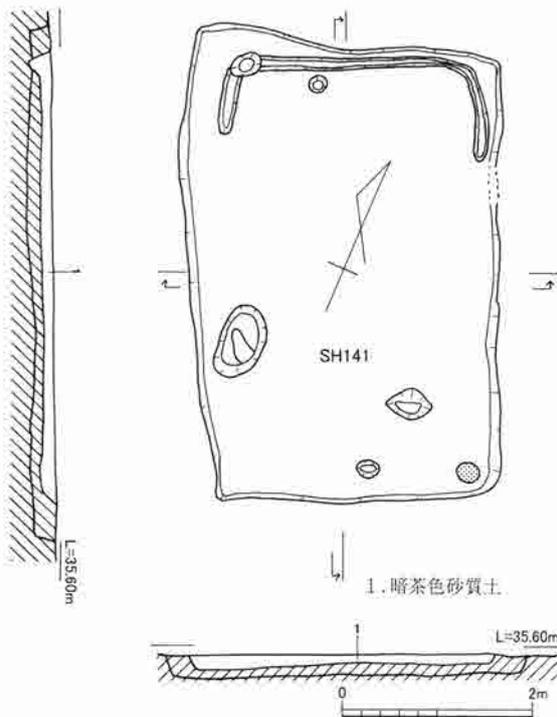
**溝 S D36**(第86・91・92図、図版第68・69) 調査地東部を北流する溝で、E地区からN33°Wの傾きでほぼ真っ直ぐに続く。調査地半ばで消失しており、その先に土坑状の落ち込みが認められた。この土坑状の遺構は、溝のライン上にあたり、壁の立ち上がりゆるやかであることから、溝の一部と考える。規模は幅約1.0m、深さ約0.3mを測り、北ほど残りが悪くなる。また、E地



第93図 E地区遺構配置図



第94図 土坑S K 62・221実測図



第95図 竪穴式住居跡S H 141実測図

区では、平行する溝(S D 50)が確認されているが、D地区においてはその痕跡は認められなかった。D地区南端で土師器甕(102)が出土した。

そのほかの遺構

調査地南西部から、幅約0.2m、深さ0.05～0.3mの溝が、南北方向あるいは東西方向にみられた。おもに南北方向の後に、東西方向の溝が設けられていた。出土遺物から近・現代の耕作溝と考える。調査地東部においても、幅約0.8m、深さ約0.2mの屈曲する溝がある。これについても同様の溝とみられる。

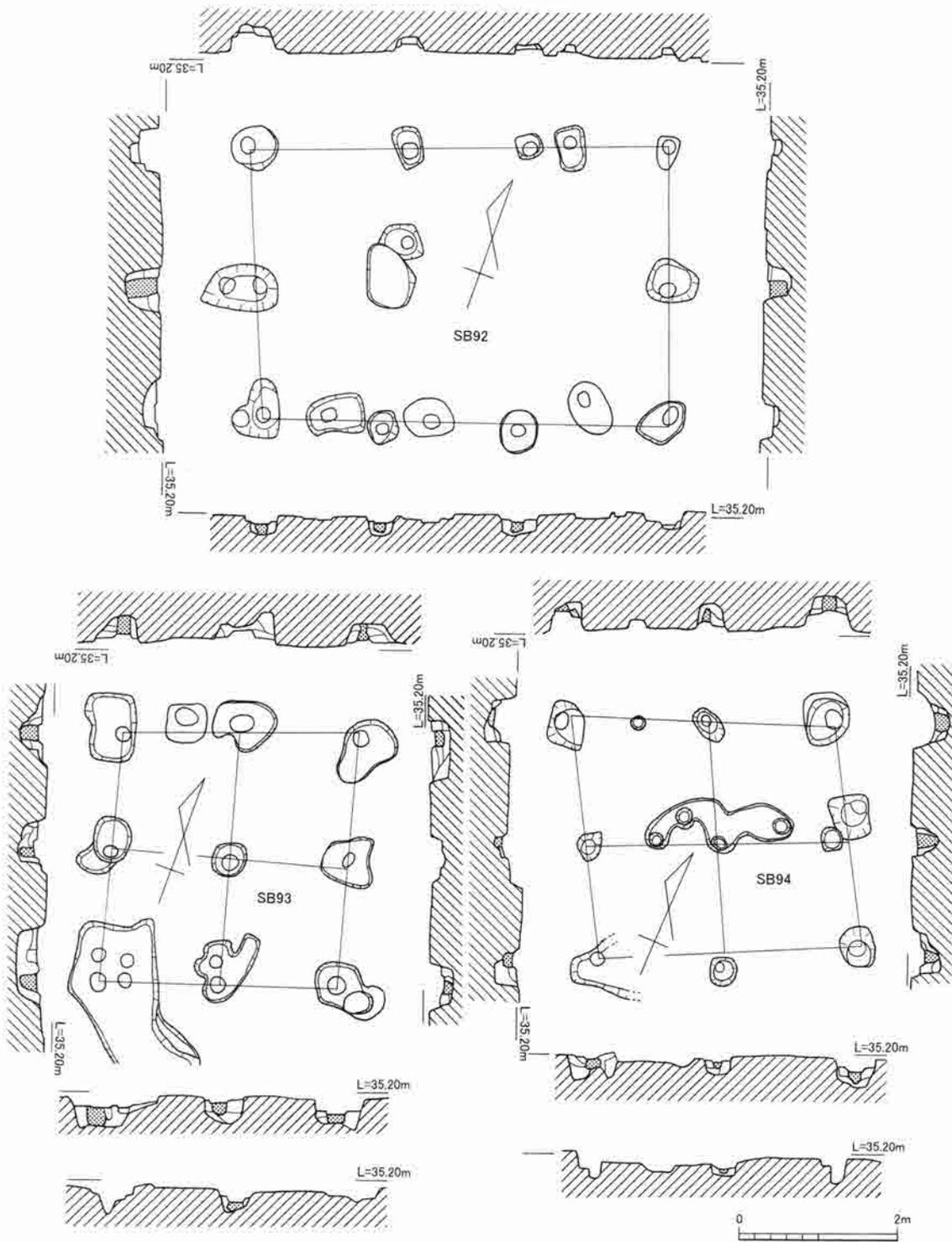
(岡崎研一)

(5) E地区(第93図、図版第70～74)

竹林内の里道を挟みD地区の南側に位置する。調査地南西側で竪穴式住居跡1基、掘立柱建物跡4棟、溝6条、土器棺墓などを確認した。

遺構検出面全体で後世の東西および南北方向の耕作溝群を検出しているが、特に南側は耕作溝とともに近・現代と考えられる攪乱が及んでおり遺構の残存度が悪かった。

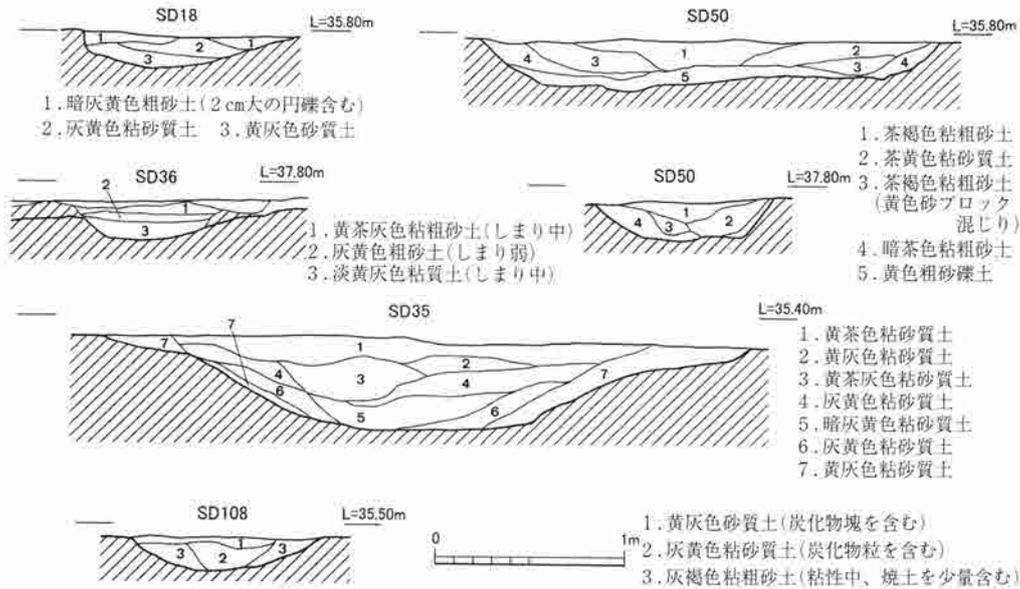
土坑S K 62(第94図、図版第71) S D 18に切られるかたちで検出した。長軸0.76m、短軸0.6



第96図 掘立柱建物跡 S B92～94実測図

m、深さ0.3mを測る。検出状況では、土坑内部に甕2個体を体部と頸部で合わせた状況であったが、調査の結果、甕1個体を縦に半截し、体部上半部と口縁部を打ち欠いた体部片を頸部で合わせるかたちで埋納していることが判明した。土器の内部には土が充填されていたが、土器内の土を水洗したところ土器の破片のほかは顕著な遺物はみられなかった。

土坑 S K 221(第94図、図版第70) 長軸1.5m、短軸0.95m、深さ0.3mを測る長楕円形の土坑



第97図 溝SD35・36・50・108断面実測図

である。土坑の南東側に二重口縁の壺の口縁部片が折り重なるように出土した(第114図116)。

竪穴式住居跡SH141(第95図) 長辺3.3m、短辺4.8m、深さ0.25mを測る南北に長い長方形の住居跡である。住居跡の北辺を中心に周壁溝がめぐる。また竈とは断定できないが南東隅の床面上でわずかに焼土塊を確認した。北辺と南辺の中央付近で柱穴を2か所確認したが、主柱穴は検出できなかった。埋土中から須恵器と土師器の小片が出土したが時期は特定できない。

掘立柱建物跡SB92(第96図) 東西桁行3間(5.2m)、南北梁間2間(3.3m)を測る。柱穴の深さは残りのよい部分で0.4m、悪い部分で0.1mを測る。SD50の廃絶後に溝の埋土を掘り込んで建てられている。ピットからは土器の小片のみが出土している。時期はSD50の出土土器から8世紀後半以降と考えている。

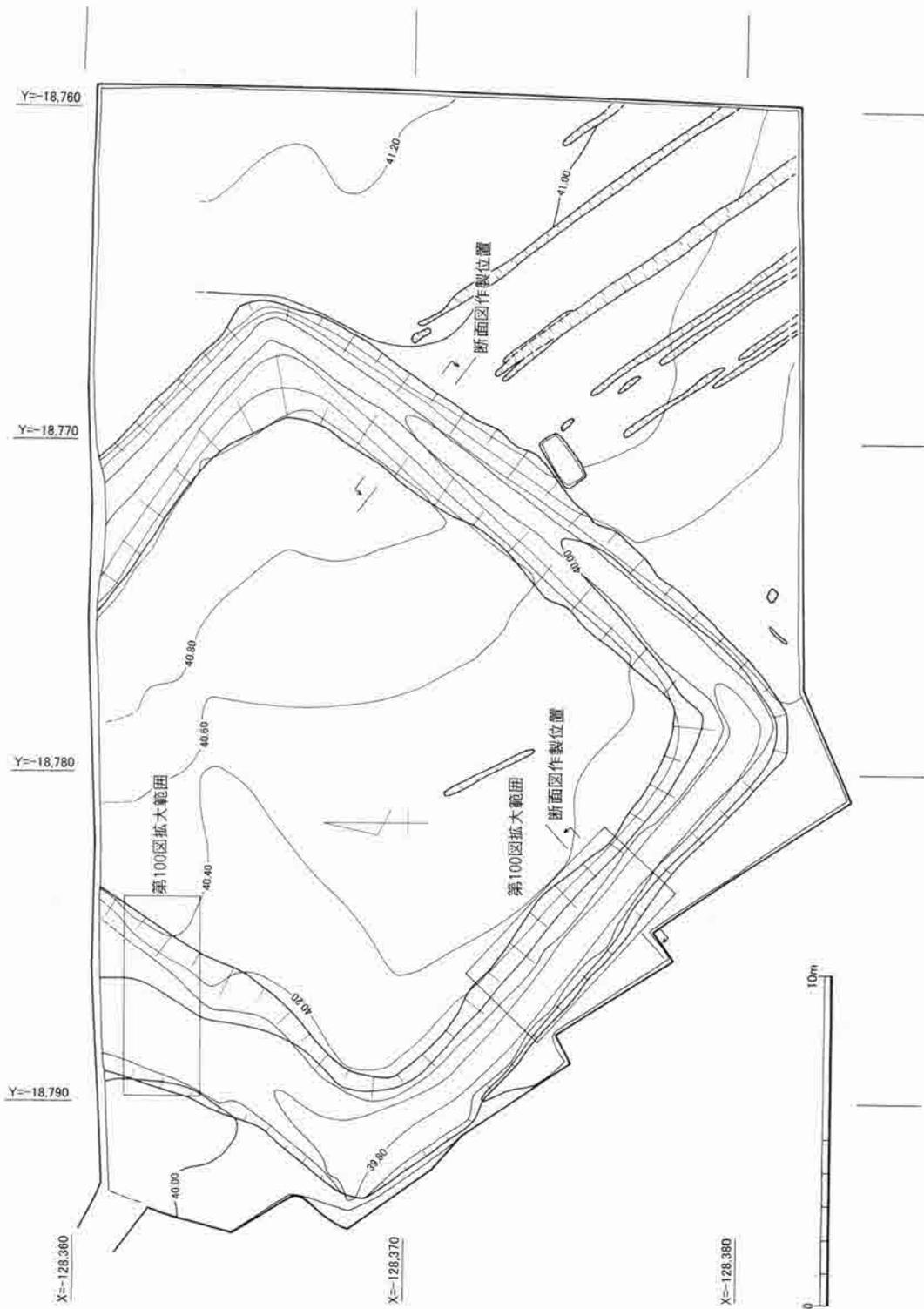
掘立柱建物跡SB93(第96図) 東西2間(3.0m)×南北2間(3.2m)を測る総柱建物である。柱穴の深さは0.2~0.3mを測る。SB92の西側に並ぶように建てられている。柱掘形は円形ないし隅丸方形で一定しない。時期は不明である。

掘立柱建物跡SB94(第96図) 東西2間(3.2m)×南北2間(3.0m)を測る総柱建物である。柱掘形は0.5~0.8mの円形である。柱穴の深さは0.2~0.3mを測る。ピットが重複し建て替えの可能性もある。時期を決定する遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB227(図版第72) 調査地北東隅で検出した。桁行3間(5.4m)以上×梁間2間(4.2m)以上を測る。建物の北側部分は調査地外へのびる。柱掘形は一辺0.4~0.5mで深さ0.3mを測る。時期は不明である。

土坑SK127 SD36および35の間で検出した。1.5×1.4mの不整形な土坑である。深さは0.15mを測る。埋土中から須恵器杯・土師器杯が出土した(第115図121・122)。

土坑SK150 3.5×4.0m以上の不整形の土坑である。土坑底面は深さが一定ではなく、埋土中には焼土が混じる。出土遺物には須恵器杯、土師器杯・甕などがある(第115図125~131)。時



第98図 F地区遺構実測図

期は9世紀前半と思われる。用途不明の土坑である。

溝SD18 長さ3.9m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。溝の主軸は北西—南東方向を向く。南側でSD36に切られる。埋土の状況は自然堆積により埋まったと考えられる。

溝SD35 北側で幅2.0m、南側で0.9m、長さ32m、深さは北側で1m、南側で0.15mを測る。断面は浅い皿状をなしている。北端ほど幅が広く、南へ行くほど幅が狭くなり途切れる。この溝は北側で西に、南側で東にわずかに蛇行し自然流路状をなしている。この溝の北側はD地区にのびる。出土遺物には、8世紀後半～9世紀前半の土器がある(第116図141～154)。

溝SD36 溝の長さは44m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。南側は後世の削平のため徐々に浅くなり途切れる。出土遺物は、8世紀後半～9世紀前半の須恵器・土師器がある(第115・116図132～140)。

溝SD50 幅1.1m、深さは北側で約0.4mを測る。長さ20mで溝が途切れ、再び5m南側で現れる。南側の溝は長さ9mを検出した。溝の延長部分は、東西方向の後世の耕作溝および攪乱により削平されており検出できなかった。先のSD36と並行しており道路状遺構の側溝の可能性もあるが断定はできない。SD36とSD50の溝の心々間の幅は約11.1～11.7mを測る。出土遺物は8世紀前半から中頃と考えられる土師器杯が1点あるが、この土器での時期決定はできない。

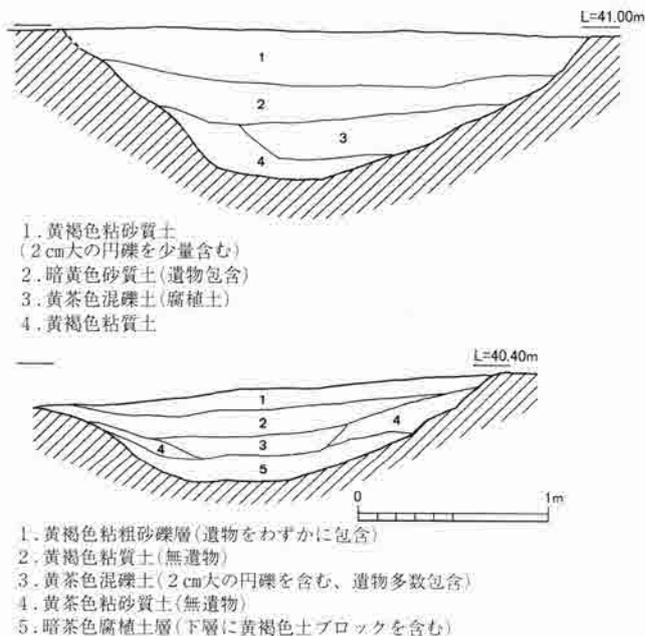
溝SD108 幅約0.6m、長さ8m、深さ0.3mを測る。断面は皿状をなしている。この溝はSD18・35・36に切られる。この溝はわずかに弧を描いており東側で閉塞する。出土遺物は須恵器杯Bおよび蓋がある(第116図157～159)。

(6) F地区(第98図、図版第75・76)

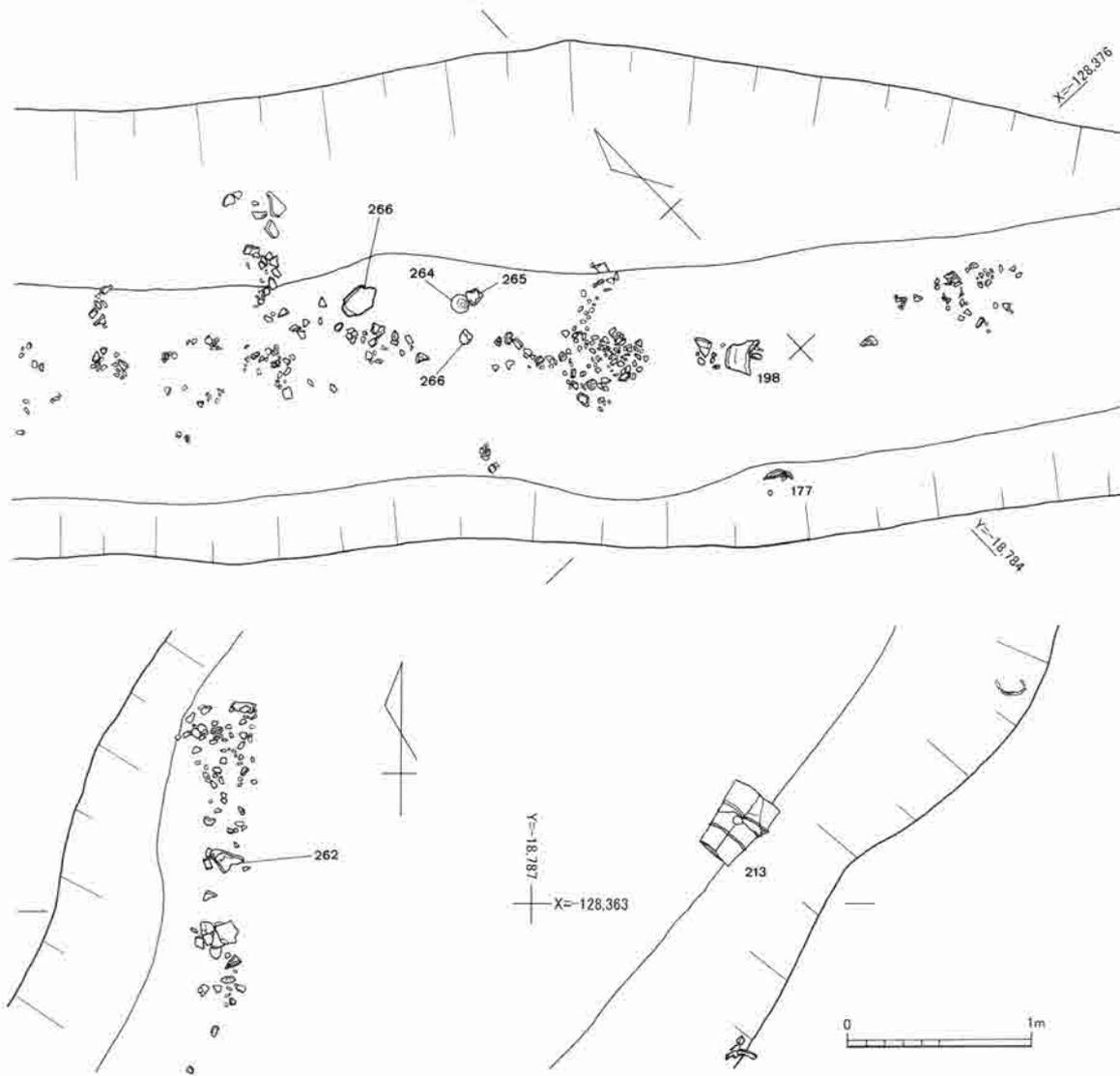
平成13年度の試掘結果をもとに、溝の検出されたトレンチ南側から南東半部にかけて面的拡張を行った。面積は約600m<sup>2</sup>である。面的調査の結果、一辺約17mの方墳(芝山Ⅲ-1号墳)である

ことが判明した。調査地の標高は約40mを測る。検出されたのは墳丘周囲の周濠部分のみである。周濠は台地の北東側の高所部分が比較的残りがよく、西および南西側は里道として利用されてきたよう

でかなり削平を受けていた。周濠の幅は北東側で約3.5m、深さ0.9m、西側は幅約4m、深さ0.15mを測る。  
埋土の状況(第99図) 周濠埋土の堆積状況は、大きく4層に分層できた。断面図は、全体図に図示した南東側と南西側のものを提示した。南東側の1層は墳丘の削平土と考えられる黄褐色粘砂質土ないしは砂礫を含む土が堆積していた。2

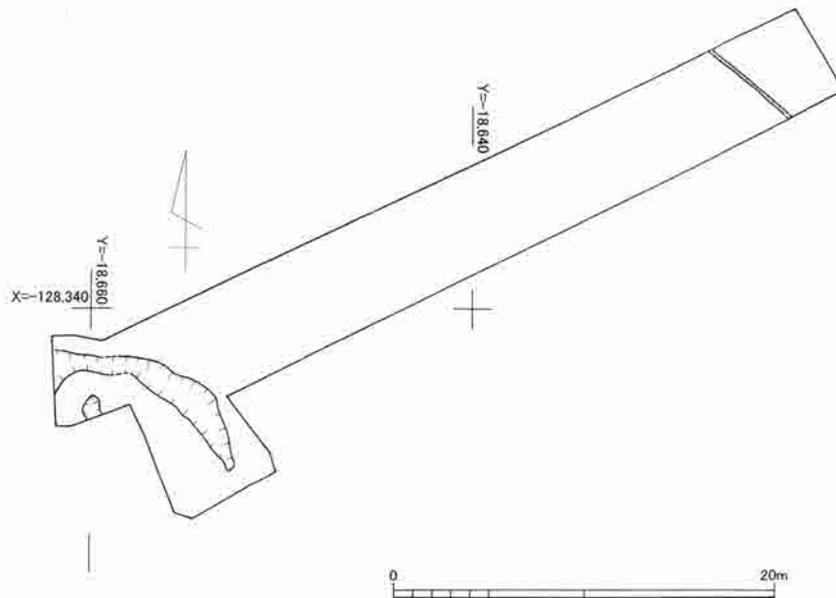


第99図 周濠断面実測図

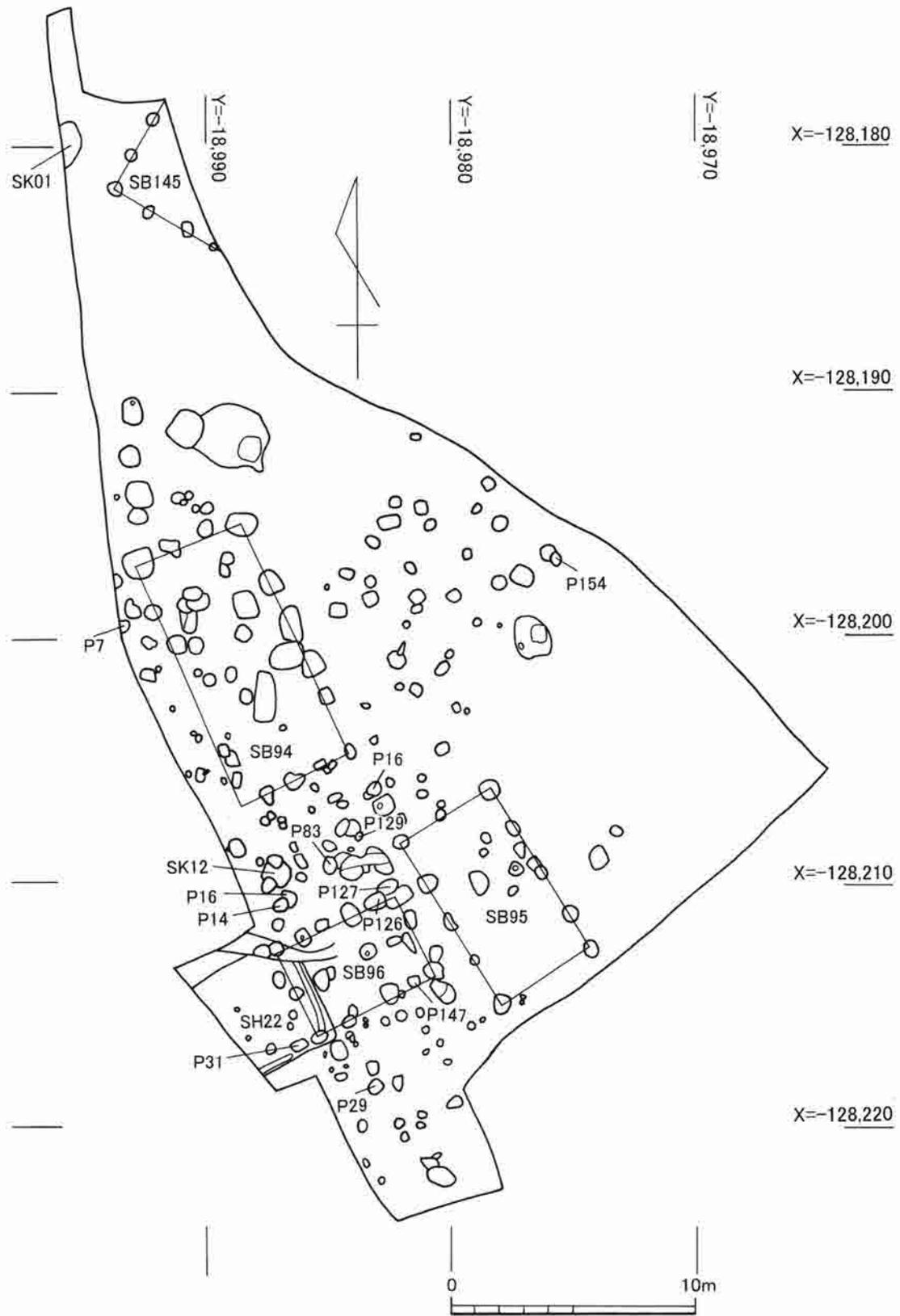


第100図 周濠内遺物出土状況図(遺物番号は実測図と対応)

層は暗黄色砂質土で埴輪片や土器片を包含している層である。3層は黄茶色混礫土層(腐植土層)であり、ある一定期間周濠が滞水していた時期に堆積したと考えられる層である。この層には遺物は含まれない。4層は墳丘築造後の流入土と思われる。一方、南西側は1層と

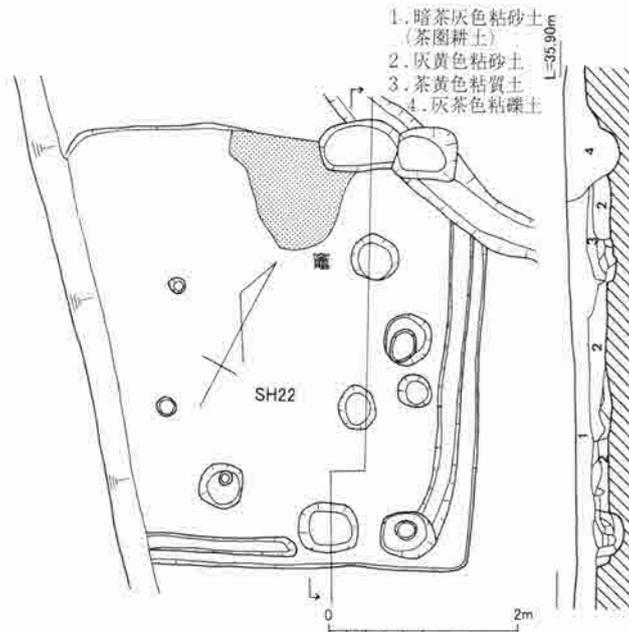


第101図 G地区遺構配置図



第102図 H地区遺構配置図

遺物を包含する3層との間に精良な黄褐色粘質土層が介在する。3層は南東側の2層に対応し遺物を包含する層である。この層は墳丘からの流入土がおさまった短期間に人為的に埋められた層と判断する。5層は腐植土層である。以上のように場所により堆積状況が異なるが、比較的周濠の残りのよい北東側では、13世紀代の青磁碗・白磁碗を包含する層をもってほぼ周濠が埋没したことが確認できた。この層位から、少なくとも奈良時代前半には墳丘の削平行為がなされ、13世紀には墳丘が完全に削平され平坦地として整地されたと考えられる。



第103図 竪穴式住居跡SH22実測図

出土遺物のうち、円筒埴輪片および土器片は、周濠内全域で確認しているが、特に馬形・靱形・甲冑形などの形象埴輪は北西辺の周濠部分で出土する傾向がみられたため、この付近の墳丘上に置かれていたと考えられる。円筒および形象埴輪は、全体に細片化しており、出土状況から全体の形状が分かるものはなかった。また、埋葬主体部に副葬されていたと考えられる鉄鎌・刀子・鉄鎌・滑石製紡錘車などが周濠内から埴輪片とともに出土したことから、奈良時代には、主体部も破壊されたと考えられる。

一方、周濠の北西側の墳丘斜面では、円筒埴輪1点が横倒しの状態でみつかった(第120図213)。特に掘り込みはみられなかった。一点のみがほぼ完形の状態で出土しており埴輪棺の可能性も考えられる。

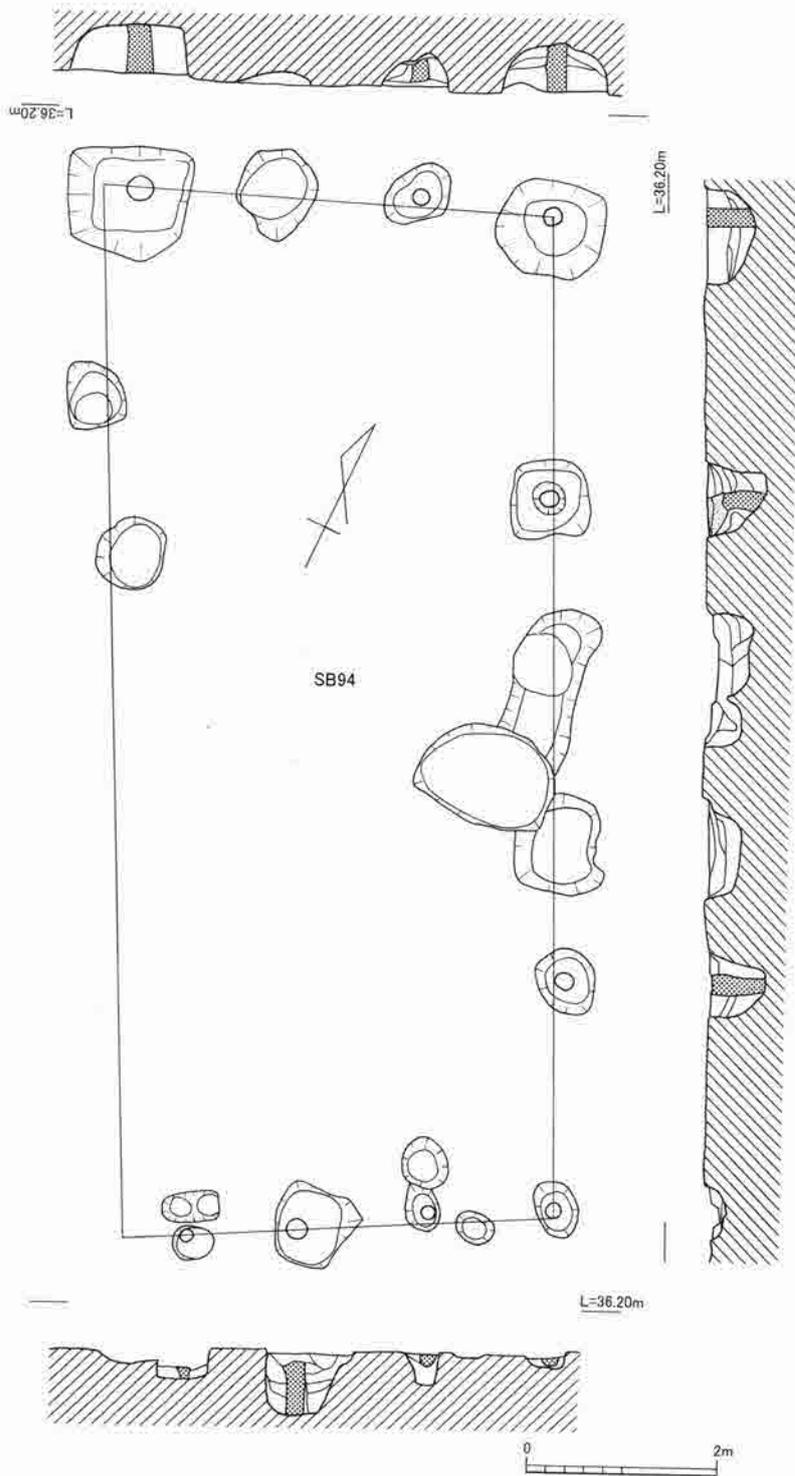
先に、古墳の遺物に伴って多量の8世紀前半の土器も出土したことを述べたが、この古墳付近に集落が存在していたことを物語っている。しかし、削平された墳丘上ではこの時期の遺構はみられなかった。なお、F地区に隣接するE地区では8世紀後半～9世紀初頭の時期と考えられる遺構がみられたが、時期が一致しないことから、古墳に隣接する丘陵の北東側にこの時期の集落の存在が想定される。

#### (7) G地区(第101図)

やせ尾根の丘陵稜部に位置する。東側は表土直下、地山となり、顕著な遺構・遺物もみられなかったが、調査地の西端で、墳形不明の古墳の溝(芝山Ⅲ-2号墳)を検出した。墳丘は確認できなかった。この溝は幅約1.5m、深さ0.4mを測る。この溝の埋土中からわずかに円筒埴輪片が出土した。

#### (8) H地区(第102図、図版第77・78)

A地区の南側に位置する。現況は茶畑である。検出した遺構には、古墳時代の竪穴式住居跡1



第104図 掘立柱建物跡 S B 94 実測図

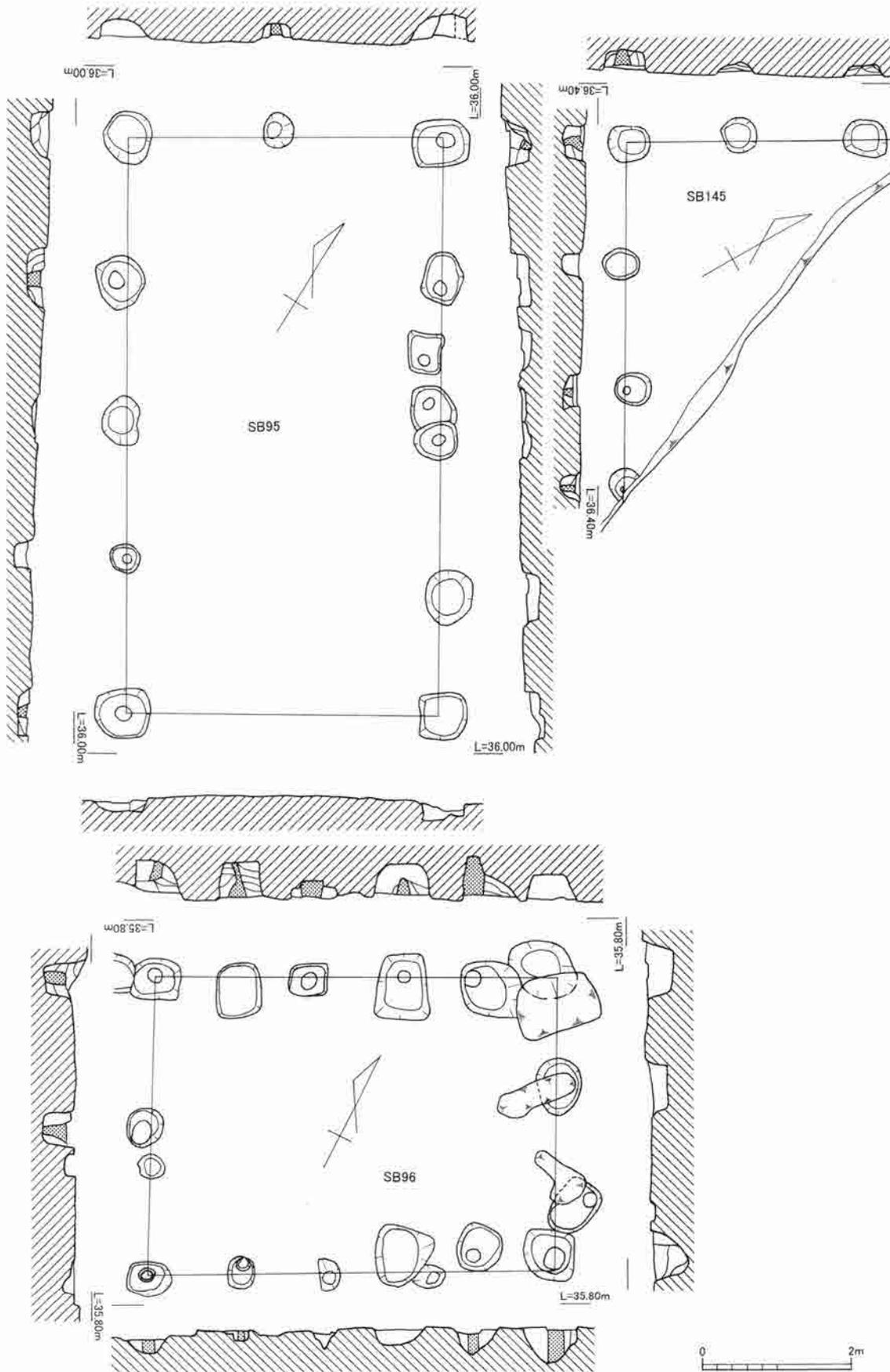
基や、平安時代と思われる掘立柱建物跡4棟がある。なお、遺構検出面と同一面で後世の耕作溝群もみつけた。

竪穴式住居跡 S H 22 (第103図) 規模は東西4.2m、南北4.7m、検出面からの深さは0.2mを測る。竈は北辺の中央部分に取り付く。竈は焼土のみが認められた。周壁溝は東辺と南辺で検出した。北東辺は S D 21 に削平されている。また南東隅は S B 96 の柱穴に壁溝が切られている。出土遺物は、竈と考えられる焼土部分から土師器片が出土したが時期は特定できない。

掘立柱建物跡 S B 94 (第104図) 調査地中央部西寄り検出した。桁行4間(10.5m)×梁間3間(4.5m)を測る。建物の主軸は N24° W である。柱穴の深さは0.3~0.5mを測る。西側の桁行柱穴は南側部分が検出できなかった。確認した柱痕は径約20cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 95 (第105図) 桁行4間(7.6m)×梁間2間(4.2m)を測る。主軸は N32° W である。南側の梁間の柱穴は検出できなかった。柱穴は、後世の削平の影響により、検出面からの深さは0.1~0.2m程度である。

掘立柱建物跡 S B 96 (第105図) S H 22 を切る建物跡である。桁行2間(4.2m)×梁間3間(5.4m)を測る。柱穴の深さは約0.3~0.5mを測る。主軸は N27° W である。柱穴の重複があり、建て



第105図 掘立柱建物跡 S B 95・96・145実測図

替えをしているものと考えられる。

掘立柱建物跡 S B 145(第105図) 調査地北東部で検出した。桁行3間(4.8m)以上、梁間2間(3.2m)以上を測る。主軸はN59°Wである。一部は調査地外へのびる。柱掘形の平面形は直径0.4mの円形である。深さは0.1~0.2m程度である。埋土は暗茶色土である。

ピット P 154 直径約0.3m、深さ0.4mを測るピットである。埋土中から鉄斧(第124図298)が出土した。

## 5. 出土遺物(第106~109図)

### (1) A地区

1・2はS K 05、3はS H 36、4~9はS H 73、10・11は表採、12・13はS K 82から出土した。1は須恵器杯身で、口径11.8cm、器高5.7cmを測る。2は滑石製紡錘車で、直径4.7cm、高さ1.7cmを測る。体部には工具による調整痕を顕著に残す。底部には穿孔部を中心に円形の文様をめぐらし、その外周に7単位の稚拙な鋸歯状文を施す。3は土師器杯で、口径約20.4cm、器高3.8cmを測る。4・5は杯蓋で、中心部分に宝珠つまみが付く。6は甕、7・8は鍔付きの鍋である。7は口縁部が外反するが、8は内湾する。9は甌の把手と思われる。12・13は土師器甕で、口径25cm、器高36cmを測る。12は底部付近に、13は底部から外れた部分に、焼成後の穿孔がみられる。

14~43は芝山 I - 11号墳の周溝(溝 S D 120)から出土した。14~37は須恵器、38~41は土師器である。14は杯蓋、15は杯身である。16・17は有蓋高杯の蓋、18~20は高杯、脚部の透かしは長方形の三方透かしである。21は無蓋高杯である。22~24・30・31は壺である。30は肩部と底部内面に自然釉が付着する。25は杯蓋、26~29は杯身である。32は甌である。33は長脚二段透かしの高杯である。透かし孔は2方向である。34は甕である。35は外面および口縁部内面にベンガラと思われる彩色がされている。36は杯A、37は杯Bである。38は甕、39は移動式竈の破片である。焚き口部分の鍔の接合部には、斜め上方に向かって工具の先端刺突が施される。40・41は甌である。40の胴部には貼り付け突帯がある。41の底部の上方には3方向の穿孔がある。なお40・41は同一個体の可能性もある。42は滑石製の紡錘車である。工具による調整痕はみられるが、文様はない。43は灰色チャートのスクレイパーである。横長剝片を用い、片面調整である。縄文時代の可能性がある。

飛鳥~奈良時代の遺物としては、44~57がある。44はS B 32、46~51はS D 91、52・53はS K 06、54~56はS B 108、57はS B 34のP 3から出土した。46・47は須恵器蓋である。46は口径11cmを測り、蓋内面にはかえりを持つ。つまみは欠損するが宝珠つまみを持つと思われる。44は口径9.4cm、底径7.0cm、器高4.0cmを測る。高台は付くが底部も接する。45は須恵器杯Aで、口径11.9cm、器高3.3cmを測る。49は須恵器杯Bで、口径14.0cm、底径8.7cm、器高4.5cmを測る。50は須恵器杯Bで、口径15.9cm、底径10.4cm、器高3.45cmを測る。54は須恵器杯Aで、P 6から出土した。口径12.8cm、器高3.1cmを測る。55は須恵器蓋で、口径11.9cm、器高2.5cmを測る。56

は土師器甕で、口径19.5cmを測る。57は須恵器蓋である。

(柴 暁彦)

## (2) B地区(第110図)

須恵器片や土師器片が少量出土している。器形の分かるものは極少量であり、そのうちおもなものとしては、S B05東側の土坑出土の須恵器杯(58)とS A03出土の土師器甕(59)のみである。

須恵器杯(58)は、口縁部のみで外上方に真っ直ぐ立ち上がる。底部が欠損していたため、時期は不明である。土師器甕(59)は、扁平な体部と「く」の字状に屈曲する口縁部からなる。端部は、内側に肥厚する。体部下半はヘラ磨きを、体部上半部と内面下半部にはナデが施される。その形状から、8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。

## (3) C地区(第111図)

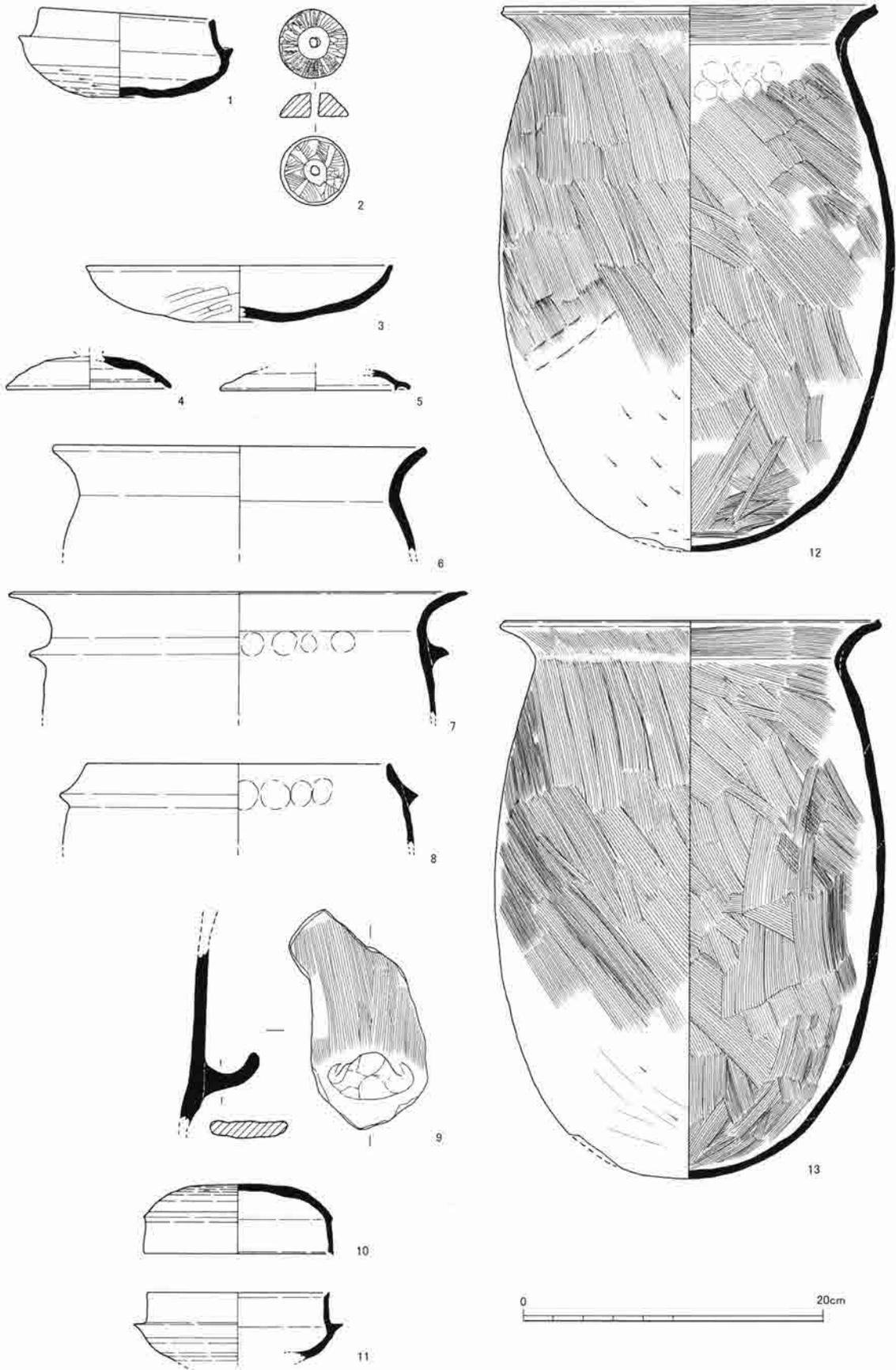
須恵器片や土師器片が少量出土している。おもなものとしては、S B01南側の包含層から出土した須恵器蓋(60)と、S R03出土のもの(61～66)がある。須恵器蓋(60)は、平坦な天井部と外下方にのびる口縁部からなる。端部は、下方に尖る。扁平なつまみが付く。口径が20cmと大きく、全体に扁平であることから、8世紀中頃と思われる。須恵器蓋(61)は、平坦な天井部と「S」字状に屈曲する口縁部からなる。端部は、下方に尖る。この蓋も口径が大きく、「S」字状に屈曲することから8世紀後半と考える。須恵器杯(62～64)は、輪状の高台を有す。底部の外縁やや内側に高台を貼り付ける。62は、体部が外上方に真っ直ぐ立ち上がる。器形から8世紀後半とする。須恵器壺(65)は、外下方を向く輪状高台を持つ。66は、土師器皿である。平坦な底部と外上方に短く立ち上がる。

## (4) D地区(第112・113図)

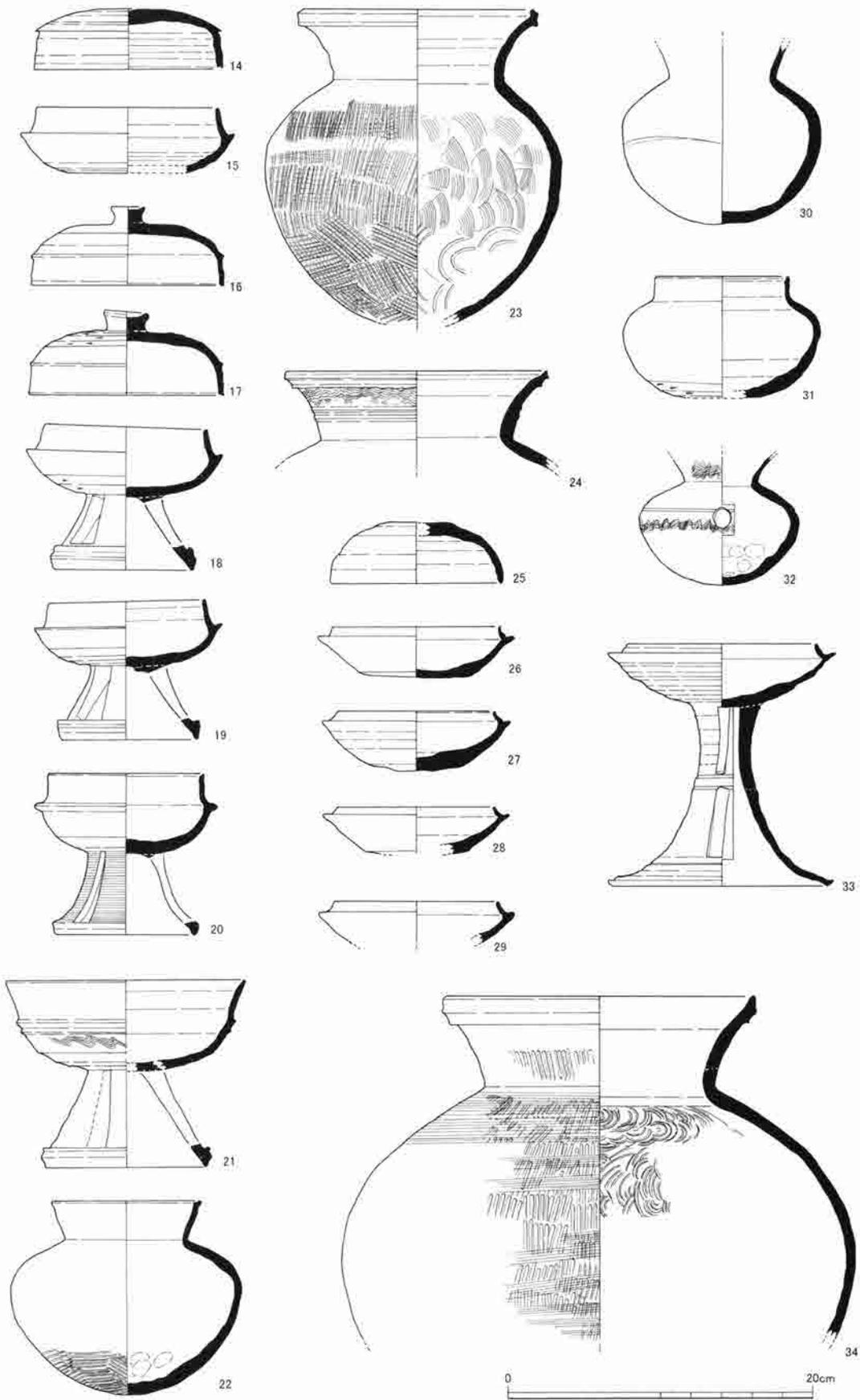
D地区出土遺物の内、大半がS D35から出土したものである。掘立柱建物跡や柵列に伴う柱穴からの出土遺物が少量であったため、各遺構の時代を確定するに至らなかった。

第112図67～98は須恵器で、99～104は土師器である。第113図105～108・110・111は須恵器で、109は灰釉陶器で、112～115は土師器である。S D35出土遺物は68・88・97で、S D35上層出土は72・76・83・90で、S D35下層出土は67・69～71・79～82・85・87・89・92・93・96・98・100・101である。S D36上層出土は91・102・104で、柱穴出土は73～75・78・84・86である。103はP309出土のものである。また、S R07出土は105～107で、108～115は包含層出土である。

須恵器蓋(67・68)は、かえりの付く蓋である。丸みのある天井部と外下方を向く口縁部からなる。須恵器蓋(69・70)は、平坦な天井部と「S」字状に屈曲する口縁部からなる。端部は、外下方に尖る。つまみは欠損している。形態から9世紀前半とする。須恵器皿(71)は、平坦な底部から斜め上方に大きく開く口縁部からなる。端部は、平坦である。皿の出土量はかなり少ない。形態から8世紀後半と考える。須恵器杯は、平底のもの(72～76)と輪状の高台を貼り付けるもの(77～90)に分かれる。平底のものは、平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。輪状高台をめぐらすものには、平坦な底部から丸みを持って外上方に立ち上がるもの(77・78)と、器高の低いもの(79～81)、器高の高いもの(82)がある。器形から8世紀後半～9世紀初頭にかけてと

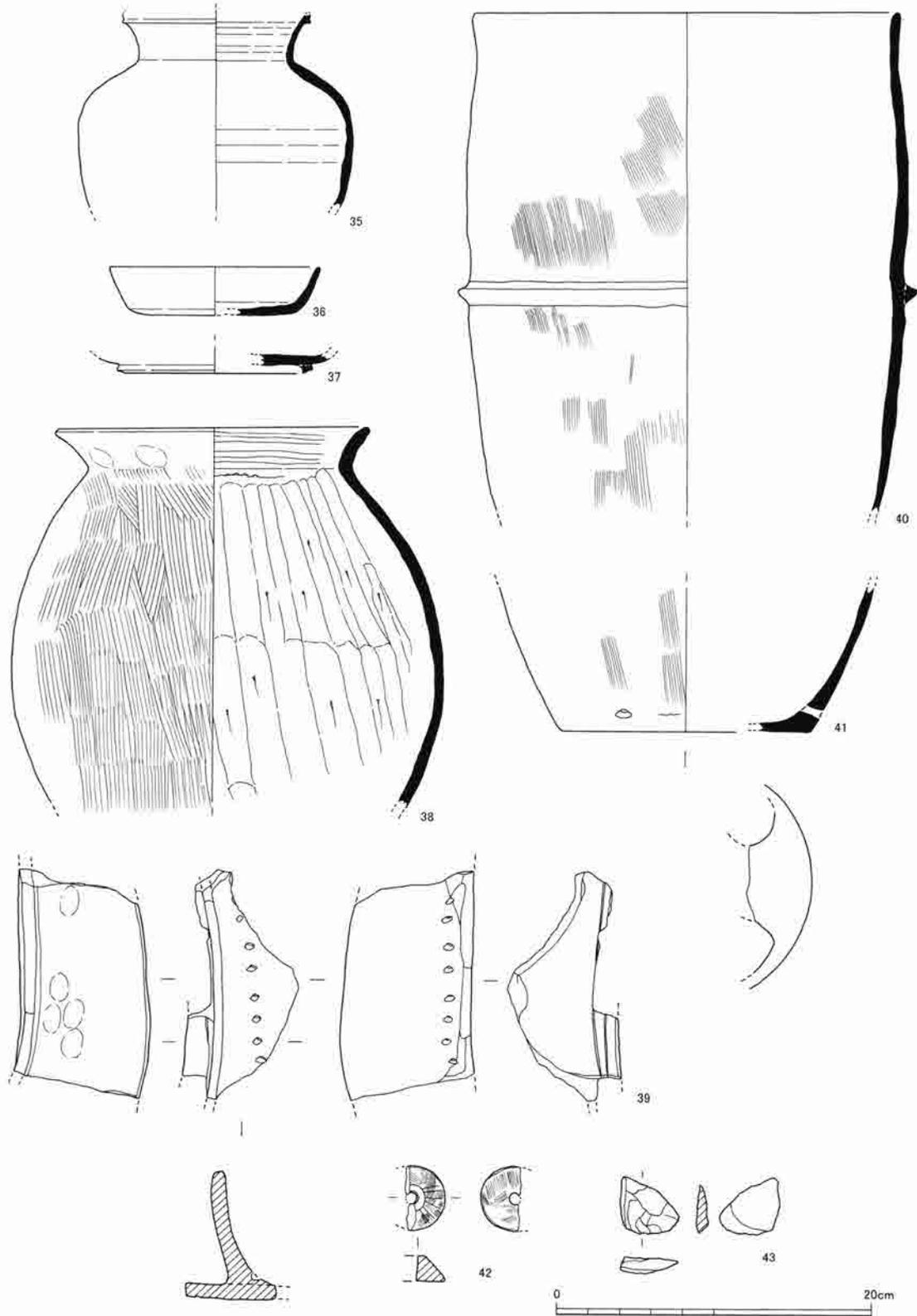


第106图 A地区出土遺物実測図(1)



第107図 A地区出土遺物実測図(2)

考える。須恵器短頸壺(91)は、扁平な体部と上方に短く立ち上がる口縁部からなる。端部は、わずかに内上方に湾曲する。体部下半は、ヘラケズリを施す。須恵器壺(95~98)は、体部上半部で「く」の字状に屈曲するもの(97)と、体部が卵形を呈するもの(96)がある。口縁部は、上方に立

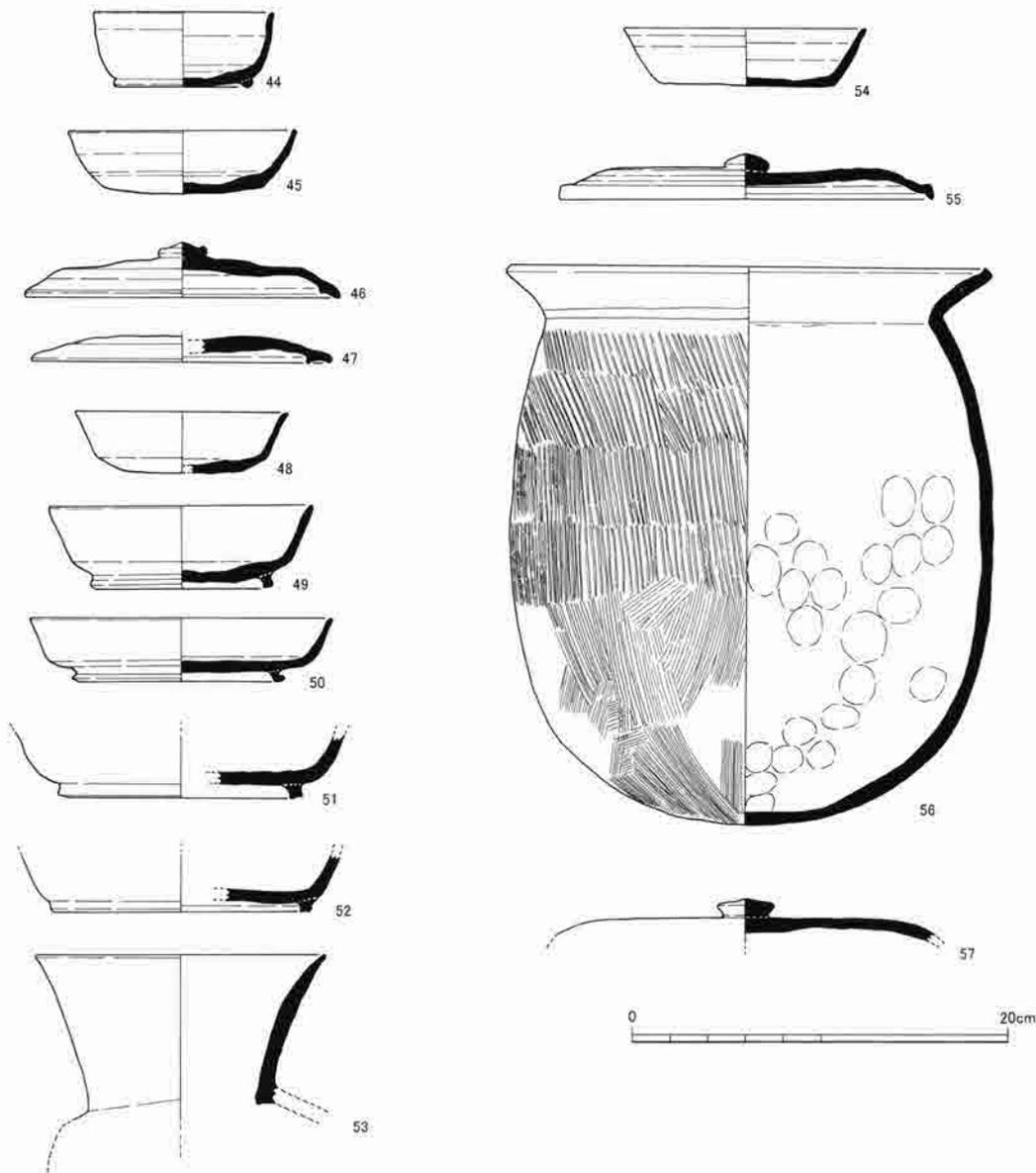


第108図 A地区出土遺物実測図(3)

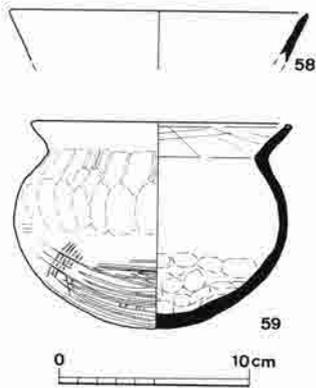
ち上がるもの(96)と、大きく斜め上方に外反し、端部が平坦なもの(95)がある。須恵器瓶子(92～94)は、体部が球形のもの(93)と体部上半部で「く」の字状に屈曲するもの(94)がある。93は、底部外縁部に輪状の高台をめぐらす。その形態から8世紀後半と考える。

土師器不明品(99)は、円形を呈し、ほぼ中央部に8mmの円形の孔が穿たれる。底部は欠損しており、全容は不明である。

土師器甕(100～104)は、体部が球形を成すもの(102・103)と、体部の細長いもの(100・101・104)がある。102・103は、体部外面は上半部が縦方向のハケ調整を行い、下半部はナデ仕上げである。体部内面は上半部から口縁部付近まで横方向のハケ調整が施される。器形から8世紀中頃～後半と考える。口縁部は、外上方に立ち上がり、端部は平坦にちかい。100・101・104は、やや内湾しながら上方に立ち上がる体部と「く」の字状に屈曲して斜め外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は内上方に尖るもの(100)や丸く仕上げ



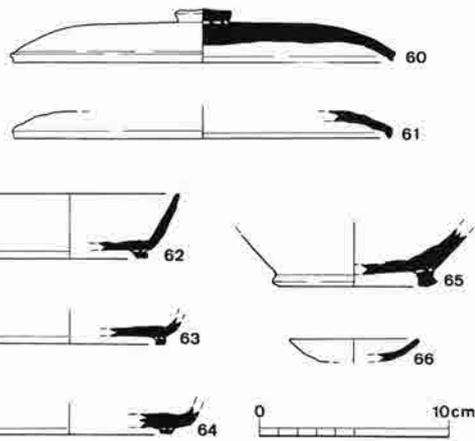
第109図 A地区出土遺物実測図(4)



第110図 B地区出土遺物実測図

るもの(104)、平坦なもの(101)がある。100は、器壁が磨滅しており調整は不明である。101の口縁部内面に横方向のハケ調整が、104の体部外面に縦方向のハケ調整が残る。

須恵器蓋(105・106)は、平坦な天井部と「S」字状に屈曲する口縁部からなる。107は、底部外縁部に輪状高台をめぐらす杯である。その形態から8世紀末と考える。108は平底の杯である。109は灰釉陶器である。口縁端部は欠損している。須恵器壺(110)は肩部のみで全容については不明である。111は鉢である。112～



第111図 C地区出土遺物実測図

115は、土師器皿である。底部が丸みを帯びるもの(112)と、わずかに平坦なもの(113～115)がある。指押さえて整形している。

(岡崎研一)

(5) E地区(第114～116図)

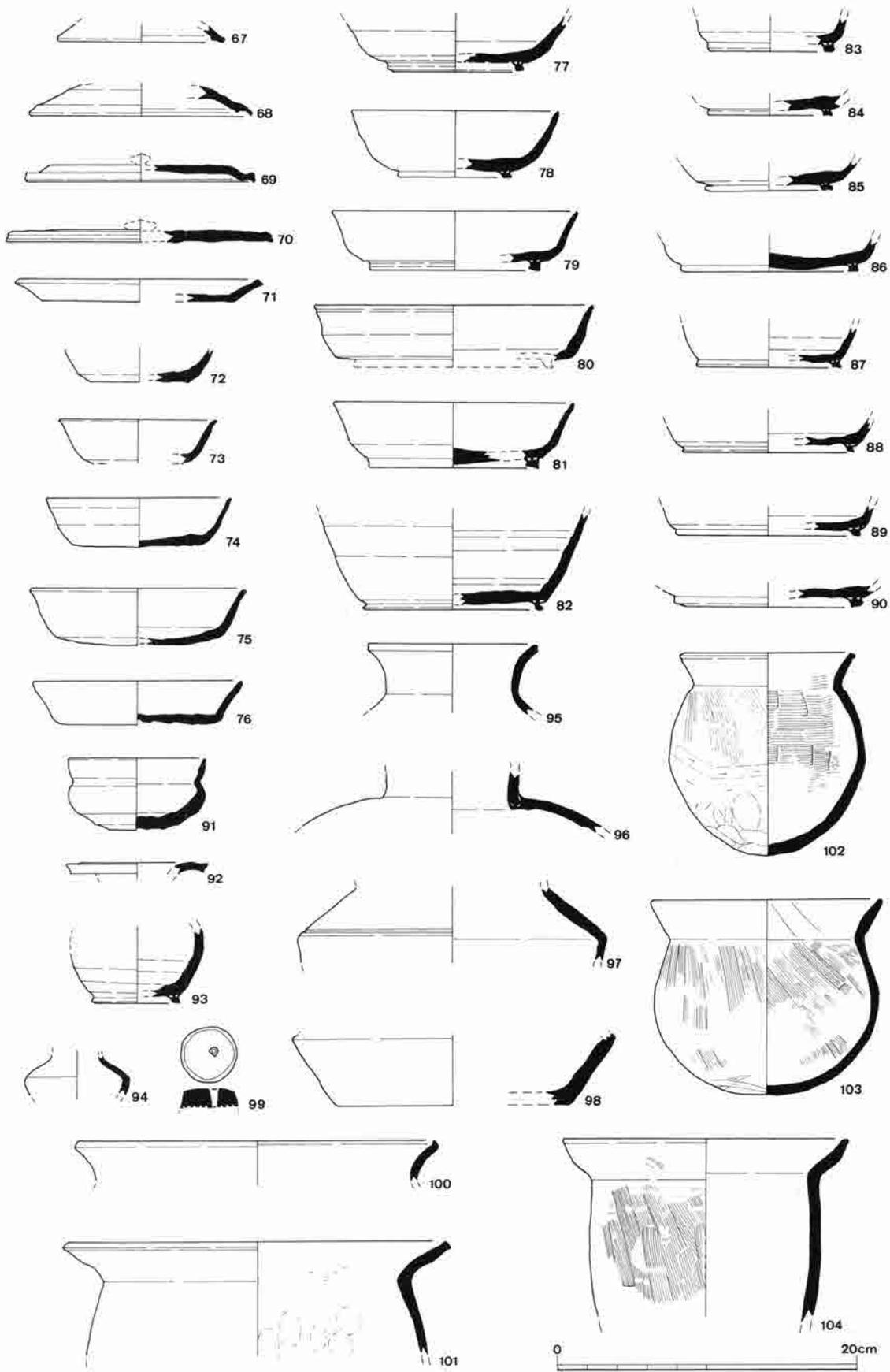
116はS K 221から出土した古式土師器の二重口縁壺である。117はS K 62から出土した古式土師器の壺である。118はS D 18、119はS D 19、120はS D 25、121・122はS K 127、123・124はS K 116、125～131はS K 150、132～140はS D 36、141～154はS D 35、155・156

はS D 50、157～159はS D 108から出土した。118は須恵器の杯である。口径11.2cm、器高3.6cmを測る。119は土師器甕である。120は須恵器杯Bである。口径25.0cm、器高3.2cmを測る。121は須恵器杯Aで、口径10.6cm、器高3.5cmを測る。122は土師器杯である。口径22.4cm、器高3.2cmを測る。123・124・125は須恵器杯Bである。123は口径13.4cm、器高4.3cmを測る。124は口径15.4cm、器高3.4cmを測る。126・127は須恵器杯Aである。126は口径11.8cm、器高4.1cm、127は口径13.7cm、器高4.1cmを測る。128～131は土師器である。128は杯、129～131は甕である。128は口径9.4cm、器高2.5cmを測る。土師器甕には口径が13cmの小型のものと、20cmを超える甕がみられる。132～134は須恵器、135～140は土師器である。須恵器は底部の破片で全体の形状の分らないものはないが、132は杯、133・134は壺と思われる。135は鍋で、口径は36.0cmを測る。136～140は甕である。136は口縁部と底部を欠くが、卵形の体部を持つ。137～139は大型甕、140は球形の体部を持つ甕である。141～154は須恵器である。須恵器杯には杯B(141～147)と杯A(148～151)がみられる。そのほかの器形には長頸壺の底部(152・153)などがある。

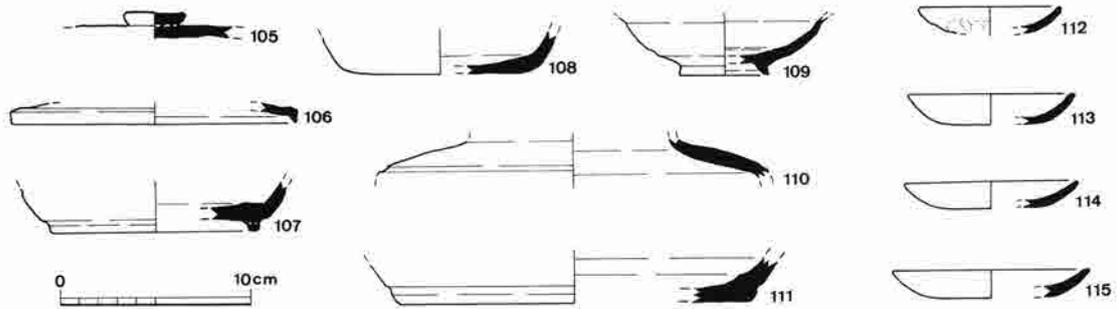
160～164は鉄製品、165～167は鉄滓である。160はS D 36、165はS D 35、166はS K 150、そのほかは遺構外から出土した。160・161は刀装具と思われる。162～164は鉄釘である。

(6) F地区(第117～123図)

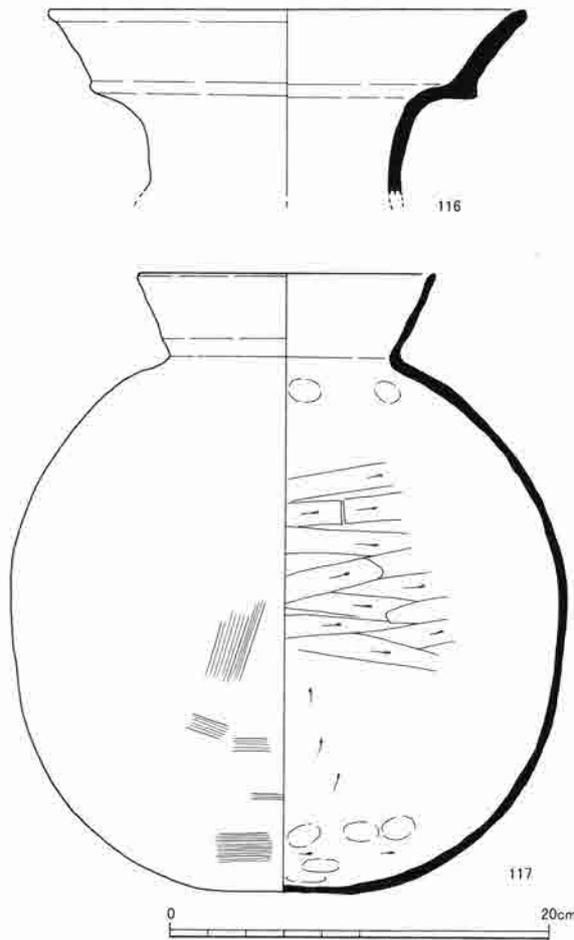
芝山Ⅲ-1号墳出土遺物(第117～123図)



第112図 D地区出土遺物実測図(1)



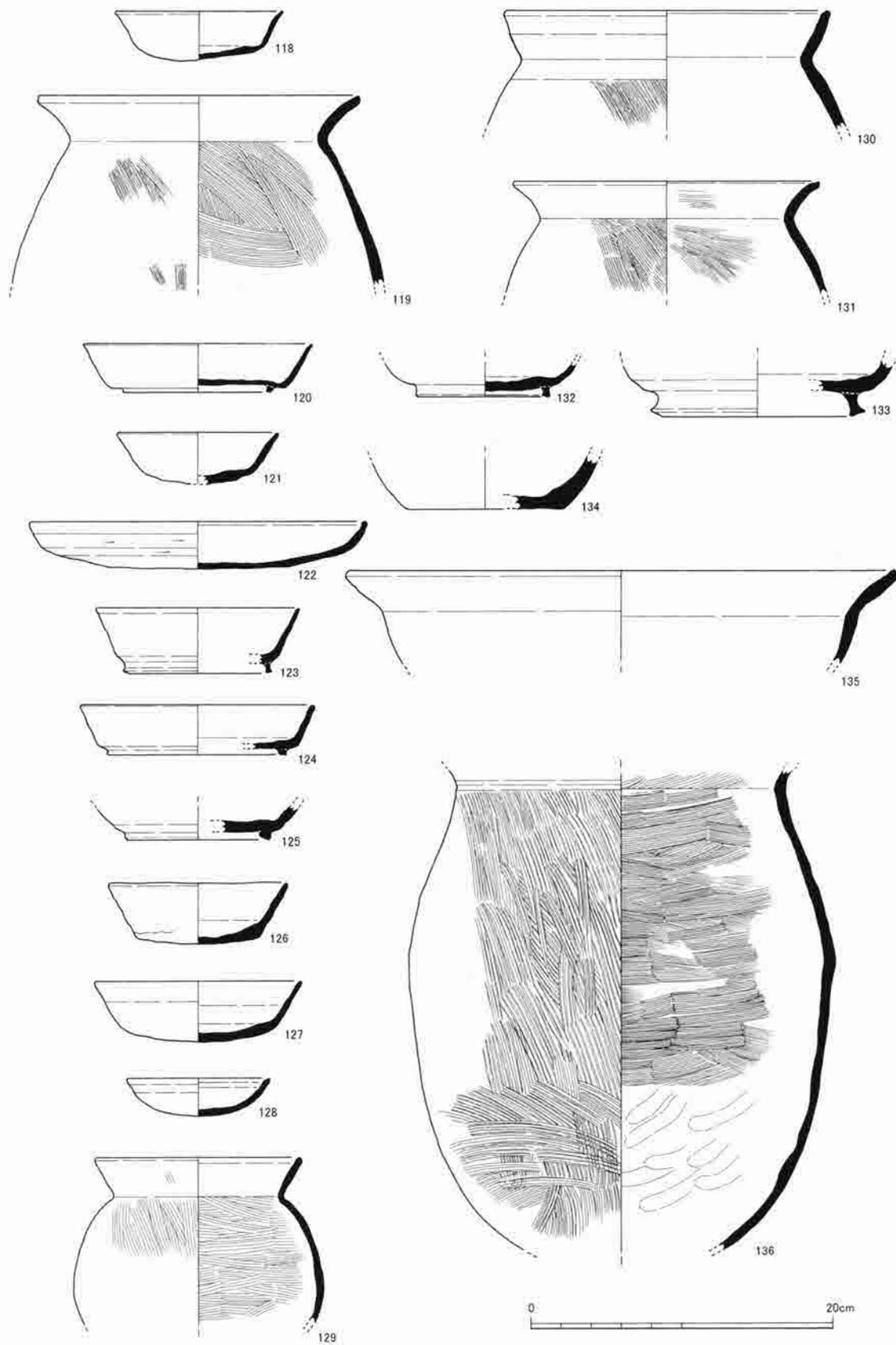
第113図 D地区出土遺物実測図(2)



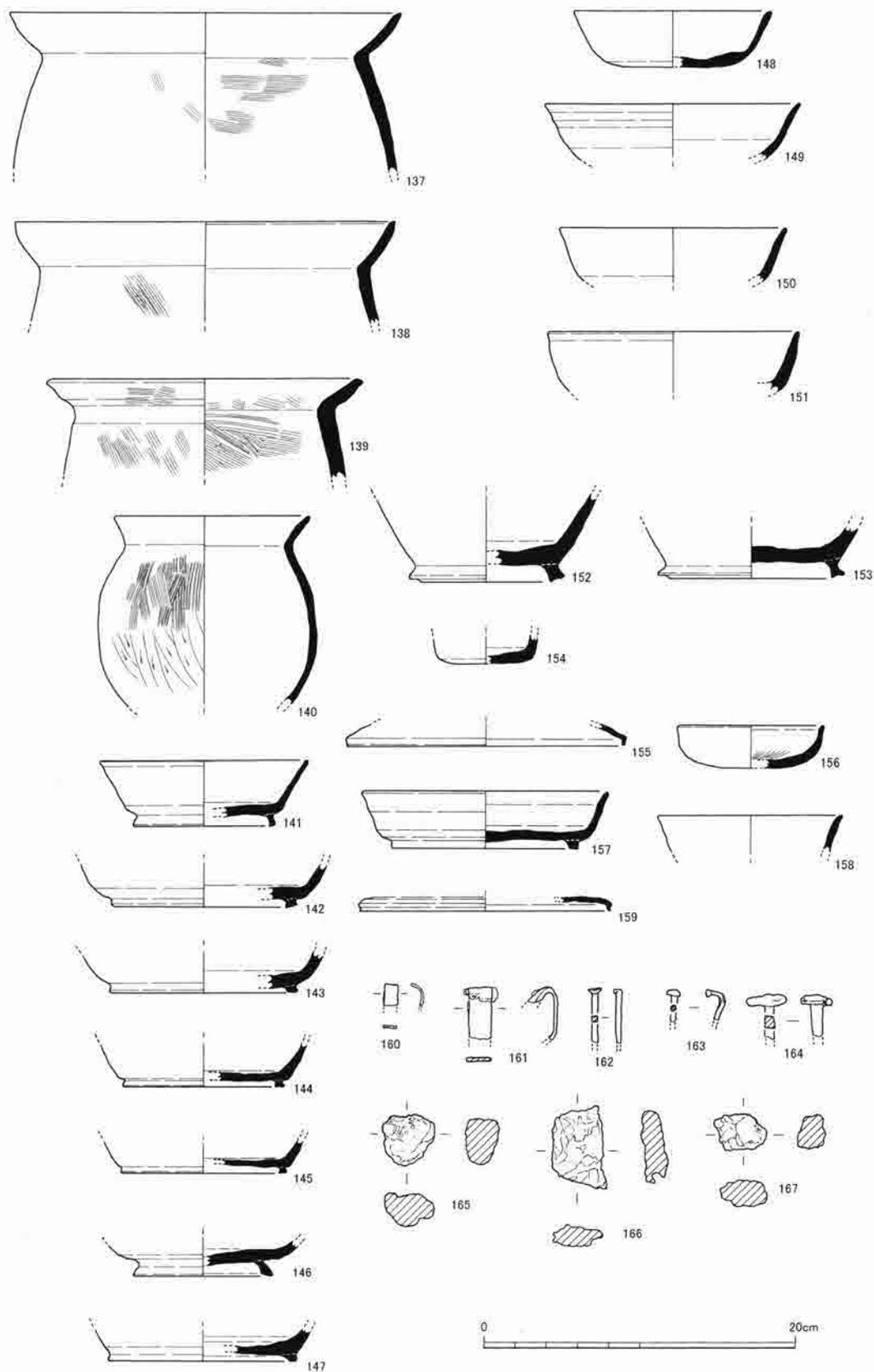
第114図 E地区出土遺物実測図(1)

168~273は、芝山Ⅲ-1号墳の出土遺物である。168~200は須恵器、201・202は土師器である。168は杯身である。口径14cmを測る。169は高杯である。口径10.8cm、器高3.4cmを測る。170・171は高杯脚である。170は底径7.8cm、高さ6.8cmを測る。171は底径6.0cmを測る。172~176は杯B蓋である。172は口径15.1cm、器高2.7cmを測る。173は口径15.5cm、器高3.1cmを測る。174は口径13.4cm、器高3.4cmを測る。172~174は宝珠つまみが付き蓋内面にかえりが付くものである。176は口径17.8cmを測る。蓋にかえりは付かない。177~183は杯Bである。177は口径13.8cm、器高3.8cmを測る。178は口径14.8cm、器高4.2cmを測る。底部から斜め上方に立ち上がる屈曲部に断面逆台形の高台が付く。179は口径16.5cm、器高4.8cmを測る。底部から斜め上方に立ち上がる屈曲部やや内面に、外側に踏ん張るような高台が貼り付く。184・185は杯Aである。184は口径14.0cm、器高3.4cmを測る。体部は

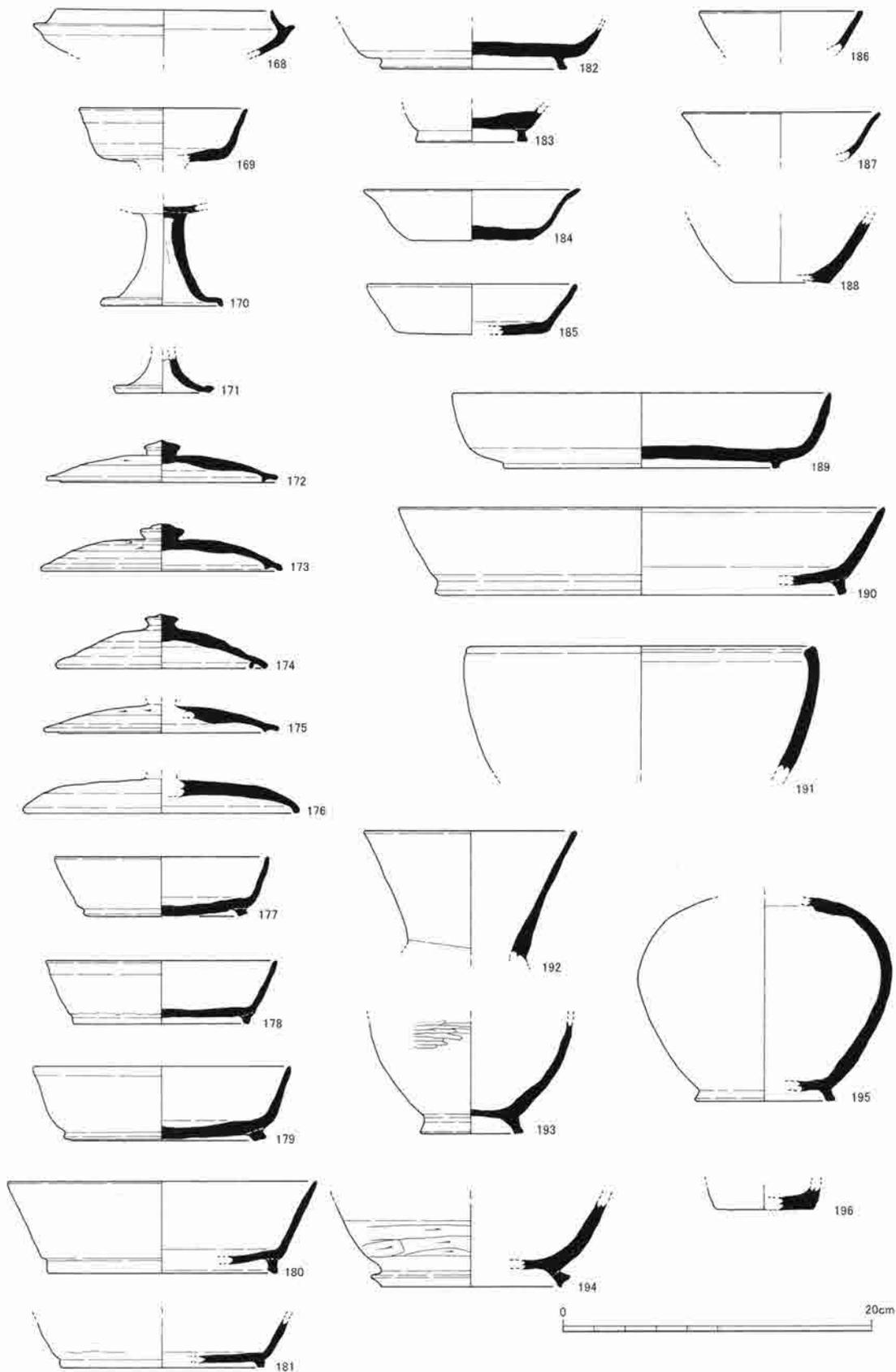
斜め上方に立ち上がり口縁端部は外反する。185は体部が斜め上方に立ち上がる。189・190は盤である。189は口径24.5cm、器高4.8cmを測る。体部立ち上がり部分の内側に高台が貼り付く。190は口径31.4cm、器高5.8cmを測る。体部屈曲部に高台が貼り付く。191は鉢である。192は平瓶の口縁部である。口径13.7cmを測る。193・194は壺の体部下半部である。195は壺の体部片である。197~200は甕の口縁部である。197は口径36.0cmを測る。体部外面は板状工具によるナデを施す。198は口径39.3cmを測る。199は口径23.8cmを測る。200は口径21.0cmを測る。201は甕である。口径24.6cmを測る。202は鍋である。口径38.4cm、器高19.0cmを測る。203は青磁椀、204~207は白磁椀である。203は口径15.8cm、器高7.0cm、底径6.6cmを測る。204・205は口径15.2cmを



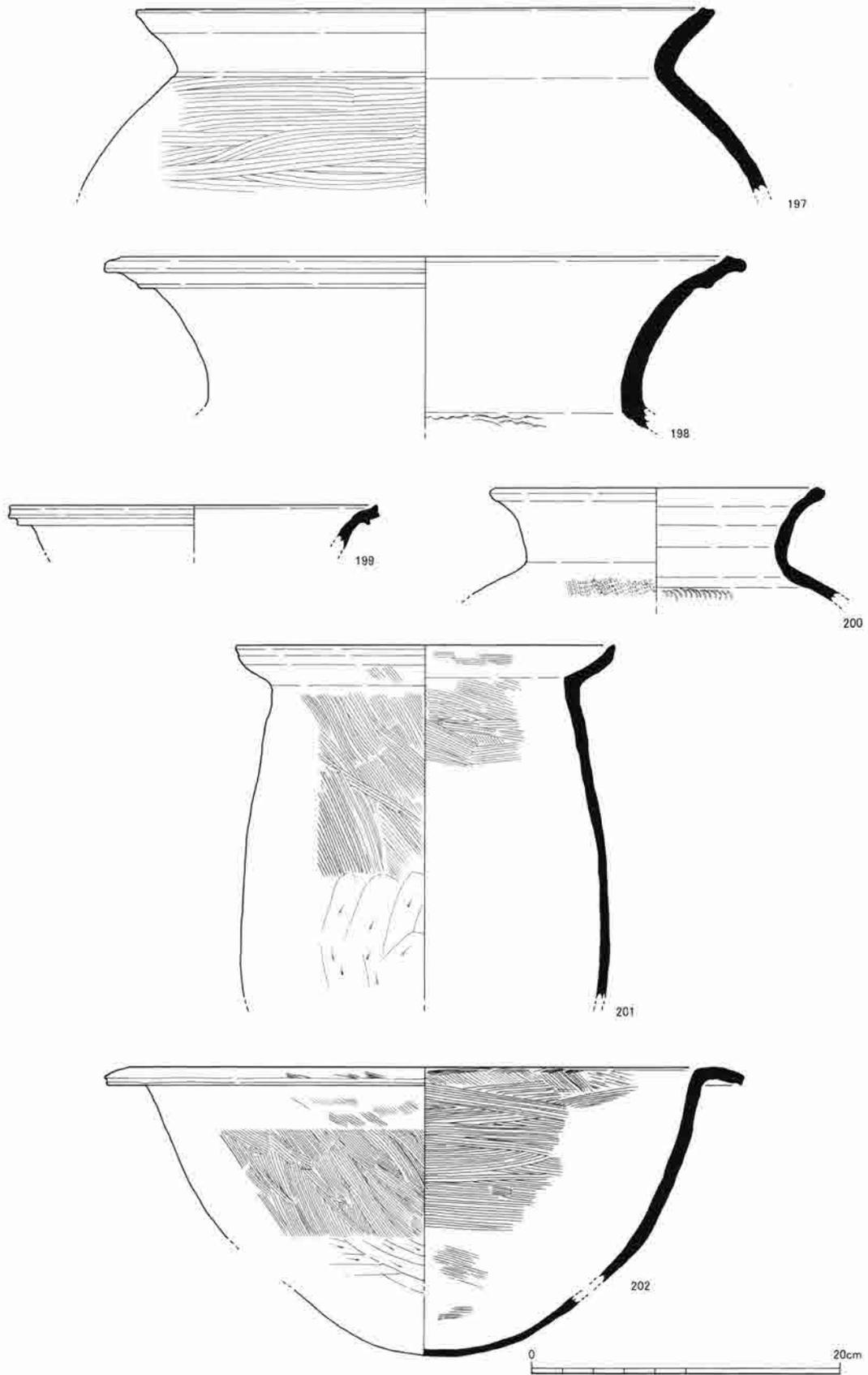
第115図 E地区出土遺物実測図(2)



第116図 E地区出土遺物実測図(3)



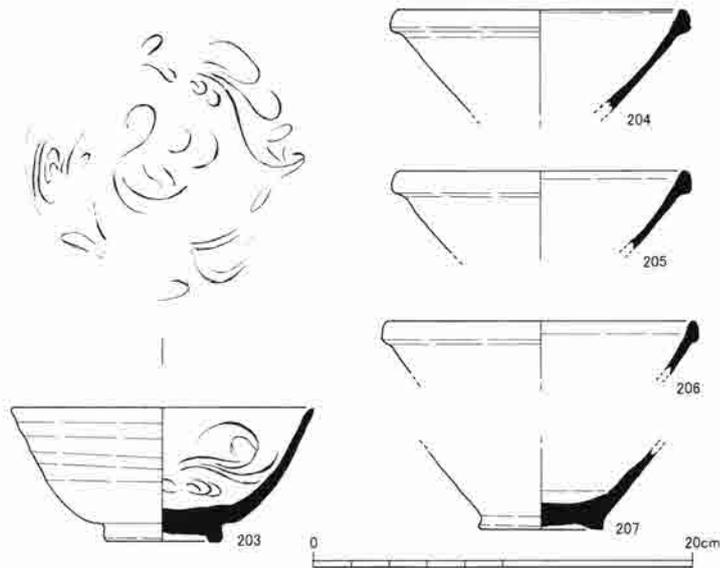
第117図 F地区出土遺物実測図(1)



第118図 F地区出土遺物実測図(2)

測る。206は口径16.4cmを測る。  
いずれの端部も玉縁状をなす。  
207は底径6.3cmを測る。

208・209は円筒埴輪の上半部である。208の口径は27.0cmを測る。209は28.0cmを測る。208・209とも土師質の埴輪であり、色調は淡茶褐色である。210は朝顔形埴輪の頸部片である。外面にベンガラと思われる彩色が認められる。211・212は底部片である。211は底径15.0cmを測る。212は底径16.6cmを測る。外面に黒斑がみら



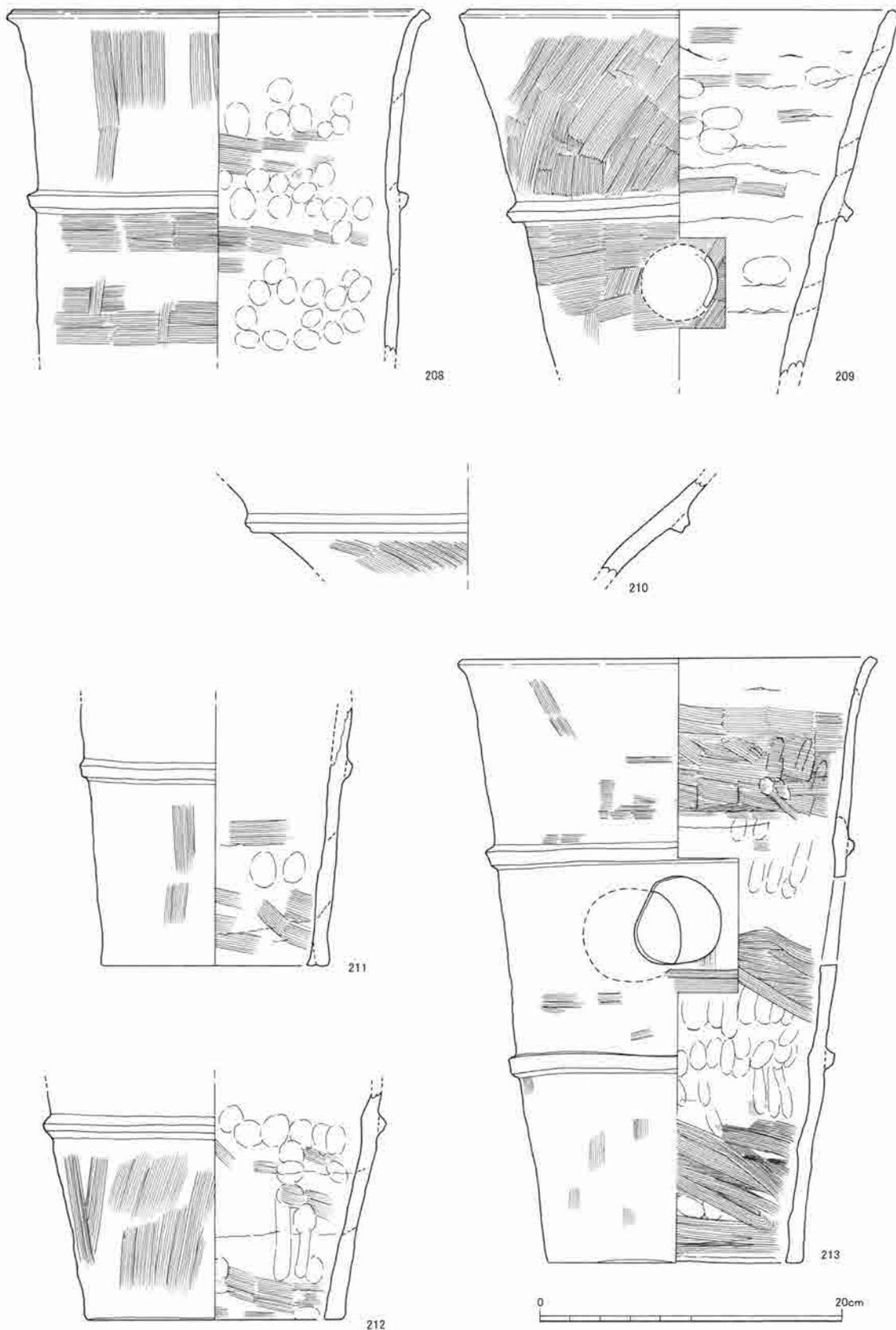
第119図 F地区出土遺物実測図(3)

れる。213は口径27.6cm、底径16.8cm、器高40.3cmを測る。タガは2段で、中段に2か所の円形透かし孔がある。

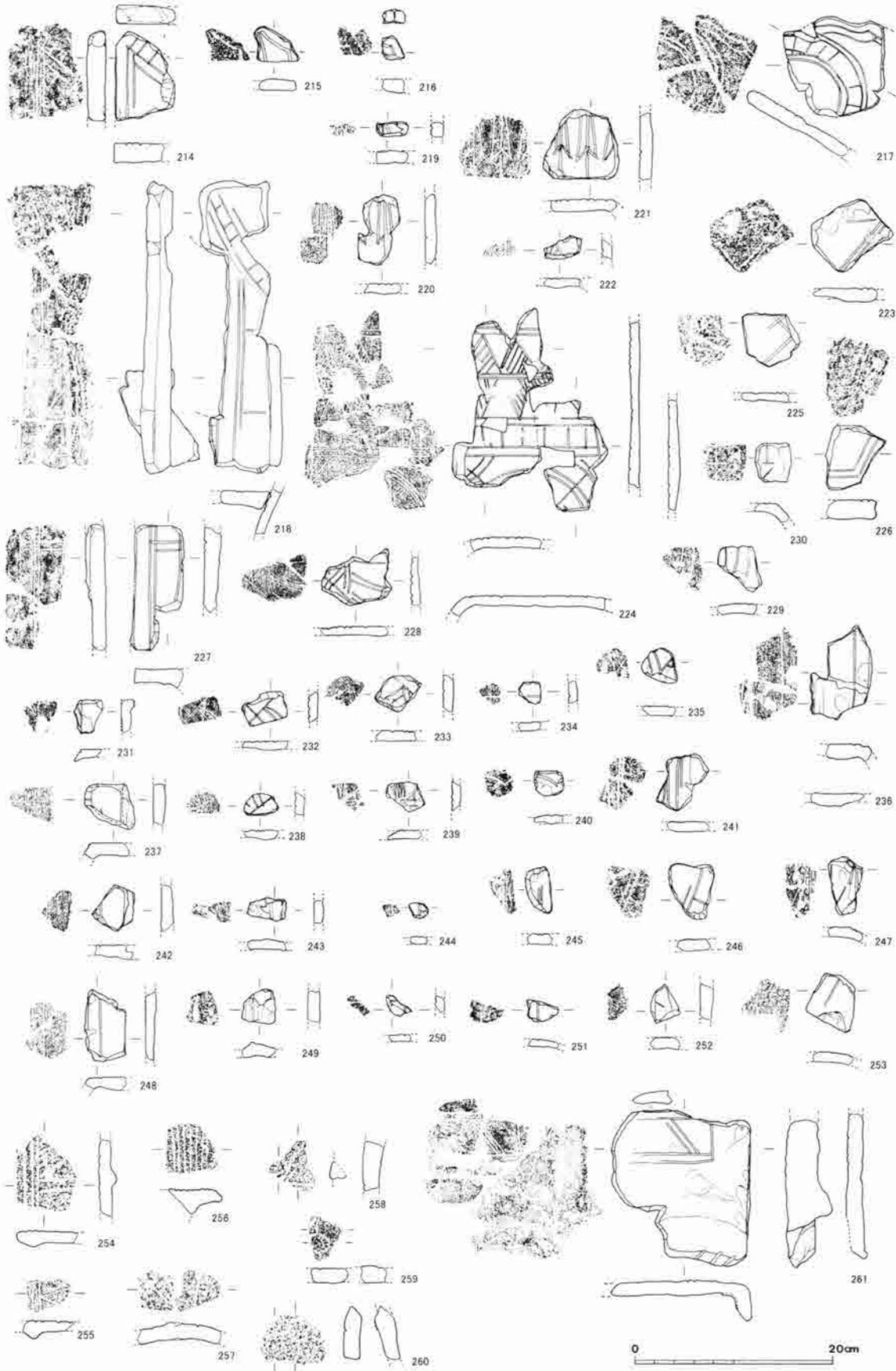
214～263は、形象埴輪片である。靱形埴輪は、背板部分と矢筒部分の破片がある。破片としては上部の破片がわずかにある程度である。背板部分の破片と考えられるものが214～218・227、鏃部分が219～222、矢筒部分が224・228・229である。鏃の形態は、広根短頸腸扶長三角形鏃と思われるが、鏃の本数は正面に6本程度と考えられる。鏃部分と矢筒部分の破片には黒斑が認められる。217は弧状の肩掛紐状の表現がみられる。矢筒上部は上下二段の鋸歯状文の下部に横帯があり、その下部に直弧文が続く。背板との接合は矢筒側面を接合するかたちとなっている。矢筒部分の直弧文以下は、横帯の数や文様構成などは不明である。262は馬形埴輪である。顔部分は、下顎部分をもとに粘土紐・粘土板を押し曲げて鼻先部分から順次頭部へ継ぎ足し整形し、下顎部分と接合している。接合に際して鼻先の裏側に粘土塊を充填し補強している。口の表現は接合部を外側からヘラ状工具で刻んでいる。頸部との接合は頸部の大半を切り取り頸部にのせるように作られている。馬具の表現は、線刻および粘土塊の貼り付けによる。263は甲冑形埴輪である。短甲の右肩部分の破片と思われる。ハケによる調整ののち沈線を施す。

264は滑石製紡錘車である。直径5.4cm、高さ1.0cmを測る。蛇紋岩質の石材で暗緑色をなす。表面には工具痕が顕著に残る。265・266は叩き石状石製品である。石質は緑灰色をなす泥質ホルンフェルスである。265は長さ8.1cm、幅8.9cm、厚さ5.8cmを測る。5面に直径約3.0cmの凹部が残存する。266は長さ6.9cm、幅6.4cm、厚さ7.0cmを測る。5面に直径約3.0cmの凹部を持つ。267は砥石である。最大長22.5cm、最大幅13.7cm、厚さ6.9cmを測る。石質は灰緑色をなす砂質ホルンフェルスである。表裏に、研磨による使用痕の浅い窪みが残存する。

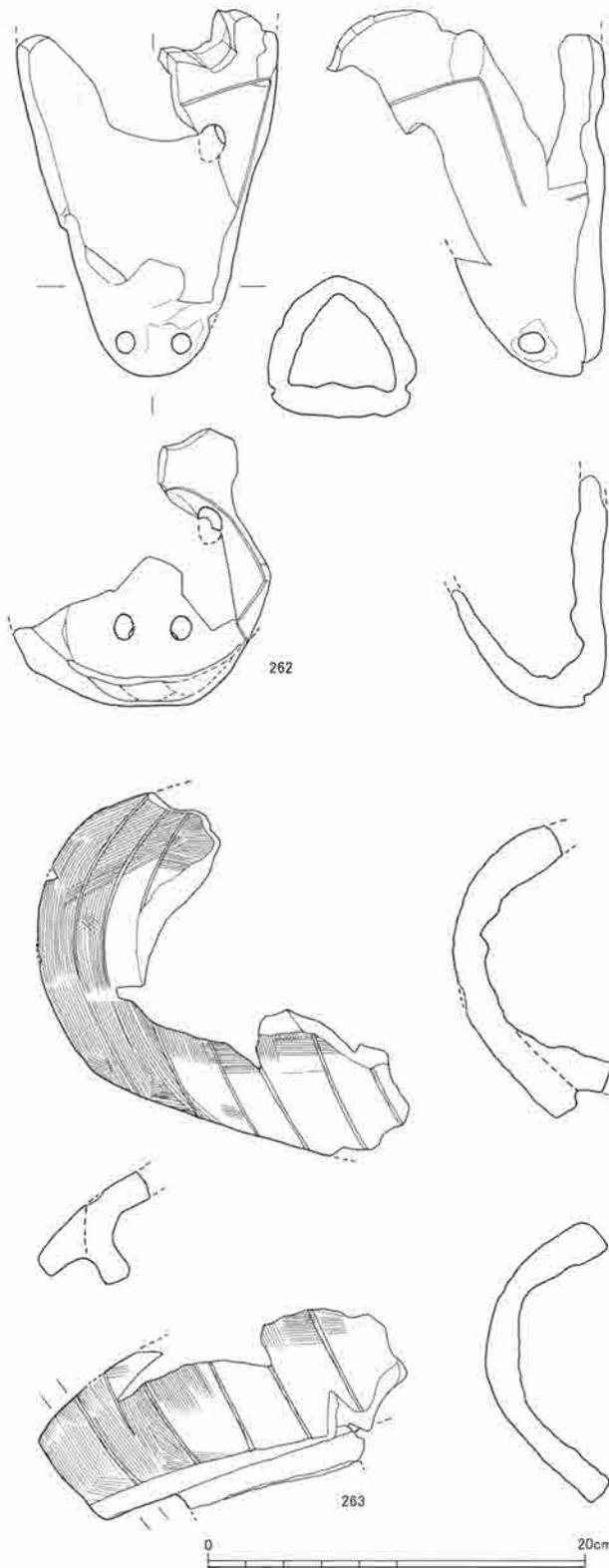
268は鉄鎌である。全長約13.0cm、最大幅3.4cm、厚さ0.4cmを測る。269はミニチュアの鋤先状鉄製品である。残存長3.2cm、最大幅3.9cm、厚さ0.3cmを測る。270～272は鉄鏃である。273は刀



第120図 F地区出土埴輪実測図



第121図 F地区出土形象埴輪実測図(1)



第122図 F地区出土形象埴輪実測図(2)

子である。270は残存長8.0cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。273は残存長9.8cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmを測る。

(7) H地区(第124図)

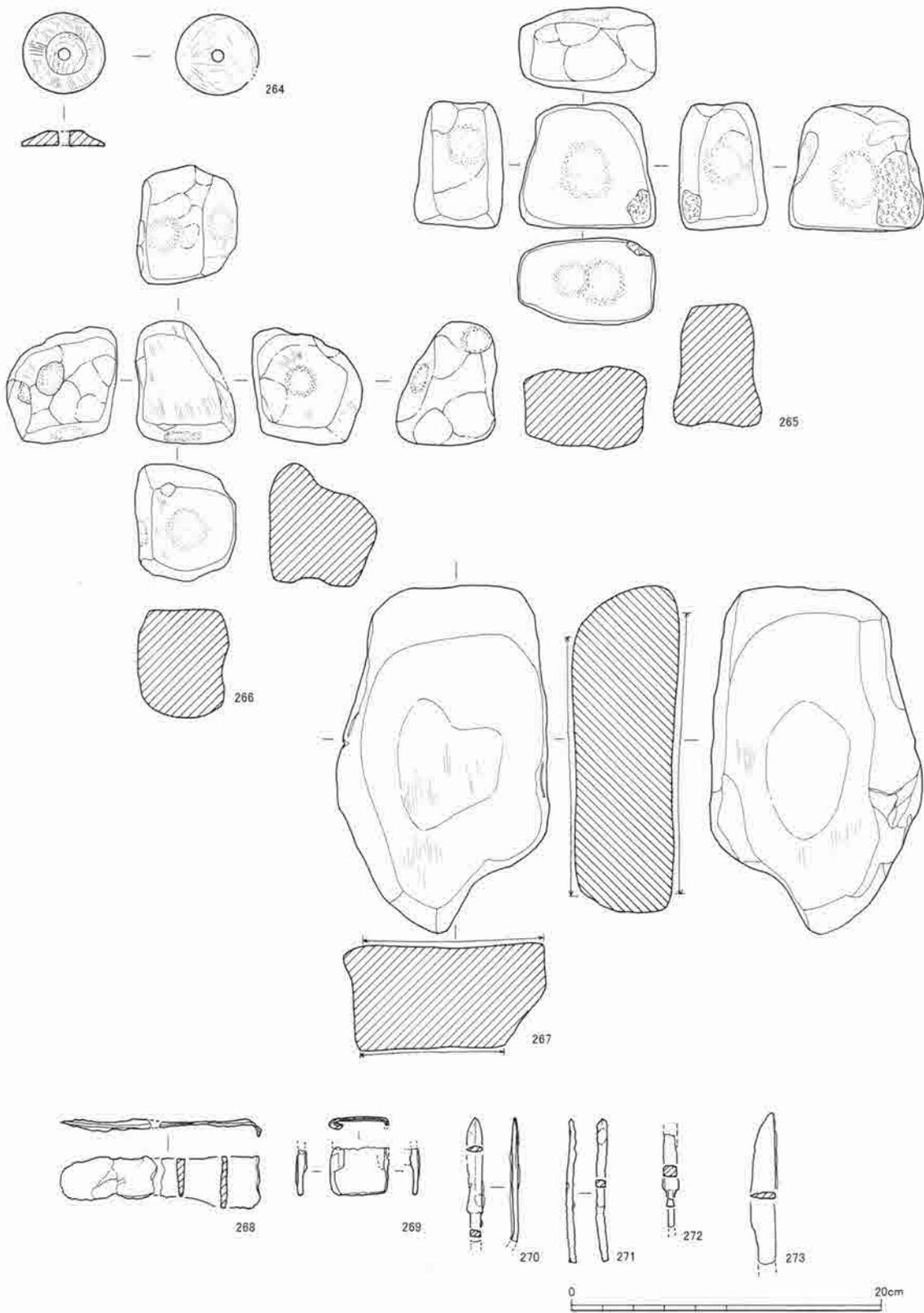
274・275はS K 01、276はS B 94のP 6、277～280はP 16、281はP 7、282・283はS B 96のP 3、284・285はP 126、286はP 147、287はP 29、288はP 83、289はS B 96のP 10、290はP 128、291はS K 12、292はP 16、293はP 126、294はP 14、295はP 31、296はP 127、297はP 129、298はP 154から出土した。

274は土師器甕である。復原口径は22.0cmを測る。

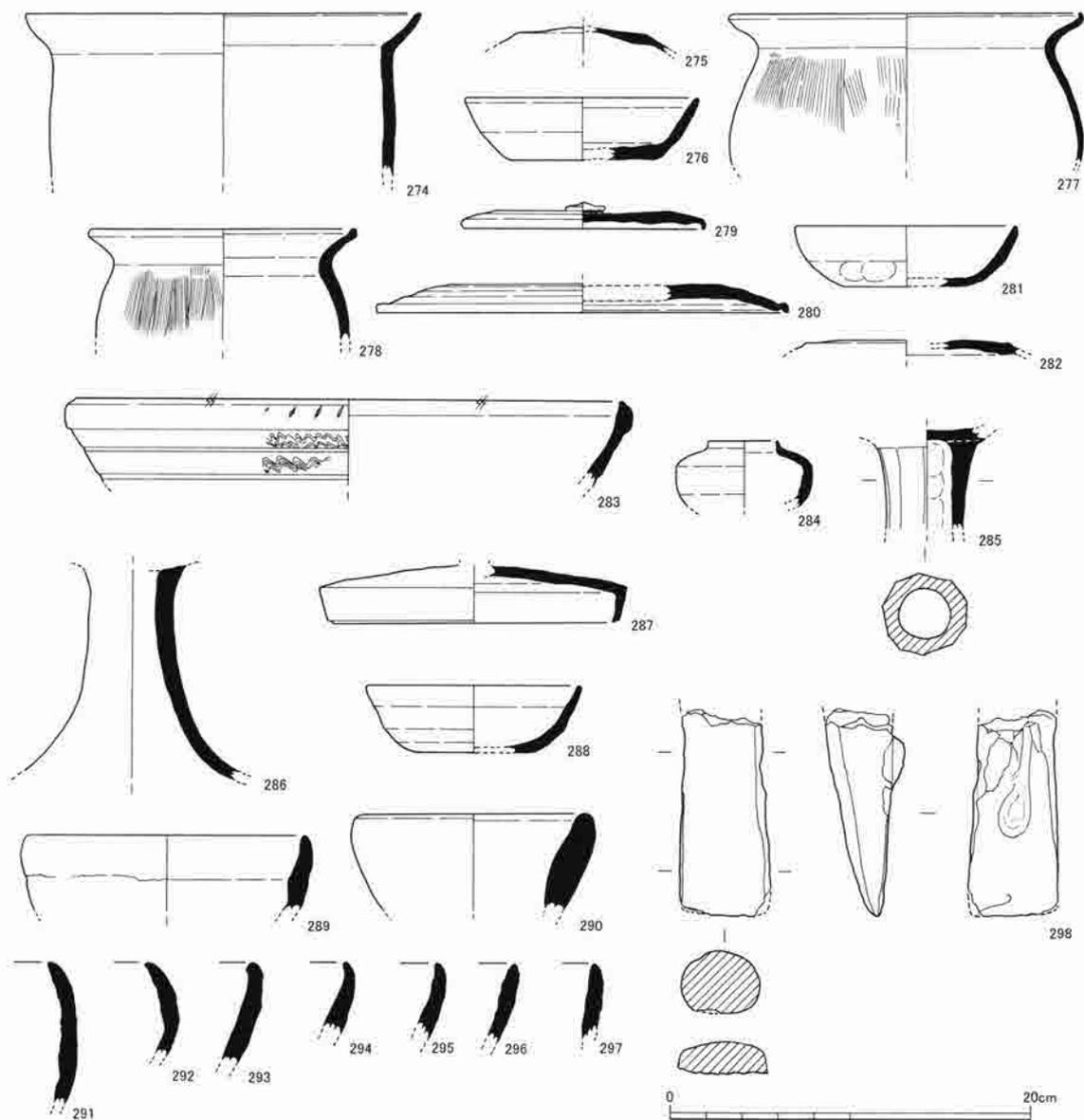
275は須恵器杯蓋である。276は須恵器杯Aである。口径は12.9cm、器高3.4cmを測る。277・278は土師器甕である。277は口径19.3cmを測る。色調は淡茶褐色をなす。278は口径14.6cmを測る。色調は外面が橙灰褐色、内面は黄褐色をなす。279・280は須恵器杯蓋である。279は口径13.4cm、器高1.5cmを測る。281は土師器杯である。口径12.4cm、器高3.4cmを測る。色調は淡茶褐色をなす。282・283は須恵器である。282は杯蓋、283は甕である。284は須恵器短頸壺である。口径は3.8cmを測る。285は土師器の高杯脚部である。面取りは10面である。286は須恵器の高杯脚部である。287は須恵器蓋である。口径は15.6cmを測る。288は土師器杯である。口径は11.8cmを測る。

289～297は製塩土器である。289は口径15.8cm、290は口径12.2cmを測る。口縁部のみの破片で器形の分かるものはないが、いずれも砲弾形の器形になると思われる。胎土に砂粒を含んでいる。

298は鉄斧である。残存長10.6cm、最大幅5.0cm、厚さ2.2cmを測る。



第123図 F地区出土石製品・鉄製品実測図



第124図 H地区出土遺物実測図

## 6. まとめ

### (1) A地区の建物跡の変遷について

A地区で見つかった建物跡は建物配置および柱穴からの出土土器から大きく3時期に分けられる。以下、今回見つかった主要な建物について若干の考察をする。

**A1群** S B100を中心とする一群。S B100は梁間3間で西側に間仕切りを持つ建物であり、ほかの建物跡が梁間2間であることから、今回見つかった官衙風配置の中心建物の正殿と仮定する。S B100は南面の桁行柱列に東西の柵列を設け、西側の長舎風建物S B32と、東側の長舎風建物S B101の梁間柱列とつなげ閉鎖空間を設けている。S B32は西脇殿、S B101は東脇殿と考える。北側はS B31とS B99を東西に配置する。この北側建物はS B100に対する後殿と考える。これらの建物跡は全体として整然とした「口」の字型配置をなす。ただし、東西の脇殿はそれぞれ1棟で南北に短く東西に長い建物配置となっている。S B100の前面は広場となっている。た



第125図 掘立柱建物変遷図(試案)

だし、SB100は東西の長舎風建物の中軸線に位置せず東側にずれている。時期はSB32の南西隅柱穴の抜き取り穴から出土した土器を基準に8世紀前半と考えている。ただ、SB100の南面柱列とSB31の南面柱列の距離が12m、東西脇殿の内柱の距離が29.2mで、空地の面積は211.3㎡で狭く、居宅としての機能より郡庁として機能していたと考える。

**A 2 群** 東側にSB70・105・124、西側に総柱建物SB102・103を配置する。SB70は東西棟、SB105は南北棟である。建物配置自体が変形した「品」字型となり、東西・南北の長舎風建物を挟んで東西に倉庫棟を配置する、整然とした建物配置が乱れる時期となる。ただし、建物跡の主軸方位が真北を向くことは、A 1 群と同様である。建物跡の性格は、政庁から倉庫の管理棟としての機能に変わると考えられる。SB70・105を2群とした根拠として、SB70は、A 1 群としたSB31・99と近接すること、SB105はSB101の東側柱に柱列を揃え、西柱列は西側に1尺程度飛び出し、SB101の梁間寸法が1.8mであるのに対し2.2mと広く、柱掘形も全体に小振りであり省力化の傾向がみられること、総柱建物が本来の広場部分の西側に占地することから後出すと考えた。SB102の南側でもピットを確認しており、西側部分に総柱建物群が並倉のように並んでくる可能性もある。時期については、SB102の柱抜き取り穴から出土した土器から8世紀前半から半ばにかけてと考える。

**B 群** A 群の官衙的建物が廃絶し、真北から西側に19°～26°振れる建物が建てられる。SB34・104・108・109が該当する。建物跡の性格が、官衙的要素から一般集落へと変化する時期と考える。B 群の建物の時期は、SB34・108の柱穴の抜き取り痕から出土した土器から、8世紀後半と考える。

そのほか、A 地区に隣接する北側の現府道部分の調査時にも主軸方位の異なる18棟の掘立柱建



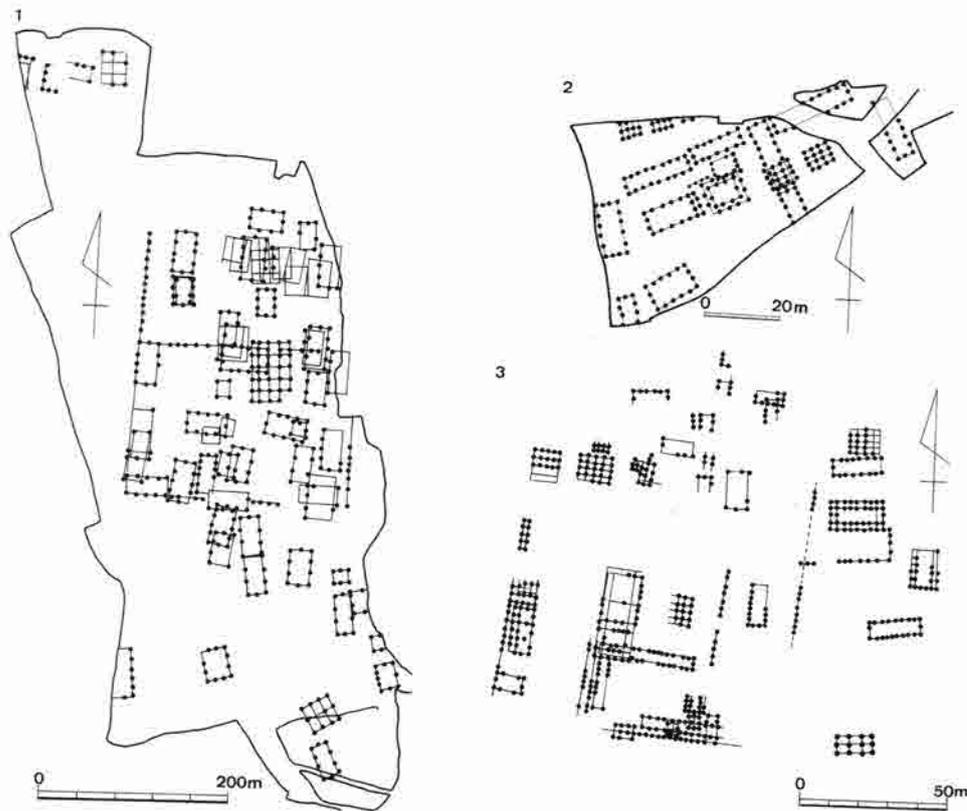
第126図 A地区周辺遺構配置図

物跡を復原している。これらの建物群は主軸方位から、磁北と一致するもの、北から西へ $13^{\circ}$ 振るもの、北から西へ $30^{\circ}$ 振るものの3群に分類できる。特に建物の柱穴に伴う土器が少ないことから、時期設定はできないが、それら建物跡に伴うと考えられる方形の縦板組横棧留め井戸を検出している。調査地全体をみても井戸跡の検出は1基にとどまり、谷部を掘削しても湧水はみられないことから官衙機能として厨屋が併設されていた可能性が考えられる。これらの建物群については、建物の主軸方位・規模などさまざまであり、A1・A2群の建物の雑舎として捉える。これら雑舎群の広がり、建物群全体の配置から見て、今回の調査地から東側の台地上への展開が考えられる。ただ、A1・A2群の建物配置の東側部分が調査地外になるため、建物規模や建物の範囲については、今後の調査に負うところが多い。

(2) 芝山遺跡の建物群の類例について(第127図)

当遺跡で見つかった建物跡の類例について挙げると以下のものがある。一つは、鳥取県気高郡戸島遺跡(第127図1)、もう一つは、福岡県築上郡フルトノ遺跡(第127図2)がある。

戸島遺跡では、掘立柱建物跡総数83棟を検出している。これらの建物跡は、西側と南側を掘立柱塀で区画している。政庁の規模については東西45m、南北55.5mであり、南北の中軸線上に、北から北郭・正殿・南殿が並び、東側は掘立柱塀、西側は正殿の柱列に続けて布掘りの塀がつな



第127図 官衙遺構の類例

1. 鳥取県戸島遺跡 2. 福岡県フルトノ遺跡 3. 京都府正道遺跡(参考)

がっている。建物の時期については2時期に分けている。初期段階より次段階に建物の規格性が明確になる。

フルトノ遺跡では掘立柱建物跡17棟以上が検出され、そのうち5棟が総柱建物である。時期については3時期の変遷を考えているようである。1期については、東西棟の東庇付建物、同じく東西棟四面庇建物の北側に東西棟建物2棟を並行させている。2期は「コ」の字形配置の建物をあてている。3期は、2期の建物に重複する総柱建物をあてている。

なお、当調査地から北西に約2.5kmに位置する正道遺跡(第127図3)は、当遺跡と時期的に重なるものであり、類例とはいえないが、参考までに全体図を掲載しておく。正道遺跡は3時期の変遷を考えており、2期と3期の間に空白期があるとされる。この空白期を当遺跡の遺構とするという見方もあるが、双方の遺跡とも出土遺物は少なく確証はない。現段階では建物個々の規模の違いや、当遺跡の建物群に正道遺跡でみられるような廂付き建物がみられない点、短期間に建て替えている点など疑問点が多く、現段階では性格の異なる建物群として独立して捉えたい。

(柴 暁彦)

### (3) そのほかの住居跡について

竪穴式住居跡12基の内、10基はA地区に集中する。その内訳は、布留並行期の住居跡が1基、

陶邑TK209型式並行期の住居跡が4基、飛鳥時代の住居跡が5基である。

遺跡南端部にあたるD・E地区からも、飛鳥時代の住居跡を2基検出した。A地区では、TK209型式並行期の住居跡が環状に並び、その後、内側に飛鳥時代の住居跡が、環状に並ぶ。7世紀中頃から末にかけての遺構は皆無の状態、この間が空白時期となる。その後、A地区で検出した掘立柱建物跡群へと続く。芝ヶ原丘陵上では、6世紀後半～末にかけて竪穴式住居跡群が営まれるが、7世紀初頭から掘立柱建物跡へと移行する。これと比べると芝山遺跡では、掘立柱建物跡へ移行する時期が若干降るようである。

A地区で検出した掘立柱建物跡群については、広瀬和雄氏が言う「官衙風配置」を成すものであり、郡庁として機能していた可能性が高いことについては先に記したところである。ここでは、その周辺部に点在する掘立柱建物跡について検討してみたい。

掘立柱建物跡の柱穴内出土遺物の量はきわめて少なく、唯一出土した土器も小破片であることから混入遺物の可能性もあり、遺構の時期を決定するには非常に問題があった。付表7は、建物の主軸方位・規模・時期などを一覧したものである。それぞれの建物の主軸方位や遺構の切り合い関係、周辺のものほかの遺構、また、わずかであるが埋納遺物例などに着眼し検討してみた。

B地区のSA03のP63の柱痕横から出土した土師器甕(59)は、8世紀末のもので、柵列の主軸方位は北で25°西に振る。平行関係のSA01・02が周辺部に所在し、また、B地区のSB05やC地区のSB01も概ね平行関係にある。D・E地区で検出したSD36・50は、出土遺物から、8世紀中頃～9世紀前半、SD35下層は8世紀後半、SD35上層が8世紀末～9世紀前半と想定できた。E地区のSD50埋没後に建てられたSB92は、D地区のSB02・03、E地区のSB93・227と平行あるいは直行関係にある。これらは、SD50埋没後の時期である9世紀前半以降が妥当と考える。D地区のSB02・03の近くから同規模の柱穴(P309)が認められ、柱穴から土師器甕(103)が出土した。建物に伴う柱穴ではないが、D地区のSB02・03は9世紀前半の可能性が高いと考える。D地区のSB02・03が、北で13°前後西に振る建物であることから、時代が降るに従って徐々に北に向く傾向にあると思われる。

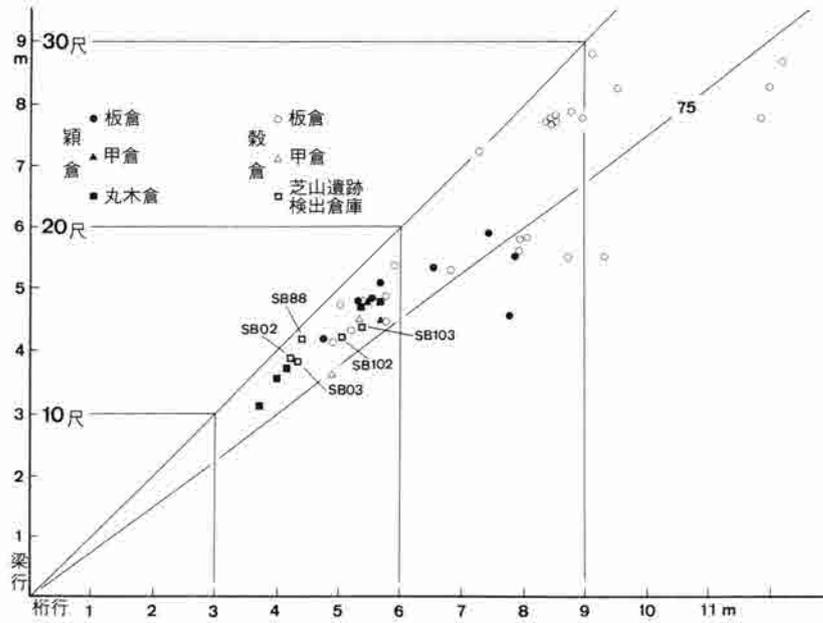
付表7の建物の主軸方位は、概ね二分できる。N34°W～N19°WとN14°W～N7°Wである。とするなら、前者が8世紀末、後者が9世紀前半と推測でき、出土遺物が無いものの時期不明の建物の年代を類推できると考えた。

#### (4) 総柱建物跡について

対象遺構としては、A地区で検出したSB88・102・103と、D地区で検出したSB02・03の5棟である。各規模は、SB88が3間×2間、SB102・103が3間×3間、SB02・03が2間×3間の総柱建物である。SB02は、布掘りの建物である。上記建物は、ほかの建物跡と比べて柱掘形は大きく、柱も大きく、倉庫と思われた。A地区の3棟については、官衙風建物群と平行関係にあり、隣接する。D地区の2棟については、周辺部の倉であり、A地区のものより柱穴の規模は一回り小さい。

倉については、松村恵司氏<sup>(注6)</sup>の研究がある。この論に沿って考えると、梁間／桁行×100(平面形

態指数)にあてはめると、SB88が95.5、SB102が84.0、SB103が81.5、SB02が92.9、SB03が87.4となる。倉の大部分は80~95に集中する傾向がみられるとする氏の論からすると、上記建物は倉であったと思われる。梁間や桁行の規模から見ると、D地区の2棟は穎倉の丸木倉が集中する範囲に入り、A地区の



第128図 芝山遺跡検出倉庫規模

3棟については穀倉の板倉が集中する範囲に収まる。また、調査地には、小型の2間×2間の総柱建物も存在する。E地区のSB93・94やC地区のSB01である。それぞれの平面形態指数は、SB93が90.6、SB94が93.8、SB01が91.7である。倉の平面形態の中でも、最も小型の倉に該当し、丸木倉であったと考える。D・E地区で検出したこれらの倉は、SD35と自然流路でもって区画された範囲に建てられ、これらの建物は整然と並んでおらず、倉庫群とするよりも集落の一画に設けられたと思われる。これらの倉は丸木倉で、穎稻を保管していたと思われる。また、倉庫令に、倉は高燥の地に置き、側には池渠を開くことを規定している。さらに、倉を去ること五十丈の内に館舎を置けとしている。一丈が約3mであることから、150mの範囲内に館舎を置いていた。D・E地区の倉庫群は公的な施設とは限定できないが、A地区の官衙風配置をなす建物群との関係を考えてみると非常に興味深い。

(岡崎研一)

注1 調査参加者(敬称略・順不同)

平成14年度 稲垣あや子・川村真由美・山中道代

平成15年度 川村真由美・丸谷はま子・陸田初子・兵頭真千・川端美恵子・鷲原裕太郎・穂積優子・杉江貴宏・加賀谷央・木下博文・北森さやか・植崎藍子・藤原美奈子・奥里子・大歳浩史・藤田佳照・西村和記・徳田智恵子・三樹佳世・西田晴美・寺島まゆみ

注2 小池寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注3 近藤義行「森山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第6集 城陽市教育委員会) 1977

近藤義行「森山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第12集 城陽市教育委員会)

付表7 掘立柱建物跡規模一覧

遺構名	地区	棟方向	主軸方位	規模(m)				床面積 (㎡)	時期	調査年度
				桁行間数	梁間間数	桁行長さ	梁間長さ			
建物跡1	A		N42° W	3間	2間	5.04	3.64	18.3	奈良	昭61
建物跡2	A		N26° W	2間	2間	3.68	2.51	9.2	奈良	昭61
建物跡3	A	南北	N14° W	3間以上	2間	3.52以上	2.88	—	奈良	昭61
建物跡4	A	南北	N7° W	2間以上	2間	4.16以上	3.76	—	奈良	昭61
建物跡5	A		N21° W	1間	1間	3.44	3.2	11	奈良	昭61
建物跡6	A	南北	N10° W	3間	2間	5.2	3.24	16.8	奈良	昭61
建物跡7	A	南北	N7° W	2間	2間	3.04	2.88	8.8	奈良	昭61
建物跡8	A	南北	N2° W	2間	3間	6	5.36	32.2	奈良	昭61
建物跡9	A	南北	N4° W	5間	2間	6.6	4.4	29	奈良	昭61
建物跡10	A		N24° W	2間	2間以上	6.08	4.0以上	—	奈良	昭61
建物跡11	A		N24° W	3間	2間	3.95	3.2	12.6	奈良	昭61
建物跡12	A	南北	N19° W	4間	3間	8.28	4.96	41.1	奈良	昭61
建物跡13	A		N22° W	3間	2間	5.36	2.84	15.2	奈良	昭61
建物跡14	A		N68° W	2間	1間	3.52	1.68	5.9	奈良	昭61
建物跡15	A		N30° W	4間	2間以上	11.4	1.7以上	—	奈良	昭61
建物跡16	A	南北	N10° W	3間	3間	4.56	4.24	19.3	奈良	昭61
建物跡17	A	南北	N20° W	2間	3間	4.54	1.92	8.7	奈良	昭61
建物跡18	A		N67° W	3間	1間以上	6.4以上	2.1以上	—	奈良	昭61
S B03	A		N35° E	3間	2間	4.4	4	17.6	不明	平14
S B31	A	東西	N89° W	6間	2間	12.6	4.2	52.9	飛鳥・奈良	平14
S B32	A	南北	N2° E	7間	2間	15.6	3.5	54.6	飛鳥・奈良	平14
S B33	A		N43° W	2間	2間	4.8	3.6	17.3	不明	平14
S B34	A	南北	N10° W	4間	2間	7.3	3	21.9	飛鳥・奈良	平14
S B70	A	東西	N89° W	3間	2間	6.3	4.2	26.5	飛鳥・奈良	平15
S B87	A	南北	N5° E	2間	2間	4.2	3.6	15.1	不明	平15
S B88	A	南北	N5° W	3間	2間	4.4	4.2	18.5	不明	平15
S B99	A	東西	N89° W	3間	2間	5.4	4.5	24.3	飛鳥・奈良	平15
S B100	A	東西	N89° W	7間	3間	14.4	4.8	69.1	飛鳥・奈良	平15
S B101	A	南北	N0°	3間	2間	4.2	3.6	15.1	飛鳥・奈良	平15
S B102	A	南北	N4° E	3間	3間	5	4.2	21	飛鳥・奈良	平15
S B103	A	南北	N1° E	3間	3間	5.4	4.4	23.8	飛鳥・奈良	平15
S B104	A		N23° W	6間	2間	11.6	5	58	飛鳥・奈良	平15
S B105	A	南北	N1° E	6間	2間	12.6	4.4	55.4	飛鳥・奈良	平15
S B108	A		N26° W	4間	2間	8.4	3.6	30.2	飛鳥・奈良	平15
S B109	A		N19° W	4間以上	1間以上	7.2以上	1.8以上		飛鳥・奈良	平15
S B124	A		N1° E	2間	2間	3.6以上	3.6以上		飛鳥・奈良	平15
S B05	B		N29° W	3間	2間	4.9	3.5	17.2	不明	平14

S B01	C		N29° W	2間	2間	3.6	3.3	11.9	不明	平14
S B02	D	南北	N14° W	2間	3間	4.2	3.8	16	奈良	平14
S B03	D	南北	N13° W	3間	2間	4.4	3.8	16.7	不明	平14
S B04	D		N27° W	2間以上	2間	3.0以上	2.6	—	不明	平14
S B92	E	東西	N74° E	3間	2間	5.2	3.3	17.2	奈良	平14
S B93	E	東西	N74° E	2間	2間	3.2	3	9.6	不明	平14
S B94	E		N61° E	2間	2間	3.2	3	9.6	不明	平14
S B227	E		N25° W	3間	2間	5.4	4.2	22.7	不明	平14
S B94	H		N24° W	4間	3間	10.5	4.5	47.3	平安	平15
S B95	H		N32° W	4間	2間	7.6	4.2	31.9	平安	平15
S B96	H		N27° W	2間	3間	4.2	5.4	22.7	平安	平15
S B145	H		N59° W	3間	2間	4.8	3.2	15.4	平安	平15

1983

小泉裕司「森山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第32集 城陽市教育委員会)

1997

注4 城陽市史編さん委員会『城陽市史』第1・3巻 2002・1999

注5 注2と同じ

注6 城陽市史編さん委員会『城陽市史』第3巻 1999

注7 注6と同じ

小池寛「南山城地域の後期古墳の一樣相—城陽市・長池古墳を中心として—」(『京都府埋蔵文化財情報』第40号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注8 近藤義行ほか「正道官衙遺跡」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第24集 城陽市教育委員会)

1993

注9 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房 1994

注10 注4と同じ

注11 高橋美久二「第4回文化財講演会 城陽、古代の“みち”」(『城陽市歴史民俗資料館 館報』第2号 城陽市歴史民俗資料館) 1997

注12 注2と同じ

小池寛「研究ノート 城陽市芝山遺跡の土地利用について」(『京都府埋蔵文化財情報』第89号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

注13 吉村善雄「上光遺跡群発掘調査報告書—因幡国気多郡推定坂本郷所在の官衙遺跡—県営ほ場整備事業に伴う発掘調査」(『気高町文化財報告書』第16集 気高町教育委員会) 1984

注14 矢野和昭「フルトノ遺跡—旧豊前国における平成12年度の主要な調査について(発表資料)—」新吉富村教育委員会 2000

注15 小泉裕司「第四章 律令国家の展開と城陽」(『城陽市史』第1巻 城陽市史編さん委員会) 2002

注16 松村恵司「正倉の存在形態と機能」(『古代の稲倉と村落・郷里の支配』 奈良国立文化財研究所) 1998

植木久「発掘遺構からみた倉庫建築の構造とその変遷—飛鳥・奈良時代を中心に—」(『古代の稲倉と村落・郷里の支配』 奈良国立文化財研究所) 1998

注17 井上光貞ほか『律令』 岩波書店 1982

補注 石製品の石材鑑定は京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏による。砂質および泥質ホルフェルスは木津川右岸の洪積層に普遍的に含まれており、良質なものは、調査地周辺では城陽市の轡池周辺で採取できる。

調査指導(順不同・敬称略) 山中敏史・井上満郎・上原真人・中尾芳治・高橋誠一・有井宏幸・森正  
整理期間中、埴輪については当調査研究センター伊賀高弘・筒井崇史、古代・中世の土器については引原茂治・森島康雄の教示を得た。

## 5. 薪<sup>たきぎ</sup>遺跡第4次発掘調査概要

### 1. はじめに

今回の調査は、京都府京田辺市薪小字石ノ前・狭道に所在する薪遺跡を対象とし、主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

薪遺跡は南山城盆地を貫流する木津川左岸、甘南備山を源流とする手原川の氾濫による扇状地、および田辺丘陵の縁辺部に立地する。遺跡の範囲は、約900㎡四方の広大な面積を擁し、古墳～鎌倉時代の集落遺跡に想定されている。調査地は薪遺跡の西側を南北に縦貫する道路建設予定地にあたり、現況は水田と畑地である。昨年度の調査では、縄文時代後期の遺構・遺物が数多く検出された。また、京田辺市教育委員会が行った酬恩庵境内の発掘調査地では、中世の園池跡が検出されており、遺跡の具体的様相が徐々に解明されつつある。

今回の調査は、薪遺跡の遺構・遺物の埋没状況およびその分布範囲などを確認することを目的とした(第129図)。調査期間は、平成14年11月25日～平成15年2月27日までである。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同専門調査員竹井治雄が行った。なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

調査を実施するにあたり、京都府田辺土木事務所をはじめ京都府教育委員会・京田辺市教育委員会ならびに地元薪地区の皆様からご指導・ご協力をいただいた。記して御礼を申し上げます。

### 2. 調査概要(第130図)

調査地の現況は、方形の水田畦畔が広がり、条里型地割の様相を呈しているが、その形成時期については不明である。畑地は丘陵の縁辺部に沿い不定形な湾曲した筆界となっており、遺跡の西側を北流する手原川によって運ばれた土砂の堆積が、条里型地割を乱したものと推察される。

本調査は、道路計画路線内に現水田一枚ごとに調査トレンチを6か所設定した。南から第1～6トレンチとした。調査面積は合計約730㎡である。

#### (1) 検出遺構(第131・132図)

第1トレンチ 調査地は丘陵腹部の切り開かれた丘陵平坦地で、現在は最近まであった住宅が解体され、更地となっている。調査の結果、近・現代の民家建築に伴う整地土や基礎の跡を検出した。

第2トレンチ 調査地は、丘陵部と扇状地の境目(傾斜変換線上)であり畑地であった。堆積土は、造成盛土・旧耕作土(畑地)以下、青灰色砂質土(水田か?)・砂礫・砂・シルトの互層、最下層は砂層の順に堆積する。土留め用の杭が数本出土したことから、近世頃には畑地あるいは水田に利用されたことが窺える。最下層の砂層は丘陵沿いの旧河川の様相を呈している。

第3トレンチ 堆積層は耕作土以下、砂礫・砂・シルトなどの互層、青灰色粘砂質土、黄褐色砂礫の順に堆積する。上述の互層は千原川の氾濫によるものであるが、青灰色粘砂質土は中世あるいは近世の堆積と推定される安定した堆積層で、一部で暗茶褐色の遺物包含層も認められた。

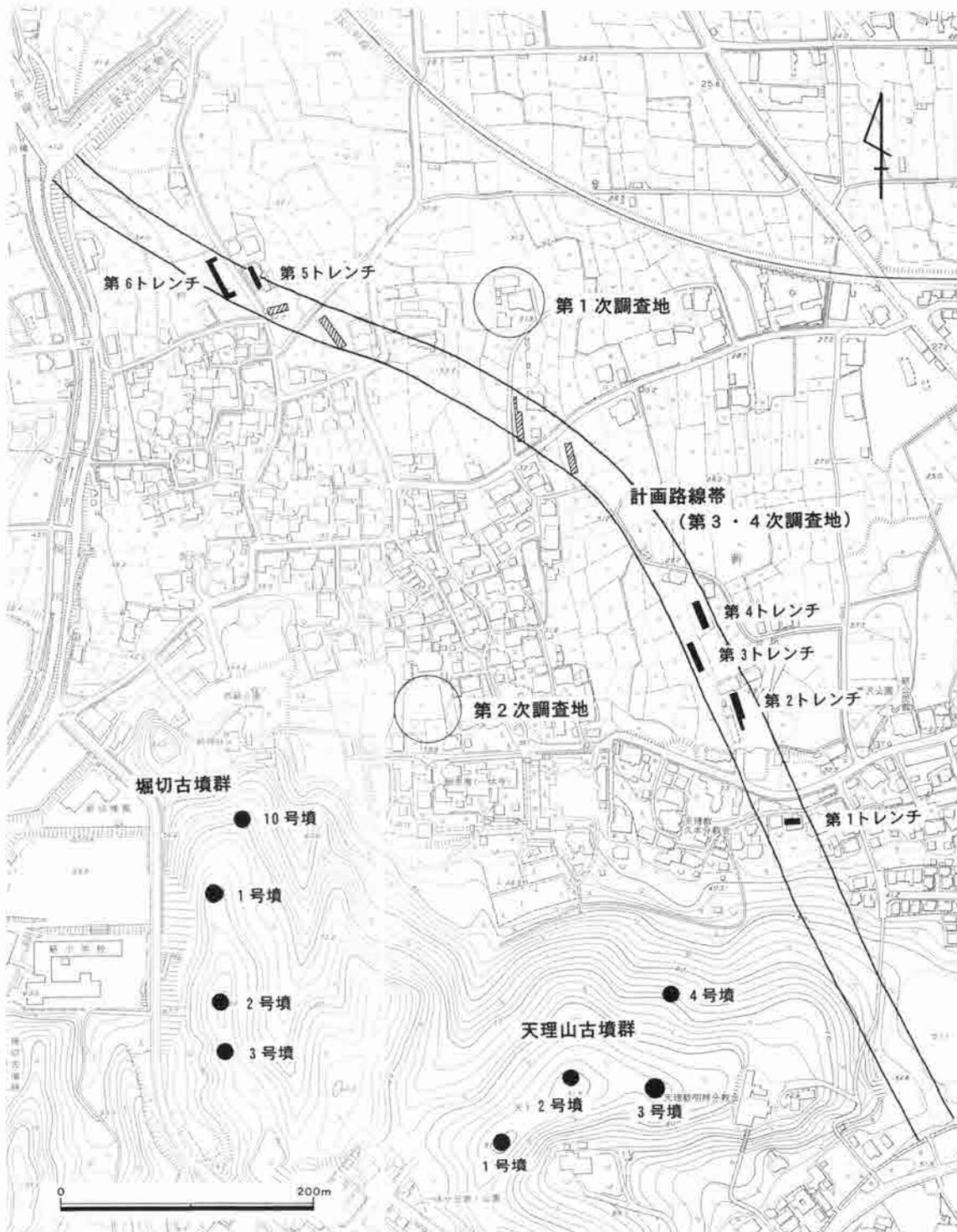


第129図 調査地位置図(『京都府遺跡地図』[第3版]第3分冊から転載)

- |              |             |            |            |           |
|--------------|-------------|------------|------------|-----------|
| A. 調査対象地     | 5. 大住車塚古墳   | 6. 大住南塚古墳  | 7. 姫塚古墳    | 15. 大欠1号墳 |
| 16. 狼谷遺跡     | 17. 畑山古墳群   | 18. 畑山遺跡   | 19. 西山古墳群  | 22. 堀切古墳群 |
| 23. 堀切横穴群    | 24. 薪遺跡     | 25. 西薪遺跡   | 26. 天理山古墳群 | 27. 小欠古墳群 |
| 29. 興戸遺跡     | 30. 興戸廃寺    | 31. 興戸古墳群  | 69. 田辺城跡   | 72. 宮ノ口遺跡 |
| 79. 興戸宮ノ前遺跡  | 84. 棚倉孫神社遺跡 | 85. 三野遺跡   | 86. 東林遺跡   |           |
| 109. 興戸丘陵東遺跡 | 122. 奥村遺跡   | 128. 神奈備寺跡 | 158. 田辺遺跡  | 162. 薪城跡  |

遺構は、この青灰色粘砂質土をベースとして掘立柱の柱穴を6か所で検出した。柱列は、柱間寸法2.7m、柱掘形一辺30cm前後を測り、柵列と思われる。なお、表土層から偏平な円筒埴輪の破片1片が出土した。

第4トレンチ 調査地は整備された方形の畦畔をもつ水田である。堆積土は第3トレンチと基本的には同じであるが、耕作土の直下で厚い砂礫の堆積が確認でき、近世(江戸時代)頃の手原川



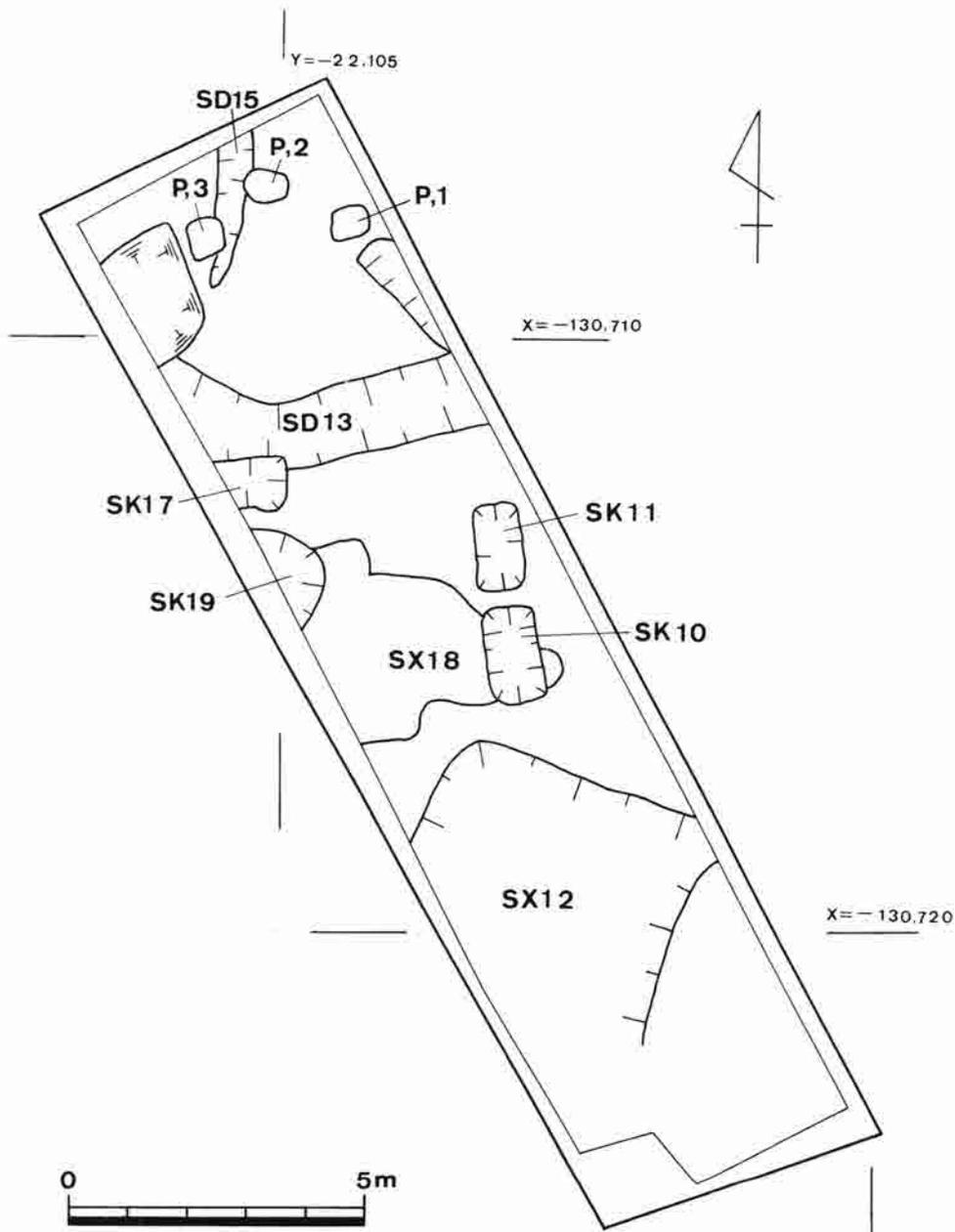
第130図 トレンチ配置図(「京田辺市都市計画図」1/5,000から転載・加筆)  
斜線部は、平成13年度第3次調査トレンチ



の氾濫が2度以上あったものと推測される。旧水田に伴う素掘り溝を検出したことから、上述の方形の畦畔は、条里型地割とは直接的には結び付かないことが確認できた。

第5トレンチ 調査地は丘陵傾斜変換線上にあり、現状は造成された住宅地跡である。堆積層は宅地造成の盛土以下、中世・平安時代・古墳時代・縄文時代の各層が水平に堆積している。さらに、各遺構の地盤がかなり固く安定していることから、遺構・遺物の検出が期待された。

掘立柱柱穴(P-1~3)は、柱間寸法は1.3~1.6mと不揃いである。柱穴は掘形の一辺40~50cmの方形を呈し、深さ40cmを測る。所属年代は、伴出遺物を欠くが、層位関係などから平安時代~中世のものと推測される。



第132図 遺構実測図(2)

土坑S K10は、長方形を呈し、長辺1.2m、短辺0.6m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色粘質土が堆積する。出土遺物には土師器・須恵器細片があり、時期は平安時代末期である。

土坑S K11は、長方形を呈し、長辺1.0m、短辺0.5m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形を呈し、淡茶灰色粘砂質土が堆積する。弥生土器(甕か壺の底部)が1点出土したが、土坑S K10と規模・形態・土坑内の堆積土などが近似しており、また、南北に近接して並ぶことから土坑S K10同様の年代・性格のものと判断される。

溝S D13は、幅50cm、深さ20cmを測る南北方向の素掘り溝である。断面は浅い皿状を呈し、炭化物や焼土を含む茶褐色粘砂質土が堆積する。

土坑S X12は、不定形な一辺約3mの方形を呈し、深さ30cm前後である。堆積土は暗茶褐色砂質土で、数多くの縄文土器(縄文時代後期)の破片が出土した。

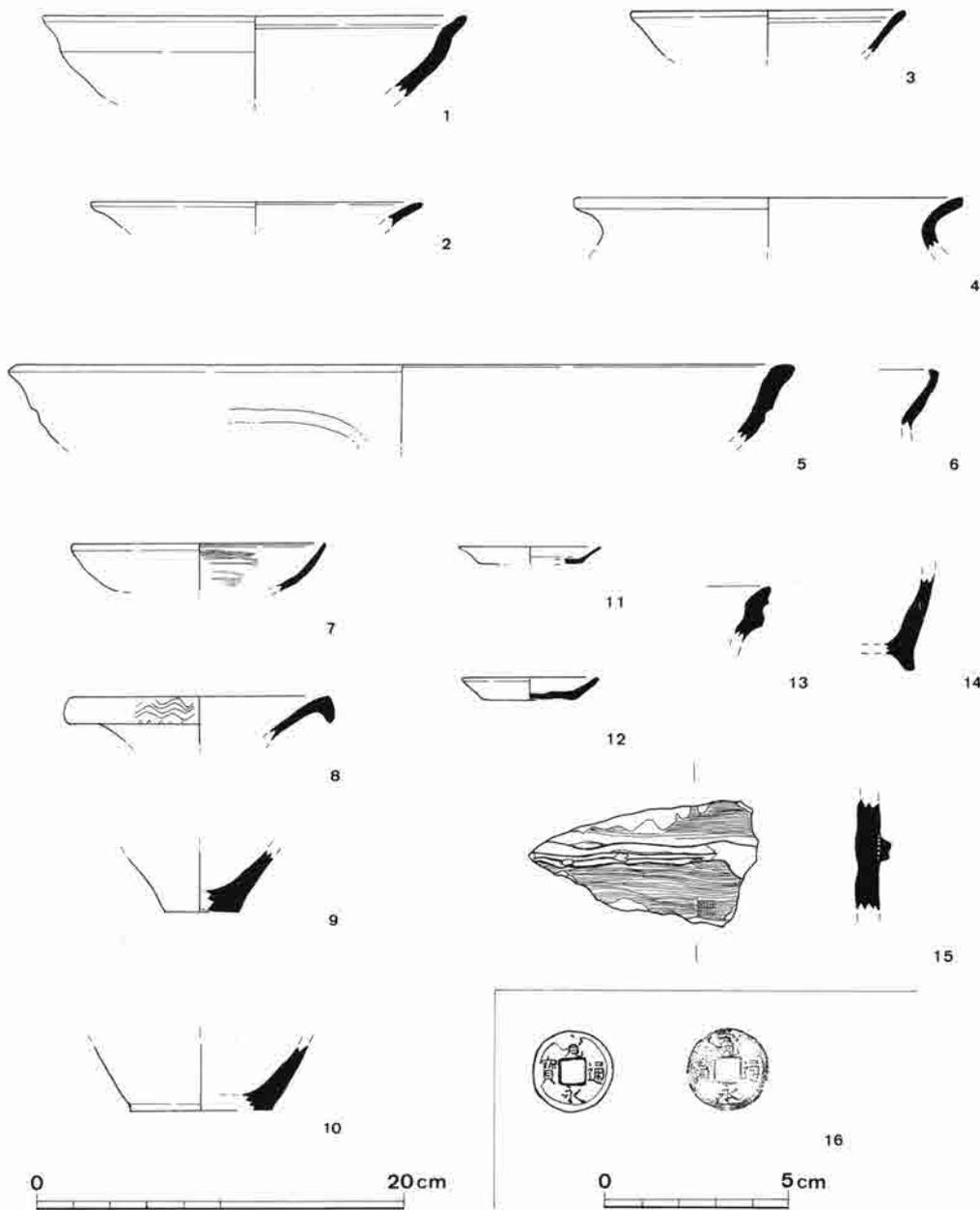
土坑S K17・19、S X18はいづれも深さ10cm未満で浅く、人為的な遺構かどうか不明である。

第6トレンチ 調査地は丘陵縁辺部(傾斜変換線)で手原川が近くにある。現在、畑地として利用されている。堆積土は旧耕作土以下、砂礫層、暗灰色泥土・淡灰色泥土(均整)、砂層・砂礫層、黒灰色泥土、灰色砂・砂礫層の順に堆積する。砂層・砂礫層の堆積状況から、調査地内では、少なくとも3回以上の手原川の氾濫あるいは丘陵部からの崩落に伴う土砂流入が推察される。黒灰色泥土は湿田土とも思えるが、有機物が大量に混在していることから、むしろ常に滞水している湿地帯であったと考えられる。この層から、多くの瓦器・土師器・陶磁器などの中世遺物が出土した。

## (2)出土遺物(第133図)

1は口径23.4cmを測る近世の瓦質土器鉢である。色調は内外面灰色を呈し、一部、外反する口縁部外面には黒色がみられる。2は口径13.2cmを測る中世の土師器皿である。色調は淡褐色を呈し、口縁部外面にはナデ調整が明瞭に残る。3は口径15.2cmを測る平安時代の須恵器杯である。色調は内外面とも淡灰色を呈し、器壁は薄い。4は口径21.4cmを測る平安時代後期の土師器甕である。色調は褐色を呈し、口縁端部外側は平坦面をもつ。5は口径21.4cmを測る縄文時代後期の深鉢である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土は粒の粗い長石・石英を多く含む。器壁は内外面とも精緻であり、口縁部外面には幅5mmの曲線の凹線文がある。6は平安時代の土師器甕である。口縁端部は内側に断面三角形に肥厚する。7は口径13.8cmを測る13世紀代の瓦器椀である。椀の内面には暗文が口縁部側には密に施され、口縁端部内側にはわずかに浅い沈線が残る。8は口径13.8cmを測る弥生時代後期の広口壺である。口縁部は外反しながら大きく開き、口縁端部は屈曲して垂下する。端部外面には櫛描の波状文が施され、この下部に列点文がある。9は底部径4.0cmを測る弥生土器甕の底部である。色調は灰褐色を呈し、外面には黒色の大きな斑文がある。10は縄文土器深鉢の底部である。小片のため底部径の規模は不明である。色調・胎土とも5の縄文土器と酷似する。11は口径7.8cm、器高1.0cmを測る土師器皿である。色調は内外面・胎土とも暗黒褐色を呈し、黒色土器Bの可能性もある。12は口径7.4cm、器高1.2cmを測る近世の土師器

皿である。色調は淡黄灰色、胎土は精緻である。13は縄文土器の口縁部であるが、小片のため規模、施文方法の詳細は不明である。14は赤褐色を呈する近世の土師器鉢である。胎土は緻密で、回転ナデも明瞭に残り極めて精緻である。15は川西編年のⅢ～Ⅳ期に属する偏平な円筒埴輪である。色調は内面赤褐色、外面黒褐色を呈し、焼成は堅緻である。外面には縦ハケの後、横ハケ調整を施している。16は直径23mm、厚さ3mm、方孔は一辺6mmを測る銅銭の寛永通寶である。表面



第133図 出土遺物実測図(tr.はトレンチの略)

- |                  |                     |                      |
|------------------|---------------------|----------------------|
| 1：第2 tr. 北側、黒褐色土 | 2：第5 tr. 暗灰色砂質土     | 3・6・13：第5 tr. 青灰色砂質土 |
| 4・8：第5 tr. P-3   | 5：第5 tr. SX12       | 7：第2 tr. 黒褐色泥土       |
| 9：第5 tr. SK11    | 10：第5 tr. SX12(W)   | 11：第2 tr. 暗褐色灰色砂礫    |
| 12・14：第1 tr. 表土層 | 15・16：第3 tr. 茶褐色砂質土 |                      |

は錆び欠損するが、銅の含有量が多く硬い。

### 3. ま と め

今回の調査では、第1～4トレンチでは、第3トレンチを除き、遺構はほとんど確認できなかった。一方、北端部付近に設定した前年度の試掘調査地に近接する第5トレンチでは、縄文時代後期以降の各時代の遺構・遺物が検出された。第6トレンチでは湿地帯、泥田の様相を呈し、手原川の氾濫を直に受けやすい地形などにより、住居に適さなかったものと推察される。

薪遺跡の南・西側の丘陵部には、天理山古墳群、堀切古墳群、西山古墳群が連なり、その眼下の低地には、集落の存在が容易に想起される。調査地全般を通じて遺構・遺物が少ない調査成果であるが、第5トレンチとその周辺では、その密度が高いことから、今後の調査に期待される。

(竹井治雄)

調査参加者 川村真由美・寺島まゆみ・徳田知恵子

#### 参 考 文 献

鷹野一太郎ほか「薪遺跡発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第30集 京田辺市教育委員会) 2000

竹原一彦「6. 薪遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第106冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

京都府教育委員会(『京都府遺跡地図』[第3版] 第3分冊) 2003

## 6. 椋ノ木遺跡第6次発掘調査概要

### 1. はじめに

椋ノ木遺跡は、木津川左岸の自然堤防上に立地する集落遺跡である。過去の調査は、平成7～9年度と、平成12・13年度に実施されている<sup>(注1)</sup>。平成7～9年度の調査では、平安時代末～鎌倉時代の屋敷地や墓などの遺構が多数見付き、平成12・13年度の調査では、中世の遺構に加えて、古墳時代前期の竪穴式住居跡や縄文時代後期の焼土など、さらに古い時代の遺構も発見された。

特に、平安時代末から鎌倉時代は遺構・遺物ともに豊富で、木津川の舟運に関連する集落と考えられている。また、集落の変遷や地域の土器編年<sup>(注2)</sup>を考える上で不可欠な資料が数多く得られ、当遺跡は、南山城を代表する中世前期の集落遺跡のひとつとなっている。

今回の調査は、木津川上流浄化センター建設に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査位置は、平成8・9年度に実施した4-1～5トレンチの東隣に当たる。

現地調査は平成14年6月5日～平成15年2月10日に実施し、その間、10月16日には現地説明会、1月24日には関係者説明会を実施した。調査面積は約3,200㎡である。現地調査は当調査研究センター調査第2課調査第2係主任調査員松井忠春・森島康雄、主査調査員伊賀高弘が担当した。整理報告は、平成15年度に森島が担当して行ったが、弥生土器については調査員石崎善久の協力を得た。現地調査・整理報告にあたっては、多くの方々に参加していただき、関係諸機関には多大なご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

なお、調査に要した費用は、全額、京都府土木建築部が負担した。

### 2. 層序

調査区には平成8年度調査の4トレンチに建設された木津川上流浄化センター水処理施設の工事に伴う地盤改良工事が地表下約1.5m付近にまで及んでいる部分が多く、一部では遺構面にまで工事に伴う攪乱が及んでいた。

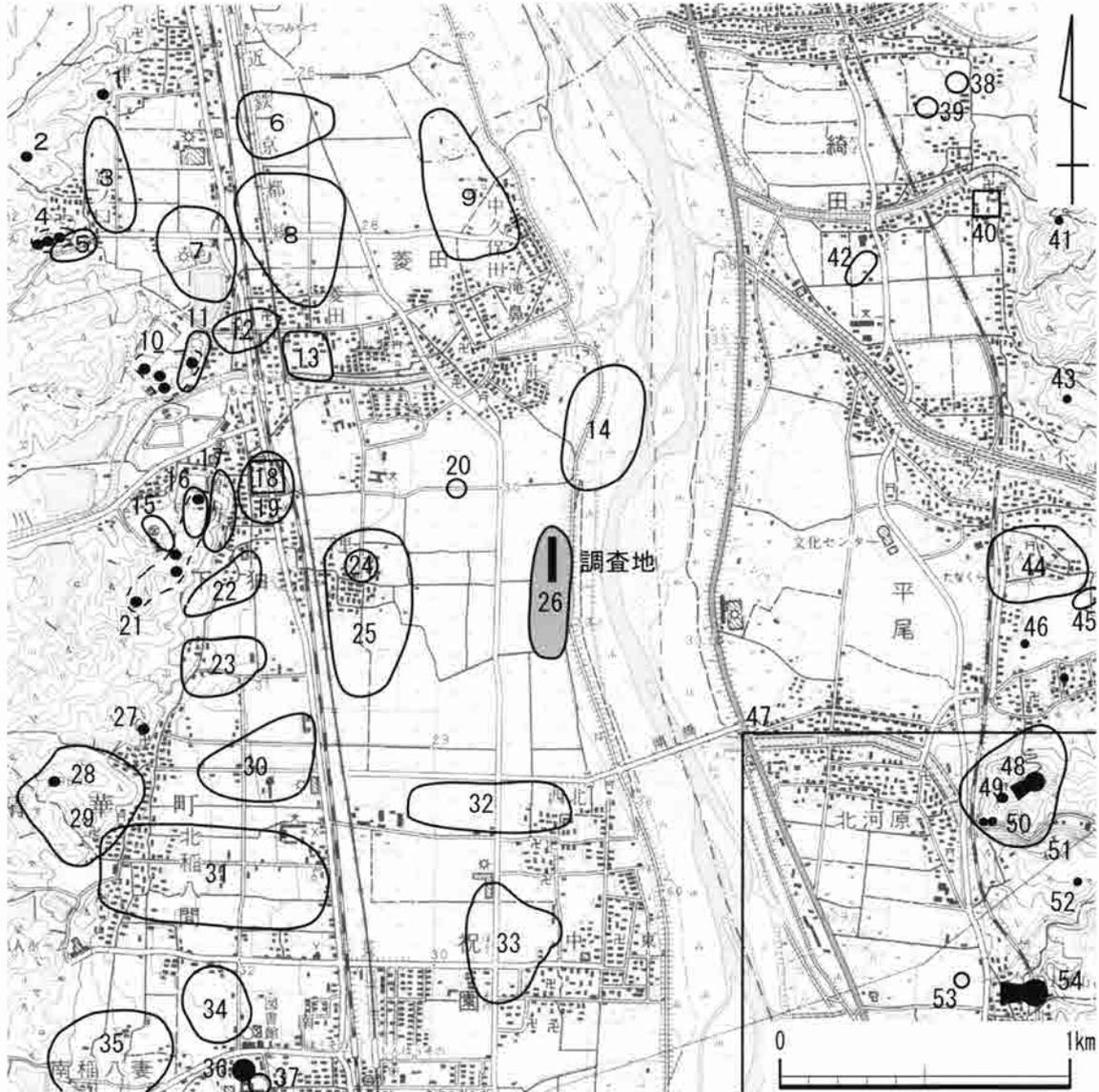
調査区中央部付近のX=-136,225～-136,222m付近を境に北部と南部で堆積状況が異なる(第138図)。これは、北部に島畠が造成されたため、第1遺構面のベースとなる淡黄灰色粘土層の上に、南部では暗褐灰色粘砂質土が堆積するのに対して、北部では島畠の造成土である淡茶褐色粘質土が盛られている。

なお、この島畠の上面も地盤改良工事によってすでに削平されており調査を行うことができなかった。

第1遺構面は標高約25.0mで検出した。遺構の大半は、この面で検出したもので、弥生～室町時代までの遺構が同一面で検出された。調査区南部の掘立柱建物跡SB5～7やピット群の多く

は、第2遺構面までの掘り下げの途中で検出し、一部は第2遺構面で検出したが、これらは、本来第1遺構面で検出されるべきものが縦横に走る耕作溝群に隠れて検出できなかったものである。

第2遺構面は、X=-136,159m付近の坪境溝群以南にのみ存在する。標高は、調査区南部が最も高く標高約24.9m、中央部で最も低くなり標高約24.3m、北部で再び高くなって標高約24.5mを測る。第1遺構面から第2遺構面までの掘り下げの途中で、縄文時代後～晩期の縄文土器(図



第134図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院1/25000田辺)

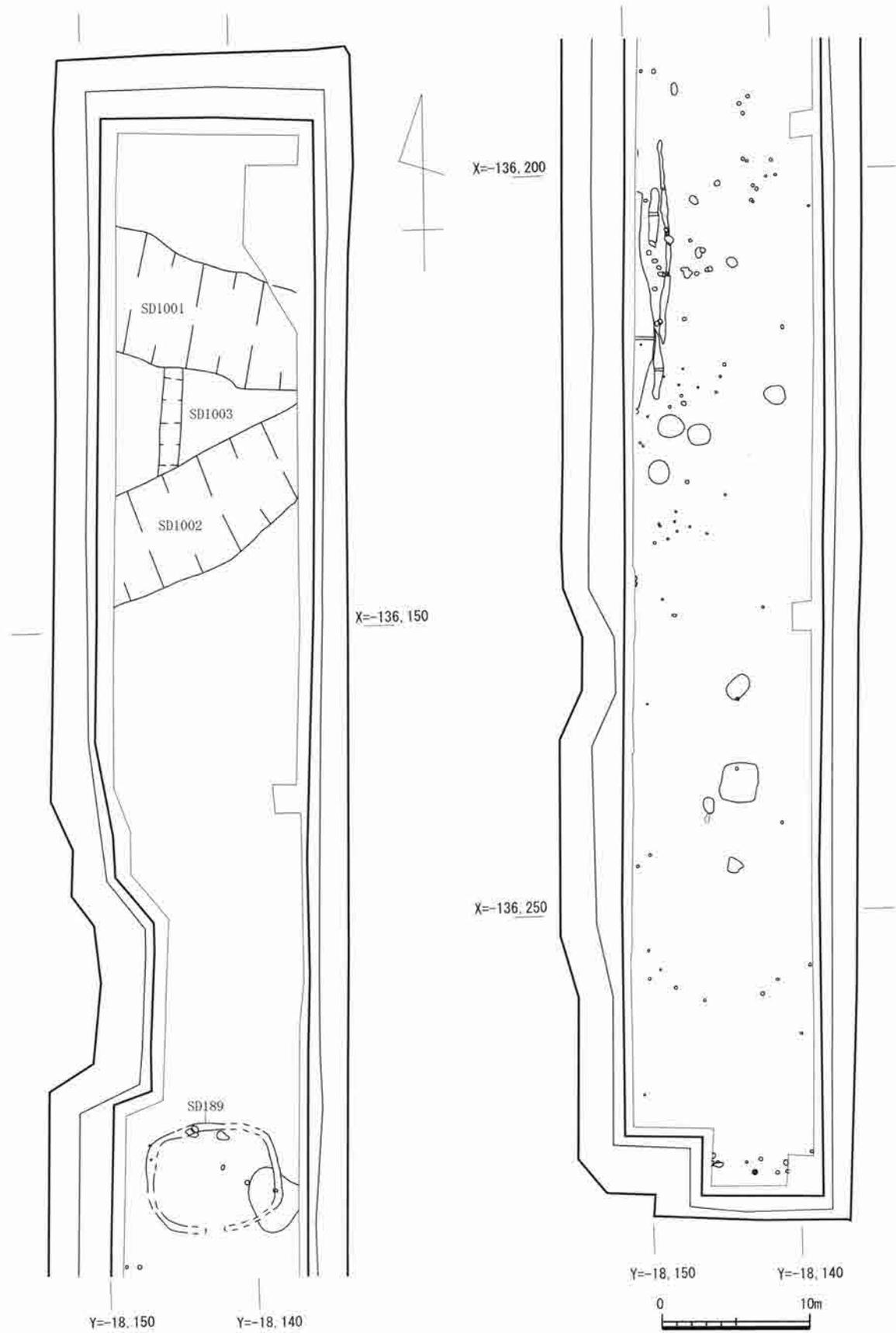
- |          |             |           |            |           |          |
|----------|-------------|-----------|------------|-----------|----------|
| 1：江津古墳   | 2：宮津古墳      | 3：屋敷田遺跡   | 4：宮の口古墳群   | 5：白山遺跡    | 6：桑町遺跡   |
| 7：宮の口遺跡  | 8：山路遺跡      | 9：元屋敷遺跡   | 10：平谷古墳群   | 11：薬師山遺跡  | 12：西ノ口遺跡 |
| 13：前川原遺跡 | 14：百久保地先遺跡  | 15：長芝遺跡   | 16：鞍岡神社遺跡  |           |          |
| 17：鞍岡山遺跡 | 18：下粕廃寺     | 19：拝殿遺跡   | 20：石ヶ町遺跡   | 21：鞍岡山古墳群 |          |
| 22：下馬遺跡  | 23：片山遺跡     | 24：里廃寺    | 25：里遺跡     | 26：棕ノ木遺跡  | 27：石塚古墳  |
| 28：城山古墳  | 29：城山遺跡     | 30：柿添遺跡   | 31：北稲遺跡    | 32：西垣戸遺跡  | 33：中垣外遺跡 |
| 34：北尻遺跡  | 35：南稲遺跡     | 36：丸山古墳   | 37：祝園古墳    | 38：渋川東遺跡  | 39：渋川西遺跡 |
| 40：蟹満寺   | 41：山際古墳     | 42：西ノ口遺跡  | 43：山ノ上古墳   | 44：涌出宮遺跡  | 45：丹夕遺跡  |
| 46：三所塚古墳 | 47：恭仁京右京推定地 | 48：平尾城山古墳 | 49：稲荷山古墳   | 50：北谷横穴群  |          |
| 51：今城跡   | 52：西ヶ峰古墳    | 53：坂ノ下遺跡  | 54：椿井大塚山古墳 |           |          |

版第120-350・縄文はLR)や縄文時代と思われる石鏃などが出土し、弥生時代以降の遺物はまったく出土していないので、この層の形成時期は縄文時代とみることができる。

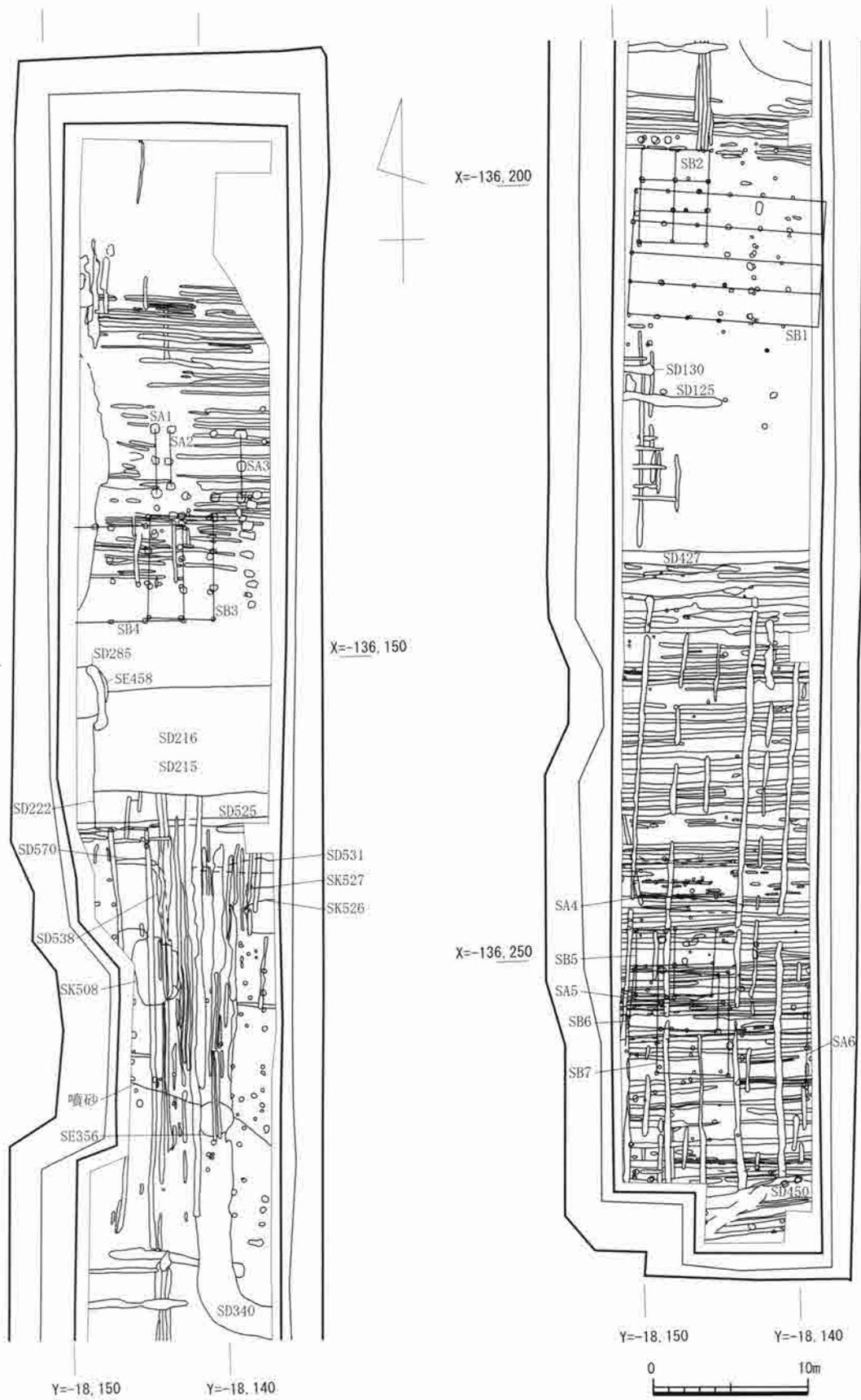
第2遺構面では、溝・ピット・土坑状の窪みをいくつか検出したが、いずれも明確な掘形を認



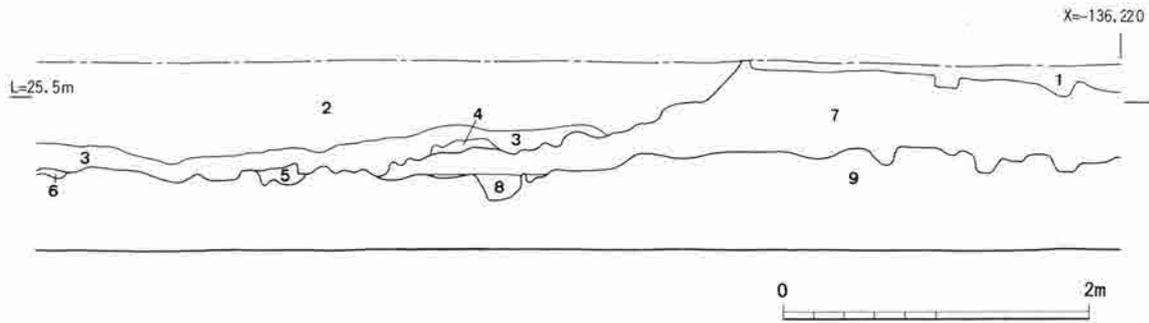
第135図 調査区位置図



第136図 縄文～古墳時代遺構平面略図



第137図 平安～室町時代遺構平面略図



第138図 調査区中央部西壁土層断面図

- |                  |                    |             |
|------------------|--------------------|-------------|
| 1. 茶灰色粘質粗砂土(造成土) | 2. 淡褐色砂質土(灰白色砂混じる) | 3. 暗褐色粘砂質土  |
| 4. 淡灰色粘砂質土(烏島盛土) | 5. 淡黄褐色粘砂土         | 6. 灰色シルト質粘土 |
| 7. 淡茶褐色粘質土       | 8. 淡灰色細砂質土         | 9. 茶灰色硬質粘砂土 |

識できるものではなかった。

### 3. 検出遺構

#### (1) 弥生・古墳時代

溝 S D 1001 (第139図) 調査区北部で検出した西北西から東南東に続く幅約 8 m、深さ約 1.2 m の溝である。溝底のレベルは西が高く、東に向かって下がる。平面形が直線的で、断面形が「V」字形をしていることから、人工的に掘られたものと考えられる。溝の埋土は大きく 4 層に分けられる。1 層は埴輪や須恵器を含み、古墳時代に埋没したものと考えられる。この層は S D 1002・1003 の範囲にも広がる。2 層は無遺物層であるが、3 層からは弥生時代後期後半の土器が大量に出土した。4～7 層は場所によって堆積状況がやや異なるが、ほとんど遺物は出土せず、層の上位に炭化物がやや多く含まれる。

3 層の炭化材 2 点を加速器による放射性炭素年代測定法 (AMS 法) で分析したところ、 $1890 \pm 40$  B. P.、 $2030 \pm 40$  B. P. の年代 (補正年代) を得た。

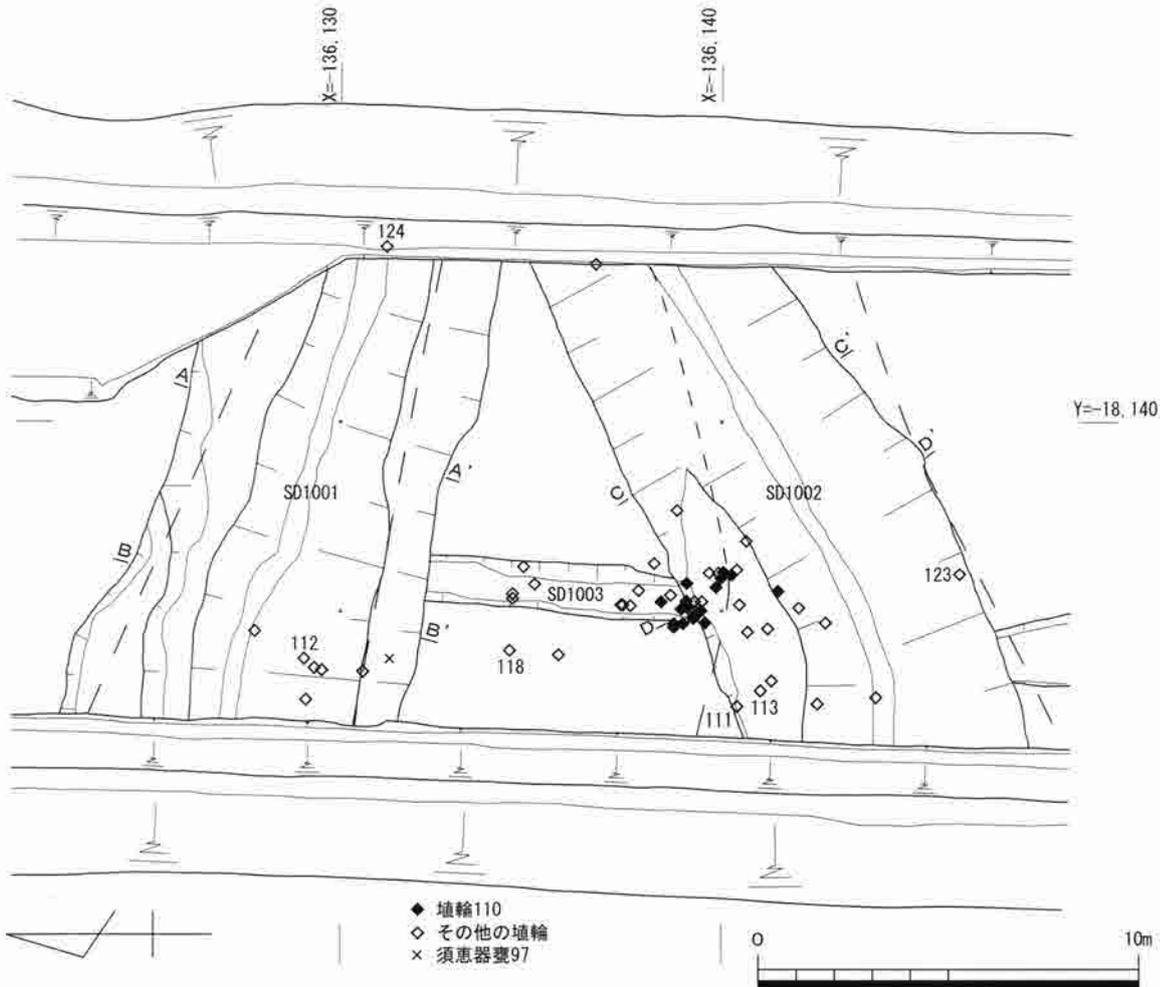
遺物の取り上げは、溝に直交する方向に 2 本の畦を設定して 3 区に分けて行った (第143～145 図)。遺物は中央から東側に多く、西ではやや疎らである。この溝は、遺跡の立地する微高地の北端付近に位置することから、集落の北を限る溝とみることができる。

なお、溝の 1 層からは、古墳時代中～後期の須恵器や埴輪などが出土しており、S D 1001 は、古墳時代までは浅い窪地として残っていたものと推定される。

溝の底を断ち割ったところ、弥生時代前期末頃と考えられる溝を検出した。S D 1001 の底から 0.4～0.9 m 付近までは淡青灰色シルトが堆積しており、この段階では溝の存在を認識できなかったが、その下に、炭化物を含む砂質の堆積が明瞭に認められ、溝の存在を確認した。断ち割りによって断面を確認しただけであるが、下層の溝は第141図の破線に示す位置にあるものと思われるので、S D 1001 は、この溝を再掘削したものと思われる。

なお、断ち割りから出土した遺物は小破片のみであるが、弥生時代前期末の特徴を示す。

9 層の炭化材を AMS 法で分析したところ、 $1990 \pm 40$  B. P. の年代 (補正年代) を得た。



第139図 溝S D1001～1003平面図(破線は下層の溝)

溝S D1002(第139図) S D1001の南側で検出した南西から北東に続く幅約7m、深さ約1.2mの溝である。S D1001と同様に人工的に掘られたものと考えられる。埋土の状況や出土する遺物の様相がS D1001と共通することから、両者は同時に埋没したものと考えられ、2条の溝は、調査区の東側で合流するものと予想される。

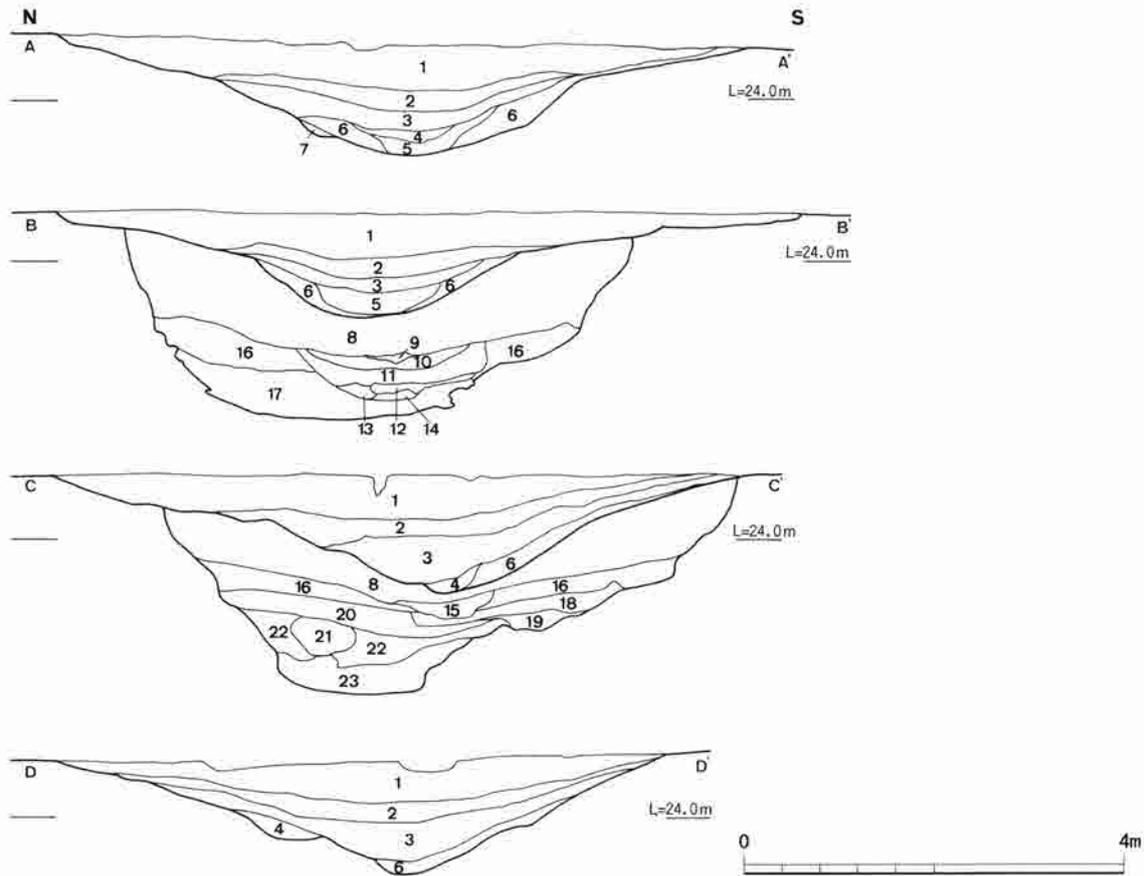
3層の炭化材をAMS法で分析したところ、1850±40B. P.の年代(補正年代)を得た。

遺物の取り上げはS D1001と同様に3区に分けて行った(第144～146図)。出土量はS D1001に比べて少ないが、遺物が中央から東側に多く、西側に少ない状況はS D1001と同様である。

なお、S D1002の1層からも埴輪などが出土している(第148図)。

溝の底を断ち割ったところ、弥生時代中期後葉頃と考えられる溝を検出した。この溝の埋土は、S D1001下層の溝と同様に砂質の層が多いが、堆積の状況はやや異なる。断ち割りによって確認したところ、溝の北肩は、西端部では確認できたが、東端部では確認できなかった。このことから、下層の溝はS D1002よりも東西に近い方向にのびるもので、北肩は、西寄りの一部を除いてS D1002に切られて失われていると考えられる。S D1002は、この溝の一部を利用して再掘削されたものと思われる。

なお、断ち割りから出土した遺物は、弥生時代中期後葉の特徴を示す。



第140図 溝S D1001・1002断面図

- |                   |                            |                     |
|-------------------|----------------------------|---------------------|
| 1. 灰緑色粘質土         | 2. 濃灰色粘質土                  | 3. 淡灰緑色粘質土(炭化物を含む)  |
| 4. 濃灰色粘質土(炭化物を含む) | 5. 明灰緑色粘質土                 | 6. 灰黄色粘質土           |
| 7. 灰黄色砂質土         | 8. 淡青灰色シルト                 | 9. 灰色砂混じり粘土(炭化物を含む) |
| 10. 灰黄色粗砂         | 11. 淡灰緑色細砂                 | 12. 淡緑灰色礫混じり粘土      |
| 13. 緑灰色砂混じりシルト    | 14. 暗灰色砂混じり粘土              | 15. 灰色シルト～砂         |
| 16. 淡茶灰色微砂混じりシルト  | 17. 暗灰色粘土(淡灰色細砂を層状に含む)     |                     |
| 18. 茶灰色粗砂混じり粘土    | 19. 灰色粗砂混じり粘土(炭化物を薄い層状に含む) |                     |
| 20. 茶灰色細砂混じりシルト   | 21. 暗灰色粘土                  | 22. 淡茶灰色微砂          |

溝S D1003(第139図) S D1001と1002の間で検出した幅約1.2m、深さ約0.2mを測る南北方向の溝である。埋土が溝1001・1002の1層と共通しているため切り合い関係は不明である。

前述のように、S D1001・1002の1層からは古墳時代中～後期の須恵器や埴輪などが出土している。埴輪の出土分布(第139図)をみれば、S D1002西部の北肩付近に埴輪(110・111)がかたまって出土しているのをはじめとして、S D1002北西部に集中していることがわかる。一方、S D1001では南西部に分布がまとまっている。また、S D1001南肩付近(第139図×印)では須恵器甕(97)がほぼ正位置で潰れた状態で出土している(第147図)。これらの分布を考えれば、S D1003を東辺とする古墳が存在した可能性が高く、底部が打ち欠かれた須恵器甕(97)は、古墳の供献土器が転落したものと思われる。

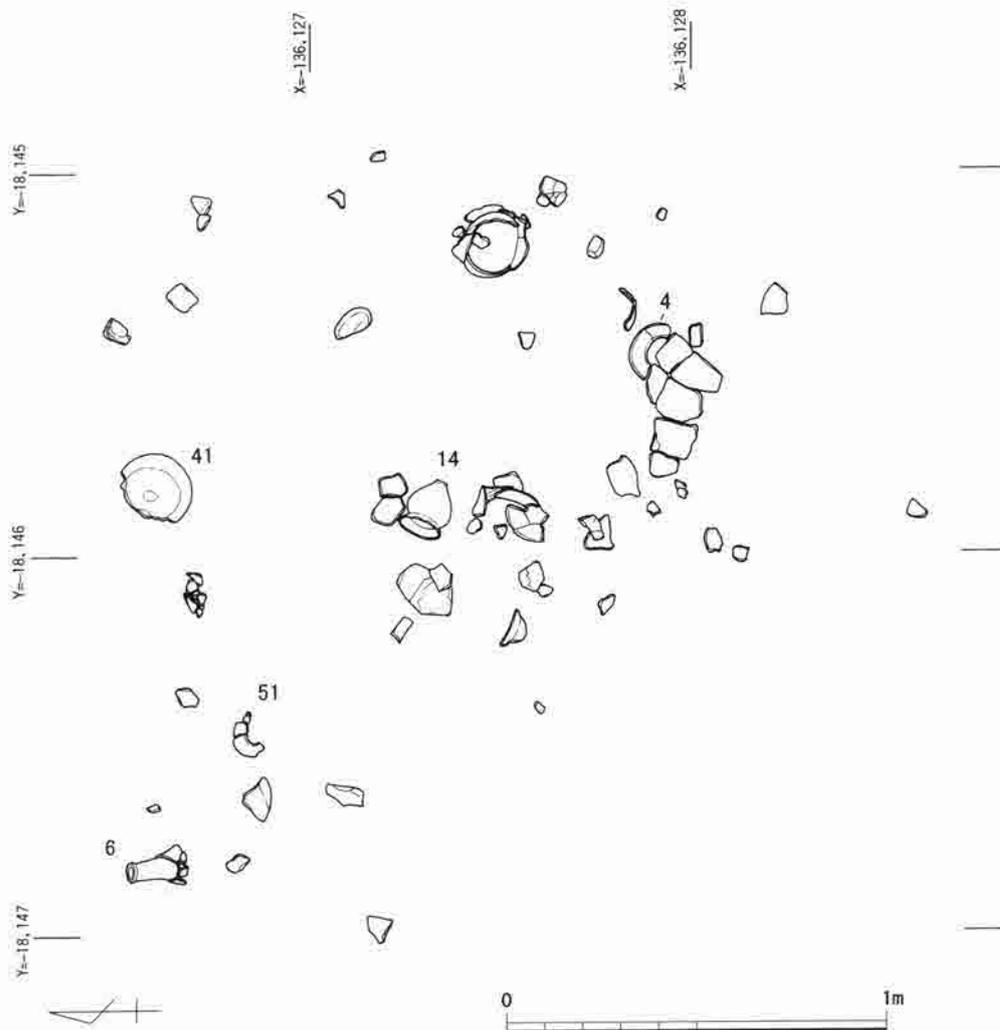
溝S D189(第149図) 東西約8.6m、南北約7mの隅丸方形にめぐる溝である。溝は深さ約0.1m程度しか残っていなかったが、北辺の中央部がやや深くなっており(S K495)、須恵器有蓋高

付表8 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	遺構名	採取位置・層位など	試料の質	樹種	補正年代BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代BP	Code. No.
1	SD1001	SD1001西端 3層	炭化材	スダジイ	2030±40	-33.38±0.80	2170±40	IAAA-30352
2	SD1001	SD1001 3層	炭化材	ムクノキ	1890±40	-29.17±0.89	1960±40	IAAA-30353
3	SD1001	SD1001 9層	炭化材	ケヤキ	1990±40	-25.38±0.88	2000±40	IAAA-30354
4	SD1002	SD1002東端 3層	炭化材	つる植物	1850±40	-28.92±1.24	1920±40	IAAA-30355

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) B P年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

杯5セットと土師器高杯片などがかたまって出土した(第150図)。須恵器高杯は、すべてほぼ完形で出土しているが、接合する小破片が土坑底部付近から出土していることから、土坑に入れられた時点で破損していたものと考えられる。また、逆位や横位で出土している個体もあることから、土坑内に埋納されたのではなく、まとめて捨てられたような状況と考えられる。なお、高杯



第141図 溝SD1001遺物出土状況実測図1(西)



第142図 溝S D 1001遺物出土状況実測図2 (中央)

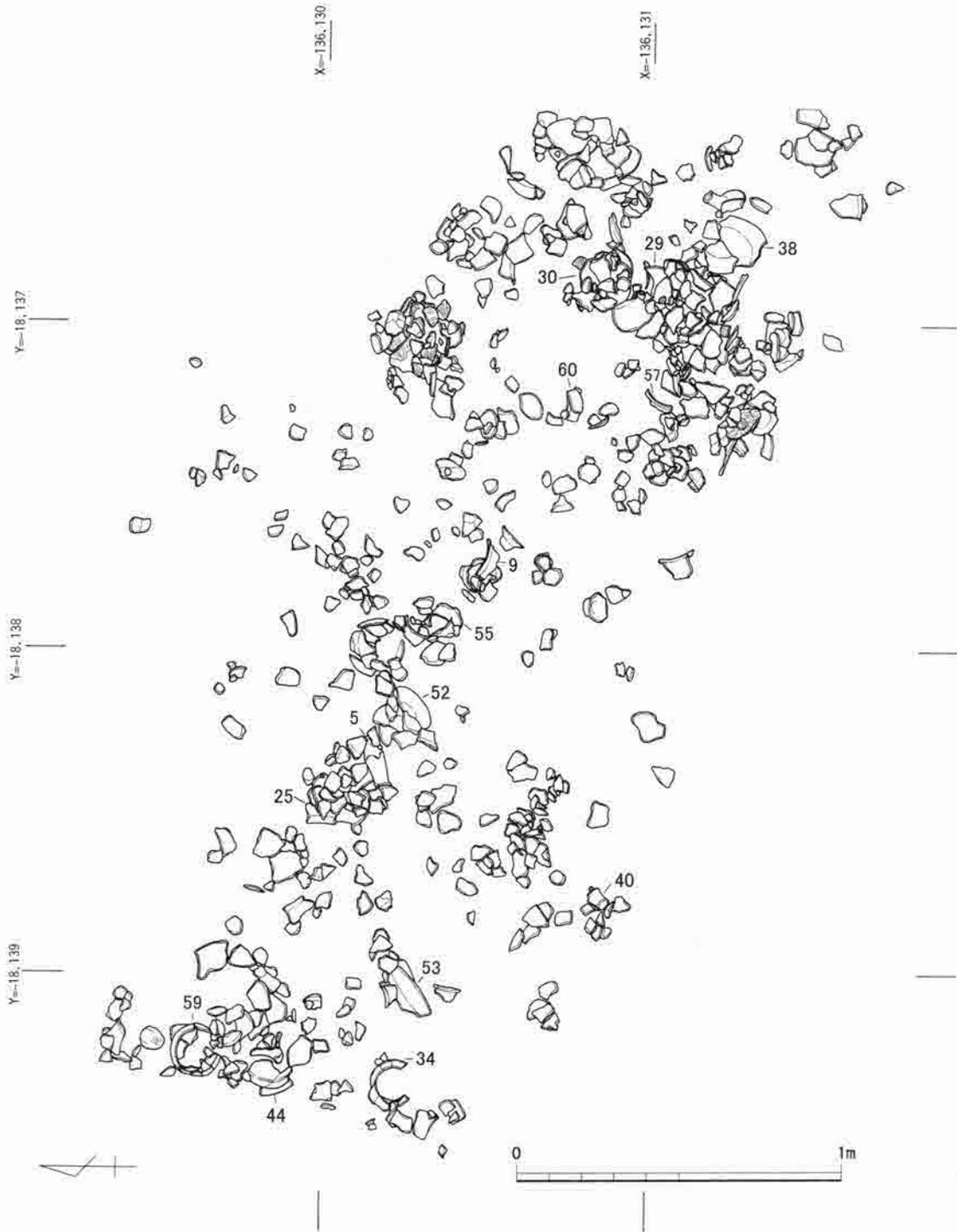
1 点の杯部から製塩土器が出土した。

この溝は古墳に伴うもので、墳丘の部分が削られた5世紀の方墳があったと考えている。

(2) 平安時代以降

1) 掘立柱建物跡・柵

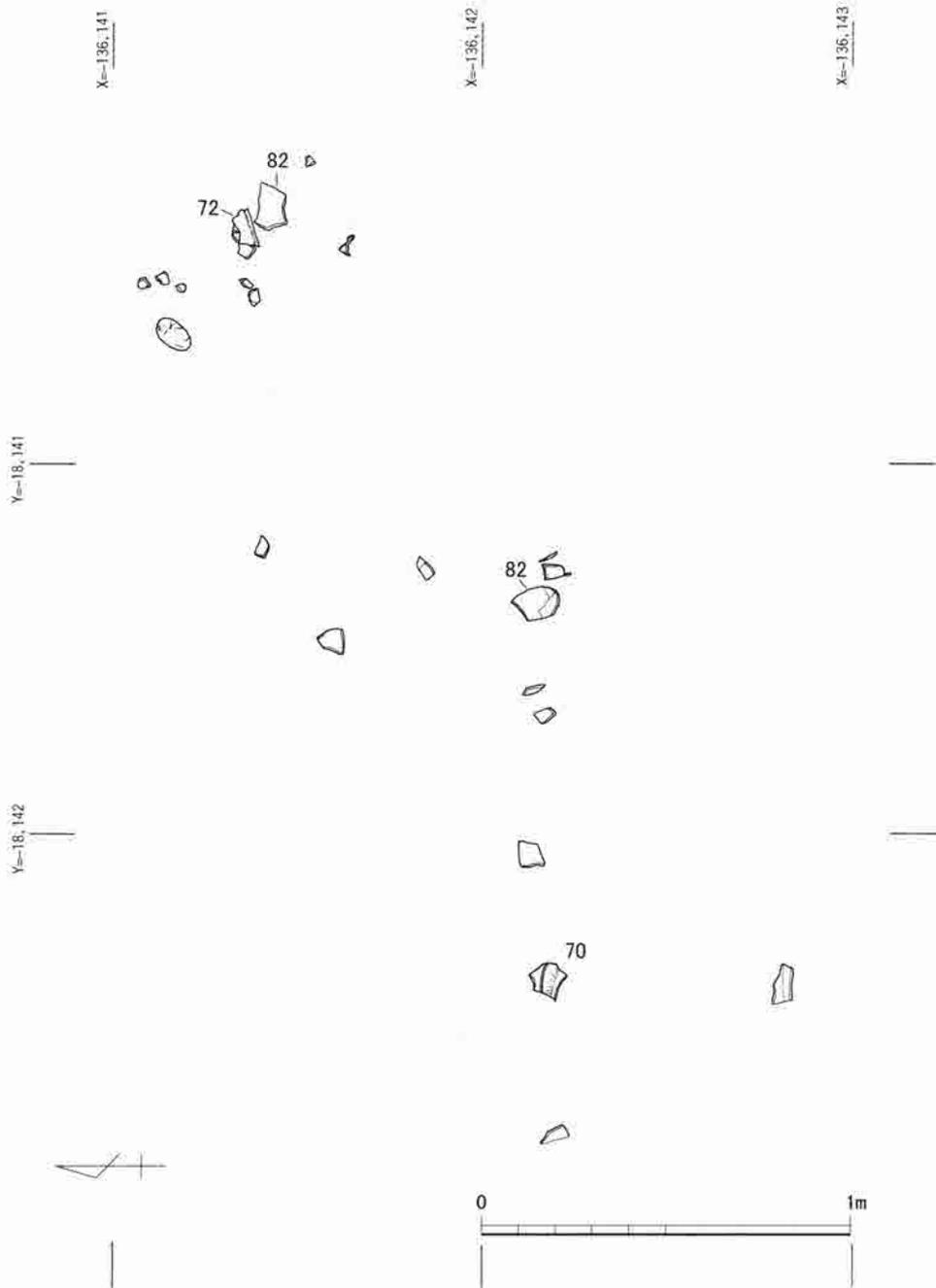
調査区北部で掘立柱建物跡S B 3・4と柵S A 1～3、調査区中部で掘立柱建物跡S B 1・2、



第143図 溝S D 1001遺物出土状況実測図3(東)

調査区南部で掘立柱建物跡S B 5～7と柵S A 4～6を検出した。

**掘立柱建物跡S B 1(第151図)** 調査区中部で検出した。身舎は南北2間で、北辺と南辺に庇が付く。身舎南辺柱列の延長線上の調査区壁面でピットの断面を確認していることから、東西6間以上の規模になることは確実であるが、調査区の外に続くため不明である。身舎南側柱列の西から6番目の柱穴であるS P 326には、柱を抜き取った後に、土師器皿・甕、黒色土器A類椀などが納められており、建物を壊すにあたって何らかの祭祀を行ったものと思われる(第152図)。

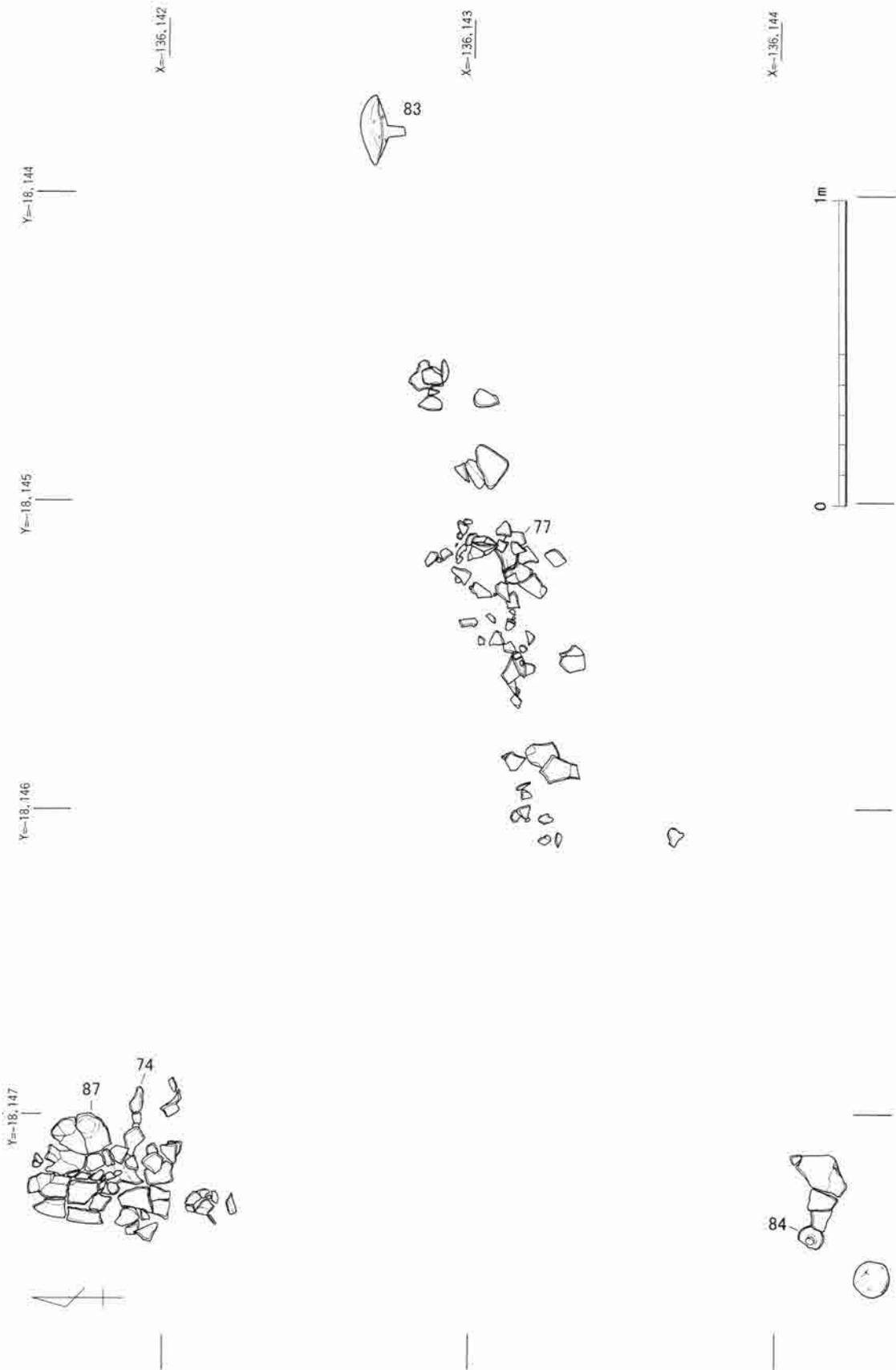


第144図 溝 S D 1002 遺物出土状況実測図 I (西)

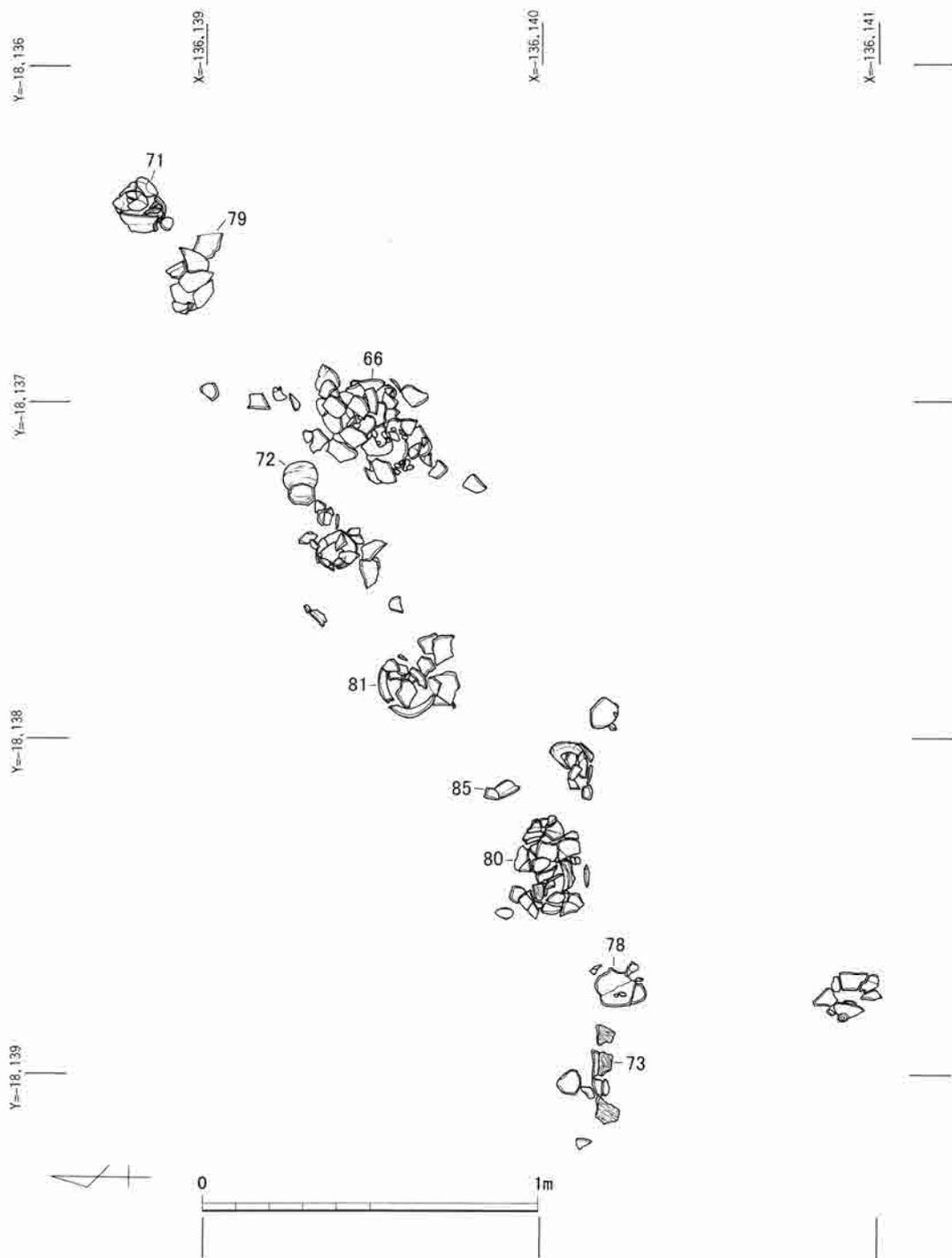
埋納の状況は、土師器甕の中に石を入れて横位に置き、その上に土師器小皿2点と黒色土器A類碗が置かれていた。出土した土器は、いずれも完形にはならないので、はじめから割れた土器を納めていたものと考えられる。これらの土器が10世紀第3四半期のものであるので、建物が建てられたのは10世紀の中頃と考えられる。

**掘立柱建物跡 S B 2 (第151図)** S B 1 の北西部に重複した位置で検出した。南北3間、東西2間以上の規模で、総柱の建物である。柱穴の多くには、柱を支えるために据えられた石が残っていた。建物の時期は、耕作溝群よりも古いことから、平安～鎌倉時代と思われる。

**掘立柱建物跡 S B 3 (第153図)** 調査区北部の坪境溝の北側で検出した。南北3間、東西2間



第145図 溝S D1002遺物出土状況実測図2(中央)

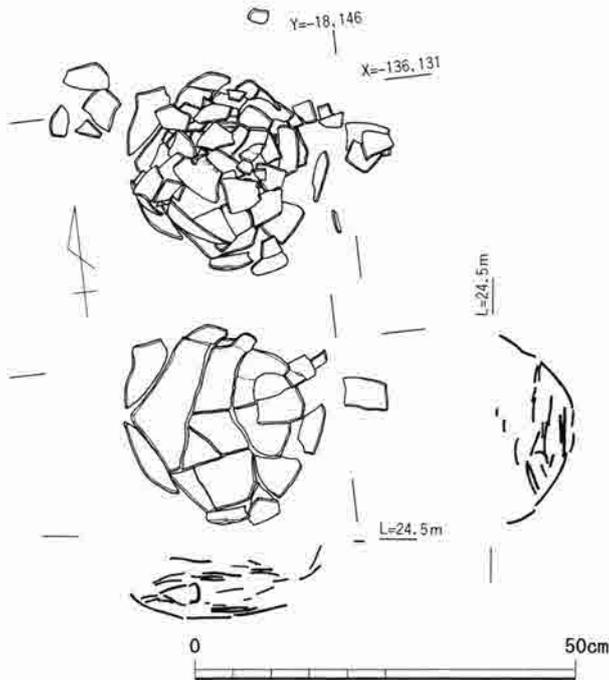


第146図 溝S D 1002遺物出土状況実測図3(東)

で、寸法は南北6.4m、東西4.2mを測る。柱穴から黒色土器B類や底部糸切りの須恵器壺などが出土していることから、10～11世紀の建物と考えられる。

掘立柱建物跡S B 4(第153図) 調査区北部の坪境溝の北側で検出した。南北3間、東西3間以上の規模で、建物西端は調査区外にのびる。建物寸法は南北6.1m、東西6.8m以上を測り、柱間寸法は東西が約2.36m、南北が約2.04mである。柱穴の切り合い関係からS B 3よりも新しい建物であることがわかる。軒丸瓦や須恵器壺が出土している。10～11世紀の建物と考えられる。

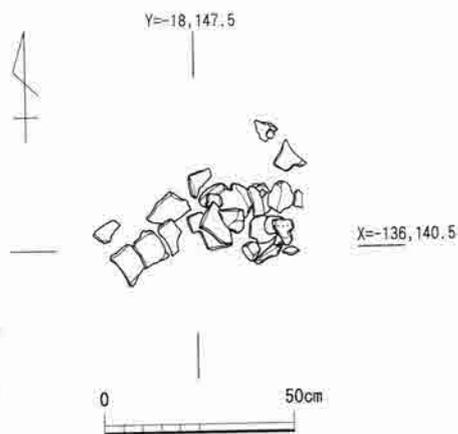
掘立柱建物跡 S B 5 (第154図) 調査区南部で検出した。建物東西の寸法は北辺が5.2m、南辺が4.9mと、北辺の柱間寸法がやや大きく、平面形が台形を呈するが、南北2間、東西2間の総柱建物に復原した。建物北辺に沿って雨落ち溝と思われる溝を検出した。柱穴から出土した「て」の字状口縁の土師器皿や黒色土器B類碗から、11世紀後半の建物と考えられる。



第147図 溝 S D 1001 須恵器甕出土状況図

掘立柱建物跡 S B 6 (第154図) S B 5の南側で重複して検出した。南北1間、東西3間の建物に復原した。寸法は南北3.6m、東西5.8mを測る。建物西辺の中央よりやや北寄りにピットが1基あり、これも S B 6を構成する柱穴かもしれない。建物北辺と

南辺に沿って浅い溝(S D 575・577)が検出され、この建物に伴う溝と思われる。柱穴から出土した「て」の字状口縁の土師器皿や黒色土器B類碗、瓦器碗から、11世紀後半の建物と考えられる。



第148図 溝 S D 1002 埴輪(111)出土状況図

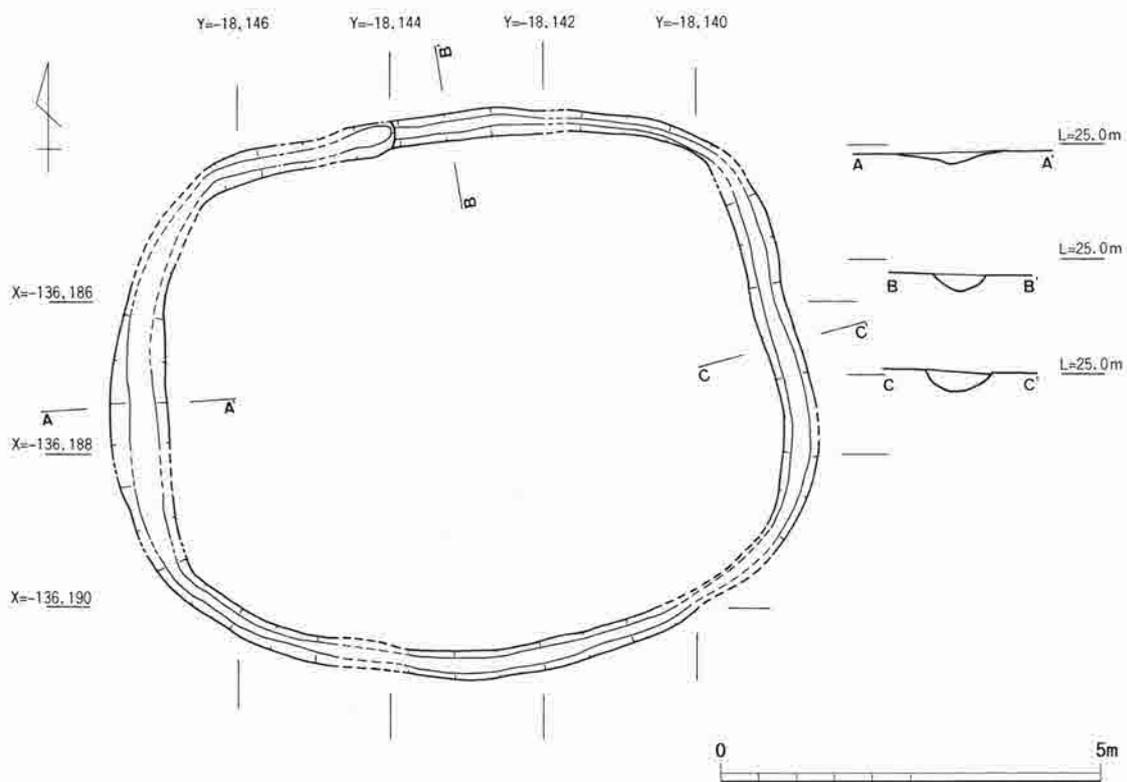
掘立柱建物跡 S B 7 (第154図) S B 6の南側で重複して検出した。南北3間、東西2間の建物である。寸法は南北約6.5m、東西約4.6mを測る。北辺の中央の柱穴が検出できなかった。柱穴から出土した「て」の字状口縁の土師器皿や黒色土器B類碗、瓦器碗から、11世紀後半の建物と考えられる。

柵 S A 1～3 (第153図) 調査区北部で検出した。南北方向にそれぞれピットが3基並ぶので柵としたが、建物の一部である可能性も考えられる。土師器鉢、11世紀後半の瓦器碗などが出土しており、S B 3・4に近い時期の遺構と考えられる。

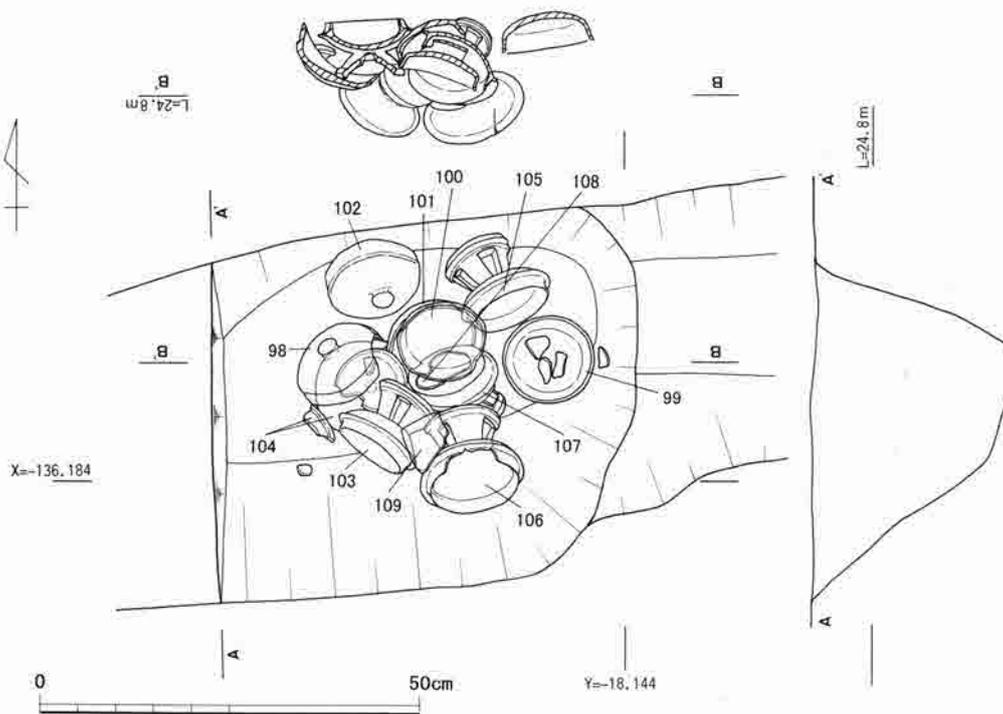
柵 S A 4 (第154図) 東西に約2.3m足らずの間隔で柱穴が3基並ぶもので、柵としたが、南に平行する溝が雨落ち溝で、建物の南辺である可能性が高い。柱穴から出土した「て」の字状口縁の土師器皿や瓦器碗から、11世紀後半の建物と考えられる。

柵 S A 5 (第154図) 東西に約2mの間隔で柱穴が3基並ぶものである。時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺のピットがいずれも11世紀のものであることから、この柵も同様の時期と推定される。

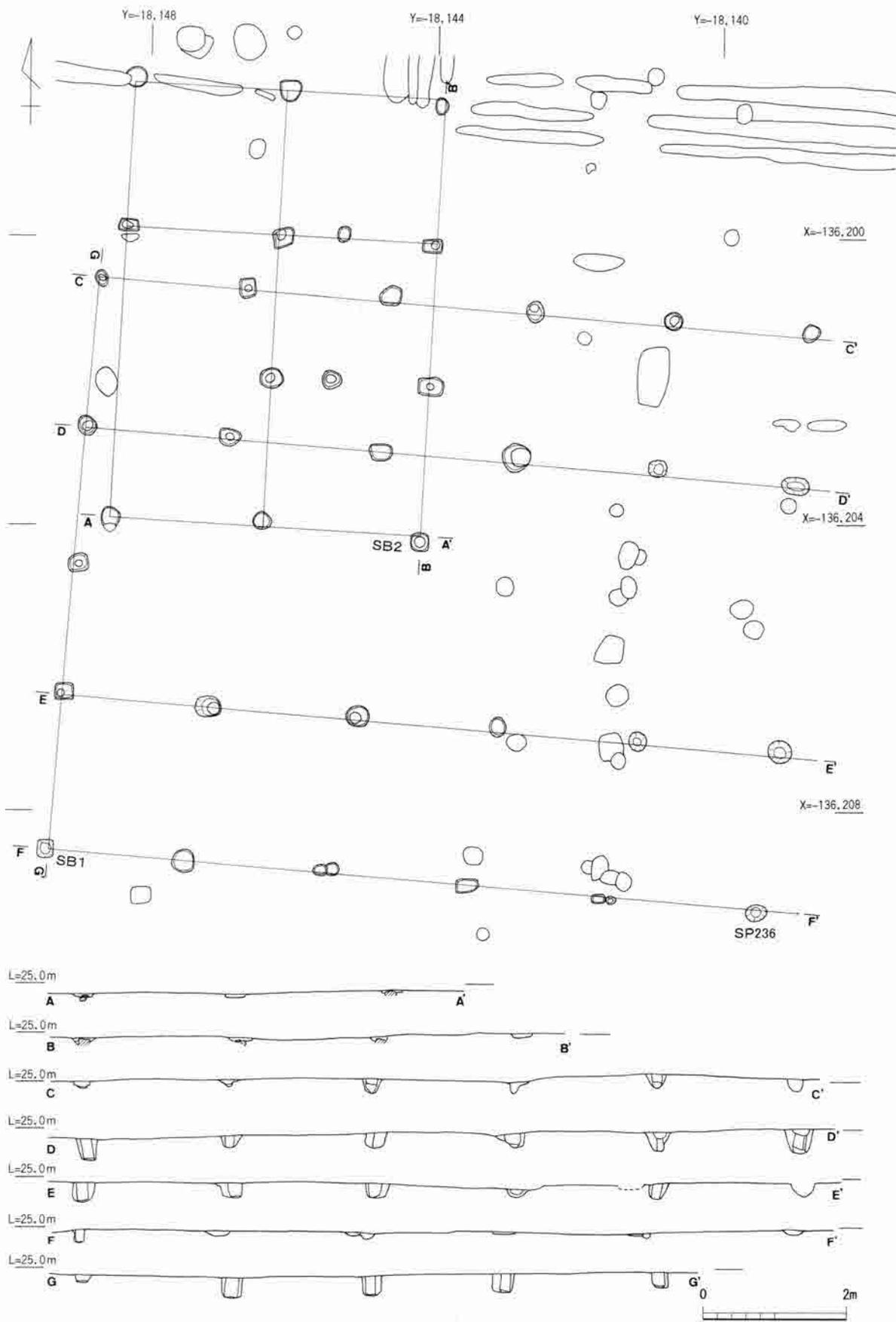
柵 S A 6 (第155図) 調査区南部の東端で南北に3間分検出した。柵としたが、東の調査区外



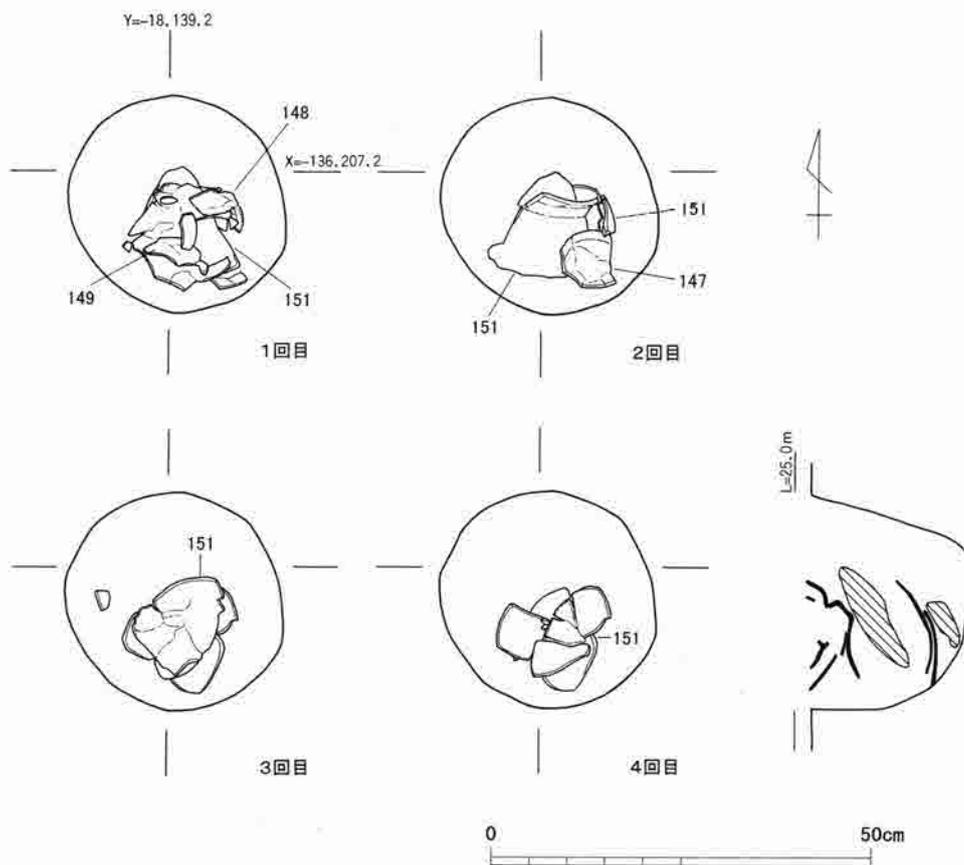
第149図 溝 S D 189(古墳)実測図



第150図 S X 494遺物出土状況図



第151図 掘立柱建物跡SB1・2実測図



第152図 S P326遺物出土状況図

に展開する建物跡の可能性も考えられる。南から2基目のピットで10世紀代の黒色土器B類碗が出土している。

## 2)井戸

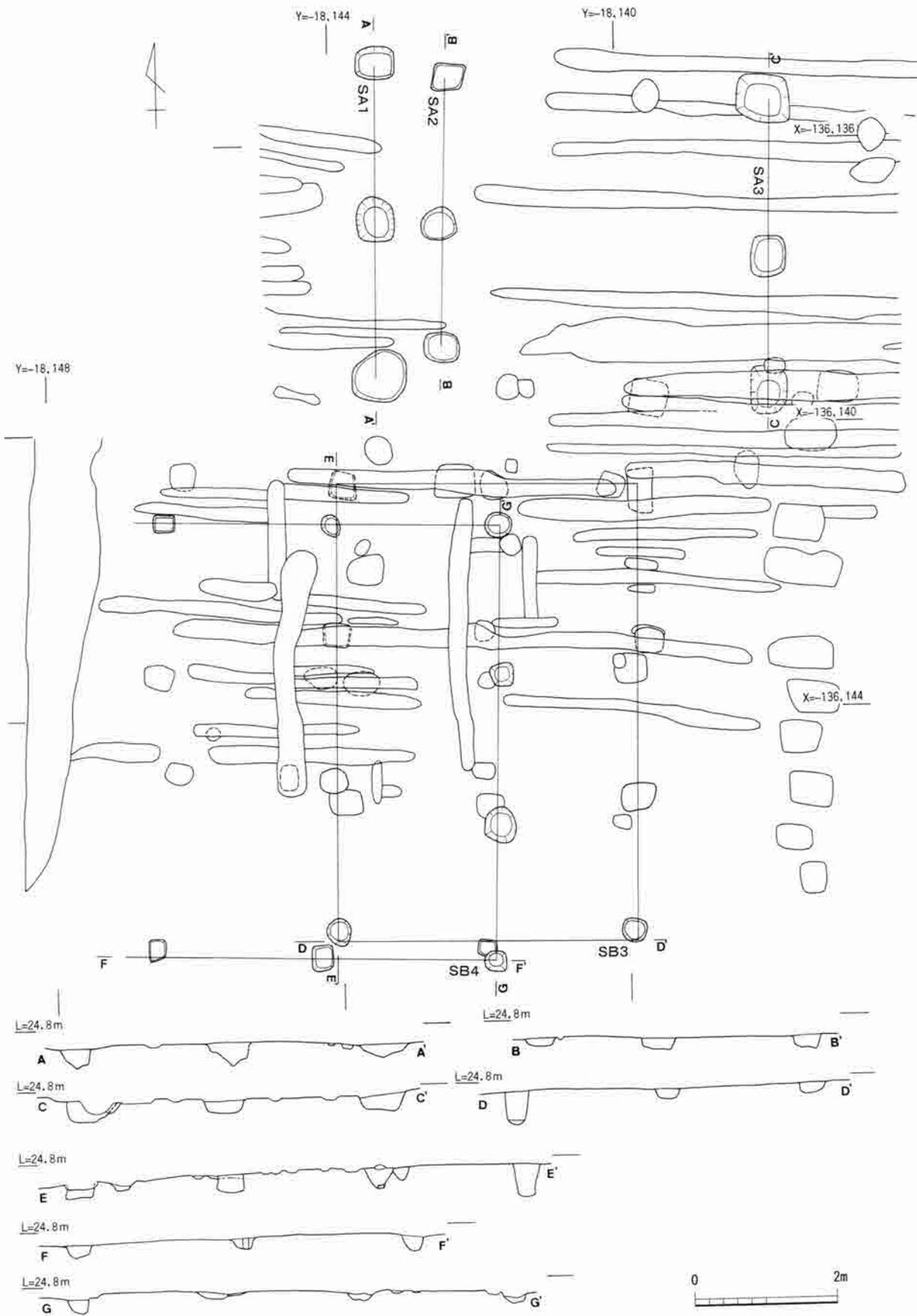
井戸 S E 356(第156図) 直径約2.9mの井戸である。石組み井戸で、底には水溜の結桶が据えられていた。

結桶は長さ約52cmの板材を13枚組み合わせたもので、土圧によってやや変形していた。結桶の上には円礫による石組みが4段程度残っており、上部の石組みは崩れていた。崩れた石組みの上部には粘土やシルトをブロック状に含む層が堆積していることから、井戸は使われなくなった後、一気に埋め戻されたことがわかる。

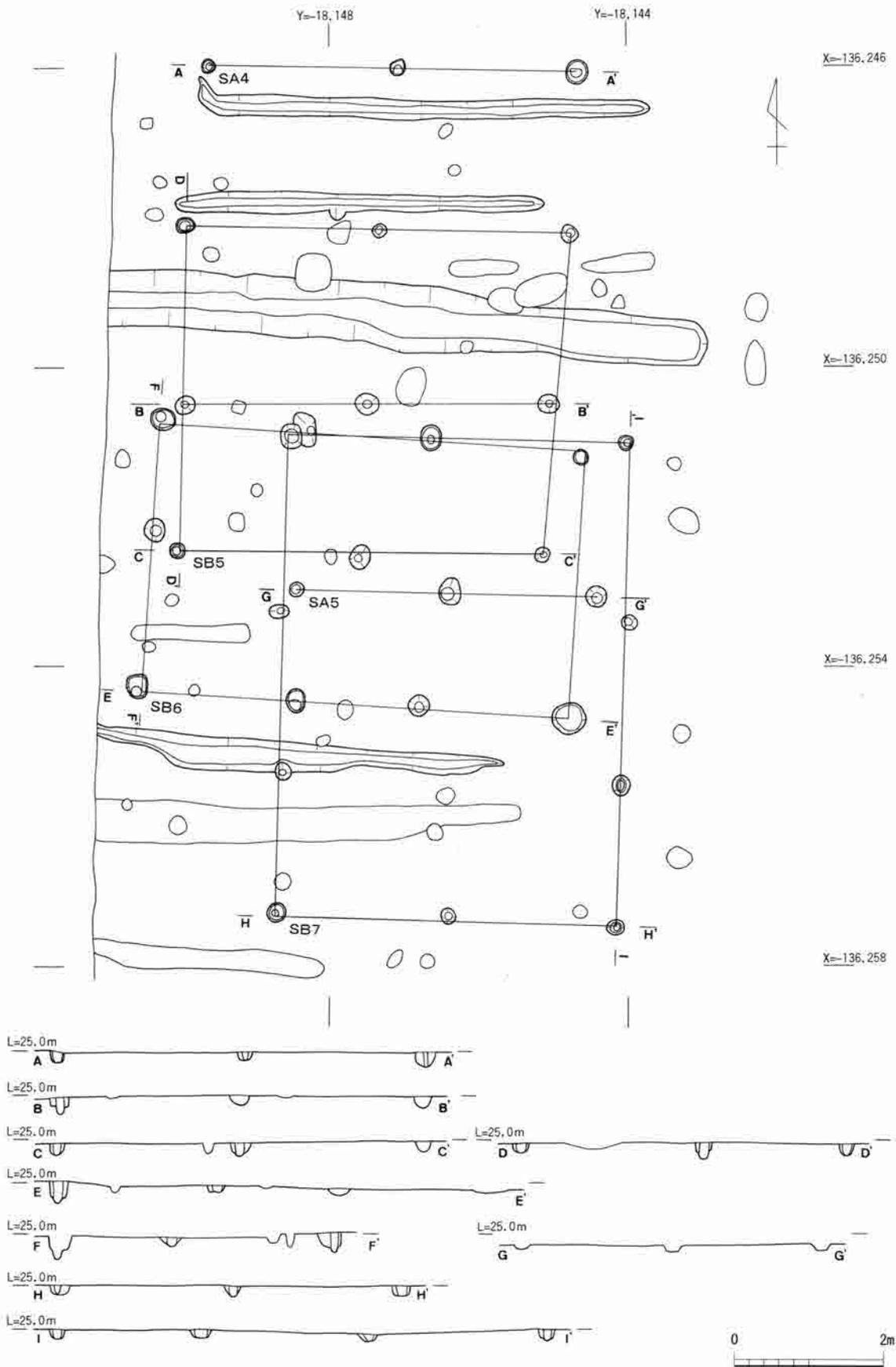
埋め戻された跡にできた浅い窪地には13世紀末～14世紀初頭頃の土器が捨てられていた。埋め戻しに使った土の中からもほぼ同じ時代の土器が出土しているので、この頃に埋められたものと考えられる。崩落した石材よりも下位からはやや古い13世紀後半頃の瓦器碗が出土しており、井戸機能時の遺物と考えられる。

石組みを検出した段階で湧水が激しくなり崩落の危険があったために掘形を完掘することはできなかった。

井戸 S E 458 坪境溝の北西部で検出した直径約3.3mと推定される井戸である。調査区西端で検出したために、崩落の危険性が高く、完掘できなかった。重機による断ち割り、井戸底に井



第153図 掘立柱建物跡SB3・4、柵SA1～3実測図



第154図 掘立柱建物跡SB 5～7、柵SA 4・5実測図

桁状に組まれた角材を確認したが、掘削と同時に壁が崩落する状態で実測はできなかった。

### 3) 溝

**坪境溝群(第157図)** 調査区北部で検出した東西方向の溝群である。耕作溝群とは規模の異なる大きな溝が、何回もほぼ同じ位置で掘り返されている。この位置は、調査地周辺に残る相楽郡条里遺構の坪境に当たり、現在も小字の境界となっている。また、木津川上流浄化センター建設工事が始まるまでは、畑の境界線にもなっていた。

検出された溝群のうち南端のものをS D215とした。S D215 aはS D215の上層部分で、幅は東端で約2.2mを測るが、中央部から西では幅1.2mを測る。埋土は灰青色系の粘質土で、最下部の一部に緑灰色系の微砂が堆積している。S D215 bはS D215 aに切られているために幅は不明である。埋土は灰青色微砂である。S D216はS D215の北側に平行して検出した。S D215に後出すると思われる。埋土は灰青色微砂である。S D216の北側にも、坪境溝の残欠と思われる溝状遺構を断片的に検出した。わずかに残った断面の観察によれば、坪境溝は南から北に向かって移動している可能性が指摘できる。

S D215からは土師器皿、瓦器椀、土師質羽釜、瓦質羽釜・鍋・火鉢、東播系須恵器甕・鉢、常滑焼甕、尾張産の鉢など多数の遺物が出土した。

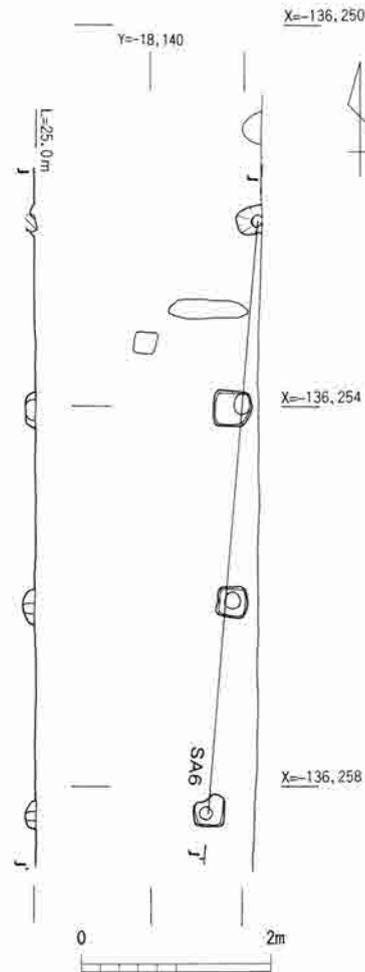
**溝S D450** 調査区南端で検出した東西方向の溝である。北の坪境溝群から1坪分南に位置するので坪境溝の一部である可能性があるが、調査区の南端に近く、また、工事による攪乱などがあって明確にすることはできなかった。黒色土器B類椀、東播系須恵器鉢、産地不明の陶器すり鉢などが出土している。

**溝S D125・130** 調査区中央部で検出した平行する東西方向の溝である。幅約0.4~0.6mを測る。深さは0.1m未満しか残っていなかった。それぞれ、調査区西端から約6mと約2m付近で終わる。いずれも出土遺物はなく、時期を特定することはできないが、幅がやや広く、坪を南北に二等分する位置に掘られていることから、条里型地割の区画溝と思われる。

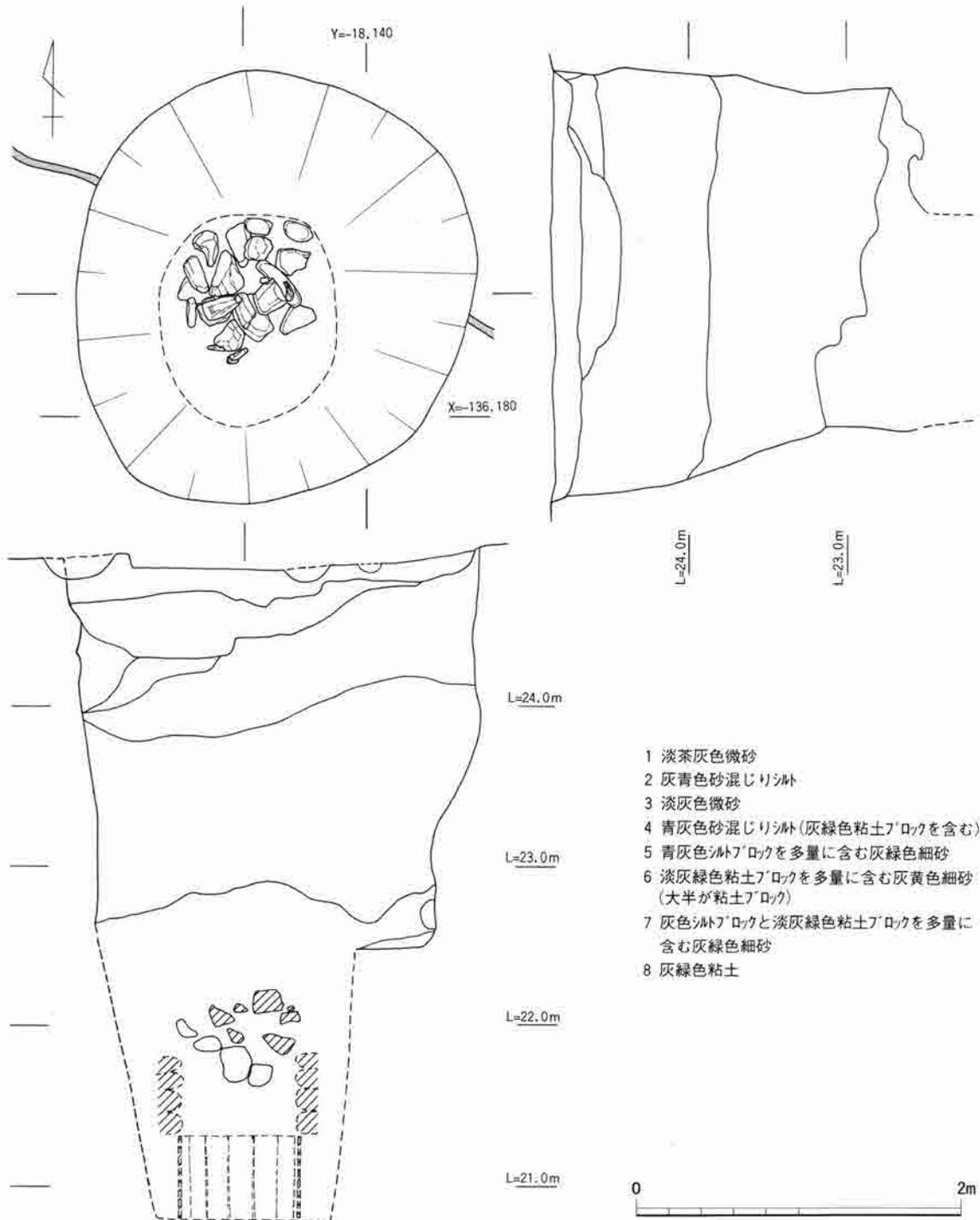
**溝S D427** 調査区中央部で検出した東西溝である。幅約0.9m、深さ約0.2mを測る。埋土は淡灰色細砂質土で、土師器皿、瓦器椀などが出土した。S D125から約1/10坪分南に位置する。

**溝S D525** 坪境溝群の南で検出した東西方向の溝である。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。土師器、瓦器椀、東播系須恵器鉢のほか、尾張産の鉢の小片が出土している。13世紀末ごろの遺構である。S D125との距離が約1/2坪分に当たることから、坪内の北を限る溝と考えられる。

**溝S D531** 坪境溝群の南側で検出した東西方向の溝である。幅は、東端で約0.6mを測るが、



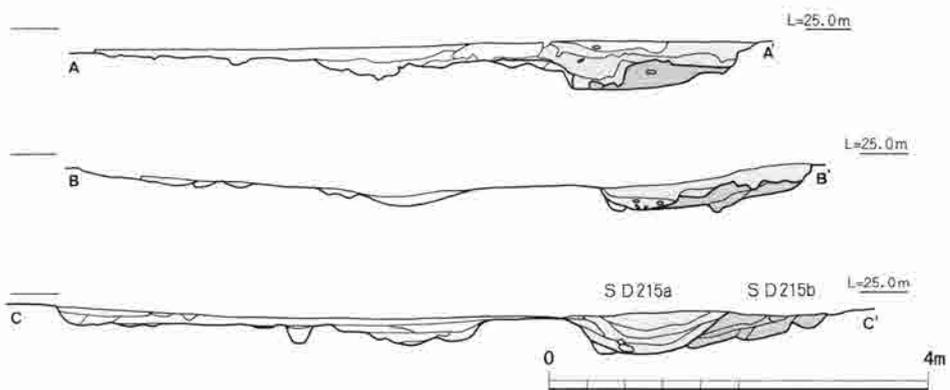
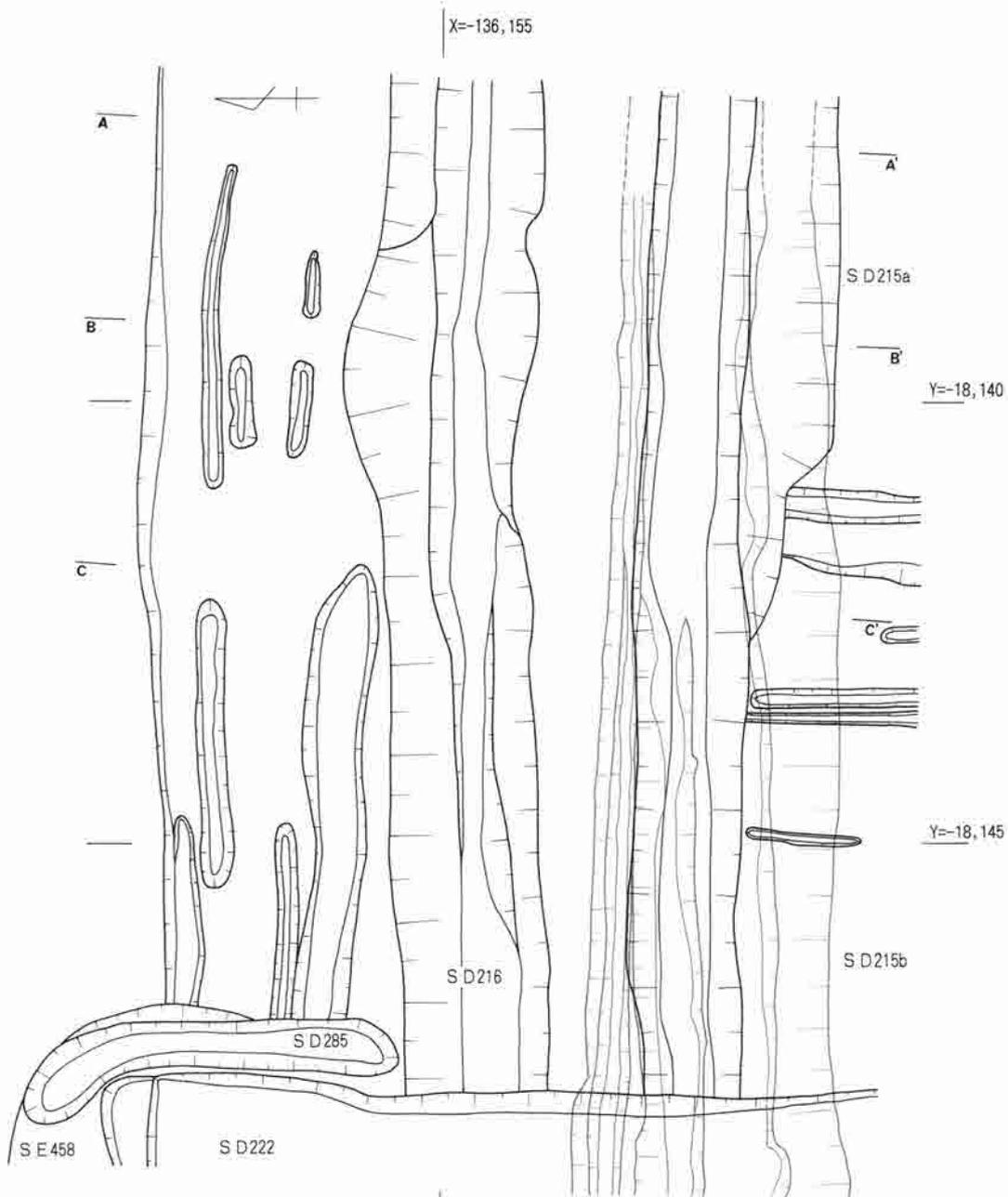
第155図 柵S A 6実測図



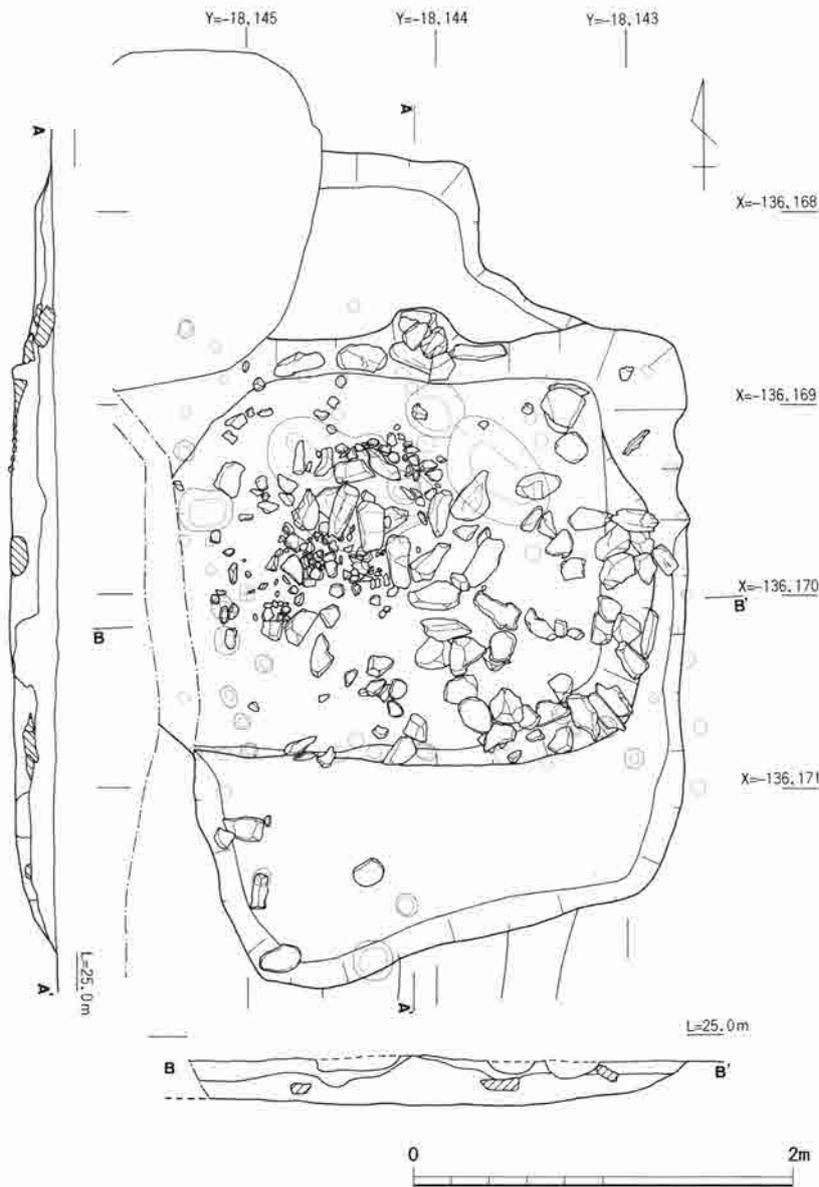
第156図 井戸 S E 356実測図

西端では細くなり、調査区中央部付近で終わる。東端付近の一部が幅約1mに広がり、この部分から土師器皿、瓦器椀、土師質羽釜、瓦質羽釜などが出土した。いずれも底面から浮いた状態で出土しており、埋没の際に投棄されたものとみられる。

溝 S D 570 坪境溝群の南で検出した東西方向の溝である。幅約0.4mを測る。深さは0.1m未満である。S D 531のほぼ延長線上に位置し、出土遺物の時期にも大差がないので、同一の溝であるかもしれない。



第157図 坪境溝群実測図



第158図 土坑S K 508実測図

**溝S D 538** 坪境溝群の南で検出した南北方向の溝である。幅約0.4～0.6 m、深さ約0.1mを測る。北端はS D570に切られるが、それより北には続かない。

**溝S D 340** 坪境溝群の南で検出した南北方向の溝で、南端部は東に曲がり、調査区外に続く。幅約2.2m、深さ約0.1mを測る。埋土は灰色砂質土で、瓦質土器羽釜・火鉢などが出土した。

**耕作溝群** 調査区の北部と南部では、東西および南北方向の耕作溝群を多数検出した。調査区中央部の耕作溝がみられない範囲は、同時代には土を盛り上げて島島としていた部分である。島島の上面は、前述のように、

すでに地盤改良工事によって削られていた。

坪境溝群の北側では東西方向の溝が多数検出された。耕作溝が検出された範囲はS D1001～1003の範囲にはほぼ限られているが、これは、S D1001～1003の粘質の埋土の上に掘られた部分のみが残り、砂質のベースに掘られた部分は残らなかったもので、本来は、全面に耕作溝が展開したものと考えられる。

これらの耕作溝の大半は建物跡の柱穴などのピットを切っているが、東でやや南に振る方向のものにはピットに先行するものがある。13世紀前半までの瓦器碗を出土していることから、耕作溝の多くはこの頃の遺構とみられるが、出土遺物には埴輪や黒色土器など、遺構の時期よりも古いものが多くみられる。これは、先行する建物群などの遺構に伴っていたものが、耕作によって攪乱されたものと考えられる。

坪境溝群以南、S D427以北では南北方向の溝が多数検出された。これらの耕作溝群からは14

世紀前半の遺物が出土している。耕作溝がS E 356を切っていることから、これらが坪境溝以北の耕作溝よりも新しい時期のものであることがわかる。

調査区南部では、東西方向の多数の溝とそれらを切る南北方向の溝が数条検出された。東西方向の溝の出土遺物は10～15世紀代の遺物を含むが大半が13世紀後半以降のものである。古代の遺物は、本来は、この付近に展開する掘立柱建物跡群に伴うもので、耕作によって溝内に取り込まれたもので、耕作溝群の時期は13世紀後半～15世紀と考えられる。南北方向の溝は10mの間に5条の溝がほぼ等間隔に並ぶ一群と、それらよりもやや広い間隔かと思われるものがある。前者は、北半部では北でやや東に振る方向であるが、南半部はやや湾曲して真南北もしくは北でわずかに西に振る方向になっている。後者は途切れている部分が多くわかりにくい、南端から北端まで直線的である。出土遺物の様相は東西方向の溝と大差ないが、切り合いの関係から東西方向の溝よりも新しいことがわかる。

#### 4) 土坑

土坑 S K 508 (第159図) 南北4.4mを測る土坑である。西端が調査区外にのびるが、東西は3m程度と推定される。南北方向の断面図に示すように中央部が1段下がっており、この部分で礫を多数検出した。礫は下段の土坑の斜面部では並べられているようにみられるところがある。20～30cm大の礫を取り除くと5cm大の礫が敷かれたような部分が現れる。下段の土坑の斜面に沿って多数の杭の痕跡を検出した。杭と礫によって基礎を固めた蔵のような施設と考えられる。13世紀後葉の遺構である。

土坑 S K 526 坪境溝の南側で検出した土坑である。南北2.2m、東西1.5m以上を測る。東端が調査区外にのびるため全容は不明だが、平面形は方形を呈するとみられる。底面はほぼ平坦で、深さは約0.3mを測る。埋土は茶灰色砂質土で、焼土塊を多く含む。瓦器椀、土師器皿などの出土遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。また、縄文土器の小片が出土している。

土坑 S K 527 S K 526の北側にあり、S K 526に切られる形で検出したため全容は不明だが、S K 526と同様の形状であったとみられる。S K 526よりもやや古い瓦器椀などのほか、縄文土器が出土している。

#### 5) 地震痕跡

坪境溝の南側で噴砂を検出した。幅約0.05mを測る。走向は、調査区東端から約2.3mはN48°W、それより西はN70°Wである。砂脈はL=23.2m付近から25.1m付近まで約1.9m上昇している。縄文時代の包含層を切り、14世紀前半のS E 356に切られている。詳細は、附編掲載の寒川旭氏の玉稿に詳しい。

(森島康雄)

## 4. 出土遺物

### (1) 土器類

#### 1) 弥生時代(第159～165図)

溝SD1001出土土器 同遺構出土遺物には、上層の一括性の高い弥生時代後期に属する一群(1～61)と下層溝に伴う少量の弥生時代前期末に属する細片資料(64・65)、および、上層に混入したと判断される縄文土器(62・63)が認められる。

上層資料を構成する器種は、壺・甕・高杯・器台・鉢・手焙形土器・蓋がある。なお、口縁や脚部片をカウントした結果、SD1001出土土器の個体数および組成は、甕78・壺14・鉢3・近江系鉢(甕)11・手焙形土器1・高杯16・器台7・蓋1・高杯もしくは器台の脚11個体である。

壺には、広口壺(1～4)・細頸壺(5・6)・台付壺(7)・直口壺(8)・短頸壺(9)・無頸壺(10)が存在する。1は扁球形の体部に頸部から短く外反する口縁をもつ。口縁端部は外方につまみ出す。調整は外面にヘラミガキを施す。2は受け口状口縁をもつ加飾壺である。口縁外面下端に櫛状工具による刺突文を施す。肩部には櫛描直線文と櫛描波状文を施す。調整は体部外面上半は横方向、下半は縦方向のヘラミガキを行う。3は短い頸部に直線的に広がる口縁部をもつ。頸部下端には刺突文を施す。暗茶褐色の色調や胎土は、SD1001出土土器のなかでは異質であり搬入品と考える。4は口縁外端面が面をなす。5は扁球形の体部に長く直線的な口頸部をもつ。体部と頸部の境目に断面が鈍い三角形を呈する突帯を付す。調整はていねいなヘラミガキにより仕上げられる精製品である。6は口頸部のみが遺存する。7はやや粗雑なつくりである。口縁部および台部の大半を欠くため詳細は不明である。8は大型の短頸壺である。短く直立する口頸部に下方に最大径をもつ体部をもつ。焼成時の焼けひずみのため底部が変形している。9は小型品であるが内外面ともハケ調整を主体とし精製品とは言い難い。10は無頸壺としたが、いわゆるワイングラス状の鉢もしくは高杯の杯部である可能性がある。

手焙形土器(11)は1点のみ確認された。細片資料であり、図上復原を行っている。受け口状口縁を有する鉢に覆部を接合するタイプであり、耳状飾りを付す。鉢部体部上半には櫛描直線文、および櫛状工具による刺突文を施す。鉢部の調整は突帯張り付け以前に外面ハケ調整を行い、最終的にナデにより仕上げている。内面にはハケが認められる。覆部外面はハケ調整を行う。このハケ原体は鉢部に使用されるものに比して細かいものが用いられている。覆部内面には、指頭圧痕が観察される。なお、使用状況を示すようなススの付着や、二次的な被熱痕跡などは認められない。

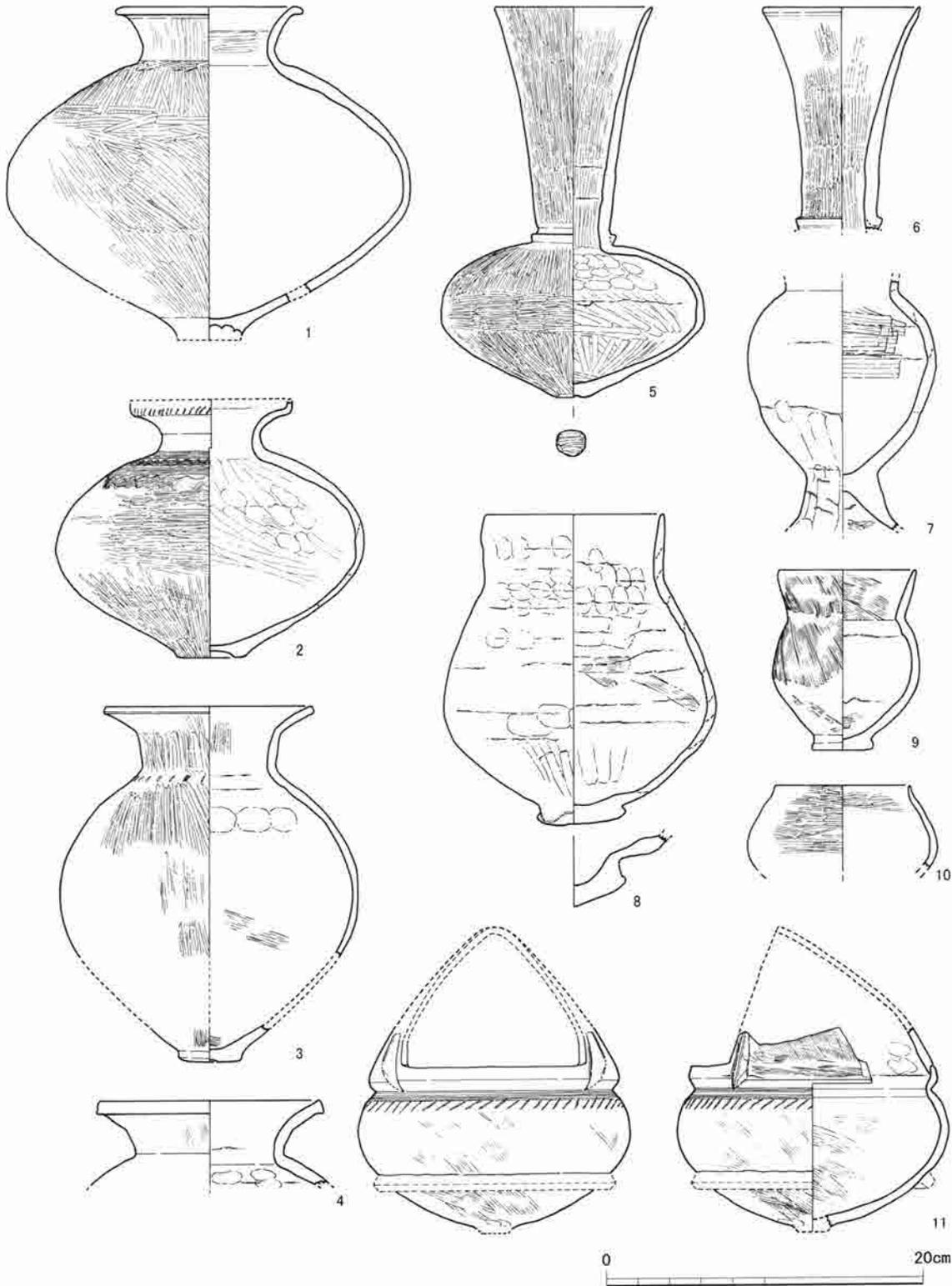
甕は24個体を図示した。大型・中型・小型の3種が認められる。加飾の有無から2分類し、さらに外面の調整技法、口縁形態により分類が可能である。

12～26は「く」の字状口縁をもつ。12～21は外面最終調整を基本的にタタキで仕上げるものである。分割成形を行うものが大部分であり、口縁は叩き出し技法により擬口縁を作り出し、粘土帯をつぎ足して整形を行う。12・13は口縁端部を丸く収める。14・15は小形品である。16・17は内面の調整をヘラケズリにより行う。18～21は口縁端部をわずかに肥厚させ、端部外面を面をもたして仕上げる。底部の判明するものは、いずれもわずかに突出する平底である。体部下半のみの35も同様の甕である可能性が高い。

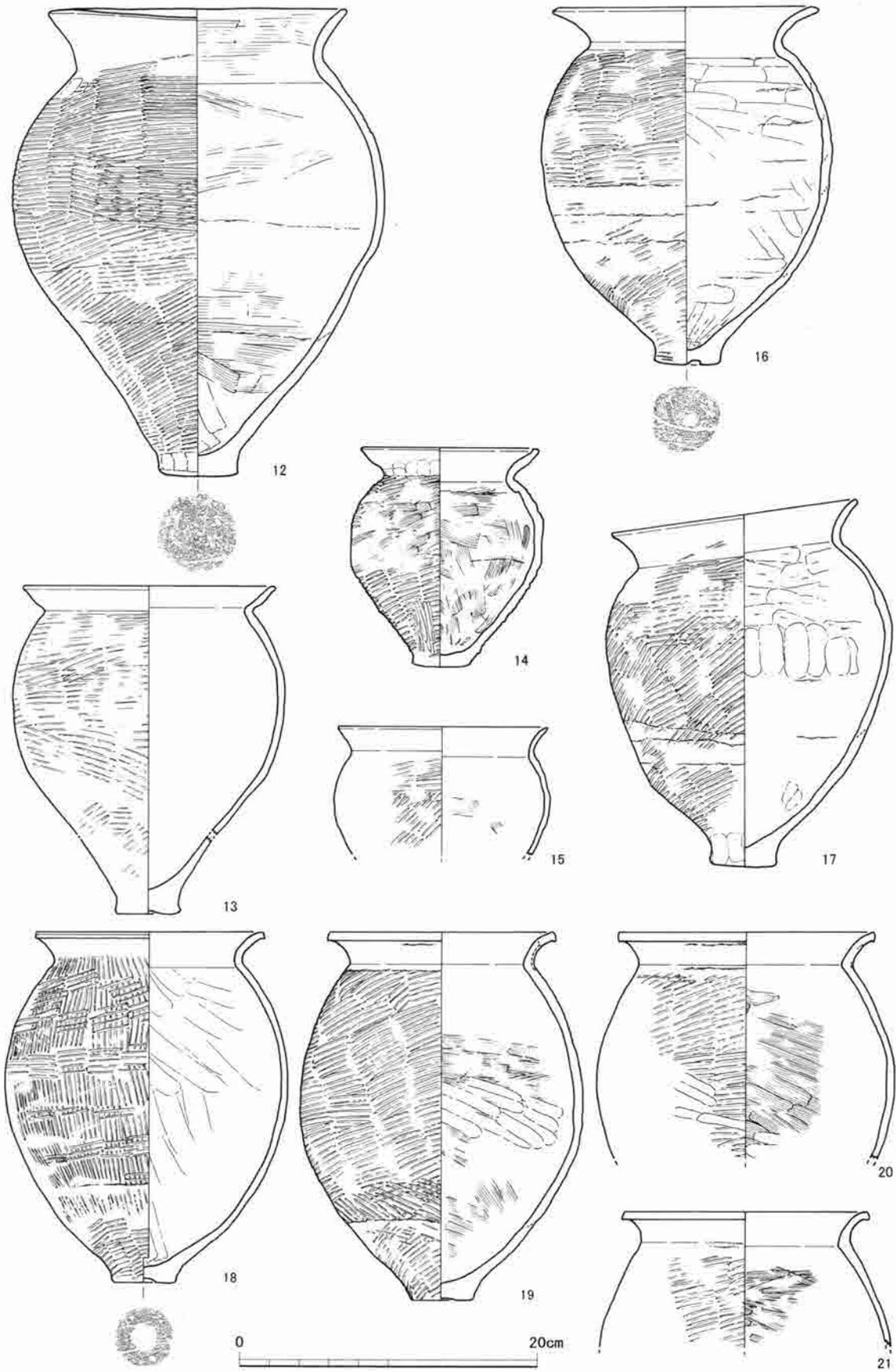
22～25は外面最終調整をハケで仕上げるものである。総じてタタキで仕上げる甕に比して、器

壁が薄い。口縁端部は丸く収める。22は一次調整にタタキを施し、その後、最終調整にハケを施す。25は分割整形の痕跡が明瞭に観察できる。内面はハケ調整のものが多いが、23はナデにより最終調整を行う。唯一全容の判明する24の底部は突出しない平底を呈する。

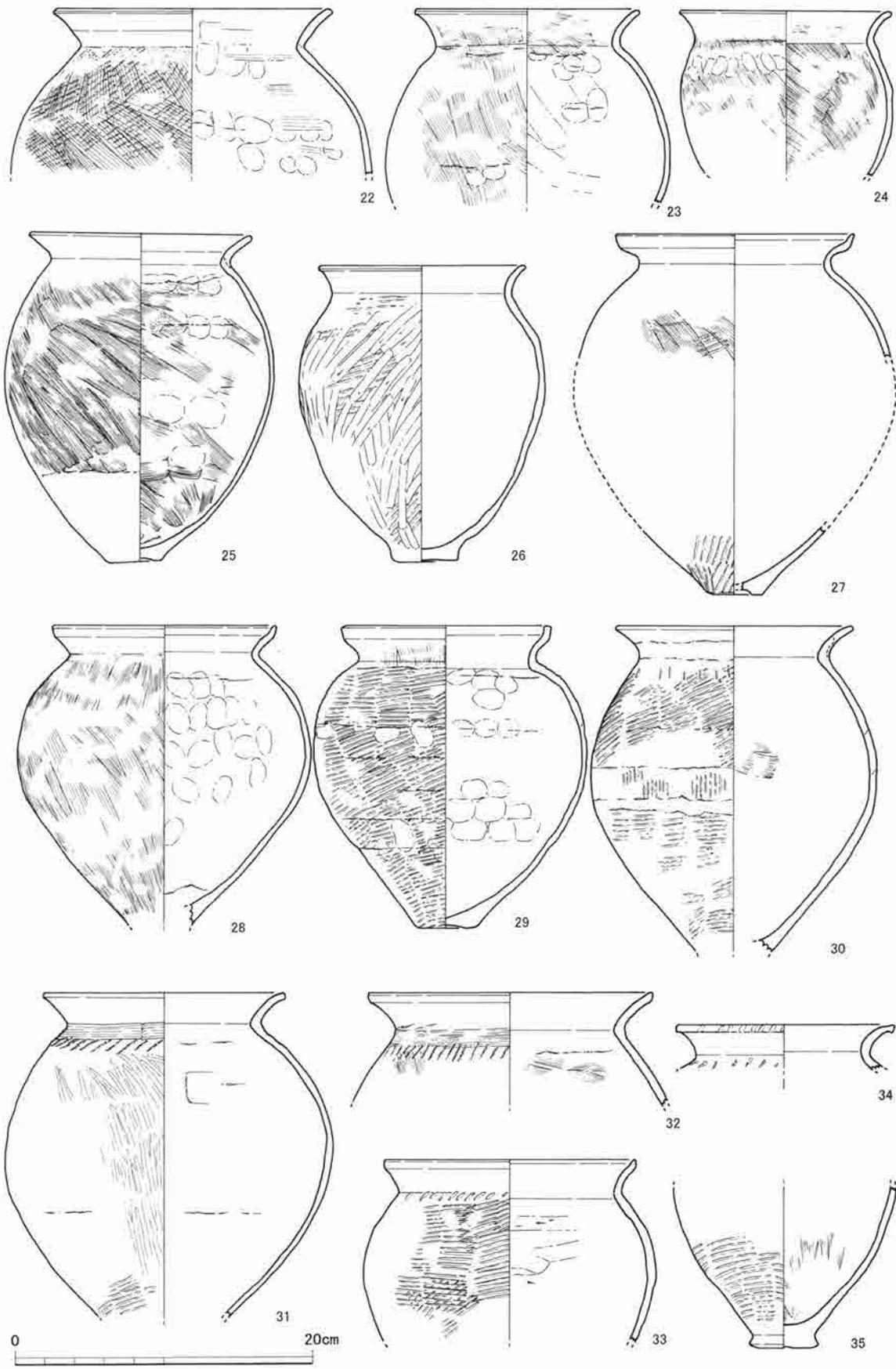
26は外面タタキの後、板状工具によりナデ上げることにより最終調整を行う。底部はわずかに



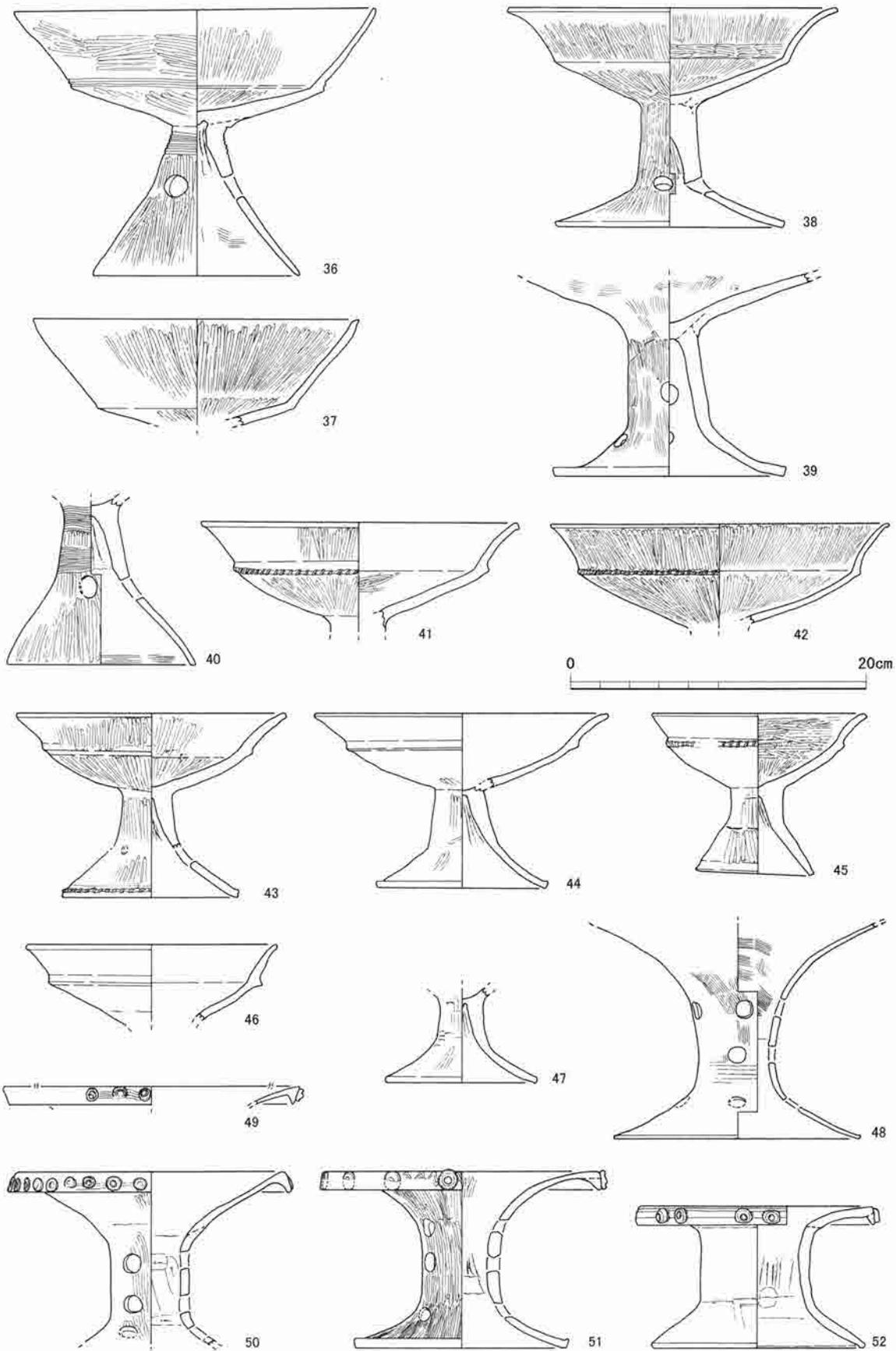
第159図 出土遺物実測図(1)



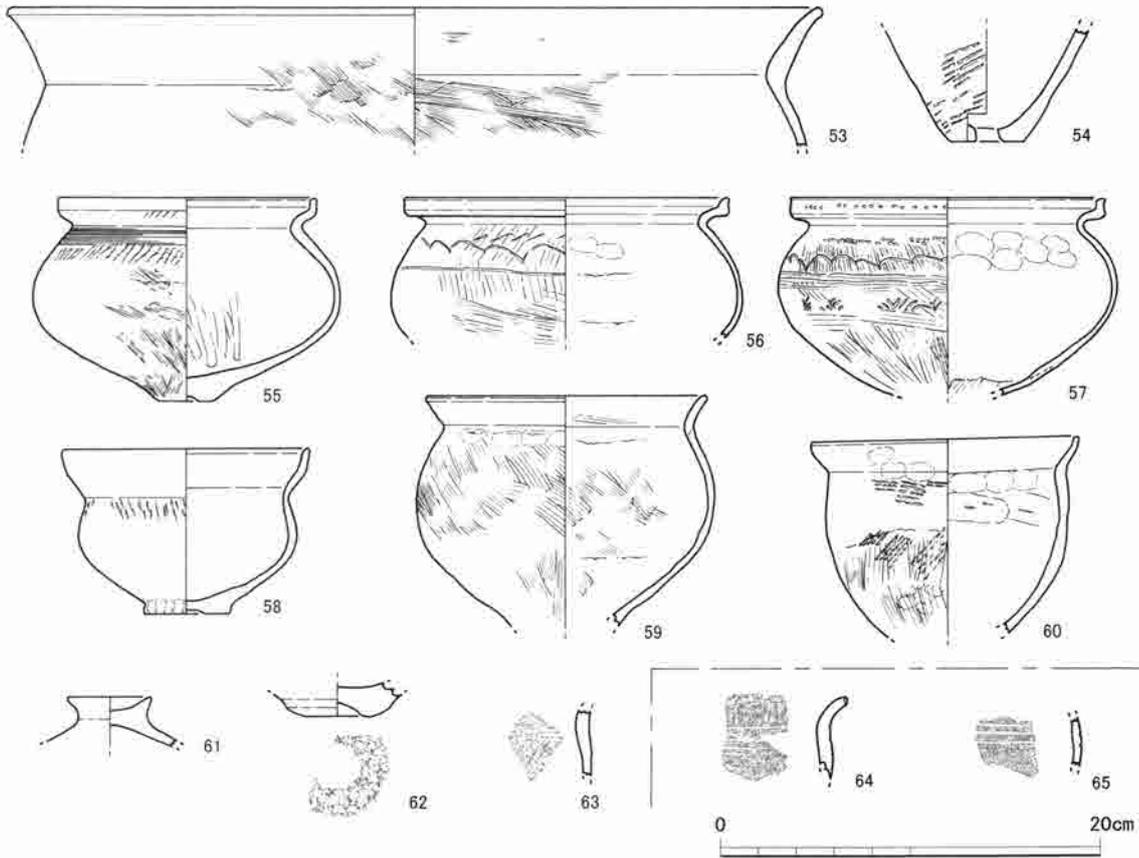
第160図 出土遺物実測図(2)



第161図 出土遺物実測図(3)



第162図 出土遺物実測図(4)



第163図 出土遺物実測図(5)

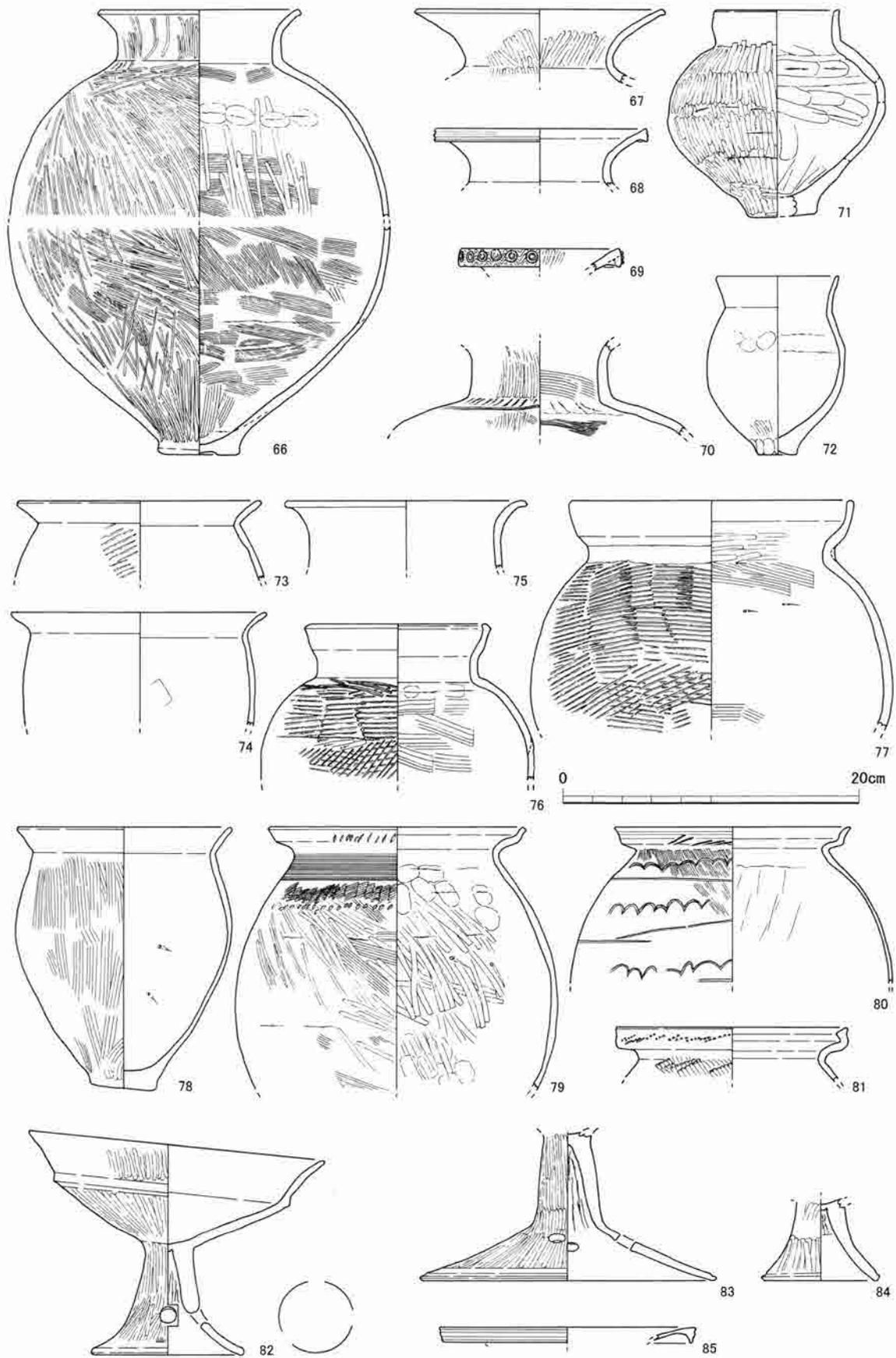
突出する平底である。

27～29は受け口状口縁をもつ甕である。27はタタキの後ハケ調整を、28も最終調整はハケにより行う。29はタタキを最終調整としている。

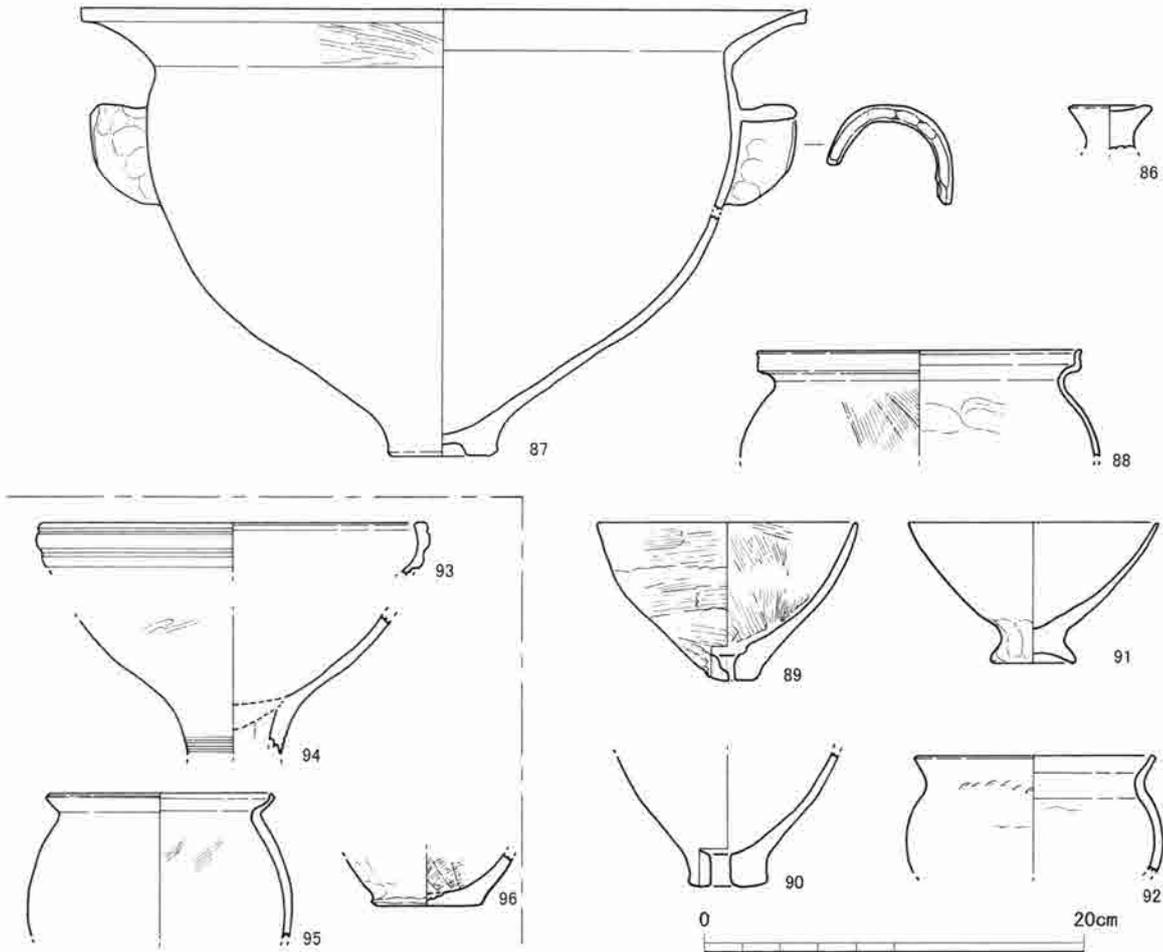
30～34は加飾された甕である。受け口状口縁を呈するものはないが、33は口縁端部をやや上方へつまみあげている。31・32は頸部の櫛描直線文とその下方に配された櫛描列点文により加飾される。31はタタキの後、粗いヘラミガキで外面を最終調整する。32はハケにより調整を行う。33・34は肩部上端に櫛描列点文を施す。34では面をなす口縁外端面にも刻目を施している。

高杯には東海系高杯(36・37・40)と畿内系高杯と考えられるもの(38・39・41～46)が存在する。36は深い鉢状の杯部をもち、ゆるやかに外反して開く脚部をもつ。口径が杯部の深さを上回る。杯部の口縁下端および脚部上半に櫛描直線文を施す。円形透かし孔が3方に認められる。37は杯部、40は脚部のみが遺存する。38は大きく外反する口縁をもつ皿状杯部に、中実の脚柱部を付す。39・41～46は口縁下端に稜を作り出す。脚部はゆるやかに広がる。41・42・45は杯部の稜に、46は脚端部に刻目を施す。45はほかに比して小型品でありつくりもやや粗雑である。39は杯部を欠くが、中空の脚柱部に一部二段構成となる円形透かしを施す。47は45同様、やや小型の高杯脚部とみられる。

器台は5個体を図示した。48は受け部と胴部の屈曲点が明瞭でなく。器壁がきわめて薄い。同一個体の可能性のある口縁破片からみて垂下する口縁に円形浮文をもつものとする。50～52も



第164図 出土遺物実測図(6)



第165図 出土遺物実測図(7)

垂下する口縁部に、円形浮文および櫛描波状文もしくは直線文で加飾する。52は太く短い胴部をもち器高も低い。

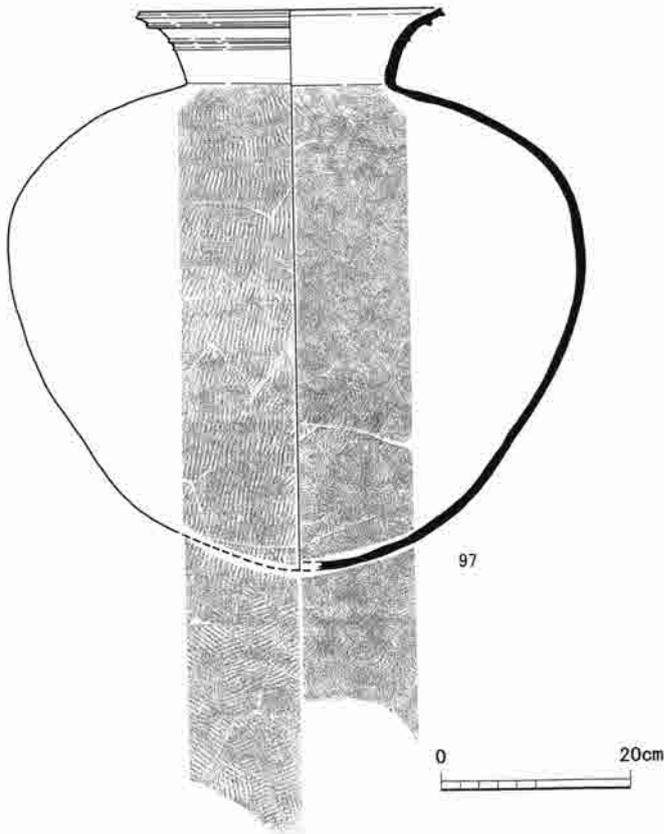
鉢には大型鉢(53)・近江系鉢(55~57)・近江系鉢の模倣品と考えられるもの(58)・短く外反する口縁をもつもの(59)・わずかに内湾する口縁をもつもの(60)がみられる。近江系と考えられるものはすべて同一の特徴的な胎土をもち搬入品と考える。54は有孔鉢として分類したが、穿孔を施した甕底部の可能性も否定できない。穿孔は焼成前に行われ、外面にタタキが観察される。

61は蓋のつまみ部分と思われる個体である。

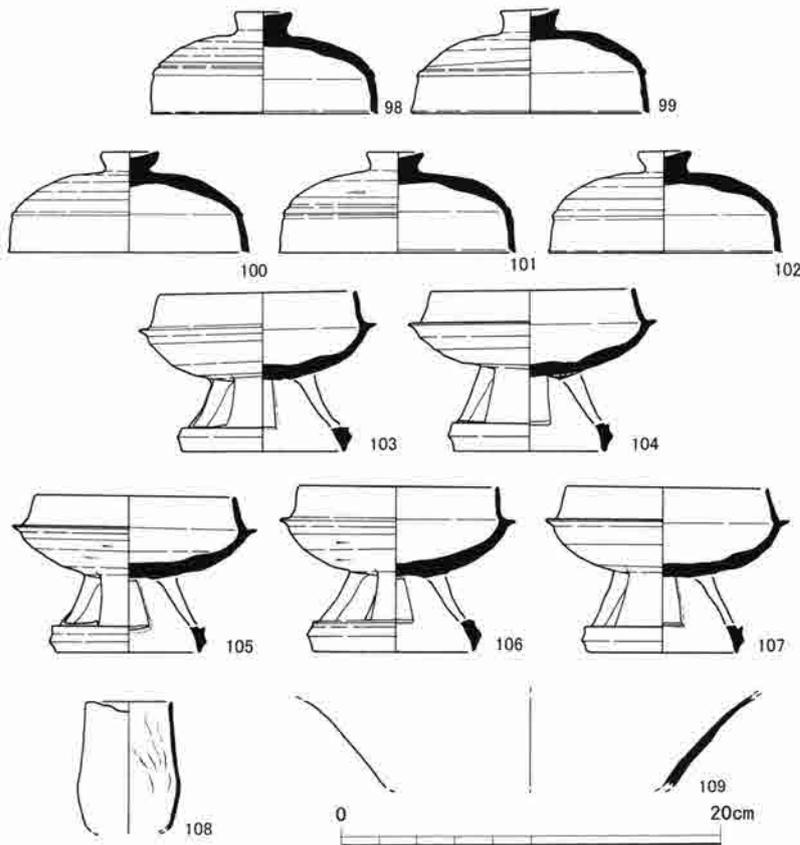
62・63は縄文土器である。62は縄文晩期の鉢底部、63は体部の細片資料である。いずれも混入品である。

64・65は溝S D1001に先行する溝に伴う資料である。64は甕の口縁端部である。口縁部はわずかに外反させ端部は丸く収める。口縁端面には刻目を施し、体部にはヘラ描き沈線を施文する。65はヘラ描き沈線を施文する。いずれも弥生時代前期末頃の資料と考える。

溝S D1002出土土器 S D1002出土土器には弥生後期に属する上層の一群(66~92)と、先行する溝に伴う弥生中期後半に属する一群(93~96)が存在する。S D1001上層出土土器に比して出土量が少なく、一括性という点においてはやや低いものと考ええる。



第166図 出土遺物実測図(8)



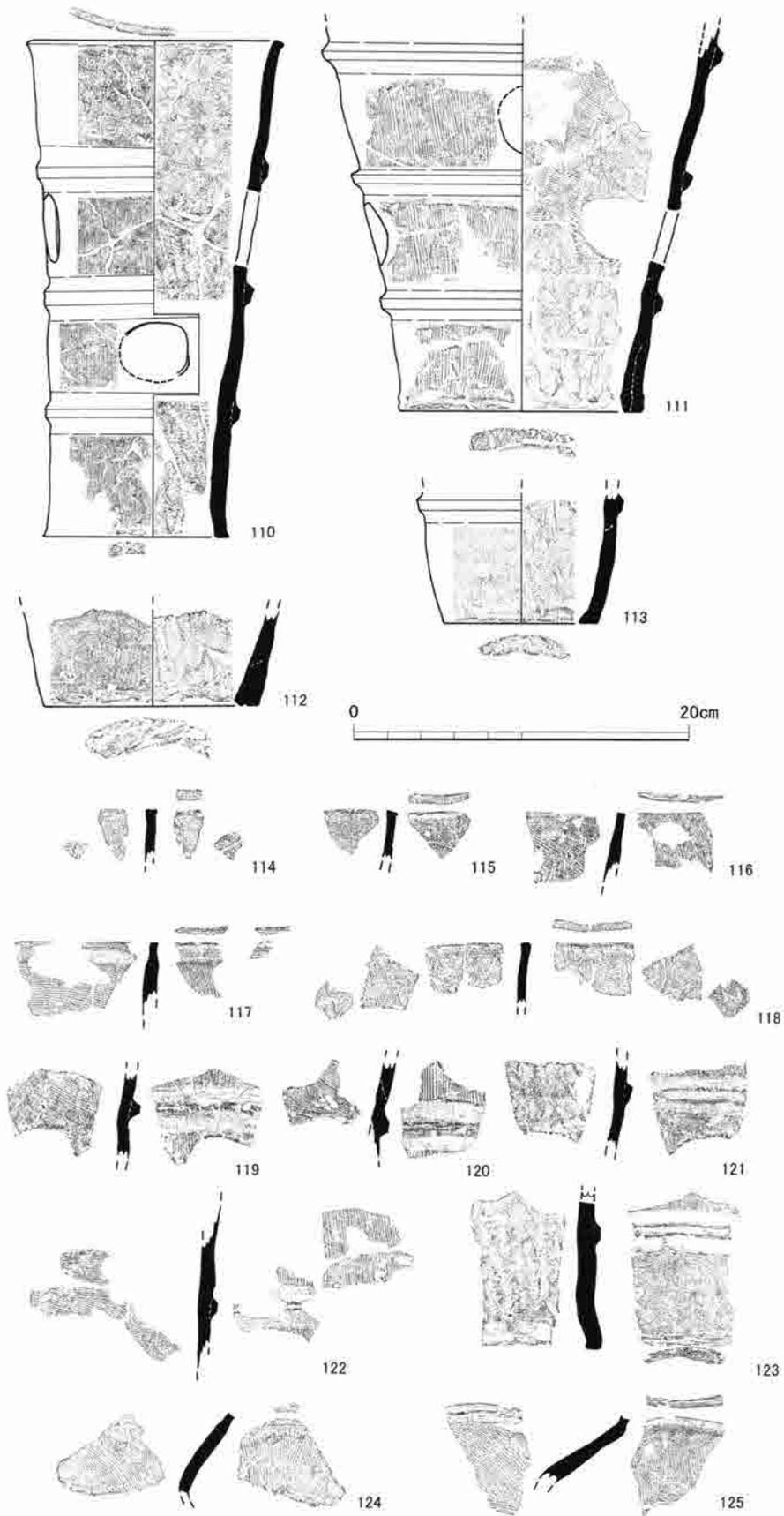
第167図 出土遺物実測図(9)

上層出土土器を構成する器種は壺・甕・高杯・器台・鉢である。SD1001と同様の方法でカウントを行った結果、器種の構成は甕51・壺13・鉢7・近江系鉢(甕)11・高杯7・器台5である。

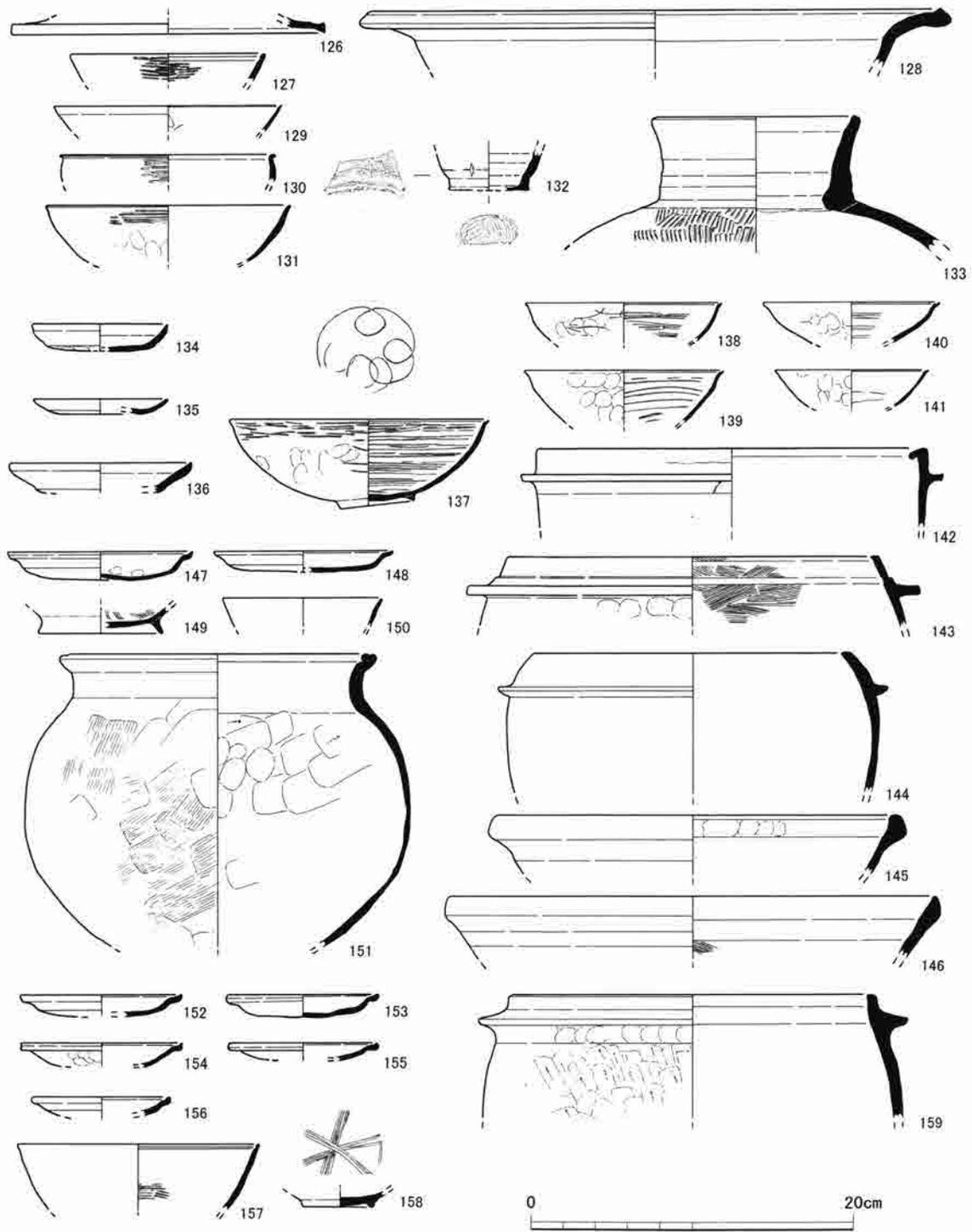
壺には広口壺(66~70)・直口壺(71)・短頸壺(72)が認められる。66は唯一、完形として復原できた個体である。短い頸部から直線的に外方にのびる口縁部をもつ。底部はわずかに突出する平底である。67は大きく外反する口縁部である。68は口縁外側面を拡張し擬凹線を施す。69は口縁部を垂下させ円形浮文と波状文で加飾する小型品である。70は直線的に立ち上がる頸部をもち、体部上端に櫛描刺突文と櫛描直線文を施す。71はやや厚手のつくり

であり、精良な胎土を用いている。72は小型の壺としたが、粗雑なつくり・胎土である。

甕は加飾の有無、外面の調整、口縁形態から分類が可能であるが、全容の判明する個体が78のみである。73は外面にタタキを施し、「く」の字状口縁を有する。74・75も「く」の字状口縁の甕であるが器壁の磨滅が著しく調整不明である。75は頸部と体部の屈曲部が明瞭ではない。76・77はやや内湾する口縁をもつタタキ甕である。78は「く」の字状口縁をもち外面をハケで



第168図 出土遺物実測図(10)



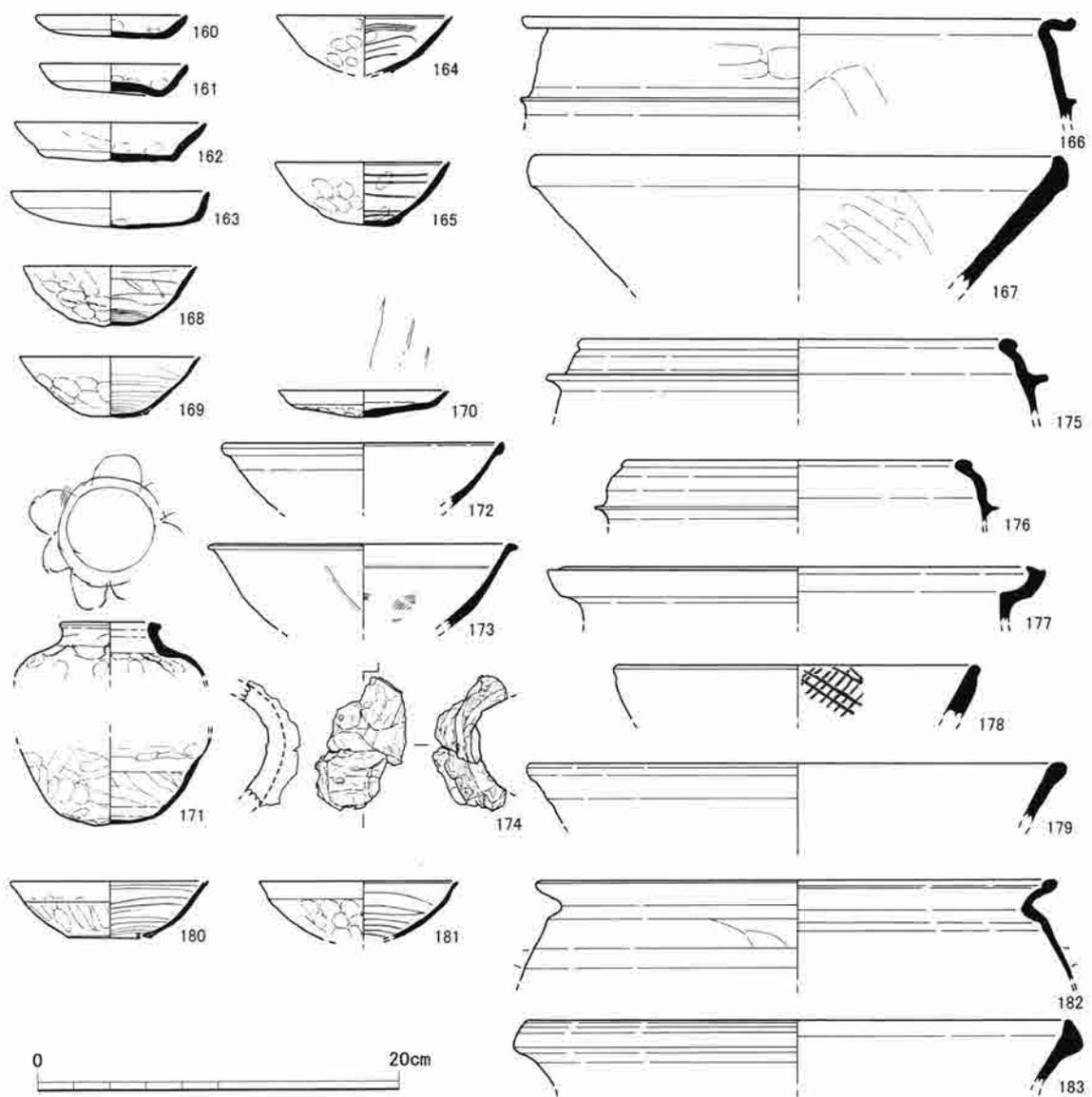
第169図 出土遺物実測図(11)

調整する甕である。79～81は加飾された甕である。いずれも受け口状口縁を有する。

高杯は3個体を図示した。82は皿状杯部に大きく外反する口縁を有する。杯底部と口縁部との境目は稜をなす。脚部は中空でゆるやかに広がる。83は脚柱部から屈曲して大きく広がる脚部である。84は直線的に広がる小型品である。

器台は1個体のみ図示した。85は垂下する口縁に擬凹線を施す。

86は蓋のつまみと考えられる。



第170図 出土遺物実測図(12)

鉢には大型把手付鉢(87)・近江系鉢(88)・有孔鉢(89・90)・台付鉢(91)・やや内湾する口縁をもつ鉢(92)が認められる。92は頸部に刺突文をもつ。

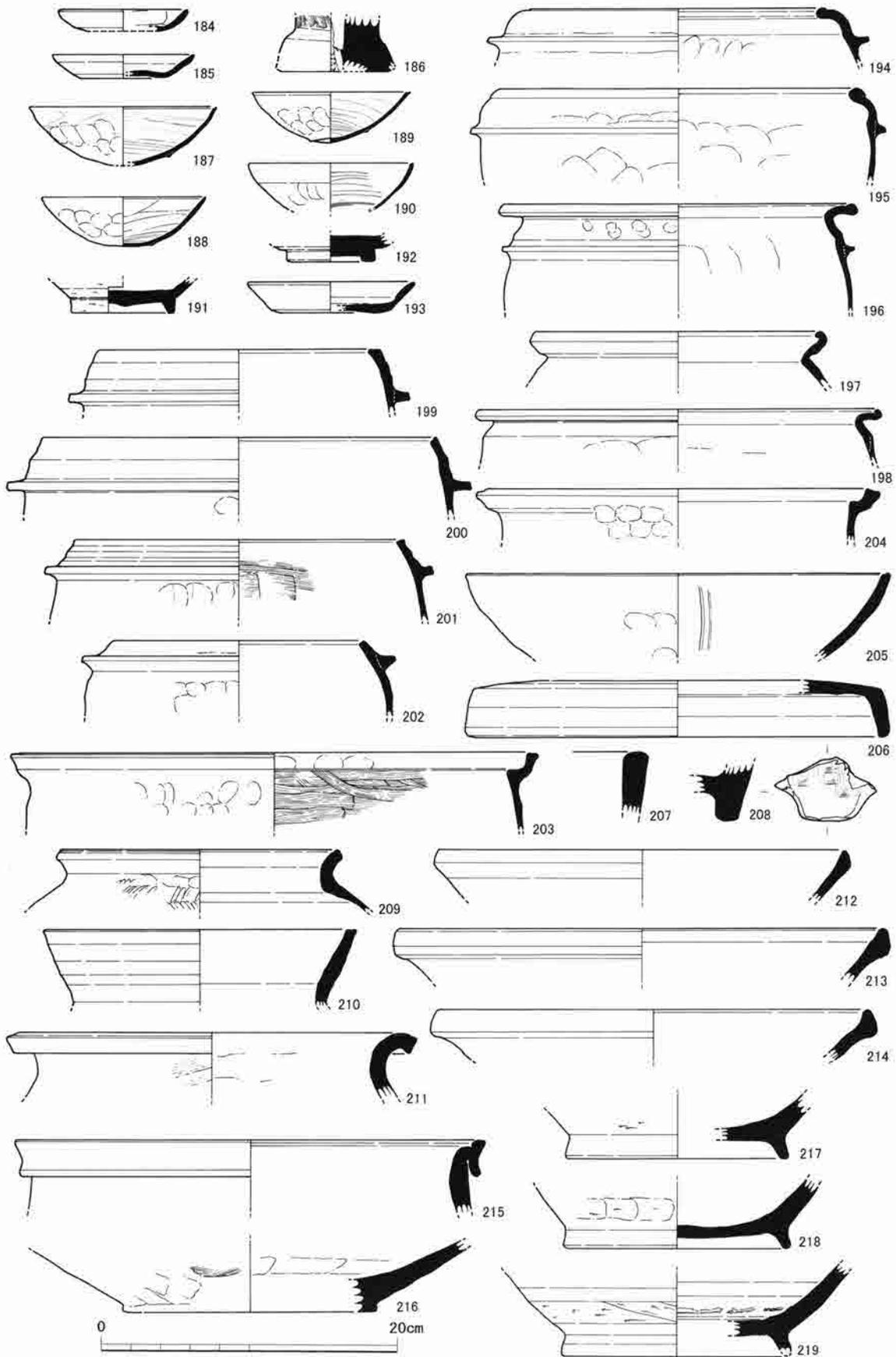
93~96はS D1002に先行する溝に伴う土器である。93・94は同一個体である可能性が高い。凹線文をもつ高杯である。95は口縁端部を上方につまみあげる甕、96は甕底部である。弥生時代中期後半の資料である。

(石崎善久)

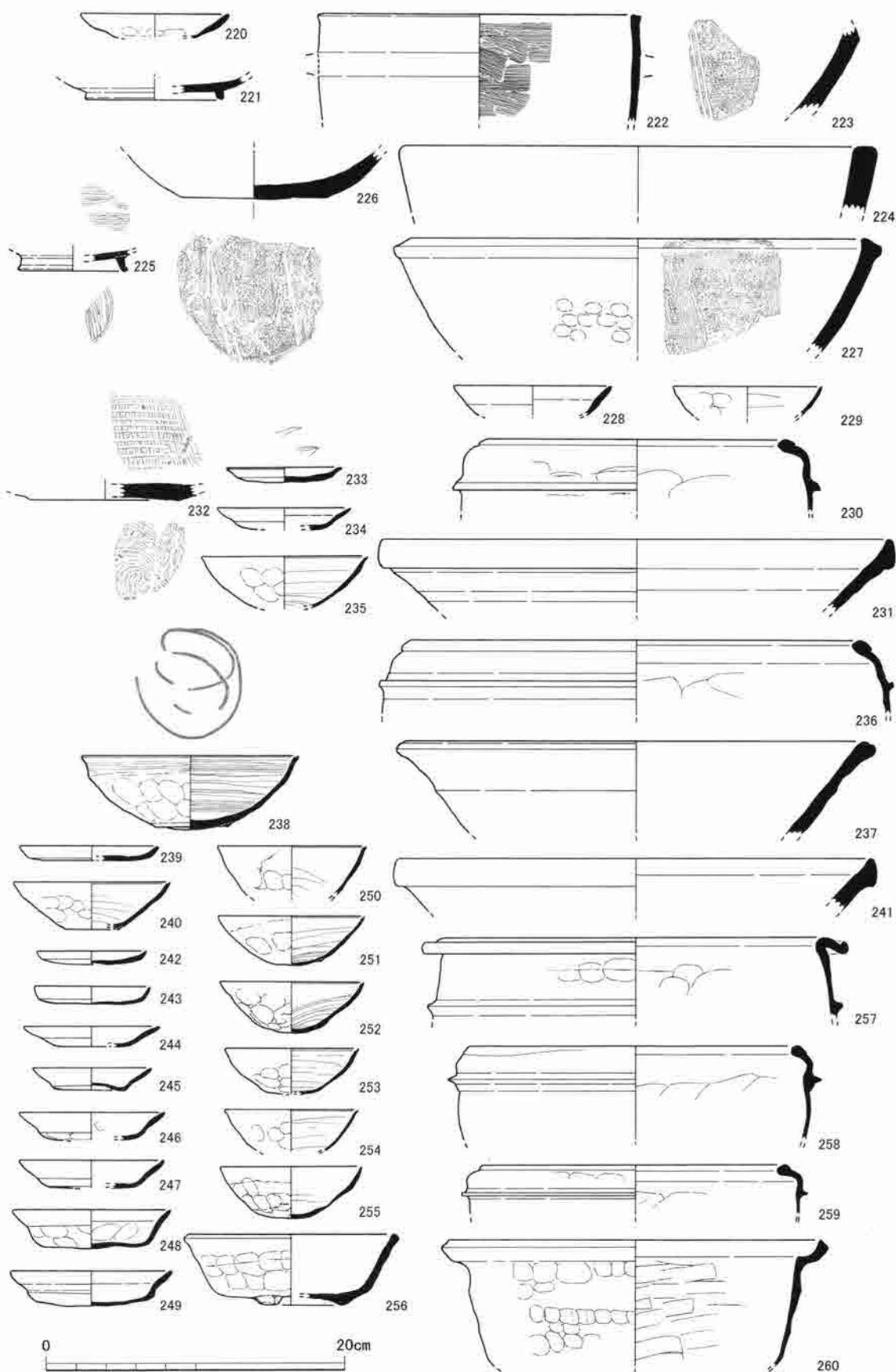
2)古墳時代

97は須恵器甕である。S D1001南西部の1層で出土した。底部を焼成後に打ち欠いている。口縁部には3条のシャープな突帯がめぐる。外面は平行タタキで、体部上半にはカキメを施す。内面は青海波文のタタキメであるが、体部上半は磨り消されている。T K208~T K23型式に併行するものと思われる。

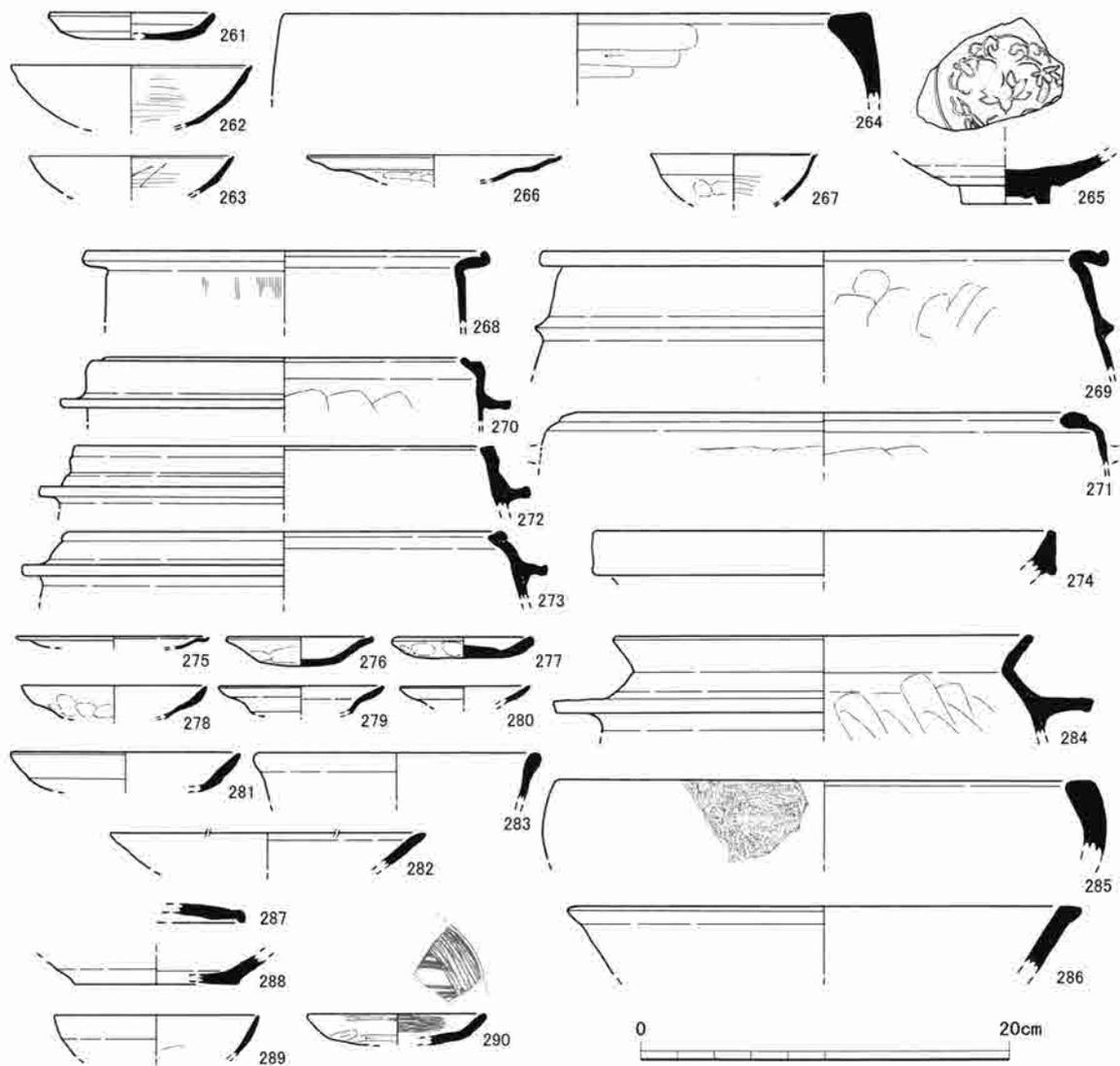
98~102は須恵器高杯蓋である。天井部の過半にヘラケズリを施す。103~107は須恵器高杯で



第171図 出土遺物実測図(13)



第172図 出土遺物実測図(14)

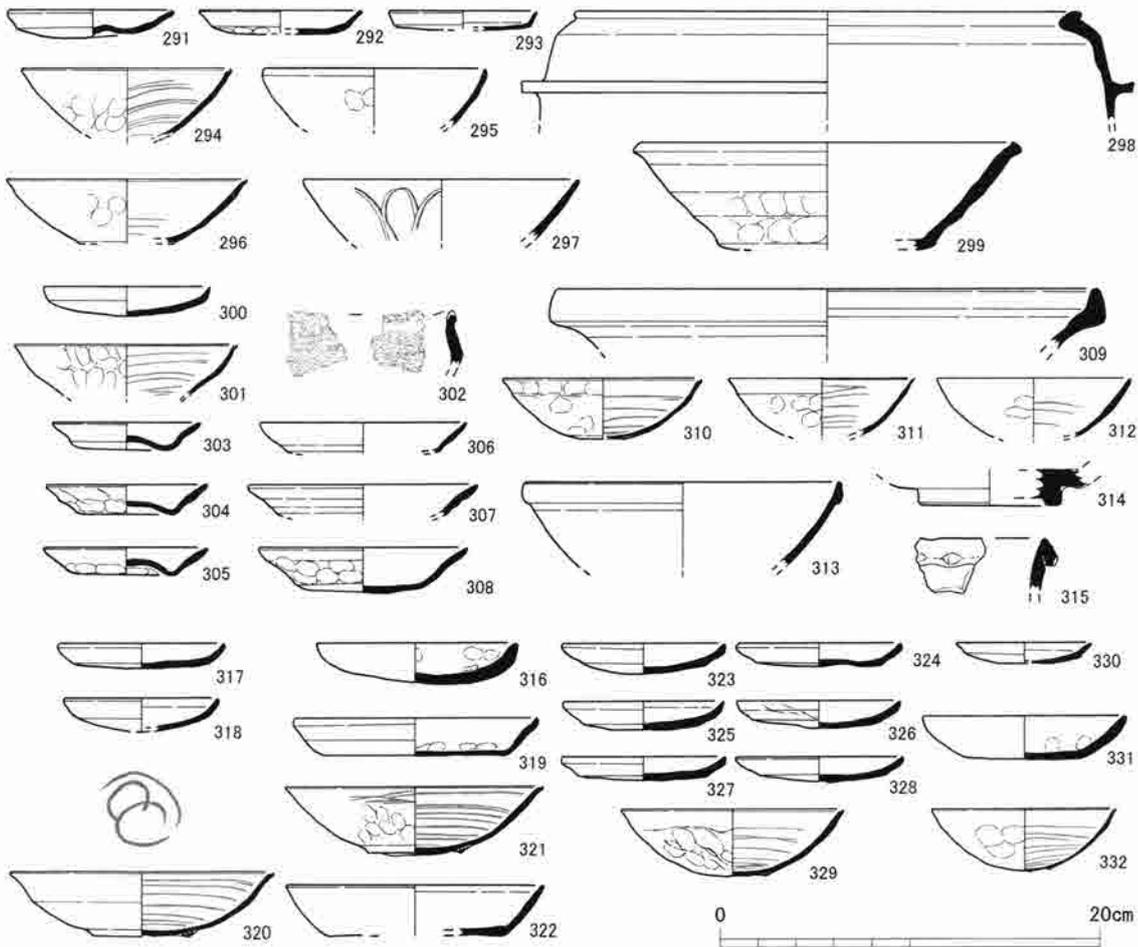


第173図 出土遺物実測図(15)

ある。3方向に透かし孔を開ける。TK23型式併行期と考えられる。108は製塩土器である。須恵器高杯107の杯部から出土した。109は土師器高杯の杯部である。最も高い位置から出土しているので、ほかの部分は削平によって失われたものとみられる。

110～125は埴輪である。110は底部から口縁部までが残る円筒埴輪で、底径16.5cm程度に復原できる。高さは44.2cmを測る。2段目と3段目に円形の透かし孔が開けられている。内外面とも縦方向のハケ調整を施す。111は口縁部を欠く円筒埴輪である。底径21.6cm程度に復原でき、口縁部に向かって大きく開く器形を呈する。外面は粗い縦方向のハケ調整、内面は上半が斜め方向のハケメ、下半が指押さえである。116・117・120・122は近接して出土しており、同一個体と思われる。

112・113・123は底部の破片である。112・123の外面には縦方向のハケ調整が認められるが、113には認められない。114～118は口縁部の破片である。114・115・118の外面にはヘラ記号が認められる。119～121は透かし孔をもつ破片である。いずれも円形透かしが開けられている。



第174図 出土遺物実測図(16)

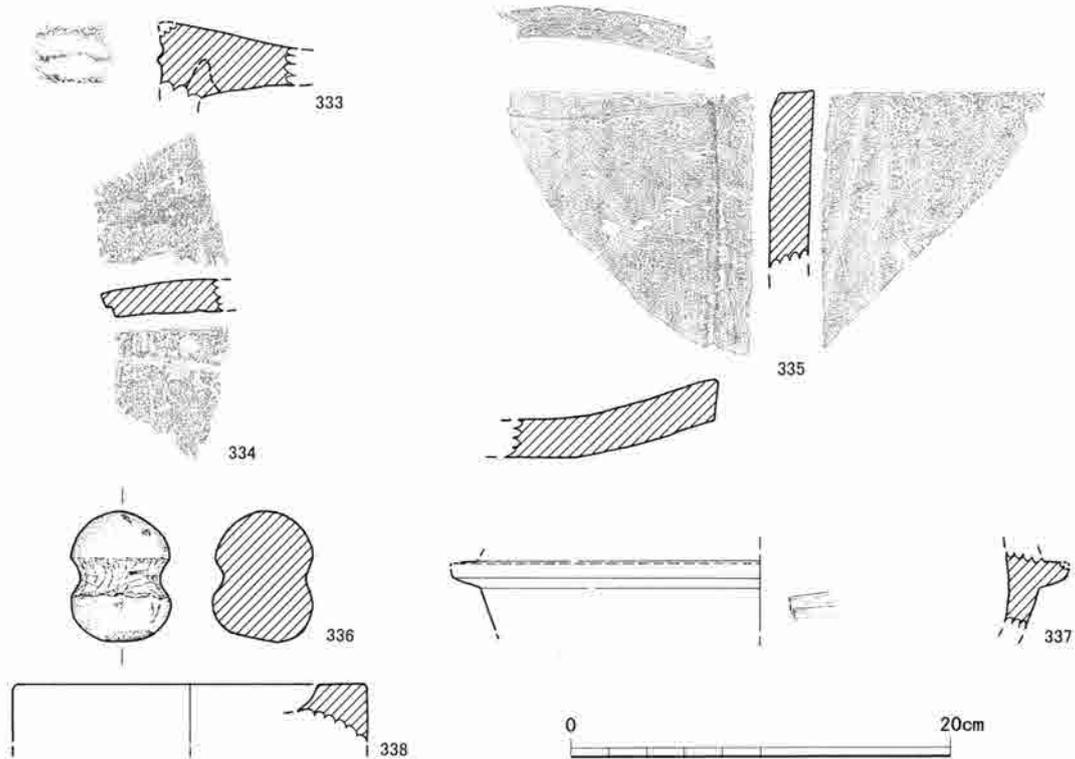
124・125は朝顔形円筒埴輪の口縁部と考えられる。外面に縦方向のハケ、内面に斜め方向のハケ調整が施される。

### 3) 平安時代以降

126～133は、坪境溝群よりも北側のピットから出土した。126は須恵器杯蓋、127・131は瓦器碗、128は土師器鉢、129・130は黒色土器B類、132・133は須恵器壺である。132の外面にはヘラ記号がみられる。126・127はS A 2、128はS A 3、130・132はS B 3、133はS B 4から出土している。

134～146は坪境溝群以南、S D427以北のピットから出土した。134～136は土師器皿、137～141は瓦器碗、142は土師質羽釜、143・144は瓦質羽釜、145・146は東播系須恵器鉢である。建物を復原することはできなかったが、この付近に13世紀後半頃の建物が存在したことがわかる。147～151は調査区中部の掘立柱建物跡から出土した。147・148は「て」の字状口縁の土師器皿、149は黒色土器A類、150は須恵器杯、151は土師器甕である。147～149・151はS B 1の身舎南柱列のS P 326に埋納されていたものである。150はS B 2から出土した。

152～159はS D427以南のピットから出土した。152～156は土師器皿、157・158は黒色土器B類碗、159は土師質羽釜である。152～154はS B 6、156～159はS B 5から出土した。



第175図 出土遺物実測図(17)

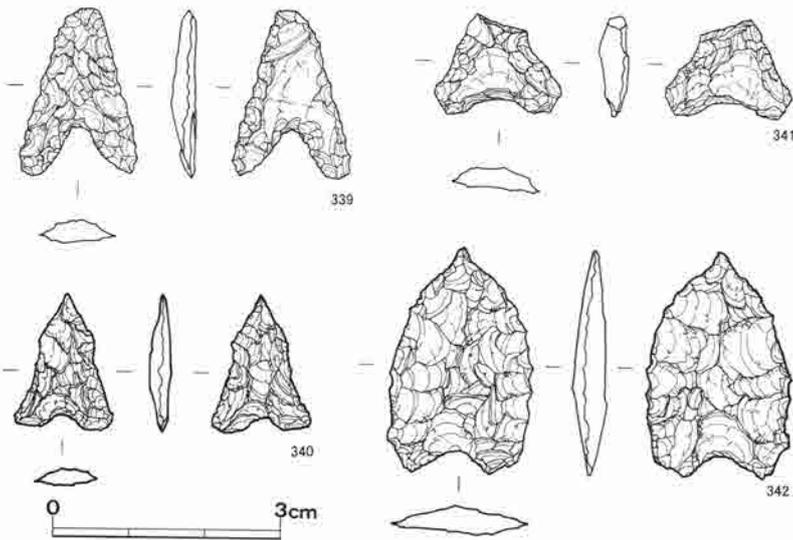
160～183はS E 356から出土した。160～167は井戸埋没後にできた窪地から、168～179は井戸を人為的に埋めた層から、180～183は石組み内から出土した。160～163は土師器皿、164・165・168・169は大和型瓦器椀、166・175・176・182は大和産の土師質羽釜、167・183は東播系須恵器鉢、170は瓦器皿、171は楠葉産の瓦器壺、172は山茶椀、173は白磁椀、174は轆の羽口、177は瓦質土器鍋、178は瓦質土器鉢、179は尾張産の鉢である。171の肩部には花卉状の、178の内面には格子状の暗文が施される。石組み内の遺物は13世紀後半頃、そのほかは13世紀末～14世紀初頭頃に比定される。

184～219は坪境溝S D 215から出土した。206のみは、遺構検出面より上層から掘り込まれたS D 215の掘り直しとみられる層の残っていた部分から出土したが、合わせて掲載した。ほかの遺物は、上層(S D 215 a)と下層(S D 215 b)に分けて取り上げたが、いずれも14世紀までのものを含み、層位による時期差は認められなかった。184・185は土師器皿、186は土師器杯、187～190は大和型瓦器椀、191は白磁椀、192は青磁椀、193は青磁皿、194～198は大和産の土師質羽釜、199～201は瓦質土器羽釜、202は瓦質三足羽釜、203・204は瓦質土器鍋、205は大和産の瓦質土器すり鉢、206～208は大和産の瓦質土器火鉢、209は瓦質土器甕、210は須恵器壺、211は東播系須恵器甕、212～214は東播系須恵器鉢、215・216は常滑焼甕、217～219は尾張産の鉢である。

220～224はS D 216から出土した。220は土師器皿、221は灰釉陶器皿、222は瓦質土器羽釜、223は備前焼すり鉢、224は瓦質土器火鉢である。15世紀代までの遺物を含む。

225～227はS D 451から出土した。225は黒色土器B類椀、226は東播系須恵器鉢、227は産地不明の陶器すり鉢である。

228～231はS D 222から出土した。228は土師器皿、229は大和型瓦器椀、230は大和産の土師質羽釜、231は東播系須恵器鉢である。232はS D 285から出土した古瀬戸卸目皿である。233・236はS D 538から出土した。233は瓦器皿、236は大和産の土師質羽釜である。234・235・237はS D 570から出土した。234は土師器皿、235は大和型瓦器椀、



第176図 出土遺物実測図(18)

237は尾張産の鉢である。238～241はS D 525から出土した。238・240は大和型瓦器椀、239は土師器皿、241は東播系須恵器鉢である。

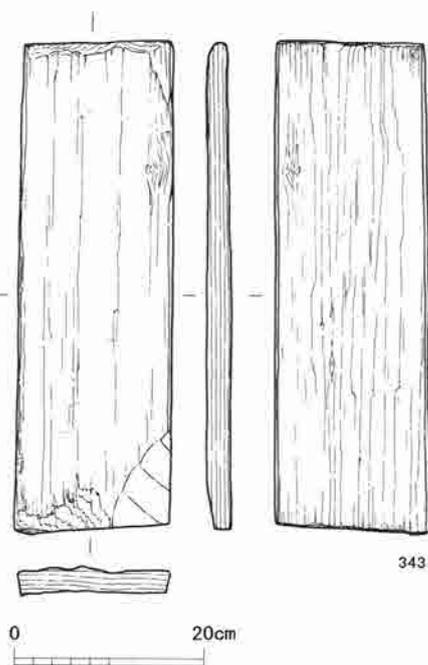
242～260はS D 531から出土した。242～249は土師器皿、250～255は大和型瓦器椀、256は瓦質土器鉢、257～259は大和産の土師器羽釜、260は瓦質土器鍋である。大和型瓦器椀には高台の一部がわずかに残るものと高台が省略されたものがある。242・243・260などのやや古い遺物が混じるが、これらを除けば14世紀初頭頃に比定される良好な資料である。

261～263はS D 427から出土した。261は土師器皿、262は大和型瓦器椀である。264・265はS D 340から出土した。264は瓦質土器火鉢、265は白磁椀である。265は内底面に花文を施した優品である。

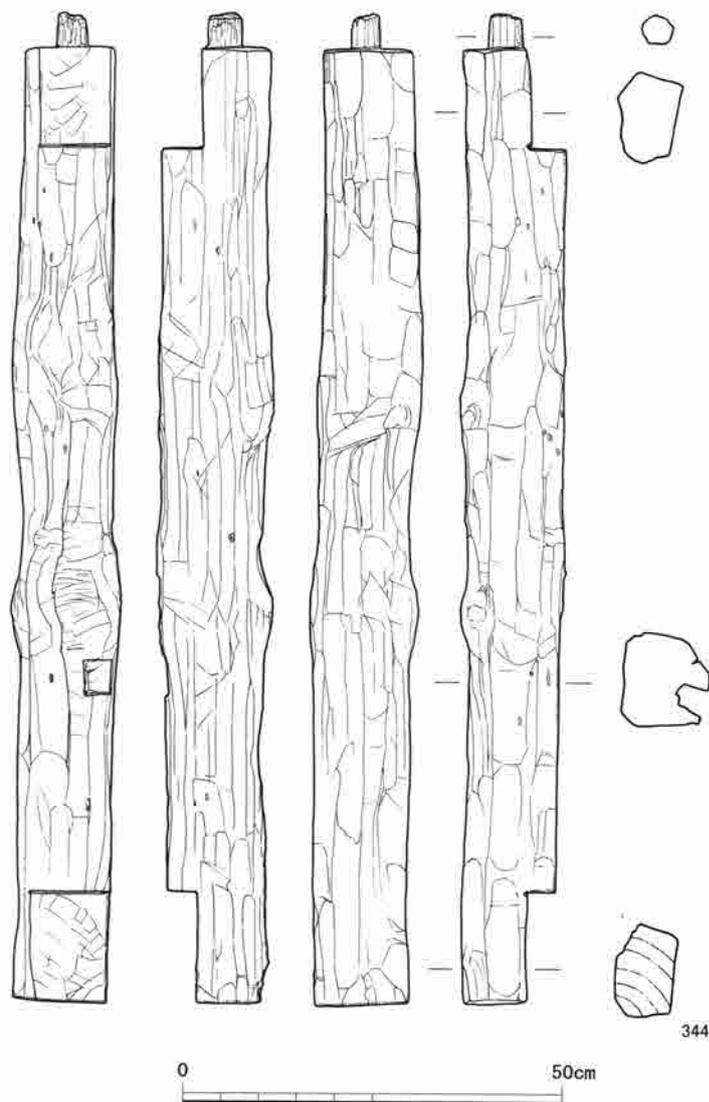
266は坪境溝群より北側の東西方向の耕作溝から出土した「て」の字状口縁の土師器皿である。

267～274は坪境溝群以南、S D 427以北にある南北方向の溝から出土した。267は大和型瓦器椀、268～271は大和産の土師器羽釜、272～273は瓦質土器羽釜である。274は東播系須恵器鉢である。いずれも14世紀前半頃の遺物である。

275～286はS D 427より南側にある東西方向の耕作溝から出土した。275～283は土師器皿、283は青磁椀、284は土師器羽釜、285は瓦質土器火鉢、286は信楽焼かと思われる陶器鉢である。10世紀～15世紀代の遺物を含むが、古代の遺物は、本来は、この付近に展開する掘立柱建物跡群に伴うもので、耕作によって溝内に取り込まれたも



第177図 出土遺物実測図(19)



第178図 出土遺物実測図(20)

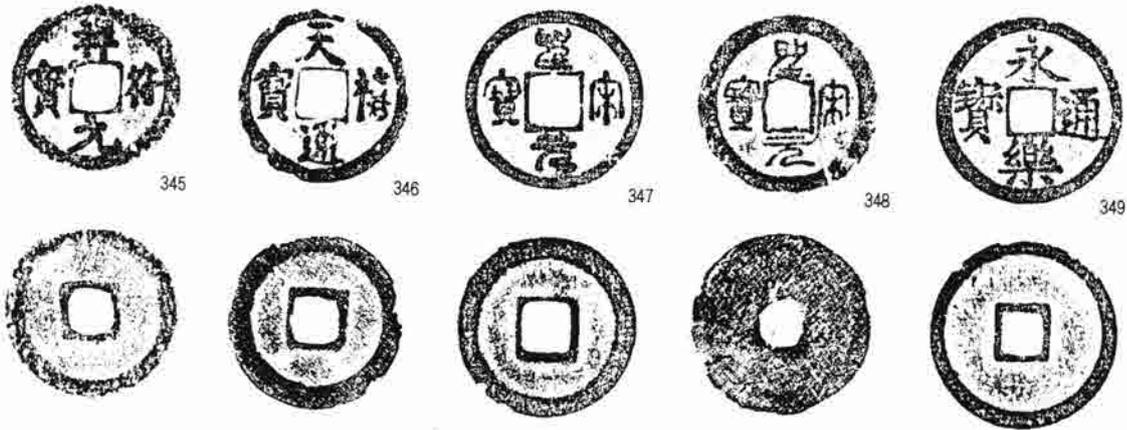
のであろう。  
 287～290はS D427より南側にある南北方向の耕作溝から出土した。287は須恵器杯蓋、288は回転台土師器杯、289は大和型瓦器碗、290は瓦器皿である。  
 291～299はS K526から出土した。291～293は土師器皿、294～296は大和型瓦器碗、297は青磁碗、298は大和産の土師器羽釜、299は瓦質土器鉢である。  
 300～302はS K527から出土した。300は土師器皿、301は大和型瓦器碗、301は縄文土器浅鉢である。303～315はS K508から出土した。303～308は土師器皿、309は東播系須恵器鉢、310～312は大和型瓦器碗、313は白磁碗、314は青磁碗、315は縄文土器深鉢である。  
 316～332は包含層掘削中に土器がまとまって出土し、遺構の掘形を認識できなかったものである。316は調査区南部のS X491から出土した土師器皿である。317～322は、調査区中央部の鳥島盛土内のS X1から出土した。317～319は土師器皿、320・321は大和型瓦器碗、322は白磁皿である。323～329は調査区中央部の鳥島盛土内のS X563から出土した。323～328は土師器皿、329は大和型瓦器碗である。330～332はS X495から出土した。330・331は土師器皿、332は大和型瓦器碗である。

(2) 瓦・石製品

333は軒丸瓦である。瓦当面は圈線と思われるもの以外ほとんど残っていない。S B4の柱穴から出土している。334は熨斗瓦である。側面に切断痕跡が認められる。南部の南北方向耕作溝から出土した。335は平瓦である。坪境溝S D215から出土した。336は石製錘である。坪境溝S D215から出土した。337は滑石製石鍋である。S D340から出土した。338は石臼である。茶臼の上臼と考えられる。S D340から出土した。

(3) 石器

339～342はサヌカイト製の石鏃である。いずれも凹基式で、縄文時代の遺物と考えられる。第



第179図 出土銭貨拓影(S=1/1)

1 遺構面のベースとなる層から出土した。

#### (4) 木製品

343はS E 356の結桶の側板である。下端部の外面を斜めに削り、やや薄く仕上げている。結桶は、ほぼ同大の側板13枚で組まれていた。344はS E 458の底に組まれていた角材である。両端を切り込んで、14×10cm程の面を作り、一端には、さらにほぞを作り出している。井戸枠として使用するには無用と思われるほぞ穴が1か所開けられていることから、転用材と考えられる。

#### (5) 銭貨

345は祥符元寶(1008年初鑄)、346は天禧通寶(1017年初鑄)、347・348は聖宋元寶(1101年初鑄)、349は永樂通寶(1408年初鑄)である。348は裏面の縁が低い。銭穴は加工されている。345はS E 356の埋め戻し層から、346はS E 356付近の南北溝から、347・349はS D 215付近の包含層から、348はS E 356北側の包含層から出土した。

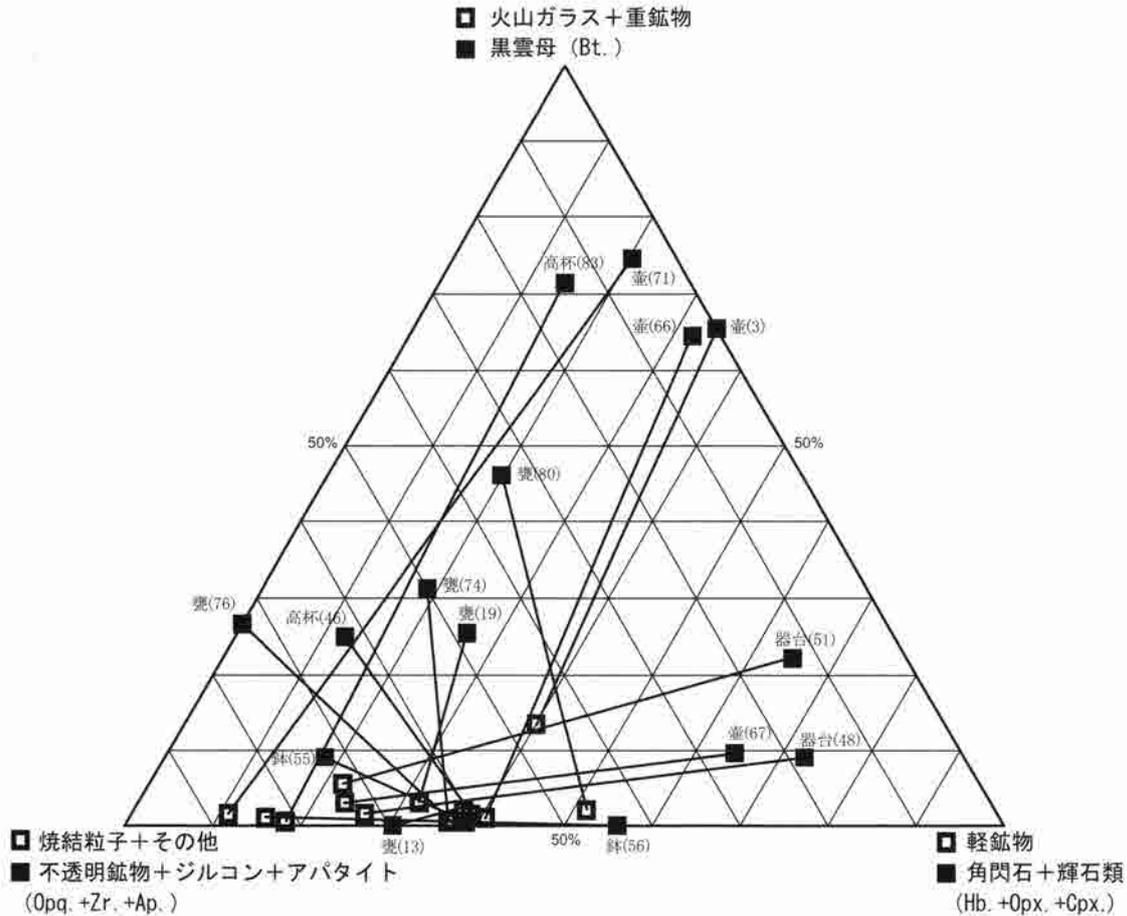
### 5. まとめ

#### (1) 椋ノ木遺跡出土の弥生土器について

今回の調査により、S D 1001・1002からまとまった土器資料を得ることができた。これらの土器群は、弥生時代後期後半の一括性の高い資料として評価される。

出土土器の全体的な傾向として、搬入品もしくは模倣品と考えられるものが多い。特徴的なものとして近江系鉢(55)を代表とする砂を多く含む一群のもの、ワイングラス状の無頸壺(10)や直口壺(71)のような精良な胎土をもち、黄褐色系の色調を呈するもの、広口壺(3)のように暗茶褐色の色調を呈するものなどは、おそらく在地産とみられる「く」の字状口縁を有する甕などと比して異質な存在である。高杯・鉢の形態をみても東海から近江地域の影響を強く受けていることが容易に認識できる。

胎土分析の結果を援用すれば、やや肉眼による観察とは異なるものの、壺・高杯など精製器種を構成するものと、甕・鉢など煮沸具を主体とするものとは明確に分離される。甕が在地産であると仮定した場合、精製器種には搬入品が多いと考えることが可能であろう。



第180図 弥生土器の胎土分析ダイヤグラム

S D1001上層の土器群は、その出土状況や完形個体、大形破片を多く含む点から短期間の間に投棄されたものと判断され、一括性の高い資料といえる。また、二次的な被熱を受けている個体が多く、甕類に限らず、器台・高杯にまで及ぶことから、焼失住居の廃品もしくは祭祀に伴って使用された土器を投棄したものとみられる。出土土器の総量からみれば後者の可能性が高いものと判断される。

各器種の様相をみると、壺はバリエーションが多く個体ごとの形態差が大きい。甕は「く」の字状口縁を呈するものが主体をなし、受け口状口縁を呈するものは少数である。また、最終調整をタタキで仕上げる個体ではやや突出する平底をもつのが特徴といえよう。高杯は東海系、畿内系の両者が見られるが、畿内系高杯が主体を占める。これら畿内系高杯は杯口縁下端部に稜を形成し、刻目による加飾を施す点が特徴的である。法量は大型・中型・小型の各種が認められ法量分化が進行している。器台も畿内系のもので占められている。鉢は近江系鉢が主体を占めている。東海系高杯はやや内湾する脚(40)や杯部の形態などから、尾張Ⅶ-1様式<sup>(4)</sup>に比定できよう。

S D1002出土土器は一括性という点においてS D1001に比してやや低いと考える。個体数も少なく完形品も少ない。各器種の様相もS D1001出土土器とは異なる。特に鉢の様相がS D1001では近江系のもので主体を占めるのに対し、S D1002では碗形のもので比率を増し、有孔鉢も増加しているものと判断される。加飾される甕も受け口状口縁のもので占められている。また高杯脚

(83)は形態的にみてS D1001出土土器より後出するものとする。以上の諸点から、溝S D1002出土土器は溝S D1001出土土器に後出する土器群と考えたい。両者の組成の差異は時期差を示すものといえよう。

このような点からみて、棕ノ木遺跡溝S D1001・1002出土土器は、南山城の弥生時代後期後半の基準資料となりうるものと判断される。

これまで山城地域の弥生後期土器の編年として、森岡秀人氏の『弥生土器の様式と編年』<sup>(注5)</sup>に用いられている資料群は、乙訓地域を含む北山城の資料が大部分であり、南山城地域の実態が反映されにくい面があった。また、資料的蓄積が十分でなかった段階での整理であるため、再検討を実施する余地は十分あるものと考えられる。近年の資料数の増加に伴い、木津城山遺跡<sup>(注6)</sup>や佐山遺跡<sup>(注7)</sup>で後期弥生土器の編年作業が行われている。本資料はこれらの資料を補完し、他地域との併行関係を考証するために重要な資料群といえる。今回、山城地域の中での編年的位置付けについて言及することはできなかったが、今後の編年作業の中で基準資料として利用されることを期待したい。

(石崎善久)

## (2) 棕ノ木遺跡の変遷について

今回の調査では、弥生時代の溝や、古墳の周溝など、棕ノ木遺跡の調査では初めての検出となる時代の遺構の発見が相次ぎ、これまでの調査で得られていた遺跡像に新たな一面を加えることとなった。以下、時代を追って棕ノ木遺跡の変遷をまとめてみたい。

縄文時代の明確な遺構は検出できなかったが、第2遺構面までの掘り下げの途中で縄文土器や縄文時代とみられる石鏃が出土した。縄文時代の遺構面は、平成12・13年度に実施した8トレンチの調査でもほぼ同じ標高で見つかり、縄文時代の遺構面が遺跡の北端部付近でも存在することが確かめられた。ただし、縄文時代の生活の痕跡を示す考古学的資料は8トレンチの調査以上に乏しいといわざるを得ない。

弥生時代の遺物はこれまでの調査でも出土していたが、今回の調査では初めて遺構が検出された。S D1001・1002は東西方向の溝で、調査区の東側で合流するものと考えられる。平成9年度に調査を行った6トレンチでは、安定した遺構面が存在しないことが確かめられており、今回の調査地は棕ノ木遺跡が立地する自然堤防状の微高地の北端付近に位置する。S D1001・1002はこの微高地の北端を横切る形で掘られていることから、集落の北を限る溝と考えることができる。溝の時期は弥生時代後期後半であり、この時期には溝の南側に集落が展開していたものと考えられる。

また、それぞれの溝の下層にも、弥生時代前期末と中期後葉の東西方向の溝が存在したことが判明し、棕ノ木遺跡には断続的に集落が営まれ、そのたびに、微高地の北端付近に東西方向の溝が掘られていたと考えることができるだろう。

古墳時代には、調査区の北側に少なくとも2基の古墳が築かれる。S D189・1003が古墳の周溝と考えられるもので、平成8・9年度に調査した4-5トレンチでも埴輪が出土していること

から、調査地北側付近には、数基の古墳が存在していたものと思われる。

S D 189は出土した須恵器から、T K 23型式併行期の築造と考えられる。一方、S D 1003を東辺とすると想定される古墳は、時期決定が難しい。須恵器甕と埴輪はどちらもこの古墳に伴うものと考えられるが、須恵器甕は口縁部のつくりのシャープなことなどからT K 208～T K 23併行期に比定される6世紀に下がることはないと考えられるが、埴輪は外面の調整が縦方向のハケのみであり、6世紀と考えるのが一般的だろう。両者にみられる時期の差をどのように理解するかは今後の課題としたい。

ところで、弥生時代の集落が展開していたと予想される調査区中央部以南では、竪穴式住居跡などはまったく検出されなかった。第2遺構面までの掘削途中に1片の弥生土器も出土しなかったこと、検出された古墳の周溝がわずかしかなかったことからみて、おそらく、竪穴式住居跡などの生活痕跡は完全に削平されてしまったと考えられる。そして、古墳と同一面で検出された平安時代の掘立柱建物跡の柱穴は30cm以上残っているものが多いことを考えれば、調査区全体にわたる削平を被った時期は、古墳が築造された5世紀末以降で、掘立柱建物跡が建てられる10世紀中葉までの間に限られる。さらに、今回の調査を含めて、椋ノ木遺跡では奈良時代の遺物が散見されるにもかかわらず、これまでに奈良時代の遺構が確認されていないことを重視すれば、削平を被った時期は奈良時代以降に絞られる。削平の原因は、削平が遺跡全体に及ぶことからみて、木津川の洪水であろうと思われる。

状況証拠による推論ではあるが、ここでは、古墳時代以降、おそらく9世紀前後の時期に大規模な洪水が遺跡を襲った可能性のあることを指摘しておきたい。

平安時代中期になると、調査区中央部にS B 1が建てられる。この建物は、2間×6間以上の身舎の北面と南面に庇を備えるもので、10世紀中葉の建物としてはきわめて規模の大きなものである。これにやや遅れて、調査区北部と南部に建物が数棟建てられる。これらの建物は、いずれもほぼ正方位に沿って建てられており、条里型地割に規制されているものと思われる。

中世前期には坪境溝の北側に東西方向の耕作溝が掘られる。集落関係の遺構は13世紀後半からみられるようになる。S E 356、S D 525・531、S K 508・526・527などをはじめ、これらの遺構の周辺で検出したピットも同時期のものが多い。建物を復原することはできなかったが、坪境溝の南側にこの時期の集落が展開していたことがわかる。椋ノ木遺跡の中世集落は、この頃から遺跡北部に広がるのが過去の調査でも知られており、今回検出されたこの時期の遺構も、集落の拡大を反映したものである。

これらの遺構も、遅くとも15世紀には島島の盛土の下に埋没し、以後、周辺は耕作地となる。調査区南部で検出された耕作溝群は、調査区中央部に島島が造成された時期のものである。

(森島康雄)

注1 河野一隆・近藤奈緒「椋ノ木遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都

府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

注2 森島康雄「南山城の中世土器」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注3 調査参加者は以下のとおりである(敬称略)。

**補助員** 丑山直美・小野彰子・金原寿江・川田祐樹・木藤洋介・五大博則・佐治健一・杉江貴宏・竹井千実・武田雄志・藤田佳照・朴貴広・穂積優子・宮嶋武志・森田靖久・山口由希子・山本茜・鷺原祐太郎・渡辺理気

**整理員** 井上聡・岡野奈知子・荻野富紗子・春日満子・金子真理子・木村悟・近藤奈央・清水友佳子・田中美恵・寺尾貴美子・長尾美恵子・中島恵美子・西村香代子・長谷川マチ子・船築紀子・村上優美子・森川敦子・安田裕貴子・山口由希子・山中道代

注4 加納俊介・石黒立人編(『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社) 2002

注5 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社) 1990

注6 筒井崇史「木津城山遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 200

注7 高野陽子「佐山遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

付表9 弥生土器観察表

法量：単位cm

番号	器種	法量 (口径・器高)	外面調整	内面調整	胎土	色調	残存率%	二次的 被熱	備考
1	壺	11.8・(20.9) 体部最大径24.5	ハラミガキ	ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	50	なし	
2	壺	(10.2)(16.1) 体部最大径19.4	ハケのちミガキ	ナデ	精良(1~2 mm大の砂粒)	燈褐色系	80	なし	
3	壺	12.9・(22.5) 体部最大径18.8	ミガキ	ハケ・ナデ	良(微細な砂 粒)	暗黄褐色 系	20	有	
4	壺	13.8	ハケ		良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	80	有	
5	壺	9.9・24.6 体部最大径16.6	ミガキ	ミガキ・ナ デ	精良(微細な 砂粒)	黄褐色系	50	なし	
6	壺	9.7	ミガキ	ミガキ	精良(微細な 砂粒)	燈灰色系	70	有	
7	壺	ー・(15.8) 体部最大径11.8	ナデ	ハケ	やや粗(1~ 3mm大の砂 粒)	燈褐色系	80	有	
8	壺	11.1・19.7 体部最大径17.1	ナデ	ハケ・ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	黄褐色系	60	なし?	焼成時 変形?
9	壺	8.5・11.3 体部最大径9.2	ハケ、下半タ タキ後ナデ	ハケ	良(微細な砂 粒)	燈褐色系	80	有(使用痕)	
10	壺	8.4・(5.5) 体部最大径12	ミガキ	ミガキ・ナ デ	精良(砂粒ほ ぼなし)	淡黄褐色 系	16	なし	
11	手焙	15.4・(12.8) 体部最大径17.1	ハケ後ナデ	ハケ・ナデ	精良(1~2 mm大の砂粒)	灰褐色系	15	なし	
12	甕	19.7・31.3 体部最大径24.9	タタキ	ハケ・ナデ	良(微細な砂 粒)	燈褐色系	70	有(使用痕)	分割整 形、底 部初圧 痕
13	甕	16.7・22.0 体部最大径18.1	タタキ	磨滅	良(1~2mm 大の砂粒)	燈灰色系	60	有(使用痕)	
14	甕	12.1・14.7 体部最大径12.9	タタキ・ハケ	ハケ	やや粗(1~ 2mm大の砂 粒)	灰褐色系	100	なし	分割整 形
15	甕	14・(8.6) 体部最大径14.4	タタキ	ハケ	良(2mm大の 砂粒)	灰褐色系	10	なし	
16	甕	17.0・23.9 体部最大径19.5	タタキ・ナデ	ケズリ	良(1~3mm 大の砂粒)	燈灰色系	50	有(使用痕)	分割整 形、底 部棒状 圧痕
17	甕	16.4・24.6 体部最大径19.1	タタキ	ケズリ・ナ デ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	100	有(使用痕)	分割整 形
18	甕	15.0・23.7 体部最大径18.8	タタキ	ナデ	良(1mm大の 砂粒)	灰褐色系	80	有(使用痕)	底部初 圧痕
19	甕	14.9・24.9 体部最大径19.0	タタキ	ハケ後ナデ	良(微細な砂 粒)	燈灰色系	40	有(使用痕)	分割整 形
20	甕	17.0・(15.2) 体部最大径19.9	タタキ部分ナ デ	ナデ後ハケ	良(微細な砂 粒)	燈灰色系	13	有(使用痕)	
21	甕	16.2・(9.3)	タタキ	ハケ	良(微細な砂 粒)	灰褐色系	10	有(使用痕)	
22	甕	18.2・(11.0)	ハケ後タタキ	ハケ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	30	有(使用痕)	
23	甕	14.7・(13.0) 体部最大径19.0	ハケ	工具による ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	100	有(使用痕)	

24	甕	14.0・(11.1) 体部最大径14.1	ハケ	ハケ	良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	75	有(使用痕)	
25	甕	14.6・19.9 体部最大径18.0	ハケ	ハケ	良(1mm大の 砂粒)	灰褐色系	70	有(使用痕)	分割整形
26	甕	13.5・19.7 体部最大径16.4	タタキ後、工 具によるナデ	磨滅	良(1mm大の 砂粒)	灰褐色系	50	有(使用痕)	
27	甕	15.8・(12.7)	タタキ後ハケ	磨滅(ハ ケ?)	やや粗(1~ 2mm大の砂 粒)	淡灰褐色 系	20	有(使用痕)	
28	甕	14.9・(21.0) 体部最大径19.7	ハケ	磨滅(指頭 圧痕)	良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	55	有(使用痕)	
29	甕	13.4・20.3 体部最大径18.3	タタキ	磨滅(指頭 圧痕)	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	50	有(使用痕)	
30	甕	15.6・(21.8) 体部最大径19.0	タタキ	ハケ	良(微細な砂 粒)	灰褐色系	60	有(使用痕)	
31	甕	16.0・(21.3) 体部最大径21.9	タタキ後ミガ キ	磨滅(ケズ リ?)	精良(1mm大 の砂粒)	燈褐色系	65	有(使用痕)	
32	甕	19.0・(7.6)	ハケ	ハケ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈灰色系	12	有(使用痕)	
33	甕	16.8・(12.4) 体部最大径19.5	タタキ	工具による ナデ	良(微細な砂 粒)	燈灰色系	20	有(使用痕)	
34	甕	14.5・(3.1)			良(1~2mm 大の砂粒)	燈灰色系	10	有(使用痕)	
35	甕	—・(10.1)	タタキ	ハケ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈灰色系	20	有?	
36	高杯	24.3・17.9 底径13.9	ミガキ	ミガキ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	80	有	円形ス カシ3
37	高杯	22.0・(7.2)	ミガキ	ミガキ	精良(1~2 mm大の砂粒)	淡灰褐色 系	40	なし	40と同 一 個 体 か
38	高杯	21.9・14.8 底径15.2	ミガキ	ミガキ	良(1mm大の 砂粒)	燈灰色系	85	有	円形ス カシ3
39	高杯	—・(13.7) 底径15.4	杯部ハケ後ミ ガキ、脚部ミ ガキ	杯部ハケ後 ミガキ、脚 部磨滅(ナ デ?)	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	60	なし?	円形ス カシ5
40	高杯	—・(11.3) 底径12.6	ミガキ	絞り・ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	淡灰褐色 系	30	なし	ハケ工 具によ る直線 文、円 形ス カシ3
41	高杯	21.2・(7.5)	ミガキ	ミガキ	良(1~3mm 大の砂粒)	燈灰色系	40	有	
42	高杯	22.8・(6.9)	ミガキ	ミガキ	精良(微細な 砂粒)	燈灰色系	50	なし	
43	高杯	18.1・12.5 底径11.8	ミガキ	杯部ミガ キ、脚部絞 り・ナデ	良(1mm大の 砂粒)	燈灰色系	90	なし	円形ス カシ3
44	高杯	19.8・11.9 底径(11.4)	ミガキ	杯部磨滅、 脚部絞り・ ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈灰色系	75	有	
45	高杯	14.2・10.9 底径8.2	ミガキ	杯部ミガ キ、脚部絞 り	良(1mm大の 砂粒)	燈褐色系	90	なし	
46	高杯	16.7・(5.5)	磨滅	磨滅	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	40	なし	

47	高杯	ー・(6.5) 底径11.0	ミガキ	絞り・ナデ	良(1~3mm 大の砂粒)	燈褐色系	40	なし	
48	器台	ー・(14.5) 底径16.6	磨滅(ハケ)	磨滅(ハケ)	精良(微細な 砂粒)	燈褐色系	60	有	円形3 段スカ シ4
49	器台	ー・(1.3)	磨滅	磨滅	精良(微細な 砂粒)	燈褐色系	小片	有	
50	器台	17.9・(12.0)	ミガキ	ケズリ	良(1mm大の 砂粒)	燈褐色系	30	有	円形3 段スカ シ3
51	器台	18.6・12.3 底径14.2	ミガキ	受け部ミガ キ、体部絞 り	良(1mm大の 砂粒)	燈褐色系	60	有	円形3 段スカ シ3
52	器台	15.6・10.0 底径14.5	ナデ	ナデ	良(微細な砂 粒)	燈褐色系	90	なし	
53	鉢	42.3・(7.2)	ハケ	ハケ	良(1mm大の 砂粒)	黄褐色系	10	なし	
54	鉢	ー・(5.8)	タタキ	ナデ	良(微細な砂 粒)	燈褐色系	10	有	焼成前 穿孔
55	鉢	13.4・10.6 体部最大径16.1	ハケ	工具による ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	60	有(使用痕)	
56	鉢	16.9・(7.4) 体部最大径18.4	ハケ	磨滅	やや粗(微細 な砂粒)	淡灰褐色 系	30	有(使用痕)	
57	鉢	16.3・(10.3) 体部最大径17.8	ハケ	ハケもしく はケズリ後 ナデ	やや粗(微細 な砂粒)	淡灰褐色 系	30	有(使用痕)	
58	鉢	12.9・(8.7) 体部最大径10.4	ナデ	ナデ	良(微細な砂 粒)	灰褐色系	40	なし	
59	鉢	14.5・(12.2) 体部最大径15.6	ハケ・ナデ	ハケ	良(1mm大の 砂粒)	燈褐色系	40	有(使用痕)	
60	鉢	13.9・(10.4) 体部最大径12.7	タタキ後ハケ	ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	暗褐色系	50	有(使用痕)	
61	蓋	ー・(2.6) つまみ径4.4	ナデ	ナデ	良(1mm大の 砂粒)	暗褐色系	5	なし?	
62	鉢				良(1~3mm 大の砂粒)	灰褐色系	小片	なし	縄文
63	鉢				良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	小片	なし	縄文
64	甕				良(1mm大の 砂粒)	灰褐色系	小片	なし	弥生前 期
65	甕				良(1mm大の 砂粒)	灰褐色系	小片	なし	弥生前 期
66	壺	13.4・(30) 体部最大径25.8	ミガキ	ハケ	精良(1~2 mm大の砂粒)	黄褐色系	40	なし	
67	壺	16.5・(5.1)	ミガキ	ミガキ	良(1mm大の 砂粒)	燈灰色系	10	有	
68	壺	14.1・(3.9)	磨滅	磨滅	良(1mm大の 砂粒)	燈灰色系	10	有	
69	壺	10.5・(1.5)	ナデ	磨滅(ミガ キ)	良(微細な砂 粒)	燈褐色系	5	なし	
70	壺	ー・(6.5) 頸部径9.7	ミガキ	ハケ後ナデ	精良(微細な 砂粒)	黄褐色系	5	なし	
71	壺	8.2・14.0 体部最大径14.7	ミガキ	ナデ	精良(砂粒ほ ぼなし)	淡黄褐色 系	95	なし	
72	壺	8.1・12.5 体部最大径9.3	磨滅(ミガキ)	磨滅	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	80	有	
73	甕	16.1・(5.4)	タタキ	ナデ	良(1~3mm 大の砂粒)	燈褐色系	10	有(使用痕)	

74	甕	17.1・(7.6) 体部最大径15.7	磨滅	ハケ	良(1~3mm 大の砂粒)	燈褐色系	20	有(使用痕)	
75	甕	16.1・(4.7)	磨滅	磨滅	良(1~2mm 大の砂粒)	燈褐色系	10	有(使用痕)	
76	甕	11.6・(10.5) 体部最大径18.4	タタキ	ハケ	良(1~3mm 大の砂粒)	暗褐色系	10	有(使用痕)	
77	甕	18.6・(15.5) 体部最大径24.4	タタキ	ハケ	良(1~3mm 大の砂粒)	暗褐色系	30	有(使用痕)	
78	甕	14.2・17.8 体部最大径14.6	ハケ	ハケもしくは ケズリ後 ナデ	良(1~3mm 大の砂粒)	燈褐色系	30	有(使用痕)	
79	甕	16.9・(17.7) 体部最大径21.8	ハケ後粗いミ ガキ	工具による ナデ	精良(1mm大 の砂粒)	黄褐色系	30	なし	
80	甕	15.8・(10.5)	ハケ	ナデ	精良(1mm大 の砂粒)	淡灰褐色系	30	有(使用痕)	
81	甕	15.4・(3.5)	ハケ	ナデ	やや粗(微細 な砂粒)	淡灰褐色系	20	有(使用痕)	
82	高杯	20.0・15.3 底径10.0	杯部ミガキ、 脚部ハケ後ミ ガキ	磨滅、絞り・ ナデ	良(1~3mm 大の砂粒)	燈褐色系	50	なし	円形ス カシ3
83	高杯	ー・(10.1) 底径19.6	脚部ミガキ	杯部ミガ キ、脚部絞 り・ナデ	精良(微細な 砂粒)	灰褐色系	50	なし	円形ス カシ4
84	高杯	ー・(5.7) 底径7.4	脚部ミガキ	杯部ナデ、 脚部絞り・ ナデ	良(1mm大の 砂粒)	燈灰色系	40	なし	
85	器台	17.2・(1.1)	磨滅	磨滅	良(1mm大の 砂粒)	灰褐色系	5	なし	
86	蓋	ー・(2.3) つまみ径4.4	ナデ		良(微細な砂 粒)	燈灰色系	5	なし	
87	鉢	38.0・23.2 体部最大径31.3	一部ミガキ	磨滅	良(1~3mm 大の砂粒)	燈褐色系	30	なし?	
88	鉢	16.9・(5.5)	ハケ	ケズリもし くはハケ後 ナデ	やや粗(微細 な砂粒)	淡灰褐色系	20	有(使用痕)	
89	鉢	13.5・8.3	タタキ	ハケ	やや粗(1~ 3mm大の砂 粒)	燈灰色系	70	なし	焼成後 穿孔?
90	鉢	ー・(7.2)	ナデ	ハケ後ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	燈灰色系	10	なし	焼成前 穿孔
91	鉢	12.9・7.4 底径4.1	磨滅(ケズリ 痕?)	磨滅	精良(砂粒ほ ぼなし)	燈灰色系	45	有	
92	鉢	12.3・(6.3) 体部最大径13.4	磨滅	磨滅、(ハ ケ後ナ デ?)	良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	15	有	
93	高杯	19.0・(2.6)	ナデ	ナデ	良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	5	有	弥生中 期・凹 線3
94	高杯	ー・(7.2)	ミガキ	磨滅	良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	5	有	弥生中 期・退 化凹線 文
95	甕	11.6・(7.7) 体部最大径13.8	磨滅	ハケ	良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	10	有	弥生中 期
96	甕	ー・(2.7)	ハケ	ケズリ	良(1~2mm 大の砂粒)	灰褐色系	10	有	弥生中 期

付表10 弥生土器の胎土の全鉛物および重鉛物分析表

試料名	全鉛物3項目				全鉛物計測粒子数と含有率※					
	火山ガラス + 重鉛物	焼結粒子 + その他	軽鉛物	合計	火山 ガラス	軽鉛物	重鉛物	焼結 粒子	その他	合計
壺(3)	27 13.5%	93 46.5%	80 40.0%	200 100%	1 0.5%	80 40.0%	26 13.0%	91 45.5%	2 1.0%	200 100%
壺(71)	3 1.5%	175 87.5%	22 11.0%	200 100%	1 0.5%	22 11.0%	2 1.0%	174 87.0%	1 0.5%	200 100%
壺(67)	6 3.0%	147 73.5%	47 23.5%	200 100%	1 0.5%	47 23.5%	5 2.5%	147 73.5%	0 0.0%	200 100%
壺(66)	2 1.0%	117 58.5%	81 40.5%	200 100%	0 0.0%	81 40.5%	2 1.0%	117 58.5%	0 0.0%	200 100%
器台(48)	3 1.5%	144 72.0%	53 26.5%	200 100%	3 1.5%	53 26.5%	0 0.0%	144 72.0%	0 0.0%	200 100%
器台(51)	11 5.5%	145 72.5%	44 22.0%	200 100%	8 4.0%	44 22.0%	3 1.5%	144 72.0%	1 0.5%	200 100%
高杯(46)	3 1.4%	126 60.0%	81 38.6%	210 100%	0 0.0%	81 38.6%	3 1.4%	126 60.0%	0 0.0%	210 100%
高杯(83)	1 0.5%	163 81.5%	36 18.0%	200 100%	0 0.0%	36 18.0%	1 0.5%	163 81.5%	0 0.0%	200 100%
鉢(55)	1 0.5%	122 61.0%	77 38.5%	200 100%	0 0.0%	77 38.5%	1 0.5%	122 61.0%	0 0.0%	200 100%
鉢(56)	2 1.0%	167 83.5%	31 15.5%	200 100%	1 0.5%	31 15.5%	1 0.5%	167 83.5%	0 0.0%	200 100%
甕(19)	6 3.0%	130 65.0%	64 32.0%	200 100%	2 1.0%	64 32.0%	4 2.0%	130 65.0%	0 0.0%	200 100%
甕(13)	4 2.0%	121 60.5%	75 37.5%	200 100%	1 0.5%	75 37.5%	3 1.5%	121 60.5%	0 0.0%	200 100%
甕(74)	1 0.5%	126 63.0%	73 36.5%	200 100%	0 0.0%	73 36.5%	1 0.5%	126 63.0%	0 0.0%	200 100%
甕(80)	4 2.0%	93 46.5%	103 51.5%	200 100%	0 0.0%	103 51.5%	4 2.0%	93 46.5%	0 0.0%	200 100%
甕(76)	1 0.5%	125 62.5%	74 37.0%	200 100%	0 0.0%	74 37.0%	1 0.5%	125 62.5%	0 0.0%	200 100%

試料名	重鉛物3項目				重鉛物計測粒子数と含有率※										
	黒雲 母	不透明鉛物 + ジルコン + アバタイト	角閃石 + 輝石類	合計	Ol	Opx	Cpx	Bhb	Ghb	Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	合計
壺(3)	131 65.5%	0 0.0%	69 34.5%	200 100%	0 0.0%	20 10.0%	2 1.0%	0 0.0%	47 23.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	131 65.5%	0 0.0%	200 100%
壺(71)	44 74.6%	3 5.1%	12 20.3%	59 100%	0 0.0%	1 1.7%	0 0.0%	0 0.0%	11 18.6%	3 5.1%	0 0.0%	0 0.0%	44 74.6%	0 0.0%	59 100%
壺(67)	3 9.7%	8 25.8%	20 64.5%	31 100%	0 0.0%	3 9.7%	0 0.0%	0 0.0%	17 54.8%	8 25.8%	0 0.0%	0 0.0%	3 9.7%	0 0.0%	31 100%
壺(66)	20 64.5%	1 3.2%	10 32.3%	31 100%	0 0.0%	2 6.5%	1 3.2%	0 0.0%	7 22.6%	1 3.2%	0 0.0%	0 0.0%	20 64.5%	0 0.0%	31 100%
器台(48)	1 9.1%	2 18.2%	8 72.7%	11 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 18.2%	6 54.5%	1 9.1%	0 0.0%	1 9.1%	1 9.1%	0 0.0%	11 100%
器台(51)	12 22.2%	7 13.0%	35 64.8%	54 100%	0 0.0%	1 1.9%	0 0.0%	1 1.9%	33 61.1%	7 13.0%	0 0.0%	0 0.0%	12 22.2%	0 0.0%	54 100%
高杯(46)	10 25.0%	25 62.5%	5 12.5%	40 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 7.5%	2 5.0%	24 60.0%	0 0.0%	1 2.5%	10 25.0%	0 0.0%	40 100%
高杯(83)	10 71.4%	2 14.3%	2 14.3%	14 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 14.3%	2 14.3%	0 0.0%	0 0.0%	10 71.4%	0 0.0%	14 100%
鉢(55)	1 9.1%	8 72.7%	2 18.2%	11 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 18.2%	7 63.6%	0 0.0%	1 9.1%	1 9.1%	0 0.0%	11 100%
鉢(56)	0 0.0%	11 44.0%	14 56.0%	25 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 24.0%	7 28.0%	0 0.0%	1 4.0%	11 44.0%	0 0.0%	0 0.0%	25 100%
甕(19)	39 25.5%	74 48.4%	40 26.1%	153 100%	0 0.0%	2 1.3%	2 1.3%	0 0.0%	36 23.5%	73 47.7%	0 0.0%	0 0.7%	39 25.5%	0 0.0%	153 100%
甕(13)	0 0.0%	16 69.6%	7 30.4%	23 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 8.7%	5 21.7%	15 65.2%	0 0.0%	1 4.3%	0 0.0%	0 0.0%	23 100%
甕(74)	5 31.3%	8 50.0%	3 18.8%	16 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 6.3%	2 12.5%	8 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 31.3%	0 0.0%	16 100%
甕(80)	35 46.1%	26 34.2%	15 19.7%	76 100%	0 0.0%	2 2.6%	0 0.0%	2 5.3%	4 11.8%	25 32.9%	0 0.0%	1 1.3%	35 46.1%	0 0.0%	76 100%
甕(76)	4 26.7%	11 73.3%	0 0.0%	15 100%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	11 73.3%	0 0.0%	0 0.0%	4 26.7%	0 0.0%	15 100%

※上段：計測粒子数，下段：含有率%

附 編

## 棕ノ木遺跡で検出された液状化現象の痕跡

産業技術総合研究所主任研究員 寒川 旭

京都府埋蔵文化財調査研究センターが、平成14(2002)年度に実施した、京都府相楽郡精華町大字下粕の棕ノ木遺跡第6次調査において、大地震に伴う液状化現象の痕跡が検出されたので、概要を報告したい。

### 1. 噴砂の平面形

液状化現象に伴って生じた砂脈(噴砂の通り道)が検出された(写真1)。図1の平面図に示した部分では、



写真1 砂脈の平面形

写真の奥に図3に示したトレンチ壁面が見える。図1はトレンチの向こう側で作成した。

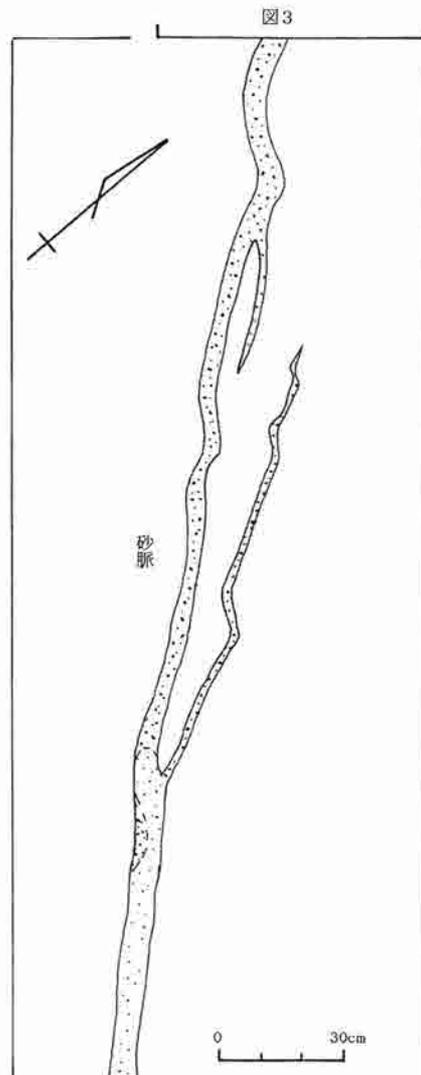


図1 砂脈の平面図

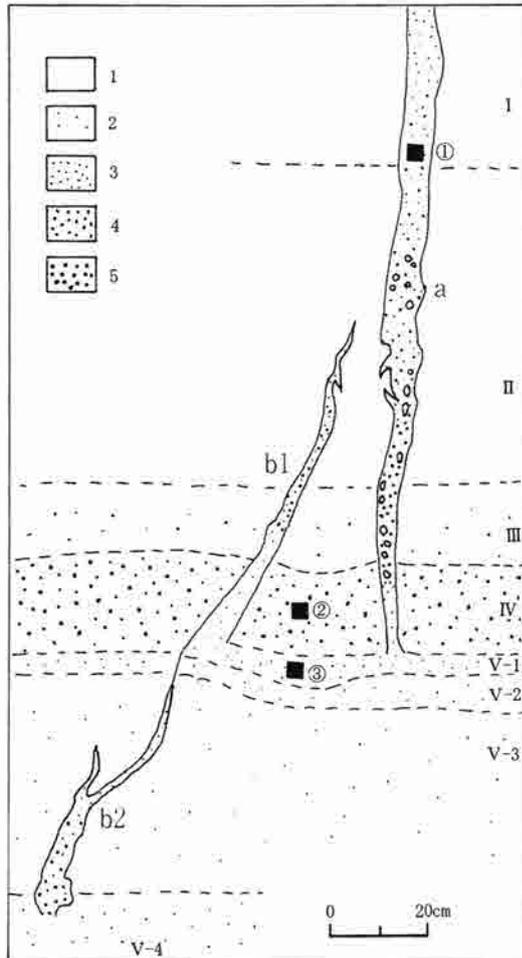


図2 液状化跡の断面図(その1)

図の左がN25°E、■は粒度分析試料採取位置を示す。

1. シルト    2. 極細粒砂    3. 細粒砂  
4. 中粒砂    5. 粗粒砂

最大幅7cmで北西-南東方向に3m以上の長さでのびており、砂脈の内部は大半が細~中粒砂、一部(図の下部)が極細粒砂で構成されていた。

## II. 液状化跡の断面形(その1)

図2は砂脈に斜交する断面図である。説明の便宜上、上位よりI~V層(V層は細分)に区分した。I層は濃灰褐色シルト、II層は褐色シルト、III層は中~細粒砂混じりのシルト、IV層は粗~中粒砂、V-1層はうす褐色の極細粒~細粒砂、V-2層は灰色の極細粒~細粒砂、V-3層はうす褐色の極細粒砂、V-4は青灰色の極細粒~細粒砂である。

砂脈を、図2のようにa・b1・b2と3区分した。このうち、aはV-1層から上昇してI~IV層を引き裂いており、砂脈下部では3cm、中~上部では6cm前後の幅になる。砂脈内部については、最下部ではV-1層と同一の極細粒砂で満たされているが、高さ10cmの位置から中~細粒砂となり、それより上では、細かい粒子が少しずつ卓越するようになり、上部は細粒砂となる(写真2)。

このため、砂脈の最下部のみはV-1層から供給された噴砂、それより上の部分は、IV層から供給された噴砂で満たされていると思える。上に向

かって細かい粒子が卓越する現象は「級化」と呼ばれ、噴砂現象には特徴的に見られるものである(寒川、1999など)。

砂脈b1はV-1層から右斜め上に向かって上昇しており、最下部で8cmの幅を持つが、先端に向かって細くなり、上端は砂脈aから6cm手前で消滅している。b1の内部では、下部がV-1層と類似の極細粒砂、中部になると中~細粒砂、さらに、最上部(細粒砂)に向かって級化が進行している。このため、砂脈aと同様に、最初はIV層から噴砂が供給され、最後にV-1層からの砂が砂脈内部を約20cmの高さまで上昇したものと思える(類例は寒川、2002)。

砂脈b2は最下部が不明で、下位の地層との連続が不明瞭だが、上に向かって細くなり、先端は砂脈b1の左下端に連続する。砂脈の内部は、下部に中~細粒砂、上部に向かって級化が見られ、先端は細~極細粒砂となる。砂脈内部に中粒砂が見られることから、V-4層よりさらに下に堆積した中粒砂を含む地層から噴砂が供給されたと推測される。



写真2 液状化跡の断面形  
図2の砂脈aとb1を示した。

### III. 液状化跡の断面形(その2)

図3は、図2より30cm後に向かって、壁面を削り取って、砂脈と直交する方向の断面を設定したものである。上位よりⅡ～Ⅶ(V層は細分)層に区分したが、図2を作成した後の発掘調査によって上部が少し削除されているので、図2のⅠ層に相当する地層は消滅している。

図3におけるⅡ～Ⅳ層は図2と対応する。Ⅳ層は最大径8mmの礫をわずかに含んでいる。V層は、V1～6に細分したが、図2の場合とかなり層相が異なっており、図3のV1～6は図2のV1～4と対応しない。そして、V1層は細～中粒砂、V2層は極細粒砂、V3層は細粒砂、V4層は極細粒砂、V5層は細粒砂、V6層は細～極細粒砂となる。さらに下位のⅥ層は中粒砂、Ⅶ層は細粒砂である。

砂脈はaおよびbの2本に区分されるが、aは図2のaに連続し、bは図2のb1・b2に対応する。砂脈aは最大幅7cmで、内部はⅣ層から供給された砂で満たされているが、上ほど小さな粒子が卓越する「級化」が明瞭である。bは最大幅3cmで、Ⅱ～V6層までを断続的に引き裂いているが、V4層内で不連続になる。砂脈bの最下部はⅥ層からの砂で満たされているが、そ

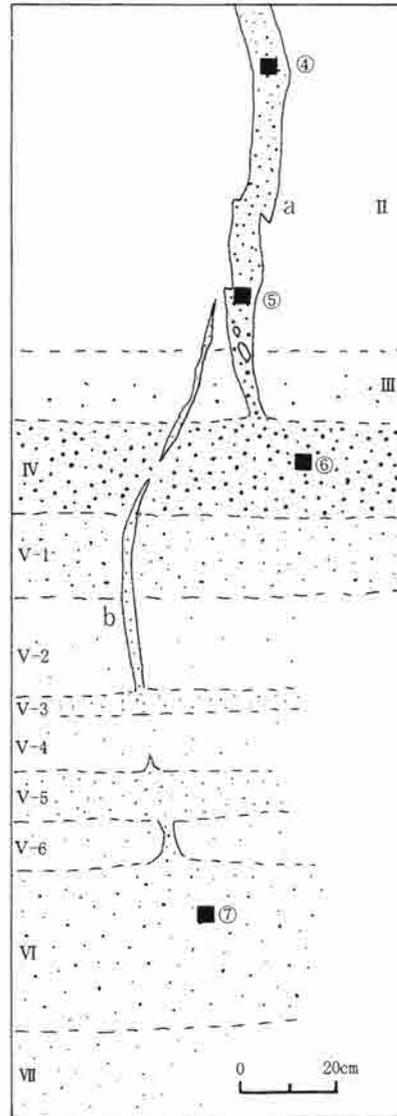


図3 液状化跡の断面図(その2)  
図2を後退させたもので、図1に位置を示した。図の左がN40°E。

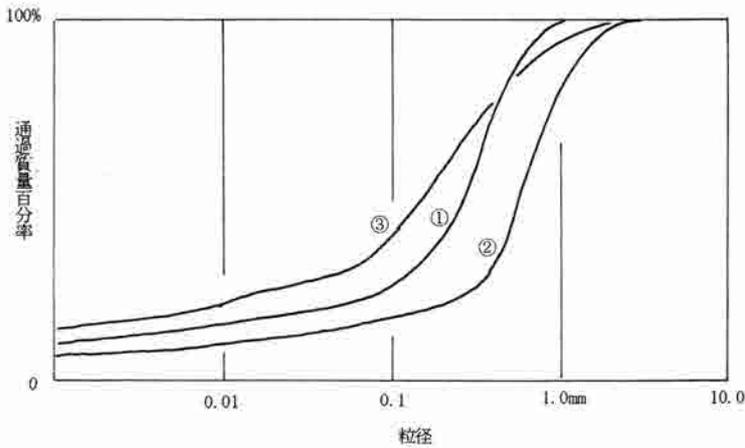


図4 砂の粒径加積曲線(その1)  
図2に関するもので、試料の採取位置は図2に示した。

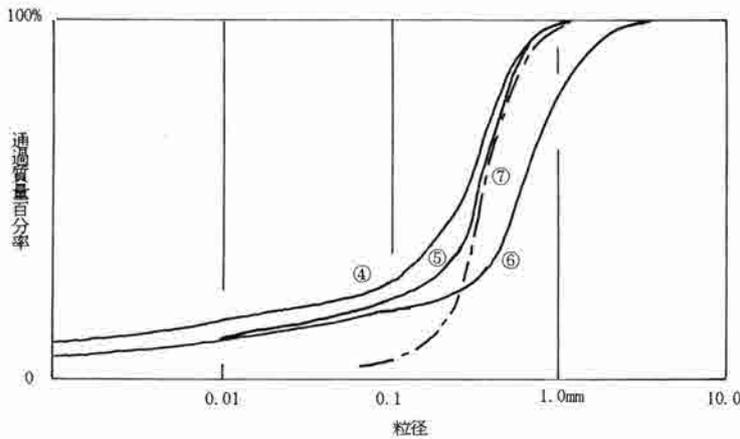


図5 砂の粒径加積曲線(その2)  
図3に関するもので、試料の採取位置は図3に示した。

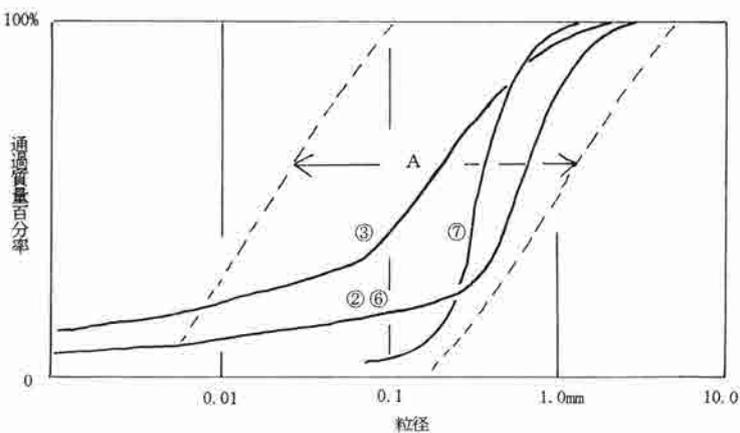


図6 液状化した砂の粒径加積曲線  
Aは特に液状化しやすい粒度組成の範囲。  
②と⑥は全く同じ曲線になった。

れより上では、V3・V5層からも砂が供給された可能性が高い。

#### IV. 粒度分析の結果

図2・3の中で試料を採取して、図4～6に粒径加積曲線を示した。図4は図2に対応しており、試料①～③について示した。この図において、①と②は傾向のよく似た曲線を描いており、①の方が細かい粒子の比率が多い。③は①・②に比べて細かい粒子の比率が多い。この結果、級化の存在を考えると、砂脈a内部の①の部分は、IV層(試料②)から供給されたものであることがわかる。そして、砂脈aには、IV層の砂が供給され、最後の段階でV-1層の砂がわずかに上昇したことになる。

図5は図3に対応しており、試料④～⑦について示した。④～⑥は傾向のよく似た曲線を示し、⑥から④に向かって細かい粒子の比率が段階的に増加する様子(級化)がよく把握できる。⑦は全く異なる曲線を描いている。

図6は、液状化した地層の試料②③⑥⑦を示したも

のであるが、②と⑥は同一の地層で、全く同じ曲線を示した。この図には、日本港湾協会(1979)による、粒度組成から見た液状化し易さの分類を示しているが、当遺跡で液状化して噴砂を供給した地層はすべて、「特に液状化し易い」とされるAの範囲に含まれている。

この中で、③はAの中央に位置しており、最も液状化しやすい粒度組成と思えるが、図2において、③を採取したV-1層よりも、むしろ②を採取したIV層の方が激しく液状化して、大量の噴砂を供給している。個々の地震において、実際にどの地層が液状化するかについては、その地層の地質的な位置や地下水の状態が関与するものと思える。

## V. 地震の年代

当遺跡の液状化跡は縄文時代晩期頃の地層を引き裂いているが、13世紀後半に作られた井戸の掘り込み土には、逆に削られているので、13世紀後半より前に生じたことになる。さらに、砂脈の引き裂く地層の年代を総合判断すると、縄文時代晩期より古くはならないと推定される。

図7は1596年の伏見地震によって生じた地震の痕跡を示したもの(寒川、2001など)で、当地域

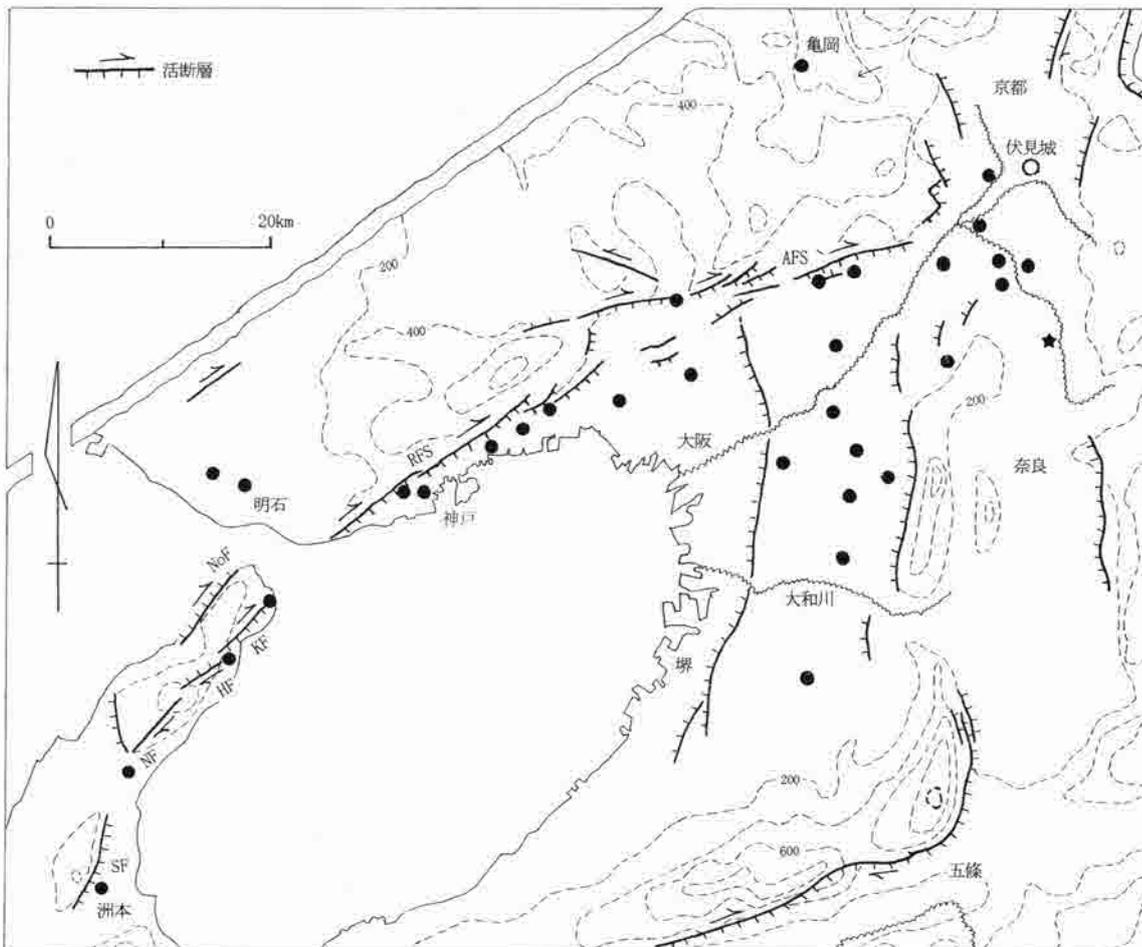


図7 大阪平野周辺の主な活断層と伏見地震の痕跡

●は伏見地震の痕跡を検出した遺跡。★は椋ノ木遺跡。

ATL有馬一高槻構造線活断層系、RFS六甲断層系、KF楠本断層、HF東浦断層、NF野田尾断層、SF先山断層、(これらの断層が伏見地震を引き起こした可能性が高い；兵庫県南部地震を引き起こしたNoF野島断層の一つ前の活動は紀元1世紀である)

周辺にはこの地震によって生じた液状化現象の痕跡が多く検出されている。一方、近畿南部では、90～150年の間隔で繰り返し発生している南海地震の痕跡が多く見られており、当地域周辺に顕著な液状化跡が残るような強い地震動が生じたことも考えられる。

また、伏見地震については、この地震を引き起こした有馬－高槻構造線活断層系の一つ前の活動が縄文時代晩期と判明しているので(寒川ほか、1996；寒川、2001など)、一つ前の古伏見地震の痕跡である可能性もある。

## VI. ま と め

当遺跡において、複数の地層において液状化現象が発生し、砂脈(上部では一つに収斂)内に噴砂が上昇した様子が詳しく把握できた。噴砂の供給は、図中に区分した、それぞれの地層ごとに行われており、堆積当時の地層の構成が、大地震に伴う液状化とそれに伴う砂粒の移動において、一つの単位となっていることがわかった。

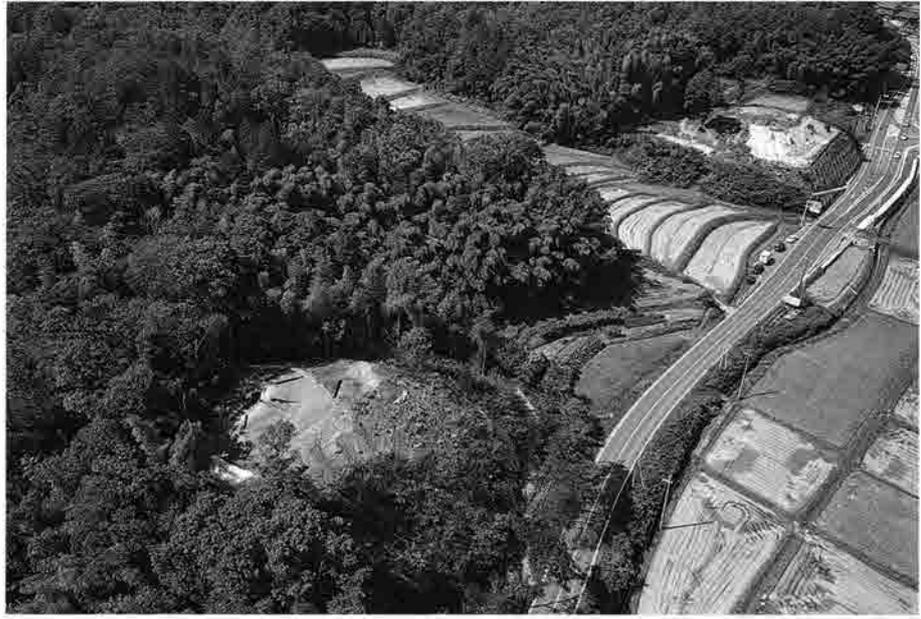
そのほか、噴砂の上昇に当たって、級化の存在が明瞭に確認できた。地震跡を形成した地震の年代について現時点では不明であるが、古伏見地震の可能性も考えられる。

**謝辞** 当遺跡の現地調査、および、本稿の作成において、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの松井忠春氏・森島康雄氏には多くのご教示を頂きました。心より感謝いたします。

## 文献

- 日本港湾協会(1979)『港湾施設の技術上の基準・同解説』  
寒川旭(1999)「遺跡に見られる液状化現象の痕跡」(『地学雑誌』108) PP.391-398  
寒川旭(2001)『日本を知る 地震』 大巧社 p.173  
寒川旭(2002)「遺跡で発掘された液状化跡」(『DPRI Newsletter』 京都大学防災研究所 25) PP.4-7  
寒川旭・杉山雄一・宮地良典(1996)「有馬－高槻構造線活断層系の活動履歴及び地下構造調査」『地質調査所研究資料集No.259(平成7年度活断層研究調査概要報告書)』 PP.33-46

# 圖 版



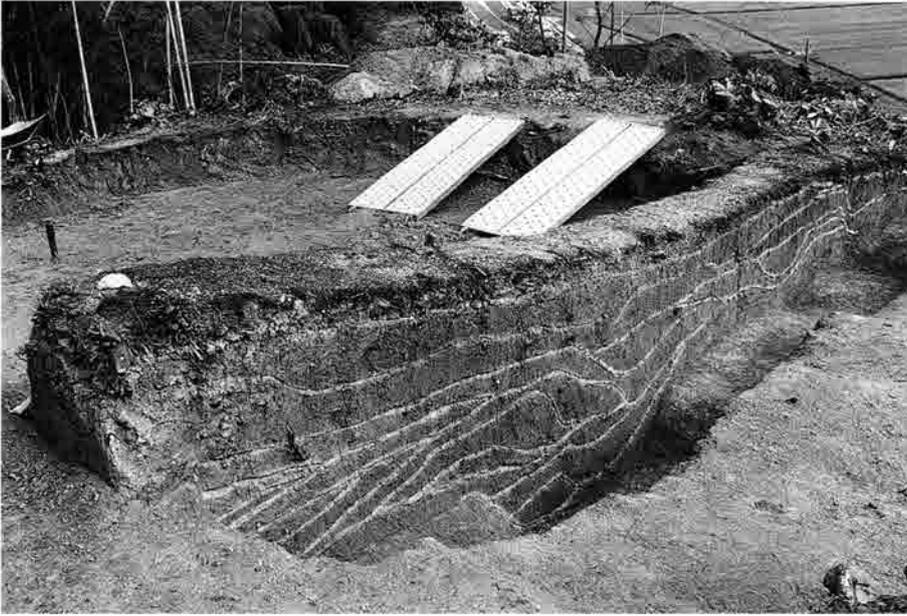
(1) 調査地遠景(北から)



(2) 調査前近景(北東から)



(3) 今井古墳・今井下層古墳近景  
(南東から)



(1) 今井下層古墳主体部検出状況  
(南から)



(2) 今井下層古墳主体部検出状況  
(南東から)



(3) 今井下層古墳主体部内堆積状況  
(南から)



(1) 今井下層古墳主体部完掘状況  
(北西から)



(2) 古墳近景(南東から)



(1) 奥壁近景(南東から)



(2) 左側壁近景(南から)



(3) 右側壁近景(南から)



(1) 前壁近景(北西から)



(2) 玄室内堆積状況(南東から)



(3) 玄室内堆積状況(南東から)



(1) 掘形検出状況(北西から)



(2) 掘形内堆積状況(南東から)



(3) 近景(南東から)



(1) 玄室内遺物出土状況(南東から)



(2) 玄室内遺物出土状況(南西から)



(3) 玄室内遺物出土状況(北西から)



(1) 玄室内遺物出土状況(北から)



(2) 玄室内遺物出土状況(北東から)



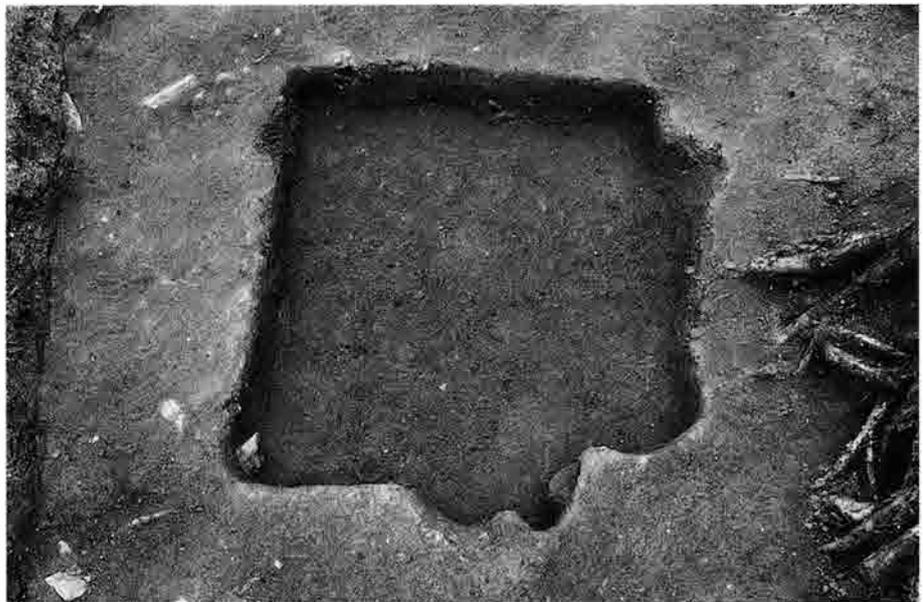
(3) 羨道内遺物出土状況(南から)



(1) 棺痕跡近景(南東から)



(2) S X01近景(北西から)



(3) S X01完掘状況(北西から)



4



2



3



1



9



8



7



10



13



12



15



14

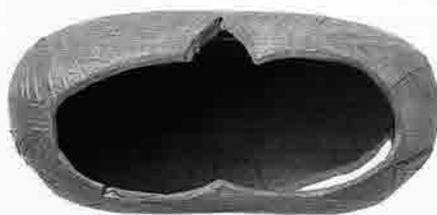


18



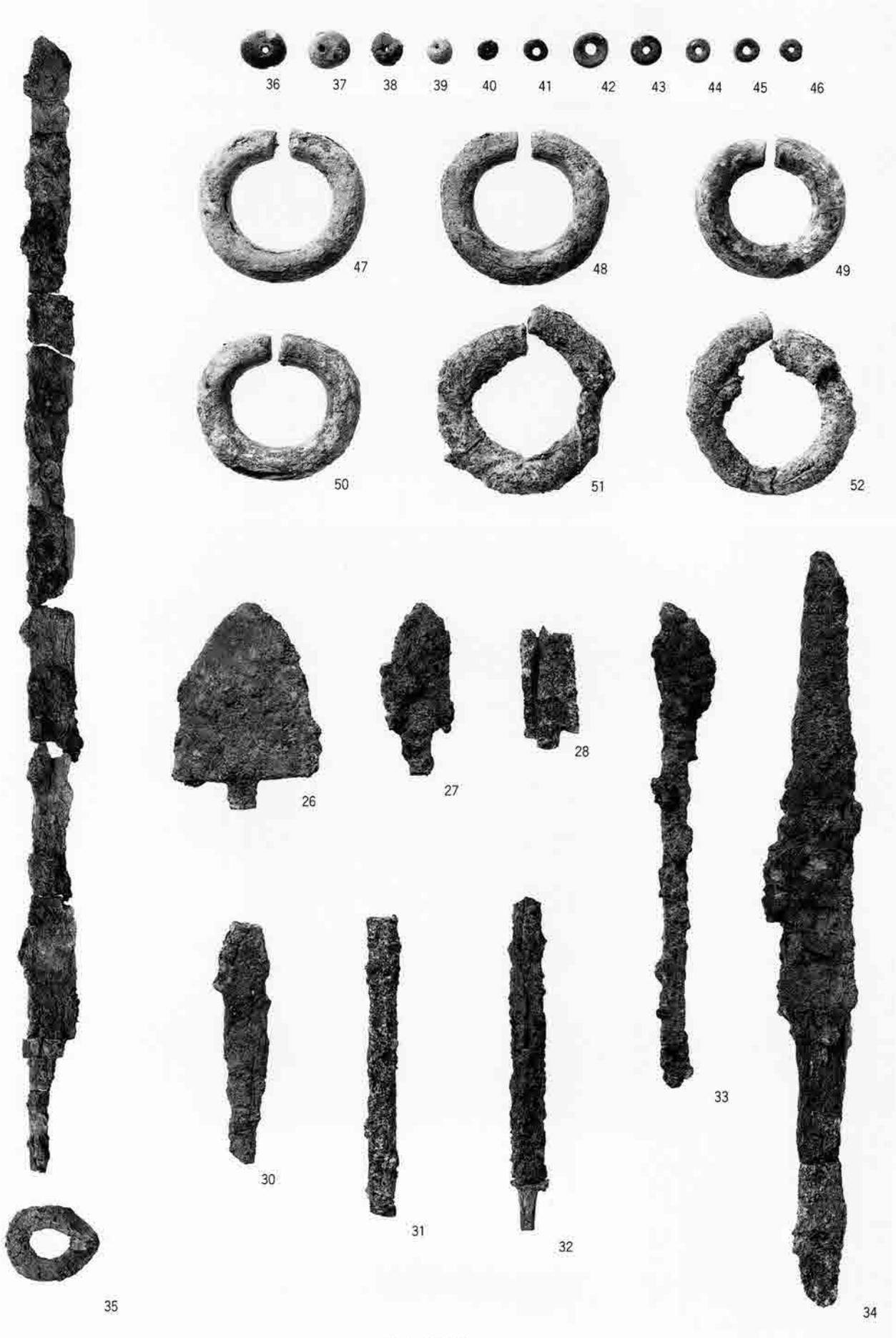
19

(1)出土遺物(2)



25

(2)出土遺物(3)



出土遺物(4)



(1) 池上遺跡第15次調査南地区  
(南から)



(2) 池上遺跡第15次調査南地区  
(上が南)



(3) 池上遺跡第15次調査第1トレンチ(上が北)



(1) 池上遺跡第15次調査第1トレンチ(西から)



(2) 池上遺跡第15次調査第1トレンチSK113(北から)



(3) 池上遺跡第15次調査第2トレンチ(上が北)



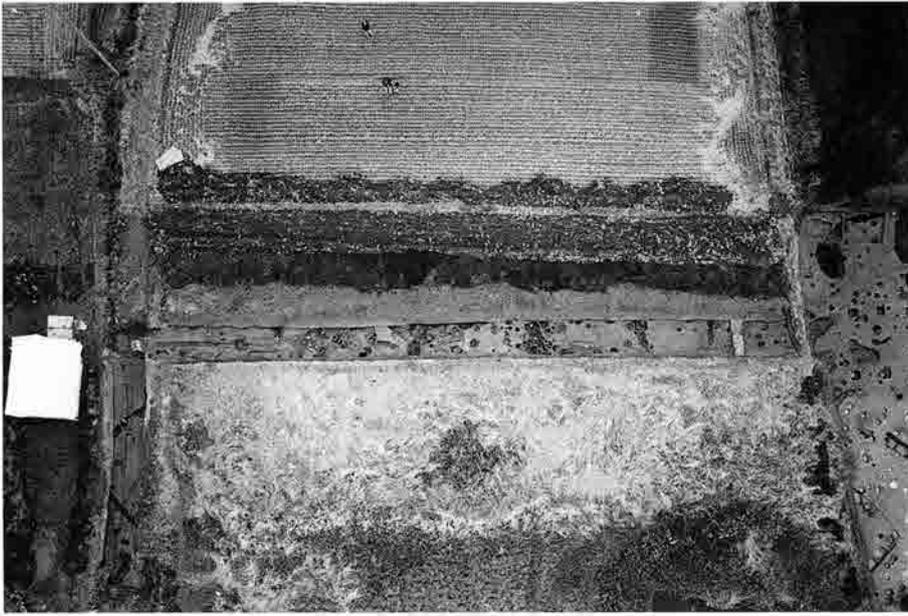
(1)池上遺跡第15次調査第2トレンチSH203(西から)



(2)池上遺跡第15次調査第3・4トレンチ(上が南)



(3)池上遺跡第15次調査第3トレンチSH301(北西から)



(1) 池上遺跡第15次調査第5トレンチ(上が東)



(2) 池上遺跡第15次調査第5トレンチ北部(上が北)



(3) 池上遺跡第15次調査第5トレンチS D568(北東から)



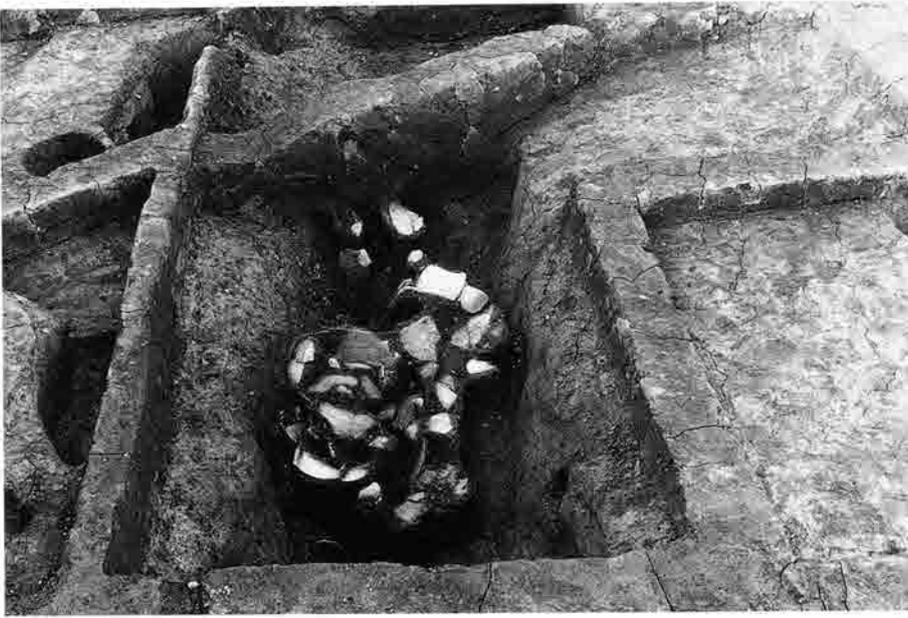
(1) 池上遺跡第15次調査第5トレンチ S D552(北から)



(2) 池上遺跡第15次調査北地区(南から)



(3) 池上遺跡第15次調査北地区(上が東)



(1)池上遺跡第15次調査第7トレンチ S D739(南から)



(2)池上遺跡第15次調査第8トレンチ S D820(東から)



(3)池上遺跡第15次調査第8トレンチ S H899(北から)



(1) 池上遺跡第15次調査第8・9  
トレンチ(西から)



(2) 池上遺跡第15次調査S D884  
(西から)



(3) 池上遺跡第15次調査第8トレ  
ンチS H854(西から)



(1)池上遺跡第15次調査第8トレンチ S H803・804(南から)



(2)池上遺跡第15次調査第8トレンチ S E810(南から)



(3)池上遺跡第15次調査第8トレンチ S E810(東から)



(1)池上遺跡第15次調査第8トレンチ S X898(南から)



(2)池上遺跡第15次調査第9トレンチ(上が西)



(3)池上遺跡第15次調査第8トレンチ S K905・906(西から)



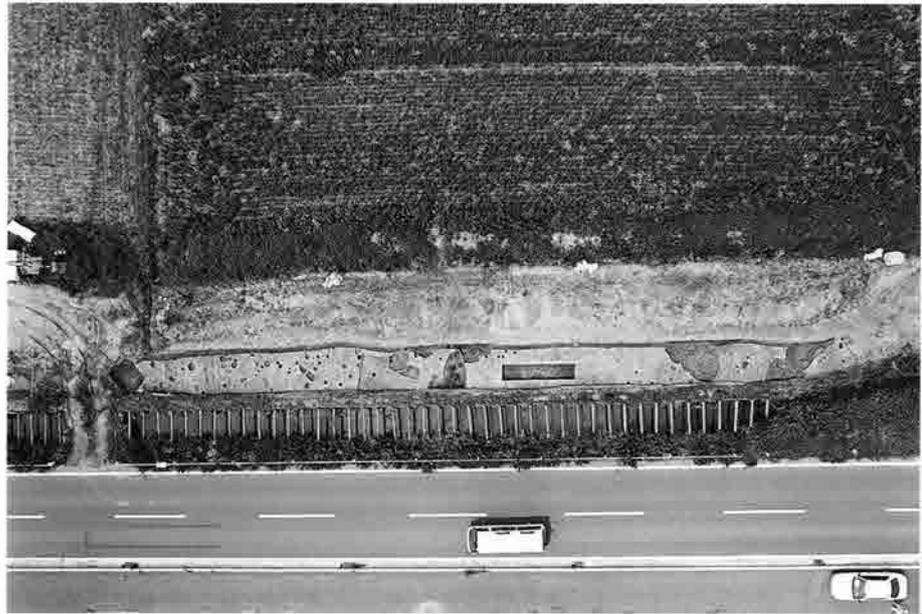
(1)池上遺跡第15次調査第9トレンチS H901・902(西から)



(2)池上遺跡第15次調査第9トレンチS H904竈(東から)



(3)池上遺跡第16次・野条遺跡第9次調査地全景(南から)



(1)池上遺跡第16次調査第1トレンチ(上が西)



(2)池上遺跡第16次調査第1トレンチ調査風景(北から)



(3)池上遺跡第16次調査第1トレンチSK116(北西から)



(1) 池上遺跡第16次調査第1トレンチS H103(北西から)



(2) 池上遺跡第16次調査第2トレンチ(上が東)



(3) 池上遺跡第16次調査第2トレンチ(南から)



(1) 池上遺跡第16次調査第2トレンチ(北から)



(2) 池上遺跡第16次調査第3・4トレンチ(上が北)



(3) 池上遺跡第16次調査第3トレンチS D301(北から)



(1)池上遺跡第16次調査第4トレンチ(南から)



(2)池上遺跡第16次調査第4トレンチ(北から)



(3)野条遺跡第9次調査第1・2トレンチ(上が南)



(1)野条遺跡第9次調査第1トレンチ調査風景(北から)



(2)野条遺跡第9次調査第1トレンチS D101(南から)



(3)野条遺跡第9次調査第1トレンチS D102(東から)



38



131



106



41



80



43



7



8



120



4



2



21



25



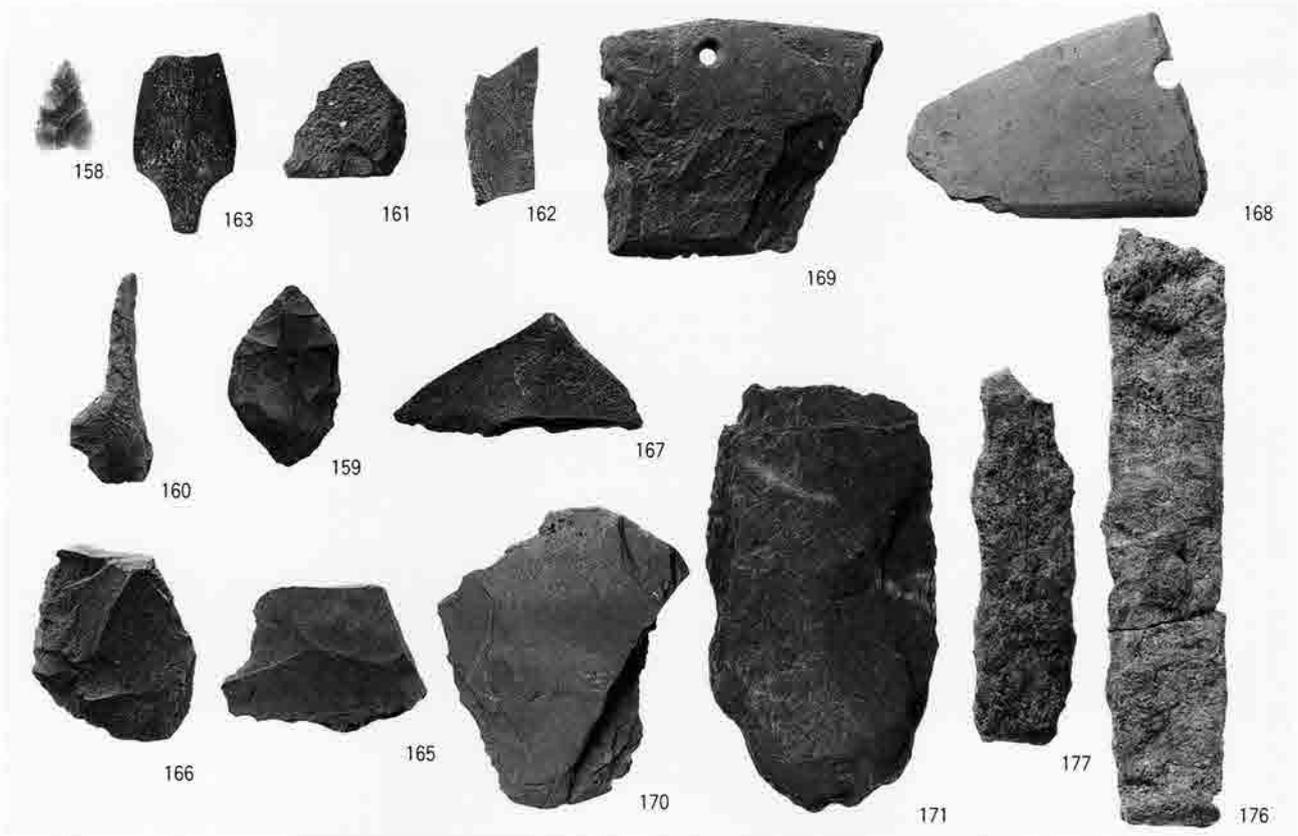
96



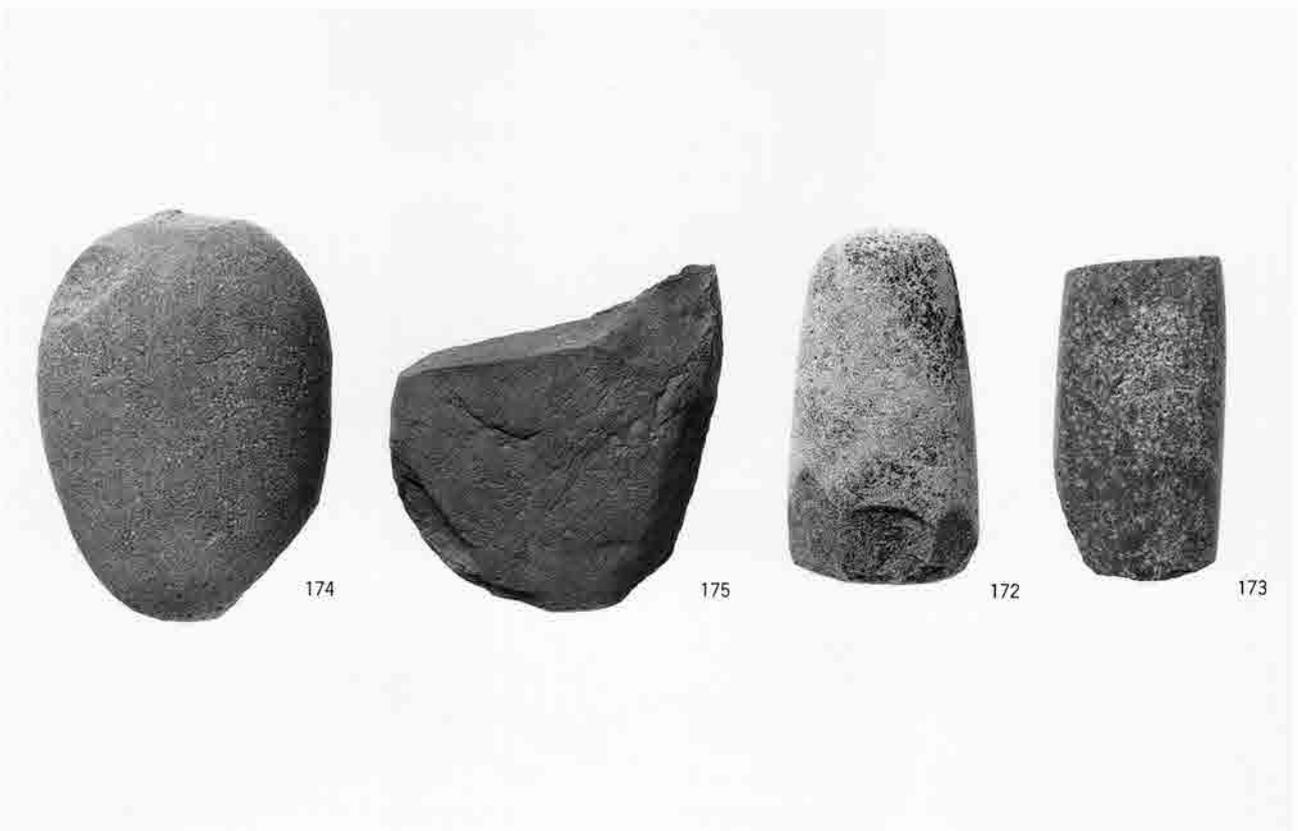
23



29



(1)池上遺跡・野条遺跡出土石器・鉄器



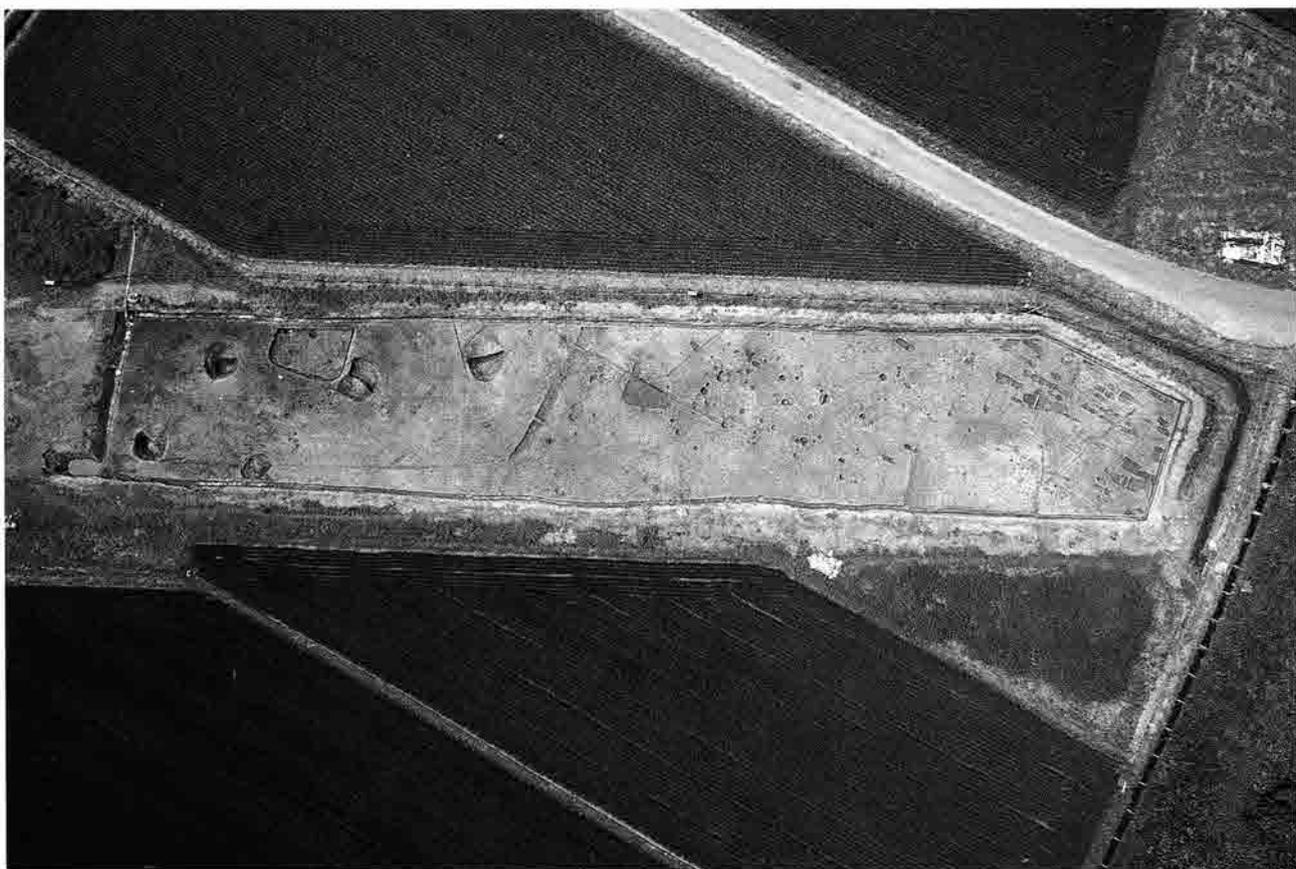
(2)池上遺跡出土石器



(1) 調査地全景(北から)



(2) 調査地全景(東から)



(1) A地区全景(右が北)



(2) B地区全景(右が北)



(1) A地区全景(南から)



(2) B地区全景(南から)



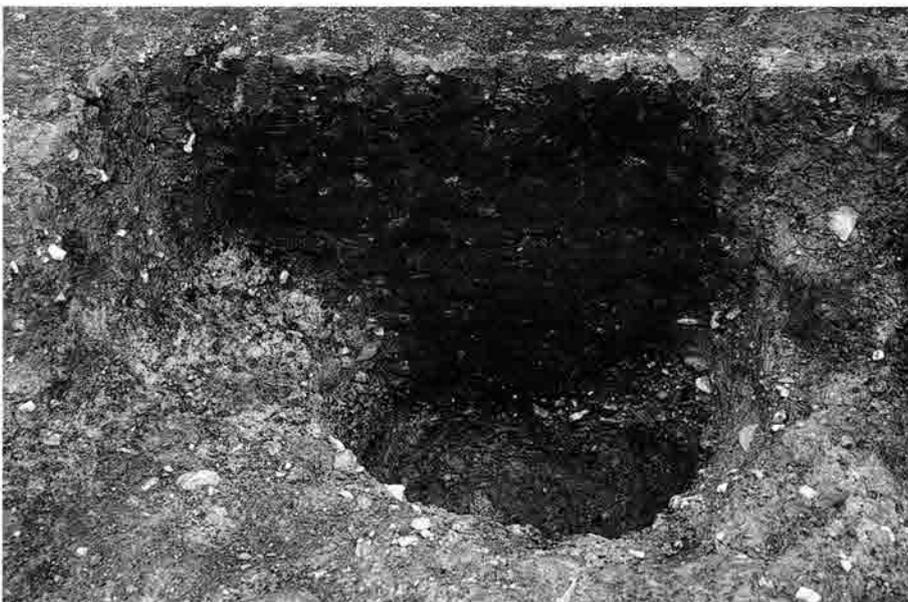
(3) B地区重機掘削状況(北から)



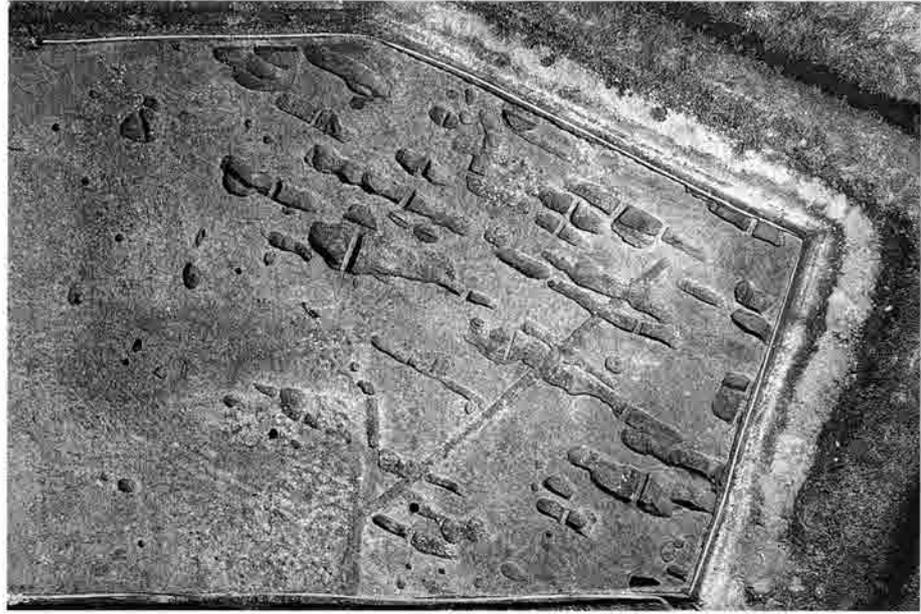
(1) A地区竪穴式住居跡 S H0307  
全景(右が北)



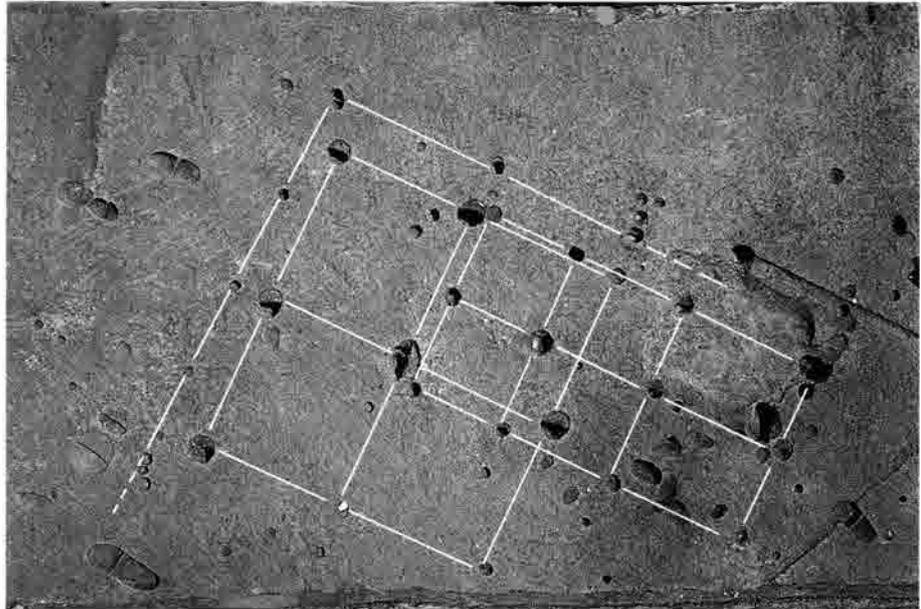
(2) A地区竪穴式住居跡 S H0307  
全景(南から)



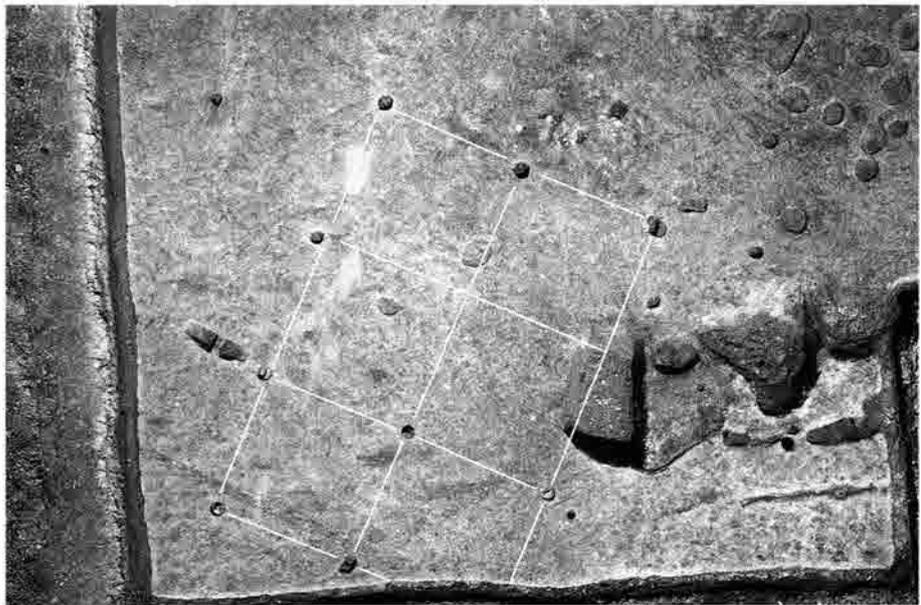
(3) A地区竪穴式住居跡 S H0307  
土坑検出状況(東から)



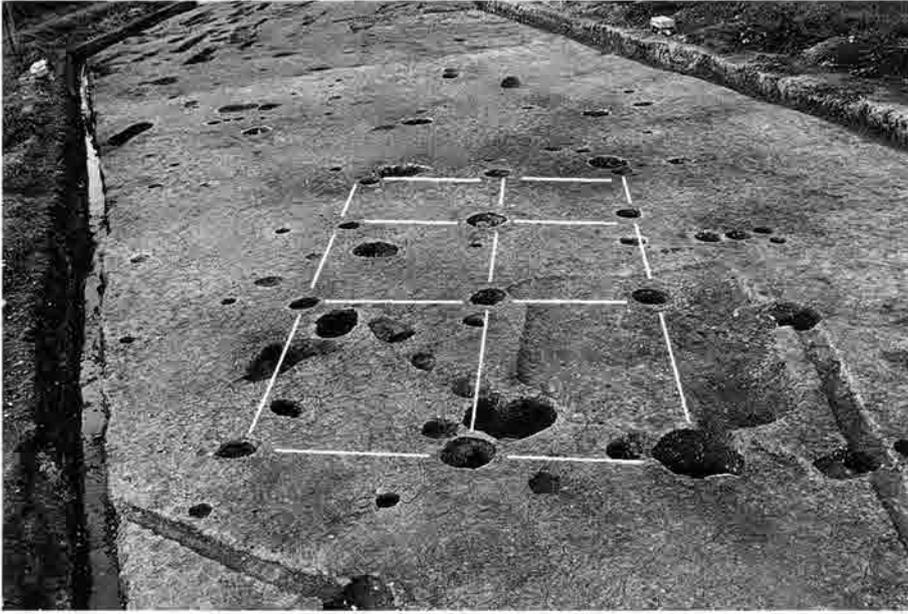
(1) A地区溝検出状況(右が北)



(2) A地区掘立柱建物跡S B0306・0349検出状況(上が東)



(3) B地区掘立柱建物跡S B0344  
検出状況(上が北)



(1) A地区掘立柱建物跡 S B 0349  
全景(南から)



(2) A地区掘立柱建物跡 S B 0306  
全景(南から)



(3) A地区掘立柱建物跡 S B 0306  
検出状況(南から)



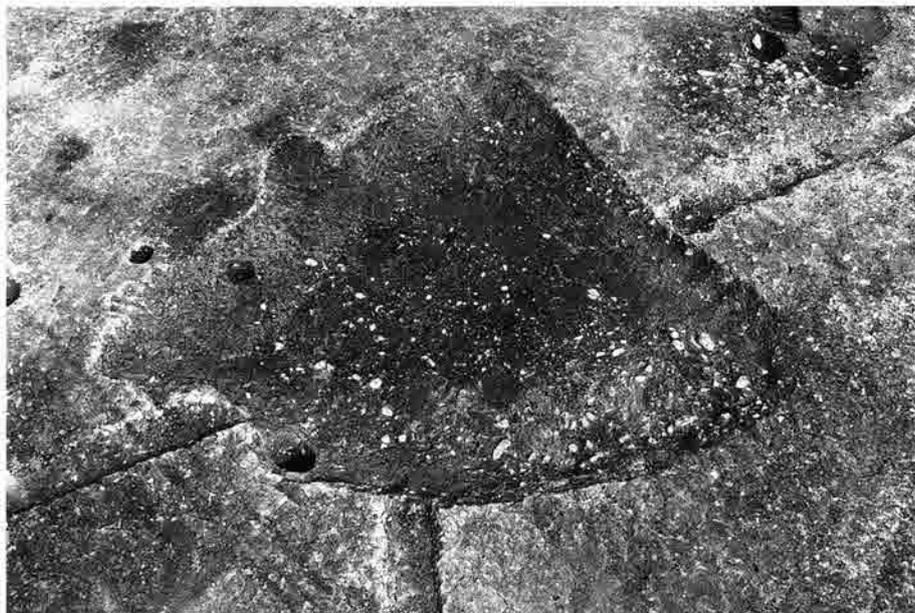
(1) A地区掘立柱建物跡 S B0349  
出土瓦質土器(南から)



(2) A地区掘立柱建物跡 S B0306  
柱穴根石検出状況(南から)



(3) A地区掘立柱建物跡 S B0349  
柱穴根石検出状況(南から)



(1) A地区土坑S K0301全景  
(北西から)



(2) A地区土坑S K0334全景  
(南から)



(3) A地区土坑S K0305全景  
(南から)



(1) A地区土坑検出状況(南から)



(2) A地区土坑S K0351埋土の状況  
(東から)



(3) A地区土坑S K0303(西から)



(1) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
検出状況(北西から)



(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
遺物出土状況(北から)



(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
完掘状況(北から)



(1) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
炉跡検出状況(北から)



(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
炉跡検出状況(南から)



(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
炉跡検出状況(南東から)



(1) B地区竪穴式住居跡S H0301  
炭化物出土状況(北から)



(2) B地区竪穴式住居跡S H0301  
炭化物出土状況(北から)



(3) B地区竪穴式住居跡S H0301  
炭化物出土状況(西から)

(1) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
手焙形土器出土状況  
(上が南西)



(2) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
甕出土状況(東から)



(3) B地区竪穴式住居跡 S H0301  
壺出土状況(東から)





(1) B地区竖穴式住居跡 S H0301  
高杯出土状況(南から)



(2) B地区竖穴式住居跡 S H0301  
器台ほか出土状況(北から)



(3) B地区竖穴式住居跡 S H0301  
甕出土状況(上が北)



(1) B地区竪穴式住居跡S H0301  
石鏃出土状況(西から)



(2) B地区竪穴式住居跡S H0301  
鉄鏃検出状況(北から)



(3) B地区竪穴式住居跡S H0301  
砥石検出状況(南西から)



(1) B地区土坑S K0346検出状況  
(北西から)



(2) B地区土坑S K0338検出状況  
(北から)



(3) B地区土坑S K0431検出状況  
(南から)



(1) 実測作業風景(南東から)



(2) A地区竪穴式住居跡 S H0307  
掘削風景(北西から)



(3) B地区土坑 S K0341掘削風景  
(南東から)



8



13



9



7



15



17



16



41



42



26



14



24



6



12



32



40



31



19



22



23



23



43



44



44



(1) A地区調査前の状況(南東から)



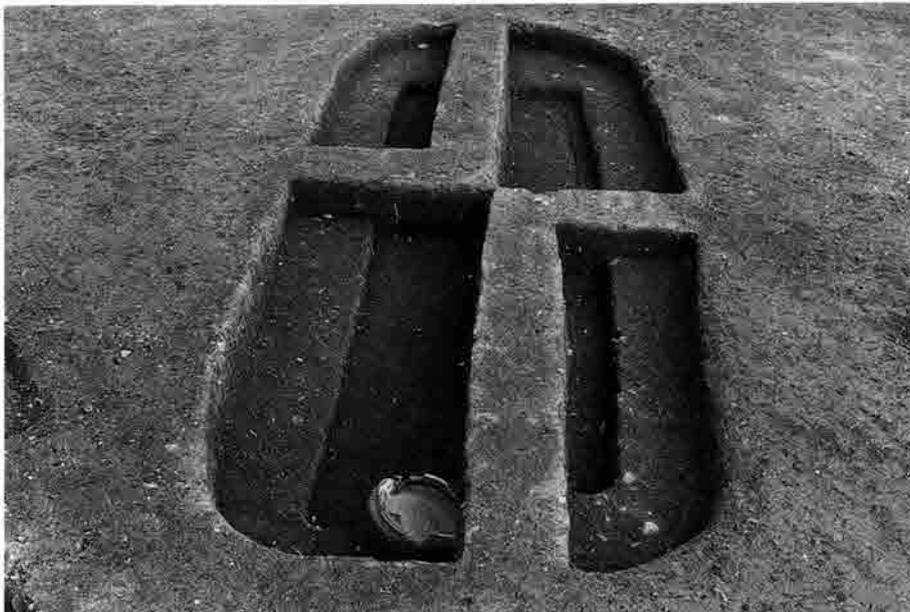
(2) A地区竪穴式住居跡S H36  
完掘状況(南西から)



(3) A地区竪穴式住居跡S H42  
完掘状況(南西から)



(1) A地区S H73完掘状況  
(南東から)



(2) A地区S K05遺物出土状況  
(北西から)



(3) A地区S K05完掘状況  
(南西から)



(1) A地区SK82土器棺検出状況  
(南西から)



(2) A地区畦および上層土器  
取り上げ後(西から)



(3) A地区SK82完掘状況  
(南西から)



(1) A地区I-11号墳完掘状況  
(南西から)



(2) A地区S D120遺物出土状況  
(西から)



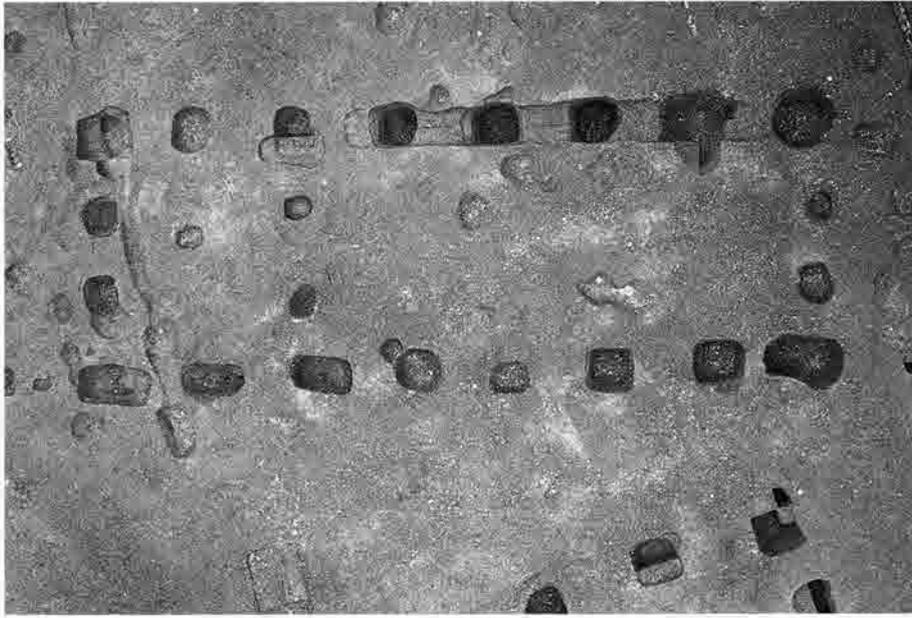
(3) A地区S D120遺物出土状況  
(南西から)



(1) A地区建物群全景(南東から)



(2) A地区全景(北西から)



(1) A地区S B100完掘状況  
(上が北)



(2) A地区S B31完掘状況  
(西から)



(3) A地区S B32完掘状況  
(北から)



(1) A地区S B103完掘状況  
(東から)



(2) A地区S B105完掘状況  
(南から)



(3) A地区S B104完掘状況  
(南東から)



(1) A地区S B 100 P 15断面  
(北から)



(2) A地区S B 100 P 19断面  
(北から)



(3) A地区S B 103 P 11断面  
(南から)



(1) A地区S B103P 5断面  
(南から)



(2) A地区S B104P 3断面  
(南西から)



(3) A地区S B104P 5断面  
(北東から)



(1) A地区S B 102P 5  
遺物出土状況(南から)



(2) A地区S B 108P 5  
遺物出土状況(南から)



(3) A地区S K 06遺物出土状況  
(東から)



(1) B地区近景(北東から)



(2) B地区S A01・02近景  
(北西から)



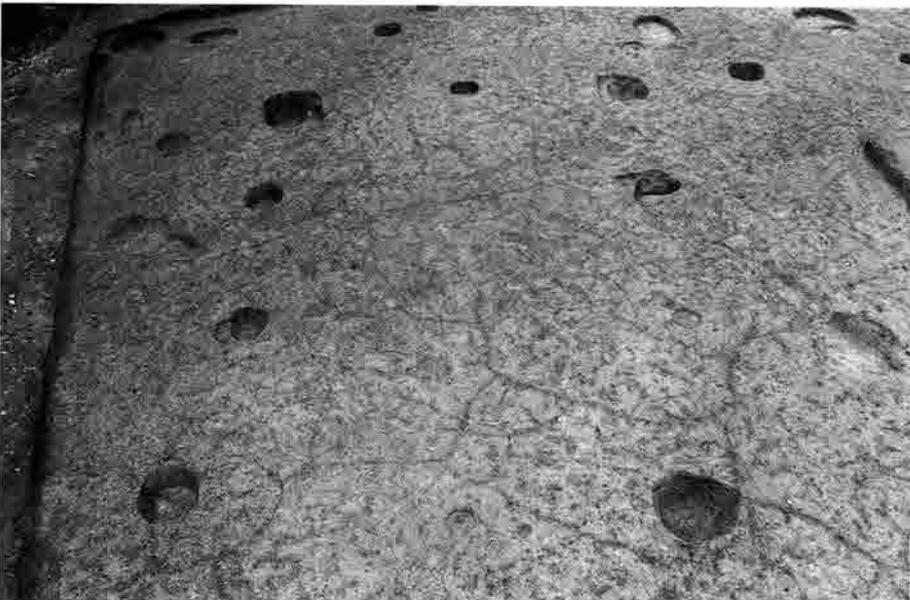
(3) B地区S A03近景(北西から)



(1) B地区S A 03・P 63近景  
(南東から)



(2) B地区S A 03・P 63遺物  
出土状況(南東から)



(3) B地区S B 05近景(南東から)



(1) C地区S B01近景(南東から)



(2) C地区S X02近景(北から)



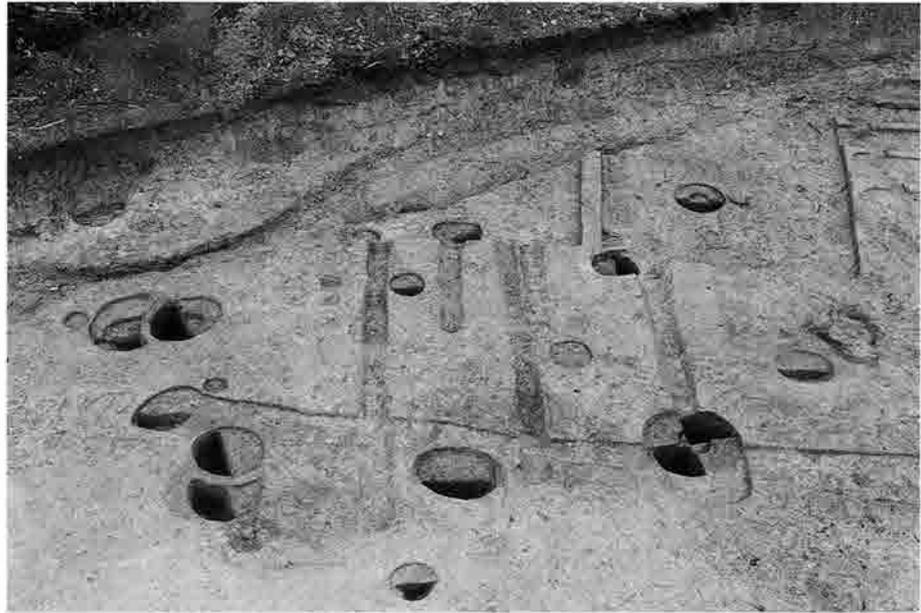
(3) C地区S X02・S R03近景  
(北西から)



(1) D地区全景(北西上空から)



(2) D地区S B02・03全景(北東上空から)



(1) D地区SH01・SB04近景  
(北東から)



(2) D地区SB02検出状況(東から)



(3) D地区SB02近景(東から)



(1) D地区 S B02・03近景(北から)



(2) D地区 S B02近景(東から)



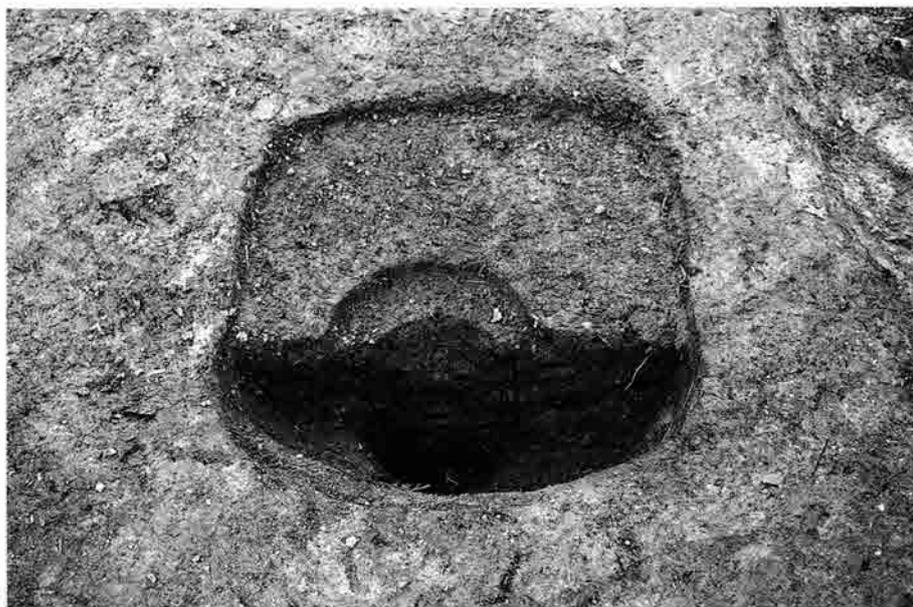
(3) D地区 S B02近景(北から)



(1) D地区S B03近景(東から)



(2) D地区P 309近景(北東から)



(3) D地区S B03柱穴近景(南から)



(1) D地区 S A 05近景(北から)



(2) D地区 S D 35・36近景(北から)



(3) D地区 S D 35近景(南東から)



(1) D地区S D35堆積状況  
(南東から)



(2) D地区S D36近景(南東から)



(3) D地区S D36遺物出土状況  
(北西から)



(1) E地区全景(南東から)



(2) E地区S K 221遺物出土状況  
(北西から)



(3) E地区S K 221完掘状況  
(北から)



(1) E地区S K62土器棺出土状況  
(南東から)



(2) E地区S K62完掘状況  
(南東から)



(3) E地区S H141完掘状況  
(北西から)



(1) E地区S B94完掘状況(東から)



(2) E地区S B92(手前)・93  
完掘状況(北東から)



(3) E地区S B227完掘状況  
(南東から)



(1) E地区S D50断面(南東から)



(2) E地区S D35断面(南東から)



(3) E地区S D36断面(南東から)



(1) E地区S K150遺物出土状況  
(南東から)



(2) E地区S K150完掘状況  
(東から)



(3) E地区S D36遺物出土状況  
(南東から)



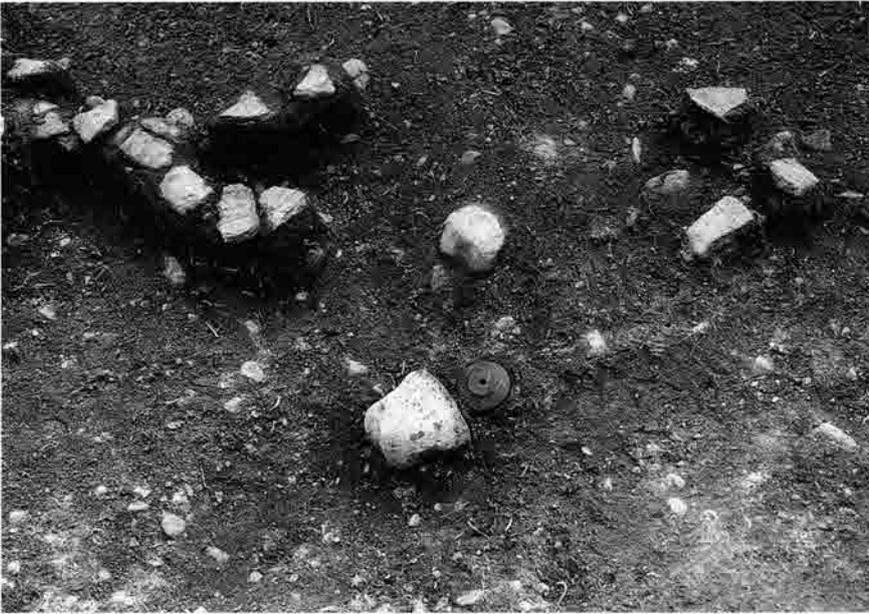
(1) F地区調査前の状況(東から)



(2) F地区Ⅲ-1号墳完掘状況  
(南西から)



(3) F地区周濠埋土堆積状況  
(北東から)



(1) F地区遺物出土状況(北から)



(2) F地区周濠北東側遺物出土状況  
(南西から)



(3) F地区周濠北西側遺物出土状況  
(東から)



(1) H地区調査前の状況(北東から)



(2) H地区全景(南から)



(3) H地区SH22完掘状況  
(南東から)



(1) H地区 S B 95完掘状況(北から)



(2) H地区 S B 96完掘状況(東から)



(3) H地区 S B 145完掘状況  
(南西から)





17



22



18



23



19



26



20



27



30



34



31



38



32



42



33



44



45



46



49



50



54



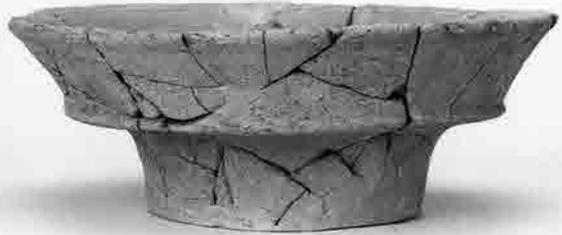
55



120



56



116



117



121



60



81



74



79



76



91



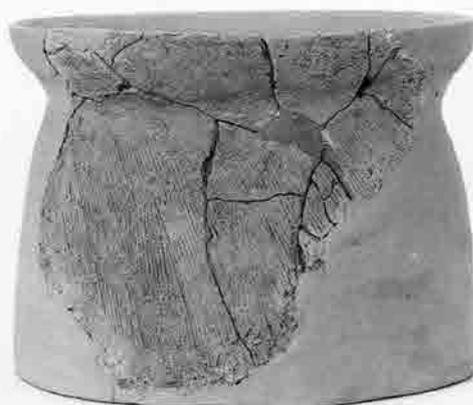
59



102



101



104



122



126



127



136



140



161



164



172



173



174



177



178



179



184



185



189



190



200



195



201



202





208



212



209



213



211



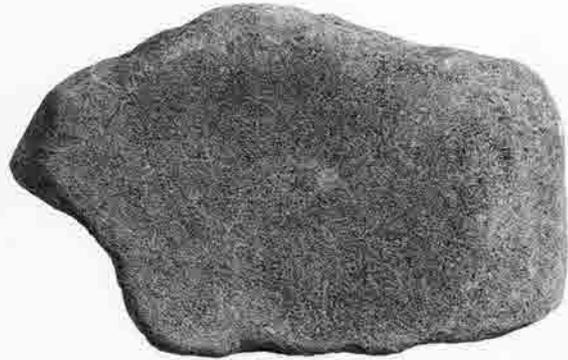
262



263



266



267

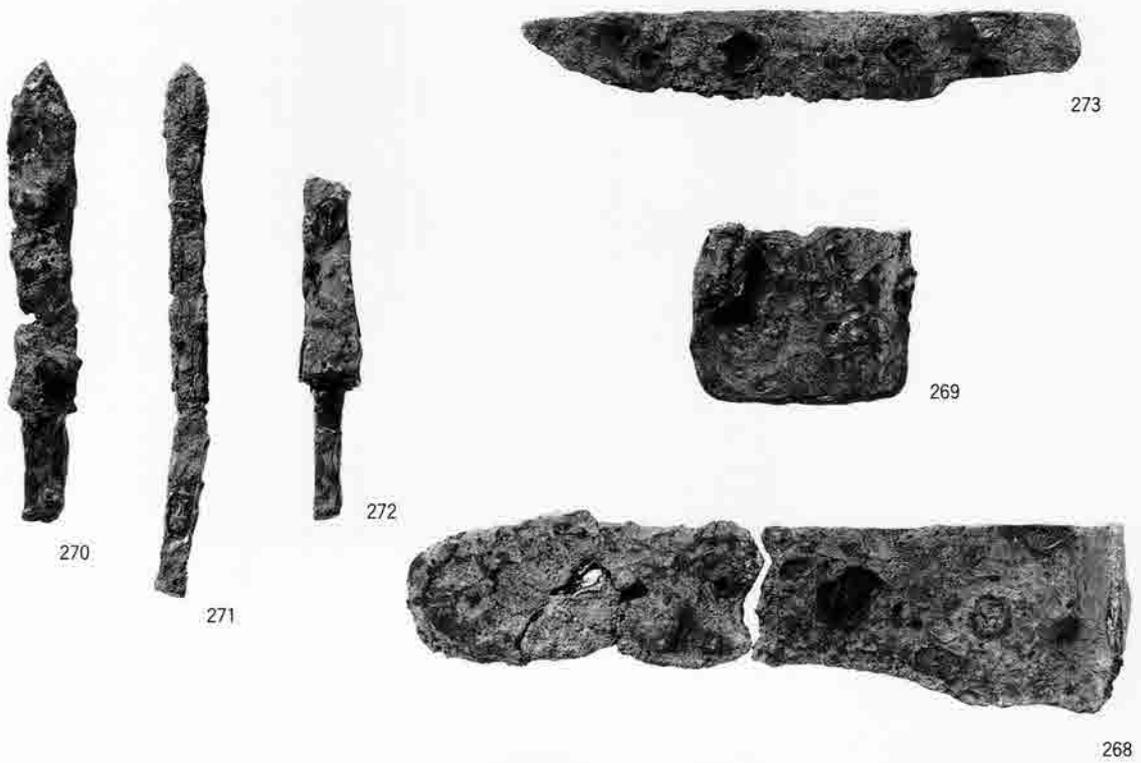
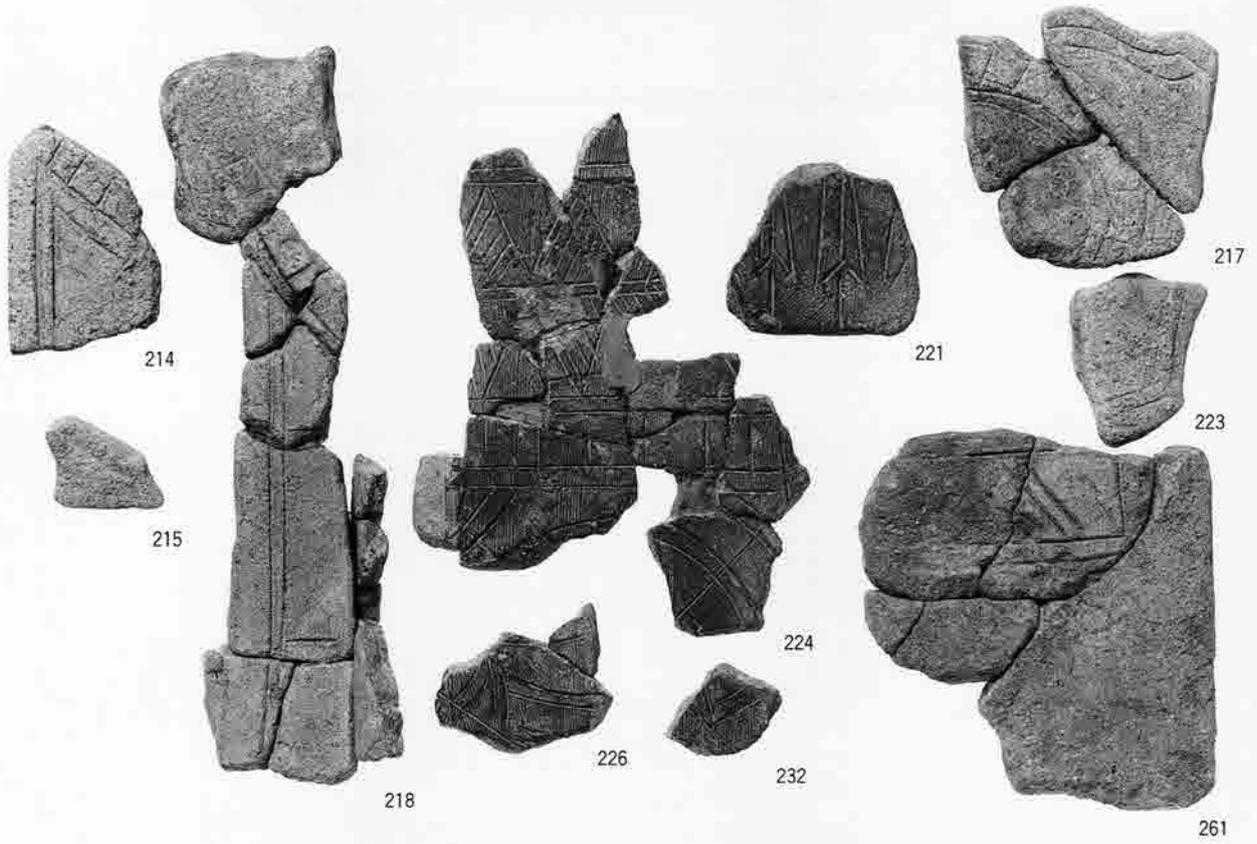


264



265

出土遺物(9)





(1) 第1トレンチ全景(北から)



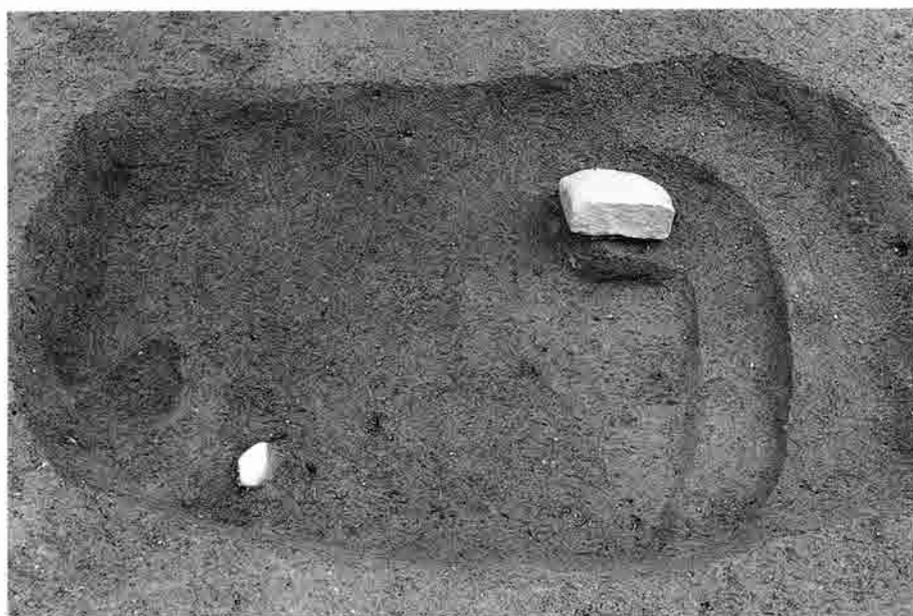
(2) 第3トレンチ全景(北から)



(3) 第4トレンチ全景(北から)



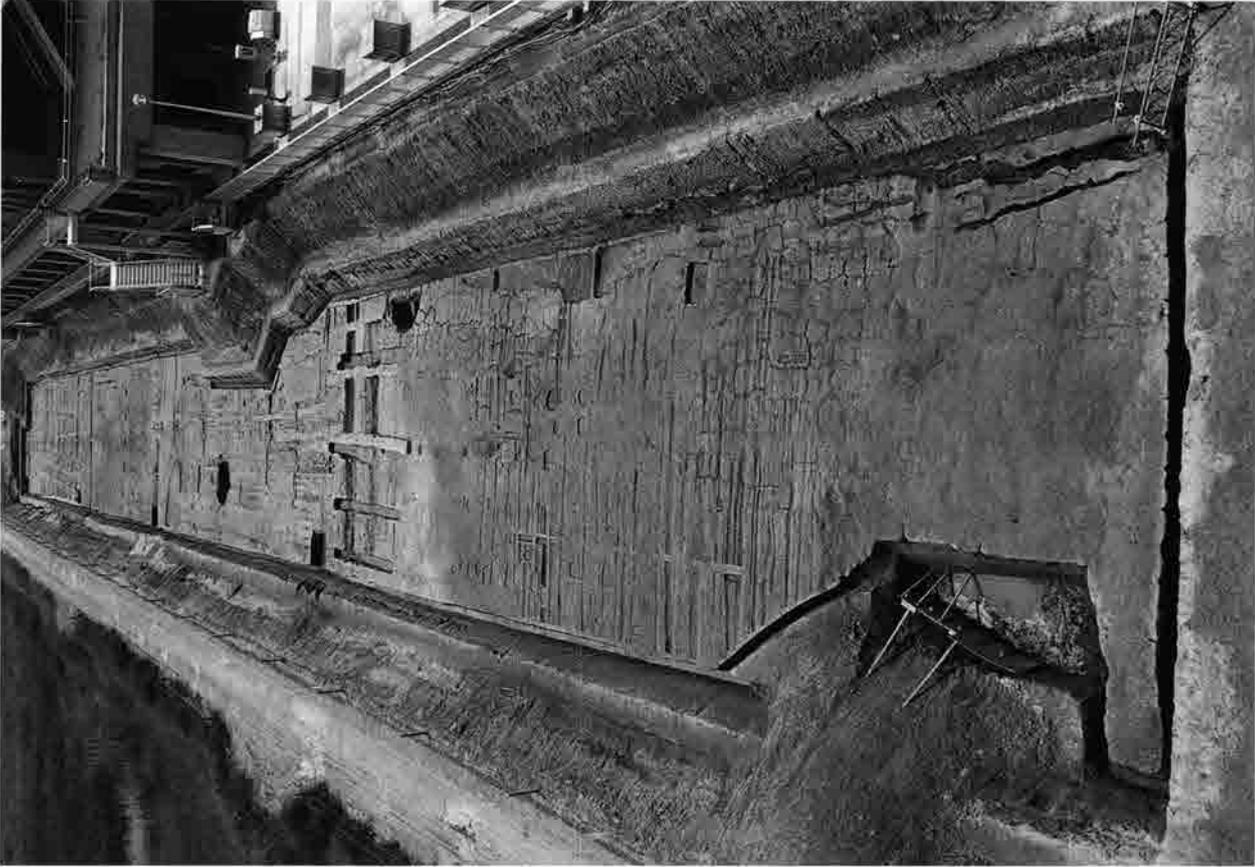
(1) 第5トレンチ全景(北から)



(2) 土坑SK11(西から)



(3) 第6トレンチ全景(北から)



(2) 第1遺構面全景(北から)



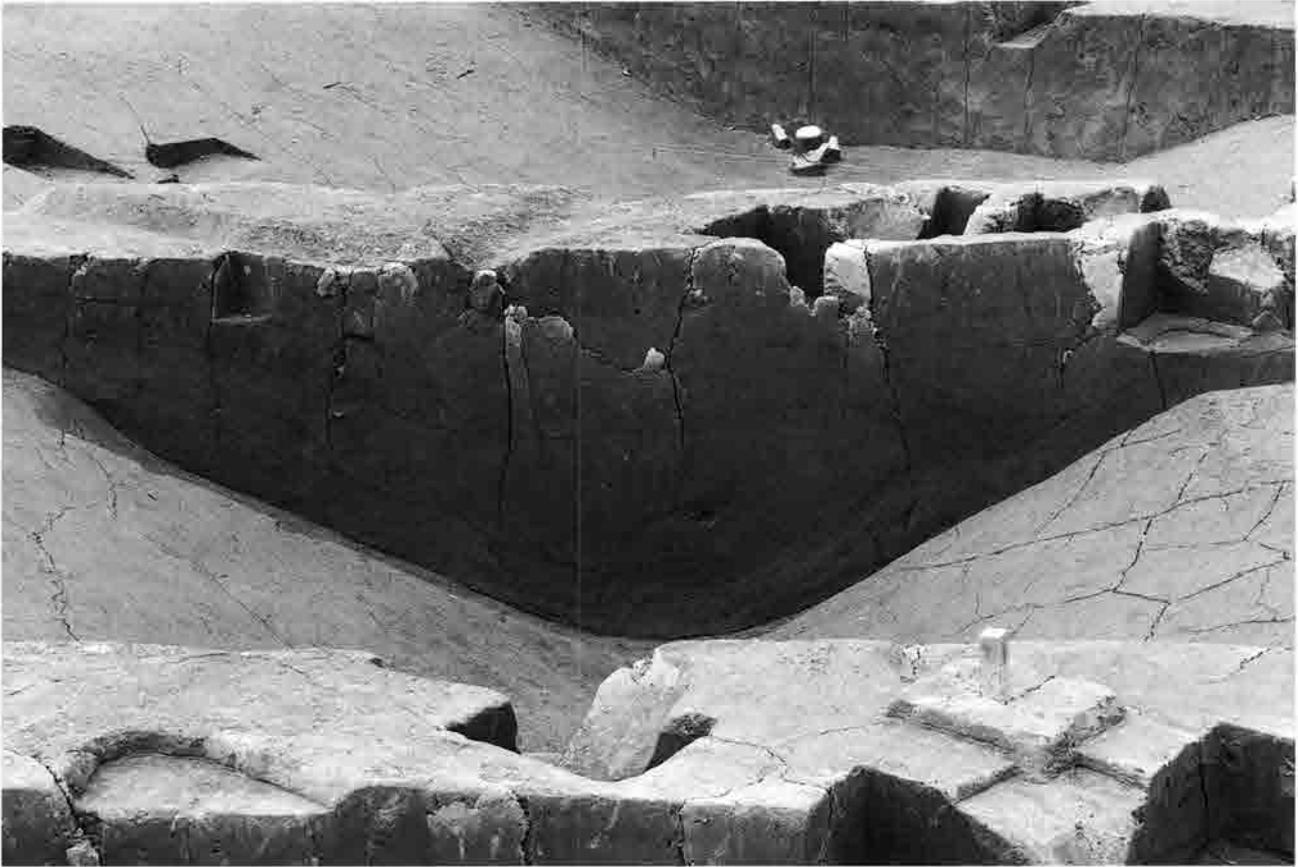
(1) 第1遺構面全景(南から)



(1) 調査前風景(北から)



(2) 溝S D1001断面(北西から)



(1) 溝 S D1002断面(北東から)



(2) 溝 S D1001西部遺物出土状況(北から)



(1) 溝 S D 1001 中央部遺物出土状況(1) (北東から)



(2) 溝 S D 1001 中央部遺物出土状況(2) (北西から)



(1)溝 S D 1001 東部遺物出土状況(1)(北東から)



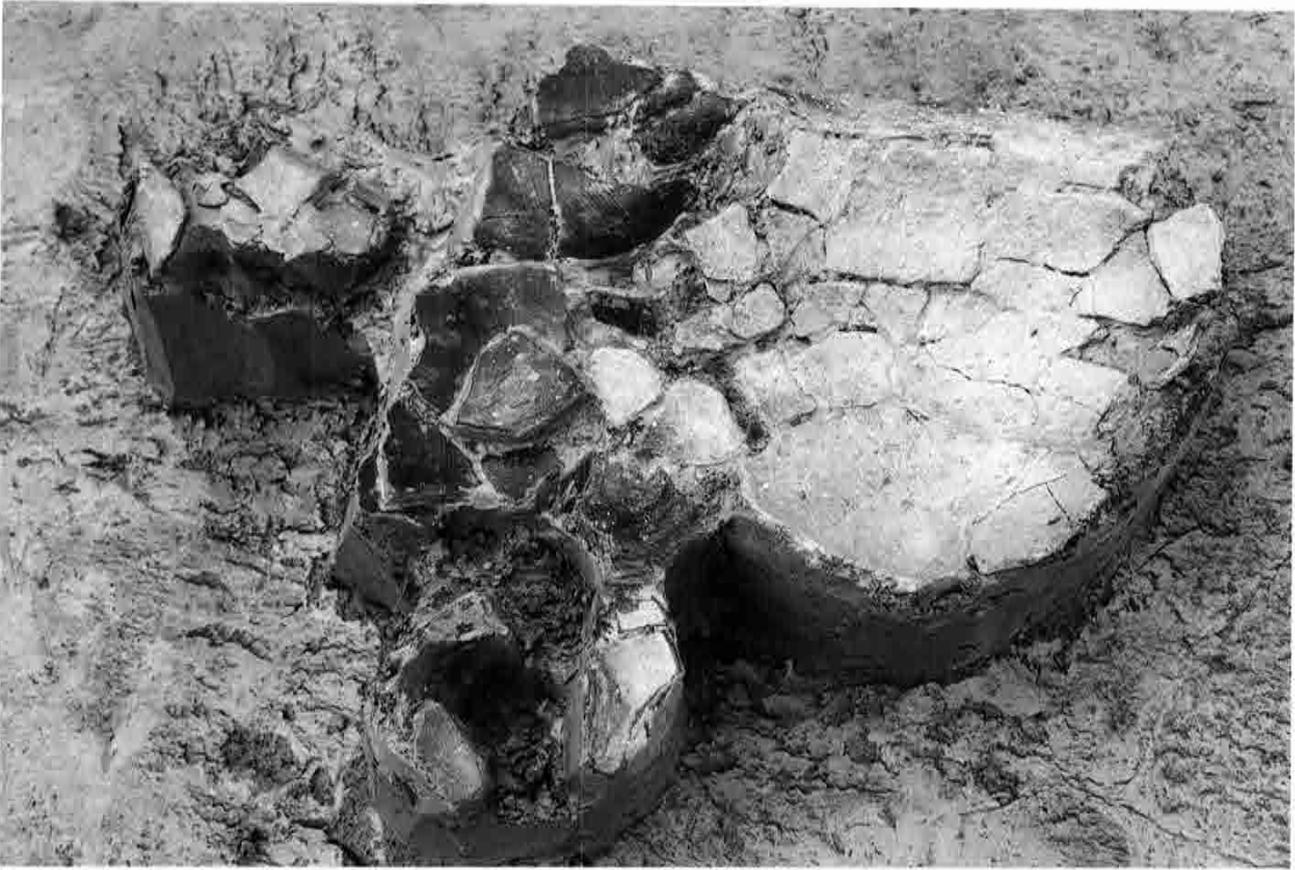
(2)溝 S D 1001 東部遺物出土状況(2)(南西から)



(1)溝S D1001最上層遺物出土状況(1)(南から)



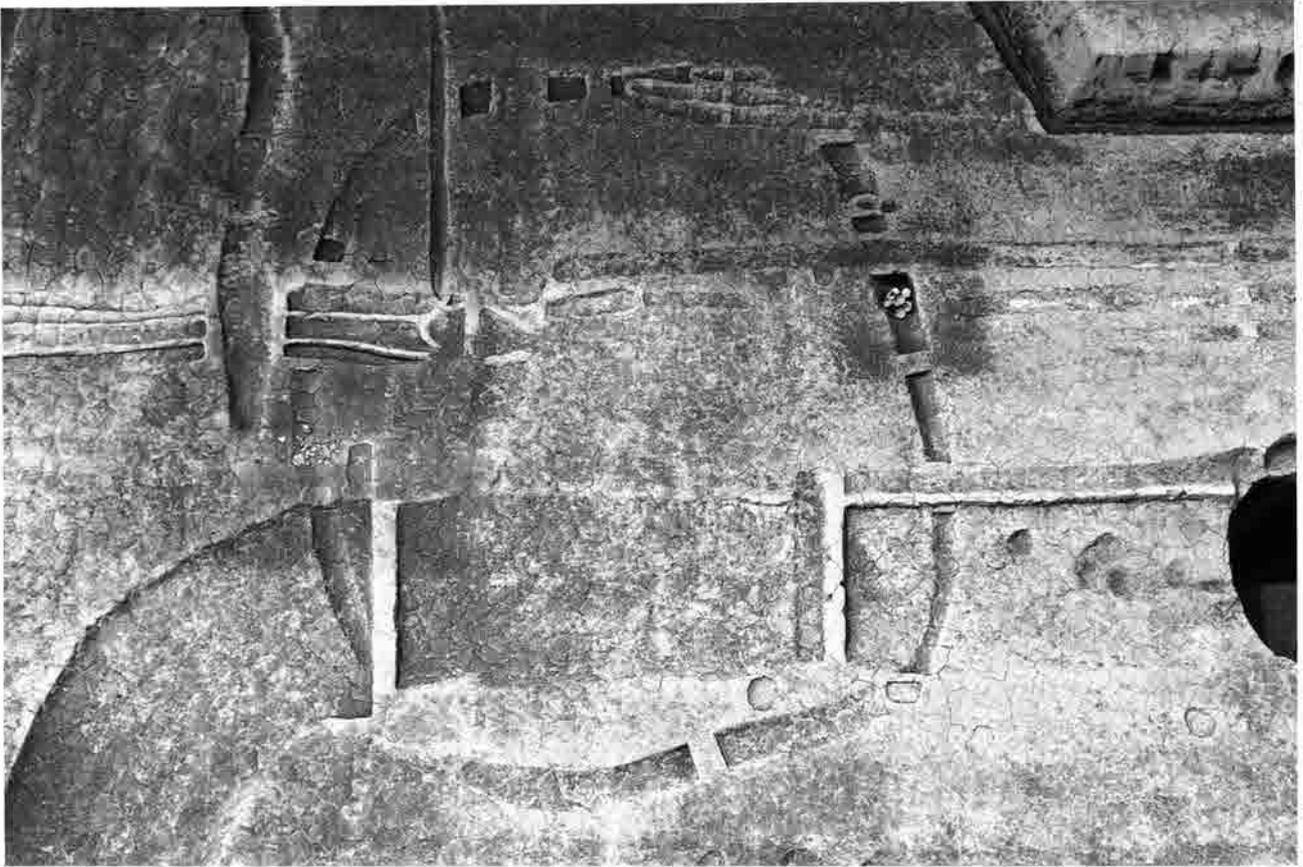
(2)溝S D1001最上層遺物出土状況(2)(南から)



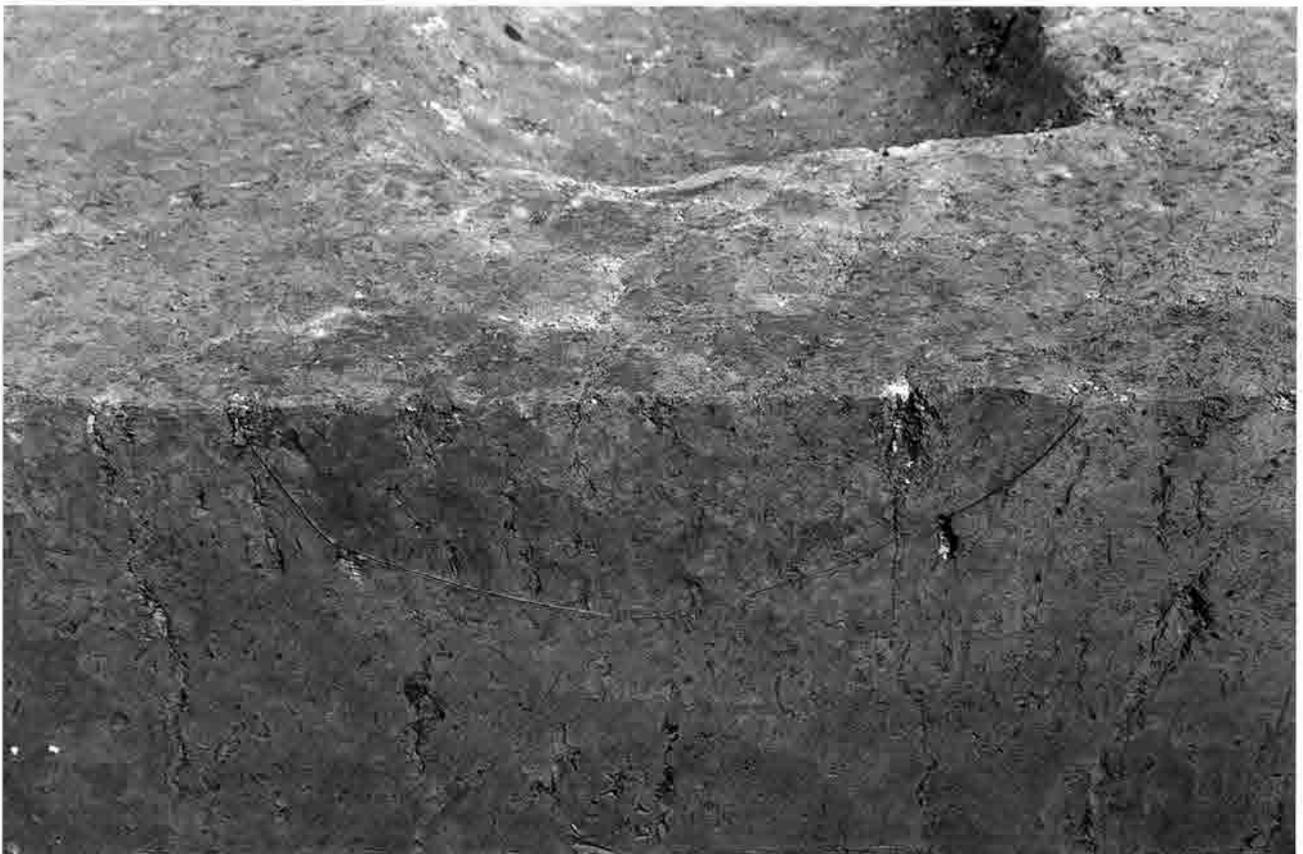
(1) 溝 S D100 中央部遺物出土状況 (東から)



(2) 溝 S D1002 最上層遺物出土状況 (南東から)



(1) 溝S D189(古墳)全景(東から)



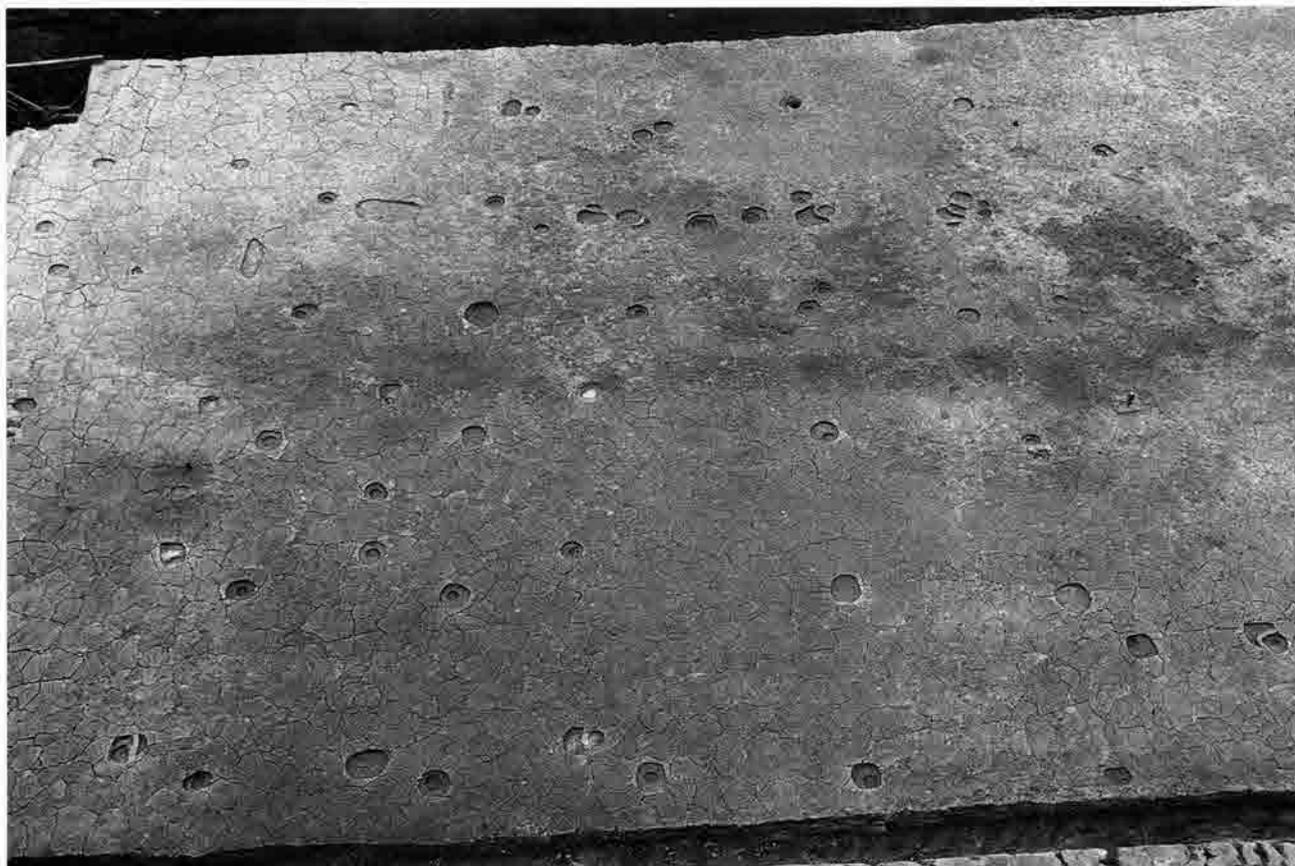
(2) 溝S D189断面(南東から)



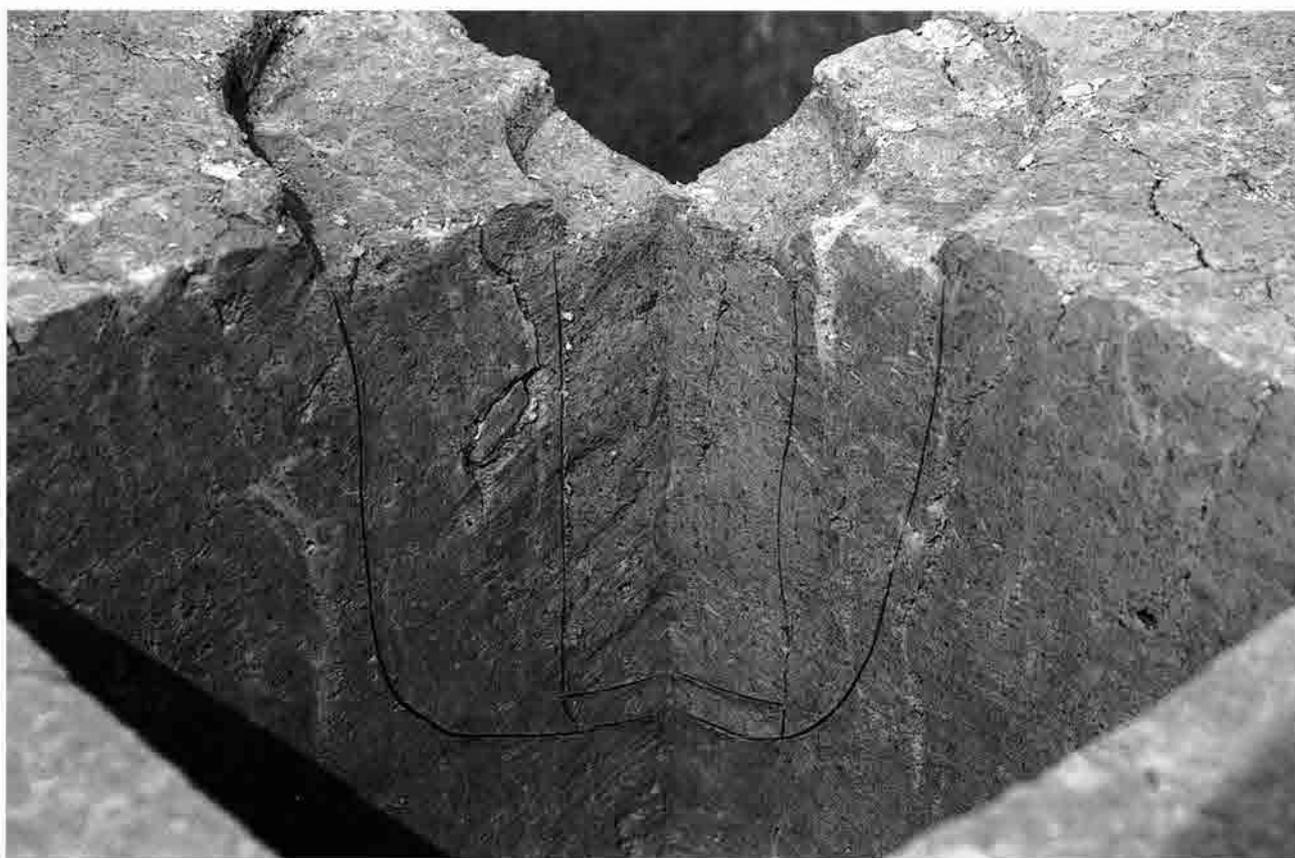
(1)土坑S K495遺物出土状況(1)(北から)



(2)土坑S K495遺物出土状況(2)(北から)



(1) 掘立柱建物跡S B 1 全景(西から)



(2) 掘立柱建物跡S B 1 西辺棟柱断ち割り断面(南東から)



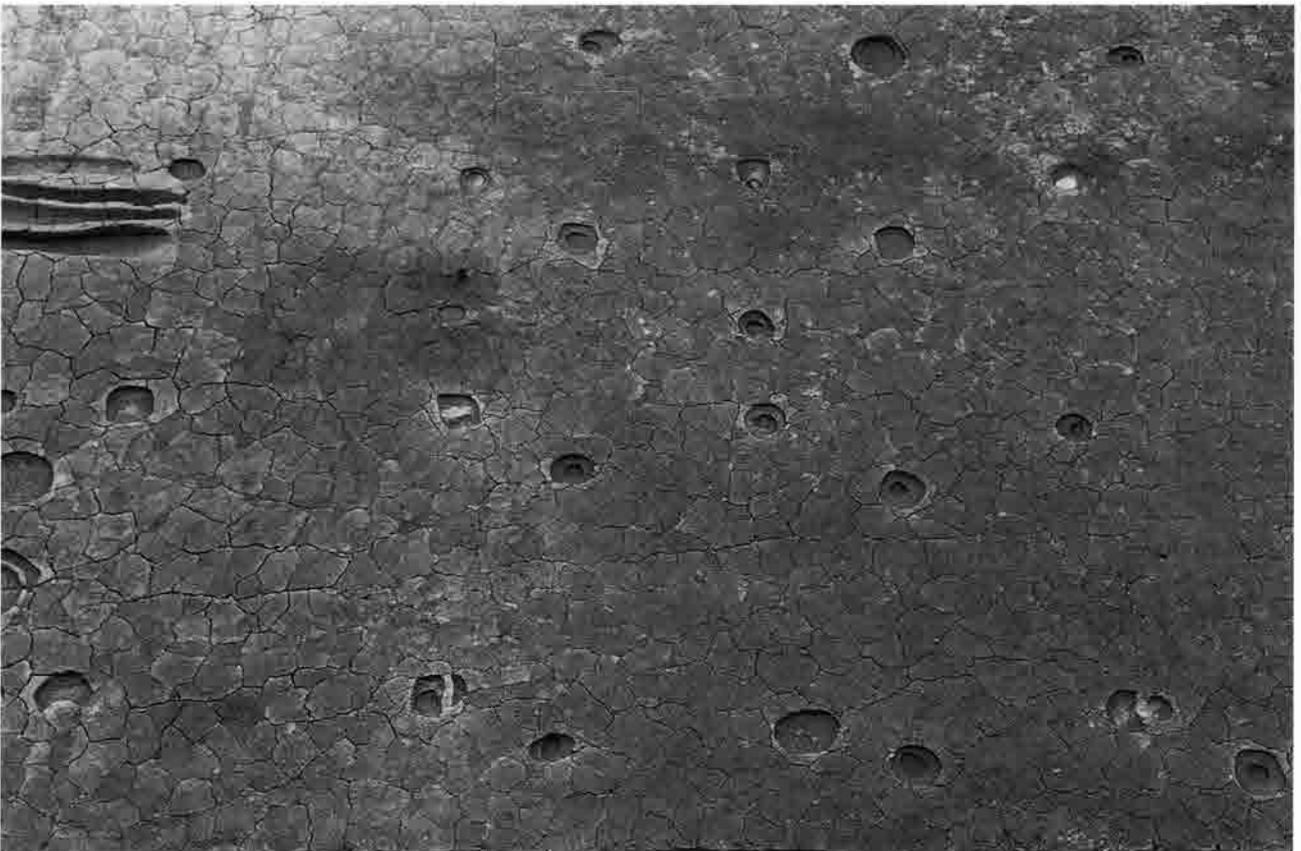
(1)掘立柱建物跡S B 1土器埋納状況(1)(上が北)



(2)掘立柱建物跡S B 1土器埋納状況(2)(上が東)



(1)掘立柱建物跡S B 1土器埋納状況(3)(上が北)



(2)掘立柱建物跡S B 2全景(西から)



(1)掘立柱建物跡SB3・4、柵SA1～3全景(東から)



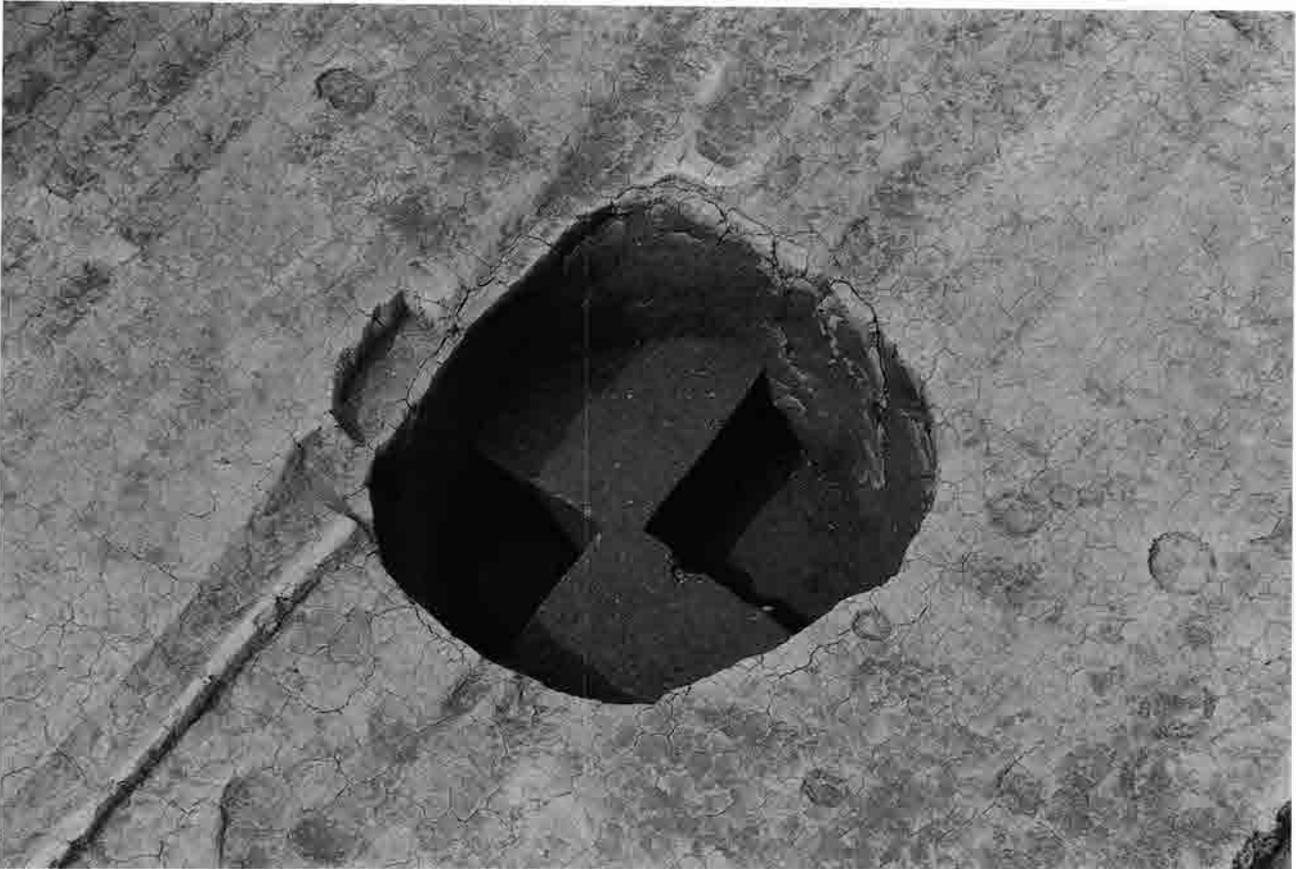
(2)柵SA4、掘立柱建物跡SB5付近近景(西から)



(1) 掘立柱建物跡SB 5～7、柵SA 5近景(西から)



(2) 柵SA 6全景(西から)



(1) 井戸 S E 356 全景 (南東から)



(2) 井戸 S E 356 断面 (東から)



(1) 井戸 S E 356 石組み検出状況(南から)



(2) 井戸 S E 356 井筒検出状況(西から)



(1) 井戸 S E 458 全景 (東から)



(2) 土坑 S X 508 全景 (東から)



(1)土坑 S X 508近景(西から)



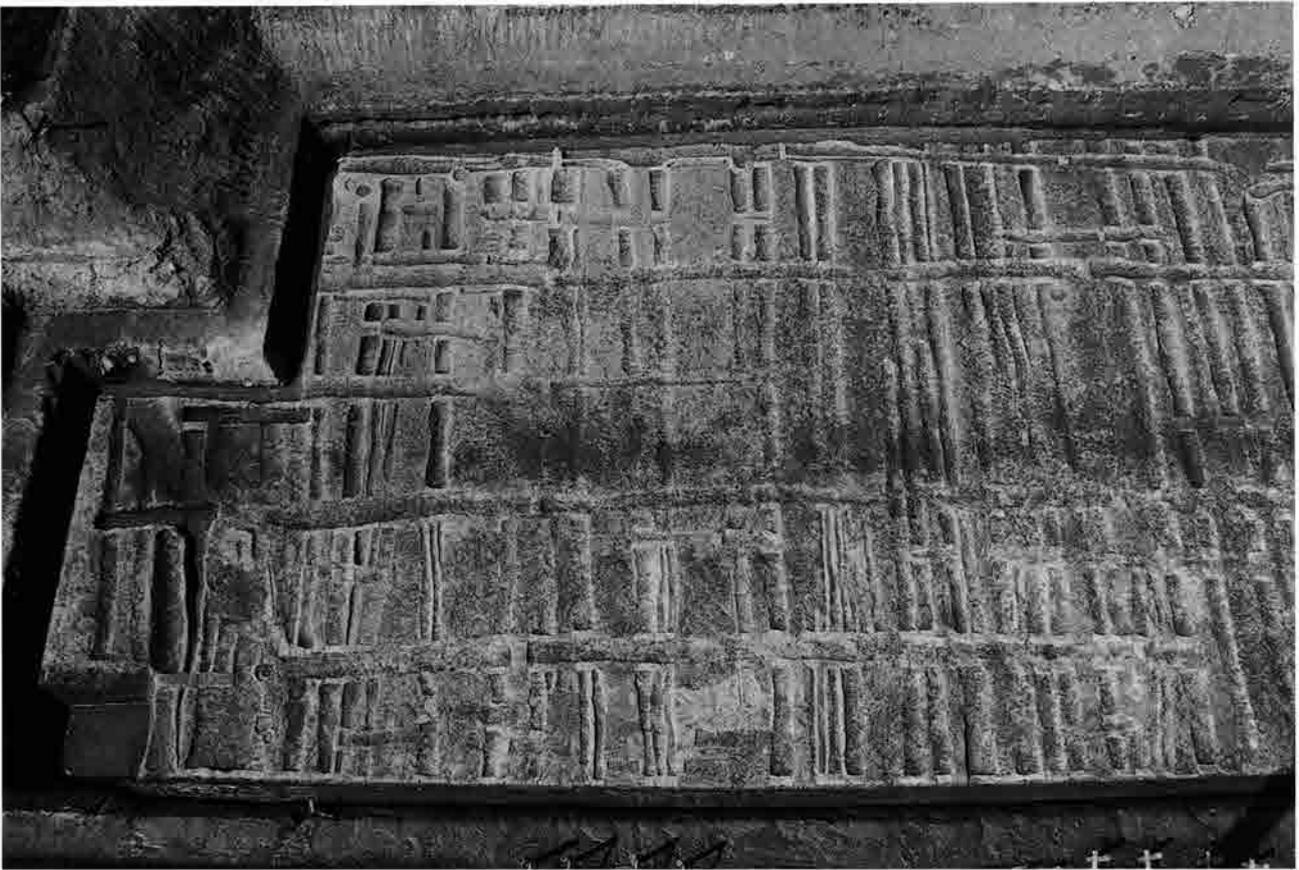
(2)埤境溝群全景(東から)



(1) 坪境溝 S D215 断面 (西から)



(2) 溝 S D531 遺物出土状況 (南から)



(1) 調査区南部耕作溝群近景(1)(東から)



(2) 調査区南部耕作溝群近景(2)(東から)



2



8



5



9



7



12



14



18



16



24



17



25



26



36



28



43



38



44



42



45



48



55



50



57



51



58



52



59



66



77



71



79



82



72



87



98



99



100



101



102



103



104



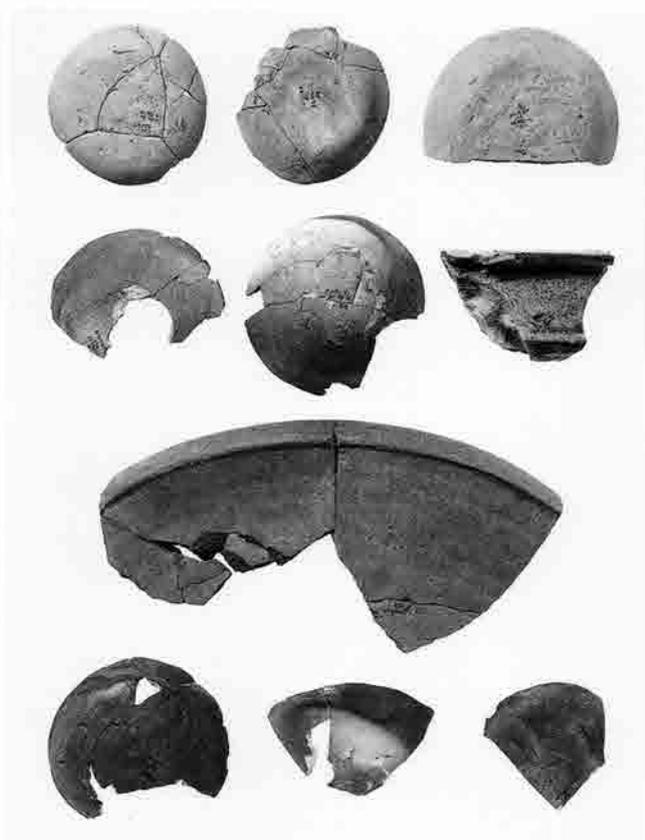
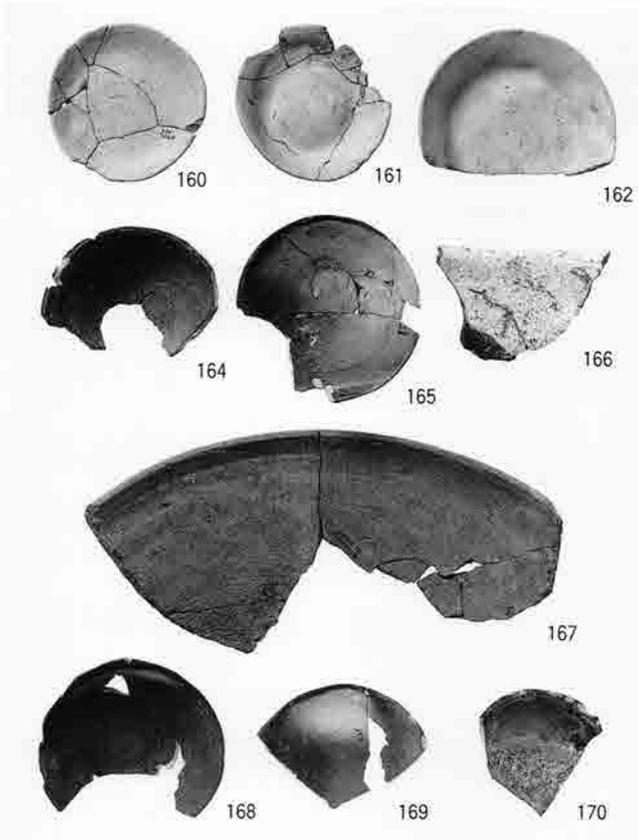
105



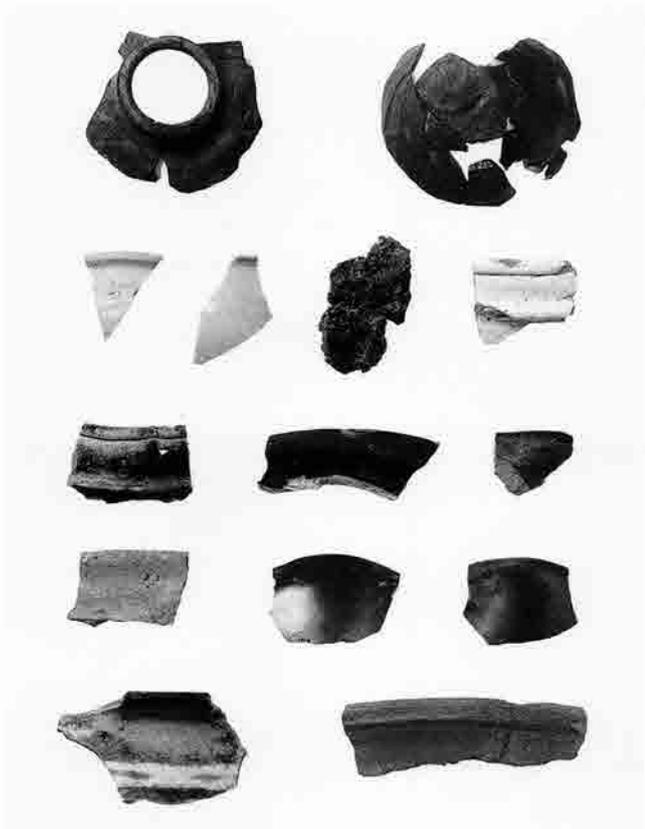
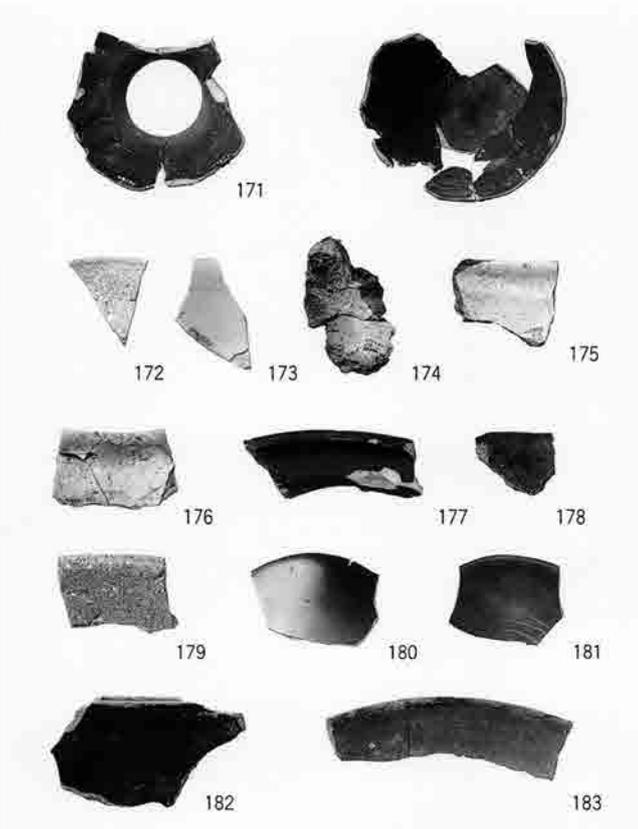
106



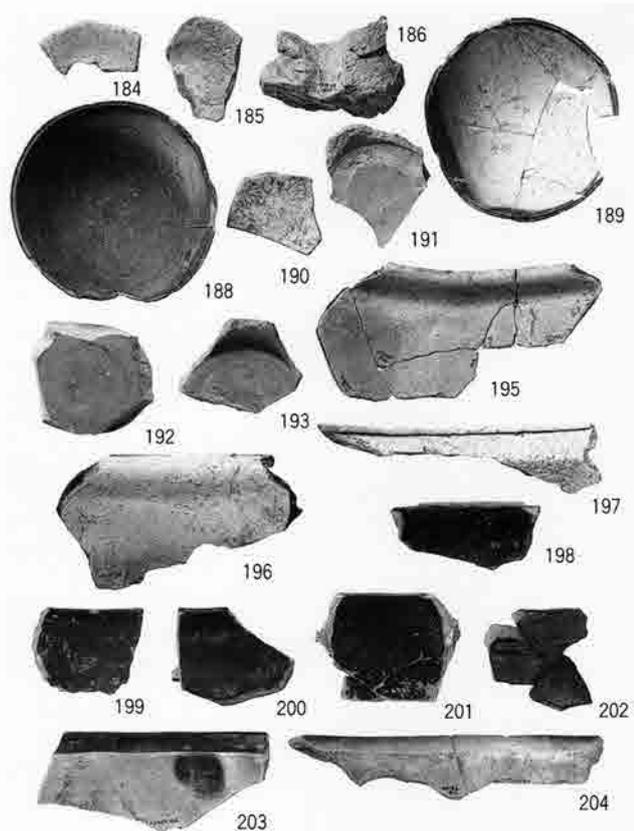
107



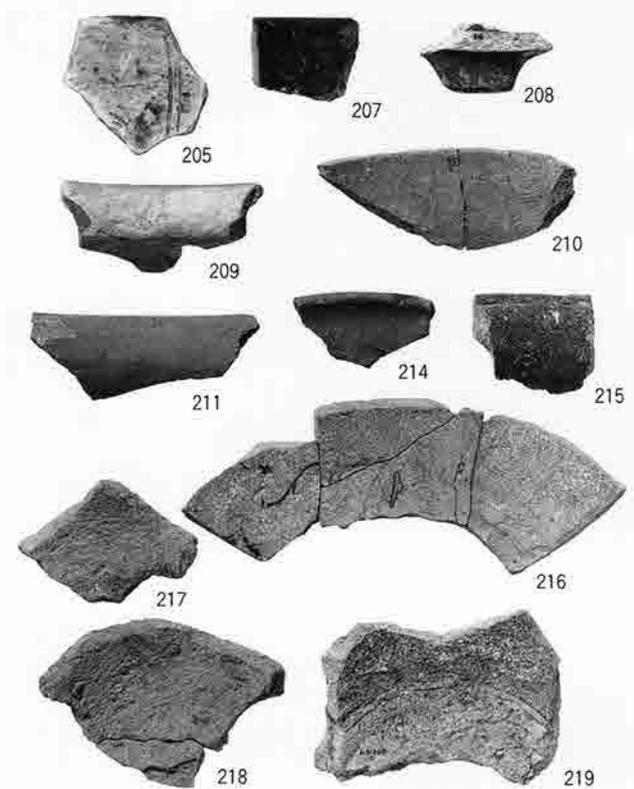
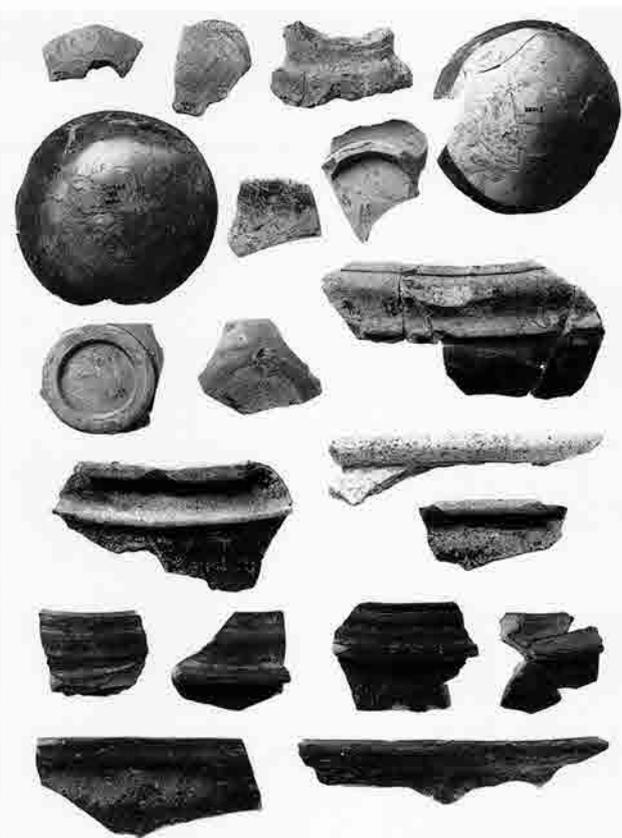
(1) S E 356出土遺物(1)



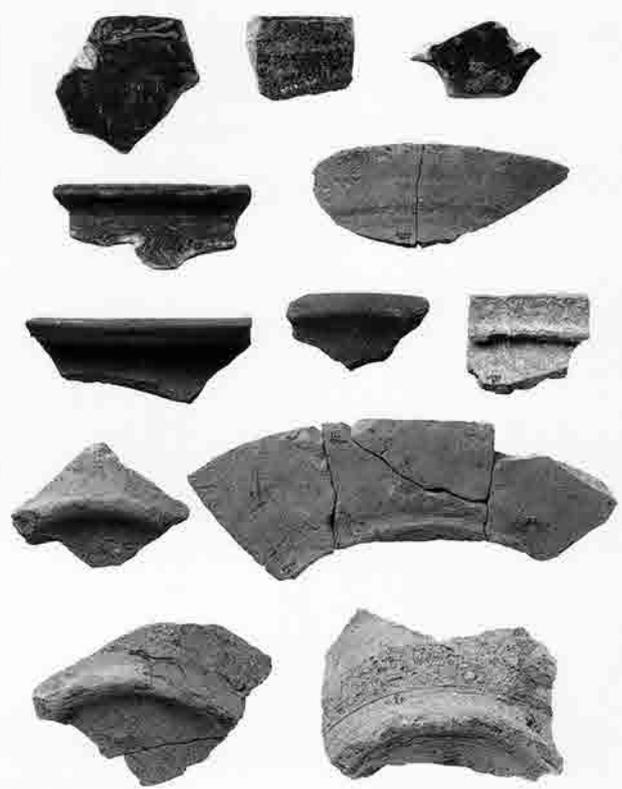
(2) S E 356出土遺物(2)

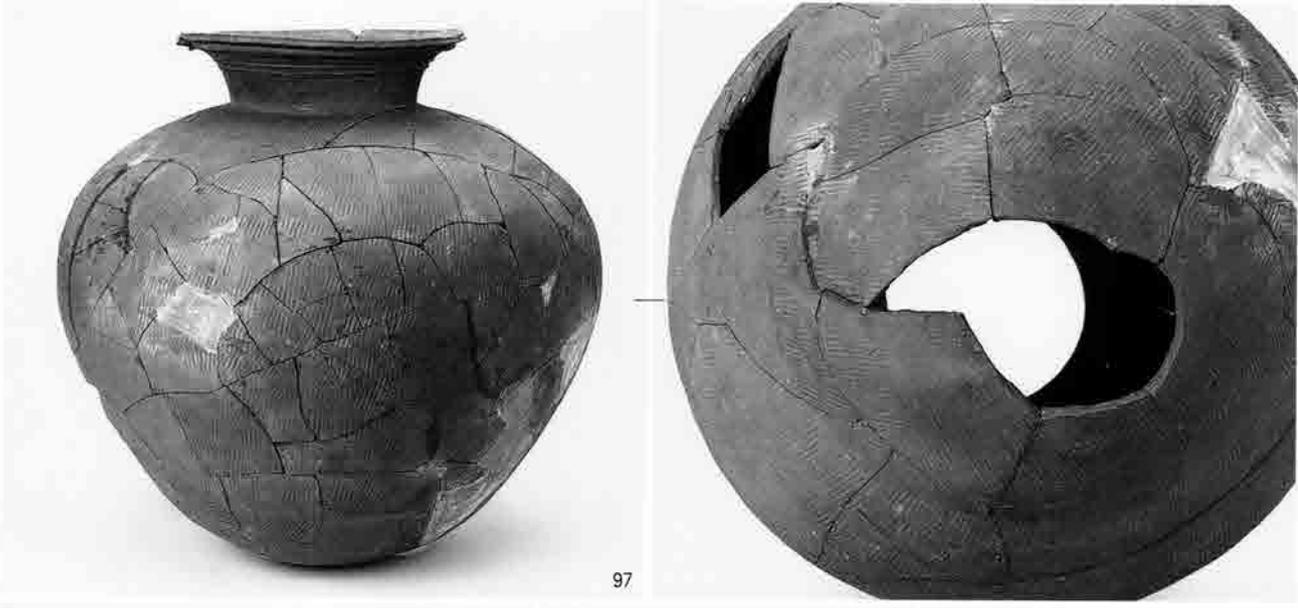


(1) S D215出土遺物(1)



(1) S D215出土遺物(2)





344



339



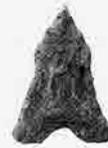
341



340



342



345



346



347



348



349



350

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第110冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone 075(933)3877				
発行年月日	西暦 2004 年		3 月		26 日			
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
いまいこふん・いまいかそうこふん 今井古墳・今井下層古墳	きょうとふなかくんみねやまちょうこあざいまい 京都府中郡峰山町赤坂小字今井	26481	136	35° 38' 31"	135° 03' 05"	20030729 ～ 20031016	250	道路建設
いけがみいせきだいじゅうご・じゅうろくじ 池上遺跡第15・16次	きょうとふふないぐんやぎちょういけがみ 京都府船井郡八木町池上	26402		35° 05' 19"	135° 32' 06"	20021105 ～ 20030226 20030526 ～ 20030730	970	ほ場整備
のじょういせきだいきゅうじ 野条遺跡第9次	きょうとふふないぐんやぎちょうのじょうこあざおおにゅうどう 京都府船井郡八木町野条小字大入道	26402		35° 05' 29"	135° 32' 05"	20030526 ～ 20030730	130	ほ場整備
のじょいせきだいななじ 野条遺跡第7次	きょうとふふないぐんやぎちょうのじょうこあざおおにゅうどう 京都府船井郡八木町野条小字大入道	26402		35° 05' 38"	135° 32' 03"	20030512 ～ 20030910	1,200	道路建設
しばやまいせき 芝山遺跡	きょうとふじょうようしとのうえのしば 京都府城陽市富野上ノ芝	26207	052	34° 50' 48"	135° 47' 26"	20020708 ～ 20030227 20030416 ～ 20030813	6,300	道路建設
たきぎいせきだいやじ 薪遺跡第4次	きょうとふきょうたなべしたきぎこあざいしのまえ・せまみち 京都府京田辺市薪小字石ノ前・狭道	26342	024	34° 49' 24"	135° 45' 29"	20021125 ～ 20030227	550	道路建設

むくのきい せきだいろ くじ	きょうとふそうら くぐんせい かちよ うしもこまこあざ かみのき							
棕ノ木遺跡 第6次	京都府相楽郡精華 町下狛小字神ノ木	26366	046	34° 46' 19"	135° 48' 08"	20020605 ～ 20030210	3,200	浄化セン ター建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
今井古墳・ 今井下層古 墳	古墳	古墳後期		横穴式石室 木棺直葬		須恵器/鉄鍬/刀子/ 刀/小玉/耳環		須恵器特殊 扁壺
池上遺跡第 15・16次	集落	弥生 古墳	奈良	土壇/溝 竪穴式住居跡/土坑/ 井戸/溝		弥生土器/石器 須恵器/土師器/鉄器 /土錘 須恵器		
野条遺跡第 9次	集落	平安		溝		瓦		
野条遺跡第 7次	集落	弥生 中世		竪穴式住居跡/土坑 掘立柱建物跡		弥生土器/石器/鉄器 土師器/灰釉陶器/瓦 器/瓦質土器/青磁/ 石製品		火災焼失住 居
芝山遺跡	古墳 集落	古墳	奈良/平安	円墳/方墳 掘立柱建物跡		須恵器/土師器/埴輪 /石製品/鉄製品 須恵器/土師器		
薪遺跡第4 次	集落	縄文/古墳/平安/ 中世		土坑/溝/掘立柱柱穴		縄文土器/須恵器/埴 輪/土師器/瓦器/陶 磁器		遺物広範囲 に散布
棕ノ木遺跡 第6次	集落	縄文 弥生 古墳 平安 鎌倉		溝 方墳 掘立柱建物跡 井戸/溝		縄文土器 弥生土器 須恵器/埴輪 土師器/黒色土器 瓦器/土師器/瓦質土 器/須恵器/中世陶器 /銭貨		弥生時代後 期後葉土器 の良好な一 括資料 平安期の 大規模建物 跡と土器埋 納鎌倉時代 以前の噴砂 。条里型地 割りの坪境 溝

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

## 京都府遺跡調査概報 第110冊

平成16年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 有限会社 真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル  
Phone (075)351-6034